KAIZO

改造

十二月號

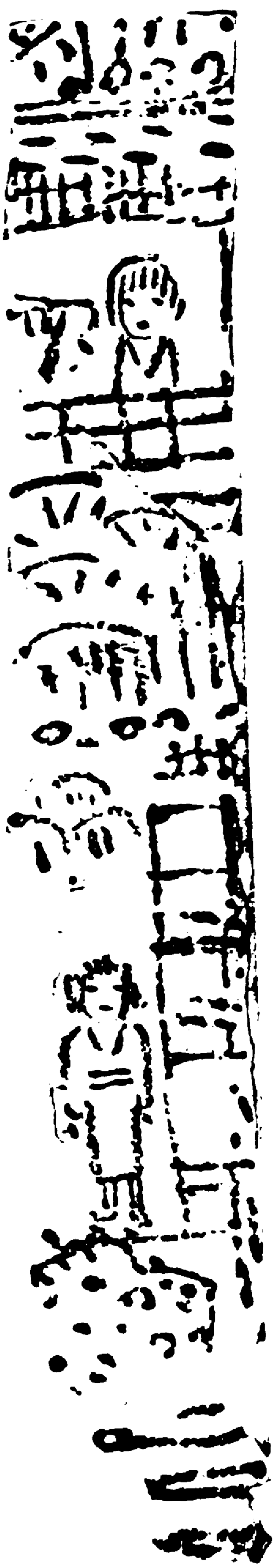
1928



改造十一月號目次

我社の態度につき

眞摯、純眞であるべき學問の研究が近頃ややもすれば、卑俗、作爲的に陷り、甚しきは宣傳的な輕佻の氣風を招來せることは嘆はしい限りである。そして學問の研究は自由であり、冷嚴であり、勇敢であるべきに、猥りに他を排擠し、なかには政治家と結托し、もしくはその膝下に匍伏して醜態見るに堪へざるものありとの巷評を聞く。これ等の輩に學問の眞正と、尊貴と、獨立と創意とがあらう筈なく、なかには國難を賣り物とする卑怯な學者さへある。かくして學の獨立と尊嚴は喪はれ、眞理の探究に一身を捧ぐべき學者的風格は永へに蹂躙しつくされるのである。眞に發見、發明の偉大なる功果を世に齎らしたる故碩學たちの業績を懷ふものの涙なきを得ぬところだ。尙ひどいものになると「×××××よ團結せよ」とかの文字を濫用して他を誣ひ陷れ、自らの商業的進出の方便を企てつつある學者の態度を識者は何と見る。我々は學問の研究は學問の領域に於て のみせらるべきものであることを固く信ず。そして學問の研究には自由であり、冷嚴であり、寬大であり、勇敢であるところに獨創と尊嚴性とが成長することを知つてゐる。そして學問の領域內にありては何れの學派に屬するとを問はず剴切な學的批判があつて然るべきと思ふ。マルクス經濟學であらうと、一般經濟學であらうと均しく人類の進展に寄與する以上、一方的境地から無批判的に葬り去るの 恐ろしい學問冒瀆であることを知つてゐる。我社は學問の全領域に亘りて好惡はない。すべての學說を公平に見、その學的價値を認識すれば、その何れの方向に屬しようと差等をつけない。かくしてこそ始めて出版者として根本的文化の築成に寄與ができると確信してゐる。事實は雄辯である。我社は過去をふりかへつて理學、文學、社會、經濟各方面に大學と雖、なすことが出來なかつたいくたの貢獻を遂げてをる。たま〳〵我社の出版物にマルクス學研究の一部門があるのを捉へて、みだりに何々主義呼ばはりの狂態を演ずるものがある。我社の立場が國家的見地の大處、高處にあることは過去の業績を綜合して見れば明瞭だ。我々は今後いくたの飛躍を文化の全面に遂げるであらう。そして國民の批判的境地の蓄積と進展とに意をいたすであらう。そしてあくまで一方的でなく、儼乎として進むべき王道を誤らぬであらうことを一言するものである。



マルクス經濟學のために

河上肇

日本におけるマルクス經濟學は、今や年一年その地歩を確立し、益々その勢力を擴大しつゝある。それと同時に、何等學問的理由を明示することなき無理解なる排斥、無責任なる罵詈は、學者の間においてすら、却て漸く烈しからんとしてゐる。マルクス經濟學はこれを理論的に攻擊すべく餘りに有力であるといふことが、今や一部の人々の意識に上ぼりつゝある。理論上の論爭に代ふるに、吾々を指して漫にマルクス狂信者と呼ばはるが如き行爲の、漸く盛んならんとするは、一派の人々の科學的無力の感じが自然に誘發する現象である。かゝる現象は近頃經濟學全集刊行の計畫行はるゝに及んで、特に甚しきを見る。現に教授土方博士の如きは、『こゝ數年來我國の讀書界にマルクス學說の洪水であつた、その結果かの忌むべき共產黨事件を生んだのである』と宣言されるに至つた。此の如きは、これを單なる一時の商略に出でたるものと解釋せざるかぎり、――かく解釋することは大學教授としての氏に對して恐らく無禮であらう、――共產黨事件に關する一般民衆の恐怖を利用してマルクス學の普及を妨害せんとするの意圖に出でたるものと解釋するの外ない。今は吾々がマルクス經濟學の根本的見地、その窮極目的、その傾向を、世間に向つて忌憚なく發表し、これをもつてかのマルクス經濟學の妖怪談に對立せしむべき[illegible]である。私はその目的のために、日本におけるマルクス學徒の一人として、ここにこの一[illegible]

マルクス經濟學は辯證法をその研究法としてゐる。そして辯證法は、マルクス自身の言葉によれば、『現存事物の肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の・その必然的沒落の・理解を含め、あらゆる生成した形態を運動の流れにおいて・それゆゑにまたその暫時的な方面から・把握し、何物によつても××せしめられず、その本質上批判的であり×××なものである。』

辯證法の光に照されるときは、如何なるものも常住不壞の相を失ひ、萬物はたゞ流轉の姿においてのみ現はれる。『その前には窮極的なるもの、絶對的なるもの、××なるものは、何物も存立しない。それは一切のものに消滅性を呈示する、そしてその前に存立するものは、生成と衰滅との・低きより高きに向ふ限りなき向上の・不斷の過程の外に何物もない。』（エンゲルス）。

『つぎからつぎへと續く一切の歴史的狀態は、低きより高きに向ふ人間社會の限りなき發展の道程における暫時的な段階にすぎぬ。各々の段階は必然的なものである、すなはちこれを發生せしめたる時代と諸條件とに對しては存在理由を有つてゐる、だがその段階自身の胎內で漸次に發展してくる新たなる・より高級なる・諸條件に對しては、根據がなくなり存在理由を有たぬものになる。それはより高級な階段に席を讓らねばならぬか、今日は[illegible]』（エンゲルス）。

資本家的社會をその研究對象となせるマルクスの經濟學は、それゆゑに、資本家的社會の『肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の・その必然的沒落の・理解を含め』てゐる。この社會形態は、これを發生せしめた時代と諸條件とに對しては存在理由を有つてゐたのであり、しかる限りにおいてそれは必然的なものであつた。だが資本家的社會の胎內において急速なる發展を遂げつゝある生產諸力は、次第にその外被たる×××××生產諸關係と××××××。私がマルクスに倣うて、近業『經濟學大綱』上卷『資本家的社會の解剖』第二篇の末尾において指摘したる、過剩人口の增大ならびに之に伴ふ大衆窮乏化の增進は、その半面の兆候であり、また第三篇の末尾において指摘したる、資本家的生產の行詰りならびに之に伴ふ世界恐慌と世界戰爭との××は、他の半面の兆候である。これらは何れも資本家的生產諸關係の埒內における生產諸力の發展が必然的に齎らす災厄であり、××××××××がすでにその存在理由を失へることの證據である。なほ私は第四篇の末尾において、社會の總資本が極めて少數なる金融大資本家の手に集中されつゝあるの事實を指摘した。このことは、新たなる××××を××××物質的諸條件が、現存諸關係それ自身の胎

内において次第に成熟しつゝあることを意味する。こゝにおいてか、資本家的社會の運動の必然的な方向は、極めて明瞭である。生あるものは死を免れない。吾々は現存事態の××・×××を信じ能はざるものである。かくて吾々は、現存せる社會形態を『運動の流れにおいて・それゆゑにまたその暫時的な方面から・把握する』のである。

かゝる見地が『何物によつても××せしめられず、その本質上批判的であり×××である』ことは、もちろん『ブルヂョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の×××××、×××××。』吾々は敢てこのことを公衆の前に隠覆せんとするものではない。だがブルヂョアジーにとつての×××××とは、社會の最大多數を占むるプロレタリアートにとつての×××××とである。吾々は何故に斯く言ふか？

世間には吾々を指して無批判的だと言ふものがある。だが人々は實の批判とは果して何を意味するかを理解してゐるのであるか？それは顧慮なき批判の謂ひであり、そして『顧慮なき』(rücksichtslos)とは『批判が如何なる結論を生ずるも敢て怖るることなく、また現存せる×××××××をも敢て怖るることなき謂ひである』。しかも此の如き批判は『獨斷的なるもの、絶對的なるもの・××なるもの』の一切を認めざる辯證法のみが、成し遂げうるところである。批判は『顧慮なき』精神によつてのみ始めて行はれ、科學は『何物によつても××せしめられざる』ところにのみ始めて成り立つ。

吾々の稱してブルヂョア經濟學となすものは、『資本家的秩序を歴史的な過渡的な發展段階としてでなく・逆にこれを社會的生産の絶對的な且つ終局的な姿として・理解してゐる』ものを指すのであるが、『それはたゞ、××××が潜在狀態に止まつてゐるか、あるひは、たゞ孤立した現象となつて顯はれてゐる間だけ、科學として止まりうるにすぎなかつた』。

幾多の功績を殘したイギリスの正統派經濟學は、『未發展なる階級鬪爭の時代に屬する』。この派の最良の代表者たるアダム・スミスおよびリカアドウは、階級鬪爭の未發展なる時代に生存したるがゆゑに、彼等は資本家的社會の××を憂ふる必要がなかつたのである。それゆゑに彼等は、何等恐るるところなく、資本家的社會に向つて『顧慮なき』批判を加へえたのであり、從つてまた一定の科學的業績を擧げえたのである。しかしながら、一たび階級鬪爭が×××な姿をもつて社會の表面に現はれるやうになつてからは、資本家的社會の絶對的永遠性に對する信仰が動搖し始めた。それと同時に、これに對する『顧慮なき』批判は、ブルヂョアジーにとつての××とならざるをえなくなつた。

かくて經濟學は、それが資本家的社會を『社會的生產の絶對的な且つ終局的な姿』として辯護することを目的とするかぎり、言ひ換へれば、それがブルヂョアジーの好感と保護とを必要とするかぎり、その『獨創的な繼續的發達は一切不可能となつた。』だが『たゞその批判に至つては然らず』。かくてブルヂョアジーの一切の利害に顧慮するところなき、プロレタリア經濟學としてのマルクス經濟學が、ブルヂョア經濟學との對立において、『何物によつても××せしめられざる』批判的精神の守護者となつたのである。それは現存せる社會形態を『社會的生產の絶對的な且つ終局的な姿』として認めず、逆にこれを『運動の流れにおいて、それゆゑにまたその暫時的方面から』把握することによつて、正にブルヂョア經濟學に對立する。

それは何故に×××であるか？　私は拙著『マルクス主義經濟學』から、次の數節をこゝに引用する。

吾々は自然現象についても社會現象についても、屢々事物の本質を倒さまに錯覺してゐる。科學はかかる錯覺を顚倒する點において、すべて×××である。地球が動くのでなく太陽が動くのだと考へてゐるのを、倒さまにひつくり返へして、太陽が動くのでなく地球が動くのだと認識せしめることは、一の×××な仕事である。マルクスが經濟[illegible]において[illegible]あるが、なかんづく、××せる社會形態の不動觀を顚覆したことは、その最も×××な業績に屬する。

『資本論』の『最後の窮極目的』は、マルクス自身のいへる如く、『近代社會〔すなはち資本家的社會〕の經濟的運動法則の曝露』にある。こゝに近代社會の經濟的運動法則といふは、例へば地球の運動法則といふが如きものである。人々は嘗て、自分らがその上に住んでゐるこの地球を、世界の不動の中心だと考へてゐたのであるが、宇宙物理學は、その地球が實は一秒間に二萬九千七百メートルの急速度をもつて運動しつゝあることを、科學的に立證した。それと同じやうに、人々は自分らがその中に住んでゐる××の社會組織を永久的に變更されえぬものと諦めてゐるのであるが、『資本論』は、この不動に見えてゐるものが、實は動きうるのであり、××動きつゝあることを教へる。それは、虐げられたるものを彼等の錯覺にもとづく宿命的な××から×××し、彼等に向つてその困厄の眞因を曝露し、且つ斯かる原因の排除の可能と道程とを指し示し、彼等に自己解放の希望と指針とを授くるところの、プロレタリアにとつての××××である。そこからは、プロレタリアのみが、××××××××とを酌み取りうるであらう。

それと同時に、それは『ブルヂョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の××であり、××であり』、その最悪の敵である。けだし既成の×××は、いつも民衆の錯覺を――事物の眞相を逆に考へてゐる大衆の錯覺を――××してゐるのであり、從つてそれを維持し助長することに最大の關心を有つ。それゆゑにあらゆる敎化の機關は、――學校、靑年團、寺院、新聞紙、雜誌、著書、等々は、――それが既成×××××××に屬するものであるかぎり、社會の隅々において盡くこの目的のために動員される。××××が激烈になればなるほど、かかる目的のためにそれらの機關が利用されてゐるといふことは、現象形態の上にまで露出するやうになる。しかも斯かる舊勢力の意圖に對する最も有力なる妨害物は、新興科學である。それゆゑに、新興科學は强大なる既成×××との鬪爭においてのみ、始めて自らを發展せしめうる。太陽が動くのでなく地球が動くのだといふことを主張してすら、昔の學者は牢獄に投ぜられた。しからば同じことを、社會現象の領域において――人々の生活上の利益に直接の交渉をもつ此の領域において――成し遂げんとするものが、既成×××ならびにその××たちの非難、中傷、妨害、壓迫、等々の砲火のもとに曝らされねばならぬことは、當然のことであり、覺悟の前のことでなければならぬ。『顧慮なき批判』が「×××との衝突を敢て怖れざること』を必須の條件とするは、そのためである。『自由なる科學的研究は』、――マルクスの言ふ如く、――『經濟學の領域においては、他の總ての領域におけると同一の敵に出逢ふのみではない。經濟學の取扱ふ材料の特殊な性質のために、人間の心の最も激しい・最も狹量な・最も意地惡き情念が、私的利益のフーリー神が、經濟學の敵として戰場に呼び立てられる』。吾々は×××××において、かゝる敵の××に戰場に呼び立てられつゝあるを見る。かくて新興科學は、既成の×××にとつて其の最悪の敵であると同時に、既成の×××はまた、新興科學にとつて其の最悪の敵である。

プロレタリア經濟學は、たゞに上記の敵と戰はねばならぬのみならず、また大衆の常識を敵として戰はねばならぬ。本來それは大衆の生活安定を目指してゐるのであり、實際は大衆のための親友であるにも拘らず、最初のうちは必ず大衆によつて反撥される。此の如きは、あらゆる新興科學の古來の宿命として、プロレタリア經濟學のまた免れ難きところである。

むかしコペルニクスは、大地が世界の不動の中心にあらざることを說いて、[illegible]

ゆゑかをも說明したのであるが、マルクスが經濟學の領域において成し遂げたところも、また正に此の如きものであつた。吾々は『資本論』の隨所において、かくの如きコペルニクス的轉回を見出すのであるが、なかんづく根本的な轉回の一つとしては、前に述べたる如く、現代社會それ自體の運動觀を指摘せねばならぬ。普通には誰でもが、太陽は東の空から出て西の空に沒するものと考へてゐる。たゞ眼で見たまゝでは、實際さう考へるのが自然であり、それが謂はゆる常識である。ところでこの常識が、いつもそのまゝに眞實であるならば、別にこれに向つて科學的研究を加ふる必要はない。『もし現象形態と事實の本質とが直接に一致してゐるなら、すべての科學は贅物であらう。』たゞ兩者は屢ゞ直接には一致してゐないがゆゑに、始めて科學の必要が起るのである。そこで例へば、吾々の眼には、地球が動くのではなく太陽が動くのであるかの如く見えてゐる（それが現象形態である）けれども、しかし實際のところは、それと全く逆で、太陽が動くのではなく地球が動くのである（それが事物の本質である）といふことを、說明することが必要なばかりでなく、それと同時に、なぜ斯樣に本當のことが吾々の眼には顚倒して反映されるかをも明かにしなければならぬのであり（それが現象形態と本質との辯證法的統一である）、そして斯かる仕事を果すことをこそ、科學はその任務となすのである。

・たから科學はいつも常識と相容れなし　科學は常識を打開せんとするものであり、またそれゆゑに必ず常識から反撥される。大衆の常識に訴へてその辯護を求めんとすることが、學者として如何にその本分を忘れたる醜態であるかは、これによつて理解さるべきである。科學の常識に對する闘爭は、その成立・發展の歴史に伴ふ宿命であり、俗人との闘爭は科學者の任務であり、かゝる對立物の闘爭の過程においてのみ、人類の認識は發展するのである。そして、この闘爭において科學的智識が勝利を占むるならば、常識は科學的智識のために克服されるが、それは同時に、科學的智識が常識そのものに轉化することに外ならぬのであり、かくして科學的智識は遂に常識をそれ自身のうちに包容し、またはそれ自身が常識のうちに包容されて、自己を止揚（アウフヘーベン）するに至るのである。

事情此の如くであるに拘らず、たゞ一般の常識を學問的な言葉に飜譯するに止まるものを、吾々は俗流經濟學と名づける。それは、實のところ、科學たるの名に値せざるものである。吾々は先きに、アダム・スミス、リカアドウの正統派經濟學がブルヂョア的であるにも拘らず、なほ科學的でありえたのは、當時階級闘爭が未發展の狀態にあつたがためであるといふこと、ならびに一たび階級闘爭があからさまな

×××な形態をとり來たるや、その瞬間に科學的ブルジョア經濟學の弔鐘が鳴り渡つたといふことを述べた。ブルヂョア經濟學はもはや科學として止まりえなくなつたのである。資本家的なる社會形態の存續に對する××が加はれば加はるほど、その維持に對する不安が増せば増すほど、資本家的社會の內的連絡の忌憚なき解剖、その本質的機構の斷處なき曝露は、益々××べきものとなつた。從つて經濟學は、それがブルヂョア的であるかぎり、言ひ換へれば、資本家的社會の永久的存續を『××なる』前提となすかぎり、たゞ社會の表面に浮動する現象形態を敍述するに止まるの外なくなつた。すべて常識は、現象形態の無批判的なる攝取から成り立つ。それゆゑに單なる現象形態の敍述は、畢竟するに單なる常識の羅列にすぎない。よく行つて、それはたかゞ、普通人の知らざる過去または現在の歷史的・統計的事實の蒐集・整理にすぎない。經濟學が、ブルジョア的であるかぎり、益々科學的に無力なものとなりつゝあるは、(そのことは現に吾々の目擊しつゝあるところであるが)、全くこれがためである。そこには博識があつても經綸がない、事實の堆積があつても法則の啓示がない、人をして混沌たる表象のうちに溺れしめるのみで、吾々の住む現代社會が果して何處より來り將に何處に往かんとするかを指示することができない。此の如きが俗流經濟學の特徴であり、そして階級鬪爭の×××せる今日の時代にあつては、ブルジョア經濟學は、斯かるもの以外の何物ともなりえない。かくてプロレタリア經濟學の對立物は、すなはちブルヂョア經濟學であり、それは同時にまた俗流經濟學である。

すでに述べたる如く、吾々は常識と鬪はねばならぬのであるから、またこの俗流經濟學と鬪はねばならぬ。そしてこの鬪爭もまた困難である。

何故なれば、科學は常識を顚倒せんとするものであるがゆゑに、その說くところは直接的には常識と一致しない。常人の眼に映ずるところの現象形態は、微細にわたる科學的分析の長き道程を媒介としたる最後の結果として、始めて本質との連絡において說明されうる。從つて、これを學ばんとするものには、必ず多くの困難が課せられ、少からざる忍耐が要求される。殊に複雜極まれる現代社會の經濟的構造を說明せんとする經濟學にあつては、その研究材料の特殊性のために——化學的試藥も檢微鏡も利用されえないといふことのために——吾々の頭腦の作用による抽象力を必要とすることが、極めて多い。これ『資本論』の第一章が、著者により出來うるかぎり分かり易く敍述したとされるに拘らず、吾々の理解にとつて最大の困難を呈するゆゑんである。一言にしていへば、學問が科學として止まるかぎり、それは科學であつて常識でないがゆゑに、專門外の人々にとつて、その理解

は必ず困難である。

これに反し、俗學者は常識そのものに單なる學問的扮裝を施すにすぎざるがゆゑに、その說くところは極めて俚耳に入り易い。斯かる俗學者の著作を讀む人々は、往々にして膝をたゝき、『なるほど、これはおれが考へてゐる通りだ』と感歎しうる機會を有つであらう。そこには、日々太陽は、あしたには東の空より出で、ゆふべには西の空に沈む、と書いてある。それは讀んで見ると直ぐに分かるのであり、(實は讀まぬ前から分かつてゐることなのだが)、直ちに人々の同感を博しうるがゆゑに、それ自身は無力なものでありながら、しかも科學的智識の普及に向つて、實は少からざる妨害をなす。これ吾々が屢々俗流經濟學者に向つて憤怒の聲を發するゆゑんである。

かくて新興經濟學は、少くともその勃興の初期に當つては、四面楚歌のうちに身を置き、八方の敵と不斷の鬪爭に從はねばならぬ。それは既成の×××にとつての×××であるがゆゑに、これらの×××によつて××される。吾々の偉大なる教師は、その著『經濟學批判』の序文の結語として、ダンテ神曲地獄篇の句を引いてゐる。——

Qui si convien lasciare ogni sospetto

Ogni viltà convien che qui sia morta.

「こゝに一切の疑惧を棄てねばならぬ。

一切の怯懦がこゝに死なねばならぬ。」

彼れは、『地獄への入口と同じやうに、科學への入口にも、かゝる要求が掲げられねばならぬ』といふのである。

他方において、新興經濟學は、それが最も忠實にその利害を代表してゐる大衆からも、最初は先づその常識によつて反撥される。大地は不動であると思ひ込んでゐる人々に向つては、それは間違であり、實際は一秒間に二萬九千七百メートルの急速度をもつて運動しつゝあるといふことを、納得せしむることは、決して容易ではない。先づ最初には、人々が吾々を捉へて一種の狂者であるとなすことは、むしろ自然である。一部の人々は、そこを狙うて、盛んに吾々をマルクス狂信者となして非難するのである。

八方から敵を受けて——否な八方のものを敵たらしむべく驅り立てて——困難なる鬪爭を戰ひつゝある新興科學の唯一の强味は、それが他の何れの學派よりも遙により近く××に位してゐることである。これはその唯一の强味であるが、またそれ以上のものを必要とせざる充分の强味でもある。

吾々は人間の認識の發達に信頼する。吾々は××の結局における××を確信する。事物の眞相は、如何に隱蔽するとも、遂に暴露される

の日があるであらう。如何に多くの人々が大地を世界の不動の中心であると主觀してゐても、地球自體はかゝる意識のために毫末も左右されることなく、一秒間二萬九千七百メートルの速度に達する運動は、一瞬時といへども之を止めぬであらうし、緩めもしないであらう。たとひ學者を阬にし書を焼くとも、刑罰を加ふるもの自體が、地球とその運動を共にしつゝある。客觀的眞理の前には何人も膝まづかざるをえないであらう。人が××のためには、死してなほ××××××を示すは、これがためである。新興經濟學はこの意氣に立つて闘ふ。

マルクス經濟學の研究法としての辯證法が、あらゆる既成の形態を運動の流れにおいて把握するといふことは、吾々の以上述べたるが如くである。ところで茲にいふ運動とは、自己運動のことである。吾々は更にそのことを明かにするであらう。

けだし辯證法の光のもとにあつては、宇宙萬物の運動は、悉くそれ自身のうちに含める矛盾に充ちた・相互に××し合ふ・對立した諸傾向の××××としての、自己運動である。そして運動を此の如きものとして把握する點に、辯證法の重要なる一特徴が横たはるのである。

數學においては、正數および負數、微分および積分。

力學においては、作用および反作用。

物理學においては、陽電氣お

化學においては、アトムの結合および解離。

社會科學においては、××××。

此の如く統一物を分解して、矛盾に充ちたる其の構成分を認識することが、吾々の科學的認識にとつて根本的に大切である。けだし矛盾は運動の唯一の母である。世界における一切の事物の變動と推移とは、たゞそれ自身のうちに含める矛盾が生み出すものとしてのみ、始めて根本的に理解されうる。何故なれば、かゝる見地のみが、事物の運行を、自發的なる『自己運動』として把握するのであるから。もし事物の運動がそれ自身に基づくものとしてでなしに、すなはち他に依存するものとして、――例へば神の意志、人間の精神、等々に依存するものとして、――説明されるに止まるならば。それが依存するところの他のものが更に説明されねばならぬ。しかるにその説明さるべき他のものが、また同じ仕方によつて説明されるに止まるならば、それは重ねて他に依存することとなり、かくて遂に際限なきに至るであらう。それは斷じて事物を根本的に理解する方法ではない。

それゆゑに吾々は、統一物を分解して、矛盾に充ちたる其の構成分を認識することが、吾々の科學的認識にとつて根本的に大切である、といふのである。かゝる認識の仕方を離れて辯證法は成り立ちえな

い。そして、社會科學の領域にあつては、わがマルクス學こそ斯かる辨證法を最も嚴密にその方法となせる唯一のものである。

一切の社會諸現象の統一的なる根本的說明法としてのマルクスの唯物史觀は、すべて人間社會の歷史を、人間と自然といへる對立物の鬪爭過程として把握する。それはまた、過去における經濟的社會組織の變動を、——大まかに言へば、古代共產社會より奴隸社會へ、奴隸社會より封建社會へ、封建社會より資本家的社會へ、等々の社會諸形態の推移を、——生產諸力と生產諸關係といへる對立物の鬪爭過程として把握する。更に現代の資本家的社會に關するマルクスの經濟理論は、使用價値および價値といへる對立物の鬪爭過程として、か〻る社會の運動を、詳しく言へば、その成立、發展、および死と、他のより高級なる社會形態による之が代位とを、把握せんとしたものであり、それゆゑに『資本論』の劈頭は、資本家的社會の根本的構成分たる商品の分析をもつて——商品のうちに含まれてゐる對立的な構成分としての使用價値と價値との發見をもつて——その研究を出發せしめてゐる。そして『それより以上の敍述は、これらの矛盾の、および——始めより終りまでその根本構成分の總和として見たる——か〻る社會の、發展（成長および運動）を、吾々に示現する』。それは Omnis cellula e cellula（細胞は細胞より生ず）といへる生物學上の原則が、あらゆる動植物の組織體を一の例外なしに說明すると同一の精確さをもつて、資本家的社會の細胞たる商品を根本の出發點となしつ〻、複雜極まれる現代社會の組織を系統的に說明する。その敍述が互に盡く必然的な連絡と順序とを保ちつ〻、最も捨象的な範疇から出發して次第に具象的な範疇に向つて、步一步づ〻向上するの××に至つては、斯學の領域において未だ曾てその比儔を見ざるところである。

以上の如く運動を一の自己運動として把握するの立場は、やがて『社會の經濟的構造の發展〔すなはち運動〕を一の自然史的過程として把握する』の立場である。そして斯かる立場の必然的な結果として、人間の社會的存在は全くその意識から獨立してゐるといふことが、明かにされる。

一例を貨幣に取らう。それは商品に內在する矛盾の解決のために生まれるところの・商品世界にとつての・一の必然的產物である。私はそのことを、近業『經濟學大綱』上卷『資本家的社會の解剖』第一篇第一章第三節において、出來うるかぎり平易に說明しておいた。今その概略を述べるならば、生產物が商品として生產される以上、それらのものは相互に交換されねばならぬのであるが、しかもそのためには、必ず一の矛盾にぶつかるのである。けだし各〻の商品所有者は彼れの

商品を他人の商品と交換しようとするのであるが、しかし他人の商品ならば如何なる種類のものでも可いといふのではなく、その使用價値が彼れの欲望を滿足しうる如き商品と交換しようとするのである。それと同時に、彼れは、彼れ自身の商品が相手方にとつて使用價値であると否とを問はず、彼れ自身の自由なる選擇によつてその相手方を求め、その者の所有する商品と自分の商品とを交換せんとするのである。しかし此の如き欲求は、各々の商品所有が一樣に有つところであるから、それが互に矛盾し衝突することは言ふまでもない。このことは、商品が使用價値および價値といへる・矛盾した・互に排斥し合ふ・對立物を、それ自身のうちに包含してゐるといふことから生ずる。一定の生産物が商品となるためには、使用價値および價値の統一物とならねばならぬ。ところで商品となるべき生産物は、その所有者にとつては非使用價値である。それはたゞ他人にとつて使用價値となりうるにすぎない。だから、それらのものは使用價値となるために、全般的にその所有者を變更せねばならぬ。しかし總ての生産物が全般的に交換されるためには、それらのものが先づ相互に價値として──例へばAは百圓、Bは五十圓、Cは十圓であるといふやうに──一定の關係を保たねばならぬ。すなはち總ての生産物は、使用價値となる前に、先づ價値とならねばならぬのである。ところで總ての生産物が價値となるのは、それに支出された勞働が社會的に有用な形態で支出された限りにおいてであるが、しかもその勞働が果して社會的に有用な形態で支出されたるや否やは、それらのものが互に交換されうるや否やによつて始めて證明される。して見ると、商品は價値として實現されるがゆゑに、使用價値となりうるのであるが、また他方においては、それは使用價値として保證されるゆゑに、始めて價値となりうるのである。斯樣にして、一方の解決は互に他方の解決を前提とする點において、生産物の全面的交換は解法を必要とする一の矛盾にぶつかるのである。それは商品のうちに含まれる使用價値および價値といへる矛盾の展開に外ならぬのであり、且つ斯かる矛盾は、交換さるべき生産物の種類の増加に伴うて益々增大する。

だが、かゝる矛盾の展開は、同時にそれ自身のうちに之が解決を含んでゐる。何故なれば、種々なる生産物の交換が廣く行はれるやうになれば、それらの生産物のなかには、誰でもが欲求する物と必ずしも然らざる物との等差が、自然に生じてくる。その結果は、誰でもが欲求する生産物が、自然に、種々なる生産物に對する交換の相手方となるやうになる。そして斯かる交換の相手方たる地位を獨占する生産物が成立したならば、それはすなはち貨幣である。そして既に貨幣が成立したならば、誰でもが先づその生産物を貨幣に換へ、しかる後その

貨幣をもつて彼れの必要とする隨意の生產物を購買するのであり、かくして全社會に生產された多種多樣の生產物が、貨幣を媒介とすることによつて、滯りなく全面的な相互の交換を結了するのである。

　これによつて見れば、生產物が商品として生產されるといふことを前提とするかぎり、貨幣はかゝる商品生產の發展の必然的な產物である。或る特種の商品が他の普通の商品から除外されて、より多くの規定を有つた・より具象的な・貨幣としての商品に轉形することにより、商品の世界が普通の商品と貨幣とに分化するといふことは、商品生產の自然史的な過程である。それは母胎に宿つた生殖細胞が分裂增殖を重ねつゝ一定の發育段階に到達したときに、分化せる特殊の器官を有つに至ると、全く同じことである。それは何人の意志・意圖・意欲からも獨立してゐる。

　貨幣の必然性を認識しえざるものは、その發生について多くのお伽話を發明する。或る者は、物々交換の不便を列擧し、かゝる不便を除去せんがために、人々が合意によつて貨幣を制定したかに考へ、あるひは天氣清朗なる一日、×××××が現はれて、人民の不便を救濟せんために貨幣を發明したかに考へてゐる。それらは總て、貨幣を媒介とする商品交換關係といへる吾々の社會的存在を、意識によつて規定されたものとなすところの、觀念論的な見解にすぎない。

　貨幣の必然性に關する認識の缺如はまた、從來屢〻社會改造に關する貨幣廢止の空想を生んだ。この空想は、現代社會における貨幣の禍源を貨幣にありとなし、これを救濟せんために、貨幣に代はるべきものとして例へば勞働券の如きものを以てせんとする說である。吾々は此の如きを空想的社會改造案と名づける。(私は今各般の方面に亘つて此種の空想案を指摘し批判するの餘白を有たぬが、しかし科學的認識の缺如は、到るところにおいて斯かる空想案を生みつゝあることに對し、讀者の廣汎なる注意を促さざるをえない)。

　商品生產を前提とするかぎり必然的に貨幣が發生するといふことは、H_2O なる化合物が必然的に水となるといふと同じことである。それは何人の意志・意圖からも獨立してゐる。もちろん『個々の人間にあつては、彼れの行動の總ての動力が、彼れを行動に導くために、彼れの頭腦のなかを通過し、彼れの意志の動因に轉化せねばならぬやうに、市民社會の總ての欲求は、法律の形態で一般的效力を獲得するために、國家意志のなかを通過せねばならぬ。これは問題の形式的方面であつて、それは自明のことである』(エンゲルス)。だが、『いづれの時代たるを問はず、經濟的諸條件に服從せねばならなかつたのは××たちなのであり、斷じて彼等がこれらの經濟的諸條件に對する法則を

作り出したものでない、といふことを知らないやうな人は、およそ歴史的智識なるものを全然缺如せるものと言はざるをえない。かの公法や私法は、いづれも單に經濟的諸關係の欲求を布告し記錄するものたるにすぎない』。『金銀が法律上受授性をもつてゐるのは、たゞそれが事實上然るがために外ならぬ。そして金銀が事實上受授性をもつてゐるのは、現在の生產組織が或る一般的な交換手段を必要とするからである。法律はたゞ事實の公けの承認にすぎない』(マルクス)。貨幣が單なる法律の公布によつて廢止されうるものなるかに觀念することは、一の純粹なる空想である。それは××や立法者やの意識に依存するものではない。むしろ逆に、一定の社會的存在がこれら立法者の意識を規定するのである。

だからマルクスは、唯物史觀の根本的命題として、『人間の意識が彼等の存在を規定するのではなく、むしろ逆に、彼等の社會的存在が彼等の意識〔社會的意識〕を規定するのである』といふことを、宣言してゐるのである。

それが吾々の社會に關する唯物論的見解である。吾々はかゝる見解の主張者であるといふ點において、唯物論者である。

世間では、吾々の唯物論を誤解して實際生活における物質的利己主義であるかの如く思惟し、物質偏重主義に對して精神主義を強調せばならぬなど主張するものがある。だが吾々は理論上の唯物主義および理想主義を、實際上の理想主義および唯物主義と、混同してはならぬ。實際的意味における理想主義者とは、彼れの思想に忠實であり、これに向つて一切を犧牲にせんとする人のことである。かゝる理想主義者は、もちろん哲學的唯心論の・理論的唯心論の・斷乎たる反對者でありうる。その×××××××××××は、實際的には一の理想主義者であるが、しかし同時に、徹底的に唯物論者である。その愛する主神のために歎息する人々は、非常に理想主義的な見解をもつが、しかしそれは、彼等をして世間並の・臆病な・利己的な・狹量な・蟲たらしめることを妨げはしない』(ブハーリン)。

地球は、人間がその上に發生する以前に、從つて人間の頭腦が・その意識が・成立するより遙かに以前から、存在してゐたものである。それは人間の意志によつて發生したものではなく、人間の意識に依存するものではない。それは人間の意識から獨立するところの外物でありそれが人間の頭腦に反映して地球なる意識を生ずるに至るのである。

吾々の社會的存在と社會的意識との關係も、また此の如くである。たゞ相違する點は、吾々の社會的存在の結成が、意識者たる吾々の意志行爲を媒介とする點である。例へば商品の交換に決して無意識的に

有はれるのではなく、それは形式的には商品所有者の自由意志に基づく契約關係として表現される。そしてそれら商品の交換關係が必然的に生むところの貨幣も、形式的には國家の意志による公けの承認を經る。それゆゑに、そこに一種の××が生ずる。そして吾々の唯物論は、かゝる錯覺を打破せんとするものである。

社會はもちろん意識體たる人間から成り立つ。社會を組織してゐる個々の個人は、各自の行動を意識的に營んでゐる。しかし斯かる個々人の意識的活動から社會全體の上に如何なる結果が生まれるかは、これら個々人の意識・意圖から全く獨立してゐる。「人間は相互に交通してゐながら、しかも彼等は、少しでも複雜な社會組織のなかでは——殊に資本家的な社會組織のなかでは——それによつて如何なる社會關係が形成されるか、それらは如何たる法則によつて發展するか、等々のことを意識しない。例へば、穀物を賣る農民は、世界市場における世界の穀物生産者たちと「交通する」のであるが、しかし彼れは、自らそのことを意識せず、また同じやうに、その交換から成立するところの社會的諸關聯をも意識しないのである。世界經濟の中における個個の各生産者は、生産技術の上にかくかくの變化を齎らしたことを、意識してをり、各々の商品所有者は、彼れがかくかくの生産物を他と交換したことを、意識してをるが、しかし生産者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の內部における斯かる諸變化の一切の總計を、その一切の分岐に亘つて知りつくすことは、マルクスが凡ゆる人にも成しえないことである。たかだか成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歷史的發展とが啓示されたことである。——こゝに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味ではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味である。諸君が生活をなし經濟を營み、子を産み生産物を造り、またそれらの生産物の交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖が、一の發展の連鎖が成り立つのであるが、それは諸君の社會的意識からは獨立してをり、諸君の社會的意識は決してこれを遺漏なく把握することは出來ない」(レーニン)。

如何に極端なる唯心論者といへども、複雜極まれる現代社會の隅々における諸變化の一切の總計を、その有らゆる分岐に亘つて知りつくしてゐると、主張しうる者はあるまい。しかもそのことは、現に唯心論者自身の意識からは獨立に、吾々の社會的存在が變化し發展しつゝあることを意味する。吾々は、吾々が意識する以前にすでに與へられ

てゐる社會的存在を、事後において意識しうるにすぎない。しかもただその變動の諸法則の主要な根本的な筋道を發見しうるにすぎない。それは、地球が吾々の意識に先だつて與へられてをり、しかも地球に關する吾々の智識はなほ極めて不充分である、といふに等しい。

『唯物論は總じて、人間の意識、感覺、經驗等々から獨立の・客觀的に實在的な・存在を（物質を）認める。史的唯物論は、人間の社會的意識から獨立の、社會的存在を認める。意識は、この場合前の場合と同じやうに、たゞ存在の反映にすぎない。よく行つてほゞ正しい（適當な、模範的に精確な）存在の反映である』（レーニン）。吾々はかゝる認識を有つものとして唯物論者なのである。

唯物論者としての吾々が、決して個人の意識的活動を否認する者でないといふことは、すでに繰り返し述べたところである。吾々の唯物論をもつて、人間をば梶を失へる船の海に浮べるが如きものと看做す說となすならば、それは甚しき誤解である。『資本論』第三篇第五章の始めにおける次の章句は、人間がその目的を意識して活動するといふことを、何人よりも明瞭に說明してゐる。

『蜘蛛は織工のそれに類似した作業を行ひ、蜂はその蜂窩の建築によつて多くの人間の建築師を慚愧せしめる。しかし最も拙劣なる建築師をして最初から最も巧妙なる蜂に卓越せしめるところのものは、その建築師は蜂窩を蜂蠟で建築する以前にすでに彼れの頭のうちで建築してゐる、といふことである。勞働過程の終りには、その始めに際しすでに勞働者の表象のうちに・從つてすでに觀念的に・存在してゐたものが、結果として出てくる。彼れはたゞ自然的なるものの形態變化を生ぜしめるだけではない。彼れは自然的なるもののうちに、同時に彼れの目的を——それは彼れの意識してゐるところの・彼れの行爲の樣式および仕方を法則として規定するところの・目的を——實現するのである』。

人間の建築師が蜂と異なるところは、彼れが何を造るべきかを最初から彼れの頭腦のうちに描き、彼れの生產的活動の目的を最初から意識してゐることである。だがこのことはまた、彼れがその仕事の途中で他の目的を意識するに至ることを妨げはしない。そしてその場合には、彼れが後に至つて意識するに至りし目的に關するかぎりにおいて、彼れは盲目的にその仕事を開始したのであり、その點においては蜂や蜘蛛と同類たることを免れぬのである。

私は斯かる事態の一例として、某全集の責任編輯者たる教授土方博士の最近の言動を、こゝに引用するであらう。氏は斯かる責任者として今日まで二回の宣言と一回の聲明とを公けにされた。二・七・一第一回

の宣言においては、『區々たる分派的感情を放擲して、如何なる思想傾向に屬するを問はず、苟くも擔當科目の最適任者と目せられる人々を捉へ、現代の誇りうる最高水準の知識を網羅せんことに努めた、幸にして……諸大家の賛同を得て云々』と言つてゐられる。また十月一日發行の『經濟往來』では、『各科目についての最適任者と目せられる人々に執筆を依頼してその承諾を得たのである』とも言つてゐられる。

しかし氏は必ずしも最初に希望された『人々を捉へ』ることに成功はされなかつたやうである。それは最近における改造社の廣告が巨細に證明してゐるところである。現に右改造社の廣告に次いで現はれた教授の『聲明』にも、その全集は、『最初より、それが純粋に學的勞作たるかぎり、マルクス經濟學の紹介のため一二冊を割くつもりであつた。この故をもつて……數氏にも執筆を依囑したが云々』と述べてある。すなはち氏により『純粋に學的勞作』を著はしうるものと認定され、執筆の『依囑』を受けた人々のなかには、大塚、山田、向阪、大森の諸氏があり、そして私も恐らく同様の認定を受けたのであらう、數回にわたつて執筆の『依囑』を受けたのであるが、しかし前記の諸氏を始め私もまた、遂に氏の『依囑』に應じなかつたのである。だがこのことのために、吾々が急に『マルクス狂信者』に轉化する筈はあるまい。

しかし氏の全集は、いつしか『マルクス狂信者の排除』といふことを、その看板の一つとなすに至つた。そして氏の最近に公けにされた『宣言』には、『使命は必ずしも意識的に與へられるものではない。我々は漸く本全集の眞の使命が盲信的マルクス主義の克服にあることを自覺し、勇躍してその偉大なる任務を果さんとする』といふ言葉があり、またその『聲明』には、氏がマルクス經濟學のために執筆を依囑された人々が『他の多くの共産主義者と共に全部他の全集に參加してゐたことを知つた』ので、『こゝにおいて漸く我々は本全集の特質が非共産主義にあることを自覺した』といふ言葉がある。かくて吾々は知る、氏にあつては學問上の計畫ですら、その使命について最初は無意識的であり無自覺的であり盲目的であつたといふことを。

それは例へば、一定の賃金を得る目的を意識して他人を車に載せて走つてゐた車夫が、いつの間にか自分の脚の筋肉が發達したのを見て、『おれは漸くおれの仕事の眞の使命が筋肉の發達にあることを自覺した。おれは勇躍してこの偉大なる任務を果さんとするものである』と宣言し聲明するに等しい。それは自分自身の活動についてすら最初は無自覺的であつたことの告白にすぎない。『しかし最も拙劣なる建築師をして最初から最も巧妙な蜂に卓越せしめるところのものは、人間の建築師は蜂窩を蜂蠟で建築する以前に既に彼の頭のうちで建築して

ある、といふことである。

吾々唯物論者は吾々の××・吾々の××の盲目性を主張するものではない。むしろ逆に、吾々は吾々の××の×××××を最大ならしめんがため、これを社會の必然的法則と辯證法的統一に齎らすことを要求するのであり、それゆゑに吾々は××の社會を唯物論的に見、先人となれる×××××の總てを棄てゝそこに客觀的な論理——必然的法則——を發見せんことを主張するのである。

吾々はかゝる必然的法則の認識によつて、吾々自身の生産物——吾々の社會的存在は吾々自身の生産するところのものである——によつて支配されることから免かれうる。

世界は自己運動をなしつゝある物質である。もちろんその運動は、人間の一切の意志・意識・意慾等から、完全に獨立して行はれてゐる。たゞ人間はその感覺を通して斯かる世界の運動法則を認識しうるのみである。なほその認識は、もちろん決して完全なものでなく、たゞ吾々は吾々の實踐によりて絶えずその誤謬を正しつゝ、益々より完全なる認識に近づきうるのみである。だが、ともかくも斯かる認識をうるならば、しかるかぎりにおいて、吾々は意識的に世界の運行に參加しうるのである。[illegible]化の化育に參するとは、その謂ひである。そして

そこに人間の××にとつての[illegible]

る。

人間が自然を支配するとは、人間が自然の法則に意識的な計畫によつて服從することである。それゆゑに、例へば電氣の利用は、電氣に關する諸法則の精密なる科學的研究を前提とする。それらの諸法則は、人間の意志・意慾から獨立してゐる必然の法則であるから、それ自體は吾々の力で如何ともなし難い。たゞ吾々のなしうるところは、それらの諸法則に沿うて吾々の行動を營み、吾々の意識せる目的をそれらの諸法則を通して實現することである。そこに自然に對する人間の隷屬の自然に對する人間の支配への・また自然的必然の人間的自由への・辯證法的轉化が存する。

『ヘーゲルは、自由と必然との關係を正しく敍述した最初の人である。彼れにとつては、自由とは必然の洞見である。「必然はたゞそのものが把握されざる限りにおいてのみ盲目である」。自由は、自然法則からの夢想的な獨立のうちに横たはるのでなく、この法則の認識のうちに、且つその認識によつて與へられたところの・その法則を計畫的に一定の目的のため働かしむることの可能性のうちに、横たはるものである。このことは、外的自然の諸法則に關して妥當すると同じやうに、人間の肉體的および精神的存在そのものを支配する諸法則にも妥

當する、——これら二種の法則は、吾々がたかゞ〳〵表象において互に分かちうるのみで、現實には互に分かたれえぬものである。だから意志の自由とは、知見をもつて決意しうる能力以外の何物を指すのでもない。かくて一定の問題に關する或る人の判斷がより自由であればあるほど、この判斷の內容は益〻より多くの必然性をもつて規定される、それと同時に、種々雜多の且つ互に矛盾してゐる決意可能性の間を表見的にのみ勝手に選擇するところの、かの無知に基づく不確定は、正に之を支配しなければならぬところの對象により却て支配されるといふことにおいて、その不自由を證明する。すなはち自由なるものは、自然的必然性の認識に基づいて、吾々自身の上に・ならびに外的自然の上に・行はれる支配のうちに存するのである。』（エンゲルス）

自然的必然の人間的自由への辯證法的轉化は、以上の一文のうちに既に遺憾なく敍述されてゐる。私はたゞ一個の例を蛇足となすであらう。例へば今私が或る西洋風の室內にゐるとき、もしその室外に出ようとするならば、私は扉の柄に手をかけ、これを一定の方向に廻はして、その扉を開けねばならぬ。それが、善くも惡くも、室外に出るための最も簡易な方法である。それゆゑもし私が室內の構造をよく心得てゐたならば、室外に出ようとするとき、私は躊躇なくその扉に手をかけることを決意するであらう。そしてこの決意のうちに、室外に出ようとする私の意識的行動の自由が存するのである。しかるに、もし雀か鼠かがこの室內に迷ひ込んできて、慌てゝ外に飛び出ようとする場合には、前後、左右、上下のきらひなく、むちやくちやに跳ね廻るであらう。それがエンゲルスの言葉によれば、『種々雜多に且つ矛盾する決意可能性の間を、表見的にのみ勝手に選擇する』といふものである。勝手に跳ね廻るのだから、表面的には思ふがまゝに振舞つてゐるやうに見えても、實は盲目的に外物の支配を受けてゐるのである。眞の自由は、室內の構造を知盡することにより、出るべき場所から靜に出てゆく人間の上にのみ存するのである。

吾々が資本家的社會を支配する必然的な諸法則を發見せんとするも、また上に述べたるが如き自由を獲得せんがためであり、吾々の行動を盲目的ならしめざらんがためであり、吾々の意識的目的をそれらの諸法則を通して實現せんがためである。

吾々が現にそのうちに住みつゝある今日の資本家的社會組織は、曾て何人もが意識的に設計したものではない、それは何千年かに亘る人間の物質的活動が自然に生んだところの最後の社會形態である。善かれ惡かれ吾々は今かゝる經濟的構造のなかに閉ぢ込められてゐる。そして吾々の生活はすでに斯かる構造を土臺とするがゆゑに、それと直

接または間接の連絡をもつところの、吾々の社會的・政治的・および精神的の生活諸過程は、必然的にそれに適應するところの一定の相を呈する。

例へば、勞働力が一たび商品として賣買されるやうになれば、貨幣は必然的に資本に轉形するのであり、商品所有者と商品所有者との間における平等關係は、必然的に一方のものの他方のものによる搾取關係に轉形するのであり、從つて資本家と賃勞働者とは階級を異にするものとして互に對立することとなり、そしてそこには必然的に兩者の間に×××が起り、またその××××は一定の發展段階において必然的に政治的闘爭に轉形する等々、そこには『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖』が成立するのである。

吾々は今かゝる社會的構造のなかに閉ぢ込められてゐる。だからもし吾々がその構造の外に出ようとするならば、——言ひ換へれば、もし吾々が現存の社會形態から他のより×××社會形態へ推移しようとするならば、——恰も室内から室外へ出ようとする者が先づ、自分の閉ぢ込められてゐる室内の構造を確め、如何なる場所の如何なる扉が如何なる方向に動きうるかを研究せねばならぬと同じやうに、吾々は先づ資本家的社會の構造ならびにその運動法則を明かにせねばならぬのである。

資本家的社會の構造ならびにその運動法則の××であ……べたやうに、ブルヂョアジーにとつての××であり、××であり、××である。それのみでなく、何千年かに亘る無意識的な發展の結果として今吾々が閉ぢ込められてゐる現代社會は、——この『乘りかゝつた船』は、——實に×××××××××、到底×××××××××××××××、×××××××にされるであらう。だがそれは、吾々の意圖外における自然史的過程が吾々に課してゐるところの必然の成行であるから、吾々は『××××をあげて、×に面する』の外はない。

以上吾々は、事物の運動をそれ自身のうちに含める×××の闘爭過程（自己運動）として把握する辯證法が、必然的に吾々を導いて、社會的構造の運動を一の自然史的過程として把握する立場に立たしめ、從つてまた、社會的意識をもつて社會的存在の反映となす唯物論的見地に立たしめることを見た。『唯物論は本質的には辯證法的である』（エンゲルス）といひ、『吾々の辯證法の根柢には、唯物論的自然觀が存在する。前者は後者によつて支へられ、後者が倒れるならば前者も倒れるであらう。逆に、辯證法を俟たずしては、唯物論的認識は不完全である、否な全く不可能であらう』プレハーノフ）といふは、かゝる意味

を指摘したものである。

しかるに以上の如き見地は、更に吾々に敎ふるに、「人間はつねに、彼等の解決しうる問題〔社會的問題〕をのみ・問題とする」ことをもつてする。

一例を前に掲げたる貨幣に取らう。吾々は先きに、生産物が商品として交換されるためには一の矛盾にぶつかるといふこと、かゝる矛盾は交換さるべき生産物の種類の增加に伴うて益々增大するといふこと、しかしそれと同時に、交換さるべき生産物の種類が或る程度以上に增加するならば、それら生産物のうちには誰でもが欲求する特殊の物が自然に現はれ、それが遂に貨幣となることによつて、先きの矛盾を解決するといふことを述べた。この場合、問題は解決の手段と共に發生するといふことが、極めて明瞭である。何故なれば、種々なる生産物に對する交換の相手方となる如き商品は、種々なる生産物が交換過程に入り込むやうになつてからでなければ、發生のしようもないが、しかし直接な生産物の交換（物々交換）が次第に困難となつてくるのも、やはり種々なる生産物が交換過程に入り込むやうになつてからのことであるから。

このことは、一定の社會的構造のもとに生ずる根本的な矛盾――生産諸關係と生産諸力との衝突――について見るも、また全く同じことである。吾々の住む現代社會においては、深く經濟的構造のうちに根ざす斯かる根本的矛盾のために、さきに一言した如く、過剩人口の漸次的增大、大衆の生活の窮乏化、資本家的生産の行詰り、世界恐慌および世界戰爭の脅威、等々、一見したところ殆ど解決の不可能なるかの如き諸問題が發生してゐるのであるが、しかしそれらは結局のところ、現存せる生産諸關係の埒内において生産諸力が偉大なる發展を遂げた結果、それらの生産諸力が從來の生産諸關係と××××××××××××××××、そしてそのことは新たなる×××××の物質的諸條件が已に生成の過程にあることを告げ知らすものたるに外ならぬ。すなはち問題はその解決の手段と共に發生し且つ發展しつゝあるのである。『それゆゑに、――マルクスはいふ――人間はつねに、彼等の解決しうる問題をのみ、問題とする。何故なれば、より精確に觀察すると、問題そのものは、その解決の物質的諸條件が已に存在するか又は少くともその生成の過程中にある場合にのみ、發生するのであるから。』

吾々は以上の如き見地に立つものであるがゆゑに、吾々は問題の解決を問題それ自身の分析のうちに求める。それゆゑに吾々は吾々の空想によつて將來社會の×××を描くものではない。何よりも先づ現實社會の嚴密なる科學的研究を要求する。吾々は存在を意識から生み出

さんとするものではない。吾々の偉大なる教師の『眞心こめた・長年月に亘る・研究の結果』が『資本家的生産の仕方と、それに適應する生産諸關係および交易諸關係と』の解剖圖に外ならぬのは、全くこれがためである。(學者のなかには、『資本論』のうちに××××××が描かれてゐないと言つて、マルクスを非難するものがあるが、マルクスに對する非難のうち、これくらゐ無理解なものはない)。かのレーニンが『人類の最高課題は、一般的な根本の筋道における經濟的進化(社會的存在の進化)の客觀的論理を把握し、人類の社會的意識と總ての資本主義國の進歩せる諸階級の意識とを、それに對して出來うるかぎり明白に明瞭に批判的に適合せしむるにある』と言つてゐるのも、またこれがためである。

吾々に與へられてゐる問題は、××××××××であり、これを解決することなくしては、歴史が××××段階に踏み入ることをえざる問題である。吾々はこの問題を科學的に理解することによつて、これを×××××せんとするものであり、今日に至るまで無自覺的なりし歴史の過程を、――從つて人間の精力および生命の夥しき犠牲を伴ひし盲目的鬪爭の過程を、――新たにそれ自身の意識に眼醒めしめんとするものである。社會はもちろん生みの苦しみを無くすることはできぬが、しかしこれを『短かくし且つ和らげることはできる』。吾々の學問の使命はそこにある。もしそれが、かの一部の人の最近に至り漸く自覺せりと廣告しつゝある方便的『使命』と、相對立するものであるならば、吾々はむしろその對立を光榮とするであらう。

東京市政の現狀に直面して

前田多門

一

佛の顏も三度と言ふ事があるが、東京市政に關する大疑獄は是で四度目である。而して是等は表面に暴露された事件丈けであるが、其の外暗から暗へ葬られたものが、何程あるか解らないとは、大抵の人が想像する所である。是等四回の大疑獄に就て見るも、一回は一回と、後のもの程質が惡く、關係市會議員の數も殖えて來るのである。東京市民よ、寛容の美徳も事にこそ依れ、今度は一つ勘忍袋の緒を切らしたら如何だ。

第一回の疑獄は明治二十八年に起つた不正水道鐵管納入事件、是には市會議員は無罪で濟むだ。寧ろ之に起因した市會の知事彈劾、市會解散の方が政治上の意味が大きい。

第二回は星亨全盛期、明治三十三年、汚物掃除請負人決定の件、量水器水道鉛管納入の件、及び江戸橋架換工事竣工延期の件に關し、市參事會員や市議が當業者から收賄した事件で、關係者八名。

三度目は大正九年、瓦斯料金値上許可、多摩鐵道買收、砂利道路下水等不正工事に關するもので、市會議員の檢擧數十五名。

今度が四回目で、事は今司直の手に屬して、確報を得難いが、新聞の報道に依れば、板舟權、京成電車乘入、之れに加ふるに、市長選擧に絡る醜事件だそうである。是等の事件は、其の發生當時何れも種々の取沙汰を喧傳されたものであれば、恐らくは是等を內容としてゐる疑獄である事は眞實であらう。而して、今之を書きつゝある時、既に召喚若は檢擧された市會議員の數十九名に及び、大正九年のそれに比して四名を增して居る。今の形勢ではもつと增加しさうとの事である。罪の確定は、審理の結果を待たねば固より何とも言へぬが、消息通は相當以前から、此の疑獄を期待して居た。これ程最近の市會の內情が暴露して來たのである。

今度の事件が、前のよりも質が惡いと想像される譯は、

第一、疑獄關係の中心人物が、以前の二回程統率力が無く、從て大口一つで行かず、數口に渡りを付ける必要上、關係者が案外多からうと

一般に看られて居る事。

第二、黨弊浸潤の極點に常規を逸し、國政關係に於て犬猿啻ならざる政黨の系統に屬する者が、市政上の利權情實の爲めには、恬然握手苟合して居ると信ぜらる可き筋ある事。

第三、前二回の事件に、首領株と一般に目されて居た者は、惡い事はしたか知れぬが、他面、市政上一定の抱負を有し、多少建設的な處もあつたが、今度の關係者は、たゞ醜い利權漁りにのみ沒頭し、何か案が提出されると、其の内容の如何を問はず、先づ一應難癖を付けて反對を試み、背後より諒解を求める手の來るを待つと言ふ遣り方に出づる者多く、市務に對して絶對的のサボタージをやつて居たと認めらるゝ事。

第四、噂の如く、市長選擧に黄白を撒いた事が疑獄の内容を爲して居るとすれば、是は洵に空前の出來事で、東京市如何に紊亂したりと言へ、從來かく迄墮落はしなかつたのである。

以上の如き新たな忌むべき諸特徴を具備して、此の新疑獄事件が現れて來た。是は單に東京市に丈け、限局して看る可き事相では無いのであつて、實は吾國現代の世相が、擧げて、如實に、此處に反映して居るのである。偶々東京市疑獄の暴露に依て、あらゆる無理と腐敗とを包有する現代政治社會の斷面を玆に示されたのである事を想ふ時、爲政家は懼れて又愼む可きである。

二

今此の不祥事に直面して、如何なる善後策を執る可きであるか。司法權の發動を活潑ならしめて、醜類の徹底的一掃を期するは固より希ふ所である。然し斯の如き他力的な事後處理が革新の根本策だとは誰も考へまい。方途を其の以外に求むる時、其處に何があるか。

東京市の現狀を見て、或は全く匙を投げ、百年河淸を待つと嘆ずる者もある。然しさう絶望して仕舞ふのは早過ぎる。機運の掴みやうに依ては、窮まつて通ずる事もあらう。實例は英國にある。今でこそ英國は自治政治の模範國を誇つて居るが、百年前の都市政治の腐敗はとても話にならぬものがあつた。

腐敗極點に達して改革の烽火は擧り、一八三三年勅命調査委員會（ローヤル・コンミッション）が設けられて、國内二百八十五の都市の現狀に付き、詳細な調査を遂げ、一年半を費して後浩瀚な調査書を一八三五年に發刊したが、是が基礎となつて、議會に新市制が提出され、その機會に各市が覺醒して、爾後全く新生の途に入つた。其の委員會報告書に依ると、當時の市會の醜狀は隨分甚だしいもので、會議は一般に公開されず、市の要職は情實的に市會議員の友人に與へられ、中には一人で到底も背負ひ切れぬ數職を兼務して其の各別の俸給を合算したものを懷に入れて居る者があり、甚だしいのになると、其の他に不在の者に對して任命を行つた場合もある。又市有地は市議自身の私有地と殆ど擇ばないやうな

勝手極る管理を受けて居たとある。英國でもこんな時代があつたのである。仍ほロンドンに就ては、當時一八三七年に同じく調査報告書が出來たのであるが、事情複雜で改革實行が延ばされた處、其の後市政に關する疑獄が機緣となつて、刷新の輿論喧しくなり、遂に再び勅命調査委員會が設けられて、其の結果一八八九年の大改革、ロンドン都府制の創設を見たのである。又かの米國の腐敗都政、殊に紐育市のタムマニーホールの市政壟斷の如き、幾多の醜態が存した事世界的に有名であつたが、近年各市に於ける市政調査會運動其の他各方面識者の社會運動に依て、著しく刷新の實を擧げつゝあるは、人口に膾炙する所である。廻らすに方途を以てし、義憤に燃ゆる輿論を組織づけ、其の力で壓し進む事が出來れば、改革の實行、決して絕望では無いと思ふ。

たゞ玆に困るのは市民の健忘症だ。是は獨り東京市民に限つた事ではあるまいが、今こそ半分は興味本位で、檢擧された市議を痛罵し、市政の淨化が叫ばれて居るが、是はほんの當座の事で、間も無くそれが忘られて仕舞ふのは、過去の事實から推して豫想に難く無い。そこで此の儘市會が續くと、もう跡二年經たねば、市議の總選擧が來ない。二年の歲月、丁度忘れて仕舞ふのには適當な時の長さである。鐵は熱して居る時に叩くのに限る。願はしいのは今此處で解散でもあつて、總選擧が今年行はれる事である。然し動機が如何に純眞な市政刷新にあつても、法律上任期を保障されて市議となり、市會を構成して居るものに、たゞ政治上の都合で、解散を行ひ其の生命を斷つ事は愼む可きである。況んや其の解散權は一に內務大臣に在て、輕々しく此の權力の發動を誘致するは、一步誤れば自治權の侵害となるに於てをやである。故に現在の狀態は果して解散を値するや否や、冷靜に之を檢討する必要がある。

今迄、日本全國中で內務大臣が市會を解散した例が十二ある。其の內二回迄は東京である。是は冒頭にも述べた不正水道鐵管事件に關して、當時特別市政の下に市長の職務を執て居た東京府知事三浦安氏の不信任を市會が決議した爲めであつて、明治二十八年十二月に第一回の解散があつた處、再選の市會は又もや翌年三月不信任決議をやつた爲め、再度の解散を喰ふたのである。官權の强い不完全自治制時代にありさうな事で、此の例は既に古典的のものである。其の他の都市に行はれた解散の實例も、多くは市長不信任の決議か、さもなくば監督官廳に反抗した場合であつて、其の生起した時も、まだ自治政の發動幼稚な明治二十年代、三十年代で、大正時代に這入つて、解散のあつたのは、九年の青森市會、十四年の那覇市會の二つのみである。而して其の適用を受ける都市もどつちかと言へば僻陬の小市であつて、時勢の進運に伴ひ、中央政府も自治權を尊重し、市會も亦漸次議事に習熟して、濫りに非常權が發動しないやうになつた事が窺はれる。かう言ふ時代に、突如中央の帝都に於て、從來例の無かつた市會腐敗の理由に依り、市會の存在を否認する命令を監督官廳をして發せ

は、愼重熟慮を要する案件である。　現在被檢舉者の數、市議丈けでも二十名に垂んとして居るが、之が更に著しく増加する場合は、勿論解散を是正し易いであらう。然し解散の論據は、單に數字的に何人引張られた時と決める譯にも行かぬし、形式的理論丈けに之を求め難い。然し是等を離れて、政治道德維持の爲めと言ふ理由を高調するならば、之は立派な解散の理由になる。其の代り解散を命ずる者、即ち政府も嚴肅な氣持で、其の解散理由たる、政治道德維持の趣旨を證し、東京市の不祥事を機として、政治全般に渉て、口の先丈けで無い更始一新を試む可きである。前述の如く、今回の疑獄事件には幾多變態の新現象が附隨して居るが、殊に顯著なのは、利權の前に、相反する政黨の系統に屬する者共が握手苟合したと言ふ事實である。一體此のやうな大問題が東京の眞中に起て居るのに、平生は箸程の事をも棒の樣に言ひ立てゝ、反對黨の揚げ足を取るに汲々たる既成政黨が、此の問題丈けに關しては、寂として沈默を守り、相互不戰條約を締結して、寛容の美徳を發揮して居るのは何事であるか。輿論に組織を與へ政治に責任を生ぜしむべき職能を有する政黨が、かゝる大問題に對して其の職責を盡し能はざる以上は、吾人は別に輿論の指導方法を他に求めねばならぬと共に、斯の如く政黨が輿論を統一し得ざるに至つた原因に遡て探究し、此の腐敗極點に達した東京市疑獄を一轉期として、一般政治道德の淨化を具現する機を掴み度い。其の革新の一烽火として、殊勝な寧ろ自責の念を持て內務大臣は東京市會の解散を宣する必要がある。

解散があつた場合は勿論、よしそれが無くとも、市議の補缺選擧の場合が今後屢々起るであらう。今度は識者有志家にしつかりして貰つて、どうか悪い市議を出さぬやうにし度い。決して東京市民を悪く言ふ積りは無いが、東京と言ふ所にはまだ社會的有機體として熟成して居らぬ。此處は一種の植民地、各自それ〲の目的を追求して假に此處に巣喰うて居る丈けだ。隣人無き生活、それが東京の生活だ。第一、土地丈けにして見ても、東京市內の地面の三分の一は官有地で、市民と何の關りも無いのである。此處で漠然愛市心を鼓吹すると言うても、仲々難しいのであるから、選擧の時などは、矢張り自然の成行に放任せず、眞に利害を離れて公共の事を憂ふる人々が、一定の組織を作つて、投票の向ふ可き流を作つて行かねばならぬ。東京の一つの取柄は買收の大して利かぬ事だ。たゞ人が市政に無頓着なのと、候補者の鑑別が難しいので困る。平生から世間一般に市政に關する純眞な興味を涵養して、選擧の時、善い候補者を示す事が出來れば、而してその示す人なり團體なりが、眞に誰から見ても信用の置ける者ならば、相當の効果を擧げる事が出來やう。たゞ其の組織に就ては充分の考慮を拂ふ必要がある。從來此の種の企てが多く失敗に歸したのは、それ自體が不可能な爲では無く、組織に缺陷があつたからである。

右に述べた樣な愛市運動に於て、甚だ失敬乍ら、此の際既成政黨に

は遠慮して貰ひ度い。固より、自治政に政黨政派があつては、悪いとは言はない。否、言うて見ても、それは出來ぬ相談である。政黨も結構、地方固有の政治に立脚して自然に分岐して來る政見の爲めに、之を組織づける意味の政黨なら、却て政治の進歩を助けるであらう。丁度、ロンドン府の市政が、漸進黨(モデレート)と急進黨(プログレッシーヴ)とに岐れて、それは必ずしも前者が國政上の保守黨を、後者が同じく自由黨を代表せず、其の所屬關係が相互交錯して居るが如きである。啻だ無意味に國政上の兩政黨が、地方自治體に割込むで來て、何等政綱政見の分界線なきに拘らず、只管に利益權勢の爭奪を事とするのが困るのである。理窟より何よりも、現に東京市政に於ける過去の事實が之を證明して居るのは、從來大疑獄の醸されたのは、いつも、國の大政黨が市政を壟斷した時であつて、明治三十三年の疑獄は政友會系統の郡市懇話會全盛期に起り、大正九年の疑獄は又政友系の所謂常盤會の後身公和會が勢威を振うた時であり、而して今回の事件は民政黨(憲政會)を背景とする革新會の壓倒的勢力時代に胚胎して居る。而して、一大政黨の勢力がかく露骨に表はれなかつた時、即ち政黨的色彩の稀薄な數派が聯結して勢力均衡を保つて居た時代、或は中立を標榜した團體が中堅勢力であつた時代は、市政上稍小康を得た時である。殊に從來、市會に既成政黨が割込むで來る場合、人をして不快を感ぜしむる事は、堂々正面から自己の政黨の名乘を上げる事を爲さず、其の時々に改名する何々會と言ふ名稱を冠してカムフラージを試み、責任の所在を昧ますのである。若し定見を以て政黨が市政に進出しようとするならば、宜しく例へば無産黨が爲す如く、一つ名前で押し通ほす可きである。何にせよ、玆に起る可き愛市運動には、過去の業績に鑑みて、暫く既成政黨は御免を蒙り度いのである。

三

以上は當面の問題に處して現下の制度範圍内に於て試みらるべき方策の略說であるが、更に進むで、現在の制度そのものを改廢して市會の改善を策する餘地は無いかを檢討し度い。元來制度は末で、人が本である事は解り切つた道理であるから、市政肅正の手段として制度改正に俟つ部分は案外少いかも知れ無いが、然し現在の事實を事實と見て、それに卽した適當な組織を考へて見るのも此際決して無駄ではあるまい。

制度上、市會改善の一案としては、市會議員定員數減少の提議がある。是を市政改善の一手段として居る國はアメリカである。同國では長年市政の弊害に懲りて、都市に依ては今全く市會をやめて、其の代り、會社の重役會に似て居る市委員會制度、市支配人制度を建て、直接市民のレフエレンダムやリコールに依る監督の下に、平生は市支配人若くは精々五人か七人の委員に、市務の一切を任せ切つてゐるのであるが、其處迄思切て行かぬ處でも、議員の定員を減少して、稍同樣の目的を達しようとする傾向がある。

今同國の人口三十萬以上の都市

十四に就て見るに、一九〇五年には合計七百五十一名であつたのが、一九二六年には三百三十三名即ち四割四分に激減して居る。今では人口三十萬以上の都市で、紐育（七三人）シカゴ（五〇人）プロヴィデンス（四〇人）の三市を除けば三十人以上の市會議員を有する都市は一つもない。費府（フィラデルフィア）の如き現在の人口は略ぼ東京に近いが、市議の數は二十人である。人數を少くし、責任の歸する所を明にし、而して其の質を善くする。是も確に一つの方策である。但し數を少くしても、依然として質が惡ければ、却て相互結託の機會を容易ならしむる虞が殖える譯であるが、心理的原因から言うて、どうも數を少くする方が善い人を得易い氣がする。過般東京市政調査會で、都下の識者階級千五百人から市政改善意見を集めた時も、此の市議定員減少の項には賛成者多く、總意見數の六割七分を占めて居た。此の市議定員減少は市政腐敗防止と言ふ事以外の理由からも相當是正せられる。現在東京の市議定員は八十八名であるが、將來都制でも實現して都市計劃區域内の町村が皆市域に編入せらるゝ曉には、市議定員が百何十名になり群集心理に依る喧騷の府となる虞ある事をも考へて置かねばならない。序に此の議員の定數を減少すると言ふ思想は、根本の普選の精神とは決して背馳し無い。選擧權が普く行渡つて居る事が主眼であつて、其の基礎の上になら、選出する議員の數を何人に増減するかと言ふ事は、主義の問題よりも寧ろ便宜の問題に屬す可きであらう。

又た考へられる事は、兎に角現在の市會に手取り早く善い議員を送り込む爲めに、デモクラシ
外に、特別選出の一定數議員を作り、優良の材有りき人
法が無いかと言ふ問題である。正直な話、現在立派な人は、選擧に澤山な金を費して迄も市議になり度いとは思はない。それが惡いのだと批難をして見ても、實際出て來ないのだから仕方が無い。其處で金を使つたり、面倒をしなくても、此方の方から御依頼して盡力して貰ふ樣な人を得る爲に、何かの方法が無いかと言ふのが要點である。第一案は、一部の員數を職能代表主義に準じ、市民生活に關係深き種々の團體より代表者を推薦せしめ、是等を地域制の一般選擧に依る議員と共に市會を組織せしむるのである。其の團體とは例へば、商業組合、商工會議所、勞働團體、學術協會、等である。啻だ是には多少の實行難が殊に團體の選擇標準に關聯して伴ふ。そこで第二案は、英國の市會に於けるオルダーメンの制度を參酌する事である。オルダーメンは俗に市參事會員と譯せられて居るが、吾國や獨逸の市參事會員とは全然其の性質を異にし、寧ろ長老市會議員と稱す可きであらう。一般市會議員定員數の三分の一を以て此の長老市會議員の定員とし、一般市會議員が之を選擧するのである。此の長老市會議員等は別に上院を構成する譯では無く、一般市會議員と相合して市會を組織するのであつて、其の權限は全く同等である。但だ其の選出方法と、任期が一般の三年なるに對して六年である丈けが違ふのである。此の制度に依つて英國の市會は市政に長年經驗ある識者人格者を包含し、其の信用と權威

とに益々光彩あらしめて居る。東京の市會に此の制度を採用する場合、論者或は言ふであらう。それは姑息な話で、元來市會議員の素質の悪い以上は、夫等の選出する者に碌な者は出まいと。然し、一定の小人數を市會で選出する場合には、社會の注意も自ら其處に集るから、一二の例外はあるかも知れぬが、大體さう飛んでも無い者は選擧されまい。

何れにせよ、何かの方法で、假令一小部分にもせよ、新鮮な清潔な分子を市會に送り度い。而して此の新規の一小部分と、在來市會內に潜むで居る一部の善良分子（彼等の名譽の爲に言ひ度い、其の或者は清廉潔白であり、更に或者は練達堪能な點に於て官吏上りの理事者に優るものがある）とが內外呼應すれば、相當の改革は遂げられるであらう。

市議に收賄沙汰が起るのも、一つは選擧に費用が澤山懸る爲め、投資額の回收を試みんとする考が出るからだ。清廉有爲の人物が進むで市議の候補になる事を躊躇するのも、畢竟選擧に金が要るからである。故に選擧に金の要らないやうに、凡て選擧公營にして、運動費も公費支辨にせよと言ふ無產黨の人々の主張も傾聽に値する。但だ問題は實行方法だ。

四

市長の問題に移る。市長が强ければ、市會の腐敗を相當喰留める事が出來る。今迄市會に大疑獄の起た時は、大抵市長の弱かつた時だ。

市長を强くする必要がある。法制上にも、實際上にも。

前述の東京市政調査會の質問書に對する回答中にも、市長の權限擴張と言ふ項に贊成者の數は多く、全回答の六割五分を占めて居た。現在の市會の混濁と橫暴とに直面して、輿論は、市長を大に信用すると言ふ意味よりも、寧ろ市會を不信任すると言ふ意味に於て、期せずして市長權限擴張に人氣が集つたのであらうと思ふ。然らば、法制上、現在市長の權限は如何に小さきものであり、如何なる點が擴張されねばならないか。

日本の市制は歐洲大陸の制度に倣うて作られたものであつて、市長の權限はさう縮少されたものでは無い。米國の市長に比しては權限弱きも、英國の市長の單に一個の社交的裝飾たるに過ぎず殆ど何等實權を有して居らぬのに較べては霄壤の差異がある。殊に當初は獨逸の市參事會制度を採用して、之を執行機關として居たのを、後に革めて市參事會を單なる議決機關とし、其の權限全部を擧げて市長に歸屬せしめたから、今日では日本の市長は完全に執行權を收め、廣汎なる吏員の任免權を有する點に於て、如何なる國の市長にも優り、又市會に對しては、市制九十條の規定に依り、市會の議決が越權、違法、又は公益を害し、若は收支に關し不適當と認むる時は、之を再議に附し、再議に附するも猶は市會議決を改めざる時は、府縣參事會の裁決を請

ひ、結局內務大臣に迄訴願する事を得るのである。故に法制上から見れば、市長の地位は相當に強いのである。然し、事實に於ては如何。市制第九十條の市長の再議請求權の如き、內務省の調に依ると、規定はあつても、之を適用行使した實例は、前述の市會解散の或る場合に其の前行事實として行使された事がある外、一回も未だ無いさうである。即ち法は市長に再議請求權を認めて居るが、事實に於て市長は之を行使しないのである。又吏員の任免權の如きも、法は全然之を市長の自由裁量に任してあるに拘らず、事實は、他方から（敢て市會議員のみとは言はず）色々の差圖に依て、行はるゝ實情である。又日本の市會は發案權を持つて居ない。市長が完全な發案權を具有し乍ら、然かも實際之を行使する場合には右顧左眄せざるを得無い。勿論例外の場合はあるが、大體之が今日市政の通勢であつて、東京の場合は特に之が眼立つのである。故に問題の主眼は法制上よりも寧ろ事實上に存するのである。

然らば如何なる事實が市長を弱くさせるか。

第一、市會議員に公共政治の意味が體得されぬ爲め、市會から選出する市長を、自分達が抱へて居る雇人のやうに思ふ事。東京で聲望閲歷ある人物を市長に迎へる時、初めは御頼み申してなつて貰ふ場合もあるが、暫く經てば、否就任承諾の其の時から、徐々主人顏が顯れて來るのである。

市政は專門家の技術に俟つものが極めて多い。優秀なる專門家と常識ある素人、是が旨く結び付く處に市政の成功が其の好適例である。市長其の他高級吏員は全くの專門家で、之を市會が禮を厚うして招聘するのである。而して之を長く留らしめて自由の手腕を振はしむるのである。大阪市の如きやゝ此の風がある。然るに東京市では此の點に遺憾が多い。或者は三百代言的の言辭を弄して理事者の揚足を取り、或者は殆ど毎日市役所の事務室に出入して、高壓的な態度で請負人の代辯をなし人事の取次をなす。それが聽かれ無い時は江戸の仇を長崎で打つ。かく毎日市役所に出入する者は、大抵定收入無き無職業者、若くは之に準ずる輩が多數で、強ひて言へば市役所に出入する事が一の職業である。是程甚だしく無い者でも、市會そのものゝ權限と、市議一個の權利とを混同して、市理事者を私有物視する習慣、之が革まらぬ內は、市長及び其の吏僚は自由な手腕を揮ふ事が出來ぬ。

第二、市自身の國家に對する自治權が充分で無い爲めに、自然それが自治體の代表者たる市長の地位に響いて、結局市會議員に對しても睨みが利か無くなる。市長が腰を据ゑて市議に對して見やうとしても、踏まへて立つ確りした大盤石が脚下に無いのである。それは、市の自治權が充分擴充されて居ない爲めに、少し大きな事は皆國でやつて貰ふか、國の諒解を得なければならぬが、其の交渉の任に當るのは市長。所が、國は仲々市長の言ふ通りにはなつて吳れぬ。若し政黨關係が反對の場合などには、諒解所か飛んでも無い祟りを喰ふ。國が認

可し、國が補助し、國が承認して呉れ無い以上は、何事も出來ぬ今日の市に在ては、時の政府に拒否された時、市長の立場は無いのであつて、一方いくら對市會の市長の權限を固持して市議に強硬に出て見た處が、直ぐ眼の前で監督官廳に抑さへられて、市の計劃遂行を阻まられる光景を見せ付けるのだから、彼等に對して睨の利く筈は無い。此處に市長の弱味がある。勢ひ、市長は時の內閣と諒解のある事を必要とするが、かうなると、今度は所謂與黨の喰物になる。殊に今日の市長は其の與黨の首領と言ふ譯で無いから、樣々の要求に對して押さへが一向利か無い。何方にしても、市長たるものゝ地位は困しいのである。故に若し權限の擴張を言へば、對市會市長の權限もさる事乍ら、市自身の自治權を擴張する事、殊に財政の獨立權を確保する事が何より大切である。是は東京のやうな世帶の大きな、將來爲す可き仕事の多いにも拘らず、今では田舍の小都市と同程度丈けしかの財政權を容されて居らぬ所に一層必要である。試に思へ、東京の世帶一年に二億五六千萬圓中、一般會計が九千何百萬圓の中、租稅收入は僅に千九百萬圓であるが、此の大部分（八割三分）は附加稅であつて、其の賦課率は法の制限を受け、今日では何れも法定制限一杯課稅して居るので、如何とも伸縮力が無いのである。殊に駭く可き事は、最も都市改良事業に關係深く、該事業に依て地價昂騰の利益を受ける東京市內の土地に對して、制度上の制限ある故に、今日では僅に百萬圓しか稅が掛けられぬのである。今後市として爲す可き仕事は、築港、第二期下水工事、高速度鐵道建設、水道擴張、山手街路網完成等、等、何れも巨額の費用を要するのであるが、其の公債計劃は今日許されて居る財源では如何に處理する事が出來るか。かの、大震災復興關係の借金すら、順當に行けば來年度から年々一千三四百萬圓の元利償還を要すと言ふのである。此の內、政府に對しては過日年々七八百萬圓の分を助辨して呉れと嘆願して居る仕末であるが、假令之が容れられたとて、今日の財政權では今後の遣り繰困難であつて、從て何につけかにつけ、政府に依賴しなくては立て行く事が出來ぬのである。財政以外の方面でも亦然りで、萬事、官廳の認可補助に俟たねば手も足も出ない。なまじ東京が大世帶丈けに、引懸かる方面が多いのである。故に早く都制の實現と共に、市自身の自治權を擴充する事は、行政能率の爲めにも、延いては市長夫自身の地位を鞏固にする爲にも必要であるが、玆にデイレンマに掛るのは、そんなに自治權が欲しければ、先づ自治の出來る丈けの資格を整へろと言はれると、現在の東京市としては一言も無いのである。

第三、市長の仕事がやり辛い事情は以上の通りであるが、然かし結局問題は人に在るので、若し市長其の人が、強い人で、條理のある事ならば、如何にやり辛い事情があつても、遣り通す意氣があらば、或程度迄志を貫く事が出來る。地方の小都市には却て稀にかう言ふ人を見受けるが、東京は舞臺が大きい丈けに、未だかう言ふ蠻勇の市長を見ない。今[illegible]の成案を提げて市會に臨み、市會之に應ぜざれば之を再議

に付し、更に自ら陣頭に立て、直接民衆に呼び掛ける勇者は無きか。過般の西久保市長最後の遣り方は、稍々之に類して居た。然かし問題が自己の進退で、具體的な市政の抱負で無かつたから、話が小さく、響が薄かつたのだ。

但し、右の様な市長は結局辭職しなければなるまい。故に仕事をやり通ほす事は出來ない。但だ市民を覺醒する教育的効果がある丈けだ。然し教育的効果丈けでも大きな功績であらう。

非常の時には、非常の人物が要る。此の頽敗混濁極まり無き東京市政に直面して、吾人の要求する所は、市長たる人の強き人格だ。

五

上來述べ來る所に依て、市長の地位權限を強うするは、寧ろ、市全體の自治權を増大する事に依て目的を達す可く、市會に對して市長の權限を、今よりも更に擴張する餘地は、案外少いかに見受けられる。市長が少し强く出るならば、現在の制度が與へて居る權限を精一杯に行ふならば、相當の事は出來るのである。遮莫、制度上更に對市會關係に於て市長の地位を強くする途が、全然考察されぬでも無い。又考察する事が必要でもある。

現下の腐狀に憤慨して、帝都に官選市長を置く可しと論ずる一部の士がある。保守的官僚風の人のみならず、新しき民衆論者の間にすら是が唱へられて居る。其の心持には同情するが、今更パリの眞似でもあるまいと思はれる。第一誰が今日中央政府の公平を保障し得るか。黨弊が露骨に市政に這入込む點に於て、中央政府の代官を市の代表者とするに忍び無い。

市長公選說がある。市公民より直ちに選擧すると言ふ米國風の行き方だ。市長を市會の雇人のやうにさせぬ爲めに、其の選任の根據を直接市民に求めやうと言ふのだ。市會不信任の空氣濃厚の今日に於て、之には共鳴者が相應多い。(前掲東京市政調査會聚集回答中五割八分)市長の地位を强固にし、執行機關を議決機關に全く對立せしむる爲めには、是が善からう。然し、市長は行政の専門家たるを要する今日吾國市制の全體の立前に於て、兎もすれば、所謂煽動政治家(デマゴーグ)が、浮薄な人氣を操て、市長の榮冠を贏ち得る虞がある、此の公選說を、確信以て賛成するには、今少しく考慮を要する。それに、公選の場合には相當の選擧費用を要するが、其の金は一體誰が出す。自分で金を使て市長にならうと思ふ者に碌な人があらうか。若し其の金は政黨が出すと言ふなら、尙ほ考へ物だ。

強ひて法制上の改正を行うて、市長の地位を擁護せんとならば、次の二つの事が考へられる。

第一は、市長の意見が市會の決議と衝突した時、今の市制にある再議請求權の結末を第一次に府縣參事會、第二次に内務大臣に裁決を請ふ事の代りに、一般のレフェレンダムに訴へる事だ。裁判官が内務大臣だと、政黨關係や何かで、事實此所迄訴へて行くのを躊躇する。由

民が救いて吳れるなら、假令負けても本懐だ。今吾國の情態で、一般のレフェレンダムを實施する事には賛成出來兼ねるが、此の場合を限り事項を限つたレフェレンダムなら、還つて弊害は無いと思はる。即ち市長が市會の議決を否なりと認めた時、市長が之を市民に訴ふる時にのみ、レフェレンダムが發動するのである。若し此のレフェレンダムが採用出來ぬなら、次に考察す可きは米國風の議決否認權である。

第二は、行政技術に渉る事であるが、今の市制で市會の要決事項になつて居るものゝ内で、比較的重要でないもの、例へば使用料手數料の事とか、不動產の管理處分取得の事とかを、全部市長に任せて仕舞ふのである。

かゝる些細な事務的權限委讓は、大きな市政腐敗防止と直接關係が無いやうに見えるが、實はこれ等が一々市會の權限である爲め、常に色々の細かい問題で、理事者を市會が取り押さへる事が出來る。從て是を槓杆として、他の事柄に就て種々な要望を試み、是が容れられぬ時は、復仇を試み得る機會が數限りなく市議に持つ譯である。而してかゝる細かな問題であると、理事者の眼も一々届き兼ねるから、揚げ足を取られ易い。そこで先づ平生から機嫌を買うて置いて、突込まれぬ樣にと努める。玆に弊害が生じて來るのである。

六

以上、事實上に、法制上に、市長の地位權限を强くする道を講じたが、元來諒解と協力を經緯として和合一體となる可き自治政に於て、理事者を議決機關に對峙せしめて、兩者恰も敵者なるが如くに權限の消長を論ずるは、小乘の道であつて、かの英國の如く、市長は一種の飾り物に過ぎず、議決、執行、の權擧げて市會に存し、名實共に市會中心主義となるのが、恐くは自治の大乘であらう。然し悲哉今日の政治道德、社會習慣に於て、市長を强うすると言ふ一種の米國主義も、時弊を匡救する上に於て亦已むを得ないであらうか。（昭和三、一〇、七）

無産政黨合同問題の進展

山川均

(一) 合同問題は進展したか？

無產政黨合同問題は、最近再び、無產者運動の前景に現はれた。合同問題は、もはや『議論の時代を過ぎて實行の時期に入つた』といふ聲を聞く。これは或る意味では、たしかに事實である。たとへば、最近における合同問題の再燃に對して、右翼をもつて自任する一機關紙は、『統一戰線の空太鼓』といふ批評を下だしてゐる。けれども、もし右翼主義者の耳に、合同の要求が空太鼓と響いたなら、この聽覺は明らかに裏切られてゐる。なぜならば、この時から一ヶ月を出でないうちに、右翼をもつて自任する政黨の主要な支持團體は、合同運動へのむしろ程度の進出を決議したからである。これは合同問題に對しては、むしろその耳をふさいでゐた右翼の陣營においても、もはやこの『空太鼓』に對してすら、何らかの反應を起さゞるを得なくなつたことを證據だてゝゐる。

同一の現象は、その反對極——所謂『極左主義』の陣營——にも現はれてゐる。かつては極左主義者によつて指揮せられた舊勞農黨の内部においては、合同論は最も憎むべき異端として、最悪の危險思想として、極度の鎮壓を蒙つてゐた。そしてこれが舊勞農黨のいはゆる『輝やける指導精神』であつた。しかるに今日、この輝やける指導精神の正統の相續人をもつて任ずる人々は、最も大きな聲で『即時無條件合同』を叫んでゐる人々である。現に最近、舊勞農黨の内部において、その合同論のために異端者、裏切り者、反逆者として遇せられてゐた人々をも含んだ無產大衆黨が樹立せらるゝや、當時の合同論の撲堅者にして輝やける指導精神の相續者らは、最大級の言葉をもつてこの新政黨の誕生を呪ひ、その『粉砕』を公然と誓つてゐる。そしてその理由は、新政黨の出現は、彼らが日勞黨との間に考へてゐる『即時無條件合同の計畫』の妨げとなるといふことにある！

かように、自ら『右翼』をもつて任じてゐる陣營の間においても、また舊勞農黨の『輝やける指導精神』を繼承する『極左主義者』の間においても、統一と合同と[illegible]必要であると

いふことについては、もはや『議論の時期は過ぎ去つた』といふことができる。

しからば『實行の時期に入つた』といふ無產政黨の合同は、具體的には、果してどれだけの進捗を見たらうか。或る批評家は、無產政黨合同の必要が、原則的には承認せられつゝ、合同が直ちに實現されぬのを見て、合同の『掛け聲』を無產政黨の『年中行事』の一つとして嘲つてゐる。この嘲笑にも、多少の理由がある。合同の必要が痛感せられてゐるにもかゝはらず、最近における無產大衆黨と三地方政黨との合同を除いては、戰線は依然として四分五裂のうちにある。のみならず、合同の實現の前には、依然として、幾多の難關が横はつてゐる。少なくとも、無產政黨の合同問題が、『議論の時代から實行の時期に入つた』といふことは、合同の實現を樂觀してよいといふ意味に解するなら、明らかに誤つてゐる。

それにもかゝはらず、現在の時期は、分裂を指して進んでゐるか合同を指して進んでゐるかと問ふならば、私は躊躇なく、後者であると答へることができる。合同の主張は、無產政黨の分裂した直後から、既に起つてゐた。けれども分裂の過程は、合同の主張を打ち破りつゝ進行した。今日はどうだらう？今日は、ひとり分裂主義的な理論と主張ではなくて、理論と主張よりもさらに有力な分裂の事實が、全運動の到るところに蹲まつてゐる。それにもかゝはらず、統一と合同への新しい作用が特徵的な傾向となつて、徐々にこの事實を掘り崩してゐる。今日は、もはや合同を論議する時代が過ぎたといふことは、分裂の作用が合同論と戰ひつゝ進行した時期から、合同への作用が、分裂の事實と戰ひつゝ進行する時期に推移したといふ意味においてのみ、眞實であるといふことができる。

この作用は、いま吾々の前に、合同運動の新たな形勢を展開した。合同問題はその出發點から、今どこまで進んで來たか、そして今後における希望と困難とが、どの點にあるかを明らかにするためには、この新形勢のうちには、いかなる諸要素が働らいてゐるかを見なければならぬ。

（二）合同問題と無產大衆黨

合同運動の最近の機運は、直接には、無產大衆黨の出現によつて促がされたものであつた。それと同時に、戰線統一への機運の動きが、無產大衆黨を生み出したといふことも、同じく事實である。無產大衆黨の出現の意義が、並立してゐる無產政黨の間に、さらにもう一つの無產政黨を加へたことにすぎなかつたなら、この新政黨の出現は、合同運動の上に、かような影響を與へ得なかつたに違ひない。

無產大衆黨の出現が、合同運動の上に異常の衝動を引き起した第一の理由は、日勞黨が謂ゆる『宗派的分裂主義者』によつて完全に支配せられてゐた當時から、その內部にあつてこの指導と對立し、その分裂の理論に對して合同論を主張し來つた要素が、日勞黨の傳統を過

承した要素（新黨組織準備會）から、たゞに思想的にばかりでなく、組織的に明白に分離して、別個の政黨を組織するにいたつたものだといふ點にある。これは舊勞農黨の傳統を維持する人々から見れば、いふまでもなく、『輝やける指導精神』に對する反逆であつた。けれどもこの『輝やける指導精神』をもつて、謂ゆる『宗派主義』と『分裂主義』と病的な極左主義以外の何ものでもないと見る人々からすれば、無產大衆黨の出現は、舊勞農黨の內部において、これらの宗派主義、分裂主義、等々を清算しようとする努力と作用とが、（主として舊勞農黨の解散のために）別個の政黨たる形を取つて進展したものにほかならぬ。從つて無產大衆黨の出現は、彈壓によつて破碎せられた舊勞農黨の大衆が、再び組織せられたといふばかりでなく、この再組織の過程そのものが、舊勞農黨の指導精神——宗派主義、分裂主義、等々——の清算の過程を意味してをり、從つてまた、それは戰線統一と合同への作用の進行を意味してゐる。そしてこゝにこの新政黨の出現が、合同運動の上に、異常な刺戟を與へた理由がある。

第二の理由は、この新政黨は、たゞに舊勞農黨ばかりでなく、すべての既成無產政黨によつて吸收せられてゐなかつた全く新しい要素を獲得する可能性をもつてゐたことである。これは或る程度までは、すでに實現せられてをり、現に或る支部では、黨員の約七割が、全く新たな要素から成ると云はれてゐる。無產大衆黨が、既成無產政黨の影響外に在る新要素を獲得すればするほど、合同の作用のうちに、これが推進する新しい要素を參加せしめることゝ、たゞ

第三の理由は、この新生の政黨が、特に合同問題の解決をもつて、その存在の重要な一理由としてゐることである。無產大衆黨はその宣言の示すが如く、大衆の日常政治鬪爭の組織であつて、合同のための單なる手段でないことは無論であるが、それと同時に、この新政黨の合同問題に對する關係は、たゞ單に合同のために努力するといふ關係以上の、或る關係をもつてゐる。すなはちその宣言に、合同問題の解決をもつて、別個の一新政黨を組織する主要な理由の一つとしてゐるからである。

無產大衆黨の樹立は、畢竟、舊勞農黨の內部における反宗派主義的分子が、たゞ日勞黨と合同するための單なる手續にすぎないと見る觀察がある。そしてこの觀察においても、謂ゆる右翼主義者と謂ゆる極左主義者とは、精密に一致してゐるのである。そしてこれが無產大衆黨に對する右翼主義者の疑惑の一理由であり、無產大衆黨に對する極左主義者の『排擊』の主要な理由となつてゐる。かゝる見解の特質は、一般には無產者運動の發展、特別には合同への作用が、無產大衆黨の出現を止むべからざるものとした、謂ゆる『內的發展』を理解することができないか、若くはこれに對して、ことさらに目を掩うてゐることにある。

合同問題に對する無產大衆黨の根本態度は、（一）無產政黨の本質およびその任務を、本來の意味での大衆的黨、すなはち[illegible]

的利害を代表する黨と見做すこと、現在の合法的な無産諸政黨の間に、本質的な相異を認めぬこと、從つて（二）合同は、左翼的の合同ないしは右翼的の合同ではなくて、全無産政黨の合同を目標とすること、それと同時に（三）全體的な合同への行程となる限りにおいては、部分的な合同をも積極的に促進すること（これは地方政黨との合同によつても實現された）、たゞし（四）部分的な合同は、全體的な合同の考慮においてのみ、即ち、全體的な合同を促進する場合にのみ行ふことである（創立宣言、合同大會宣言、その他）。

かゝる目標が忠實にかつ有効に追求せられる限り、無産大衆黨は全證として、無條件的に、戰線の統一と合同とに向つて働らく要素として計上することができる。從つてその出現と、その影響力の擴大とは、合同への勢力の増大を意味してゐる。

（三）合同問題と社會民衆黨

四月六日の農民組合合同協議會において、日本農民黨の一身同體たる全日本農民組合同盟は、農民組合合同の條件として、都市無産者の政黨に對して農民の獨立した政黨の組織を主張し、遂に合同協議會を去つた。爾來、日本農民黨は公式には、全く合同運動の圏外に離れた觀がある。都市無産者と農村無産者との結合は、日本農民黨を除くすべての黨において、疑問の餘地なきものとして承認せられてをり、すべての黨は、この原則の上に組織せられてゐる。從つて、日本農民黨が、その謂ゆる『農民は農民黨へ』を原則的に固持する限りは、日本農民黨はその他の無産諸政黨と本質的に異つた方向を指すものであつて、合同はもとより問題となり得ない。日本農民黨の支持大衆が、『農民の獨立の黨』を必ずしも原則的に信じてゐるものでないことは疑ひがないが、少なくとも、黨としての公式の態度には、その後何らの變化を見ぬ。私はこゝには、日本農民黨の内外の形勢が、再び同黨をして、合同運動の圏内に現はれしめることを希望するにとゞめておく。

合同に對する社會民衆黨の態度は、少なくとも公式には、過去十ケ月間に著しい變化がない。昨年十一月の、日勞黨による合同會議の提唱に對しては、民衆黨は最も懷疑的な態度を取つた。日勞黨の提唱に對する民衆黨の回答は、合同協議會開催の提議に答へることよりも、この回答の機會を、日勞黨そのものゝ内部に對立を惹き起すためのマヌーヴアーに用ひた觀があつた。この提議の前後において、合同問題に對する日勞黨の態度に、多少の動揺を生ぜざるを得なかつた範圍においては、このマヌーヴアーは、その程度の成功を收めたともいふことができる。それと同時に日勞黨そのものゝ内部には、かゝるマヌーヴアーに感應する作用が伏在してゐることに、大なる注意を拂はねばならぬ。

合同運動に對する民衆黨の懷疑的な態度は、今日も依然として異るところはない。

『我等が、たゞ大義名分一天張りの合同を決行して見たところで、ブ

ルジョア政黨に對する戰鬪力は決して增大しない。否、却つて內部鬪爭を繁くして、鬪爭力を減殺するに至るのである。

『勞働農黨、日勞黨、社會民衆黨、それ〳〵立黨の精神に基いて勇往邁進せよ、左顧右眄するを止めよ、適者生存の原則によつて、最も日本の無產大衆に適應する指導精神の政黨が、結局、主流を成すのである』。（八月二十日『社會民衆新聞』社說）。

『無產黨の合同は、從來、日本勞農黨や勞働農黨らが屢々提唱し、又日常强く之を主張してゐるところであるが、社會民衆黨は時期未だ來らずとし、客觀的狀勢が合同可能にまで立至るを待つといふ態度を以て、專ら右翼勢力を糾合してゐたが……こゝに社會民衆黨は、彼らが事實不可なるが如き無產黨合同論を繰返してゐる間に……我國における右翼の全勢力を完全に黨の下に糾合したのである。』（同日『社會民衆新聞』）。

『……我等は現在の戰線を正しく見ることによつて、戰線の統一は、先づ傾向を同じうする組合又は政黨の間においてのみ可能であるといふことを知ると同時に、强く之を主張するものである』。（同上）

以上の僅かな引用によつても、合同に對する民衆黨の見解と態度の上には、**最近十ケ月の間に、ほとんど何らの變化を生じてをらぬこと**を窺ひ知ることができる。

かように民衆黨といへども、戰線の統一そのものに反對すべき理由を持たないが、しかもこの統一は、政黨の場合ばかりでなく、組合の場合にも）同一の『指導精神』の下に、『指導精神』を同じくする要請間にのみ行はるべきものである。この見解の根柢は、無產政黨をもつて、無產大衆の日常當面の現實な政治的利害の一致を結合の基礎とするところの、日常政治鬪爭の組織と見ないで、或る一定の指導的原理を結合の基礎とする組織と見ることにある。この點においては、民衆黨の見解は、謂ゆる『宗派的分裂主義』の下における勞働農黨の見解と、本質的に一致するものである。無產政黨に對してかような見解を取る限りは、勞働農黨の指導精神が勞働農黨に取つて『輝ける指導精神』であつたように、民衆黨の指導精神は、民衆黨に取つては『輝やける指導精神』でなければならぬ。いなこの見解に從へば、すべての無產政黨は、おの〳〵異つた色彩をもつて輝やくところのそれ〳〵の『輝やける指導精神』を一つづゝ持つべきものなのである。

無產政黨の本質に對する、かような見解の上に立つて理解せられた合同は、ひとり自黨の指導精神によつて、對立政黨の指導精神を（直接にせよ間接的な意味にせよ）克服することによつてのみ實現することができる。たゞ異るところは、勞働農黨の見解によれば、この克服の過程は、**對立政黨の指導精神に對する『暴露』、『排擊』、『大衆の奪取』等々によつて行はれ、社會民衆黨にあつては、『適者生存の原則』によつて**、即ち、間接的な生存競爭を通じて行はれる。勞働農黨にあつては、交叉的に行はれ、民衆黨にあつては、並行線的に進行する。勞働農黨にあつては、對立政黨に働らきかけることによつて行はれ、

民衆黨にあつては、おの〳〵の對立政黨がそれ〳〵立黨の根本精神に基づいて、左顧右眄することなく、勇往邁進する」ことによつて行はれる。さらに言ひ換へれば、勞働農民黨にあつては、いはゆる暴露戰術としての「共同闘爭」によつて行はれ、民衆黨にあつては、對立政黨間の「フエヤ・プレー」によつて行はれる。

無産政黨の性質に對するかくの如き見解の上に立つ限りは、合同を積極的に主張すると、または合同に對して消極的懷疑的な態度を取るとに拘らず、左翼的には左翼政黨主義となり、右翼的には右翼政黨主義となる。社會民衆黨が謂ゆる右翼政黨のみの合同を積極的に主張し、少なくとも合同を、右翼政黨から始めようとすることは、寧ろかような見解の當然の結論であつて、均しくこの見解の上に立ちつゝ『全べての政黨の合同』を主張した勞働農民黨のそれよりも（マヌーヴアーとしての合同の主張はしばらく別として）遙かに首尾一貫してゐると云はなければならぬ！

そこで社會民衆黨が、無産政黨に對するかような根本見解の上に立つ限りは、民衆黨に取つて問題となり得る合同は、第一には、海軍勞働者關係の地方政黨との合同であり、第二には、日勞黨の分裂によつてその一部分と合同することであつて、これ以外の合同問題は、すべて實現の可能のない、或は實現せしめてはならないものであつて、それは民衆黨の耳には、當然にも、『戰線統一の空太鼓』（日本民衆新聞）以外の音響を與へることはできぬ。

かように合同に對する社會民衆黨の態度は、昨年十一月以來──或はむしろその立黨以來──ほとんど變化も動搖もない。從つて民衆黨の關するかぎり、合同問題は何等の發展をもしなかつたかのようである。けれども民衆黨の公式な態度に何らの變化の生じてゐないことは、その内部的な意見においても、何らの進展を見なかつたことを意味するものではない。現に民衆黨の主要々素たる勞働總同盟大阪聯合會が、四月八日の大會において、無産政黨合同問題を最も重大な問題として討議に上ぼし、『極左の福本一派の運動が過失なりしことを認めると同時に、一方、極右の反階級的なるを思ひ、この意をふくんで合同せんとするものなり』と決議し、これに先だつ金屬勞働組合大會においても、無産政黨の『即時無條件合同』の提案が、最も活潑な討議の主題となつたことが、これを證據だてゝゐる。七月十七日、大阪に開かれた勞働總同盟中央委員會は、『無産政黨合同の問題は、現下の狀勢に鑑み、時期尚至らざるものと認め、之は愼重に考慮すること』といふ決議をしたが、當時、合同に反對する關東側の中央委員は、合同論者とその組合の除名の決意をもつて、この中央委員會に臨んだとさへも傳へられてゐる。これは總同盟内部における合同論の力が、なほ薄弱なことを物語つてゐると同時に、急速に生長し擴大する危險（反對側から見ての）が感ぜられてゐることをも證據だてゝゐる。野田の一大勢力を失つた總同盟にとつては、大阪はその絶對的な中心勢力であつて、しかも關西聯合會の中心勢力と目せられる金屬勞働と合

同組合から、即時無條件合同主張の聲があげられてゐることは、注意に値ひする。かやうに勞働總同盟の內部に起こつた左翼的勢力は、今はなほ生長の途上にあるものではあるが、經濟上政治上の戰線統一を迫る一般情勢と、合同の方向に動く外部的勢力の作用と相俟つて、この左翼的勢力の擡頭とその成熟とは、今後における合同問題の進展の上に、重要な役割を演ずるにちがひない。

（四）合同問題と日本勞農黨の態度

日本勞農黨を構成する主要な分子は、かつては勞農黨樹立の當時にあつては、その內部において、謂ゆる右翼主義者と對立しつゝ（當時の用語に從へば）「左翼小兒病者」に對しては、右翼主義者と共に對立してをつた。勞農黨が分裂すると、謂ゆる『左翼小兒病者』に對する共通の對立によつて右翼とつながつてゐた日勞黨分子は、この紐帶を失つたゝめに、右翼と袂を分つて別個の政黨を組織した。かやうに創立當時の日勞黨のうちには、分裂前の勞農黨のうちから、より意識化した左右を取り去つたところの、種々なる意識の段階にある要素を包容してをつた。これは勢ひ日勞黨の內容を、比較的に（たゞ比較的にであるㇾ純一ならざるものとした。そしてこれはまた、日勞黨の行動を制肘する大なる弱點であつた。そして合同問題に對する日勞黨の態度が、多少の動搖を免れなかつたのも、主としてこの事實に基づいてゐる。從つて、その後の二十ヶ月間における、組織としての發展と、實際の鬪爭とによつて、その內容がより純一となるに從つて、合同問題に對する日勞黨の態度も、また漸次に明確を加へたといふことができる。（この弱點が、今日もなほ全く除去せられてゐないことは否まれぬ）。

勞農黨の分裂の直後、日本農民組合は、『合同後の黨は右翼たる社會民衆黨及び日本農民黨と飽くまで戰ふこと、極左小兒病を排除すること』を主要な條件として、勞農、日勞兩黨の合同を提議したが、この提議は、兩黨によつて斥ぞけられた。日勞黨がこの提議を斥ぞけた理由は、『我等は單一無產政黨の結成に對しては十分の誠意を有するも、我等が別に日本勞農黨を結黨したる精神は斷じて滅却するを得ず、故に勞働農民黨が、自ら黨內の左翼小兒病を排除整理して來らざる限り、しかして整理後の勞働農民黨が、我が日本勞農黨の立黨の精神と全然同一なるを認むるに至るまでは、斷じて合同せず』といふにあつた。

この時、日勞黨があくまで固守しようとした『立黨の精神』なるものが、勞農黨の謂ゆる『輝やける指導精神』の一種に屬するものであつたか否かは明らかでない。けれども創立宣言その他によつて見ると、これは恐らくは一定の明確な指導理論といふよりも、『理論を以て現實を律せんとする小兒病的左翼』と、『左翼排撃に狂奔して大勢に反動して行く右翼』との實踐を清算する要求であつた。

一年後の十一月（昭和二年）、勞農黨は、謂ゆる『指導精神にこだわらず、全く單一の無產政黨の合同を提議し、これに對して日勞黨は否

黨に對して、『宗派的分裂主義、所謂福本主義及び同主義者の徹底的排除を單一絕對條件として、五名づゝの黨代表者を擧げて無產政黨統一協議會を組織する』提議をした。

これより先き、日勞黨中央執行委員會は、來るべき大會において、各無產政黨合同協議會の提唱を決議する準備をとゝのへ、勞農黨の提唱に先きだつて、すでにその具體的な成案に達してゐたと傳へられてゐる。そしてこの事實が、『舊勞農黨の提唱を促がした直接の動機であつたといふ說さへもあるのみならず、大會に附議せらるべき日勞黨の合同提唱は、少なくとも合同協議會の開催には、何らの條件を附けないものであつて、即ち無條件的に合同の商議に入らんとするものであつた。しかるに先き廻りした勞農黨の提唱に遭うて、日勞黨は『宗派的分裂主義の徹底排除』を條件とする協議會の提議に逆轉した。この動搖は、對外的な必要のためであつたと同時に、恐らくは、對內的な必要に迫られたものであつた。

つゞいて開かれた日勞黨大會は、『宗派的分裂主義排除』の意義を一そう明確にすると同時に、これを條件として合同協議に入ろことをもつて、合同問題に對する黨の態度とした。

しかしながらこの決定は、合同問題に對する新しい態度といふよりも、むしろ日本農民組合の合同提議に對する前年の聲明書と、究極においては同一のものであつた。『極左小兒病』は『宗派的分裂主義』となつて、一そう明確な內容を持つには至つたが、これが排除の方法は、勞農黨自身による自己清算であつた。これは如何にも明白に似て、實は極めて曖昧な條件であつて、かゝる不明確な條件にさへぎられてゐる間は、合同の商議に入ることさへも、全く不可能であつた。

四月十日の舊勞農黨禁止の翌日、新形勢によつて『戰線の統一が一そう切實な要求となつた』ことにかんがみ、日勞黨執行委員會は、合同に對する次の如き具體策を決定した。

一、合同は『階級的大衆的統一政黨』の樹立に向つて進むこと。

二、合同後の無產政黨は、日本の實情に鑑み、合法的存在たることを更に表明すること。

三、合同後の無產政黨に於ては、宗派主義を內藏する一切の黨內フラクション運動を禁止すること。

四、合同懇談會は、即時無條件に開催すること。

五、合同後の無產政黨の執行部の形成、組織の具體的問題は、合同懇談會に讓ること。

六、合同懇談會は、各黨から全權を委任せられた代表者五名を以て組織し、必要に應じては、有力な第三者を加へることを得。

しかしながらこの新方針は、單に執行委員會の腹案として發表されたにとゞまり、遂に正式な提議とはならなかつた。この方針の重點は、いふまでもなく、第三項にある。この條件の適否はしばらく別として、合同に對する日勞黨の態度は、この決定によつて遙かに具體的になつたと云ふことができる。そしてこれは又、合同問題一般が、漸

文に具體的な問題として熟しつゝある事實を反映したものとも見ることができる。第二に注意すべきことは、日勞黨の態度が、卽時無條件の合同商議に進んだことである。

三日の後（四月十四日）、日勞黨の主要構成分子たる勞働組合同盟もまた全國大會を開き、合同問題について重要な決議をした。

一、現下の全無產政黨統一に對しては、我等は日本勞農黨の所謂「宗派的分多主義の排除を單一絕對條件とする」ところの「階級的大衆的統一主義」の態度を支持する。

二、現下の狀勢に於いては、この態度は對立せる組織に於いて主張せらるべきでなく、大衆政黨としての組織を無條件に合同することを前提として主張せらるべきである。

三、そのために、全無產政黨合同のための協議會を一日も早く無條件に成立せしめるやう努力すること。……

この決議は、前揭日勞黨の決議と併はせ見るときに、極めて重要な意味を現はしてゐる。すなはち日勞黨側の態度は、いはゆる『宗派的分裂主義』の徹底的な淸算の要求においては、依然として異るところはないが、日勞黨が勞農黨の外部から、勞農黨に對してこれが自己淸算を要求した時代、言葉をかへて云へば、組織の對立を通じて對立政黨內の宗派的分裂主義と闘ふことの必要であつた時代がすでに完了したことを、明白に認めてゐることである。無條件的な合同商議の主要は、その當然の結果であつた。

舊勞農黨解散後、同黨の指導者は、直ちに新勞農黨組織準備會を組織して舊勞農黨の再建に着手し、これがために屢々政府當局者と交渉を重ねたが、その結果は、再建の望みのないことが明らかとなつた。

しかるに舊勞農黨の主要な構成要素であつた日本農民組合は、準備會の勞農黨再建運動に對しては、組合としては全然消極的な態度を取り、極左主義者の反對的な牽制運動を突破して、日勞黨の主要構成要素たる全日本農民組合との合同を決行し、新全國團體は、政黨加入を組合員の自由問題とした。これはいふまでもなく、準備會の勞農再建運動に取つては、大なる打擊であつた。

五月十九日、新黨準備會は、勞農黨再建の方針を棄てゝ、日勞黨に對して、日勞黨と新黨準備會との合同を提議したが、日勞黨に新黨準備會は、（一）舊勞農黨大衆のどれだけを代表してゐるか不明であり、同時にそれはまだ（二）合法政黨ではないといふ理由をもつて商議を拒絕した。

六月三日、準備會側は重ねて同一の提議を試みたが、日勞黨は『全國的合同にしろ地方的合同にしろ、貴準備會が全國的にか地方的にか結黨した後でなければ、合同協議に入るを得ず』といふ回答をした。

かくて新黨準備會側が、合法的政黨として正式に結黨することが、合同協議の開かるべき重要な條件となつたのである。

さらに合同に對する日勞黨の態度は、八月中に政治硏究教育會の質問に答へた同黨の回答によつても、一そう明確を加へてゐる。

一、無產政黨合同に贊成である。

二、(イ)合同は即時。既に結黨せる合法的政黨に關する限り、合同に關しては無條件である。

三、舊勞農黨方面で結黨せる地方政黨、在來の地方政黨、社會民衆黨、および吾黨を打つて一丸とする一大大衆黨を再建せんとするにある。この中にて贊成の部分のみにても結黨せねばならぬ程に合同は緊急を要すると考へる。等々。

この回答により、日勞黨の合同の主張が、左翼的、ないしは右翼的な合同ではなくて、全無產政黨の無條件的な合同であることが、一そう明確となつた。

(五) 合同問題と舊勞農黨

過去十六ヶ月間における、合同問題に對する舊勞働農民黨の態度は、すべての無產諸政黨のうちで最も特徴的なものであるが、私は雜誌『勞農』の誌上その他において、しばしば批判を試みたから、こゝにはこれが批評を省略し、たゞ新黨準備會に持ち越されたその後の推移を理解する便宜のために、日附順にその變化の大綱をしるすに止どめておく。

(昭和元年十一月十二日)——『勞働農民黨と日本勞農黨との合同に關しては、日本勞農黨の現在の指導方針にして變更されざる限り、絶對に反對す』。(第一回大會決議)。

(昭和二年五月)——『わが黨は、わが黨の光輝ある指導精神に基き、あくまで日勞黨の指導精神を排擊する。』(當時、黨の內外に再び現はれた日勞黨との無條件合同論に對するリーフレット)。

(昭和二年五月十五日)——『わが黨の指導精神は純一であり、それは日勞黨の指導精神に對する對立物である。……わが黨の正しき指導精神と日勞黨の誤れる指導精神との感激の握手を主張するのは、われらとブルジョアジーとの握手を主張するものだ。堺利彥……とその一派を倒すことは、日勞黨の指導精神を克服すると同じであり、我黨の爲すべき任務である。……わが黨の主張するのは大衆と大衆との感激の握手であり、それはわが黨の正しき指導精神に對する日勞黨大衆の感激の握手である。……日勞黨大衆との眞實の大衆的鬪爭的共同戰線の進展は、わが黨の正しき指導精神の下に日勞黨の日和見主義指導精神を打ち倒すであらう。わが黨の主張は無條件合同ではなくて、彼らの誤れる立場に對する無條件排擊だ。』(無條件合同を主張した堺利彥氏に對する駁論、『勞働農民新聞』)。

(昭和二年九月十一日)——『府縣會議員選擧戰の演壇から政友會民政黨のブル政黨は云ふまでもなく、自由主義的實同、革新、および社民、日農の小ブル黨、日勞のエセ無產政黨……の本質を徹底的に暴露して彼らの欺瞞政策と我黨の政策とをはげしく對立せしめよ、勿論、奴等敵黨を實際にやつつけるには、日常大衆的鬪爭によつ

（昭和二年十一月二十五日）——『惟ふに各黨の合同は、各黨がその謂ゆる「指導精神」にこだはらず、ひたすら支配階級との鬪爭といふ根本的な一點に於ける各黨の一致に基づいてこそ、はじめて可能であると考へます。わが黨はこの一致點に立つて、地方政黨をも含めた全勞農政黨の合同實現のための協議會の開催を提唱したのである……。』（常任中央執行委員會、合同協議會共同提唱の提議）。

十一月の旋風的な合同運動が、いはゆる一と幕の『合同劇』に終つた後は、勞農黨の方針は、一方においては合同の主張がたえず繰り返へされつゝ、實際においては、從來の傳統的な『共同鬪爭』に立ち歸へるのほかなかつた。

けれどもこの間に、いはゆる『宗派的分裂主義』の陣營内では、非常な混亂と動搖を見た。前衛黨のいはゆる『獨立性』と『獨自の行動』、前衛黨と大衆黨との關係、等々が盛んに論議され、勞農黨の性質と任務如何といふことが、今更らに問題とされた。そしてこれらの論議は、大たいにおいて、前衛黨と勞農黨との異つた性質と任務とに對する（少くとも理論の上では）認識の方向に進んでゐた。そして合同問題については、從來の『合同に絶對に反對す』といふ態度は放棄され、無産政黨の合同を一般的抽象的には承認する統一戰線の主張と、在來の共同鬪爭戰術とを結合し折衷した謂ゆる『戰鬪的統一戰術』なるものが主張された。この『新』戰術は、畢竟するに、對立政黨をつぶして大衆を取るための共同鬪爭の題目のうちに、從來に終始の看板であつた『勞農的政黨合同』の一新項目が加へられたことと共に……も以下のものでもない。そして勞農黨に關した範圍では、この新戰術は、その一半（合同の主張）においては大衆の要望、なかんづく黨内において漸次に勢力を増大する合同論者（ないしは反宗派的分裂主義者）の主張と妥協し、他の一半においては、勞農黨の『輝やける指導精神』を擁護することに歸着した。

かような必要に應じて生じ、そしてかような立場を精密に反映してゐるものが、三月の擴大中央執行委員會を通過した、合同問題に對する決議であつた。

『……我黨は共産黨とは異る。……我黨は文字通り大衆黨である。從つて又、我黨の中には、勞働組合主義者も、社會民主主義者もすべて包擁されてゐる、この點に於ては、日本勞農黨、社會民衆黨、その他の無産政黨と毫も異る所はない。……（これらの諸政黨は）いづれも同じ性質の同盟たのであるから、即時合同して本來の一大大衆黨としなければならぬ。……合同は必要であり、且つ可能である……。』

かように大衆附黨としての勞働農民黨（並びにその他の諸政黨）の本質と任務とに對する見解と、これに基づいて合同を可能とし必要とする見解においては、擴大中央執行委員會の決議は、完全に合同論者（ないしは反宗派的分裂主義者）の見解に追隨したものである。けれどもそれと同時に、この決議は、合同に次の如き條件をおいてゐる。即ち第一には、『大衆黨の合同には、階級的立場、戰鬪的標準が當然に

要求される』。そしてこの階級的立場、政策的基準は『勞働者農民の××のスローガン』だと主張する。第二には、合同の條件とすべきものではないと稱するにもかゝはらず、社會民主主義に對してけ徹底的に闘爭しなければならぬ。それ故に合同は、社會民主主義に對する批判の自由を條件としたものでなければならぬ。

かようにこの聲明書は、その後半においては、(一)合同後の黨が『勞働者農民の××』なるスローガンを採用すること、(二)合同の前後を通じて、無產政黨は、當然に社會民主主義者を包容することを承認するにもかゝはらず、この合同後の黨は、『社會民主主義は勞働者農民の味方ではなくて敵だからである』といふ理由に基づくところの、社會民主主義に對する批判の自由を認めるといふ、二つの條件を提出してゐるものであつた。そしてこの決議の前半と後半——合同の主張と條件の主張——とをいかにして結合し、いかにして同時に實現するかについては、決議は何らの答をも與へてをらぬ。そしてこの答は、事實上、從來の傳統的な『共同闘爭』戰術に歸着する。かように三月の擴大中央執行委員會の決議は、かの『戰闘的統一戰術』なる思想を精密に代表したものであつた。

この擴大中央執行委員會において、反宗派的分裂主義者は對案を提出して闘つたが、壓倒的な多數をもつて葬られ、一常任執行委員はこれがために査問會に附せられ、階級的裏切者として、執行委員會から放逐された。かくて社會民主主義に對する批判の自由を要求する勞農黨は、その輝やける指導精神に對しては、何人の批判——自己批判をも含めて——をも許さぬことを明らかにした。この反對傾向によつて代表せられる分子は、後にその他の要素と共に、無產大衆黨を組織した。

かように合同問題に對する舊勞農黨の態度は、目まぐるしい變化をしたが、何らの發展をもしなかつたと云つてよい。それは高まりゆく合同要求の拍車に驅られつゝ、輝やける(分裂主義的)指導精神の周圍を旋回してゐたものであつた。

(六) 合同問題と新黨準備會の態度

四月十日、政府が舊勞農黨を彈壓するや、黨指導者は、直ちに新勞農黨組織準備會を組織して、勞農黨の再興に着手した。

(一)準備會の當初の目的は、舊勞農黨を、合法政黨として直ちに復活することであつた。

(二)しかるに準備會は、間もなくこの方針を一變し、『自然發生的な……大衆黨、しかも二つにも三つにも分立してゐる大衆黨を再組織することは誤りである』といふ無產者新聞(四月二十五日)の見解に基づき、『勞農協議會』を組織する新方針を採用した。勞農協議會とは、舊勞農黨員のみならず、すべての勞農團體の構成員、未組織大衆を加へた日常闘爭の機關であり、それはまた、實に『勞働者農民××樹立のための基本的組織』たるものであつた(五月八日『勞働農民新聞』)。

(三)かように合法政黨の再建を放棄した準備會は、

構成要素であつた日本農民組合と、日勞黨の主要構成要素たる全日本農民組合の合同が成立に近づいた五月十九日をもつて、日勞黨に對して、合同協議を提議した。

この提議は日勞黨によつて拒絕された。準備會はもとより政黨ではない。從つて準備會と日勞黨との間には、合同はあり得ない。そこでその商議が、よし合同協議といふ名目の下に行はれようとも、その結果は合同ではなくて、舊勞農黨の一小部分ないしは一大部分が、個々に日勞黨に流れ込むことにほかならぬ。かように準備會は、合法政黨の再建を誤謬として放棄し、さらにこれに代へた勞農協議會の組織をも放棄して、日勞黨合流の新方針を採用したのである。

（四）日勞黨が合同協議會の提議を斥けた後の準備會は、三度びその方針を變じたが、この新方針は、要するに準備會が以上に經過した全べての方針の交叉し錯綜したものであつた。即ち、この時以後の準備會の方針は、勞農協議會の組織であり、同時に合法政黨の樹立であり、同時に日勞黨との準備會のまゝでの合同であり、同時にまた、合法政黨を組織した上での、日勞黨との合同でもあつた。

この間に注意すべきことは、第一には、新黨準備會のかつての方針だつた『勞働者農民の××樹立の基本的組織』としての勞農協議會の主張は、漸次に背景に沒したことである。そして勞農協議會とは、畢竟、新黨準備會の全國的な組織を指すものにほかならぬといふ、新解釋さへも行はれた（『無產者新聞』七月十一日）[illegible]

第二には、近き將來に無產大衆黨となるべき運動が[illegible]も地方においても、急速に發展してゐたことである。そしてこの運動の主要々素は、舊勞農黨の內部における反宗派主義的分子であつた。第三には、この新運動の展開に（偶然にもしくは必然に）比例して新黨準備會のいろ〳〵な方針のうちで、合法政黨の組織（または舊勞農黨再建運動への復歸）の方面が、漸次に強調せられるにいたつたことである。

かくて七月二十二日をもつて、無產大衆黨は結黨式を擧げた。無產大衆黨成立後における準備會の著るしい態度は、合法政黨の樹立が極力強調せられるにいたつたことである。

「結黨の準備着々進む‥‥準備會の陣營は着々と築かれ始めた、鬪爭をすてた社會民主主義者は勿論のこと、支配階級すらも豫期しなかつた再生の日は近づいたのだ。」（八月四日『勞働農民新聞』）。『結黨の準備着々進む、結黨までに會員二萬を獲得しろ‥‥。』（八月十二日同上）。

しからば新黨準備會の方針は、もはや明確となつたかといへば、決してそうでない。準備會のその後の主張からは、勞農協議會の組織は全く抹殺されたことは事實である。かつては、この『勞働者農民の××樹立の基本的組織』が全國的に完成する時、『その日が即ち吾々の結黨の日であらねばならぬ』と主張せられてゐた（六月八日『勞働農民新聞』）。しかるに[illegible]にも『この日』は吾々の中から抹殺され、いまや

結黨の日が迫つて來た！　準備會の方針の中から、勞農は議會の抹殺せられたことは、準備會の方針をそれだけ明確にしたものとして、準備會のためにも、合同問題の進展のためにも慶賀しなければならぬ。

けれども無產大衆黨成立當時にいたつても、合同問題に對する準備會の態度は、依然として種々なる方針の錯綜であつた。これは無產大衆黨の成立に當つて、新黨準備會、ならびに準備會の影響下にあり、若くは準備會がその影響下にあるところの諸團體が、この新政黨を排擊した無數の決議や聲明のうちに、標本的に現はれてゐる。

『今新黨準備會はその組織を全國的に立て直して日勞黨との無條件合同に努力しつゝある……』（七月十六日、新黨準備會の新政黨排擊聲明書）――（準備會のまゝでの合同）。

『こゝに我が準備會は……勞農黨の再建と、その日勞黨との無條件合同實現を期するものである』（同上）――（勞農黨再建後の合同）。

『……わが準備會の努力によりて進みつゝある日勞黨と準備會との無條件合同を妨害せんとする……』（七月二十一日『勞働農民新聞』の新政黨排擊の社說）――準備會のまゝでの合同、勞農黨再建の放棄）。

『我々は今、日勞黨、新黨準備會の無條件合同を欲してゐる……』（總聯合協議會。排擊聲明書）――（準備會のまゝの合同）。

『……最近に於てわが統一同盟と組合同盟、新黨準備會と日勞黨との合同の機運はいやが上にも熟し……』（關東電氣の排擊聲明書）――（準備會のまゝの合同）。

『……我々は……新黨準備會本部の結黨方針を全幅的に支持し、戰鬪的全國的勞農黨の結黨のため、一路鬪爭を續けることを聲明する』（新黨準備會大阪支部の排擊聲明）――（勞農黨再建）。

『……この大衆の（新黨準備會と日勞黨との即時無條件合同への）進出によつて極度に狼狽した勞農一派は、急遽新政黨を樹立して日勞黨と合同することによつて、戰鬪的な我が準備會を除外して……』（八月五日『無產者新聞』）――（準備會のまゝの合同、勞農黨再建放棄）。

『新黨準備會が全國的政黨として、合法性を獲得することは、今日絕對の急務である』（八月一日『無產者新聞』）――（合法政黨の組織）。

四月十六日には、『支配階級の權力が……少くともコムミュニストの排除を條件としなければ政黨組織を許さぬとするならば、政黨といふ形體を強いて取らなくてもいゝではないか』（社說）と云ひ、四月二十五日には、『自然發生的な……二つにも三つにも分立してゐる大衆黨を再組織することは誤りである』（社說）と敎へた無產者新聞にとつて、八月一日に、この誤謬と名づける罪の子をもう一人產み落とすことをもつて、『絕對の急務』となつてきたことは、注意に値ひする。

のみならず、同じ無產者新聞は、七月一日には、新黨準備會の結黨を、實に、次の如き意味に理解してゐたのである。

『……舊勞農黨員のみならず、未組織大衆を糾合し、常にかゝる鬪爭を協同にすることによつて、大衆黨統一の條件を獲得し、少くと

も結黨の形式を取る時には、全大衆黨の合同體として結黨すること
に努めねばならぬ……少なくとも、今日最もよく協同鬪爭の經驗を
持つてゐる日勞黨と合同して結黨することは、絕對に必要である。』
すなはち七月一日には、準備會は單に舊勞農黨員の少數または多數
によつて結黨すべきものではなく、全大衆黨、少なくとも日勞黨と
の、合同體として結黨することが、『絕對』の必要であつた。八月一日
には、少なくとも無產大衆黨に對抗して結黨することが、『絕對』の急
務となつた。卽ち——

『新黨準備會は……社會民主主義者の地方政黨組織（無產大衆黨と
同一傾向の運動を指す）やその他の陰謀をぶち破る爲に、速かに新
黨準備會の合法化、卽ち全國的政黨としての合法性獲得の具體的運
動を開始しなければならぬ。』（八月一日『無產者新聞』）。

（七）合同運動の最近の展開

合同運動の最近の新たな局面は、大凡そ次の諸要素から成り立つて
ゐる。（一）全國的黨としての、無產大衆黨の確立。（二）合同運動に對
する、勞働總同盟の或る程度の進出（三）日勞黨の新決定。（四）新黨準
備會の新方針。

（一）七月に、合同問題を『時機尙早』と認めた總同盟中央委員會
は、九月十日の決定によつて、『個人の資格において合同の進展を計る
ことを承認した。これは總同盟が、少なくとも非公式的に、合同運
動に積極的に參加するの途を開いたものと見
會民衆黨が、非公式的に、合同運動に參加するの途を開いたもので
做される。これは明らかに、合同運動への一步の進出にちがひない。

しかしながら總同盟（したがつて民衆黨）の合同運動への進出には、
全く異つた二つの傾向と二つの作用とを包含する。卽ち第一の傾向
は、さきに揭げた總同盟關西聯合大會の決議（四月八日）によつて代
表せられる傾向であつて、この傾向は、民衆黨そのもの丶內部におい
て、合同に向つて働らいてゐる勢力として、大衆黨日勞黨その他に團
體の內外における同一方向の勢力と共に、合同への勢力をして計上す
ることができる。

けれどもこの勢力は、民衆黨の內部においては尙ほ少數派であつ
て、社會民衆黨を現に支配してゐるものは、謂ゆる指導精神の一致に
基づく合同の主張——卽ち、右翼的合同の主張——である。この見解
の上に立つ合同運動への進出は、一方においては、從來、ほとんど一
般勞農運動の影響外に立つてゐた海軍勞働者を、一般運動の圈內に入
れる利益があるにもかゝはらず、他方においては、謂ゆる右翼的結合
をもつて、勞農運動のその他の部分と對立せしめる損失——その利益
をもつても償ひがたき損失——がある。右翼的結合のための右翼的結
合は、一步の退却によつて一步の前進に代へることに躊躇する。さら
にこの見解の上に立つ合同運動への進出は、日勞黨の上には、日勞黨
の或る部分を排除し、或る部分と結合しようとする合同となつて一步に

れる。即ち、それは必然に、日勞黨の內部における對立を醸成し、またはこれを分裂せしめる方向に働らく作用となつて現はれる。

かように社會民衆黨のうちには、合同運動に對して、以上の如き二つの勢力または二つの作用を含んでゐる。從つて社會民衆黨の、合同運動への積極的の進出は、必ずしも、同一の方向を指した勢力が合同運動に加はり來ることを意味するものではない。そこで重要なことはこの進出は（九月十日の決定）は、どの點までが、第一の勢力また作用の生長と增大とに迫られた妥協を意味してをり、そしてどの點までが、第二の勢力が積極的に作用しようとし、または有効に作用し得る形勢を生じた結果であるか、といふことにある。無產大衆黨の確立による合同への勢力の著しい增大は、社會民衆黨の內部における第一勢力を強よめ、その擴大と成長とを促進する。それと同時に、第二の勢力もまた、直接間接にその作用を刺戟される。ことにその內部にあつては第一の勢力の强化と、その外部にあつては日勞黨と大衆黨との接近、ないしは合同の可能とは相俟つて、勢ひ第二の勢力に刺戟を與へ、その積極的な活動を促すものである。

（二）無產大衆黨の確立とその影響力の擴大とは、合同の方向に働らく一要素としての日勞黨の作用を增大する。しかるに、前述の如き、二つの方向への作用を含んだ勢力が合同運動に積極的に進出する結果は、勢ひ日勞黨の上には、二つの作用として働かざるを得ぬ。即ち、それが前述の第一の勢力の進出を意味する限りは、合同の方向に働らく一要素としての日勞黨の作用を增大する。けれども、それが第二の勢力の進出を意味する限りにおいては、それは日勞黨內の對立を促かし、日勞黨の內部における、これ（即ち、民衆黨內の第二の勢力）に照應した勢力を強よめ、合同に向つて働らいてゐた日勞黨の作用そのものを、民衆黨のそれに照應した二つの作用に分解する傾向をもつてゐる。その結果はいふまでもなく、今日まで日勞黨が代表してゐた合同に向つて働らく作用を弱めることゝなる。かような微妙な作用と反作用とは、社會民衆黨と無產大衆黨とのいづれに對しても、單獨的な即時合同を當分保留するといふ日勞黨中央委員會の最近の決定（九月廿五日）に、最も如實に反映せられてゐる。（この日勞黨の決定の直後――二十七日――社會民衆黨が、日勞黨に對しては『積極的に合同の提議をしない』こと、そして再び『右翼結成主義――海軍側との合同を指す――』に復歸する決議をしたことは、注意に値ひする）。

（三）新黨準備會は、九月二十二日、合法政黨組織の方針を決定し、且つその綱領及び政策を決定した。その『綱領立案の趣旨』（九月廿三日諸新聞所載）は、勞農黨の二ヶ年間と新黨準備會の五ヶ月間とを通じて擁護せられた謂ゆる『輝やける指導精神』を、一擧にして清算したものとして、すこぶる興味がある。

『この草案は、吾等が持つべき階級的大衆黨の任務、使命、目的をはつきり認識したことが表はされてゐる。即ち新黨は大衆黨であり、共産黨ではない。新黨は社會組織、經濟制度の變革（××××）

意味に解す——筆者)を目的とするものではない。そのことが合法的大衆黨によつて實現し得るかの如きことをいふことこそ誤りである。合法的大衆黨は、勞働者農民等の日常の利益の擁護伸長、及び政治的自由のために鬪ふことが出來ない。またそれを使命として鬪ふことに大なる階級的意義が存する……無產階級戰線の統一を期することは、當然のことである……政府の機嫌を伺つて綱領を變へたのではない……』。

かように新黨準備會は、舊勞農黨と新黨準備會そのものとの一切の過去を、『ことこそ誤りである』といふ、當然自明を意味する簡潔な一句によつて、永遠に埋葬したのである。(大山郁夫氏もまた、舊勞農黨が共產黨でなかつたことを力說し、官憲の勞農黨解散は、『大衆黨と前衛黨とを混同して舊勞農黨の本質を知らなかつたため』だとせられてゐる(『東京日日新聞』)。舊勞農黨が前衛黨でないこと、前衛黨であり得ぬことは無論である。けれども前衛黨と大衆黨とを穿きちがへてゐた者には、、のほかにも、少なくとももう一人はあつた筈である?

舊勞農黨を、社會民主主義の黨派等々と區別して、『純粹の』無產階級黨と規定したのは誰だつたか? 舊勞農黨の終末期に近づいて、いはゆる極左陣營に、初めて前衛黨と區別した勞農黨の性質と任務如何が問題となつたのは、何を意味するか? そして三月の擴大執行委員會に至つて、勞農黨が共產黨でないことを認めると同時に、初めて、すべての無產政黨が本質的に均しいことを承認し、この承認を合同の可能と必要との基礎を認めるに至つたことは、そも〳〵何を反證してゐるものだ(か)?

そこで新黨準備會を支持し來つた大衆は、當然にも疑問を起こす。少なくとも、新黨準備會の五ヶ月の行動は、一たい何を意味したか? 少なくとも、五ヶ月前に、日本農民組合の新黨組織方針を、何のために一蹴し去つたのか? 少なくとも、無產大衆黨を排擊した理由は何所にあつたのか? そしてこの排擊の根據であつた『指導精神』は、どうなつたか? 吾々が無產大衆黨への入黨を差し控へて待つてゐた理由は、どこにあつたのか? そして吾々は、最後に、もう一つの無產大衆黨——ないしはその模倣物——を與へられるのではないか?

等、等、等。

けれどもかゝる當然の疑問を起こすよりも、吾々は新黨準備會が、階級的大衆黨に對する正しい『認識』に到達したことを、合同運動の進展のために喜ばなければならぬ。

新黨準備會の內部には、少なくとも三つの思潮がある。(一)合法政黨を無用とする見解は、今日もなほ有力に殘つてゐる。この見解は、工場と組合から全く遊離した『職業的』×××に進化した前勞働者によつて代表され、若干の小ブルジョア的インテリゲンチアによつて追隨されてゐる。これに對しては、(二)工場と組合に立脚してゐる勞働者によつて主として代表せられる、合法政黨への傾向がある。さらに兩者の中間には、(三)この二つの意見を折衷して、新黨準備會そのものを、一定の綱領と政策とを附へた、政黨の代用物たらしめようとする

主張がある。最近における新黨準備會の決定は、明らかに、この第二の傾向が勝利を得たことを物語つてゐる。新黨準備會の內部におけるこの第二の勢力の增大は、合同に向つて働らく勢力の增大を意味してゐる。

× × ×

以上によつて看取せられる著しい事實は、合同問題が、極めて複雜な性質を帶びてきたことである。その結果として、合同は一そう困難な問題となつたかの如くにさへ見へる。けれども合同問題が複雜化したことは、問題が具體化したことを意味するものにほかならぬ。問題が、合同か非合同かの『議論』である間は、むしろ極めて單純な問題であるが、一度び、實際勢力の間の具體的な問題に進展すると、それは勢ひ、方向と速度を異にして動く諸勢力のお互の作用と反作用の問題となる。これは合同運動の紛糾ではなくて、その進展にほかならぬ。けれども、これは決して合同の實現が容易であることを意味しない。合同問題の解決は、わが國無產者運動が今日までに當面した最大の任務の一つであることを考へたなら、勢ひ多くの困難を豫期しなければならぬ。ことに合同問題の解決は、同時に最近三年間における一切の分裂主義的誤謬の清算を意味してゐる。この誤謬は、今日は一定の事實となつて、或る程度に固定してゐるものである。合同の實現は、この事實を打ち破つてのみ進行する。それは勢ひ困難にして、かの曲折の多い行程でなければならぬ。

合同運動の今後の進展が、主として次の諸要素にかゝつてゐることは自明である。（一）社會民衆黨の內部における合同への勢力の生長——主として總同盟關西聯合會大會の決議によつて代表せられる勢力の生長。（二）分裂的影響力に對する日勞黨の抵抗力——ことに全日本農民組合の結束力。（三）無產大衆黨の影響力の擴大。（四）新黨準備會の內部における、合法政黨の組織を主張する要素の決定的の勝利。（五）舊勞農黨大衆の一大部分（新黨準備會の日和見的方針のために、無關心に陷入つた要素）が再び合法政黨の運動に復歸すること等。（九月二十八日）。

ヴァサリのレオナルドオ ダ・ヴインチ傳

矢代幸雄

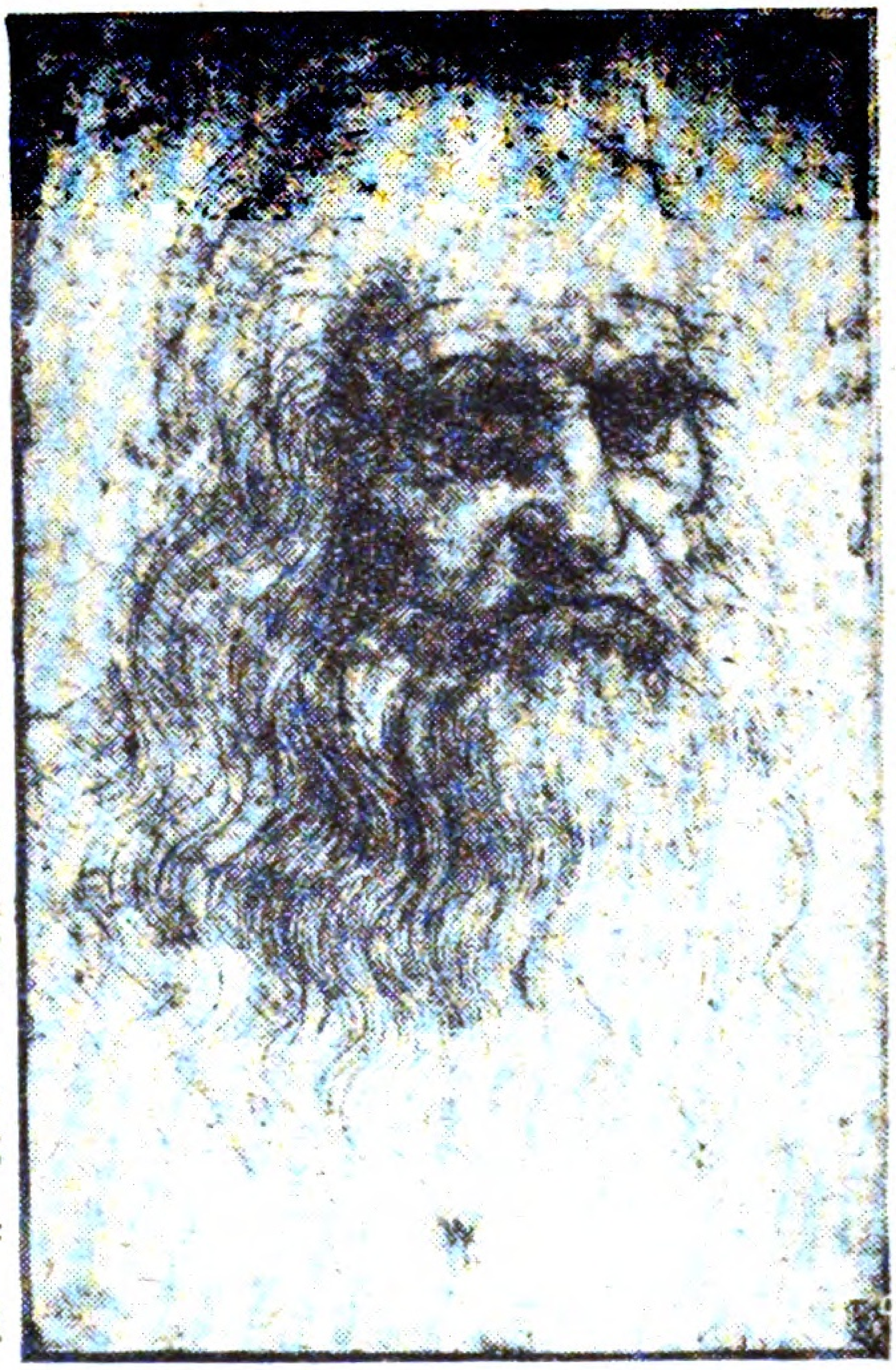
序

西洋美術の最高頂をレオナルドオ・ダ・ヴインチが形作る。レオナルドオに於いて、吾人の夢想し憧憬する藝術的人格型が體現せられた、と、余は少くとも信じて居る。換言すれば、余にとつて、レオナルドオは神である。此一篇は、余の衷心より動きつゝある思慕の情の、然しながら、いとも見すぼらしき所産である。

彼の人格を己が體驗に滲透し盡し、レオナルドオに藉りて余が口をきくか、それよりも、レオナルドオ自身が余に憑つて口をきくか、斯る境地に到つてこそ、余は、余のレオナルドオ傳を書く資格を持つであらう。さういふ日のめぐり來ることを祈る。今は、廣大にして深遠なる彼が人格の片鱗にとりついて、ひたすらに、個々の斷片を拾ふに忍從するばかりである。

藝術批判の規準を論理的にどう建設す可きかは別問題にして、幾度も見て、見れば見るほど、親しめば親しむほど、深き底知れぬ感銘を受けて、觀者の心を包みまた流して來る作品が、眞の藝術であらう。余にとつて、レオナルドオこそ是れである。一九二一年に初めて出會つて以來、レオナルドオの作品を見ぬ年は、日本に居た二年の間だけであつた。本年四月、巴里を立つ日に見たモナ・リサは、また今迄になき澄むだ微光に匂ふが如くであつた。余は眞面目になつて歸つて來た。それよりも不思議なるは、レオナルドオの手記の今は寂びたるページをはぐる氣持である。彼は左手の逆書きの異樣なる文字を以つて、思索、空想、自然觀照、日常生活、有らゆる場合の心の動きを書き記るし、文字で足りぬところは練達の限りを盡したる素描を添へて殘した。科學者と藝術家を兼ね具へたる彼の性格の曲折し旋律しつゝ進展する相貌は、是等の手記と素描のうちに、直截に發現され一に記

る。天使の如き美しさと惡魔の大膽不敵とだんだら縞をなして混ぜ合はせたる大きい人間の胸奧は、萬有の神秘を覗き見るが如く不可思議である。大藝術に觸れたる時、人は觸れない前と觸れた後と人間が變る筈である。ウインザーと、ミラノと、巴里に在る、レオナルドオの手記に親しむだ數年以來、特には昨年再びウインザー古城に籠つて英國帝室御物の數多き素描と手記の蒐集を日夕研究して以來、余の心の或る部分に、何かしら變動したものがある。謂はゞ、何かに魅入られたと言はれやうか。レオナルドオの好きであつた飛鳥を見ても、流水、木の芽の生へ方、女の髮の卷き廻く有樣を見ても、レオナルドオの考へた宇宙の原理とも言はうもの、自然の皮相の奧に嚴然と結構されて居る原理の世界と言はうものが、余の如き者の眼にも、ちらちらと明滅隱顯して、いくらか感得されるのである。基督の神性が保羅にしたやうに、レオナルドオの藝術は、凡人の眼から鱗片を落として、今迄見られなかつた奧の世界を目擊悟入せしむるものがある。



（レオナルドオ・ダ・ヴインチ自畫像（推定）トリノ市王立圖書館所藏）

輕卒にレオナルドオを云云する者よ。多くの場合は、云云する者が恥をかく。余が師ベレンソン先生は、イタリヤ繪畫の樣式判定に於いて、明敏にして詳密、余の尊敬措く能はざるものであるが、先生が十餘年前發表せられたるレオナルドオ論、その罵倒論（B.Berenson. Studies and Criticisms of Italian Art, vol. II.）は、余の先生に對する尊敬と愛着とを以てしても、到底許す可らざるものである。此論文に對して、嘗ては余も憤慨して反對意見を書いたこともあつたが（拙著Sandro Botticelli, Part IV 參照）、今にして思へば、ベレンソン師の論文によつて迷惑さるゝものは、ベレンソン師自身である。レオナルドオの大さは、小ゆるぎもしない。況んやベレンソン師ほどの研究の用意なき、されば、なほ、レオナルドオに就いて隨想の書きやすい大勢の筆者の、贊否いろいろの論文詩歌を迥るかに抽いて、レオナルドオの藝術は、名山の如く、高處に澄むで居る。余も亦たこの名山を望み慕ひて、登らんとすれど、未だ登れる自信のある道を有たない。

余はレオナルドオを超人になし過ぎるか。否、そんなことは無い。レオナルドオの手記を讀む者は、彼も亦た人間であり、餘りに人間的なる弱點を持つて、吾人の兄弟であることを知る。吾人の感情も體驗

も彼に移入することが出來る。また彼の藝術に於いても、彼は一種特別なる物ではない。彼の出現には、文藝復興期藝術の技巧發達史に豫想外なる飛躍はない。但し彼は途方もない大物である。大さと深さに於いて、奇蹟的である。吾人は、縦令容易に及び難しとするも、彼を慕ふ資格はある。希望もまた必要もあるのである。

レオナルドオの大なる人格に近づくに、余は、レオナルドオの作品、素描、手記等、彼自身の殘されたる製作によるほか、ヴァサリの「レオナルドオ傳を精讀玩味するに如くはないと考へて居る。玆に、そのヴァサリを譯出する所以である。是は、世にも稀なる貴重なる文献である。レオナルドオに關する著述、古來、幾千百種ありとも知れないうちに、余の知れる限り、ヴァサリの名匠傳に含まれたるレオナルドオ傳ほどに、興味深きものは知らない。これは文句なくレオナルドオ研究の出發點であると共に、或は、レオナルドオ研究の歸着點になるかも知れない。といふのは、レオナルドオに關して知れば知るだけ、ヴァサリの傳記がよく出來て居ることを感じて、總括論としては、到底是れ以上のものは書けないと思ふからである。ヴァサリをよく知つた上で、そして、他の大部なるレオナルドオ傳をよめば、その主要部分は大抵はヴァサリに要領よく入つて居たものを、細かい年代と史實の搜査、或は空想と修辭の多き註釋解說等によつて、敷衍するか或は綜述したものに過ぎぬことを發見するであらう。余の如きは、ヴァサリの努力に對して、レオナルドオの人としての總括論は、ヴァサリある以上、なかなか自分で

のである。

然らば、何故にヴァサリのレオナルドオ傳がそれほどに貴重資料であるか。一體ヴァサリのイタリヤ名匠傳（Le Vite de' piu eccellenti pittori, scultori ed architettori 初版一五五〇年、第二版一五六八年）が、イタリヤ藝術史研究者にとりて、基礎研究の出發點になるは、誰れも知ることであるが、是は特にレオナルドオの如き、時代から言へば第十五世紀末第十六世紀初め、土地から言へばフィレンツェ在住の名匠を叙するに當つて、彼が強味を最もよく發輝して居るのである。フィレンツェ市はヴァサリ自身も當代隨一の美術家として働いた土地、此時代はまたヴァサリ（一五一一―一五七四）とまた餘りに隔たりなく、彼が傳記の材料を口碑等によつて蒐集するに便宜であつたからである。勿論、時代をもう少し降つてヴァサリと同時代の、彼の直接の知人であつた第十六世記中葉の名匠等を記述する場合には、ヴァサリの資料の豐富と直接經驗の正確さは一層多い譯であるが、然し史論とすると、對象が餘りに己れに近きが故に、或は個人的關係や個人的興味などが記述され過ぎて、却つて[illegible]く判斷の公平も得難くなつて居るやうである。ところが、第十五世紀終末期附近の美術上の出來事に關しては、彼の名匠傳執筆の時期と四五十年位しか隔たず、作品はよく殘り口碑は失はれず、そして作者は既に死んだ後にて、[illegible] 但し[illegible]にはフィレンツェに[illegible]

術上新舊二派があつて、舊派即ち千四百年代式藝術は、終末に近づきながら、なほボティチエリ（一四四四―一五一〇）等の大家を存して、レオナルドオ（一四五二―一五一九）等を先驅とする新派と對立して居た。ヴァサリは此フィレンツェ新派の藝術の最も有力なる後繼者として第十六世紀後半に立つのであつて、彼の持つ藝術批判の標準は全然この新派系のものであつた。彼は新派即ち千五百年代の藝術論を振り翳し、その立場から見れば、それ以前の美術は舊式見るに耐へざるものとして排斥して居るのである。勿論ヴァサリの寛容なる性格は有らゆるものに美點を認めんとして、古來の大家を賞揚して惜しまなかつたけれども、彼の視點は全然千五百年式のものにて、例へば、ボティチエリの如き純然たる千四百年代式の天才は、賞めては見るのであるが、如何ほめてよいか一寸解らないと言つたやうなところがある。即ち、ヴァサリ傳は、藝術批判に於いては、千四百年代の論評は餘り當つて居るとは言ひ難く――それだから倘ほ面白いといふ別の事情もあるのではあるが――ヴァサリの本當の批評家としての強味は、己れ自身その最も主なる後繼者になり、その精神と技巧とを體得して居るところの新派の藝術を論じた場合である。レオナルドオこそ丁度この新しきフィレンツェ藝術の始祖にほかならぬので、その點から言うてもヴァサリは彼に對して絶大なる敬意を拂ふのみならず、ヴァサリが眞に感情移入して批評し出來る最初の大なる對象であるが故に、新派藝術論を初める名匠傳第三篇の冒頭に掲げたるレオナルドオ傳に入るに際して、ヴァサリは、從來になき意氣込みと責任感とを有つたやうに見える。そして出來上つたものは名匠傳全篇を通じ主なる美術家百七十人以上を評傳した中で最も精彩ある傑作になつたと稱して、決して過言ではない。

ヴァサリの生れたのは一五一一年、レオナルドオの死んだのは一五一九年、兩者は時を同じくして生きて居たのであるが、幼きヴァサリはレオナルドオに逢つて居ない。レオナルドオは一五一五、六年頃羅馬と北イタリヤとの間を往來して、その間に横はるヴァサリの故郷アレッツオを通つたこともあり得たが、然しヴァサリは竟に之を知らず、それから直ぐレオナルドオは佛王の招聘に應じてフランスに移住しロアール河畔のアムボアーズ離宮附近に一五一九年逝去するのであつた。斯くの如くヴァサリはレオナルドオの風丰に接する機會は持たなかつたが、然し、彼は十六才以來、レオナルドオの藝術の育まれたるフィレンツェに己れも亦た同じ藝術修業の身となり、レオナルドオの知人、弟子にも澤山に逢つて居るので、レオナルドオに關する評傳の材料は充分豐富であつた。彼がまた今日フィレンツェ市國立圖書館の所藏する Codice Magliabecchiano 中に二種の異なりたる古寫本、通稱 "Codice Petrei" 及び通稱 "Anonimo Gaddiano" にて傳はる藝術家列傳草稿――是は一五一六年より三〇年にかけてフィレンツェに在住したアントニオ、ビルリ Antonio Billi の原作――或は是等の源であつた同一史料を可成りに利用した等、名匠傳編纂の資料蒐集に相

等に用意を整へたことは、周知の事實である。

けれどもヴァサリが結局藝術家であり、現代科學的方法を厳守する吾人が所謂歴史家なるもの丶標準より推して、彼の位置の甚だ低下せざるを得ぬは、已むを得ぬ次第である。現代に於いては、ヴァサリの記述の史論としては餘りに屢々荒唐無稽なることが指摘せられ、彼が恰も物語作者に過ぎないかの如く、眞面目なる近代史家によつて取扱はるゝのが通則である。現に茲に掲ぐるレオナルドオ傳に於いても、例へば彼のミラノ滯在の記述が殆ど、ミラノ侯ロドヴィコに招聘せられたる前期に限られて、第二回のミラノ滯留が脱してあつたり、奸黠狡智の代表のやうに見らるゝチエザーレ・ボルヂア侯の城寨防備土木工事の總監督として中部イタリヤを非常なる羽振りにて視察旅行した重要事項が閑却されてあつたり、特には、ヴァサリの記述の最後を飾るレオナルドオの死の光景、この老いたる大天才がフランス國王の腕に抱かれて息を引取つたといふ演劇的なる場面が、全然史的には誤つて居て、レオナルドオの死の當日には佛王フランソアはアムボアーズの王宮から不在であつたなどは、ヴァサリに對する深き不信を抱かせずには措かないのである。特に近代の美術史家が一番重要なる研究事項であるかの如く專念研究して居る作品の製作年代の順序になると、ヴァサリの記述の信用の置けぬことは甚だしい程度のものがある。史的確實性のみより推せば、ヴァサリは斯くも空想的なる物語作者に墮ちるのであるが、それでもヴァサリの此の著書は常に貴重なりと、余は敢ずるのである。

縱令、ヴァサリは誤つた物語を傳へ、或は自ら誇張して物語を製造したにせよ、その眞實ならざる物語自身に、興味あるその時代の精神、或は趣味の反映があるのである。大人物又は作品を取卷いて當時自ら發生して世間に流布し信ぜられた物語傳説は、眞實でなければない丈け、尚ほ、その人物なり作品の同時代の人心への映像を如實に物語つて、過去の時代を生かし出す上に役立つことこの上ないのである。余と雖も、ヴァサリの不正確さには困り切る。けれども、同時にその不正確さそれ自身にも、一つにはこの不正確なる物語も偶然に出來たのではなくして同じ時代精神の所産であるといふ意味に於いて、また一つには、心持次第に歴史家が物語作者になつて平氣で居るほど心の動きに正直に敏活なる、また近代の科學的精神に煩はされぬ文藝復興期に、大人物又は大作が直接周圍の社會に醸し出したる雰圍氣が如何なるものであつたかを如實に知り得るといふ意味に於いて、余は、ヴァサリの含む史的不正確を慨くよりも、不正確の有りの儘に當時の風評傳説を傳へて居ることを感謝するのである。ヴァサリの不正確は近來の學者が他の史料によつてヴァサリの註釋的研究をやれば補正することが出來る。茲には不正確それ自身が持つ獨特の價値を認めて、斯る當代の傳説にその儘に親しむことが、レオナルドオの大さ、當代の人々が直接に感じて居た彼の大さを生かし出す上に、却つて、臨んで役立つことを忘れてはならないのであらう。余がヴァサリの傳を翻譯する

書簡の主なるものは此點に在る。——因みに記す。ヴァサリのレオナルドオ傳の註釋的研究に關しては、余もながく企劃して居るが、未だ實現の運びに到らない。註釋書としては Gaetano Milanesi(Firenze, 1879);Herbert Horne(New York 1903);Giovanni Poggi(Firenze, 1918)のものが一番正確でもあり、また豐富でもある。最近東北大學兒島教授も此種の試みをされた。是も周到なる研究である。

ヴァサリの飜譯に關しては、余は一番に正確なる本文とされて居る Gaetano Milanesi 校訂並びに註釋、フィレンツェ市 Sansoni 版(一八七九年)第四卷よりなした。そして英獨佛譯等を參照した。翻譯の正確は充分に期した積りであるが、尙は誤謬なきを保し難い。讀者の叱正を乞ひたい所以である。文體に關しては、余は出來るだけ平易なる物語調にする積りであつた。此點は、最近に岩波講座にあらはれたる兒島教授の翻譯と對照をなすもの丶如くである。兒島教授の飜譯は莊重簡古なる漢文調になり一名譯たるを失はない。但し、余のヴアサリの見方は多少異つて居る。余にとつては、ヴァサリは、その肌合から言へば、當時も現在もイタリヤに普通なる天成の物語家である。極めて平易多辯に、極めて誇張ある言葉を用ひて、話の興味に釣られるまゝ、少しは嘘言も混ぜても平氣で、何處までも乘氣になつて話して行く種類である。美術史家としてのみならず、物語作者としてヴァサリが優秀なる文學的位置を占むる理由は實は玆に在るので、例へば、アナトール・フランスが輕快なる諧謔を以つて近代的に飜案したるブオナミコ・ブッファルマッコ傳の如きはこの好例である。余の試みは成功した樣子はないけれども、少くともヴァサリの筆の平易なる物語作者的性質は失ふまいと、余はつとめたのである。尤も原文の字句に忠實であらうとして拘泥した餘り、行文冗長となつたのは慚愧に耐えない次第である。

最後に一言、ヴァサリのレオナルドオ傳に最も目立つた特色を一つ指摘して置きたいと思ふ。それは、ヴァサリがレオナルドオ傳を草するに當つて、一種異樣に感激して居ることである。レオナルドオを普通の人間以上、何かしら、神か超人かのやうに、極端に言へば、一種薄氣味惡いかと思はれるやうな特別の取扱をなして居ることである。一體ヴァサリはイタリヤ人らしく甚だ感激し易く、最高級の形容詞を使ひ過ぎる傾向はあるのであるが、レオナルドオを論ずる場合の如く「神の如き」「天來の」「超自然」の如き人間離れのした形容詞が矢鱈に出て居ることは無いのである。ヴァサリは己が尊敬の限りをつくす先生の大ミケランジエロを傳ふる場合にすら、是程超自然的には言つて居ないのである。例へば、レオナルドオ傳の冒頭の文章の、まるで特別なる神の賜物の出現を紹介する如きは、ヴァサリ全篇に見ざるところである。是が、正直のところ、レオナルドオが當時の人々に與へた印象では無かつたのであらうか。超自然の神的の何物かを考へになければ謎が解けないやうな、さういふ深さといはうか、遠さとか、何か神秘のものが、レオナルドオの

思議に周圍の人を威服し吸引したのではなかつたらうか。斯る底知れぬ神秘性――是こそ藝術の無限性と言はれやうか――は正に彼の作品に、今日も、なほ、漾現する氣分であつて、レオナルドオの藝術の天下の至寶中の至寶である所以は、實に玆に在ると考へられるのである。此無限性を最も深く感じ揚げてレオナルドオ論の根帶となし、併せて、この無限性が原因となつて當代の人心に自ら發生させた不思議なる傳說を有りのまゝに傳へたるヴアサリ傳は、如何に細部に史實的缺點はあらうとも、レオナルドオの世界に入門する者にとつては、最初の、正道であると言ふても、聢かに過言ではないであらう。

(注意。以下の譯文に於いて、(……)形の括弧したる部分は、邦文の意味を容易く通ぜしるむ爲めに、原文になき字句を補つたのである。)

(自然の運行のうち、)しばしば、最大なる才能が天上の力によりて、人間の上に降り灑がれるが、時には、その有樣、正に、超自然的と思はるゝことがある。優美と典雅とそして能力が、計量り切れぬほどの分量を以て、一個の人間に於いて結合せられ、その結果、その人が、如何なる方面に心を向けやうとも、彼の行動一つ一つは神業の如く、有らゆる人類を超越して、是こそ神によりて賦與せられたるもの、決して人智によりて獲得し得られたものでないと、誰れにも即座に解る。かういふことが、時には、世に起るものである。斯る實例を、全世界は、レオナルドオ・ダ・ヴヰンチに於し、身さ、それはいくら賞めても、決して、賞めきれるものでない、美しさに加へて、彼の有らゆる行動には、限りなしと(形容する以上)に、上品の德があつた。彼の天才は偉大であり、如何なる種類の難問題に心を向けやうとも、それを彼は容易く解くやうに、出來て居た。彼に於いて、大なる肉體力が、巧緻に結合して居た。常に正當に宏大なる精神力並びに勇氣があつた。斯くて彼の名聲は昂まり、啻に、生前既に、一世の畏敬の的となりたるのみならず、沒後、後世子孫の間に、譽れは益々增大するのであつた。

このレオナルドオ、驚異すべき、天來の者であつた彼は、ヴヰンチ出身のセル(尊稱)ピエロの息子で、學問に於いても、また文學の原理に於いても、もしも、彼があれほどに變り易く、不安定(なる性格)でなかつたならば、一大錬達者になつたに相違ない。ところが、彼は、(その性格の爲めに)、澤山のことを學ばんとして手を着け、そして始めたかと思ふと放棄するのであつた。斯くて、數學に於ても、學習僅に數箇月の間に、知識の獲得著るしく、絶えず、疑義難問を呈出して、教師は、爲めに、しばしば、困惑に陷れられたといふ。また、彼は音樂の學習に幾らか力を向け、そして、やがて、性來、氣高き精神と心の柔かさに滿ちた人間らしく、立琴を彈くことを學ばうと決するや、直きに、その立琴に合はせて、彼は即興詩を、神の如く、謳ふやうになつた。

然しながら、縦令、レオナルドオは種々の仕事に心を向けたとはいへ、畫を描くこと並びに浮彫彫刻をやることは、未だ嘗て已めたこと無く、是等こそ、有らゆるほかの仕事よりも、彼の嗜好を摘へたるものであつた。父セル・ピエロは、その様子を見て、子供の天才の高揚を考へ、或る日、子供の素描畫數枚を持つて、親しき友であるアンドレア・デル・ヴェロッキオの許を訪れ、レオナルドオが繪畫を學むだとして、一體、一かどの錬達が得られやうか、腹藏なく言つてくれと懇願した。アンドレアは、レオナルドオの異常非凡なる初めの試みを見て、吃驚して、この道を勉強させてやらねばいけないと忠告した。父は、そこで、レオナルドオがアンドレアの仕事場に入門するやうに取り決め、レオナルドオは、たゞならぬ氣の進み方を持つて、その旨に從つたのであつた。アンドレアの許に在つて、彼は、藝術の一つの部門を學習したるのみでなく、凡そ圖畫が基礎をたすところの有らゆる部門に臨み、しかも、その叡智は神業の如く驚異す可く、且つは立派なる幾何學者であつた爲め、彼は、單に彫刻術に仕事をしたばかりでなく――彫刻に於いては、彼は、年若い時、既に、粘土を以つて、微笑する女の首幾つかを作り、それは今日に到るまで、なほ、石膏型にとられて、世に行はれて居る。また、小兒の首も幾つか作つたが、まるで、大家の手に成つた品格を具へて居た――單に彫刻に働いたのみならず、建築に於いても、彼は平面圖その他、建物の考案圖を澤山に作つた。また、彼こそ、未だ一介の青年に過ぎなかつた頃、アルノ河を改修して、ピサよりフィオレンツァ（フィレンツェのこと）に至る間を、舟航の便ある運河にしようといふ計劃を立てたる最初の人であつた。彼は、水力を以つて動かす粉碾水車、布晒し機械等の、諸機械の設計をなした。けれども、繪畫を以つて自分の職業としようと思つたので、彼は自然より、切りに勉強して描いた。屢々、粘土にて人體の模型を作り、それに、柔き使ひふるしの木綿布を漆喰水に浸して被せかけ、そしてそれを、一種特別に目の細かいランス布、言ひ換へれば、加工した木綿布の上に、非常なる忍耐をもつて、模寫した。彼は、それを、毛筆の尖つた穂先で、白と黒とで仕上げ、その精緻は奇蹟的のものであつた。このことは、余が所有する（大家の）素描集に數葉入つて居るレオナルドオの肉筆が、充分に證據立てて居る。その他、彼は、紙の上にも刻苦して描き、またその上手さは、如何なる人と雖も、未だ嘗つて、是れ程の仕上げの精緻精妙に到達したことはないほどであつた。この種のものでは、余は、明暗陰影の様式で描かれたる人の顔を持つて居るので、出來榮えは神業の如くである。

レオナルドオの天才のうちには、神によつて與へられたる徳と、怖る可き表現力とが相混合し、是等は、知覺及び知惠に仕へる記憶力と、よく協和して居た。彼は思想を、腕の工夫によつて描出することを知り抜き、また如何なる頭のよき強情者と雖も、議論によつて負かし、理由を正して混亂させたのであつた。毎日のやうに、彼は模型を作り、考案を立てて、容易に山を移し動かし得る方法、或ひは、山を

穿孔して、一平原より他の平原に通ずるの道を開き得る方法、を考へた。槓杆、起重機、螺旋を用ひて、非常なる重量を持ち揚げ、引き動かすことの出來る方法を示した。その他、港灣を空虛にする方法、低地より濁水を喞筒にて汲み上げる方法等、レオナルドオの頭腦は、絶えず空想發明することを已めなかつた。かくの如き、彼の着想勞作に就いては、澤山の下繪が、吾人美術家仲間の間に、散つて殘存し、余自身も可成り多くを見た。その上、レオナルドオは、時間を潰して細結び模様まで描いた。それは、一定の秩序に從つて圖案されて、繩の一端から有らゆる部分を傳つて他端まで從ひ行き、一循環を滿たすといふやうに考案されて居た。この種の、最も難かしく且つ美しき圖案は、印刷されたものに見ることが出來、圖案の中央には Leonardiis Vinci Accademiaの文字が入れられてある。斯くの如き諸種の考案圖及び模型のうち、當時フィオレンツァ(の市政)を支配した頭のよい市民達に、レオナルドオが常に見せて居た一個があつた。フィレンツァ市の聖ジオヴァンニの殿堂を持ち上げて、建物の底部に階段をつけよう、而も、建物には少しも損傷を與へない用意がある、といふ考案であつた。彼が強い理由を以つて說く時は、正にこれが出來さうに聞えたが、然し、レオナルドオが去つたあとで、獨りで考へて見ると、誰れでも、斯る計劃の不可能であることを悟る、といふ仕末であつた。

レオナルドオは、會話に於いて實に愉快にて、人々の愛着心を自分に惹引した。そして、殆ど、己が財產として無一物と言ふ可きであり、また、仕事も碌にしなかつたけれど

ひ、馬匹を飼つて居た。その馬を喜ぶこと非常であり、また、は、有らゆる他の動物にも興味を持つて、それ等を、最大なる愛と耐とを以つて、支配した。斯る性質がよく解ることとしては、彼は屢鳥を賣つてゐる店肆の前を通ると、自分の手づから鳥を籠から出してやり、賣り手に、乞はるゝまゝの値を拂つて、そして、鳥を空中に放ち、彼等の失はれたる自由を戻してやるのであつた。かういふわけで、自然の意思は、レオナルドオに幸ひすることを喜び、彼は如何なる方面に、思考、頭腦、精神を向けやうとも、有らゆる仕事に神力を現はし、用意周到、生氣横溢、豐富、美、品位、何れの點の完全さを取つて見ても、彼に匹儔する者を、他に見ないのであつた。よく知れて居ることであるが、レオナルドオは、彼の藝術の完全理解によつて、澤山のことに着手した。然し、その何れをも完成しなかつた。レオナルドオにとつては、彼が構想に浮ぶ事象を實現するに於いて、手といふものは、到底、藝術の完全といふものに到り得るものでないと思はれたに相違ない。彼の手は如何に巧緻の極であつたとはいへ、彼の想像は、また、微妙にして難解す可きむつかしき事柄を思ひついて、彼ほどの手を以てしても、之を表現することは、及びもつかないことであつた。その上、彼のむら氣は多岐多様にして、自然動物に就いて哲學的思索に耽り、植物の特性の理解に氣を入れるかと思へば、去つて、天空の運動の觀察に赴き、月の軌道、太陽の歩み方を調べ

る、といふ有樣であつた。

既に言つた通り、父セル・ピエロの裁量によつて、レオナルドオは、少年時代既に早く、アンドレア・デル・ヴェロッキオの許に、藝術修業の爲めにおかれたのであつたが、時に、恰度、ヴェロッキオは約翰が基督を洗禮する圖を繪に描いて居た。レオナルドオは、同圖中に、衣類を手に持つ天使を一人描き込むだ。ところが、レオナルドオは、當時未だ一介の若者に過ぎなかつたのに、その天使を仕上げた精妙さは、師アンドレアの描いた人物よりも、遙かに立優つて居つた。アンドレアが再び繪具を手にしなくなつた理由は、正に玆に在るので、一小兒が、自分よりも多く知つて居ることを、苦々しく感じたからであつた。

レオナルドオに、扉掛けの下繪を注文されたことがあつた。この扉掛けは、金と絹糸を以つてフィアンドラの地に織らるゝ筈であつて、畫題は、地上樂園にアダモとエヴアの罪を犯すところ。その下繪に於いて、レオナルドオは、明暗濃淡の筆使ひに、鉛白を用ひて調子を高めて、數限りなき植物の生えた草場を描き、幾種の動物を描き添へて、實に、根氣よさ、自然への眞實性、神知と雖も、之に類するものは出來ぬと思はれる位であつた。圖中に一つの無果花の樹があつたが、その茂葉の（透視畫法的に）前縮まりに見える、枝の派出の樣々なるなど、實に細心の注意を以つて描かれ、一個の人間が、是程までの辛棒強さを持ち得るかと、想像するだけでも、茫然自失するを禁じ得ない。また、一本の棕櫚の樹があつたが、棕櫚葉の放射狀の圓形は、偉大なる驚歎す可き技術を以つて描かれ、唯だレオナルドオの天才と忍耐とを以つてして、完成し得たと思はれた。此作品は是以上には進行されず、下繪は今も尙ほフィオレンツァに留まり、名家「美書」侯オタヴィアノ・デ・メディチの所有に歸した、といふのは、レオナルドオの叔父が、餘り長くなき前に、獻上したからであつた。

かういふ話もある。セル・ピエロ・ダ・ヴィンチが田舍の別莊に居た時、彼の百姓が、領地にて切り倒した無花果の樹から、自らの手で小圓形楯を作り、セル・ピエロに懇願して、どうか、フィオレンツァに持つて行つて、この上に繪を描いてもらつて下さい、と頼むだ。この百姓は捕鳥釣魚に巧みに、セル・ピエロには大變に重寶な男であつたから、彼は、頼みを快よく引受けて、偖て、楯をフィオレンツァに持參し、レオナルドオに、誰れからの依頼とも明言せずに、その上に何か描くやうに委囑した。レオナルドオは、或る日、楯を手に執つて見ると、歪むで無器用で細工が惡るい。彼は、それを火に炙つて歪みを直し、轆轤師の許に送つて、以前の粗製のぶざまな代物から、すべすべした細工の平坦したものにした。然る後、表面に胡粉地を地塗りにし、その他、レオナルドオ一流の用意を整へ、偖て、何を描かうか、それに出逢ふ者に、恰度メデウーサの首を見ると同樣の効果を惹き起して、恐怖せしむるものを描きたいと、意を凝すのであつた。この目的の爲めに、レオナルドオは、自分のほか誰れも入れない一室に、毛蟲、蜥蜴、蟋蟀、蛇、羽蟲、かまきり、蝙蝠、その他かういふ不思議なる動

物を集め、是等を色々に組み合はせて、實に怪異、恐怖す可き一動物を發明し、その吐息は空氣を毒し炎を燃やす此動物が、暗澹として且つ荒寥磽确たる岩窟より這ひ出るところを、繪に描いたのであつたが、開いた咽喉からは毒氣を吐き、目よりは火、鼻孔よりは烟を吹く有樣の不思議なる、途方もなき、妖怪腥惨を極めたものであつた。レオナルドオは此圖を描く爲めに、苦心惨憺して、死むた動物から立つ惡臭が室に籠めて耐へられざるものがあつたが、彼が藝術に對して抱く熱情は、それに感じぬといふ有樣であつた。百姓も、また父のセル・ピエロも、最早製作のことを忘れて問ひ合せもなくなつた時分に、仕事は完成し、レオナルドオは、父に、御都合の時、小圓形楯を取りに寄こして戴き度い、自分としては、仕事は卒へたのです、と申し送つた。そこで、セル・ピエロは、或る朝、レオナルドオの室を訪ねて、戸を叩くと、レオナルドオは、閉けて、少し御待ちを願ひたいと言つた。そして、彼は室に歸つて、楯を、光線に具合よく畫架の上に置き、更に、その光線を暗くする爲め窓を調節し、偖て、父に、室に通つて御覧を乞うた。セル・ピエロには、最初の一瞥に、斯るもののみ豫期しないで、驚いて飛び上つた。といふのは、眼前に見るものが小圓形楯であり、この怪物が單に繪に描いた形象に過ぎないことを、信じ得なかつたためであつた。父の一驚返るところを、レオナルドオはおさへて、言ふには、この製作は、製作の形態に勝つたといふものです。[illegible]

常に、楯といふものが豫想する効果[illegible]ル・ピエロにとつて、一個の奇蹟以上に思はれ、レオナルドオの[illegible]す可らざる着想を、非常に賞めた。それから、父は、内緒で、一店舗より、出來合ひの心臓に矢が當つたところを描いた小圓形楯を買ひ、それを、代りに、百姓に與へたところ、百姓は、一生涯、その恩惠を感謝したといふ。レオナルドオの描いた楯を、父は、そつと、フィオレンツアの商人に、金百デウカートで賣つた。すると僅かの月日のうちに、是がミラノ侯の手に入つた時には、商人は、金三百デウカートに賣つたといふ。

その後、レオナルドオは、聖母の圖を描いた。當は法王クレメンテ七世の所藏に歸して、非常に優れたる作であつた。その畫中に描き込まれたもののうち、彼は、硝子の花瓶に水を滿たし數種の花を差したのを、寫生して描いたが、その驚く可く生き生きと眞に迫つて居たばか、特には、彼は、花の上に露滴の宿るところを寫して、假令、本物と雖も、是れ以上眞實であり得ない、と思はれるほどであつた。アントニオ・セニといふのは、レオナルドオの親しき友人であつたが、此人の爲めに、彼は、フォリオ形の紙本に大海神の圖を素描で描いたが、その精妙さは、海神が全部生きて居るかの如く見せた。圖は荒れた海をあらはし、大海神の車は海馬によつて牽かれ、空想的動物、怪物、風神、を添へて居た。また、幾つかの[illegible]の頭が畫かれ、[illegible]

ジオヴァンニ、ガッディに贈り、その時、一節の警句詩を添付した。

ヴイルギリウス大海神を描き、ホメルスも描いた──
大海神は、馬を驅り、吠ゆる深海行く。
是等の詩人は、實に、心眼を以つて、見たれど、
ヴインチウスこそ、肉眼を以つて、見たれば、
彼等に優れること、無理ならぬ。

彼は、メデウサの首を油繪に描いて見やうといふ興味に驅られたことがあつた。このメデウサの首は、もつれた澤山の蛇が（毛髪の代りに）生え粧うたもので、人間の想像の及ぶ限り、最も變怪不思議なる發明であつたが、時間を要する仕事であるが爲めに、未完成に殘された。尤も、未完成は、殆ど全部の、レオナルドオの仕事の運命であつた。此繪は、コシモ侯の宮邸に、藝術上の優品中に保存されて、それと一しよには、一人の天使の頭部を描いた繪が置いてあつた。天使は一方の腕を空中に擧げ、他は、手を胸に當てて居た。擧げた方の腕は、前面に突出するを、肩から二の腕にかけて、前縮まり（の透視畫法）を以つて描いてあつた。

この天才が、彼の描く事物に、最大の浮き出しの效果を與へんと欲して、最も深き底調を得んが爲めに、暗い陰影の出し方に腐心し、普通の黒色よりも、もつと深き、もつと暗き陰影を生ずる（特殊の）黒色を索めて已まず、是によりて、光りを更に透明に出すことに成功したことは、實に驚異に値する。但し、此方法は、終に、非常に繪を暗くして了つて、彼の畫面には光がなくなり、描いたものは、事物を晝間見た明瞭なる感じを失ひて、夜見たものを模したとしか、思はれないやうになつた。けれども、是は、事物に浮き出しの效果を出來るだけ與へて、藝術の極致と完成とに到達せんと志した結果にほかならぬ。

レオナルドオは、鬚や毛髪の自然に生えるまゝになつた、怪奇なる人物の容貌に興味を持ち、若し、自分の氣に入つた顏に出逢へば、一日中あとに跟いて歩き、その顏を記憶に疊み込むで、偖て、家に歸つて、之を描くのであつたが、その時は、恰かも、その人が面前に在るが如くであつた。此種の人物の畫は、男のも女のも、今日澤山に見ることが出來る。余（ヴァサリ）も亦、度び度び引合ひに出した大家素描集に、レオナルドオ自身がペンで描いた人物の顏數葉を所持して居る。アメリゴ・ヴェスプッチを描いた素描も此種のものにて、それは、老人の最も美しき顏を、木炭にて描いたものである。同じく、浮浪民の隊長スカラムッチアの肖像も、此種に屬す。是は、後にジアムブルラリより讓渡されて、聖ロレンツオ寺の住職、アレッツオのドナト・ヴァルダムブリニの所藏に歸して居た。彼は、また、賢者禮拜の圖を描いたことがあつた。それは數多き美しきものを含み、特に人物の顏の描寫に於いて、優れて居た。畫はロッジア・デ・ペルッチの向ひ側のアメリゴ・ベンチの家に在り、矢張りレオナルドオの他の作と同じく、未完成に捨てて置かれた。

ミラノ侯ジオヴアン・ガレアッツオ薨じ、ロドヴイコ・スフオルッアが位を襲いだのが一四九四年、その年に、レオナルドオは、大なる名聲を持つて、ミラノに送られて來た。ミラノ侯は立筝の音を非常に愛し、レオナルドオは、それを彈く爲めに招聘されたのであつた。その時、レオナルドオは、自分の手で作つた樂器を持參し、それは、大部分銀製で、馬の頭蓋骨の形に作られて居た。此形は怪奇新機軸なるもので、調和量大きく、音の共鳴が豐富である爲めに、斯く作られたのであつた。此樂器を用ひて、レオナルドオは、ミラノ侯邸に集つた有らゆる樂人達に優越した。それに加へて、彼はまた當代第一等の即興詩人でもあつた。侯はレオナルドオの驚く可き講説を聽き、信ずることの出來ないほどの彼の天才を、愛する情に耐へなくなつた。レオナルドオは、侯の委囑に應じて、「基督降誕」の拜壇畫を描き、侯は之を皇帝に贈物にした。

ミラノに於いて、彼は、また、聖マリア・デルレ・グラチエ寺の聖ドメニコ派宗團の爲めに、「最後の晩餐」圖を描いたが、是は、最も美しき、驚異す可き製作であつた。使徒等の顔に、レオナルドオは、餘りの壯嚴と美とを與へて了つたので、基督の顔は、未完成に殘された。基督の姿を想像して要求せらるゝ天國の神性といふものを出すことは、到底、人力の及び難いところと思ふたからであつた。斯る事情で、この作は、殆ど完成に近づいた儘、殘り、單に、ミラノ人のみならず、總く外國人によつても、常に大なる讃崇の標的となつた。レオナルドオがこの「最後の晩餐」の光景に於いて、想像し表[illegible]た旨く成功したのは、誰れが主を裏切るであらうか、それを知りたいと、使徒等の胸を襲うた不安疑惧の情であつた。それ故に、(居並ぶ)使徒達の顔には、愛、恐怖、怒り、更にまた、基督の意味を解し兼ねた悲しみが、宿つて居た。是等は、皆に、詩人の讃嘆を禁じ得ないところであるが、また、それに劣らず、是等と對照におかれたるユダの強情、憎惡、裏切りの心も、稱嘆に値するものである。その上、製作の如何なる小部分と雖も、信ず可らざる程の勤勉を示し、(例へば)食卓布の如きに到るまで、布地の質を寫すこと眞に迫り、縱令、木綿布それ自身と雖も、それ以上、本物らしくは見えまいと思はれた。

言ひ傳へによると、その場所の僧院長は、レオナルドオに、仕事を完成するやう、執濃く強要して已まなかつた。一體、この畫家のレオナルドオといふのが、時によると、小半日も續け樣に、(畫の前に)ぼんやり思ひに耽つて居るなどは、僧院長には、どうも解せないので、彼の考へによると、畫家も、恰度、庭に地面を堀る者のやうに、少しも筆を止めることなしに、描いて了へばよいと思はれた。そこで、彼は不服で、ミラノ侯の許に訴へ、強請して已まないので、侯も、仕方なしに、レオナルドオを迎へにやり、そして、言葉上手に、仕事を完成するやう、然し、自分から言ふのは、僧院長の強請に已むを得ず言つて居るのだと解るやうに、うまく話した。レオナルドオは、侯の理性のと鋭くして解りのよいことを知つて居るので、此機會に就い

て、僧院長には決して話したことはなかつたいろいろの打開け話を、侯に、詳しく話すのであつた。即ち、藝術について論じて、高き天才を持つ人は、手を働かせて仕事をしない時こそ、却つて、最も多く製作をして居ることがある。それは、心に創意を求め、完全なる觀念を形成せんとする、それを、後になつて、手が働いて、既に頭腦裏に想ひ浮べられたる面影を源として、表現し寫貌するに過ぎない、からいふ事情を、侯に會得の行くやうに、話すのであつた。そして、附け加へてレオナルドオのいふには、此所にまだ二つの顏を描く可くして、なほ描かれずに缺けて居る。一つは基督の顏、これを、彼は、地上に求め得やうとは望まれない。神が人體を取つて顯はれたその御方に附屬す可き美と神德とを、人間の想像力が思ひ及ばうとは、考へられないからである。今一つ、描かうとして未だ描けずに殘つて居る顏がある。それはユダで、同じくレオナルドオは考へを凝らしたが、ユダほど殘忍なる心、數多き恩惠を受けたあとで、主であり此世の創造者である御方を裏切らう、と決心するほどの心を持つ人間の容貌を表はすが爲めに、一つの顏を想像することは、到底不可能であると思はれた。『但し、このユダに就いては、一つ顏を搜して見ませう。けれども、若しも、尙ほ、よりよい顏が見當らぬ場合には、茲のこの執濃い、無分別の僧院長の顏がありますから、事を缺くことはありますまい。』と、答へた。それを聽いて、ミラノ侯は大笑ひをされて、レオナルドオの言ふことには百も千も理由がある、と言はれた。斯くて、憐れなる僧院長は、しどろもどろとなつて、庭の仕事の監視に出て行き、レオナルドオをば惱ませなくなつた。レオナルドオは、ユダの顏だけを立派に仕上げ、それは實に詭詐と非道との眞の肖像であつた。基督の顏に到つては、嚮に言つた通り、未完成の儘に殘された。構圖といひ、また仕上げの比較を絶したる丁寧さといひ、此畫の氣高き品位は、フランス王をして、之を己が國に持歸らうと願はせた。それが爲め、王は、有らゆる手段を運らして建築家を求め、木製及び鐵製の橫木を渡して壁面を強め、之を完全に運搬に耐へるやうにしよう、それが爲めに、費用は幾らかゝつても構はないとまでに、望まれたのであつたが、畫が壁に描かれてあつたといふ事情は、斯程の國王の希望と雖も、實現を不可能にし、壁畫は依然ミラノ人の許に殘されて居る。レオナルドオが「最後の晩餐」を描いた食堂には、他端の壁に、古い畫風にて「基督受難」の圖が描かれてあつたが、そこに、レオナルドオは、ロドヴイコ侯及び長子マッシミリアノの肖像を描き、他の側には、侯の夫人ベアトリチエと次子フランチエスコを描いた。兩子は共にその後ミラノ侯になつた。是等の肖像は、いづれも、人間業とは思はれぬほどに描いてあつた。

レオナルドオが此製作に從事して居る間に、彼は、ミラノ侯に、驚く可き大きさに靑銅の馬を作り、その上に、侯の（父の）肖像を乘せて、記念像にすることを申出た。そして、彼は仕事を初め、進行して行つたが、餘りに規模大きく、到底完成出來るものではなかつた。人

間の判斷はいろいろにて、區々嫉忌から惡意を持つものもあるので、なかには、レオナルドオは、ほかの仕事の場合と同樣、此仕事を仕上げる目算もなく初めた、餘りに形が大きいので、それを一つの塊として鑄やうとする時、信ず可らざる困難に遭遇したと、かういふ者もあつた。實際、レオナルドオの作品は大部分未完成に殘されて居るので、結果から判斷して、人は彼について、かういふ考へを持つは、あながちに無理ならぬことと考へられるのでもあるが、然しながら、本當の理由は、彼の廣大なる、また、最もすぐれたる心は、餘りに願望に滿ちて居たが故に、却つて實現から阻まれたと、信ぜらるゝのである。優秀の上にも優秀を求め、完全のまた先の完全を望むで已まぬ願ひこそ、總ての原因であつたこと、丁度我等が詩宗ペトラルカが道破して、『仕事が願望によりておそくされる』と言つたそれであらう。そして實にレオナルドオが粘土にて作つた（この騎馬像の）大きい原型を見た人は、誰れも、是以上に美しき超絶的の製作を見たことが無い、と判斷したのであつた。この原型は（ミラノに）殘つて居たが、遂に、フランスのロドヴイコ王（ルイ王）と共にフランス人が來襲するに及むで、彼等はそれを粉々に破壞して了つた。フランス人は、また、完全と呼ばれて居た蠟製の小原型も壞し、レオナルドオが研究の爲めに作つた馬の解剖の帳面も、彼等の爲めに失はれて了つた。

それから、レオナルドオは、更に大なる注意を拂つて、人體の解剖に依を仰け、醫術研究に就いては、優れたる醫者マルク・アントニオ・デルラ・トルレに扶けられ[illegible]また[illegible]た。マルク・アントニオ・デルラ・トルレは、當時、パヴイア大學に[illegible]義をなし、また、このことに就いて著述もなし、聞くところによると、ガレノの學理を醫術の問題の解説に適用することを始めて、來、無知の濃厚廣大なる暗黑に包まれて居た解剖學に、眞の光明を[illegible]げた最初の一人であつた。此問題に於いて、彼は、レオナルドオの天才、仕事、及び手によつて助力されたことは驚く可きものにて、レオナルドオは帳面を作り、自らの手にて解剖したものを、細心の限りを盡して、赭きチョークにて素描し、ミンにて書き起しをなした。それによつて、彼は有らゆる骨格を示し、次に、順序に從つて、有らゆる神經を附け加へ、筋肉を以つてこれ等を覆ふこと、第一種は骨に附着し、第二種は身體を確つかりと保ち、第三種はそれを動かすもの、といふ工合であつた。これ等圖形の側らに、彼は、一部分一部分（相照應して、覺え書の）文字を書きつけて居たが、その文字は頗る見苦しいもので、左手を以つて、後退讀に書かれて居る。それ故に、是等は、讀みなれない人々には了解することが出來ない、といふのは、[illegible]に鏡に寫して見なければ、讀むことも出來ないからであつた。是等、人體解剖の研究書類は、大部分、ミラノの紳士、フランチエスコ・ダ・メルツオの所藏に歸して居るが、此人は、レオナルドオの在世時、美しき青年にて非常に鍾愛せられ、現在も亦た、上品なる優しき老人である。彼はレオナルドオの解剖書類を[illegible]る[illegible]至寶の遺物であ

るかの如く大切にして、鄭重に莊嚴し、かねて、それ等と一緒に、幸福なる記憶あるレオナルドオ師の肖像も、持つて居る。是等の書類を讀む人々にとつては、レオナルドオの神の如き精神が、如何によく、藝術に就いて、筋肉、神經、血管、有らゆるものに就いて、是ほどの勤勉を以つて論議して居られたか、到底、この世に有り得べからざるが如く思はるゝのである。ミラノの一畫家××××（缺字）の所藏にも、レオナルドオの書き物が幾らかあり、それ等にも、文字は後退的に左手で書かれ、繪畫に就いて、素描及び色彩の方法に就いて論じたものであつた。此人は、餘り永くない前に、フィオレンツァへ來て、余を訪ね、之を印刷に付したいと希望されて居た。その後、彼は計劃を實行する積りでローマに持參せられたが、爾後如何なつたか、余は聞知して居ない。

偖て、レオナルドオの作品の話に戻ると、レオナルドオのミラノ滯在中、フランス國王が（同市）に來られた。レオナルドオは、（國王をミラノ市が歡迎する爲めに）、何か珍奇の趣向を凝らすやうに依賴されて、一つの獅子を作つた。獅子は數歩を歩み、それから胸を開けると、胸の中は（フランスの國花の）百合花で充滿して居る、といふ仕組みになつて居た。ミラノに居る間に、彼は弟子としてミラノ生れのサライを採用したが、上品と優美とを具へたる極めて綺麗なる青年にて、美しき前髮房々と卷き垂れ、レオナルドオは特にこの髮を愛した。彼はサライに藝術上の種々なることを教へ、ミラノにてサライ作と稱する幾つかの作品は、實は、レオナルドオによつて筆を加へられたものである。

レオナルドオはフィオレンツァに歸つて來た。フィオレンツァのセルヴィ修道僧は、彼等のアヌンチアタ寺の大拜壇用の畫の製作を、フィリッピノに依賴してあつたが、レオナルドオは、それを聞いて、さういふ製作ならば、自分は喜むでしたいのだが、と言つた。フィリッピノは、之を知つて、人の好い彼のことであるから、自らその計劃から退き、そこで、修道僧達は、レオナルドオに畫を委囑し、それが製作の爲め、彼を家に入れ、彼及び彼の家族全部の出費を引受けた。然るに、レオナルドオは、長い間、世話をかけ放しにして、而も、何一つ仕事を初めなかつた。たうとう終ひに、彼は下繪を一つ作つた。聖母と聖アンナが基督と一緒に居るところを表はしたもので、それは、啻に、有らゆる技術者を驚倒せしめたるばかりでなく、下繪が完成した時、男女老若、二日に亘つて、まるで祭禮に出かけるかの如く、レオナルドオの爲した不可思議を見んが爲めに、彼の室に詰めかけ、皆な、驚嘆措くところを知らなかつた。何故といへば、聖母の顏には、單純と美とが基督の母たる婦人に神的品位といふものを附與す可き總ての面影が現はれ、彼女は、慈愛深く膝の上に抱く我が子の美を見て、全く悅びに滿ち充ち、然も聖處女らしく、愼しみと謙遜とを失はざるところを示さんとしたのであつた。そして同時に、聖處女は最も純潔なるまなざしにて、幼兒である小さきヨハネが、下邊に、小羊と

遊むで居るのを見守つて居る。老母の聖アンナも微笑を禁じ得ない。己が地上の子孫の神になるを見て、喜悦の頂點に在ればこそであつた。是等は、質實に、レオナルドオの知慧と天才より生れ出でたる考案であつた。此下繪は、後にフランスに持つて行かれて了ふのであるが、それに就いては、後來說くところがあらう。彼はまたアメリゴ・ベンチの妻ジヴネラの肖像を描いたが、實に美作であつた。(セルヴイ)修道僧に賴まれた拜壇畫の製作に到つては、レオナルドオは放棄して顧みず、再びフイリッピノに戻つて委囑せられ、フイリッピノは途中で死去した爲め、完成されずに畢つた。

フランチエスコ・デル・ジオコンドオの爲めに、その妻モンナ(敬稱)リサの肖像を、レオナルドオは描くことになつた。そして、四年以上も、製作に辛苦を重ねて、然も未完成のまゝ殘した。此作は今はフランス國王フランチエスコ(フランソア)の所藏に歸して、フオンタナブレオ(フオンテンヌブロー)離宮にある。藝術が如何に近くにまで自然を模倣し得るものか、この問題を解りたい人あらば、モンナ・リサの繪を見て、容易く理解するであらう。何故なれば、此肖像に於いては、微妙纖巧を盡して人間わざが描き得る限り、有らゆる(自然の)細部が、眞に迫つて描かれてあつた。眼は、生きて居るものゝ眼に常に見らるゝ、濕の光澤と水分ある耀やきを有つて居る。そして、眼の周圍には、薔薇灰色が取りまき、睫毛が生えて居る。是等は、ただ、纖細たる觸感を以つてしてのみ、描寫され得たのであつた。眉毛に到つては、レオナルドオは、樣、こゝには濃く、あそこには薄く生え、また肉にあく毛孔の方向よつて生える向きが異る——正にこういふところまで描出したのでつたから、本物の眉毛と雖も、是れ以上、自然であることは不可能であつた。鼻は、美しき鼻孔の稍薔薇色に柔かく、まるで、生きて居るやう。口は、その開き工合といひ、また、その末端が、唇の赤色から顏の肉色に連接するところ、實際、色とは見えず、正に、肉であつた。咽喉の凹みを、氣を付けて視る人は、そこに脈の搏つのを發見した。實に、此畫の描かれて居る有樣は、如何なる氣位ある上手者を呼び出して來やうとも、之を見せれば、戰慄し、恐怖するほかはないと、かう言つても、決して過言ではないのである。レオナルドオは、また、こんな工夫も用ひた。モンナ・リサは非常に美人なので、レオナルドオは肖像を描いて居る間、彈き歌ひ絶えず道化る者共を、雇つておいて、彼女を快活に保つておく工夫をした。畫家が肖像を描く時、屢々悲哀的なる心持を繪に與へて了ふのを避けやうといふ用意であつた。レオナルドオの此畫のうちには、うれしき微笑がある。それを見ると、人の世のものより寧ろ、神の國のものであつた。それは正に生きて居る、此ほかに生きて居る道はないといふ意味に於いて、世の驚異とせられた。

この神の如き技術家の作品の優秀は、彼の名聲を稱甚たらしめて、凡そ藝術を嗜ぶ人、——殊に、就中、フイオレンツア全市の人々を擧つ

て、レオナルドオは彼等に何か記念物を殘さなくてはならぬと、審議した。何か彼に世の視聽をひく大作を委囑し、それによつて、市一般がレオナルドオの作品に現はるゝ知、德、判斷によつて飾られ、また光榮を受ける方法を、市民は議するのであつた。市の警衞監と主立つた市民との間の相談の結果は、市役所の大會議室が、ジュリアノ・ダ・サン・ガルロ、呼名イル・クロナカのシモネ・ポライウオリ、ミケランジオロ・ブオナロッテイ、バッチオ・ダニユロ等の意見と判斷とによつて建築考案せられ、このほど、非常なる急速工事で出來上つたので、市の公けの命令によつて、レオナルドオに何か立派な製作をするやうに註文された。そして、前記の大會議室が、正義の警衞總監ピエロ・ソデリニによつて、彼に割當てられた。レオナルドオは仕事を進める爲めに、聖マリア・ノヴエラ寺内、法王の廣間とよぶ室に、下繪を初めた。畫題は、ミラノのフイリッポ侯の軍隊長ニコロ・ピッチニノの史實、一群の騎馬兵が、軍旗を奪ひ合つて戰ふところを描いたもので、この疾驅の圖を構想した驚く可き思考に於いて、正に、卓絶、熟達の限りを盡したる作なりと、世間一般によつて認められた。憤怒、憎惡、復讐心は、人物に於いて現はれて居るのみならず、乘馬の表情に於いても現はれ、そのうち二疋は、前脚をからめ合つて、齒を以つて、恐ろしき嚙み合ひをなす有樣、まるで、馬上の闘士が上述の軍旗を奪ひ合ふ力戰と優り劣りはない。軍旗は、一人の闘士、旗の棒を引き摑み、からだをうしろに仰つ向け、同時に、馬に拍車を入れて疾驅せしめ、肩の力で、四人の手より、力づくで、捥ぎ取らうといふのである。（敵味方）四人のうち、二人は、片手に旗の棒をおさへ、片手に劍を振り上げて、棒を切斷して了はうと夢中になつて居る。また一人の赤い帽子をかぶつた老兵は、同じく片手に旗の棒を握り、片手に彎曲刀を振りかざし、憤怒に滿ち大聲に喚びつゝ、棒をおさへる人々の兩手を切斷しようとして居るが、その人々は、また、齒ぎしりを嚙み、最も狂暴なる身構へをして彼等の軍旗を防禦する。また、戰馬の（踏み狂ふ）脚の間には、地上に、（透視畫法の）前縮描法で二人の人物の相闘ふところが描かれ、地面に倒れた一人の上には、他の兵士が押し乘つて、短刀を持つ手を高くさし擧げ、今や、全身の力を籠めて、之を敵の咽喉に突入して、生命を斷たうとするを、相手は、また、手足を悶きに悶いて、死を逃れやうと、焦つて居る。レオナルドオが、是等闘士等の軍裝を描くに示したる着想力は、到底、記述をなし難い。軍裝、甲飾り、その他の裝身具、實に變化を極めたものである。また、馬匹の形狀、その筋肉の立派さ、品よき美しさ、是等に就いては、レオナルドオに優つて描き得る畫家は、此世に無く、彼が示したる熟達は、殆ど、信ず可らざるものがある。時に傳へるところによると、レオナルドオは、此下繪を描く爲めに、實に、巧妙に案出された踏み臺を拵へ、それを狹めれば高くなり、ひろげれば低くなる、自由自在なるものを使つたといふ。また、壁面に油繪具で描かうと思ひ立ち、繪具を壁面に定着させるやうに、一種の化合物を拵へたところ、

それは實が甚だ粗悪なるもので、レオナルドオが大會議室で繪を描き續けて居るうち、既に早く、繪具は流れ始め、彼は、斯くの如く、作畫の害はれ行くのを看て、直きに描くことを中止して了つた。レオナルドオは、大きな精神を持ち、有らゆる行動に於いて、實に寛宏なるものであつた。かういふ話もある。毎月、(警衛總監)ピエロ・ソデリニから、彼は一定の手當を受けるきまりであつたが、或る時、彼は此金を引出しに銀行へ行つたところ、現金掛は一錢貨の紙包みを幾つも彼に渡さうとした。レオナルドオは、「自分は一錢貨家ではない、」と言つて、受取を肯じなかつた。(また、仕事を果さないといふので)彼は、詐欺をしたと非難せられ、ピエロ・ソデリニはひそかに彼を惡く言つて居たことがあつた。すると、レオナルドオは、友人達を說いて醵金してもらひ、その金を持つて、返濟に行つた。ピエロはそれを受取らなかつた。

法王レオネが法王位に選擧された時、ジエリアノ・デ・メディチ侯と共に、レオナルドオはローマへ行つた。此法王は科學的研究に多大の興味を持ち、時には、錬金術に耽つて居られた。そこで、レオナルドオは、蠟を煉つて非常に薄い中空の動物形を作り、歩きながらそれに氣息を吹き入れて、空中に飛ばしたりなどした。風が無くなると、是等は地上に墜ちた。(法王離宮)ベルヴェデレの葡萄園丁が實に奇怪なる蜥蜴を見つけた時、レオナルドオは、ほかの蜥蜴の鱗皮を剝いで、翼を作り、水銀の混和物を塗つて、之を蜥蜴の背中に取りつけ、蜥蜴が歩むと、翼は顫動して

角をつけ、鬚までつけて、之を馴らし、箱に入れて持つて居た。友達に此蜥蜴を見せると、その怖ろしさに友達は逃げ去るといふ譯であつた。彼は、また、屢々羊の小腸をとつて、鄭寧に脫脂し、洗ひ淨め、非常に薄いものに仕上げて、一つの掌のうちに納まつて了ふやうにした。それから、隣りの室に鍛冶屋の吹子を据ゑつけ、腸の一端を當てがつて、風を吹き入れると、腹は膨れて、隨分大きいレオナルドオの室一杯に膨がり、居合はせた人々は、隅の方に縮らなければならないやうにした。其で、透明にして空氣に滿つるだけのものが、初めは少ししか場所を取らなかつたのに、竟には、大場面を占領することを示し、之を才能に喩へたりした。レオナルドオは、數限りなく斯るいたづらをなし、鏡面(の反射)を研究し、繪を描く爲めの油、描いた繪を保存する爲めの塗布料を求めて、最も不可思議なる方法を試みた。

此時レオナルドオは、法王の日記役ベシアのバルダサーレ・テウリ二氏に頼まれて、聖母が小兒基督を腕に抱いて居る小畫を描いたが、それは無限の勤勉と技術を盡したるものであつた。けれども、或は畫板に胡粉地を地塗りした者の失策か、或は、定着料顔料に澤山の、そして、思ひつきの混和物を用ひたるレオナルドオの責任か、此畫は現在既に甚だしく害はれて居る。また他の一小畫に小兒の肖像を描いて、典雅美麗、正に驚く可きものがあつた。是等は二つ共に、今日、ベシ

ナに在り、ジユリオ・チヴリニ氏の所有に歸して居る。傳記によると、法王が一つの製作をレオナルドオに委囑した時、彼は直ちに油と薬草とを蒸溜して、塗布料を作り始めた。之を見て、法王は叫んだ「おやおや、此人は何事も成し遂げる人ではない。此人は、仕事に手をつける以前に、もう完成した上のことを考へて居る。」

ミケランジエロ、ブオナロッテイとレオナルドオとの間には、大きい侮蔑があつた。ミケランジエロは、法王によつて、聖ロレンツオ寺の建築前面の設計のために、招かれたのであつたが、此仲違ひにより、競技を厭うて、ジエリアノ侯の口添へを以つて、フイナレンツアを去つて了つた。レオナルドオは、これを聞き、また、去りてフランスへ行つた。フランス國王は、既にレオナルドオの作品を所有し、彼に傾倒して居て、彼が聖アンナの下繪を繪具で描くやうに希望して居た。然し、レオナルドオは、例の調子で、長い間、唯だ言葉の約束だけで、遲延して居た。

遂に、年寄り、幾ケ月も病氣に罹り、最早、死の近きを悟つて、彼は、カトリックの信仰、善良なる、神聖なる基督の宗教の事柄を、誠心學ばんことを願ひ、澤山の歎息を以つて、懺悔をなし、罪を悔いた。それから、縱令、自らの足の上に身を起すことは出來なかつたとは言へ、友人下僕の腕に支へられて、寢床の外に出で、敬虔に、最も聖なる聖約を受けたいと願つた。その時、丁度、常々彼を愛して訪問せられるフランス國王が、突然、到着された。レオナルドオは、敬意を表はさうと、身を起して寢床の上に座り、病氣とその模様を述べ、如何に自分が、働く可き筈であつた藝術の爲めに充分働かずに、神にも此世の人の道にも悖つたと、口説き告げた。すると、彼は、死の先驅である痙攣に捕へられた。それが爲め、國王は立ちあがり、レオナルドオの頭をおさへ、彼が苦痛の輕くなるやうにと、彼を助け恩惠を注がれた。レオナルドオの神の如き心は、今や、是以上の名譽のあり得可からざることを知つて、國王の腕に抱かれたまゝ、息を引き取つた。時に年七十五歲であつた。

レナルドオの死が、凡そ彼を知れる人々を悲しませたことは、尋常一樣ではなかつた。何故ならば、彼ほどに繪畫藝術に光榮を與へた人は、未だ曾つて無かつたからである。最も美しき彼の風丰の輝やきは、有らゆる陰氣なる心を平らかにした。彼の言葉を以てして、有らゆる強情の意思を、否、應、好き自由に轉ぜしめた。彼の肉體力は、如何なる狂暴なる激怒をも制禦し、右手一つで、扉鐶の鐵の懸輪、或は馬蹄鐵を、鉛の如く捩ぢ曲げた。彼の寬量さは、有らゆる友達を、貧富の差なく、唯だ知能と德とを持つて居る限り、寄せ集め、養ふのであつた。如何に卑しき、粗末の住居であつても、彼の行動に於いて、彼は飾り、光榮あるものにした。此理由を以つて、實に、フイオレンツアは、レオナルドオの出生によつて非常に大なる贈物を受け、彼の死によつて無限無量の損害を蒙つた。繪畫の技術に於いて、彼は、油で描く方法に、或る暗さを附け加へた。此暗さ（陰翳）の

さ）を利用してこそ、吾人近代人は、劇中の人物に、力と、浮出す感じを、大いに與へることが出來るやうになつたのである。彫塑術に於いては、聖ジオヴアンニ（洗禮堂）の北面扉の上に載る三個の青銅像によつて、（彼の熟練の）證據が示されて居る。是等の青銅像はジオヴアン・フランチエスコ・ルスティチの製作であるが、レオナルドオの意見に從うて考案されたもので、設計圖案といひ、鑄物の仕上げといひ、近代に見られた最も美しき、最も申分なき作である。レオナルドオによりて、吾人は馬の解剖研究を持ち、それよりも、もつと完全なる人體解剖もある。縱令、彼は言葉を以つて勞作したこと、實行よりも、遥かに、並ち優つて居たとは言へ、斯程までに多方面なる神の如き才能によつて、彼の名と聲譽は、決して、消えることはないのである。レオナルドオを賞めて、ジオヴアン・バテイスタ・ストロッチは、斯く頌して居る。

「彼一人のみ、有らゆる人々を征服した。フイデイアスを凌駕し、アペレスを凌駕し、總て彼等の戰勝軍を凌駕した。」

ジオヴアン・アントニオ・ボルトラフイオはミラノ出身、甚だ有能なる藝術家にて、レオナルドオの弟子であつた。ボロニア市外のミゼリコルデイアの教會の爲めに、油繪畫、一個、非常に注意して描いた。[illegible]聖母が幼兒を膝に抱へ、傍らに洗禮のヨハネ、[illegible]の聖[illegible]て居るところを、實物から描き添へた。既に名作である。此繪の[illegible]

ボルトラフイオは署名し、且つ自らレオナルドオの弟子と名乘つて居る。彼はミラノその他の都市に種々製作をなしたが、茲には、傑作を擧げておけば足りる。また、マルコ・ウッジオニも弟子の一人にて、ミラノの聖マグア・デルラ・パシエ寺に、「聖母の死」の圖、ガリラヤの「カナの結婚式」圖を描いた。

經濟學の研究方法について

猪俣津南雄

◇

私はこゝで經濟學の方法論を講ずるつもりはない。「經濟學全集」の計劃が發表されて讀書界の注意が特に經濟學に向つてゐるのを機とし、經濟學の研究とその方法とについてたゞ所信の一端を書くのである。

今日の日本における吾々の年輩のマルクス經濟學徒の多くは、マルクス經濟學に入る前にみな熱心にブルヂョア經濟學を勉强した。私もその一人であつた。

青年學徒としての私は哲學を熱愛した。經濟學においては、最も純理的である「價値論」から始めた。しかし私はそこにひつかかつてしまつた。といふ意味は、私がそれに陷溺したといふのではない。反對にひどい不滿を感じたのであつた。價値の理論の到るところにほころびが見え、矛盾と背理が感ぜられ、嘲笑なしにはそれに對し得なかつたにも拘らず、しかも滿足な批判を加へることが出來なかつたこと、――そのことの故に私はもがいた。マルクスの勞働價値說に至つては、敎へられた通り盲目的に頭から否定してゐたのである。從つて私は飽くまでも主觀主義の、個人的觀點からの價値論、卽ちブルヂョア的價値論の立場に立つてをりながら、その價値理論がどうしても腑に落ち兼ねた。私は突き進めるだけ突き進まうとした。そして骨折れば骨折るだけ、私はますます批判的になるだけだつた。だが、それは全く消極的破壞的な批判に過ぎなかつた。私は、自分の批判を積極的建設的なものたらしめるために礎石をもたなかつたのである。

「法學士河上肇著、經濟原論」（大正二年十一月發行）といふ一書は、今でも私の書架にある。それは、當時における世界的最高水準のブルヂョア的價値理論を最も明快懇切に說いたものである。（そしてその後にはもはやブルヂョア經濟學者による價値論の發展はないといつてよい。）それほどの價値論が、たあいもない假定に出發し、みじめな循環論法に終つてゐるのを見出した時、私はもはや價値論を素通りにするより外に仕方がないと思つてしまつた。

素通りにするといつても、近頃のブルヂョア經濟學者の一部の人達がしてゐるやうに、價値論ぬきの經濟學で滿足しやうとしたのではなかつた。價値論のコップ・ウエッブからはひとまづ脫け出してしまう

と同時に、それはそれだけのものとして頭に置いて研究の歩武を進め、經濟學の全面をひとわたり見究めやうと決意したのである。從つて私は、そのうへでもう一度價値論に戻れるといふ希望は決して捨てなかつた。もつとも其時の私は、もう一つの道をとればとれたのであつた。それは、現在のブルヂョア經濟學者の大多數がしてゐるやうに、ブルヂョア的價値論の諸前提を無批判的に許し、合はない辻褄を無理にも合せる折衷主義の價値論、――言葉だけの價値論のうへをすべることであつたが、私はそれほど小器用でもなかつたし、第一自分の學問的良心がそんなかるわざを頑強に否定した。

◇

幸にも私は間もなく外國で勉强する機會をもつた。親切な教師と、豐富な文獻とをもつ片田舍の學校で、みつしりと五ケ年間研究することが出來た。一方では、好きな哲學の勉强を續けたが、同時に理論經濟學のすべての分野を究めることも怠らなかつた。時々、他の學校の教師にもついて啓發されやうと力めた。

だが、研究は進んでも、「經濟學」に對する不滿は依然として强く殘つた。自分がすでに教師達とほゞ同一の水準に身を置いて究理し討論し得るだけの、「經濟學」の把握を得てしまつた時には、かの維持し得べからざる價値論のうへに築かれた此の學問の全體はますます收拾しがたい破綻の體系に過ぎなく見えて來た。それは、虛妄と眞理と半眞理とのゴツタ煮であるといふ外はなくなつた。しかも一方、マルクス經濟學に對しては、その緻密的確なる論理によつて壓倒されながらも、尙ほ妙な輕蔑と、一種漠然たる反感とを禁じ得なかつたのである。いま顧りみればそのことは、若い頭に最初叩き込まれた偏見と先入主とが如何に根强くわざはひするかを思はしめるのみ――。で、私はまたもゴマ化しの、折衷的な立場に追ひやられる危險に瀕してゐたのであつた。

けれども同時に、私の世界觀は發展しつゝあつた。觀念論的から實在論的へ、唯心論的から唯物論的へ、――一口に言へば空想的から科學的へ――。それと共にまた私は、理論と實踐との結びつきに對して急速に眼醒めつゝあつた。プラグマチスト、ジョン・デューエの「實驗的論理」は、一論文集にすぎなかつたが、當時の私を、方法論における全く新しき觀點へ引上げてくれた。

『最高利潤を目標とする生産諸要因の結合について』といふ私の學位論文は、學位のために書いたといふ限りにおいて當然につまらぬものであつたが、しかしこの論文のための困難なる思索の過程は意外の副産物を生みだした。經濟學における客觀的、社會的な立場の絶對的必要、――それを私は、何人からも教へられずに、自分自身の思索に即してハッキリと感知し得たのである。だが、皮肉にも、その客觀的、社會的な立場こそがマルクス經濟學のみの立場であり、その立場の故にマルクス經濟學のみが理論的に難攻不落であることを、私はまだ少しも悟らなかつた。

◇

世界戰爭が終らんとしてゐた。

前後十年の研學によつて自分はひとかど賢くなつたやうにも思はれた。時には輝ける勝利者のやうにさへ思はれた。

だが、少しもさうでないやうにも思はれた。自分が學びとつた哲學や經濟學の知識は、自分個人には生活と地位とを保證するでもあらう。しかし、それ以外の何に役立つのであらう? 謂ふところの知識は、自分をさへ滿足せしめないではないか。「知識」だといふ、——しかしそれが自分を通じてどんな永遠性に根を据ゑてゐるのか? せめては、今までの如何なる「生活」と結びついてゐるのであらう? この「知識」をもつて私はいかなる人々と共に生きやうとしてゐるのか?

自分は長いあひだ個人主義者であつた。自我の絶對が、許された前提として常に頭のどこかにあつた。おもひあがつた時の自分は——たしかに眞面目に——全社會をも、全人類をも考へた。しかしその自分は、「ニーチエの超人」としてのみそれらに對してゐたではないか。(いま顧みればそのことは、小ブルヂョア・インテリゲンチアに特徴的な生活態度、意識傾向の、尖端的な現はれにすぎなかつたのは言ふを俟たない)。『神になる意思』!! だが、——ハハ、たつた孤りで?!

不安と動揺と反省の一時期を通過して新しい發奮の時が來た。それは、抽象的なものとしての抽象的なものに對する強き嫌惡と、孤立の自我の虚妄に對する眼ざめとを伴つてゐた。——吾々は、生ける全體の一部分として、生ける問題の、、、、のために闘はねばならぬ。知識と學問と理論とは、そのための一武器であらねばならぬ。

これは眞實に、自分個人の生活態度、自分個人の世界觀における飛躍であつた。そしてその飛躍を促したものは、たしかに世界そのものの飛躍であつたであらう。抽象的なものとしての外は曾つて私の意識にのぼらなかつた「、、」がそのとき、、、、、その創造力が、、、、しつゝあつた。壓倒的に認識を迫つたところの此の、、、、、は、社會科學における歷史的立場の、、、を何よりも雄辯に敎へ込んだ。私は、期せずして「、、」を注視した。否な、せしめられた。それは、プラグマチストの影響下に私が我物としてゐる「眞理の相對性」——多かれ少なかれ主觀的立場からの——とは全く異つた、ヨリ遙かに高き水準に置かれた「科學的相對性」を會得せしめるものであつた。

私は、その時ほど深刻に、經濟學の眞の使命を思はせられたことはない。當の使命は、新興階級の、、、、と不可分に結びついてゐたのであつた。

◇

こんなにして漸く私はマルクス學に入り込むことが出來た。全身を打込むことが出來た。論理的にはすでに承服を餘儀なくされながら、情意的にはうけ入れかねてゐたところのマルクス經濟學が、今や新しき光りの下に親しみをもつて讀まれた。ブルヂョア的價値論のいいし

は解けはじめ、その何故に誤れるかも知れ、誤れるものは正しきものに置き換へられて行つた。何よりも私は、研究における自分個人と社會との有機的結合を感じつゝ、自己の知識とひろき生活との融合をよろこんだ。かつては、まゝ子のやうにもてあまされた經濟學の研究が、今や祝福すべき心的活動と變じて行つた。

研究の發展によつておのづからマルクス經濟學の門內にまで來ながら、私をして敢えてしきいをまたがしめなかつたところのものは、私の小ブルヂョア知識分子的偏見と先入主とであつた。それらは、私がしきいを越えてからもつきまとひ、マルクス學の理解を一再ならず妨げた。私は意識しなくても、今も尙ほ妨げてゐるかも知れない。

◇

マルクス主義を奉ずる者は盲目的であると或者はいふ。だが、吾々はマルクスの理論を盲目的にうけ入れ得るのには餘りにも大なる、、、、、、、、なければならなかつたのである。その、、のみが、吾々の若き盲目をひらいてくれた。いかなる時代でも、因襲的「眞理」こそが多數者によつて盲目的にうけいれられてゐる。たゞ、、、、、、「、、、、、、、、、、、、、、、に眼をひらかうとする。

或者は、マルクス經濟學者は階級的偏見に囚はれてゐるといふ。だが、吾々は新興のプロレタリア階級の「偏見」にやすやすと囚はれ得るのには餘りにも強く小ブルヂョア的偏見に囚はれてゐるのである。この偏見からの至難なる脫出のみが、認めにくい、、を認めさせてくれた。歷史的相對性を否定し得ざる限り、プロレタリア世界觀の發展のうちにのみ、、、、、、は見出されねばならぬ。歷史的創造力を失へるブルヂョア階級の世界觀にあつてはたゞ、、、、、のみがうづまいてゐる。

◇

吾々は、、、、經濟學を把握し得る前にながながとブルヂョア經濟學の道草を喰はねばならなかつた。だが、、、、、、、、、躊躇なくマルクス經濟學に行くべきである。

諸君の世界はすでに、、、、、、、、をもち、、、、、、、すでにプロレタリア運動をもつてゐる。それと共にまた「マルクス、エンゲルス全集」をもち、更にまたよきマルクス經濟學解說の豐富な文獻をもたんとしてゐる。小ブルヂョア的偏見と怯懦とをすてゝプロレタリアの、、、、突入するために、諸君はもはや吾々がしたやうに、、すること を要しない。その世界觀こそいま諸君を、、、、、、、、、、、、、、、、、、であるから。

マルクス經濟學は、近代社會の經濟的運動法則を、、、、、、、、、、、、、、、、、諸君のために確證するであらう。マルクス經濟學は、單に過去の說明に役立つのではない。未來への展望に於いて、、、、、し得しめるところの唯一の、、を諸君に與へる。そしてそれのみが、諸君の、、の信賴すべき案內であり、、、、、、、、をゆるぎなき科學の基礎の上におく。

◆

だが、諸君と吾々は、マルクス經濟學の單なる理解や解說にとどまつてはならぬ。諸君と吾々は、マルクス經濟學を・・・・・せしめねばならぬ。

マルクス經濟學のみは、講壇から「放逐」されてノートに移されておしまひになる代りに、・・・・・・・・・・・・・・・・・せられてその常識とならねばならぬと共に、歷史を・・・・・・・・・のため、從つて全社會のために不斷の炬火として役立たんがために、それらの前進と共に常にみづからの理論的發展をもたねばならぬ。發展しいづる理論は、・・・・・・・・・說明と、・・・問題の・・・・・とをなし遂げるであらう。ひとりマルクス經濟學のみが、眞に發展し得る經濟學であるから。

青年學徒諸君は、研究の發足點でブルヂョア經濟學のコップ・ウエッブにひつかかつてはならぬ。だが、ひとたびマルクス經濟學を把握したうへは、その光の下にブルヂョア經濟學を仔細に吟味し檢討すべきである。それはたゞに、諸君をしてマルクス經濟學そのものゝ眞價を確認せしめる所以であるといふだけではない。その努力を經ずしては、ブルヂョア學者によつて意識的無意識的になされるところの、、、、、、、、と、、、、、、、、、とを、根本的決定的に暴露することは出來ぬ。そしてそのことなくしては、すくなくとも眞理の普遍化は不可能である。

點方において、ブルヂョア經濟に・・・・・・・・・・・・に、豐富なる時間と材料と、種々なる特殊便宜と、整備せる機關とを利用して自身の研究範圍を擴大し來たつた。從つて、——全體としての、一體系としてのブルヂョア經濟學の救ひ難き誤謬にも拘らず、ブルヂョア經濟學者の研究成果のうちには、多くの好資料と部分的眞理とが含まれてゐる。かくしてまたマルクス學徒は、それらを拾ひあげて自身の・・・・・ならしめるためにも、ブルヂョア經濟學を閑却することは出來ない。

マルクスは、・・・經濟學をうちたてるためにブルヂョア經濟學を研究した。諸君と吾々は、・・・經濟學を普及し發展せしめるためにブルヂョア經濟學を檢討しなければならぬ。

◆

私は、經濟學の研究とその方法とについて多くを語り得なかつた。だが、最重要な一事のみは言ひ得たと信ずる。玆に吾々は諸君と共にマルクスの次の言葉を想起しておきたい。

『地獄の入口と同じく、科學の入口にも一つの要求が掲げられねばならない——

こゝに一切の疑惧を棄てねばならぬ。
一切の怯懦がこゝに死なねばならぬ。』

統一無產政黨の黨首問題

引摺られ乍ら引摺る人

嘉治隆一

一

一方に於て舊勞農黨非幹部派の人々が威勢よく無產大衆黨を作つたかと思ふと、他方には、民政黨非幹部の人々が零れ落ちる樣に脫退して新黨組織の準備をする。無產政黨も對立鬪爭、既成政黨も分裂抗爭、誠に之れ政治的訓練なき國人の弱點を遺憾なく暴露してゐるかの觀がある。乍併、仔細に考察すればそこには自ら一定の相違が見出される樣に思ふ。蓋し、元來、有產者は競爭を根本方針として存在するものであるに反して、無產者は競爭の止揚を目標として生存するものであるから、假に前者が一時、競爭を制限することがあつても、結局に於て之を放棄することが出來ないのに反して、後者はたとひ一時、競爭乃至鬪爭を高調することがあつても、終にはその止揚に赴かざるを得ないのである。そこに兩者の本質的差別があり、而して又、そこに既成政黨と無產政黨との運動の根本的相違も求められなければならない。

されば無產政黨戰線の混亂を以て既成政黨戰線の混亂に類するものと見ることは明白に淺薄である。而已ならず、我邦の現狀は兩者の間に否定し難い一線を劃してゐる。抑壓政抑壓の事實之れである。即ち、既成政黨は如何に騷いでも爭つても解散の虞など毛頭なく又、破廉恥罪でも犯さなければ滅多に逮捕せられる危險がないことである。然るに無產政黨の場合は全然之に反する。そしてこの明確なる相違は實に無產政黨を合同に向はせる理由にはなつても、決して對立を永續せしめる理由にはならない筈である。尤も各國の實例に徵して見ても運動に、、、、、大きくなるに從つて、右に傾いて安全を計るものと、左に走つて躁急性英雄的行動に鬱を遣る者とが增加することは珍しくない。然しこの事は決して分裂を肯定する理由にもならなければ又、毫も合同論の不必要を感ぜしめる理由ともならない。恐らく無產政黨運動に關心をもつ者は、唯一人として戰線統一の急務を認めない譯には行くまいと思ふ。

二

近頃、半公式に發表せられた新勞農黨組織準備會の綱領草案を一見するに、その第一項に「吾が黨は合法的手段により、勞働者、農民、無産市民其の他全被抑壓民衆の利益の擁護と伸張のために鬪ふ」とあることから推察すれば、新勞農黨が果して再起を許されて結黨し得るか否かは別として、何れにしても「合法的手段」を標榜するものと考へて間違なからう。之れ或は單に政策上の問題として採用せられたに止るかも知れない。然し、それにしても之は、從來、共産黨の公認せられてゐないことは勿論、社會民主々義の提唱すら禁止せられてゐる我邦の現狀を無視して、「勞働者と農民の××の樹立」を叫び、「社會民主々義批判の自由」を合同の條件とし、又、無産大衆黨を以て公認御用黨と罵つて來た人々の行爲としては明に數段の進步である。

玆に於て各無産政黨の間には重大なる主義上の相違を見出すことが出來なくなつたといへると思ふ。勿論、新勞農黨準備會の人々は所謂「共産黨員」と烙印を押された人々に對して比較的多くの同情をもつてゐることはあるかも知れない。然し、同情をもつといふことは必ずしもその主義を奉ずることではないから、この準備會の人々も何等特異な主義を懷くものと見る必要はなからう。尙、同時に各黨の對立が必ずしも政策の相違でもないことはその綱領、政策を比較すれば判明する。要するに何れも大同小異である。

旣に戰線の不統一が主義、政策上の對立に因るものでないとすれば、各黨構成の單位の相違に由るかといふに、何れも大體に於て類似の要素をもつてゐること、特に全國農民組合の如きは一つの組合であり乍ら、若干の黨に分屬せんとする奇現象を呈してゐること、等は、その必ずしも然らざることを證明してゐる。かくて對立の原因が主義、政策乃至構成分子の相違から來るものでないとすれば、結局、從來の行掛りが最も有力なる障礙をなしてゐるものと見るの外はなからう。單なる「行掛り」、「我黨意識」のために如何に運動の進展が妨げられつゝあるか。靜に考へ直して見る可き問題ではなからうか。これあるがために、階級對立の儼乎たる事實が往々にして殼の彼方におしやられ、又、動もすれば、黨外大衆の存在が忘れられて、徒らに黨對黨の內鬨に智と勞と財とが消費せられるのである。かゝる狀態が打破せられない限り、いつまでも合同の提唱は口先の問題たるに止る。實に惜みても餘ある事柄である。

三

それは兎に角として、無産政黨戰線統一の問題は今日の樣に等しく各黨によつて論議せられたことはない。この事實は、つまりこの合同の問題に觸れずしては、各黨ともに明日の運動を考へることが不可能となつてゐる證據である。實行家は從來の行掛りを忘れ、理論家は自黨本位の學論を棄てゝ、階級的利益の擁護のために猛進すべきである。確固たる合同理論の下に、戰線の統一と大衆の喚發とが遂げられんことは、何よりも急務である。この機運の促進は、勿論、內部的發展を必要

とすると共に、何等か外部的強制をも必要とするもの丶如くである。

さて然らば、具體的に考へて、合同は如何なる形をとるであらうか。之は全く局外者の臆測に過ぎないものであるから見込違ひは當然にある事であらうが、大體に於て三つの場合が想像せられる樣に思ふ。全戰線統一が第一。大右翼結成に基く左右の對立が第二。大左翼結成に基く左右の對立が第三。

全戰線の合同が成功するといふことは、少くとも今日の狀勢に於ては、最も望ましいことであるに相違ない。そしてその場合には左右兩極の若干の離脫の如きが走せ加はらなかつたとしてもそれは問ふ所ではない。次に大同團結が出來ない場合に考へられるのは、第二と第三の場合である。何れも戰線を二つに區あることによつて成立するものであるが、分れる所は、左右兩翼の分水嶺が那邊になるかの問題である。更に具體的にいへば、總同盟の正義派が左につくか、或は組合同盟が右につくかによつて、大勢が決するのではないかと思ふ。何れにしても分裂は極力、避けなければならないが、それが止むを得ないとすれは、出來る限り、戰線の統一を計り、そして殘つた兩翼の間には絕えず、聯絡の成立し易いシステムを立て丶置くことが必要である。それには種々の方法があるであらうが、この小論の目的たる黨首を誰にするかといふことも、かなり重要な問題であつて、運動の將來を如何に進展せしめるかといふことに對して極めて重大なる影響をもつものである。

四

無產政黨に於ける黨首の地位は如何なるものであらうか。又、如何なる類種の人が適任なのであらうか。

惟ふに無產政黨は既成政黨と異り、黨首の專斷を許すべきではない。隨つてかの黨首が絕大の權力を揮つて萬事を獨裁し、自由に黨を動かすとか、或は、一の人物を中心に黨を脫退し、新黨を作るといふが如きことは決してあるべきではない。無產政黨にあつては、黨首又は中央執行委員長は斷じて執行委員長の[illegible]の要望を酌み、その各部の利害代表者の合議の結果を最も有利に、最も有効に執行すると共に、對外的には黨の代表者たる可きもので あることはいふを俟たない。然し乍ら、委員長が何人であるかといふことは、いはヾ黨てのものヽ生きた旗印が如何なるものであるかといふことを示すものであるから、對內的、對外的効果を考へて最も愼重に考慮せらる可き事柄でなければならない。

その人は黨內の利害を考へると共に、黨外の他黨及び無所屬大衆の所在を常に意識し乍ら、既成政黨に對抗して行かなければならないのであるから、その意味に於て、彼は大衆を背後に負ふと共に、進んで積極的に之を誤たざる方向に導き行くだけの理論と情熱とを兼備した人たることを必要とする。徒らに豫言者の如く大衆に臨んで之を群盲扱する人も不適當なれば、又、木偶の如く唯、いはるゝ儘に右向左轉する人であつても困る。茲に私が「引摺られ乍ら引摺る人」といふ意味は因

ち之である。かゝる人々によつて無産政黨が統帥せられ、その針路を誤たず、最も有効に階級戰に參加し得んことは何よりも緊急事である。

今日の場合、戰線統一後の黨首の問題を考へることは些か空想の觀なしとしないが、今問はるゝ儘に意中を洩すならば、私は無産政黨全線統一の場合の代表としては高野岩三郎氏を第一に推す。そして若し又左右兩翼に整理せられた場合にに、一方にはやはり、同氏が、又、他方には安部磯雄氏が適任であらうと思ふ。兩氏ともに和戰兩樣に通ずる人物であり、大衆の現實の要望を重んずると共に、目的意識を忘るゝが如きことは斷じてない、いはゞ融通無礙の鬪士であり、黨首たり得る大先輩である。若し、又、高野氏にして出馬不可能であつたならば、差しづめ杉山元治郎氏をその代りに擧ぐ可きではないかと思ふ。何れにしても餘りに自黨意識の強いお固りはこの際、遠慮して貰つた方が將來のため、又全體のためである。右の兩氏を代表に推し、之を助くるに確固たる理論家と絶大の精力家とを以てすれば、前途正に洋々である。

皮肉、冷酷な人々は或はいふかも知れない。そんなことをしても、日本の無産政黨は結局いつまでも仲間爭ひを續けて行くのではなからうか、と。乍併、幸に我々は曩の臨時議會に於て、舊勞農黨選出の二代議士の除名問題が喧傳せられた際、如何に他の無産黨代表の人々が之を守るに熱心であつたかといふ實例を見せつけられてゐる。前者を見殺しにすることは同時に後者自身の上に斧鉞を加へることになることをそれ等の人々は餘りによく知つてゐた。日本の無産政黨は一般にもつと信頼せられても差支ない筈である。

可能者と適任者

細野繁勝

一

無産政黨の合同問題も久しい話である。最近また日本勞農黨あたりを中心として合同運動が擡頭して來た。

無産政黨の大合同が出來るかどうか。無産政黨が幾つかに分れてゐるのは既成政黨の對立のそれとは意味が異つてゐる。既成政黨では政友會も民政黨も、或は床次氏の新黨クラブでも、何れも特殊な思想的背景をもつてゐない。どれも結局同じやうなものである。それ故に政友會を感情問題で飛び出した床次氏等と、反對黨の憲政會とがスラ〳〵と一緒になるといつたやうな簡單な離合集散は、無産政黨には原則として出來ない。無産政黨の分立は思想の爭ひである。勿論、人間の集りであれば感情も動く。個人個人に見たら利害で動いてゐるものもあらう。しかし、彼等を黨として分立せしめてゐるものは何處までも思想

の問題である。黨の指導精神である。そこが無產政黨の既成政黨と異るところであつて既成政黨の離合集散でも眺めるやうな素朴な無產黨合同論は問題にならないことはいふまでもない。

農民勞働黨が結黨僅かに三時間で解散された後に生れた我國最初の合法的無產政黨であつた舊勞働農民黨が左右中間四つの無產政黨に分裂してから既に三年になる。そして分立した四黨、社會民衆黨、日本勞農黨、日本農民黨並に舊勞働農民黨は三年後の今日、依然として分裂した當時のまゝの階級的な立場と指導精神の下に立つて其の勢力を保持してゐる。舊勞働農民黨は更にその內部に釀成されてゐた左右の對立を表面に現はして、解散の鐵鎚を受けた後、無產大衆黨と新黨準備會に分れてゐるが、依然として左翼若しくは極左翼の立場に居る。我々は此の各派の今日の立場を決定した指導精神、殊に左右を大きく二分する指導精神を無視することは出來ないのである。

それからまた、去年以來の合同運動の辿つて來た歷史を顧みて、各黨の間に存在する個人的な、また黨としての感情問題や、各黨の戰術の相異をも無視することが出來ない。

かういふやうに觀てくると無產政黨の全國的合同には幾多の難關が橫はつてゐることを知るのである。

それならば次に左右を二分する思想的な立場から、二つの分野への合同、卽ち大右翼、大左翼結成はどうであるか。大右翼結成を目標として進んでゐる社會民衆黨がある。今度の社會民衆黨と日本勞農黨の合同問題も結局日勞黨が現狀維持に歸つたので一時立ち消えになつたが、要するに此の大右翼主義の進出と見られる。一方無產大衆黨並に日本勞農黨の一部を中心とする大左翼結成論がある。これもまた今度の日勞黨の合同運動の停頓によつて氣勢を殺がれたやうに見える。しかし此の左右對立論は大合同論に比べれば、より現實的である。

無產各黨は大體に於て、此の左右の二大分野に歸屬させること[illegible]の極左分子を中心とする新黨準備會は左翼である。無產大衆黨も左翼と見るべきであらう。これに對して社會民衆黨はいふまでもなく右翼である。日本農民黨もこれに屬する。更に中間黨と云はれてゐる日本勞農黨に至つては左右兩翼の分子を混入してゐるところに其の惱みがあり、其の內部に於ける左右の對立をどう解決して行くかゞ興味ある問題であらう。しかし、果して無產政黨が左右二大分野に整理されるかどうかは、まだ未知の問題である。

二

さて、無產政黨が合同した場合に於いての問題であるが、全陣營が統一されて、單一無產政黨が實現した時、何人が其の黨首に推されるであらうか。また我々から見て何人が黨首としての最適任者であるか。これは却々六ケ敷い問題である。

といふのは、既成政黨の場合でもさうであるが、[illegible]の才と德望の士とは必ずしも一致

しないからである。殊に新興階級の戰士として、其の草創の時代に一黨の黨首となるには、太平の時代のそれとは異つて單に人格者であればいゝとは云はれない。ファイテング・スピリットを欠く黨首は、新興階級の運命を背負つて立つ黨首として眞に良き黨首ではない。同時に當然のことであるが、一黨を率ゐるだけの德望もなくてはならない。その意味で理想的な黨首は決して多くない。

現在、無產政黨の黨首（中央執行委員長）としては大山郁夫氏を黨首とした舊勞働農民黨が解散されてゐるので、ひとり社會民衆黨の安部磯雄氏があるだけである。其他の日本勞農黨でも、無產大衆黨、日本農民黨何れもが黨首が欠員となつてゐる。黨首の欠員だらけなのも寂しい話であるが、實際數へ擧げて見ると無產政黨の黨首はないのである。もう十年、二十年も經つたら、現在の勞働運動或は農民運動の鬪士の中から本當の無產黨の黨首らしい黨首が出現するやうになるかも知れないが、今のところ、まだ我國の無產黨は其處まで來てゐないやうである。

先づ今、無產政黨が合同したとしてその黨首に指を屈せられるであらうと思はれるのは安部磯雄、大山郁夫、高野岩三郎の三氏であらう。安部氏は現に社會民衆黨の黨首であるし、大山氏は舊勞農黨の黨首であつたのであるから推されゝば勿論蹶起するであらう。次に高野氏はしば〳〵日本勞農黨の黨首に推れたことがあり、健康さへよければ出馬し得る地位にあると見られてゐる。

同時に此の三者は現在に於て無產黨の黨首として、それ〳〵長短はあるが適任者の一人であることは何人も認めるところであらう。

三

安部氏は病後の健康がどうかと思はれるが、日本に於ける社會運動の大先輩として、また一個の人格者として此の人の存在は日本の無產政黨を一段と重からしめてゐる。しかし現實的な無產黨の黨首としては稍や熱に乏しいと云はれてゐる。そこに行くと大山氏は情熱そのものである。彼は黨首であると共にファイターであつた。無產政黨の黨首として若き黨員と共に常に第一線に立ち得るのは此の人であらう。しかし、氏の立場は全體に對して稍や左翼に偏してゐるやうに見える。更に高野氏はどうであるか。大原社會問題研究所長である博士は、同研究所の組織の變更から自由な立場になつてゐると傳へられてゐるが、安部、大山兩氏に比べると、より政治家肌とされてゐる。しば〳〵日勞黨入りを傳へられる位であるから、其の方面に對する興味も持つてゐると見られる。ただ氏は安部、大山兩氏のやうに、まだ實際運動の經歷がないのと、健康の上に疑ひがあるのが缺點である。

以上の三人を先づ實際に於ても可能性のある適任者と見るが、やゝ現實を離れて各方面から物色すれば先づ福田德三博士がある。河上肇博士がある。更に吉野作造博士がある。福田博士は日本勞農黨に、河上博士は舊勞農黨に、吉野博士は社會民衆黨に、何れもいくらかは關係を持つてゐるが、實際としては到

底乘り出すまい。しかし人物としては、あの博學多才にして鋭い切れ味を持つ稲田博士と重厚にして人望ある河上博士とは無產黨の黨首として相當に興味を持たせられる。

實際運動に關係のある方面に、安部、大山兩氏以外の人を物色すれば大山氏の前に最初の勞働農民黨の中央執行委員長であつた杉山元治次郎氏が數へられる。日本に於ける農民運動の先驅であり、現に全國農民組合の組合長であるが、無產政黨の黨首としては戰鬪力に乏しい憾みがある。恐らく杉山氏自身も農民組合の指導者として終始するに留つて、政界にのり出さぬであらうと見られてゐる。更に日本勞働總同盟を統率する鈴木文治氏がある。日本勞働運動の先達として知られてをり、安部磯雄氏の後繼者として社會民衆黨次期の黨首となるのは同氏であらうと一般に予想せられてゐる。現に代議士であり、政治家としての素質は以上名を擧げた諸氏の中で最も多く持つてゐるかも知れぬが、現在の場合では先輩安部氏を拔いて黨首になる譯にも行かないであらう。德望といふ點から云つて全無產黨を率ひて行くにはどうかと思はれる。要するに杉山氏と云ひ、鈴木氏と云ひ一長一短は免かれない。

次に無產政黨が三大分野に整理せられて、大左翼、大右翼の兩黨が出現した場合、兩黨の黨首として何人が推されるであらうか。

と云つても顏觸には殆ど變りはない。右翼無產政黨の黨首として可能性の多いのは勿論安部磯雄氏であらう。次ではやはり鈴木文治氏といふところであらう。實際、今日のやうに各黨内の人的關係が複雜になつてゐる時には、安部氏あたりが何と云つて適任者であらうと思はれる。

左翼無產政黨の黨首としては、より左翼に傾いた場合には大山郁夫氏、然らざれば高野岩三郎氏などが依然として有力な候補者となるであらう。此の人々以外に適任者も一寸見當らないやうである。

以上の諸氏を擧げたのは極めて常識的な見方であるが、しかし、いはゆる無產大衆の要求が、若し實踐運動の上に立つファイターを黨首にせよといふ場合には自から新しい顏觸が現はれて來なければならない。そして日本の無產政黨は、それが實現した時期に於て、より強力なものとなるかも知れない。しかもかゝる大衆の要求なるものが決して起つて來ないとは云へないことは、社會民衆黨の主なる支持團である勞働總同盟の内部に、近來反社會民衆黨の空氣が濃厚になつてゐるといふやうな一例を見ても判るのである。

即ちかゝる場合も起り得るとして、實際運動の鬪士から黨首の材を求めて來ると、先づ右翼の方面には既に記した勞働總同盟會長鈴木文治氏があり、同じく總同盟の關東同盟を率ゐてゐる松岡駒吉氏、關西總同盟を統率してゐる西尾末廣氏などが屈指されるであらうか。また左翼の方面には、既に鬪士として前線に立つて活動してゐる大山郁夫氏や、日本勞農黨の書記長麻生久氏などが數へられるであらう。勿論それに今日問題となつた場合の話である。果して左右を包括した無產政黨の

大合同が出來るかどうか。或は左右二大陣營の對立となるかどうか。しかし其の何れかゞ出現するとしても、それは相當に遠い未來のことであらう。そして其の時代には周圍の情勢も變化して、今日の黨首候補者も或は候補者でなくなるかも知れない。また左翼前線に活躍しつゝある共產系分子がどうなつて行くであらうか。それも興味ある問題であると思ふ。

黨主觀と合同觀と

青野季吉

合同後の單一無產政黨の黨主についての意見を求められたのであるが、現在のところでは、その合同問題そのものが、非常に困難な局面を見せてゐるので、黨主問題、乃至は單一政黨の黨名問題の如きは、その前にあつて、多少の重要性さへ帶びた問題ではないと思はれる。

ブルジョアジーの政黨の場合であれば、その集散離合に當つては、黨主の問題が極めて重大である。否、今日の狀態では、特定のブルジョア政黨の存在條件と、その黨主とは絕對に切離すことが出來ない。全く黨主あつての政黨と言つた觀がある。現に、田中義一黨主の如きは、政友會內閣を『おらが內閣』と誇稱し、政友會をおらが政黨視して、しかも積極的に他から非難を躱らない。民政黨は、濱口黨主の民政黨であり、新黨は床次竹二郎の新黨である。それと言ふのは黨主のないブルジョア政黨は、大藏省のない政府のやうなものであり、黨主の手許の融通の惡い政黨は、國庫の行詰つた政府のやうなものだからである。曾て、犬養毅が何十年かの『淸節』をすてて政友會に合流した時、彼はその折紙附の淸節の手前、一個の政黨を經營して行くには、所詮金がなくては駄目だと、悲痛な告白を殘した。高橋是淸が曩に體よく政友會黨主を辭はれたのは、最早金を持つて來る見込が無くなつたからだと言はれ、田中義一が軍閥から出でて、裕々と政友會黨主にすゑられたのは、、、、とかの持參金があつたからで、それが底をはたいて仕舞へば、軈て追拂はれて、代つて久原房之助が擔ぎ出されるだらうと噂され、民政黨の最近の細胞分裂は、要するに濱口雄幸では金が出來ないからだと評されてゐる。一般にブルジョア政黨の存在の可能は、何も黨主の存在によつて始めて生ずるわけではないが、特定のブルジョア政黨の存在の可能は、必然に黨主の存在と結びつけられてゐる。

だが、無產政黨の場合は、これと全く異つてゐる。その理由は、それが有產者階級の政黨でなく、無產者階級のそれであるといふ原則的事實によつて、明白であるが、一層詳し

く言へば、一般に無産政黨は、黨大衆の利益の一致によつて成つてゐる政黨であつて、決して黨主の財力を紐帶として成つてゐる政黨でなく、また黨大衆が大衆的利益の獲得を標的として成つてゐる政黨であつて、黨員各個の個人的利得を標的として成つてゐる政黨でないが故に、黨運用の技術的意味を離れて、ブルジョア政黨のそれに類似した黨主を必らずしも必要としないのである。だから現に日勞黨や無産大衆黨は、黨主をおいてゐないし、社民黨の安部氏に新黨準備會の大山氏は田中や濱口の意味してゐるやうな黨主では絶對にない。

だが、無産政黨も主として技術的意味において、『適當な人物』さへあれば、黨主があつたに越したことは無い。政黨としての體を整へると言つた方面はどうでもいいとして、尠くともそれによつて黨としての活動においてヨリ多く統一がとれ、ヨリ多く仕事が單純化される。だから日勞黨にしても、無産大衆黨にしても、書記長で間に合はすことに定める前には、一應黨主を問題としたことであらう。

その意味で合同後の單一無産政黨の黨主について、一應考へて見るのも全然無駄ではないと思ふ。右翼指導者が劃策してゐるやうな大右翼合同でもなし、また極左翼指導者が事實上劃策してゐるやうな左翼合同でもなし、我々の待望してゐるやうな全無産政黨の合同が成立して、眞の內容を具へた合同單一無産政黨が結成されるとして、その黨主には誰が適當であるか？ これに早答を與へることは何人にとつても至難であらう。それは私にも出來ない。が、適當な人の一人としては、私は杉山元治郎氏を擧げておき度いと思ふ。右翼合同乃至左翼合同は、我々の極力排斥するところであるが、もし形勢の變轉がそういふ合同を生み出して來るとすれば、その黨主にはどういふ人が推されるか？ 單に興味のために推測しておけば、右翼合同は安部磯雄氏を推すであらう。鈴木文治氏はその希望乃至野心が無いとは言へないが、その氣合を見せることは、右翼合同にとつて障害である[illegible]を、右翼指導者は相當にハッキリ知つて[illegible]であらう。左翼合同の場合は、合同がどう[illegible]ふ形をとつて現はれるか全然分らないから、何とも言へないが、それがどんな形をとつて現はれるにしても、遮二無二、大山郁夫氏を推さうとする一派があるであらう。その場合彼等に、その躍氣運動が客觀的にどういふ作用を齎らすか、そんなことは一切おかまひなしであらう。

前にも言つた通り、今日では、合同後の全國單一政黨の黨主問題などは、當面の問題ではなく、合同問題そのものが當面の困難な問題である。

合同の對象として問題となつてゐる無産政黨は、今日のところでは社民黨、日勞黨、無産大衆黨の三つの合法政黨であつて、日勞黨はその黨の性質上必らずしも問題でなく、新黨準備會は、その發明のやうに合法的大衆黨を組織して始めて、十分の意味における合同の

對象となり得るものである。(新黨準備會のま
までも立派に勞働者農民の組織體であるから合同の對象と成り得るとの同會幹部の主張は、合同はそもそもいかなる政黨の合同であるか、また合同の必要及び意義は何處にあるか、そう言つた合同問題の根本的な點さへ理解しない、全然我儘と言ふものである。その上、事實上組織のないところに、組織があると主張することによつて、問題の合同運動に大きな障害を投ずるものである。尤も同會幹部は、最近この誤謬の一部分を清算して、合法的大衆黨の組織を聲明した。これは勿論慶賀すべきことで、この上は、合同の實際の對象となり得るのは、その合法的大衆黨の結成後であることを十分に理解して、その結成を一日も早めんことを希望せざるを得ない。)

それならば社民黨、日勞黨、及び大衆黨の合同に關する態度はどうであるか？　公に表明されてゐるものとしては、社民黨のそれは社民黨を中軸とし、日農黨を加へ、日勞黨の右翼を切取つての右翼合同である。日勞黨及び無産大衆黨のそれは、[illegible]
である。これだけで見れば割合に單純で、例へば日勞黨の賢明周到な政策によつて、右翼合同を牽制して眞の大合同が比較的容易に出來さうにも思はれる。だが、事實は左樣に單純ではない。そこに實際上の幾多の困難がある。

第一に社民黨の右翼結成運動が相當に執拗であると、それが大合同を脅威する。第二に社民黨の働きかけによつて、日勞黨の右翼が切取される場合、即ち日勞黨分裂の場合があり、その結果日勞黨の大合同への躍進が澁滯する。第三に日勞黨と無産大衆黨との接近は、日勞黨の右翼をして社民黨に接近させる方法を持つ――尠くとも日勞黨の右翼をしてそう主張せしめる。第四に無産大衆黨と新黨準備會大衆との接近は、日勞黨と無産大衆黨との距離を遠ざける――尠くとも社民黨をしてそれを隱謀せしめる機會を與へる。第五に新黨準備會は、最近、過去の誤謬を清算して、合法的大衆黨の結成を聲明したが、準備會の[illegible]
らず、ために右翼策動者にたいして、大合同回避乃至遷延の口實と機會を與へてゐる。等々。

だが、かゝる幾多の困難はあるけれども、またこの困難を克服して行くところの、大合同への積極な力もある。その主要なものは、第一、無産大衆黨の出現とその勢力の增大である。この勢力の增大は、それだけ大合同へ進む積極力の增大である。第二、日勞黨の右翼合同にたいする鬪爭、即ち分裂を防止する黨結束力の增大である。この力の增大も亦、疑ひもなく、大合同へと働く力の增大でなければならぬ。第三、新黨準備會の合法的大衆黨組織の運動、この運動の進展の過程は、それだけまたその內部の宗派的分裂主義者の淸算の過程であり、大合同の展望を濃厚にする過程である。等々。

かういふわけで大合同進展の過程は、即ちそれらの積極的な力の增大が、右の諸の困難の生長を防止し、それを克服する過程である。

この『過程が過程』される時、その行手には輝ける大合同が待つてゐるであらう。

なほ大合同への積極的な力として、我々がその政治的進出を希望して止まないのは、全國農民組合である。この大農民組織は、日勞黨・大衆黨・新黨準備會の下にある農民を横斷的に抱擁する組織であつて、その政治的進出、全國單一政黨運動への躍進は、大合同へ向つて働く最も大きな力の一つである。全國農民組合の現在の一種の政治的中立には歴史的な理由がある。したがつてその政治的進出にはいろんな困難があるであらう。だが、それを十分に考慮に容れて後、なほ我々はこの際同組合の躍進を希望せざるを得ない。

これまで合同の波が高まつたことは、幾度であつたか知れない。しかしこんど寄つて來てゐる波ほど大きなものは曾て無かつた。それに寄與したものは、日勞黨の大合同派の忍耐強い活動であり、大合同を目標として歩み出た無産大衆黨の結成である。若しこの潮く[illegible]ば、合同の波はかくも高められはしなかつたであらう。無産大衆黨の結成をもつて、分裂主義者の策動にあると誣ふる人々は、この現當の事實を何と見るであらうか？『元々合同論者であつた』舊勞農黨幹部が、事實合同の波を一インチも高め得なかつた時、横合ひから飛出した『分裂主義者』が事實合同の波を陸々と高めたとは、何と言ふ皮肉であらうか！（一〇・八）

無産政黨の合同問題と黨首問題

横地銑一

設題の、單一無産政黨出現せばその黨首は誰か、といふ事は現在の各無産黨の狀勢から見て、極めて難題であるといはねばならない。何となれば、前提の單一無産政黨の出現そのものが──勿論現存各無産黨の合同に因る──殆んど不可能と思はれるからである。

成程、合同の聲は高い。各無産黨共に合同の日標を掲げそれに向つて努力しつゝあるかの樣である。大衆も之に要求してゐる。一般[illegible]ゐる。また社會主義理論家達は、或は支配階級の强力なる攻擊を說き、各黨の綱領政策の類似性、同質性を論じて、理論的に合同可能を基礎付けてゐる。併し、現在の各黨の實情、指導者の心持ちといふものからは、全勞農政黨の合同といふ事實は殆んど引出し得ない。所謂言ふべくして行はれない事である。指導者達は大衆の要求と理論的必要を無視する事が出來ないので、これを取扱つてゐるだけで[illegible]

的に觀ればどうもさう言はれても仕方がない樣である。久しい間『合同の誠意』といふ言葉が、投合ひされた。併し何れの黨も、『自黨の方針戰術が誤りであつたから貴黨と合同しやう』と言つたものはないのである。合同を提唱しつゝ他方では、『吾黨こそ眞の無產者の味方』と宣傳してゐるのである。卽ち自分は實際問題としての、現存各無產黨の合同に因る單一無產政黨の結成は今においては一種のユートピアに過ぎないと言ひ度いのである。然らば實際に單一無產政黨結成の障碍となつてゐるものは何であらうか。その最も有力なるものは外部的には日本の支配階級の根强い分裂政策の意圖であり、內部的には、既に存在を否む事の出來ない、、、、、、、、、、に對する取扱ひ方の相違と、結黨以來縣議戰と總選擧を通じて行はれた各黨相互の對立意識である。

こゝに支配階級の分裂政策の意圖を擧げて理由とした事に就いて或は怪しからぬ事と反對する人もあらうが、農民勞働黨に解散を命じてその先端を表はした支配階級の分裂政策は、、、、ものがある。而して、各勞農團體が[illegible]事は明かな事である。先には右翼の諸團體が政府の意向を豫知して農民勞働黨を脫退し、これがキッカケとなつてあの細かい對立狀態が出現したではないか。また最近には、共產黨事件に伴つて勞働農民黨が解散せられた後、合法的政黨組織の聲が左翼に擧つて、無產大衆黨が現はれたではないか。現在において『合法的』結成に據らなければ無產政黨として存在し得ないのは當然で、而してその合法的であるか否かの、、、、、、、、、、、、、、。『、、、、』、、、、、、『、、、、、』、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、日本の無產階級が、、、、、、、としての强な單一無產政黨の實現を計る場合、これを、、、、、、、、明白な事といはねばならない。無產政黨が一丸となつて政治の一角から階級解放の戰を宣する事は彼等の、——府縣議戰に十三名の議員を出し總選擧に七十餘名の立候補をした、、、、、、、、、、、、——我慢出來る事ではない。日本の樣な、、、、、、、國においては、、、、、、といふものが無產階級運動の方向を左右する、決[illegible]在の無產政黨はこの、、を突破する實力を有してゐない、寧ろ之に左右せられてゐる狀態である。突破する爲に合同が必要であるのだが、他から、、、、、、、、、、、、、に左右せられてゐる今の無產黨自身が、自らその力によつて、この强權をハネ飛ばして合同するといふ事は、今の場合不可能であらう。

次の各黨の、、に對する考へ方の相違から來る內部的障碍といふ事は、前述の支配階級の分裂政策の壓力と、部分的には表裏の關係にあるといへる。卽ち左翼に於ける現在の合法的政黨結成の論は、、、、、、、、、、、に對する考慮が重要な要素をなしてゐるのである。、、、、、、、、、、、、、、、となる事だからである。

無產大衆黨と新黨準備會の對立の如き、我々から見れば、結黨を許さるべくもない新黨準備會の救濟として、大衆黨が働くのがその作戰であるかと思つた。然るに事實は大衆黨は日勞黨と接近して、新黨準備會を愈よ孤立の前衞黨たらしめるかの如く見えてゐるこの事は、則ち、、、に對する取扱方の本質的相

違であらうと共に、、、、、、、と共に、變化するものと見られる。、、、に對する各黨の考へ方はほゞ次の樣に見て大なる誤はあるまいと思ふ。

新黨準備會は、、、。無產大衆黨と日勞黨は、、、、、、、、、と認めるが大衆政黨で働く時は、卽ち合法政黨で飽くまで大衆政黨の統制に從つて獨自の活動は勿論許されないといふ立場にある。また右翼は支配階級と共に否それ以上に、、、、、、と見て、自ら、、、、のチャムピオンを以つて自任してゐるのである。

故に、これ等の相違は常に合同の條件となり、個人の排斥となつてゐたが、今後も、これを不問に附するわけには行くまい。

最後に、各黨の對立意識（愛黨心）の問題であるが、最近日勞黨が合同問題に對して、現狀維持論に決定した事情の如きはこの好適例であらうと思ふ。分裂してゝも各自思ふ所に[illegible]

[illegible]を結むで一年半も過ごして來たといふだけでも、黨が惜しくなるのである。

各政黨共に過去一年半對立し互に他黨を排擊して自黨を主張して來た樣に、地方、國會の二選擧戰を通じて所謂地盤も出來て選擧區關係もあり、漠然たる併し強い、愛黨心も作用して階級全體の利益といふ理論は判つても、夫々自黨を解體して他黨に合流する事は忍び難いものがあるのは當然であらう。各黨とも自黨中心の合同を考へてゐるのであるから、仲々この精神といはふか寧ろ感情は根強く食入つて、合同への有力な障礙となつてゐると思ふ。

以上擧げた實際的事情によつて自分は、現存各勞農政黨の合同に因る單一無產政黨の實現性は、激しい希望であるにも拘らず、極めて乏しい問題であると考へざるを得ないのである。

併し、以上の實情を粉碎するに足る、社會的現象が生じた場合は、問題は自ら別となる。例へば政府が分裂政策を變更して、凡ゆる無產黨を一擧抑壓しようとせねば止まぬ政策を强行[illegible]

、するとかである。併し分裂政策に、、、、、、、、、、又感情的な國民性を知つてゐる、、、、が、左樣な極端な政策を採るとは考へられない。もつと賢く立廻はることは確實であるし、又支那の現狀から見て今直に、、、、、、、、、するものとは想像し得ない。

然らば、合同問題は消え去つてしまふのであらうか、さうではない。大衆の要望は之をどうしても無視するわけにはゆかない。故に各黨は現在の如き分裂狀態の續く限り合同問題から逃れる事は出來ず、惱まされるであらう。而して何とかして統一への途を計らうと努力するであらう。故に何等かの發展は必然的に行はれるものと見るのが至當であると思ふ、自分は近き將來の合同問題の發展には略々三つの場合が考へられると思つてゐる。

一は大右翼、大左翼の對立に依る戰線の統一であり、二は大右翼と小數左翼對立による戰線の整理であり、三は各黨多少動搖あつた後、結局は右翼、中間、左翼の三派鼎立の現狀を維持する事態である。而して黨首の問題[illegible]

を以つて考へられるのである。

現在無產政黨の間に黨首として問題になつてゐる人物を擧げるならば、社會民衆黨の安部磯雄氏、大原研究所の高野岩三郎博士、舊勞農黨の大山郁夫氏、日勞黨の麻生久氏、の四人である。一部では元農民勞働黨首杉山元治郎氏をいふものもあるが前の四人に比べればずつと呼聲が小さく、杉山氏が再び直接政治運動に携はるやうな事はあるまいと見てゐる人が多い。

先づ左右二大政黨對立の場合は、右翼が安部氏、左翼は高野氏か大山氏といふ處であらう。高野氏は既に幾度か日勞黨の黨首に擬せられたが、氏個人としては健康が許さないといふ理由で斷つてゐた。併し實際は氏の周圍の人達が、恩師の晚年を中間派の日勞黨に送つて、本來の戰ひよりは五月蠅い無產黨間の諸問題に煩はさせるに忍びないで反對してゐるからだといふ方が強く働いてゐるものと想像される。高野氏が『實際運動に於て死に度い』といつてゐるのが事實とすれば、大右翼に對し、單一な大左翼政黨出現した際には、氏の出馬の實現性は可成多いであらう。大山

[illegible]

大人氣を博してゐるが、氏の人となりは、純粹果敢操ける鬪士ではあるが、余りに主義に忠實な爲か、人を容れる度量は何うかと思へる。解散前の勞農黨の如く、堅く一主義に依つて偏に鬪爭また鬪爭の途を步む場合は、實に好適の黨首であるが、大左翼の結成成つて相當雜然たる分子を抱擁して、內部を纏めて行かねばならぬ時、氏の如き尖銳的人物は果して適任かどうか。又實際に大左翼成立の事情にも由らうが、却つて未知數ではあるが、缺點の少ない高野氏黨首說の方が步があるやうに思へる。

大右翼對小數左翼對立の場合は、安部、大山の對立と見なければならないであらう。大山氏の特長はかゝる場合に實によく有効に發揮されるであらう。小數左翼結成の際は雜然たる分子が少なくその黨の實質は舊勞農黨が大正十五年十月大分裂をなした後と略同樣な格好となるものと思はれるから、黨內の多數も大山氏を戴く希望が多かるべきと考へるわけである。

又各黨多少の出入あつた後、略現在の如く

[illegible]

右翼の安部、左翼の大山は動かない所であらう、而して問題は中間派である。その際は中間派は日勞が中心となるであらうから麻生久氏邊りが黨首となるのではなからうか。また何かの理由によつて單一無產政黨が出現した際の黨首は、安部か高野かといふ處であらうが、安部氏は既に、右翼の刻印を押された人、高野氏は比較的色彩がない上、總同盟にも關係があるしするから、何れかといへば、高野氏の方が可能性多く、かゝる際には引込思案の高野氏と雖も辭退は困難であらう。而して安部大山兩氏は長老格として納まる事になるものと思ふ。

現在における無產黨の黨首たるの條件は、學識と人望とにあつて、(左翼では鬪志が加はるが)政治家としての手腕は餘り必要とされてゐない。いはゞ看板役であるに過ぎない。故に他日無產黨が發達して、天下爭ひを行ふ時の黨首は、必ずや、現在苦しむでゐる若い鬪士の間から、育て上げられ、選ばれる事であらう。眞の意味の無產黨黨首の興味は寧ろその時その日にあるのではなからうか。(完)

福本和夫著

經濟學批判のために

唯物史觀のために

四六判三九〇頁
定價金壹圓
送料拾八錢

四六判三六五頁
定價金壹圓
送料拾八錢

（少數殘部あり御注文に應ず）

左翼指導理論の巨頭福本氏の勞作たる此二著は改題廉價版發行と共に讀書界の大歡迎を受け、兩書共忽ち十版を重ねるの盛況を示した。然るに其後改訂の筆を進めつゝありし著者の身邊、最近に至り當分之を果し得ざる事情生じたるを以て、茲に本書を絕版にするの希望を洩さる。本社は遺憾ながら讀者と共にその改訂增補新裝して世に出づるの日を待たむ。

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝自一一一一至一一一四

剝製の紐育

前田河廣一郎

突然に見る

ウイルウオースの高塔と市廳とナツソ街、新聞社街に圍まれた、地下鐵と高架線と二つの市電が一度にどつと人間の洪水を押し出すブルツクリン鐵橋傍の廣場――ここでは、統計好きなアメリカ人は一晝夜に鐵橋を渡る人間の數は二四六八三四人といふ註を加へてゐるほどの混雜である。その廣場のまん中に、或る日、私は一人の日本人を發見したのであつた。

その男は、恐らく森林の迷路に困つた人間はこんな顏をしてゐるだらうと思はれるやうな表情をして、第三十本目の臼齒をのぞかせて、人間の流れの中に突立つてゐた。横から肩を敲くと、彼は物も云はずに一間ほど飛び退いて、まじまじと私の顏を窺つた。が、やがて、私の言葉に安堵した風で、彼は牛の肝臓のやうな鳥打をうやうやしく脫いで、日本流の敬禮をした。

『どうしたんだね、一體――？』

何か答へようとして開いた彼れの唇はむなしく二三度開閉して、頰を傳はり墜ちる淚の雫を嚥み込んだ。

『……私はその、只今、日本船をずらかつたところなんで。腹が減つて困るんですが、持つてるのが英貨ばかりで、どうしたらいいか、全く途方に暮れてゐるところであります。』

『あります』はへんだなと思つてゐると、果して、その男は、日本で軍曹まで勤めた人間だといふことが、あとでわかつた。そこで、彼れの『英貨』なるものを調べて見ると、わづかにシルリングが三つと、銅貨が二つ三つ可憐な音を立ててその大きい掌に載つかつたに過ぎなかつた。脫船と否とに拘らず、二人は取あへず『トリビユーン』社の階下の安レストランへ行つた。そして、私は、その男の逞ましい食慾を目擊してゐるうちに、船會社といふ大きい營利事業から蹴飛ばされた、この一人の同胞を責任をもつて隱匿してやらうといふ犯罪氣分になつた自分を見出したのである。

後年、懷ひ出しては、『軍曹』に、船から脫けて夢中になつて驅けて

來て、人混みの中へ出て、はつと思つて眺めた刹那のニュー・ヨーク觀を訊くと、三度が三度とも、わが善良なる田中君は、からラコニックに答へるのであつた。

『眼がまわりましたよ』

音

ニュー・ヨークの特色は、その音響である。高いビルディングの窓を開くと、窓の開かれた面積に應じて、市そのものの音響が、すこしづつ私達の聽覺を脅かす。窓をすつかり開け放つと、數千の形のない鳥類が羽搏きして飛んで行くやうな物音が、右の耳から左の耳へ駈け抜けるのである。だが、これも暫らくすると、慣れて來る。

古い英語に『Banshee』といふ語があつて、妖女の死を豫告する歌といふ意味であるさうだが、よく樹木の一齊に戰く形容になど使はれる。その、バンシーである。海に水が湛へてゐるやうに、ニュー・ヨークには、毎日二十四時間中、からい、雜然とした物音がどんな隅つこにも溜まつてゐる。不幸にして、人間の耳はスパニイルの外耳のやうに蓋をするわけに行かないので、否應なしに、ニュー・ヨークに這入れば、これらの音響の下を歩かなければならない。もしこれらの複雜な音響を、好奇心から分析して見れば、それには文明といふものゝ潜むあらゆる機構から生ずる機械の悲鳴があることに氣がつくだらう。即ち、軌、電車、荷馬車、馬車、靴、自動車、貨物自動車、バス、市電、汽車、地下鐵、高架線、機械、汽……ア、工事、ジャッツ、會話、拍手、タイプライタア、鐵板、叩……質、植物、動物──これらと、更に更に多い、各個人商店や、住宅から起る、あらゆる物體の摩擦の音、墜落の音、廻轉の音、破壞の響などが、それぐの環境に反響し、絡らみ合ひ縺れもつれて、中空に一帶の不穩な音響を漂はすのである。たゞ、人間が、この下で、例へば、淺海の魚があやまつて深海の水壓の壓力を感じたやうに、音響の壓迫に狂死しないことは、一つは神經がデリケートに鈍いからでもあらう。

とかく、日本の都會などとちがつて、ニュー・ヨークは騷がしい市である。これは、一面、弗の複雜な反響であるとも云はれぬこともあるまい。

鼻

私の知つてゐる日本人に、『香水劇場』といふ奇拔な芝居小舍を建てたらどうか、と云つてゐる劇の研究家があつた。

その男の云ひ分によると、人間は目と耳とだけの劇場を持ち過ぎてゐる。鼻の劇場も一つぐらゐあつたつていいぢやないか。嗅覺の人間の頭腦に喚起する聯想作用は、モーパッサンの感覺的な描寫でもわかつてゐる。そこで、例へば、薔薇の香水を舞臺から看客（嗅客）席へむかつて放射すると、看客に順々にそれからいろいろな聯想を喚起

するだらう、次には、煽風機でそれを消して、酪酸の臭ひに變ずる、葬式の時使ふツーパー・ローズ、結婚式の鈴蘭、たまにはビーフ・ステーキー――どうだい、それで一篇の完全な戲曲が出來るぢやないか。これが、その臭芝居の原案なのである。恐らく、この知人の研究は、アルツール・ラムボオあたりの、アルファベットの發音に伴ふ色彩的感覺の議論からでも派生したものらしく思はれて、些かデカダン臭味もないではないが、すでにニュー・ヨークには電氣劇場といふ試みがあつて、電流を放射して各種の色光のドラマ的な映出に努力した事實もあるのだから、滿更實現しないこともなからうと思はれる。

　で、私は、ここに、知人の特許出願と否とを穿鑿する暇がないので、無斷で原案を採用して、東京のまん中に『嗅覺劇場』といふものを建てたと假定し、この劇場の主要なレパートリイとして『ニュー・ヨーク人』といふ一篇のドラマを嗅がせるとすれば、先づざつと次のやうな寫實的手法を用ゐなければならぬことに決定すると思ふ。

　第一に、嗅客をよく吟味する必要がある。鼻カタール、肥厚性鼻炎、すべての鼻の病いのある或ひは鼻のない客は斷はる。先づ序曲として、朝の珈琲を嗅がせる。次に新聞の印刷インキ、夫婦喧嘩の臭ひとして男の靴下と、女のコルセットの臭を混合して亂暴に撒布する。主婦が一人になる。忽ちクリームと白粉と香水とが強いアイス・ボックスの腐臭の前に漂泊する。主人が電車に乘る。印刷インキと勞働者の汗、垢の臭氣に、多少尿臭を帶びたタイピスト、女店員の群が混じる。人熱の發散。電車の通過する貧民窟を代表するものとして、馬糞と饐ゑた臺所の殘滓物の山の惡臭か、それらを大きく包む。河岸の冷やりとした水氣も幾分それに加味する。下車。ガソリンの煙幕。タイプライター、革椅子、インキ、卓のニス、郵便配達、小切手、金庫などの細かい小道具立の臭ひは、苦心を要する。時間の臭ひと云つて特別にないから、徐々に晝めしのランチの臭ひを遠くから嗅がせる。それにタイピストのほてつた白粉が混じる。十二時、ごく少量の食品の匂ひに、大部分の人間の臭氣を發散させる。再び事務所、遲出勤の社長は葉巻と夜前のベター四分の一のキッスの紅痕、ほんのちよつぴり。六時までは、だんだんに近づく晩餐の匂ひにいろいろな取引上の訪問者の性的判別による臭ひを加へる。再び、電車。再び、主婦の出現。一方、主婦の方は、香水から直ちにセメントの臭ひ、續いて、野菜、魚、肉類、腐敗した鷄卵などの騷がりの中に彼女は突入し、それを長いこと享樂したあとでお茶とレモンの香りが出る。この場合、作者の氣紛れから、第二の男の香りを浮かべるも妙であらう。いづれにしても、午後からは古本の小説の臭ひが、始終鼻につく。そして、晩餐の匂ひが、その間に、刻々として近づくが、彼女の晩餐には強い瓦斯の臭氣を加へる必要がある。晩餐。チーズ、葱などよろしく。つづいて、主人の燻ゆらす、友人に貰つた世界で一番臭い安葉卷の臭ひ。やがて、二人は無臭無芳香の世界に落ちると同時に、ニュー・ヨーク一流に襲來する市街の殘廢物の臭ひのオーケストラが、低く高くその上

に浮動するのである。子供があれば、乳と襁褓がこれらに混和する。

もしこの鼻芝居が、以上のやうな自然主義的描寫に墮しないために、プロレタリア文學的取扱ひをするとすれば、資本家側の葉卷や麝香や香水や三鞭やマデイラ、コックテール、自動車のガソリンなどの逐次的展開から、急劇に貧民窟の惡臭をもつて劇場を充滿し、急テムポをもつてそれから工場の臭ひに變じ、汗と熱と口の臭みと、漸次に遠ざかり行く食物の匂ひをもつてストライキを象徴し、と思ふと、資本家側に無數の女人の肌の匂ひを持つて來たり、はては、、、、、、、、、、、、、の臭ひや留置場の尿素の惡臭などを拉して來て、好個の一幕物何場かを演出出來さうなものに思はれる。

近代的ハムレット

『ハムレット』といふ芝居の主人公は、電車の車掌が、自宅で呼び聲を獨習してゐるやうに、しきりに獨りで喋り散らすのであるが、私達は、かういふ種類の獨語家を發見するために、ローバート・マンテルの沙翁劇を高い入場料を拂つて見に行くには及ばない。

行きずりに、ウオール街の株屋の附近に、ちよつと赤い角の煙草屋で、十本五仙の『メッカ』でも買つてゐようものなら、その前を通過する男達の百分の二人は、必らず、

『To be, or not to be――』

といふやうなせりふを獨りでやつて行くのに出遭はす。これらは、近代的なハムレットであつて、アメリカの[illegible]らぬ登場人物の一人なのである。

何を云ふてゐるのか、獨り會話の骨子は十人寄れば十人だけ違ふにちがひないが、それは寧ろ量的差別であつて、質的相違ではない。

『ゴッデム！ あの鋼鐵株では二千弗ふいにされつちまひやがつた！ ジイサス・クライスト、アイル・ビ・ダムムド、イフ・アイ・デデント・コップ・ジス・タイム！ ユー・ベッチア！』

こんなことを呟いて行く紳士に限つて、せかせかと株式市場に這入つて行くのである。

良心料理屋

この奇拔な料理屋は、別に『良心』をサラダにして食はせる家ではない。現金主義のニュー・ヨークには、少し珍らしいから、かう假りに私だけが呼ぶことにしてゐるのである。カフエタリアと云つて、別に、客が盆を持ち廻はつて自給自足するレストランもあるが、それなどは、稍平凡である。

生活原理を、飽までも、性慾と食慾との二本能に置いてゐるアメリカに、各種各樣の食物給與所としてのカフエ、レストラン、ランチ・カウンター、グリル・ルームなどの多いことは知れきつてゐるが、普通のレストランだけでは全く特別な方法で客から勘定を受取つてゐるのに

もともと、忙しいアメリカの[illegible]で、[illegible]

やタイピストや小僧達は、極端に食事の時間を節約したがつてゐる。從つて彼等の時間節約のためには、あらゆる手段を講じて、短時間に、最大多量の食料品を取入れるための設備が利用される。この良心料理屋は、ニュー・ヨーク市も下町の、株屋や取引所や事務所、工場、新聞社などの林立した區域に設けられた簡易食堂の一種である。

先づ大體の模樣を書くと、私は扉を押して這入る。左手に帳場がある。右手には客席があるだけで、そこからずんずん這入つて行くと、寶玉店のショウ・ケースのやうに、種々に調理された食物の載せてあるガラスの陳列臺が幾台ともなく室内に立つてゐる。それから珈琲や牛乳や茶などを注いで出すカウンターもある。陳列臺の前には誰もゐない。私は好き勝手にサンドウイッチでも、鷄卵でも、果物でも、一寸した肉類でも、遠慮なくそこから運んで行つて、食卓の上でそれを食べる。食べ終ると最後に私は入口の左方の帳場へ行つて、サンドウイッチ一個、林檎のパイ一皿、珈琲一杯都合二十仙なら二十仙と、金高だけをボーイに告げる。それを聞くと、ボーイは、不必要と思はれるほど大きい聲で、

『二十仙!』と叫ぶ。

それで、登錄器はがちやんと鳴つて、二十仙の支拂額をその中へ收められる。たゞそれだけなのである。それだけだから、又良いのである。實に氣持のよい遣り口だと私は最初このレストランについて感心した。

ところが、一日、私がサントウイッチ・パイ、珈琲の三種の食代を拂はうとすると、突如横合から出現した、人相の良ろしくない男が、刺々しい口調で、

『それはちがひませう――三十仙ぢやないですか?』

と詰問するのであつた。

癪に觸つた私は、幸ひ私の食つてゐた皿やサンドウイッチの包紙があつたので、これは幾何、これは五仙といふ風に說明して、さういふ場合にだけ許される啖呵を切つてやつた。それで、その場は鳧がついたが、あとから考へて見ると、その人相の良ろしくない人物である。彼はたしかに、自分も客の一人であるやうな服裝をして、多數の客人に混つて、誰が何を食ひ、幾何支拂ふかを內偵してゐて、ボーイが聲高に報告する金額と、自分の胸算用が合致すればよし、しないとすると、忽然假裝を脫いで、客を詰問するといふ秘密事業に從事してゐるらしかつたのである。

そんな理由から、一度は面白いと思つたが、內偵といふスパイ心理が嫌だつたので、もうその上このレストランへは行かぬことにした。それで、折角、かういふ表題をつけたものゝ、やはり考へると、その『良心』だけは削り取つて、只の料理屋とする方がいゝかと思はれる次第である。

摩天樓

横から見るとさほどではないが、下から瞻上げたときや、上から俯瞰したときほど、アメリカの性急な機械力の文物を呪詛するやうな氣持になるものに、ニユー・ヨークの三十四階四十階五十五階を誇るスカイ・スクレーパースがある。かういふ鐵材と、石と、セメントと、ガラスと、ごく僅少の木材とをもつて組み立てた巨大な四角形、六角形、八角形の箱を見ると、私達は、想像することも出來ないほどの、奇怪な軍艦か鐵橋かゞ、横薙ぎになつて頭上へ突墜してでも來るやうな錯覺を起こすのである。ブロードウエイのイクエタブル・ビルディングの如きは、收容し得る人員數が、何萬と云ふ數で、ビルディングその物が完全に獨立した一ツの都會である。序だがこの建物についての價額は二千五百萬弗であるさうである。それについで最も金の掛つた建物は、ペンシルヴアニア停車場の一千四百八十三萬弗である。それから、例の有名なウルウオース・ビルディングの如きは九百五十萬弗と云つたところ。勿論これらは、この重苦しい營造物の建設されてゐる地價をも含んだ價額である。土一升金一升と云つても、ウオール街とブロード街との交叉點の、モルガン銀行の敷地の如きは、一フートについて四萬弗を唄はれてゐる。これらのビルディングは、最初に地下を深く掘り下げて、岩層に達し、天然岩へ、時に百フキートも深く鐵柱や鐵桁を打込み、その上へ橋梁を架設するときのやうに、橋脚を埋沒するものださうである。

私は良く三十階も四十階もあるビルディングの事務所の窓を掃除してゐる掃除夫を見て、その[illegible]托して、悠々と硝子の表面にサポリオを塗つてゐる仕事振りは[illegible]たものである。更にまた、商賣とは云ひ條、垂直なビルディングを、殆んど何の足場もなく、屋守のやうにずんずんよぢ登つて行く不思議な「蠅人」の藝術にも驚かされたことがある。最近では、ウルウオースの高さをも凌駕する、もつと日光と空氣の自由に獲得出來るビルディングが出來たさうであるが、不幸にして寫眞でしか見ることが出來ない。

かういふ高い、複雜な建築物を見てゐて、人は決してタヂ・マハールの塔やアミアンの純ゴシツク建築などを見てゐるときの崇嚴な美觀を催しはしない、その代り、寧ろ地上を追ひつめられた人類が、鯨に追はれた鰯の大群のやうに、空間と日光と酸素とを上へ上へと求めて潰走して行くやうな悽慘な氣持に打たれるのである。しかも、どれ程數理的にその重量に對する大地の抵抗力の均衡の智識を究め、基礎工事の絶對安全なことを知つてゐても、あの多角形な、氣層の關係で時には一見紙細工のやうに思はれる摩天樓の群を見るときには、私達はいつかしらそれが音もなく倒れてしまひさうな豫覺に襲はれることが間々ある。そこから行くと九十丁目のカーネギーの邸宅や、五十七丁目のヴンダービルト夫人の邸宅の如きは、さすがに富豪の心理狀態が總て極端なものを拒否するところから、同じ高さでもそれに釣り合つた土地面積をもつてゐて、何ら崩壞の豫覺を伴はないやうに、堅牢に、古典的に、貴族的に出來てゐる。

貧民窟摩天樓

事務所や、役所や、銀行、商事會社などが商業用ビルデイングとして、空へ空へと伸びて行く間に、私達は、もう一種類の摩天樓が、こもニユー・ヨークの大商業主義と競爭でもするかのやうに、空へ空へと伸びて行くのを知つてゐる。それは、何かの慈善團體や寄附や社會事業や、或は個人家主によつて建てられる近代式貧民窟アパートメントである。時折りさういふアパートメントの番地になつてゐる友人を訪問すると十階も十五階もある鐵の階段を登つて、鐵の扉に閉まれ、セメントとガラスで一切の自然界との交通を遮斷された小さな函の中に、その友人が住んでゐるのを發見することがある。この種の摩天樓は、殆ど總てが鐵材とセメントからなつてゐて、人間は、これらの鑛物的空間に、草の綠も、花の香りも奪はれて、憂鬱な文明人らしく搾取された陰慘な生活を營んでゐるのである。一つのビルデイングに、收容し得る家族の數が百戸か二百戸位に及ぶと云ふことになると、どんな健康な人間でも、さしあたりまづその無限大に擴大されたジヤヅ的騷音に精神上の影響を受けないわけには行かない。イースト・サイドのヴンダービルト・アパートメントの如きは、階下の廣い混和土に反響する無數の子供達の騷音と、四方の家家へ呼びかける氷賣り、バナナ屋、肉屋などの觸れ聲と、掃除人が塵埃罐を地下室へ擲きつける響とが、無數の人間の高聲と反響し合つて、何のことはない、この貧民窟文明の洞窟は、動物園を一町立方尺だけ積み重ねたやうなものである。音響を外にして、眼に觸れるものは總て貧困と不潔と不衞生の諸現象だけであり、それをおぎなふに、あらゆる腐敗物や汚水の惡臭があるだけである。かういふ手狹な二間造りのアパートメントは、上へ登るに從つて家賃が安くなる。その中頃どころで一ケ月五六十弗の價格なのである。しかも、いつも滿員でよほど傳手を求めてでも借り入れなければ容易に手には入らない程競爭者が多い。統計を引合ひに出さなくとも、この一事でも如何にニユー・ヨーク市に貧民が溢れ切つてゐるかが判明するだらう。いや、しかし、考へなほして、私は、ここに、アメリカ人得意の統計を掲げて見よう。

曰く、最近までのニユー・ヨークの人口は、一平方哩について九十六萬人に該當する、そして、それは、殖えるとも減りはしないといふことである。サンガー夫人の產兒制限論は、恐らく、かういふ貧民窟摩天樓を目擊したことから生れたのではあるまいか？――彼女自身は西側の二十何丁目かの、安すい三階建の表部屋に棲んでゐたのを見たことがあるから。

午前九時三十分

ここに、午前九時三十分、と制限された時間が存在する。

誰にも、どの家庭にも、どの階級にも、この特定の時間が、重大な意義があるといふわけではない。午前九時三十分に、ぐらぐら沸てる

る者もあらうし、駈落ちをする男女もあらうし、ボスから馘首される職工もあらう

だが、この時間を意義づける建物に株式市場といふのがある。以下が、そのスケッチである。

多數の男達の上に、八角形なプラットフォームが突き出てゐる。高い天井から滑り落ちる日光は息衆らしい室内のところどころに、赤く禿げあがつた老人の頭や、中世紀の兜を冠つたやうな電話交換手や、ダイヤモンドのピンなどを照して、不思議な水族館のやうな奥深さを暗示してゐる。折々、背筋の這入つた服を着た電報配達が、人間の間を縫ふて叫んで歩く。正面奥の壁の上には、九時二十九分を差した時計が――少しづつ三十分の方へ近づいて行く。と、突如、大きい室内の一隅から、けたたましい鈴の音がある。この鈴の音は、一齊に、針でつついたやうに群集を昂奮させる。プラットフォームの下は、パスチールを占領しようとする群集のやうに騒がしくなる。プラットフォームの上では、電話交換手と電信技手とが、フライ・パンへ乗せた脂肪の塊のやうに上半身を動かし初める。いろいろなボーイ達が電氣人形のやうに、その上を駈け廻る。

そのとき、群集の中から、誰かゞ獅子のやうに吠えた。すると、その聲に應じて、五六本の手が、カフスの釦を光らして空中に飛び揚がつた。綺麗に口髭をそつた口がぱくりと開いて何かを盛んに叫び續ける。群衆の騒音のために、聲は聞こえないで、獨りに鯉の口のやうに開いた口元だけが見える。[illegible]つたり、拳にかたまつたりする。じつと見てゐると、が、天井へ向つてジャンケンを挑んでゐるやうだ。プラットフォームに立つて、眼から火が出る程一同を眺めてゐる青年が、始終、何かを紙片へ書き撲つて、後方へ投つては、またじつと群集の動揺を見澄ましてゐる。

私は、自分の傍にゐる一人の紳士に、この不思議な光景のわけを訊ねてゐた。

『あの若い男の鉛筆の一本棒は、一仙の八分の一、多ければ棒の數が殖える――現物の相場が、かう云ふ風に書かれて、背後の鐵柵へ投げ込まれるのです。御覧なさい、柵の中の小僧が拾つたでせう。あれに、時間の印を押すと、すぐ電信技師へ渡されるのです。ものの一分間もたたぬ内に、アメリカ中に、此處の取引相場がわかります。何と面白いでせう?』

次に、私は拳の出來を說明してもらつた。

『握り拳は、はしたのない値段ですよ。一本指は、今云つた一仙の八分の一、四本指と拇指とをはなしてから閉ぢるのが四分の三仙、三本指は三分の一仙……都合八つの符號があるんです。かうやつて、先物契約の取引をしといて、種々の手はずをきめると、現金を拂ふのです。』

この說明は、よく私にはわからなかつたが、ただ、私の眼に映つた

範圍では、拳や指を突き出して、何かを吶號する人間達の表情が、敵軍に虐殺されやうとする捕虜の群のやうに悲痛であり、また、默つて傍からそれを見てゐる人間の眼は、洞穴の奥の猛獸のやうに凄く、頭をうなだれて、そこを出る紳士の顏は死骸のやうに蒼ざめて居り、しかも、一歩彼が街頭へ出るや、前記の近代的ハムレットとして旺んにうす氣味の悪るいソリロクエイを演じて歩くのが、まざまざと印象されたのである。

午前九時三十分！　煩雜な資本主義文明下には、この時刻になると、原始人が獸を屠つたと同じ意味で、天井へむかつて、拳や二本指を突出して、勞働者と農民の生産のかすりを取つて、一生暮らしてゐる前脚の發達した紳士諸君の存在することを記憶して置くのも、讀者の利益にはならう。

浚渫船

私は、アメリカで、ただ一艘の浚渫船を記憶してゐる。と、云つて、同じ不恰好な機械を一つしか見ないといふことではない。この特定な浚渫船は、岡本米藏といふ一人の日本人のことに關聯してゐるから、興味と苦笑とをもつて憶ひ出されるのである。

一としきり、ニユー・ヨークに『より大なるニユー・ヨーク』運動といふ、商業主義のキヤムペーンがあつた。その頃である。市内一――世界一を誇稱した例のウルウオース・ビルの一室に、『牛』の著者岡本米藏氏が土地會社の事務所を開いた。何でも、ニユー・ヨークがどんどん膨張するといふ一般景氣に應じて、岡本氏も、ニユー・ヨークの土地發展に着目されたと見えて、裕富な日本人の間に、將來ニユー・ヨークの住宅區域になつて發展するといふ見込みのある、ニユー・ヨークとニユー・ジヤージイ州との境目にある一定の地所を、株券拂込か何かの形式で旺んに賣り出したのであつた。その募集に應じた日本人では、爵位のある人も、銀行家も、富豪も、宗教家も澤山にあつたといふ噂である。それが、どうした機みか、確か『朝日』だつたと思ふが、岡本氏の土地會社は確乎たる基礎のないものであるといふやうな記事が出て、一時非常に問題になつたことがある。私の關係してゐた新聞が、その問題を取り上げて、日本から渡來した二三の法律家の肩を持つたところから、岡本氏經營の會社に起訴された。訴訟がはかどらぬうちに、新聞の持主の高見といふ醫師が、訴訟費を出し澁つたとかで、結局何にもならず終ひであつたが、――偖て、表題の浚渫船が怪物のやうな姿を出すのは、ここからである。私は、一度好奇心から、土地會社の指定した地域を見て置かうと思つた。そして、見たのである。それから、あとになつて、暫らくニユー・ジヤージイ州に働いてゐたことがあつたので、見飽きるほどこの指定地域なるものを汽車の窓から見ることとなつた。

聖書にこんな文句があつたと思つてゐる。『なんぢら、葦の戰ぎをに來たりしや。』つまり、それなのである。將來グレーター・ニユー・

ークとなるといふ豫言の下に、邦人の汗水を流して貯へた金の投せられたのは、滿目蕭條として蘆の戰ぐあるのみと形容されさうな、じくじくした沼地であつて、地平線の杳か彼方に一條の鐵橋がダッシュを曳いてゐると、その少し手前に、小兒が匙で池を掬つてゐるやうな、一艘の浚渫船が、十里の泥沼をかひ乾さうとして努力してゐたのである。夕陽が、蘆の梢に落ちかかつて、容は吸取紙が赤インキを吸ひ取つたやうに赤くなつてゐると、燻ぶつた煤色の浚渫船が、汲汲とした蘆の間から、どれつぢ、どれつぢ、といふやうな音をあげてゐる。――誠に近代的な良い景色である。これ以上に浚渫船の美を發揮すべき環境はほかにないのである。ここでは、浚渫船は完全な適應性をもつて周圍とニュー・ヨーク、ニュー・ジャージイ間の美觀を助けてゐたのである。私は、前に述べたとほり、同じ土地を屢々多く目睹する機會に接した。そして、その都度、一度なりと、同じ浚渫船を、但し、ちがつた地點に於て發見しないことはなかつたし、一度なりとその機械美に打たれないことはなかつたのである。――で、岡本氏の土地會社事件は、と云ふに、假令、そこに百年の後に、新住宅區域が發展しようとしまいと、私は、それとは離れて、一作の著者が、平常ならば素通りすべき沼地に、一個の美しいターナア式な浚渫船を發見させてくれたことにだけ感謝して、私の分は愼むと訣ずる。

物質[illegible]のニュー・ヨークへ來れば、非科學的な日本人の頭腦も、自然と浚渫の美[illegible]といふ氣分になり得るのである。

四

すこし涙つぽい話も必要とされる。

ニュー・ヨーク目貫きの富豪邸宅街と云へば、ハドソン河を眼の下にした、たんたん砥の如き、廣いリヴアサイド・ドライヴを措いて外にはない。この快活な、モダーンな、空氣の爽かなブルヴアードには、グラント將軍の記念碑と稱する、一宇の大理石の小塔があつて、その周圍に、春先のはしりのシャツの縞模様のやうな芝生が、やんわりとした土手の曲線を見せて伸びてゐる。時は、春でなければならない。鋪道の傍らのベンチに掛けてゐる女中の編物は、情人のスエータアを縫ふ春の毛糸でなければならない。愉快げに揮ふ紳士のステッキに春の微風が鳴り、いそいそとランデブーに急ぐ淑女の靴に、オバーシュースなどを穿かせてはいけない。ともかく數千組の夫婦や男女が通過し、數千の獨身者があとから彼等を羨望して散歩してゐる。たきに失業中の勞働豫備軍か、新聞紙を枕に安眠してゐることもある。からいふ通行人からいふボロムナードの傍らに、數十本の可憐な櫻木の列がある。よく見ると、紙屑を千斷つて吐きつけたやうな花をつけてゐる。更らによく見ると、それは、同じ花が咲いてゐる日本では、警察がその下で假裝して花見をすることをさへ禁じてゐる櫻の木、櫻の花であることを發見する。そして、更らに更らに良く見ると、ニュー・ヨークの櫻の[illegible]に、この[illegible]にに一際た

も聴へずに、さつさと過ぎて行くのを知るのである。しかも、この桜は、當時の大統領ウイリアム・ハワード・タフト君が、わざ〳〵日本から持つて來て、グラント將軍のために手植ゑをしたといふ、見る蔭もなく委縮しきつた名木なのである。人間は、時に、樹木のやうな無感情なものにも、感情が動かされることがあるものだ。

ブルックリン橋

最近フランスのサロンで問題になつてゐる清地清松君が、夜のブルックリン・ブリッヂを習作してゐた。カラリストである同君の繪は、ホイッスラー張りの青地に、點々と連らなる電燈を描き、その兩側に闇黒色の橋身を示したものであつた。アメリカ人の畫家にも、殊の外この鐵橋が好きらしくて、『雪のブリッヂ』などといふ畫題の寫實的な繪が、私の手元にある雜誌に殘つてゐる。河岸の遠くから見て、埠頭の雪に埋れた屋根に、疎らに突立つた檣やファンネルや、黒い冬の河身に際立つタッグ・ボートの白煙などを配し、遙か上空に、龍のやうに飛躍してゐる橋梁の、アーチ型になつた大支柱に雪の絡らんださまなどを見ると、フレデリック・ウエドモーアやウオータア・ペータアではないが、思はず、その繪よりも美しい文章を綴つて、折角の繪の價値を半分かた値下げしたくなる次第であるが、實物のブルックリンブリッヂなるものは、決してそんな美的對照となるモメントだけを持ち合はしてはゐないのである。

ネヴインソンといふ英國の畫家の描いた、同じ橋のエッチングがあるが、私の見た鐵橋は一番よくこの立體派的な取扱ひに近いものである。エッチングには、無數の線が曳いてあり、橋桁とそれが交叉した邊に、河の流れが想像され、遙か後景には円形な各種のビルディングが、ボール箱工場のやうに突立つてゐるだけである。

一體、この橋は、日本の里數に換算すると一里十町もある鐵橋で、橋一つ人一代の比喩のやうに、これを設計した技師は、この橋を竣工する匆々安心して死んだものだそうだ。こんなことを話し出すと、又アメリカ人の好きな統計が飛び出して來そうだが……いくら數字で説してもらつても、この鐵橋の殺風景な要素は消すことは出來ない。鐵橋を渡る。凄さまじい音響の渦へ投ずる覺悟が必要である。次には、人間の本能として、すこしでもいい景色を見たいと焦心る。見渡すところ、ただ、條々とした太い細いコイル状にしたケーブルの線があるだけである。欄干、これも牢獄の手摺りと一向に變つてゐない。せめて水だけでも見たいと思ふ、しかし、太い鐵管が遮つて眼は河の洋々とした流動に接することが出來ない、せめて、もう少し歩るいたら、と思つて、一間二間と歩るいてゐるうちに、知らず識らずのうちに、一里十町を突破して、マンハッタン島からブルックリン區へと這入つてゐるのが、實にブルックリン・ブリッヂの特色である。だから、私達は、ニュー・ヨーク見物と稱して、よく日本から渡來の人が、今日はウルウオースへ登つたあとで、ブルックリン鐵橋を見に

やしたよ。」などと、顔を撫で廻はしながら云ふのを聞いても、さほどに羨望を感じないのである。何となれば、ウルウオースと同じやうに、その人間は、きつとブリッヂなどを見ずに歸つたものにちがひないから。

中央公園

金で建築や景色を勘定するといふ不思議な本能を持つてゐるアメリカ人は、それが一枚の虎の皮でもあるかのやうに、ニユー・ヨークのまん中にある自然公園、セントラル・パークは、五百萬弗の光景であると、得意になつて傳へる癖がある。――かうなると、東京の植物公園のやうに、一歩何厘と散歩料を貪らねばならぬことになるだらうと想像されもしようが、それを貪らずに、萬民へ公開してゐるところに、アメリカ人の特質もあるのである。何と云つても、小石川の植物園の二十錢の入場料なるものは、ケチ臭い日本人根性を曝け出してゐるものと信ぜられる。で、中央公園であるが、ここは、地價の高いニユー・ヨークに、民衆を一平方哩に（そら統計！）九十六萬人も棲はせても、決して一フートの土地も妥協せずに、自然のままを公園にして、民衆の安息所とさせて置く。日比谷の狹隘さを知つてゐる私達には、これも出來ない藝當だと云はねばならぬ。公園内には、自然岩の瀧もあれば、乘馬用の砂路もある。ゴルフ・リンクもベースボール・グラウンドも、廣ろい湖から獨立した音樂堂もある。動物園は入場料を取らず、ロハ[illegible]ことが出來ない。彫像を云ふと、日本から來る[illegible]クリンを手負にして日本へ歸朝土産とするよりも、ひろびろとした平原に、サンドウイッチでも噛つて、ほんとのニユー・ヨークを發見して歸る必要があるのだ。一日に（再び統計！）一萬九千六百五十人の通行するといふタイムス・スケエアなどを、いくらうろついたところが、ブロードウエイがわかるものではない。それよりも、かういふデモクラテイックなせめてもの試みをアメリカの資本家が行つてゐるといふことを知つたら、いくらか彼等の知識が、日本へ歸つての役に立つといふものである。大部悲觀論になつたが、次にはこのデモクラシイの半面に伴ふ面白い現象を書かう。それは、この公園には、毎日何百人といふ放浪者が殆ど永住的にうろついてゐて、苟くも女と呼ばるべき年齡の婦人が、ちよつとでもベンチへ腰をかけるや否や、[illegible]バイ[illegible]に近づいて來て、手を替え品を替えて、一時的或ひは半永久的な戀愛をしかけるのである。甚しいのになると、巡回の警官が旺んにモーションをかけることである。女が直ちに肘の力を利用すればよし、さもなくて、ちよつと監の片影をでも見せたら最後、その戀愛技巧は微に入り細を穿つた手法で展開されるのである。かういふわけで、中央公園は一部の男女にとつては誠に好都合なランデブーたるを失はない。

この公園は五十九丁目から百十丁目までに亙る廣汎な面積を占めてゐるが、面白いことには、公園そのものが、場所によつて一種の聖域

の感化から來る地方色を帶びてゐるのである。例へば、五十九丁目邊の、第五街の富豪街寄りの邊では、山高帽をかぶり乘馬スカートを着けて、駿馬に横乘りをした氣取つた貴婦人なども多く見受けるが、百十丁目邊の猶太人の棲んでゐる中流以下の住宅地には、池もどんよりと腐つて無數の紙片が散在し、垢じみた子供達が叢に躍り狂ひ、怪しげなヹールをかぶつた女や、將棋盤のやうな格子縞の服を着た遊び人と稱する處女誘拐業專門の紳士などを多く見受けるのである。――いろいろな意味から、ウオール街と第五街との資本主義は、中央公園にニユー・ヨーク隨一の安全瓣を求めてゐると云つて差支ない。

軍國ニユー・ヨーク

非戰論者のウイルソンが、自動車で、第五街を練り廻はしながら、堵列した市民の大群へ一々帽子を脱いで、まつ白い尖がつた頭を下げて歩いた時分のことである。ウイルソンの自動車が、風のやうに過ぎ去る前に、ニユー・ヨークは、ドイツの中央同盟に宣戰を布告してゐたのである。大統領も樂な商賣ぢやない。自分の書いた文章のペリオドやコムマを、街へ出て、頭で打たねばならないのだ。

その頃、私は、今までのコムマーシヤルな都市が、急劇に武裝をしたのを目擊した。アメリカが戰時狀態に入ると、どんな武裝を凝らすか、ブルジョア・デモクラシイのミリタリズム化を、現象の上から見よう。――

町を歩るく。軍服を着た女が自動車を疾走させて行く。電車の車掌の大半は娘子軍によつて取つて代はられる。街といふ街には、細かにあらゆる驛や空地や柱類を利用して、一時の隙もあらば『軍時公債を買へ！』といふビラやポスターなどで埋められてしまふ。その下を徘徊する人口の最大部分が、軍人である。たまには外國から使命を帶びて來てゐる軍人もまじつてゐる。さうでない市民でも、一人として赤十字班や『軍時公債』購買者の釦を襟につけてゐない者はない。新聞は一齊に武裝して、各欄の擔當記者を動員し、敵國誹謗のプロパガンダに從事する。子供達は、サイドウオークを塹壕として、『敗ける方がドイツ人』ごつこをしてゐる。市民の軍國熱が猖獗になつて行つて、小學校からドイツの國風を賞めた教材を削り、大學はドイツ哲學を廢課し、街頭ではドイツ人の酒屋を襲擊して、『やはりビールはドイツ人に限る。』『叱ッ、飲め！』などと群集心理を發揮する。兩側を二條の大河で洗はれてゐるマンハッタンからは、河岸一哩以內をドイツ人が歩るいてはいけないといふ野蠻な命令が下る。そして、その河のまん中には、灰色に塗られた太西洋艦隊の一部分が、水兵の洗濯物を飜へしながら、無線電信の指令を待つてゐる。

夜になると、晝の軍國熱がすこしはさめるかと思へば反對である。都市の上空遙かに、何處から放射されたともわからぬ探照燈が、洋傘の骨よりも繁く空を照らしてゐる。重々しい兵器や食料を滿載した軍用自動車が、街路を轟かしながら、十臺も二十臺も續いてどこかへ驅け

て行く。時偶、黄昏などに、カーキー色の軍服を着た、若々しい青年軍人を積み載せたモータア・ローリイが、これもどこかへ、破産したサーカスのやうに急いで行く。誤まつて、それらの行方をでも穿鑿しようものなら、私達は、忽ち最初の隣人によつて『獨探』の嫌疑を受けるのである。戰地から出してゐる友人のハガキに、不思議とニューヨークの消印が捺してある。

しかもこの間、續々と徵兵された者が増して來て、しまひには、プロパガンダの目的から、各戸ごとに、その家で出征軍人を出してゐると、赤地に星を白く染め拔いた旗を揭げることとなつた。ビルデイングの大きいのになると、十丈ほどの旗に、星の數が五百も六百もついてゐることがある。これが、家庭の方でも出してあるので、結局、ダブル、トリツプルになるのだが――何も、プロパガンダの爲だ、國民はよろしく統計欲を一時引込まして欲しい。電車、地下鐵、停車場その他の公開場には、きつと、

『言葉を愼め！ 汝の隣人が獨探でないと誰が保證しようぞ！』

といふやうな文句が貼つてある。

それから、軍人熱の勃興である。私が知つてゐる或る猶太人の青年などは、同じ事務所に働いてゐて、始終ヨタばかり飛ばしてタイピストとふざけてゐたものであるが、志願して伍長になると、猶太語で「ギイク」するといふことはどんな事かを、社長の娘に暗示して飽をまう臉にさせたことなどを忘れて、肩で肱を張つて軍隊的敬禮を事務所へ示しにやつて來た。どこか[illegible]を見ないわけには行かない。そして、この爪先まで武裝したニューヨークを瞰おろして、夜な夜な『自由』の女神像は、高く正義の灯を翳してゐるのである。が、皮肉はこれからである。――その『自由』の女神像も、何門かの大砲で護衞されてゐるのだから。

煙草の一本買ひ

私が或る工場へ通よつてゐた時であつた。

どうせ一週間の週給は、次の給料日まで辻褄が合ふなどといふことは、アメリカ上陸以來經驗したことのない事實なので、いつも木曜から金土の朝へかけては、食ふや食はずの生活をするに定まつてゐるのだつたが、たゞ近代人の惡德として、煙草の斷れるのには實際閉口した。しかし、さすがにそこはニュー・ヨークである。

馬鹿臭くさい、西側の工場の多い第七、八街あたりへ行くと、チューイング・ガム、新聞、駄菓子などを商つてゐる猶太人のスタンドには、一箱十本五仙のシガレットを、一本一仙づつで賣つてるのを發見したのであつた。

一本半仙の卷煙草を、一仙づつで賣くことによつて、それらの猶太人は、原價からの儲けと、更らに小額の儲を累積することに成功した。これを、合法的な商策と云はば、大ビルデイングを三萬弗で田舍者に賣つて、そのビルデイングから儲けをするペテン師の方が、こ

かに紳士的商人である。しかし、木金土の朝へかけて、爪の先から數へて出す一ペニーづつは、土曜日の給金袋から引拔く一弗札にも該當するのである。そして、私達は、慾に縋りながらも、その一本一本を高い利息を拂つてまで購ふのである。どんな場合にも、無産者はかうして細かい處で搾り取られると同時に、彼等の貧乏をいたわり悲しむかの如き表情をした、浸透力の強い搾取制度が存在するのである。

同じ方法で、しかも公然と、財界の恐慌が來ると、新聞は失業者のために『無料食堂』といふものを拵へる。そして、それらの失業者から一行二十仙からの廣告料を頂戴してゐるのである。

葬儀會社 Inc.

株式組織葬儀會社――と云へば、時折、ニユー・ヨークの日本人が、日本人でも何でもなくなつた場合に、人間の遺骨として最後に搾取される、トマス・キヤメル會社といふ日本人會御用ききの葬儀會社が、頭に浮んで來る。この會社は、市の中央に脂ぎつた大ビルデイングを建て、ショーウインドオには、三人の人夫で運びきれぬほどの七寶燒の花瓶か何かを陳列し、つとめて葬儀會社らしくない體裁を飾つた葬儀會社である。私は、一度、警察沙汰になりかかつた沖繩縣人の自殺者の屍體の、同處にあづけてあるのを再檢に行つたことがあるが、夏のことなので、石炭酸を嚥み、剃刀で咽喉を切つた同人の屍體は、人間の通行する鋪道の直下の、ひよつとすると足下の窓から見えるやうな地下室に、死馬のやうに膨張して横へられたまゝになつてゐたのであつた。それが、非常に強烈な防腐劑をほどこしてあつて、その上乾燥のために煽風機で强風が送られてあるところから、一歩室内へ踏み込むと、ぼろぼろ涙が眼から落ちて、まともには屍體を正視することさへ出來なかつた。そこから出ると、私は、大理石づくめの廊下を拔けて、白熊の皮の仰々しく縱そべつてゐる應接室へ招ぜられた。私と對談する支配人を見ると、モーニングに太い金鎖を絡らませて、心なしか死人臭い葉卷を悠然と燻ゆらしてゐるのである。何を話すかといふに、この近代的モルフイアスは、先づ幾何死亡者が葬儀自動車に支出出來るかを尋ねるのである。價格に準じて、死人の待遇は各等級に別けられ、手數料に從つては、新聞廣告もして上げるし、ビルデイング内の禮拜堂も無料で借して上げる。幾何――？といふ話である。

偖て、この溺死した馬のやうな沖繩縣人は、自殺前に發狂してゐて、必要もない金額を持つてゐたのである。そこで、葬儀だけは普通に行つたらよからうといふ牧師の話もあつたので、十人並といふところを注文した。すると、その翌日の新聞には、三面記事に、麗々しく『予は死せりと雖も、櫻咲く邦の日本人である。願くば予の遺骸は、灰となして、秀麗なる山嶺から四方の海へ吹き散らしてなん……』とでも直譯すべき『名文』が載つてゐて、どんな大家が葬送したといふ風な文字の羅列を行つてゐた。密かに苦笑して、翌々日の葬式に列席

すると、三階の廣ろい一室はそれ自身に小寺院の建築様式を持ち、か細い日本人の牧師の祈禱の聲を壓迫するやうなパイプ・オルガンが四壁を震撼させて悲鳴をあげ、金具をちりばめた寢棺が、會社から出た花の山の中に半ば埋れながら据はつてゐるのであつた。それやこれやの派手な、大風呂敷的葬儀を營まれて、その十年も他人の奴隷になつて皿を拭いて暮らした沖繩縣人は、彼自身の關する範圍で葬成り名を遂げて、完全にロングアイランドの、日本人墓地の上中下と三層に分れた墳墓の最下底へ還元することとなつた。しかして、彼が、最後に徴發された資本主義からの税金は、『櫻咲く邦』の日本人であるが故に、驚くなかれ、日本金にして四百何十圓かに該當するのであつた。いや、骨まで舐るといふ諺は、決して卑俗な語呂ではない。

マデイソン角園

マデイソン・スケエヤと云へば、マツカーレイの『地下鐵サム』の日向ぼつこをする場所として、探偵小說愛讀者には一つの名所であるが、この四角な公園は、もつとほかの事柄で、より有名な、歷史的な一劃である。

それは、夜になると、必らずこの公園の東側に、社會主義者が大道演說をするからである。日本では官許されない、この種の大道演說は、ロンドンのハイド・パークと同樣、何の邪魔も暴力團の殴ぐり込みもなく、無事に夜毎夜毎の行事として、アセチリン・ガスの燈ノ[illegible]は開催されてゐな

ところが、どちらが先に他を模倣したのか知らないし

の隣りには、宗教屋が陣取つて、これも負けずに大聲で宣教をする。それと見て取つて、菜食主義者、賣藥屋、新案特許出願中的新便利機械の代理人などが、これもめいめいの不淨箱を立てて、しきりにニュー・ヨーク一般へむかつて手を振り足を踏み鳴らし舌端を揮ふのである。すでにこれだけの陣形が整へば、そこに勢ひ、聽衆の爭奪戰がはじまる。これは人間の本能である。宗教屋は、旺んにさくらを使つて、贋懺悔者を急造する。賣藥屋も然り、特許出願中も同じだ。これも人間の本能である。したが、道がに、社會主義者だけは、贋懺悔者といふものの使途がない。いくらさくらを使つて見たところが、せいぜいパンフレットを賣るときぐらゐにしか役に立たぬ。しかも、社會主義の精神として、そんなことをしてまでも賣藥屋と競爭する必要はないのだ。その結果として、最も痛烈な聲を絞つて、長髮をメヂユーサの蛇髮のやうに振りかぶつて悲壯な演說をしても、いつも人の寄りの惡るいのは社會主義者の大道演說である。又、その結果として、いつも同じ幹部だけの顏觸れが見えて、ちつとも新顏の殖えないのも社會主義者である。社會主義者の中にも智惠者はある。兎も角も最大多數の聽衆へ、、、、、、、への途を說けばいいのだから、と云ふので、今度は、他の同列者の企及し難い名案を捻出した。これには、大道宗教屋も香具師も追つかにくつと人氣を失墜した。これは、外でもな

い、司會者がぐつと外り身になつて、

『同志パーキンソンがこれから戰爭の根絶について演説されます。』

と紹介するや、いつもの顏觸れの割れるばかりの拍手に送られて石鹸箱に立つのは、ポップ・ヘーヤの、膝きりのスカートを着た妙齡の美人である。さういふ『同志どころ』を二三枚一と晩に入れ變へ差し變へて見せると、『地下鐵サム』でさへ『クラドック探偵』も客の蟇口も忘れて聽き惚れるといふ戰術である。が、しかし、この場合の聽衆から、何人の熱烈な社會主義鬪士が生れたかは、歴史は闃として傳ふるところがない。

金を使はぬ法

大阪の梅田驛には五錢十錢便所といふのが設けてある。あすこには、尿臭を帶びた婆さんが、金を受取つて待つてゐるが、ニュー・ヨークの大きい停車場へ行くと、小半丁も續いた便所の三重四重の街の一劃に、五錢銀貨を一つ鍵孔へ插入すると、自動的に扉が開いて、中でゆつたり用を足した上で、トインットの用具が一式備はつてゐるところから、顏や手を洗ひ、消毒した手拭を使ひ、次第によつては一卷の便所用の新しいペーパーを懷中し、もしその人間が些か疲勞して眠むかつたならぐつすり一と睡りして、ブラッシュで外套の塵を拂ひながら何食はぬ顏をして出て來ることが出來るのである。

又、私達は、宿賃のない人間が往々にして『旅行して來る』と云つて、どこかへ行つたきり翌朝まで歸へつて來ないのを知る。その方法は、私たちも時折應用したのであるが、夜、市内の地下鐵道の環狀線に運轉する地下鐵の一室におさまることである。ニュー・ヨークの先端バッタリーから、ダイクマンまで行くのに一時間、それから又バッタリーに引返へすともう一時間、かうやつて三四回も市の地下をぐるぐる廻はつてゐれば、大概の長い夜でも恥かしくなつて明けぬわけには行かない。時々車掌が、氣を利かしたつもりで搖り起こしてくれるが、これには扼殺といふ手もあり、車室を變へることも出來、奥の手は非道く醉つた風を裝ふといふ術もあるのである。零下何度といふ寒い大道に家がなく漂泊する人間が、五錢白銅一つ持つてゐるが爲めに生命拾ひをするのは、地下鐵の温度が暖房裝置のために快よくあたゝまつてゐるからである。

それから、もう一つ詩人小說家の類ひに、非常に便利な設備が存在する。が、斷つて置かねばならぬことは、すべて、かういふ便宜は、設立者が貧乏人を見透してさう仕掛けて置くのではなくて、積極的に貧乏人の方でそれの原的目的に近い方法を利用するまでなのである。だから、どの旅行案内を見たところが、こんな事柄が正式に報告されてゐるわけはないのである。で、詩人と小說家――これは古來の傳統に從つて、死んでからでなくては有名になれず、破産の宣告を受けてからでなくては原稿料が這入つて來ない職業人であるから、容易にレミングトンやアンダーウッドなどといふタイプライターを買ふは愚か、

借りることさへ出來ない。そして、アメリカの新聞や雜誌は、一切の原稿は、外部から來たものは、タイプで敲いたものでなくてはセークスピーヤでもユーゴオでもトルストイの物でも撥ねつける習慣になつてゐる。

さういふ詩人小說家にとつて、タイプライター試用所といふ店はどんなに役立つことか！　私も、大道に原稿らしい紙片を大事に抱へて步いた時代にはかなり厄介になつたものであるが、これらの試用所といふのは、普通の店で、タイプ機械を貸すための受付所なのである。店先に、その店の貸すタイプライターが、少くとも六七台は置いてあつて、その前に一脚づつの椅子が備へてある。サムプル用の機械であるから、字のタイプも磨つてはゐないし、リボンも時折は取り換へる。この無料タイプ所へ來て、いかにも熱心にその機械を試してゐるやうな顔をしては、旺んに下書きの原稿を所定の大きさの紙へ淸書するのである。オリヴアーなどといふ堅牢一點張りのタイプライターでも、月借りにすると一弗五十仙から二三弗までは徵收される。それを、一仙になるか千弗になるか、編輯者の食物と葉卷の香りから來る氣紛れに托しても、兎も角、未來ある、希望づくめの原稿をただで作り上げるのである。――しかも、すべてのものに欲望といふものが附隨するやうに、かういふタイプ試用所には、きつと女文士にならうとする若い女學校出の娘か、やはり光輝ある貧窮のどん底から文學的オリムパスをめがけて、突然のローマンスを夢みる思索的な美しい娘を瞠つて、同じやうに原稿を敲き上げてゐるのである。そして、その女の聰明にして氣高い瞳が、糸で曳かれたやうに、こちらを偸み見ながら、同じくこちらの文學靑年も一大ローマンスを敲き上げてゐることに興味を持ち、同情を抱き、はては文學的共鳴から二人は戀に陷つて、許婚の間柄となつた刹那、娘の國元から電報が來て、金持の伯父さんが遺産を彼女に與へて死んだとある――もし、このことが事實となつて實現する機會が、千萬人に二人の割でしか來なかつたとしても、無料タイプ試用者は、そんな空想を抱いて、そんな空想を紙の上に實現し、甘輕な物好きの編輯者の相恰をくづすことによつて、一躍第二のオ・ヘンリたることは絕無であるとは斷言出來ない。

そのほか、酒場で、ただ晝飯をしたためる外交手腕などもあるが、これは、禁酒以來酒が富豪の專有物になつたから略す。

セーラ・ボーリン

海員下宿を、どうやら日本人船員の間では、表題に似通つた發音をもつて稱呼してゐる。ニュー・ヨークの支那街に近い、××チャーレイといふ海員下宿屋の日本人の老人が懇意だつたので、困つたときには金も借りるし、その代りに帳場へ坐らせられたこともあつた。ここで殺人事件でもあると、私は早速裁判所出頭の權限を有ち、賭博が開かれると、警官へ一弗札の形をした「[illegible]」を握らせる役にも廻はつた。時には、チャーレイの セーラ・ボーリン ははやつた。[illegible]

中、危險な歐洲航路のボーイの供給を引受けて、年來の借財を一掃した上に、小一萬の金を殘したのは、ニユー・ヨーク海員宿多しと雖も、この爺さんの下宿だけであつた。その代り、荒い。一船のボーイ達が降りたと思ふと、下宿にがつがつして牙を鳴らしてゐた連中が、わあーツと突貫して行つて、擲り拳へ息を吹きかけて背骨をどやしつけながら、歡迎の愛撫に代へる。歡迎される方は、それに答へるに、忽ち骰子を取出して、一六五二を爭ふ。一と隅に場が出來ると、下宿中の五六十人がそれを四方から包圍する。と見る、赤裸々な船乘りどもの人山が築かれて、よくこんな古屋臺の家の天井が墜ちないものだと不審なほどに、彼等の行動が粗くなる。それはいいのだが、賭博の常として、誰かが敗ける。さういふときには、敗けた男は、匆惶としてチヤーレイ爺のところへ泣き込むのである。爺は、永い經驗で、金のないときの人間の弱點の捉えどころを知つてゐる。さんざんに當人を罵倒して、賭博の罪惡を說いてから、二十弗ぐらゐぽんと投つてやるのである。そして、論より證據、その男は、賭博の罪惡なることを再證するための如く、五分間でその金を擦つてしまふのである。擦つたが早いか、チヤーレイ爺は、早速に乘船を薦める。薦めても肯かぬ奴は、薦めて置いて、賭博無しの苦痛を思ふさま嘗めさせてやる。こんな風にして、ボーイや火夫水夫の群を、ものの三四百人も、あの船、この航路と操つてゐると、いい加減の錢になるのであつた。それでも人間が足りないとすると、時に上町の日本人料理屋などに賭場の出來てるのを知つて、腕利きの若い奴をそつと忍び込ませて、散々に絞り上げたのち、敗けた奴に動けぬほど毆してやつて、船へ引つこ抜くのである。

チヤーレイ爺さんは、一面好人物で、肥つたアイリツシユの女房を持つてゐて、始終彼女から鐵突を食はされてゐた。そのブロンクスの邸宅なるものへ、一度晩餐に呼ばれて行つて見たが、老人が無筆の上に、女房も無學と來てゐるので、儲けた金をどう使つたらいいかに苦しむやうに、誰も弄らぬピヤノを据えたり、女房の顏が這入つたら裂けそうな衣裳を拵へたり、軍樂隊ばかりの蓄音機を買ひ込んだりして、頗る途方に暮れてゐるやうな風であつた。その女房も、普通アメリカ人の主婦と云つた風はなく、何を話してもうまが合はず、ウイスキーでも喫つて、ゴツデム・ジヤツプ！と鎌倉ハムほどの拳でも揮つた方が人柄に合ひそうに思はれた。歐洲大戰も人類の不幸として收まり、アメリカの運輸業も平靜を恢復し、戰時ボーナスで頭に火のついたやうにはしやいでゐたボーイ達も、『船』のみじめさを痛感して怠け出した頃になると、チヤーレイ爺さんは、およそ世の中の道樂を嘗めつくした安心さを抱いて、ピヤノと韓羅とグラマフォーンと幾人かの混血兒を、アイリツシユの女房に托して、この世から、絕對に帯地といふもののない世へ去つてしまつた。

留置場

どこの國にも、留置場といふもののない國はない。どこの留置場も、決して抑留者に快樂を與へるやうには出來てゐない。私が酔つて兵隊に大道演說を試みて、『保護』を加へられた留置場も、支配階級が一定の目的をもつて建てた、その原案をそつくりそのまま採用した種類の監房であつた。

もし足枷といふもの、首枷といふもの、手錠といふものが囚人の身邊に、重い束縛を置くものとすれば、それは建築の完備しない古代中世紀の恐怖手段を兼ねた必要上の道具立であるに過ぎない。しかし、ニュー・ヨークの監房にはそんなものはてんで必要はない。長さ一間幅四尺ぐらゐの地下の獨房は、手錠と足枷と首枷と恐怖政策のすべてを兼ねてゐるのである。冷やかな、皮肉なセメントといふものの持つ人間に對する絶緣體的無關心は、抑留者を生きながら固く琺瑯質の壺に封入された蜘蛛よりも孤立にする。そこではどんなにその人間が煩悶しようと悲嘆しようと、沙漠に餓死する旅人のやうに、彼自身だけに放置されてある。

ただ、もしそこに一縷の光明があるとすれば、それは資本主義文明の餘德として、監視警官の金錢に對する慾望が發達してゐるので、抑留者は日本の警察のやうに所持品を沒收されないところから、隣に[illegible]いた鐵柵から差し伸べる手先に、一二片の[illegible]紙幣を握り[illegible]すことによつて、かすかながらも[illegible]一人間一の[illegible]を求め得るといふことである。

徒步

ニュー・ヨークに市街電車と地下鐵と高架鐵道との三種の交通機關がストライキを宣して、前後三日間、市內を大混亂に陷らしめたことがあつた。

最初の第一日で、小市民の大群はすつかり徒步に脅えて、それぞれの立場から愚痴をこぼしはじめた。市長が調停するだらうといふのは、彼等の唯一の希望であつた。由來、ニュー・ヨークほど、月給取、事務員、商店員、女事務員などの幅を利かしてゐる都會はないやうである。その間にあたつて、よく勞働組合があれだけ結束して、市の交通を一と渫ひに罷業狀態に陷らしめることが出來たかと考へると、第二インターナショナル主義でも何でもある程度までの、、、、、しないわけに行かない。

市街電車と云つても決して一線一會社だけの經營ではない。ブロードウェイを走る電車と、レキシントン街を行く線とは會社がちがふ。電車によつては橫町への乘換切符を出さぬのもある。高架線もマンハッタンを兩側から包んで走つてゐるし、地下鐵も內と外との線に別れ、ブルツクリン行も加はるので、かなり複雜な系統になつてゐる。

それらが一斉にぱつたり休止してしまつたのである。下町の事務所へ通ふ[illegible]

の裏に朦朧としてゐる。

　第二日！　地下鐵の入口へ立つと、いつも近くから走つて來る重い物を轉ろがすやうな、ニュー・ヨーク人にはきわめて親しみ深い軋音が、すうともしないで、運轉中止とともにパワアも停まつたところから、いつもの換氣法が行はれないので、中から湧き上がる空氣はもかりとして、ニュー・ヨークの內臟から發散するガスのやうな、かすかな酸味を帶びたカビ臭さが漂ふてゐた。

　走るもの、動いてゐるものの急に取拂はれた市街は、がらんとして妙にだだつぴろく、慣れつこになつた電車のがたんごとんを反響しない兩側の建物も壁も、ひどく發熱したあとの病人のやうに見えた。この間、新聞だけは賣れた。それらの新聞の賣れる理由は、きまりきつて『市長仲裁に立つ』といふ、埃及時代から刷つてあるやうな文句のお陰である。しかも、新聞を買つて讀む人間は、第一面の文句を讀むと、一樣に鼻の先でせせら笑つて、その新聞を捨ててしまふのである。その捨てられた新聞が、誰かの靴で踏み躙られるまでに、その市民は又別の『最近のニュース』を買ふ。それも捨てかけてゐると、街のむかうから號外賣りがやつて來る。かうして、街といふ街には、黑い人間の姿と白い新聞とだけが鮮かに動いて、世の中はかつきりとこの二つの色彩だけの生物に歸つたやうな淋しさを起こさせる。

　ニュー・ヨークは困つた。ニュー・ヨークはくたびれた。ストライキは、半ばその効果を收めかけた。しかし、この際、罷業者達の目算に入れてゐなかつた物に、靑バスと自動車とがあつた。靑バスだけは、ビル[illegible]れなかつた　ストライキに參加しなかつた。それからタキシー、これは書き入れ時とばかりに、旺んに暴利を貪つた。報酬を貪つて十五仙しかなかつたタキシーの運轉士が、晩になると二三百弗の札束をポケットから出して飛び切りのウイスキーを煽ほつたなどといふのは、二日目の微刑罪に陥らぬ範圍の不正利得として誰しもが知つてゐる事實であつた。市長は焦心り出した。市會議員達は自動車の暴利を痛切に指摘した。そして第三日の朝から、市內運轉は一切一弗といふ觸令が出たのである。　私の知つてゐる限りでは、これが抑も圓タクといふ言葉の最初の鑄造であつた。第三日！　雨が降つた。市街は忽ち洋傘の海になつた。雨の降るさ中を、バスに乘らうとして小さな車輛を四方から襲撃する女の群集を、のんきな活動寫眞師がキャメラを向けて撮してゐる。すでに內容の充實してゐるバスは、申譯けばかりにちよつと停車して、すぐ群集を蹴散らして急いで行く。紅い帽子や鐵色の靴下が、篠のやうに降り濺ぐ雨の中にバスを中心に離合集散する。ニュー・ヨーク七萬臺の自動車は、個人所有と否とに拘らず、警官の命令で、どしどし通行人を載せさせられる。それでも足りる筈はない。店といふ店は大概がらんどうで、いつもは女で充滿しきつてゐるデパートメント・ストアの如きは、淋しい顏をした店員が表に立つて通行人を見物してゐる。晴れた。そのとき、朗かに最後の號外賣の聲が雨霽れの街に響いた。その觸れ聲は、斜めな日光に冴えて響いた。

『ストライキは終つた！　ストライキは――』（了）

英雄イブン・サウドと現代アラビア

岸　東人

(一)イブン・サウド

アラビア大沙漠に一英雄あり、その名をアブダラジズ・イブン・サウドと云ふ。彼はネジド國王にしてヘジャズ國王を兼ね、ワハビ教（回教の一派）によるアラビアの統一をその理想としてゐる。彼は祖先以來、歴代英才勇膽の人物を出したネジド領主の直系であるが、今より二十八年前は、仇敵イブン・ラシドのため父アブダラーマンとともに故國を追はれクウェートに放浪してゐた一青年に過ぎなかつた。然るに復讐心に燃え野心滿々たる彼は、一九〇一年のクリスマスの頃、少數の手兵を率ゐてクウェートを出發し、翌一九〇二年の一月遂に故國ネジドの首都リヤドを陥れて祖先の領土を回復した。

世界大戰にトルコが參加するや、英國のキッチナー元帥、ウインゲート將軍はトルコ皇帝（彼は回教々主を兼ねてゐた）がアラビア人を煽動して、聯合國に對し宗教戰を宣することを恐れた。その結果、英國の對アラビア政策が二人のエージェントによつて行はれることになつた。一人はエジプトに本據を置きフーセインの擁立によつてトルコの勢力を驅逐することを目的としたローレンスであり、他の一人はペルシャ灣に本據を置きイブン・サウドとの提携を策せるフイルビーであつた。英軍のダーダネル攻撃が失敗に終るや、英國はメッカにあつて教祖マホメットの直系と稱してゐたフーセインを擁立してヘジャズ國王の位に即かしめた。その目的はトルコ皇帝に代つて印度七千萬の回教徒を鎭撫せしむるにあつた。フーセインは奸智に長け、徒らに野心のみ大なる老人であつて、決してアラビア民族に號令するが如き人物ではなかつた。彼は聖都入場料と稱して各地から集る巡禮者より不當の金を貪つたり、その他の失政があり、非難の的となつてゐた。然し[illegible]てアラビア民族の一大聯邦を組織することを夢みてゐた彼は喜んで英國の意を迎へ、アラビアからトルコの勢力を驅逐するため彼の[illegible]三子ファイサルをしてローレンスとともにパレスタイン戰線を[illegible]し

め、アレンビー將軍の指揮の下に遂にシリアのダマスクまで進出してダマスク王國を創設した。然るにシリアは十字軍以來フランスが勢力を占めてゐたところなので、フランスのゴーロー將軍はファイサルに最後通牒を突付け彼を國外に驅逐してしまつた。

一九二〇年四月に至り英國は戰爭中に於るフーセインの功勞に報いるため、彼の第二子アブヂュラーをケラク（英國の保護國にして新名トランスジョルダニア）國王の位に即かしめ、ファイサルをメソポタミア（新名イラク）國王に推した。

リヤドに於るイブン・サウドは、フーセインが英國の走狗となつてヘジャズ國王を僭稱するのみならず、メッカに於ては信徒に對して横暴なる振舞ひあり、更にアブヂュラー、ファイサル等がネジドの周圍に國を構へてネジトを脅威するに至つては許すべからずとなし、遂に兵を擧げてヘジャズに侵入した。そのためフーセインは將に國外に亡命せんとし、メッカはワハビ教徒の馬蹄に蹂躪されんとしたが、フイルビーが調停を試み、英國はイブン・サウドに年金六萬磅を贈ることを條件としてヘジャズ侵略を中止せしめた。

然るに一九二四年三月三日に於るトルコ國民會議の結果、トルコ皇帝が回教々主たる地位をも奪はるゝや、フーセインはヘジャズ、パレスタイン、シリア、イラク及びトランスジョルダニア等に於る回教徒から回教々主に推戴された。この報道を耳にし且つ英國が中途から年金の贈與を實行しなくなつたことを憤慨してゐたイブン・サウドは、同年十月十三日遂にメッカを陷れ、次でメヂナをも占領してしまつた。イブン・サウドがメッカに入るや、巡禮から暴利を貪つてゐた多數の商店及び煙草店に閉鎖を命じ、フーセインの邸宅を六百弗で一商人に賣拂つた。フーセインは國外に逃れたが、後に退位し、一九二七年にサイプラス島で客死した。また彼の長男アリは英國の保の下に後バスラに亡命した。



イブン・サウド

イブン・サウドは一九二六年一月八日メッカに於て自らネジド

兼ヘジャズ國王たることを宣言した。これより先き彼と英國との間に、イラク及びトランスジョルダニアとの境界に關するハッダ條約（一九二五年十一月二日締結）が成立してゐたが、一九二七年五月二日に至り新條約を締結し舊條約を破棄した。英國はこの條約に於てネジト國王兼ヘジャズ國王の地位とその獨立を承認するに至つた。

イブン・サウドの故國ネジドの人口は僅に三千に過ぎぬが、今日彼の領土は紅海よりペルシヤ灣に亘りその南部はエメン、英領アデン背後地方及びオーマン王國等と境を接し、北部はクウエート、イラク、トランスジョルダニア等と接壤するアラビアの大部分を占め、五百萬乃至六百萬の人口を包容してゐるのである。

（二）ワハビ教とイブン・サウドの一族

イブン・サウドが信奉するワハビ教の開祖マホメット・イブン・アブダル・ワハブは一七〇三年にネジドの南部にあるウエーナーの町に生れた。彼は心身異常に發育し、十歳にしてコーランを學び終り、十二才で結婚した。彼はメッカ及びメヂナに巡禮した後父について法學を修め、再びヘジャズに赴き、後にバスラに遊學した。彼はこの時以後、元始回教の復活を思ひ立つた。當時のアラビア人はコーランを誦じ得ず、メッカに參詣することをも忘れてゐた。こゝに於てワハブは同胞の偶像崇拜を改め、ネジド國民をして預言者マホメットの信仰に[illegible]しめんとし[illegible]

ワハブの宗教改革は多數の歸依者を得ると同時に[illegible]くつたが、彼は「唯一新教經典」を著して益々布教に努めた。然るに彼に對する周圍の迫害が甚しくなつた時、今のイブン・サウドの祖先にしてウエーナーの南東二十哩を隔てたヂリヤーの領主マホメット・イブン・サウドは、ワハブを神より己に惠まれたる俊傑なりと信じ、ワハブを訪うて相ともに唯一神教のために戰はんことを約し、マホメット・イブン・サウドは劍にかけて誓ひ、ワハブは信仰にかけて誓つた。この時ワハブは四十二歳であつた。

當時に於るワハブ・サウド同盟の強敵はリヤドの領主ダーハム・イブン・ドーワスであつて、彼等は先づリヤドで一戰を交へたが、爾來三十年リヤドを除くアル・アレッド地方は宗教戰の巷と化した。そして一七七三年に至つてマホメッド・イブン・サウドの息アブダラジズがリヤドを占領するに及びイブン・ドーワスは遂に砂漠へ遁走してしまつた。歴史家イブン・ブシュルの記すところによると、前後三十年の戰爭で戰死したものワハビ教徒千七百人、回教徒二千三百人である。

サウド・ワハブ同盟の他の強敵はアル・ハサの領主ウレーヤーであつた。彼は大砲を有し、ダナの沙漠を横斷してヂリヤーに迫りこれを包圍した。然るに戰利あらず、大砲その他の武器を拋棄して敗走した。クアシムに於ても交戰數ケ月の後空しく兵を反した。

ワハブ[illegible]初めてマホメット・イブン・サウドに依つてから一七九一年[illegible]

[illegible]

ヤーはネジド砂漠恐らくはアラビア最大の町にたつた。そしてワハブはヂリヤーの中心であり、信仰の中心でもあつた。ワハビ教の名は即ちワハブから起つたのである。彼は「怠慢のため祈禱せぬものには警告を與へよ。悔悟せず祈禱を拒むものは殺戮すべし。」と説いた。彼の教は神と己との間に人と物の介在するを許さぬのであつて、死人――聖なるものを意味する――を祈禱することを許さず、堂塔伽藍は破壞し盡された。最もよき墓は見えざる墓だとされた。禁慾は彼等の生活そのものであつた。今日に於てもワハビ教徒は禁酒、禁煙は云ふまでもなく、一切の装飾を用ふることを禁じられ、また高利貸を業とすることも禁じられてゐる。知るべしワハビ教はキリスト教に於る清教徒の如くなることを。

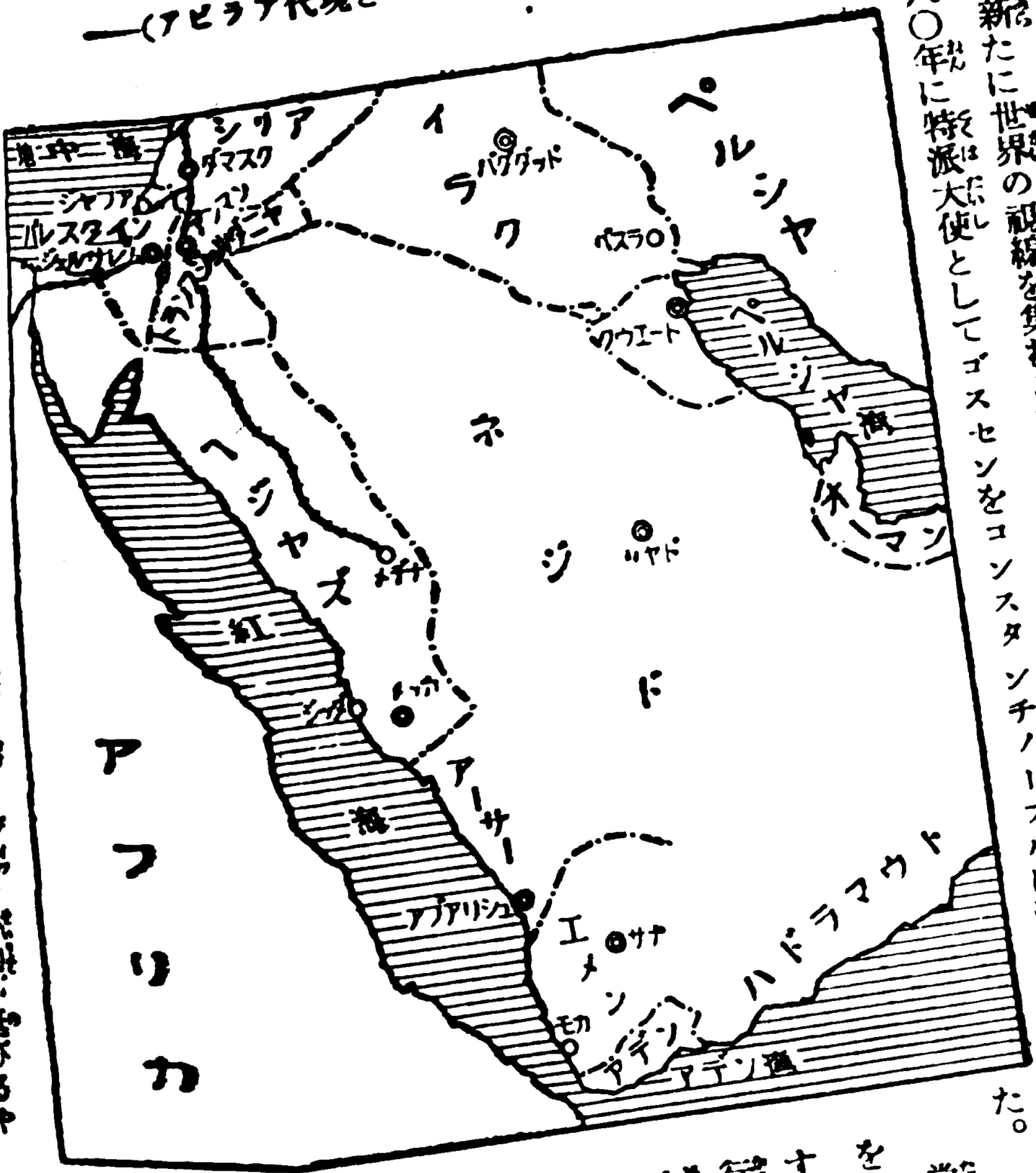
（三）イブン・サウド一族の沒落

ワハビ教が普及されるとともにネジドの勢力も大いに振ひ、第十九世紀の初頭頃には全アフリカを風靡し、遂にメッカ、メジナ等の回教聖地をもその勢力圏力に抱擁するに至つた。回教々主を兼ねてゐたトルコのサルタンはエジプトの太守メーメッド・アリを誘ひ、ヘジヤズからワハビ教徒を驅逐しメッカを回復させようとした。そしてメーメッド・アリはメッカを回復し得たが、ワハビ教の教義そのものを撲滅することは出來なかつた。一八四〇年にトルコ及びエジプトの軍隊がアラビアを撤退するや、ワハビ教徒は再び集合し、時の教主ファイサル・イブン・サウドに新都をリヤドのオーアシスに建設した。ワハビ教主の地位はイブン・サウド一族間の長子または年長者に與へられるのではなく、最も信望あるものがその地位に即く規定である。從つて若し適任者なきときは一族間に紛擾を生ずる虞があつた。一八六五年にファイサル・イブン・サウドが死ぬと、果して一族間に紛擾が起つた。ファイサル・イブン・サウドはアブヂユラー、マホメット、サウド及びアブダラーマンの四人の子を殘して死んだが、長男のアブヂユラー及び三男のサウドは教主の地位を目的に兄弟垣に鬩いだ。然るにトルコのサルタンは機會はよしとペルシヤ灣沿岸約二百七十哩の土地を占領してしまつた。同時にネジド北部にあるヘーエルの首領マホメット・イブン・ラシドは、トルコの援助の下に前主イブン・サウドの領土を侵略してリヤドの領主となつた。そしてファイサルの次男マホメットのみをリヤドに留まらした。時に一八九二年である。この時、家を亡ぼし祖先の領土を失はしめたアブヂユラー及びサウドは死亡し、末子アブダラーマンは家族とともにクウエートに逃れ、領主ムバニックの保護を求めた。かくてワハビ教はイブン・サウドの一族とともに滅亡したかの如く思はれた。

（ロ）アラビアと烈强の接觸

アラビアが國際政局の一重點となつたのは前世紀の末葉である。かのベルリン・バグダッド鐵道計畫線が發表されたのは一八九九年であ

つたが、東方の終點はペルシャ灣に臨むクウエートであつた。かくてゾベーデー女王が「アラビア一千一夜物語」を編んだ故都バグダッドは新たに世界の視線を集むるに至つた。これより先き獨逸政府は一八八〇年に特派大使としてゴスセンをコンスタンチノープルに派し、英



露の勢力を壓倒せしめたが、トルコ帝國に於ける獨逸の勢力が延びるや
くにたつたのは、キャミル・パシャの宰相たりし一八八五年より一八
[illegible]

ア鐵道會社を組織してゐたが、時を同うしてアラビ[illegible]勃興し、單にメッカ、メヂナ等の聖地に於てのみならず各地にその形勢が現はれた。トルコのサルタンはこの形勢を促進するため急いで電信の敷設を命じ、ダマスクよりメッカに至る鐵道の測量をさせたりした。

當時ペルシャ灣に滯在してゐた英國のエージエント等はこの形勢を見て不安ならざるを得ず、何人かドイツ及びトルコの勢力と拮抗するものを見出し、これを援助することによつてドイツの「東方進行」を妨害しようとした。その結果、白羽の矢がクウエートに亡命中のアブダラーマンの末子アブダラリズ・イブン・サウドに立つた。イブン・サウドは二十一歳の青年であつたが、聰明にして深慮遠謀あり、一意故國の回復を願ひつゝ援助者を物色してゐたのであつた。クウエートには故國ネジドに於て仇敵の支配を受けるのを肯じないものが多數集つてゐたので、イブン・サウドは彼等からも多大の便宜を得てゐた。

この時のアラビア内地は經濟的に非常なる疲弊を來してゐた。のみならずマホメツト・イブン・ラシドは無力にして内亂の兆があり、一般に秩序と平和が失はれんとしてゐた。そしてワハビ教徒は以前中の教主アブダラーマン及び勇敢なるイブン・サウドの指揮を仰がんことを希望して已まなかつた。起事は來るこの機會を捉へイブ

（五）リヤドの回復

ネジドはアラビアの中央に位してゐる。首都リヤドに達するにはペルシャ灣岸のオジエーアよりするのが最捷徑である。一九二二年に英人アミーン・リハニは駱駝に乘りオジエーアよりハウフアウを經、ダーナの沙漠を過つてリアドに達するに十日間を要してゐる。近年リアドに足を踏み入れた外國人はリハニの外に英人リーチマン（一九一二年）とフイルビー（一九一七年）があつたが、彼等は皆この通路をとつたのであつた。

一九〇一年の暮、イブン・サウドがクウエートを發した時、彼は僅に二十人の手兵を率ゐてゐたに過ぎぬ。然し此等の兵士は十分に武裝せるものであつた。翌年の一月初旬リヤド附近に達し、豫て謀し合せてあつた同志その他のワハビ教徒に迎へられた。そして夜陰に乘じてイブン・ラシドの哨兵を鏖し、喊聲を擧げて宮殿に肉迫した。この突然の襲擊にイブン・ラシドは防戰の暇もなく、若干の從者とともに沙漠の中遠く逃れ去つた。イブン・サウド歸還の報一度傳へられるや、所在のワハビ教徒は響の音に應ずる如くに呼應し、ネジド國は完全にイブン・サウドの手に歸つた。

イブン・サウドは本年四十九歳、長身にして筋骨逞しく、稍反身になつたところは堂々王者の風がある。彼の面貌はアラビア人の特徴を帶びてはゐるが、黑くない。顴骨も秀でず、鼻の形もセミティック特有の[illegible]料を用ゐる。彼の性格は多血質で、容易に激怒するが、雄辯にして頓才に富み、諧謔を好む。イブン・サウドのネジドに於ては、ワハビ教の教義がそのまゝに實行されるのであつて、「正義は國家の基礎なり」とされてゐる。刑罰は峻嚴で、笞刑と斬首は屢々行はれる。アラビア人殊にベヂューインは剽悍無比で、ヨーロッパ人のアラビア旅行記には屢々殺人的と形容されてゐる。また沙漠は盜賊の横行に任せてあつた。然るにイブン・サウドの威令が行はれるやうになつてからは、沙漠の旅行も安全になつた。ネジドのアラビア人は「イブン・サウドの笞はペルシャ灣からヘジャズに屆く」と云ひ、無人無生の沙漠中に於ても惡事を行はぬと云はれる。

（六）イークワン

ワハビ教徒はワハビ教を布教し、またはアラビアから外國勢力を驅逐するには教徒の一致團結が必要であることを知つた。こゝに於て彼等はイークワンの制度を復活した。イークワンは兄弟の意であつ[illegible]狂的なるワハビ教徒の團結である。ワハビ教が今日の隆盛を[illegible]ン・サウドの領土がアラビアの大部分を占むるに至つたの[illegible]クワンの活動によるのである。

イークワンは一九〇八年にネジド東部のアル・アル[illegible]の中心地として選んだアル・アルタウイヤはイラ[illegible]

ル・シャンマール方面よりの通路にあたる給水地であつたからである。この地方の土民の首領ファイサル・イブン・デウイシュが選ばれてイークワンの指導者となつた。彼は忽ちにして民心を收攬し勢力隆々たるものがあり「イブン・サウドの利劍」と呼ばれるに至つた。一九一三年にネジドに於るトルコ人を驅逐しイブン・サウドをしてペルシャ灣へ進出せしめたのは、彼イブン・デウイシュ及びその部下のイークワンであつた。また一九二〇年にアーサーの東部を占領し、翌年西部アーサーの首領ハカン・アル・イドリシをしてイブン・サウドに臣服せしめたのもまた彼である。イブン・サウドが紅海へ出ることが出來たのはアーサー征服の結果である。最後にイブン・サウドの勢力がパレスタイン及びトランスジョルダニアの國境にまで及んだのもイブン・デウイシュの戰功に負ふところが多い。今日アラビアに於てイブン・サウドの脅威を免れてゐるものはエメン、ハドラマウト海岸地方及びオーマン王國あるのみである。但し此等の地方と雖も大沙漠その他の地理的事情がイークワンの進路を阻止なかつたら、彼等もまた必ず脅威を受けてゐたにちがひない。

世界大戰前までは微弱なるトルコの勢力がイブン・サウドの領土を包圍してゐた。然るに今日に於てはトルコに代つて大英帝國がこれを包圍してゐる。紅海及びペルシャ灣は英國の艦隊によつて貿易に封鎖され [illegible] イークワンもトランスジョルダニ [illegible]

る。昨年末から今年へかけてワハビ教 [illegible] ダニアを侵略しつゝあるといふ報道が傳へられたが、三月十二日によ り英國植民大臣エメリーは議會への報告中「イブン・サウドは直接の責任者にあらず。」と云つてゐる。近時イブン・デウイシュの威望はイブン・サウドを凌ぎ、且彼はイブン・サウドが英國との條約を尊重するを快よしとせず、兩者の間軋轢ありとの風說さへ行はれてゐるから、侵略の指揮者がイブン・デウイシュであることは想像に難くない。然し成功の望みなかるべきは前述の如くである。

イブン・サウドの覇業は何所まで發展するか、また何時まで續くであらうか。古來アラビアに於ては宗教戰の後に幾多の新國家が生れた。イブン・サウド如何に智謀あり、イブン・デウイシュ如何に俠勇と雖も英國をアラビアから驅逐することは不可能である。イブン・サウドなき後のリヤドが果してワハビ教徒のメッカたるや否や、これまた疑問とせざるを得ない。

(七) 委任統治地域

ヴエルサイユ媾和會議は、アラビアに於る統治問題は委任統治によつて解決し得べしと速斷した。然るに戰後のアラビアに於ては、ウイルソン主義は全く幻滅を經驗した。民族自決の名は美しいが委任統治制度の一種異なる使命は有名無實に終つたのである。アラビアに於 [illegible] パレスタイン、イラクは [illegible]

[illegible]

後にケマル・パシヤの如き俊敏にして明敏なる指導者を得るにあらざれば「アラビア人のアラビア」の出現する日は未だ遠し[illegible]

スに對する意地からと、フーセインとの約束を重んじファイサルを傳ひ來つてイラク國王たらしめたのである。ファイサルの卽位は住民の一般投票によつて決定されたものであるが、その一般投票が英國によつて巧みに操縦されたことは云ふまでもない。然し英國は兵力によつて人民の謀叛を鎭壓しつゝ一九二二年にイラク憲法を制定せしめ、一九二四年には軍事條約を締結して秩序を囘復せしめた。

昨年秋ファイサル王は首相ジャファアー・パシャとともにロンドンに赴き新條約を締結したが、右條約に於て英國はイラクの獨立を承認するとともに、イラクの外交に關しては助言及び監督の權利を保留した。そしてイラクの國勢が順調子に發展すれば、一九三二年を期してイラクを國際聯盟に加入せしめることを約した。然るに右條約はイラクに於て輿論の反對を受け、そのためジャファアー・パシャは辭職したが、本年五月開會された議會の分野は政府黨たる進步黨七十名、反對黨十名、中立八名であつた。

石油を以て有名なるモスールは同時に地味頗る豐沃で、人工を加へずして收穫のあるのはイラク地方にたゞモスールあるのみである。モスール地方の處分は英國とトルコとの係爭問題となつてゐたが、國際聯盟は一九二五年にモスールをイラクに併合させてしまつた。英國はイラク占領後、鐵道を敷設し專ら經濟的開發に努力したが、モスールの併合はイラクの經濟力を益々發達せしむる結果を見、政治上の係爭も解決しつゝある。

（八）　アラビア人のアラビア?

世界大戰はアラビア人の生活及びその國民主義に大なる刺戟を與へた。大規模な軍隊の輸送、ヨーロッパから來た多數の旅行者、自動車その他文明の利器の應用等を眼前に見たアラビア人は新文明と自分等の生活とを比較して見た。その時以後、アラビア人のヨーロッパ化が各地に見られるやうになつた。今や各地の首領等は駱駝の代りに自動車を使用するやうになつた。彼等は子弟をベイルートの米國大學及びバグダットの回教大學に入學させてゐる。民族自決の思想はアラビア人をして共同一致の必要を感ぜしめた。殊に回教々主の滅亡したことは、新時代の回教徒間に教主排斥の傾向をさへ生じせしむるに至つた。カイロに開催された汎回教會議及び一昨年のメッカに於る汎回教會議に於ても教主推戴の問題は解決されなかつた。この事實は新しき回教が古き汎回教主義に代らんとしつゝあり、而も何處にも新指導者を發見し得ざることを語るものである。今日回教々主の候補者として目されてゐるものはアフガニスタン王アマヌラー、エジプト太守及びイブン・サウドであるが、彼等は何れもその故國以外の信徒から推戴される可能性を有たぬのである。

回教に宗教改革運動の起りつゝあるのは最も注目に値する。今より四半世紀前の汎回教運動は單なる宗教上の問題であつて、一人の回教教主の下に全回民を統轄せんとするものであつたが、現在に於ては

の區別を論じない。トルコ人、ペルシヤ人、アラビア人、バーバー人、印度人、黒人、蒙古人、支那人、馬來人たるとを問はず社會上、政治上に於ては機會が均等に與へられる。彼等は同教徒は皆兄弟であると信じてゐるのであつて、たゞ異教徒のみが彼等から排斥される。故に新時代の回教徒は回教徒の理想は國際聯盟の理想に近いものであると云つてゐる。然し今日の改革運動は國民主義者がその中心であつて、彼等の待望する國民生活に回教を適應せしめんとするのである。故に彼等は回教の傳統と舊習とに反抗し、コーランの教義に對して高等批判を下すのである。今や回教國アラビアはワハビ教、宗教改革及び國民主義のクロス・カーレントの中に旋回せんとしてゐるのである。

本年四月ジヤフアーに於て青年回教徒會議が開催されたが、パレスタイン各町村からの代表者百二十名が集つた。そして彼等は回教青年會を創立せんことを決議した。基督教青年會はアジアのため多大の貢献をしたが、回教青年會はこれに取つて代らんとするものであると云つてゐる。これまた回教改革運動に於る一つの轉機である。

アラビア人の國民主義、アラビア人の白人に對する叛逆は吾人をして大いに共鳴せしむるものがある。然し現實に即してアラビア民族を觀ると、彼等が益々現代文明を攝取し、更に共同動作の訓練を經、最後にケマル・パシヤの如き俊敏にして果敢なる指導者を得るにあらざれば「アラビア人のアラビア」が出現する日は永遠に來るまい。實にドヴエベル・シヤンマールのベヂューイン、シリア及びイラクのアラビア人レバノンのキリスト教徒等を打つて一丸となすのは、人道、宗教以上の偉大なる力の示現—奇蹟—に俟たねばならない。西部アジア諸國をも包含するアジア聯盟を主張するもの丶反省すべき點である。

（アラビア語のイブン—IBN—は子を意味する。アブダラジズ・イブン・サウドは即ちサウドの子アブダラジズである。本篇にイブン・サウドとのみ記したのはアラビア以外での通稱に倣つたのである。—筆者）

映畫と女性の近代型

新居格



一

映畫は現代の社會生活特に若かい時代の人々に深かい影響をもつてゐる。映畫のもつ影響力に就いては各國もそれ相當に留意してゐる。勞農ロシヤのソヴイエット政府が映畫に宣傳的内含をさせたのは云ふまでもない。今各國は映畫の上では一種の國際戰を演じつゝある。英國の如きは自國映畫を防護してアメリカ映畫に對抗させるべく議會の問題にさへなつた。しかしこゝではそれらに就いて詳細に談る必要を見ない。それは映畫がそれほど影響力をもち、それほど關心すべきものになつてゐることを暗示出來れば足るからである。

筆者はこゝではその映畫と女性との關渉に就いて述べてみることが主題である。

アメリカの映畫雜誌「クラシク」に「社交婦人は何故映畫界に於いて失敗するか」と云つた風の記事を見たことがある。その趣旨を要約すると亞米利加の社交婦人は、綺麗な服裝、高價なシフオン、贅澤な[illegible]行も、乘馬も、スポーツも、ダンスも殆ど何一つ出來ないものはないに拘らず、彼女等晝閑婦人は何故映畫界に身を投じたがつたか。それは彼女等が現在の地上では、その富をもつてしてもどうにも出來ない王女、王妃乃至仙女の如きにでもスクリーンの上には表現しうるからである。さうしたものに扮し、そして無數のファンの憬仰を持たうとした彼女等の望み、それこそ映畫がアメリカのソサエチーウーマンにもつた影響の一端と見ることが出來るのである。しかるに、映畫界に身を投じたアメリカのソサエチーウーマン達は、では何故失敗したのであるか。それは彼女等我儘である晝閑婦人達は身をスタヂオに投ずると共に直ちに幻滅に面接しなければならないからであつた。**彼女等の面接する現實は王女王妃に扮する準備に取りかゝるのでは決してなく、**單なるエキストラとして、しかも規則正しく勞苦多き辛働をしなければならなかつた。それは彼女等の堪えうるところでなく、從つて多くが中途から逃げ出す。彼女等のうちからスタアとなるものが極め[illegible]

とのことである。しかし右の事實の如何に拘らず、映畫がさうした種類の婦人にもつところの牽引力は、尤だと思へることである。

次ぎに、スター女優になり得た連中――よし、その花形時代は極めて短期間で、後より現はれ來たる登場者にその座席を讓る譯であるにしても――スター時代にもつ華やかにして豪奢とも云へる生活はたしかに女性達の一部に強い憧憬を與へるであらうとは云へるのである。グロリア・スワンソン、ポーラ・ネグリ、コーリン・ムーアなぞの受取る收入は小膽者を驚かすに足るのである。從つて彼女等の私生活も自ら快適ともならう。而して彼女等は無數のファン就中、クリッパア、フラッパアの好ましき對象として存在する。

私は「現代の登場者」としてベーブ・ルースの如き野球選手（一切の運動競技のチャンピオンを含む）リンドバークの如き飛行家（兩極探險者及び未踏の高山を攀るものをその列に入れる）と共に、映畫俳優を數へてゐる。彼等は何れもファンをもつからである。而して映畫俳優がその最たるものであらう。死んだルウドルフ・ヴアレンチノにたいするアメリカ女の悲愁は驚嘆すべきほどであつたと聞くが、それは彼が一種のモダン・ヒーローであつたがために外ならないからである。

ヴアレンチノの死を惜んだものはひとりアメリカ娘許りではない。現世紀の影像エスペラントである映畫は國際的な通用をしてゐる。例へばホリウッドで製作されるセルロイドの卷物は世界の各地に映出されるが故に、銀いろのスクリーンにあらはれる俳優達は超國境的に融和されてゐる。であるから美貌の俳優ヴアレンチノの死を弔はなかつた若かき女性達が各國にそれ相當にあつたことは明かである。

試みに現在日本の青年男女に就いて調べてみるとすぐ分かることだが、彼等の多くの映畫知識の廣く且つ深かいことは驚くべきことである。專門の映畫人が映畫に關する萬般を精密に知得してゐるのは無論だが、私の測定をもつてすれば現代青年男女の映畫知識は通り一遍に知つて居るよりもむしろ專門的にと云へるほど知つてゐるかに思はれる。スター俳優の生年月日、出生地、經歷、髮の色、瞳の色、趣味性格の末に至るまで知つて居る。彼等の一々が映畫年鑑とか映畫のフウズフウを座右に備へてゐて暇さへあれば字引をめくる如くめくつてゐる譯でもないのであるが、彼等は彼等の一般常識としてもつ所のものが、僕等を驚かせるほどの程度に達してゐるのである。而してそれは女性も同樣なのである。

私の見るところが誤りでないとすれば、私は現代の若かき女性に影響をもつもの映畫の右に出づるものはないのではないかと思つてゐる。極言すれば、現代日本の學校教育は彼女等に少許の文字を與へた以外には殆ど何事をも與へず、而して彼女等がもつ感性並に[illegible]にたいする考へ方は映畫なぞにとつて培養された點が却つて多いのではないかと考へさせられる。それだから悪るいのだとは云はれない。私は悪るいと云へる部分よりも、いゝと云へる部分の多くを彼女等が

かち得たとさへ思つてゐる。この國の女性の近代型はその形式が映畫の示唆に負ふところ少くはないと云へるかも知れない。先づスクリーンの上に浮動する影像は低徊なき速度を以つて移行する。若かき女性から彼女等の疾患であつた感傷性を癒やし低徊趣味に代へるに科學的視野を與へたとすれば映畫は彼女等にとつて決して悪るい譯はない。

現代の若かき女性はこれまでの女の平均歩幅である五〇サンチをとつくに破つて平均六五・八から七六・八サンチの歩幅になつてゐる。彼女等の高度に於いてもつ七六・八サンチは日本人の標準歩幅の七五サンチを超える一・八サンチ大たちまさつてゐるのである。そして彼女等の歩數が一分間に約百三十四歩であることは彼女等は足の表現に於いて既に感傷性を見事に打破してゐると云へる。そこに映畫の影響が全然ないと果して云へやうかと私は疑ふものである。

近代型女性は較著にその表情力を加へ増した。ヴイヴッドに表情しうる方法は何時とはなしに習得しつゝある。映畫に現はれる女優の目またき特にフラッパア女優達の冴々した四肢の動き、色合多き擧措の諸表情・それらが感受性が強くて、柔撓性に富める若かき女性の觀客に印象を殘こさないとはどうして云へやう。樫の木のやうに頑固な保守家は映畫こそ女性に悪影響を與ふる禁斷の蕃草園のやうに忌み嫌ふが、かのセツクスアツピールの強いアメリカ映畫の或るものですらが若かき女性を[illegible]するよりはよき效果を齎すでもあらうと云ひたい。[illegible]の[illegible]を見ることも、、、、、、、[illegible]を見ることも、……てれらを見るからそれらの眞似事をしたがると解釋するのは取も直さず、解釋者の野卑を示し語るもので、聰明な女性達ならば修身の訓よりもずつとよくよき示唆をもつのである。アメリカ映畫は多くきわめて甘い通俗的見解の盛られたものであるが、そしてそれの彩色として性的魅惑を點綴してはゐるが、若しもそれを見る女性にして十人並の聰明性をもつてゐるなら、必ず次ぎのやうなこと即ち輕はずみの安つぽい戀愛行程は愚かしい結果を見るであらうこと、男性が好んで組み立てるトリックは如何に容易に、しかも巧みに叡智をもつ女性によつて他愛なく解きほぐされることか、そしてそれらの歸結としては女性はまず如何やうにあり如何やうに動くべきであるかと云つたことを知解しうる筈である。

もつと露骨に云ひ切るならば、彼女等は映畫を通じて男性が概して如何に間が抜けて居り、従つて男性を物の見事に制御することはどんなに容易くあることか、女性に聰明な俊敏ささへあれば彼女等の瞳のうちにロータスランドのあることを輝かし、そのすんなりした下肢には男性招喚の魅力を見せ、よしまた、その唇のルウヂユが、ポーズが、いや何でもかが「あれ」に充ち溢ちて居るやうに思はせる技巧を意識的無意識的に示しても彼女等に何の損傷なく自由に且つ痛快に自分自身を處置しうる人生であることを看取しうべきである譯なのを知る筈だ。その意味で映畫からこの國の若かき女性達を[illegible]させる何の理[illegible]らないのである。

神戸の女學生がスタヂオを訪ふと云ふことが兵庫縣學務課の問題になつたことを私はまだ記憶してゐる。アメリカのスタアに通信し自筆の署名あるプロマイドを得て得意とする女性のあることも私は知らぬではない。しかしそれらは一々引用して騷ぎ立てるにも及ばない事項だと私は見解してゐる。この國に於いても映畫女優に誰がなるにしても別に異として問題にしなくなつた。そして映畫女優がその人氣に自負して不遜になることは誰も輕蔑はするだらうが、彼女等を待つに相當の好意は誰でもがもつてゐる時代となつたのである。この點はいい氣になり勝の女ごゝろを彼女等は反省する聰明をもたねばならぬ。そして繪葉書屋の店頭にそのプロマイドは飾られても映畫女優なんてその實は、實になんでもないのであるあることを自得しなければならないのである。

さて再び前に返つて云ふが、現在日本の青年男女の生活は映畫と深き關係をもつてゐる。それ故に大袈裟に云へば、彼等の生活と生活感情とを相當に知らうと思へば、われ〳〵は映畫の知識を持たないでは解釋出來ない場合があるのである。私はしば〳〵それを經驗によつても知つた。地方に赴いて試みた文學講演に紅葉蘆花を引例して理解を得ず、クララボウ、ルイズ・ブルックスを論じて聽衆の理解を反應したことが一つだ。彼等とわれらとの間に映畫俳優にたいする美意識の相異を示したことがその二だ。私の見るところでは、この國の映畫女優は百貨店の流行普及に流用はされるが、彼女等がこの國の流行界を決定する力はない。しかし、ホリウッドでの流行は紐育に先立つこと一年だと云はれてゐる。而してホリウッド・ショッピング・サアヴイスはこの國日本で發行されてゐる英字新聞にスタアが買ふところのものをお求めなさいと云つた廣告をしば〳〵してあるのをわれ〳〵は散見するのである。これは恐らくはこの國在住の外國婦人のしやれ者に呼び掛けたものである。日本の女性のしやれ者はまさかさうした廣告を見て色の好み、サイズその他を書いてメールで註文するものもないであらう。が、それらをみても、ホリウッドが巴里や紐育等と併立した一つの流行のゼルサレムになつてゐることは想像に難くはない。そしてこれは取も直さず、流行の世界に映畫俳優のもつた一種の覇權である。殊に、流行は男性よりも女性により多くの傳播力をもつ以上、ホリウッドの流行的地位は女性と映畫との相關關係を間接に證するものと指摘し得るのである。

二

アメリカのシネマ女優で筆者の興味を惹きたいものはクララ・ボウとルイズ・ブルックスとである。この二人者を併論するのが本稿の主題ではない。それに二人とも既に論じ盡くされてゐる。筆者自身も曾つてクララ・ボウを論じたことがある。だからクララ・ボウは勿論のこと、ルイズ・ブルックスに就いても詳論はしない。たゞ、二人を引き來つたのは一種の意味があるからである。前者は永久のフラッパア女優としてきた性的魅惑力の多い女優として知られてゐる。しかし筆者

は今そんな點を問題とするのではない。彼女がこれまでに制作し來つた作品の多くは性的魅惑力を特質とするものが多いとされてゐる。けれども、私はそう呼びなすことに贊成ではない。それはあまりにも常識的の片づけ方であり過ぎる。よし彼女に性的魅惑力があるにしてもそうしたことを感ずるよりももつと明朗で奔放で活潑な要素をより強く感じなければならない筈だ。それに彼女のもつ豐富華麗な演技は的確に云へば近代性が乏しい。彼女よりももつと直線的で冷智的でしかも囚はれなき表現をし極少量の角度でしか表現せずしてしかも非常に効果的技巧をもつルイズ・ブルックスはもつと近代性を具體現したものであると云へる。筆者の愛好はむしろ後者に移動したことを理由づけられうる。そうした二人者さへ對比論は中止する。が、右の二者の表現する女性型は現代の女性が共に考慮若くば多少の影響なしには濟まない母體である。

クララ・ボウの傑作に「マントラップ」がある。夫のある女がひとりの男と家出し山野に幾夜かを露宿する。その關係は不貞に近かい。しかも、クララ・ボウの演出は一抹の陰影をさへ差させはしない。明朗で、やんちやで、囚はれのない彼女の演出がたゞ清爽を感じさせるのみである。日本の若き女性はクララ・ボウのもつからつとして、愉快で屈托も心配もない春の流れの奔放さをもつて誰とも接し、自由に行動する特質から影響をうけてもいゝ。クララ・ボウの特徴をまたそんなにも日本婦人の上にはあらはれて[illegible]そうもない。ましてルイズ・ブルックスをやである。日本の近代型女性の多くは[illegible]くでありそうだ。服裝に、好みに、感覺に比較的近代性をもつてゐても心構へに、智的にまだ積極的な創造をもつことが少なそうだ。高揚された明朗な奔放性が乏しい。私は一、二米國女優如きを高く買つてゐるのでは元よりない。最も嶄新鮮明な近代性の創造は聡明な感性と透徹した智性とが自發的にのみなしうるもので、それはすべての場合に影響的のものではない。たゞ、こゝで云ひたい一事は日本の若き女性達でしかも映畫と意識的乃至無意識的な交響をもつてゐるとすれば、彼女等の選擇はまさに怜悧な留意にあらねばならないと云ふことである。

ルイズ・ブルックスはクララ・ボウとは異なつて遥かに科學的な明劃さを直線的に引いてゐるやうな感じを持たせる。「ルイズ・ブルックスの眼差は直線的に出て來る。そのとき一双の瞳はソロモンの愛人のやうに賢かしい」とアメリカの映畫雜誌記者は云つてゐる。「私は教訓的た書物以外は何にもよみませんでしたのよ」と彼女自身は云つてゐる。

クララ・ボウが河合武雄に比較するなら、ルイズ・ブルックスは喜多村綠郎である。だがその比較は古るい言ひ方であり過ぎる。さうした前者が化學的なら、後者は物理學的だと云つたがいゝ。二者各々に女たり一の中に主流として現はれたルイズ・ブルックスの演技が如何に（クララ・ボウの如き感傷的な放を見せず、きわめて直線的に[illegible]を現[illegible]

のもつ表現はクララよりは一層潮しく、從つてより多くの暗示をもつてゐると云へるのである。日本の映畫愛好の女性がルイズ・ブルックスの表現に彼女等の持つべき生活姿態を結論しうるとすれば、それは日本女性の進歩で、言葉を換へて云へば、それは日本女性が無用な感傷性と低徊趣味とを克服したことの曉に近づくことであると斷言しうるからである。

映畫は表現表情のきわめて微細なものを感知させる。「救ひを求める人々」のジョオジア・ヘールが一本のマッチの燃えさしで眉を引くことでストリートウーマンにならうとする決心を表現したら、「ヴァラエチー」のリア・デ・プチーが扉口の前で不貞に熔けた唇のルウヂュを整へてさてドーアを押しこまやかに微笑むが如き、何れも些末な擧措のうちに深刻な意味を包ませてゐる。以上は一、二の例であるが、映畫は聲を封じて諸の心理と氣分とを表明する性質上その表現はかなり微細に亘つてゐる。そのことは映畫鑑賞の女性達に不知不識の間に影響を與へない譯には往かない。かくの如くにして、日本の若き女性達は時代感情的な表現を取りつゝあるのである。その影響はまことに大なりと云はねばならぬ。

だが、近時トーキーフイルムの出現によつてこれまでの事情に多少の變化なきを得なくなつた。これまで寫眞藝術の上に取られてゐた俳優の表情並にゼスチュアが有聲映畫の出現によつて價値が割引されて來たからである。そこに既成の映畫スタアの凋落とそれに代はるべき新しい星座が要求されて來る。若し彼等の聲と調子とがポウエリーに於いて匂ひをもたなくなると現在のスタアの多くが消滅すべき運命をもつ。そしてホリウッドが朗讀法の教師のメッカにもなり、シナリオライタアが戯曲家に或る點まで途を讓らなければならなくなる。加之、映畫劇場の所有者も困らされ、フイルム輸出者もまた驚愕させられて來る。例へば英語を話すフイルムはアルゼンチンの看衆に何の役に立つかと云ふ疑問が發せられもする。かくて現在の靜默映畫のスタアとして世界の英語を話さない國民にもポピュラリチーになつてゐるものが新しい星座にとつて代られることは從來の映畫の國際性を減少することにもなる。それらの新星を既に出かけた。シルヴイア・フイールド、マリー・エリス、フエー・ベインター、エレン・メンケン、エヴア・ル・ガリエンヌの女達がそうである。曾つてバアナアード・シヨオが「シネマ美學的魅力はその靜かさのうちにある。力強き劇は深き悲みのやうに無言である」と云つたり、また「靜寂は魔法のやうに響の打撃を癒やして呉れる」と云つたやうな考へ方も多少改訂されなければならなくなつた。

トーキーの出現と云ふこれまでの映畫にたいする革命的な現象はこれまでの映畫女優に悲喜劇を與へると共に、これからのスタア的條件に少なからざる内容の變化を見せるに違ひない。これは男女俳優共通の問題ではあるが、映畫と女性(無論この場合は、女優は、女優乃至女優を希望する女性に限つてのことだが)の問題に關連して一項か附け

加へられると思ふのである。

三

私は別に映畫の專門的硏究家ではない。云はゞ、ホンの素人としての鑑賞者たるに過ぎないのであるが、私は映畫の社會に對してもつ影響を考察しない譯には往かない。私見を許して貰へるなら、映畫社會學とも稱すべきものさへが構成されうると思ふのである。特に女性と映畫との關係は現代に於いて重大なる考察題目たるを失はぬ。映畫國に於ける女性の問題それが一つの大きな問題である。その二が映畫が映畫そのものとして、また映畫のスタア女優を通じて一般女性に與へる影響の問題である。映畫社會學としての興味は云ふまでもなく後者の方に懸垂してゐるのである。映畫女優の生活、それはしばしば下等な新聞雜誌の煽情的な記事として取扱はれるが、華やかなこの種の職業婦人にまつはるよしなき流說はわれわれの問題とするにはあまりに些々事で取るに足らない。その間に取材すべきものがあるとすれば、映畫そのものが女優の心理に及ぼす影響だけである。女優がファンによつて與へられる心理的影響或は彼女等が社會からかくの如く見られてゐると思惟し時に想像することから生ずる心的作用のそれである。たがそれも期するところ小問題であるに過ぎない。それより問題は專ら映畫及び映畫女優が社會に特に女性に與へる影響のそれである。しかもその影響は都會に局限せずして全國的である。映畫のスタアを夢みつゝ[illegible]ハリウッド[illegible]て如何に無數の若き女性が、去る往時の十字軍に[illegible]情熱をもつて雲集することであるか。この國日本でさへ映畫女優たることを望んで無暴にも鄕里を飛び出す、少なからぬ少女のあることを知ることが出來るのである。よし映畫界に身を投じやうとしないまでも廣く一般女性が映畫によつてその生活感情乃至事物の考へ方が變改されてゐるかは驚くべき程度である。そのことの小部分は讀者も前述した。今各般に亘つてこの影響を詳細に說くことは不可能だが、要約的に云へば、現代日本の女性がもつ近代型は何よりも映畫に負ふところが多いとは斷言しうるのである。しかもそのうちに就いて最大な要素は映畫を通じて日本の若き女性が受容した國際性である。恐らくは、彼女等は結婚乃至戀愛に就いて國籍を顧慮しなくなつてゐるのである。彼女等の感情がそうである以上、彼女等のもつあらゆる生活樣式が、等しく國際性を帶びるのも當然である。ダンス、西洋音樂の音及カフエーの服粧、服裝、粧飾、持物にたいする趣味の變化等あらゆる近代生活は映畫が彼女等に洗禮を與へたのが第一步ではないかと私は考へてゐるのである。

流行唄所聞

畑耕一

「かれすゝき」が流行して、例の大震災、帝都は滿目荒涼のかれすゝきとなつてしまつた。——と、かつぐわけでもないが、むかしから流行唄が讖をなして、いろんな事變となつた例がすくなくない。いや、實のところ、讖といふよりも、時代の思潮、機運といふやうなものは、よく流行唄によつて反映されるのであるから、さうした時代の當然さがうたはれてゐながら、人は一向こゝに心づかず、すでに釀成された次の事相が爆發的に現はれると、そこは緣起因緣をつけたがるは日本人の常で、すはこそあれが前兆であつたのなんのと觸れまはす譯でもあらう。慶應三年の冬の頃「えいぢやないか」といふ唄が行はれて幕府が倒壞したの、明治初年に「トコトンヤレ」がうたはれたが、あれは非理法天權の意味だつたの、藤村操の華嚴投身頃からはやつた「デカンショ」は、デカルト、カント、ショッペンハウエルの三つの名を讀み込んだもので當時の哲學書生氣質を見せたものだの——とまあいろ〳〵にあとからこぢつけた解釋も起る。

しかし、音樂の定義からいつて、それが「情緒の言葉」であり、情緒は人間の感覺と思想に關係するもの、その感覺と思想とは、時代とか世相とかから離れることのできないものだとするなら、藝術の、鑑賞の、批判のと、そんなわるやかましいことをいはないで、頓狂に率直にその頃のその社會生活を「調子」であらはす流行唄は、すくなくも時代世相の卑近な——だが、滅多にあなどることのできぬ直寫力をもつた——情緒的歷史といつてもいゝだらう。

——なんといつても、今の社會の三大流行は、カフェーと映畫とスポーツだ。そこから胚胎される、特殊の感傷、刹那さ、思はせぶり、安値さ、頽廢氣分、快活、敏捷。——といつたやうなものが、所謂モダン化されて、若い男女に口誦まれる。「キャラヴアンの唄」「出船の唄」「出船の港」「波浮(はぶ)の港」「マノンレスコオ」「バルセロナ」「アラビアの唄」「テイテイナ」「モンパリ」「花嫁御寮」「當世銀座節」「道頓堀行進曲」「淺草行進曲」——と、ちよつと思ひ出しただけでも、これだけならべられるが、いづれをいづれ、今の若い男女の、早わかりのする外國趣味(エキゾティシズム)と、世紀末的人生觀と、變質的刺戟、その他彼等の衝動、懷疑、模倣、幻覺といつたやうなものが、調子づけられてゐるのである。

ちよつと聞いて、お上品で、よく聞いてお粗末で、簡單に解決なり勝負なりのつくのが今しばらくは全盛だらう。

彦根屏風に就て

藤懸静也

彦根屏風と通稱される風俗畫は、もとの彦根侯即ち今の井伊伯爵家に襲藏されたので、かやうな名稱がつけられたのである。

彦根屏風はかなり前から評判の名畫であるが、本年六月報知新聞社が浮世繪大展覽會を東京美術館に開いた時、伯爵家に懇請して僅に一日だけこの屏風を陳列することができた。かやうな貴重な逸品とのことで、宣傳甚だ努めたので、その日の入場者は、館に滿ち、折角の名畫も、ゆるゆる鑑賞することはできない程の人出であつた。新聞の宣傳も去ることながら彦根屏風の評判になつたのも實際に、その繪がすぐれてゐるからである。

一時にその名聲の擧つた彦根屏風を極彩色摺にして大附錄とした改造の機敏さには驚き入つたが、その繪に何の説明もなかつたので、讀者諸君から、解説を所望されたとて、余に執筆を需められた。余はこの繪は屢々展覽したことがあるし、この種の繪の研究には興味のあるので快諾したのである。

そもそも〜この繪は六曲の[illegible]

三味線を彈くのが畫題の琴をあらは[illegible]かく女どもを現はし、更に後方に山水圖屏風が立てられた所を寫して、畫の意味をあらはしたのである。

構圖は巧であつて、向つて右の二曲には、三味線を彈ずる三人と双六に興ずる者とを寫し、その後に山水圖の立派な六曲屏風を立てた所を圖したのである。而してこの二曲だけで立派に一圖をなしてゐる。中央の二曲には、文字をかく所を寫し、四人を巧に配してよく一圖に纏めてゐる。向つて左の二曲にも四人の立姿を寫して、よく一圖を構成してゐる。故にこの構圖は二曲づゝで一圖に纏り、六曲で全體の圖をなしてゐるのである。昔の六曲屏風の構圖は多くこの式で、屏風は必ず座敷の内に、折られて立てらるゝものであるから、何れの部分の二曲がでても見苦しくなく一圖に纏まるやうに工夫されたのである。

この繪は古くから評判が高かつたので、模寫がいくつもある。全く同圖で、かの屏風をそのまゝに寫したものや、圖中の人物の配置とかへて、山水圖屏風を描いたものもある。これ等は一目して彦根屏風から臨寫された圖であることが分るのである。

井伊家には、いつ頃から家寶になつてゐるのか分らないさうであるが、模寫やその圖を臨寫したものには、かゝる時代を經たもの[illegible]る。それ故、古くから評判で模寫の盛に作られたのである。

[illegible]

あるが、その[illegible]二、この[illegible]

救び出したのである。この繪は屏風に仕立てられて居らずに、巻くりになつてゐたので、災難を免れたのであらう。

ともかくも、名畫はかゝる場合にも、人々が大犠牲を覺悟して助け出すのである。これを以てみると古畫の今日に遺つてゐるものは、何れも幾度か危難に遭ふてゐる筈だから、幾多の傳ふべき插話を有するものであらう。

この繪が世間的に評判の高くなつたのは、岩佐又兵衞の筆と傳へられ、その代表作のやうに、いはれてゐたからである。然し鑑識家の間には、今日ではこれを又兵衞の筆と信ずるものはない。何となれば、又兵衞の研究が十分に遂げられた今日、又兵衞の作品が明かになつてみると、彦根屏風は又兵衞の作ではないといふ結論に達するからである。

然らば彦根屏風は誰の手に成つたものかといふ問題となるが、畫中に寫された山水圖の屏風をみると狩野派のすぐれた名手の筆に成るものであることがわかる。そこで狩野山樂の筆であらうといふ説も起つたのであるが、果して山樂の筆であるかどうかは、俄に定め難いのである。然し狩野家のさる大家の筆に成るものであることは、畫風によつて知らるゝ所で、非凡な名人でなければかの山水は畫けまいと思はるゝ程のものである。故に現時の研究では、又兵衞の筆でないといふことだけはいへるが、果して誰の手に成つたものともいへない。故に筆者は暫らく不詳としておくより外に致し方がなく、唯寛永年間頃にかゝれたものと推定されるのである。

さて彦根屏風の畫法をみると、如何にもよく技法の洗練されたもので、何處の風俗畫を以てしても、これ程に精巧を盡したものはあるまいと思はるゝ位に、細巧を極めたものである。描線は細く引きながら、力がこもつてゐる。面相は表情を巧にし、生けるが如くに寫され、頭髮の毛がきには雄勁なる筆の力を見せ、衣紋の線も最も有意義に用ひられたので、人物の姿を最もよく畫き出すことができた。模様も細密で色彩の法も巧である。顔色もよく繪泥も巧に用ひられ畫面はやはらかにみえ、然かも人物は躍如としてゐる。

この繪は見ればみる程、總ての點に、細密にして巧緻な手法を巧に用ひてゐることに氣づくのである。この間の襖障子の折のやうな混雜な時には、とても、その細かい長所は分らない。靜かにゆるゆる觀て、始めて、その點に優れてゐることがわかるのである。

かやうな繪であればこそ、古くから風俗畫中の最上のものとされたのである。然らばその筆者として推定せらるゝのは、その當時に於ける風俗畫家の最も名高い人でなければならぬ。この故に、彦根屏風の筆者が岩佐又兵衞と呼ばるゝに至つたのである。又兵衞が浮世繪の元祖と稱せらるゝから、さやうな推定をするに至つたのである。即ち最も優れた繪と最も有名な繪師とを結びつけたまでのことである。これを以てみても、又兵衞が如何に喧傳されてゐたかを知ることができると同時に、この繪が如何に昔から名高いものであつたかを推察することができる。

幣原喜重郎・久原房之助

幸運な幣原さん

山川均

□

陸奥宗光だとか小村壽太郎などといふ人は、いはゆる外交家として――即ち、外國相手の懸け引きに長じた專門技術家として――有名な人々で、いづれも外交の方面で、『國家』に大功を立てた人だといふことである。しかし別段、『陸奥外交』とか、『小村外交』とかいふような――×せんべい、××羊羹といふやうな――一定の包裝をした名物にはならなかつたようである。この點になると、ひとり幣原さんには、有名な『幣原外交』がある。個人の名前を冠した特別の外交を持つといふ承認を與へられたのは、恐らく幣原さんが初めての人だらう。そこで幣原さんは、この上別段の功勞は殘さないでも、幣原外交を殘した獨特の名譽をもつ。

□

もつとも、個人的な特徴と色彩とを最も豐富に帶びてゐるといふ點では、田中大將の外交は、幣原男爵の外交よりも、遙るかに出色がある。したがつて、幣原男爵の外交が幣原外交たることを要求する以上の權利をもつて、田中大將の外交は、『田中外交』たることを要求する權利がある。

支那に關するかぎりに於いては、――然り、支那を相手にしてゐるかぎりである――田中大將の外交は、外交といふよりも寧ろ號令の觀がある。たゞこの號令が、支那國民の上に、觀兵式の兵隊さんの場合と同樣に行はれるかどうかは別問題である。田中大將は外務省から、支那に號令をかけてゐる。悲しい哉(或は仕合せなことには)、田中大將がしばしば擬則せられたように、支那の國民には、觀兵式の兵隊さんのような訓練がない。それ故に、極めて特徴のある田中大將の號令も、實際には、最も平凡な在り來りの月並み外交となつて實現せられてゐるにすぎぬ。

これは幣原外交との對立をもつて蹈み出した田中外交が『對支外交國論統一』に歸着したことによつても、良く分かる。幣原外交とは根

本的に違つてゐる筈だつた田中外交も、今日では、畢竟、滿蒙に於ける『既得權益』の擁護以外、何ら『他意なき』ものに歸着した。そしてこの『既得權益の擁護』こそ、風袋を取り去つた、、、、、、、の正味ではなかつたか。今日、幣原外交は、田中外交との對立を强調することにより、田中外交の方でも、幣原外交との對立を强調することによつて、おの〳〵自己主張を試みてゐる一方では、田中外交は既得權益の擁護以外には何ら他意なきことを、力を極めて强調し、幣原外交は、既得權益の擁護において、何者の人後にも落ちないことを、一生懸命に强調しつゝある。

尤も田中外交の『既得權益の擁護』とは、必ずしも『既得』の權益の みに踊踏するものではない。それは、、、、、、、、權益に變化することをも含んでゐる。南北妥協に反對するものではない！　たゞ南北妥協の前に、、、、、、、、にしておかなければならぬ！　今日は、、、でなる。しかし厄介な南方の勢力が這入つて來た時には、それは日本資本の、、、、ではなくて、『既得權益』に當面する。そして日本のすべての外交は、既得權益の斷乎たる擁護においては、完全に一致する。こゝに國論の統一がある。

□

そこでお上ぼりの遊覧客は問ふだらう。鎌倉名物鎌倉羊羹と、江の島名物江の島羊羹とは、一たい、どこが違ふのか？　と。

包装が違つてゐる！　たしかに違つてゐる。既得權益の擁護といふ

中味においては、幣原外交は何の變哲もないたゞの、、、、、であつた。ところが何といふ仕合せか、この變へようもない中味に、子供だましのような彩色の包装をした田中大將の外交が現はれた。田中大將の觀兵式外交と時を同うすることのできたのは、幣原さんに取つては此上もない幸運であつて（或は幣原男爵が三菱の背景を背負つてゐること以上の幸運であつて）これが最も月並みな幣原さんの外交を、特殊な『幣原外交』にしたのであつた。

とは云へ、田中外交と幣原外交との、落ち着くところに何らの違ひはないにしても、その色彩には相異がある。この相異が、（政友會と民政黨との、一般的な色彩の相異と共に）どの點まで、この二つの外交が、直接に代表してゐる利害の相異を反映してゐるかといふことは暫らくおき、大將と男爵との個人的な相異をも、或る程度に表はしてゐることは爭はれぬ。といふよりも、田中大將を田中外交の代表者にし、幣原男爵を田中外交の代表者ではなくて幣原外交の代表者たらしめたものは、二人の個人的な相異であつたに違ひない。先き頃幣原男は、大阪の日華協會の集合で、公然と田中外交攻擊の演說を試みた。もちろんこの演說が、田中外交と幣原外交との本質上の相異を作るものではないことは云ふまでもないが、謂ゆる幣原外交の特徵が、いくらかこゝに現はれてゐると云はれぬこともない。田中外交が、ひたすらに『國論統一』の歌を謳つてゐる時に、幣原外交が、公然と、異つた對支外交意見のあることを公言したのに、甚だ面白い。外交問題に

政爭の問題にしてはならぬといふ、奇妙な主張がある一方に、幣原外交が公然と、田中外交と政治的に爭はんとする闘志を示したものだとすれば、この點では、幣原外交には多少の新味があると云つてよい。幣原男は、民政黨の未來の總裁候補者の一人だといふことである。黨人としての幣原男は、全くの未知數であるが、民政黨もブルジョア政治勢力の一角を代表して立つ以上は、せめては外交問題を提げて公然と反對黨と戰ふ位の闘志のある人間を、總裁にしたいものである。

對支外交問題が、政友民政兩黨の爭點の中心問題になつてきたことは、幣原男の幸運の一つであつた。外交問題を政爭の中心問題とすることが避け得られなかつたほどに、日本の、、にとつて、支那は致命的な對象なのである。

久原幣原論

奥田竹松

久原房之助君と幣原喜重郎君とを同じ架上に並べて人物月旦を試みる。懸け離れ過ぎた取合せである。人物、性格、趣味、閲歴の何れの點から觀ても、そのコントラストは頗る顯著である。

礦山家と英文學者、膽氣者と小膽者、獨立不覊の企業家と安全第一の月給取り、ユートピヤンと現實一點張の堅造、苦勞人と世間見ず、誇大妄想狂と學究、懸け離れたる別の世界の住人である。此程奇態な取合せが又と他にあり得られやう歟。

久原君は冒險者であり、苦勞人である。彼の踏み込んで來た世路は可なりに崎嶇崢嶸であつた。三田の學窓を出たのが明治二十二年、鈴木島吉、磯村豐太郎、寺島成信等と時を同うした。彼は森村組から米國に送られ、藤田組に轉じて小坂礦山の經理を擔當した。爾來彼が半生の心血は浮沈動搖極りない礦山事業に傾注されたのである。日立礦山を盛り立て、久原礦業、久原商事を兩翼として、大戰好況の最高潮時には、巨富一億『今太閤』と唄はれた企業界の風雲兒である。

之に反して幣原君は頗る平坦なる行路を踏んで來た人である。二十八年に赤門を出て、啻に一つ間違のない月給取りを志願して外務省の役人となつた。仁川と倫敦で見習を勤め上げて、アンウエルスと釜山の田舍廻りの領事となつた。之までは甚だ平凡なコースを辿つたのであるが、釜山在勤中、石井菊次郎君の媒介で天下の岩崎の女婿となつた。之より以降、官場に於ける彼の階蹉は頓に順調となつたのである。間もなく本省に呼び戻されて電信課長となり、取調課長を兼任した。十三行の罫紙とコンニヤク版と睨みつこすること七年の久しきに及んだ。

此の間、幣原君は恩師デニソンに依つて天晴れ無類の英文學者に仕

上げられた。文理文法に精通すること帝國第一の英學者となり了したのである。

詳細にして穿鑿好きの彼の性向は、取調課長勤務中、彌々益々助長され、一廉の法律家として完成したのである。サロンや宴席の應酬を厭ひ世間と交渉を斷つて書齋や、事務室に引き籠み勝ちなる彼の性癖は、此の間彌々强められたのである。彼を酷評して親任待遇の「條約局長」だの、敕任の「英文教授」だのといふのも、全く七年籠居の賜であらう。

久原君は極めて大なる矛盾の人である。細心にして豪膽、經理算數に拮据し乍ら、迷信と直覺で動く、分厘の微も粗略にしないが、大膽不敵、借金などは屁とも思はず、謂らく、已れを借金ダラケの中に抛げ込むほどに日本は狭いのだと、心底から考へて居るほど飛び離れたる放膽者である。温柔、虫も殺さぬが如き物腰格好をしながら、剛腹高慢、人を人とも思はぬ横着さがある。一見穩渉たる風丰の裡に俊敏なる機略を藏して居るのである。

久原君は思ひの外の變り種である。決して凡介常鱗の徒ではない。彼は大なるユートピヤンである。多量のイマジネーションを貯へ、夢の中に生きて行く人である。酷評すれば一種の誇大妄想狂である。彼の成金振を見て『今太閤』を評した者もあつた。吾は彼を以て豐太閤にも似た大なる妄想狂だと評したい。日本を狭しとし、朝鮮を足溜として大明國に攻め入らんとしたのと殆ど揆を一にするのが、今太閤の夢である。久原君は「滿蒙自由國」を足掛りとして、手を支那、西比利亞に延ばさんことを夢想して居る。彼は此の夢の爲に曾て南淸の政客に、、、、を投與して、、、運動を援助した。又彼が絶えず私かに我が政界の黨人等に少からざる資金を贈るのも、若くは鄕友田中男を擁護して、今日の地位にまで押し進めたのも、之に由りて夢の實現を庶幾すればなりである。

彼が昨秋突如、足を財界に洗つて、政界入りに世間を驚ろかしたのも、決して一時の氣マグレではない。穿つて言へば多年秘めてあつた豫定のプログラムを實行したまでのことである。彼の志は滿蒙を結帶として、日支の間に政治聯盟を作り出し、尋て東部シベシヤと經濟聯盟を結ばんとするのであらう。日本の人口調節、食糧問題の如きは、總て此の方面に於て根本的に解決せんとするのである。

彼の志は按ずるに外務大臣たらんとするに在らう。彼は國內の政治に對しては多く興趣を抱いて居ない。彼の志望は徹底して平和的海外經略に在りと觀測される。セセコマしい今の日本にも、此れ位の夢想家の一人や二人はあつて欲しいと思はれる。

彼は遞相に就任した、固より其の志ではなく、一時の手順を運んだに過ぎないのである。小泉、水野の徒が之に憤慨し、反對したに對し、定めし彼は「燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんや」と位に、微苦笑を洩らしたであらう。有體に言へば、彼をして十二分に志を伸ばし得るは外交に

伸ばさしめ得るだけの闊略大度の首相の下に、外務大臣たらんことを彼は欲求するのであらう。若し其の人を得ざるに於ては、止むを得ずして自ら首相たるも、強がち辭する所でない。政友會の總裁たるは必しも其の目的とする所でない。但し、最終の志を伸ぶる手段として止むを得ざれば之に就任せぬでもないといふのが、彼の本當の腹であらう。彼は實際、之までに高く自ら標持して居るのである。

政友會の後繼總裁が鈴木君とならうと、若くは床次平沼君あたりに札が落ちやうとも、久原君は此等と相競ふて、其の地位を爭ふほどに、物にコダワリがあらうとも思はれない。此の點に關しては彼には、天空海濶の概ありと觀て、多く誤りなしと信ずるのである。

遮莫、久原君は政黨首領としての條件を頗る多量に具備してゐる。彼は温雅にして親み易い人である。物柔かでサワリの好い人である。彼は天縱の特器であるニコポンを用ひず、自然に流露する持ち味で、強いて求めずして人を惹き附けるだけの魅力がある。

彼は情誼に厚い親分肌の人である。一たび近づけた人は容易には棄てない。手近かな實例を擧げやう、大正九年以來引き續く不況に、彼の事業は首も廻らぬほどの苦境に陷つた。營業費は極度に緊縮する必要はある。冗員淘汰は當然の歸結であつた。幾たびか當該係から、人件費削減を進言したが、彼は整理されて行く社員と家族の行く手を思ひ浮べて容易に、認諾を與へないのであつた。現に參事あたりの高級社員で、巨額の捨扶持を十年近くも貰つて居るのが甚だ少くない。死んだ田邊勉吉、小池張造君などの這般の世話に、今も猶に引き續いて見て居るのである。

「桃李語らず、下自ら蹊を成す」といふ。彼の到る處、立ろに人を寄せ附ける。彼の入閣に際して「素町人の分際で」などと、切りに彼を排斥せんとしたのは、タッタ昨日か一昨日の事ではないか、政界の一年生は日増に其の聲望を增して行き、大小多數の議員は彼の周邊に消集しつつある、今や押しも押されもせぬ立物となつて了ひ居然たる副總裁の貫祿を備へて居るではないか。彼にして若し欲するならば、後繼總裁たらんことに、さしたる手間、暇は要せぬであらう、唯だ彼が之を受くるや否やが問題として殘されるに過ぎない。

幣原君は謹嚴、身を持すること極めて堅固、消極にして引き込み勝の人である。有體に言へば小廉曲謹、事を苟もせぬ間違のない、石橋を金槌で叩く人である。親ら事を執つて部下に任かせ切れない。恪勤精勵、一年三百六十五日、大晦日も、元旦もない勉強家で、申分のない能吏型の人であるが、大臣、政治家の器ではないやうだ。

彼は無類の利巧者で、利害損得の打算には極めて鋭敏である。眼先が見え過ぎるだけに、臆病で勇氣に乏しい。陰性で事に忍ぶことの出來る人である。理智の勝つた、何となく底冷のする人である。ニヤリと苦笑はするが、決してカンラカラ〳〵と肚の底から洪笑の出來ない人である。

彼は生來の理窟屋で、苛察皮肉の人である。觀察が鋭利で透徹する。齒切のよい語調で、ハツキリと痛い所を刺すが如き皮肉、肚の底から湧いて來る御殿女中式の毒舌には、觸るる所、悉く傷けねば止まないほど深刻で、直ちに肉を衝き骨を刺すが如き態がある。言ふ者は平氣であらうが、聞かされる方では座にも堪えざるほど、憫惡を禁じ得ないものがある。故加藤伯も可なりの毒舌家であつたが、之を幣原君の皮肉に比べれば、遙かに罪がない。加藤伯の毒舌が其の周邊から人を追ひ退けたとすれば、幣原君の皮肉は、更にヨリ以上「人拂ひ」の利き目はあらう。何としても彼の大をなす所以ではない。

幣原君は要愼深い人である。打ち込まれる餘地のない程に、固く己を持して容易に其の弱點を現はさない。霞關は由來多士濟々であつた。異材山座圓次郎、萩原守一、倉知鐵吉、阿部守太郎、阪田重次郎、本多熊太郎等が羽根を伸して居た當時には、幣原君は下た積みになつて、容易に擡頭の機會を得なかつた。阿部は才器を縱横無碍に振り廻はして刺客の手に仆れ、倉知は自ら才に誤られて圏外に逸脫し、爾餘の先縱者が相繼いで、夭死するに至るまで、己を知ること深き幣原君は隱忍自重して、時運の到來を待つたのである。彼の老猾抑損振りは德川家康にも似通ふ所がないでもない。

彼は盟友石井菊次郎君に挽かれて和蘭公使から外務次官に昇任した。爾來七年、三代の内閣に歷仕し、完全に屬吏振りを發揮して毫も驕ぶるが如き色を顯はさないのであつた。大隈内閣の放漫なる對支政策を、後世大事と奉仕し、而して之と納隣相容れざる寺内内閣に居据つて援段政策に徹底し、最後に公正不干涉を標榜する原内閣に居据つて、些の精神的苦痛を感ぜざりしほどの俗吏である。利巧と打算に富んで政治的識見、意氣を缺如する幣原君の性格は、玆に明かに立證されたのである。

彼は徹底せる消極主義者で、事無かれ主義者である。彼は創業進取の人でなく、守成保守の人である。伸び行かん日本の外交を背負つて立つべき人でなく、堅固に唯だ有るが儘を墨守せんとするのである。中立不干涉、動もすれば無爲無策に終始したる幣原君の對支政策は、畢竟するに彼の性格の發露たるに過ぎない。

彼は「政治」に對して全然興味を持たない。些の經驗もなく、政見もなく、殊に内政に對して全く無關心である。彼は外交が内政の延長であり、外交の背後に内政の嚴存するをさへ理解し得ないのである。外交と内政は連理の枝にあらずして、全く根幹を異にする別箇の存在なりとさへ心得居るかのやうである。彼は世界を知つて日本を知らない。適切に言へば最も多く米國を知り、僅かに英國を知つて、日本も支那をも知らぬのである。日本外交の正面舞臺は支那に在る。日本を知らず、一歩も支那に踏み出したることもない幣原君に由りて統率さるべき日本外交も思へば心細い極みではなからう歟。

幣原君は現實一點張の人で、「夢」のない、イマジネーションもない、

理想も空想もない人である。少しのケレンもなく、山氣もなく、博奕心もない、唯だ堅實一方の人である。世の中は黒か白か、ハッキリと明白なるものの外、その裏に隱されたる陰秘、懸引あるを知らんともせぬ一本氣の人である。道樂もなく、醉興もなく、特殊の趣味もなく、唯だ書齋に立籠つて讀書する位が落である。

政黨首領の生活は俗中の俗である。後から後へと押し懸けて來る、愚物、鈍物、凡物、俗物の長談義を、飽きもせず默聽して、容易に要領を得させないのが政黨首領の仕事の全部である。利口で、偏狹で、毛嫌ひして、社交の嫌ひで、揚げ足取りで、皮肉で、馬鹿になり切れない人の到底勤まりつこのない難職である、幣原君には首領は愚か、政黨生活さへ不向きであらう。此の人を押し立てて民政黨の後任總裁に擬しやうなどゝは、惡戲としても、無類入念の惡戲であらう。

幣原君は一生を霞關の城寨で送つた人である。彼が文官時代から植ゑ附けた勢力は相當の根帶が出來て居る。彼の材幹、頭腦、辯才、文章、貫祿、閲歷から觀て、霞關中何人も彼に企及し得るものはない。彼は現役外交官中の第一人者である。彼にして若し終始霞關を守りて多く他を冀はざるに於ては、彼は重ねて復た霞關の主人となり得らるべきである。

最近、幣原君が大阪に乘り出して田中外交をコキ下ろしたる邊りの行り口は、宛として田舍向きの選擧演説の概がある。平生の聰明にも似合はしからざる行き方であつた。惡戲度を超えて大人の風格を傷くること多大であつた、幣原君の爲に取らざる所である。

民政黨は舉年黨首加藤伯を失うて以來、日増に影が薄らいで行く、此の儘にして置けば元の改進黨位の大きさに押し潰されやう、同黨は佛蘭西革命時代のヂロンド黨と同じく、由來口舌の徒の集團で、議論倒れで、實行力、鬪爭力が少い、加ふるに中に多數の官僚分子を加へて弱きが上に彌々弱く、女性的、御殿女中風の色彩が滋々濃密となつて來た。局面の大展開を行はねば、潰滅は自明の歸結である。

現在の黨員中から黨首を擁立せんとするからが、何れを見ても山家育ちで、物の用に立ちさうもない。止むなければ、何處からか、有力なる浪子を迎へるの要がある。無理にでも宇垣大將あたりを擔ぎ込んで崩れ懸つた陣容を立て直ほすの外に策はないであらう。

宇垣首相の下に幣原外相を据ゑ、一方鈴木の下に久原を配置すると して、茲に始めて久原對幣原の好對照があるであらう。此の兩人者は總裁候補としての對立でなく、外相候補としてこそ始めて多大の興趣があるであらう。

(三、一〇、五)

殼を破つた外交

外交の玄人素人

神田正雄

いかに素人とは謂へ、その道の方式位は心得てゐるとか、多少の興味をその方面へ繋いでゐるとかする人を、アマチュアとは呼ぶのだ。始めから全く無關心で、他人につゝかれて、成程と思ひ當るほどの者は、門外漢であり、局外者であり、素人と呼ばれる仲間にも加へ難いのは無論のことであらう、

だから、外交といふ畑に、男爵幣原喜重郎君と、久原房之助君とを拉致して來て、眺めて見ると、全く碁石の白と黑とを並べたやうなものだ。始めから、並べるが無理なことは云ふまでもないが、世間は可笑しなもので、或る場合に、この二人を並べたがつたり、本氣で並べる計畫をして見たりする人があるから、決してうつちやつて置けないのである。

憲政内閣から第二次加藤内閣、それから若槻内閣まで引續いて、二年十一箇月の内外務大臣をやつた幣原君と、昭和二年四月二十四日田中内閣成立以來、首相兼攝の外相の椅子に、腰をおちつけさせら

べく、自他相許した久原君と、〔幣…〕わざと並べて見ると、成程〔…〕に全く相違のあることを承知の上で、始めから勝敗を斷定してかゝるの白と黑だ。といつて碁石の白と黑で始めから勝敗を斷定してかゝる積りは毛頭ない。今こそ議論の始めなのだ。結論の終りはなほ遠い。それもその筈、一若しかすると、ドロン・ゲームに終るかも知れぬ。に實際の人、他は噂さばかりで未知數、高く買へば買ひ被り、廉く値踏めば觀測違ひとなつて、痛くない腹を探られるからだ。

□

そこで、一方の久原君が、前に曰ふ外交の素人であるか、若くは全くの門外漢であるかは、先づ最初に極めてかゝらなければならぬ問題だが、さうした心配は田中首相の方で夙にやつてゐて呉れて、去年の夏、久原房之助は、無冠の太夫から一躍親任官待遇の、經濟調査委員といふ肩書で、獨露兩國かけて押し渡り、貫祿と箔とをつけて歸つて來たのであるから、よしその役柄がどんなものであつたにしろ、海外の事情にも精通？したであらうし、首相との默契に外相の椅子が眼先にちらついて居れば、外交のことにも多少の關心を持つやうになつたであらうことは、想像するに難くない。乃ち彼を呼ぶに外交の局外者、門外漢を以つてすることは、餘りに禮を失するが、こゝのところ素人といふ名目で、彼にまた彼の缺點も暫く我慢して買はなければならない。

何となれば、實に外交だけに限らないが、あらゆる政務に、殊に時世

の味噌くさくないところに多分の妙味があるからだ。況んや今は、十年二十年と野に伏し、山に寝て叩き上げて來た政黨者は、始めから專門家であり得る道理がない。鹿を逐ふ獵師山を見ずで、その常に外部から見てゐたところに、突如飛びこむから、却つてめつけものゝ仕事が仕出かせるかも知れない。事實、愛宕山下の住民はその石段の數さへ知らないことが多いものだ。

□

即ち、素人といふ言葉は、久原君を決して侮蔑しないだらう。否、彼にして若し世人の豫想するが如き位置につき、また過去に就いてゐたならば、善かれ惡かれ、飛耳張目に價するやうなことを、或はやつて居り、又やるのかも知れぬ。子爵後藤新平君が、ヨツフエを呼んで日露交渉の仲介役をやつたやうな藝當も、外務畑に跼蹐する彼れでなかつたからこそやれたので、彼にして若しあらず、永く外交官の手をつけるのに委せられてゐたら、日露交渉が皮切りの段取りに進むまでにはまだ餘程手間どつてゐたのかも知れぬ。

最初の勞農大使を任命する時だつてさうだ。日本もソビエツト・ロシアの政府を承認して、大使の交換をしようといふのに、役人達はみな薄氣味惡がつて、なかなか行かうとはせぬ。とゞ外交畑から足を洗つて、ジヤパン・タイムスの社長をしてゐた元の外務次官、田中都吉君を煩はすことゝなつたが、役人など永くしてゐると、膽つ玉などは全くなくなつて了ふらしい。年功を積んで恩給を貰つて、兒孫の爲めに美田を買つて置きたい連中には、勞農ロシヤに赤鬼や青鬼ともが佇んでゐるやうに思ふのは無理もないことだが、そこへ行くと、溫室の庇護をうけぬ野武士のすることには、殺伐さがあり、精氣がある。

男爵藤村義朗君あたりでも、短命の清浦内閣のやうなものゝ外相だつたら、ちよつとやらせて見るも面白かつたらう。彼にもし、伯爵大木遠吉君が、その司法省入りを司法畑の人々に妨害されようとした時に、叱咤睥睨するほどの英氣があり、首相清浦奎吾子に、岩をも徹す信念があり、底力があつたら、澁造ながら藤村外相は出來あがり、目先をかへた外交手腕を揮つてゐたのかも知れぬ。

□

しかし、藤村君は外務畑の人々から、反對されて、事實外相たることは出來なかつた。そして、間に合せの男爵松井慶四郎君が、思設けぬ椅子を拾つたのであるが、内閣の人事と、一省の妨害運動によつて左右されるなぞは何といふ不見識であらう。外務省の人々としても、怪しからぬ振舞ひである。

畢竟するに、彼等は自分達の榮達の途が、闖入者によつて或は阻碍されはせぬかを憂へたからである。言葉を換へて曰へば、ミユーチユアル・サルヴエーシヨンの醜狀暴露だ。外交畑の先達から、一人々々いゝ、ところてんのやうに、外務大臣が製出されることを彼等は刻念するのだらう。偶々清浦内閣の弱腰を見すかしたものだから、藤村君の阻害運動を益々猛烈にし、これに成功したわけであるが、今度、久原君が

外相になるであらうとの噂さが專ら評判になつた時には、外務省には反對の煙さへ立たなかつた。內心思はぬ者もなかつたではなからうが、田中兼攝外相の鼻息を窺つて、聲にも立てず、唯々、命これ從ふべき從順の態度ばかりを示した。

アメリカの大使になつた出淵勝次君などその尤なるもので、幣原外相のもとに、支那內政絕對不干涉の聲明を書いた許りならまだしも、それが自分の發案の如く吹聽した彼が、田中外相のもとに筆をかへすやうな對支強硬政策の聲明書を綴るといふ保身術を心得てゐる位であるから、如何に性格的な彼の手口とは云へ、上の倣ふところ、下これを學ばぬ筈はないのである。効能はてき面で、彼は大使に榮進した。而してこれは別問題だが久原君は外相にはなれなかつたのである。

但し、久原君の外相になれなかつたのは、黨內關係である。必ずしも首相の決意が緩んだのではない。政友會に當時、久原君を外相はおろか、全く入閣させないといふ運動が起つたことは、また、世間の耳目に新たな事實だ。この爲めに、政友會からは、脫黨者までが出たのである。望月の、わが思ふこと成らざるはなしと自惚れてゐた田中首相も、この時ばかりはさすがに物に動ずる色が見えた。黨內は蜂巢をつゝいたやうになるし、唯我獨尊の總裁が、會議の席上では罵られるし、さてこの大國團はどうなるものかと刮目されたが解決といふものは恐ろしいものだ。水野文相の引責辭職、優諚問題といふ不手際な見せながらも、隱險一段落を告げて、久原君は[illegible]臣の椅子に就いてゐたのである。

◇

いつそのこと、素人の久原君が外相にでもなれば面白かつたらうに、やつてやれまい事はなからうにと思ふ心は、必ずしも專門家としての、玄人としての幣原君の外務大臣を非議する所以にはならない。否、むしろ、彼が毅然として時流に阿らず、斷乎として所信に向つて邁進する勇氣、並に外交問題に對する該博なる知識と、廣汎なる理解とに對しては、最大の敬意をさへ表せずして已み難いものがあるのだ。

大道商人のやうな御世辭のうまい保身術と、國民の前に、自己の僣越を誇示することにのみ役立つ賣名術とは、素人にあれ玄人にあれ、辭令をもつて起つ外交社會の通弊であるが、幣原君に限つて、頗る剛直である。巧言令色を須ゐて、田中外交だけが強硬外交で、幣原外交だけが軟弱外交だといはれるのを辯護して、幣原外交も強硬外交だなぞと鬩ごつこのやうなつまらぬ反駁なぞてんからやらうとはしない。

幣原外交と世間では謂ふけれども、彼をしていはしむれば、外交のことは型を固守しなければならぬ必要は毛頭なく、臨機應變、時に臨んで最適の方法を執らなくてはならぬので、滿洲問題の如きにしても、滿洲におけるわが經濟的特殊權益の確保に努力するのが眼目である。一張作霖の興亡の如き[illegible]眼中にない。といふのが[illegible]の主張で[illegible]ことと

仲々に嚴格なるのがあつて、議會の答辯でも多くの場合、大ザッパな輪廓を說明する位が關の山だつた。然し幣原君は、第五十、並に第五十一議會に於て、可なり詳細に外交經過の內容を說明したのである。

さうして、外交の樞軸としての對支問題は、內政不干涉を眞向に翳して、その統一の日の一日も早く來らんことを冀つたのである。日置全權が、ワシントン條約に基づく關稅改訂會議に臨んだ時の演說が、追隨外交のこれまでの型を破つてゐると云はれたのも、幣原君の根本方針に基調を併せてゐたからである。當時、如何に嘖々たる好評が、この外交の手際に對して與へられたかは、世間の記憶としても、猶ほ未だ薄らいではゐない筈である。

□

しかし、これ等の方法は、日本に於てこそ目新しかつたが、世界の外交手段に並べ比べて見ると、決して特質があつたとは云へないであらう。むしろ、幣原君の外交は、當世流のハイカラなのではなく、却つて形式を尙ぶアカデミクなものだ。議政壇上に、これまで嘗て見なかつた程の、幣原外交としての具體的な方策を說明したことによつて、世人が著しく幣原外交の新味を吹聽するならば、それは或は當らぬかも知れぬ。結局幣原君の最新は去る九月十七日大阪で開かれた日華經濟協會の懇談會に於て、大阪の實業家はむしろ田中外交を支持して、いはゆる幣原外交に希望を繫いでゐないと云ふ事情が概ね判つてゐたに拘らず、大阪實業家がよつて以つて信賴するとなす對支强硬政策らしく、自分の主張の幅を縮つて、說明するやうなことのなかつたことだ。そこらあたりの政黨者流が、わが黨の態度も强硬外交だなぞ、わざと民衆に錯覺を起させるやうな說明をするのと、大いに趣きを異にするところは、確かに彼れのとり柄である。

たゞ惜しいかな幣原君は、東大を出て外交官生活に入つて以來、歐米の地では先づ殘るところもなく本舞臺を躍つて步いたが、支那の實情について實際的の知識は、ともすれば缺けて居ることがないでもない。支那人の國民性、支那國家の組成、慣習、その他一般の卑近なことは、遠くから眺めてゐたゞけでは判らぬ。矢張りそこのことを詳しく調べようなら、一度根を据ゑることが必要である。その經驗なくして支那を論ずることは、ともすれば、砂上に家を建つるの結果と、同一の運命に逢着してしまふのである。折角、玄人外交といはれる程であるならば、支那人の性格をもつとよく吟味して知つて置く必要があつたのかも知れぬ。いくら內政不干涉は唱へても、南京事件のやうなのが起つたとしたら、一度起つて暴徒を武力で鎭壓する底の非常手段位は講じてもよかつた筈である。長期の出兵なぞを、幣原君がやらう筈もなく、かゝる主張を吾人もまた、今更をめ〳〵しようとは思はないが、たゞ毅然として起つて暴徒を激擊すれば、急に音を靜めて再び擡頭することには却々暇のかゝる支那國民性である。

職業外交家の緩漫な點は、多く世間の非難の的となることの多きに比し、素人外交の强硬手段に、危なげはありながら、猶は支那のやう

な國民性を有するものの執る方法に對しては往々にして成功することがあるかも知れぬ。不斷の對立の爲に支那は日本の手口を知つてゐる。日本はまた支那のやり方を知つてゐる。双方とも要愼深く、失敗を虞れてのみ仕事をやつてゐては、埒が明かう筈はないのである。

だから乾坤一擲とまではゆかずとも、一つ大膽に、まるきり方式を換へて、特色のある外交的手段に出ることは、沈滯せる空氣を一掃する方法としては、時に必要である場合もある。さう云ふ意味に於て、たまたま田中外交といふやうな、テクニックに當て篏らぬやり方のものが、出て來たのは面白いとも思ふ。

然し田中君の外交は田中君獨自のものゝやうで實はさうでなく、去年の夏の出兵のころには、東方會議を東京に開いて、出兵の出先きをお留守にさせながらも、小田原評定を開いてゐたし、今度だつて、外交のことはオラの肚にあるといふ田中外相が、外交界若くは政界の長老とでも云ふやうな人々の對支意見を聞いて、度々所信の締め直しをやつたのなぞから見ると、田中首相をして外交のことに與らせるのは、素人外交といふよりも寧ろ子供が硝子玉を弄ぶやうな危險を感ぜしめられざるを得ない。況んや彼れの懷刀が、佐藤安之助少將あたりで、世界の時潮を知らない軍閥外交そのままが、田中大將のかかりのい、頭腦にしつくり響應してるのぢやないかと思ふと、一種の悲慘をさへ覺えしむるものがある。□

そこへ行くと、久原君の素人外交も、それ以上ではあり得ないと思ふが、久原君は軍人ではなく、經濟眼は異常に發達してゐる筈であるから、周圍の奸物を除いて眞に國家百年の大計に基づく外交をやつて行つたら、面白い結果が生じはしないであらうか、彼れが素人であるからに、一層期待するところは大きいやうでもある。

久原君が、巨額の震災手形を擁して、、、、、によつてのみ、彼れの富が保證せられつゝあるを知つてゐる我等は、左前の彼れが政界に乘り出すことそれ自體を、並に、如何に推挽せられるとて、大臣の重責を負ふことを、更に、彼れの商人的好意に酬いんが爲めに天下の公器の私せられることを、非常に嫌ひ且つ排擊しはするけれども、これ等の事情を別にする時、一箇英雄的風雲兒としての久原房之助君に、期待するところは、必ずしも小ならざるを得ないのである。

何となれば、一事は萬事で、よし風雲に乘つたのであるにしても、ある方面の成功者は、これを他の方面にさし向けても、相當以上の手際を見せることが往々にしてあるからである。彼れや凡人にあらずといふ觀察は敵も味方も等しくやつてゐることである。一代の偉觀久原の事業、それは久原彼れ自身の尋常一樣の人物でないことを證明してゐるのだ。かゝる人物としての典型的な素質をもつて、性温順に似て剛直、細心にして膽大、わけて人情味に厚い點は、何人もよく彼れに比肩せしめ得るものはないとのことである。

然し[illegible]彼れに短所として擧げ[illegible]

ある。それは人を見るの明に缺けることである。企業的晩年の彼れの事業の失敗は悉くこれ彼れの幕下につく人の才幹を測らず、その人選を誤つたからである。暫く久原を切つて廻した小池張造君は正直で且つ出來物であつた。彼れは外務畠に育つて、當時　政務局長まで勤めてゐたのであるが、大隈内閣の對支外交がうまく行かずに責任を負ひ、自ら職を賭したほどの硬骨漢であり、腕もさすがに達者であつたが、その後久原のめがねに協つて久原の重石となつたものには、鼠賊夜盗の類が多かつた。その姓名を擧げることは御免を蒙るが、奸兒内にありて勢を恣にすれば、家亂れることは當然である。殊々戰時の好景氣に醉うて少しも不景氣來に具ふるところがなかつたものであるから、ガラ〳〵と來さうなところをさすがに持ち應へてはゐるが、疲弊の色はいつかな蔽ふべくもない。

◇

であるから一朝不足を補つて、久原君をしてよく三尺の孤を托せしむべしといふやうな、忠良無比、才敏顯達の士を擇ぶところの眼識を持たしめたならば、大抵のことは仕遂げる力量があるであらう。

假りに彼れを外相たらしめたとすると、彼の下につくべきものは、これはまた誂へ向きの從順無比、將來の榮達と安固とさへ保證してやるならば、その尻尾を西に向ければ、頭は東、昨日の白を今日の黑と云換へる位のことは朝飯前に出來るやうな次官以下である！　久原君の手足となつて働く人は決して尠くないであらうから、その點はあまり人選の眼識がなくても、人事から來る失敗を重ねるやうなことはよもないであらう。久原君が如何に政治的尋常一年生でも、一度び廟堂に入つて權威をもつて臨み得る顯貴の地位につけば、館の新主人に毛を逆立てるものは家附の飼猫であり、吠えかゝるのは舊主の飼犬だけで、人間はもつと悧口で、もつと柔順だ。久原君といへども、その邊は乾度安神してゐてよい。

而して、我等の期待するところは、澱んでゐる水を一掃することである。そして今後の外交々渉にも從來の型を破つて、新機軸を出して見たがよからう。この意味において、尠くとも震災手形による彼の國民に對する落目さへないと信ずるからは、久原君の外交の時代が來るのに對しては、多少の興味を唆られざるを得ない。

然し久原君は果してさうしためぐり合せになるだらうか。田中首相が、いつ、如何なる英斷を揮つて、久原君にいはゆる田中君のお晝休の片手間の仕事としての外務省が、讓り渡されるやうなことになるだらうか。

◇

傳へられるところによると、田中首相は、對支問題に非常に重大あるから、その解決がつくまでは、決して内閣を明け渡さぬ覺悟であるとの事である。なか〳〵いゝ心掛けであるが、それまで外相を兼するかどうかといふに、田中男は、一向兼攝を苦勞にしてゐるやうこともないやうである。要は適當の人物がないからといふにあるが、

首相の本心に久原といふ候補者があることは事實である。滿鐵社長の山本条太郎君も、色氣たつぷりであるとの事だが、近頃停年退職となつた林權助男までが、まだ一度も外務大臣の榮職を汚し(?)たことはないとあつて、心やゝ動くものありなぞと噂さるゝは、必ずしも信を措くに足らないだらう。

嘗ては政友會に黨籍を置いた本多熊太郎君、敵は本能寺にあつたのだが、ウマク行かず近頃は新黨クラブの方へ出入りすると聞いてゐるが、して見ると、尠くとも田中內閣において新外相の椅子につくものは、外務畠から出たものでなくて、何だか他からの闖入者であるやうな氣がしてならぬ。

わが國最初の外務大臣青木周藏、次の榎本武揚、三代目の陸奥宗光以來、西園寺公望、大隈重信、西德二郎みな、外交畑に育つたものではなかつた。育てようにもむしろ畑がなかつたのであるが、畑から出て最初の外相になつたのは加藤高明、次が小村壽太郎だつた。それから中に桂太郎の兼任や、短い間の後藤新平なぞもあつたが、二度三度重任したのを除いて、林董、內田康哉、牧野伸顯、石井菊次郎、本野一郎、伊集院彥吉、松井慶四郎、幣原喜重郎、みな前身は外交官であつた。

外交畑から、といふのは外交畑の方の注文ばかりで、一般からは軍部大臣の文官制以上に、適任者の外務省入りを望んでゐる。アメリカの大使の任命は、必ずしも國務省の役人だけには限らない。民間からいつでも抜擢されるといふ例は決して尠くないのであるから、新生面を啓く意味に於ては、わが國の外交界にも、形而上、形而下の型をこわし殼を脱ぐことの必要については、吾人またこれに同意せざるを得ない。

久原君を外相最適任者となすは當らず、幣原前外相を、型に嵌つた外交家とのみなすのは無論當らないのである。(三、一〇、四)

幣原男と其對支外交

植原悅二郎

私は幣原男と何等の因緣あるものではない。否、寧ろ男の學識、經歷、及び其人格に就いては、常に多大の敬意を表して居るものである。個人として幣原男は、眞に現代紳士の典型、世の師表たるべき人にして、一點の非難さるべきものもない。其明晰なる頭腦、其爽快なる辯說、其語學文章の才能、其事務的才幹等、凡べて外務省出身者の白眉である。啻に私のみたらず、何人にせよ、若し其友を撰ぶとすれば、蓋し幣原男の如き人を需むるであらう。幣原男は、單に個人として優秀なる資格を有するのみならず、其環境に於ても、天下無雙の背景を具備し、實に優越なる地步を占めてゐる。所謂鬼に金棒とは、幣[illegible]二[illegible]三[illegible]

しながら私は、對支外交に就ては、幣原男と著しく其所見を異にするものである。

私は幣原男の外交政策を非難せんとするが爲めに、敢へて其批判を試みるのでない。只幣原男の對支外交の失敗せる原因を極め、些か世の參考に資せんとするに外ならぬ。而して私は幣原男が、熱心に日支兩國民の親善を圖らんとせられし其苦心と努力とには、深厚なる同情を有するものである。幣原男の對支政策の根柢に横はる動機は、純眞なるものであつたと思はれる。幣原男は多年歐米に居住せし人である。從つて歐米社界の實狀及び大勢には精通されてゐる。而して幣原男は斯く考へたるに違ひない。『歐洲戰亂後、歐米諸國の國際關係は著しく變化した。巴里講和會議に於て民族自決主義は、一般の承認する所となつた。歐米諸國は、既に一般に國民外交を唱へてゐる。英國の如き保主的國家に於てさへも、加奈陀、濠洲、南阿等自治領土に對して、外交上の發言權を承認して居る。斯くて世界の大勢は、今や國民の輿論を基調として其外交政策を決定すべき時代である。されば、日本も隣邦支那に對し其政策を一變せねばならぬ。支那國民も近來、大に覺醒した。彼等は盛に軍閥打破、打倒帝國主義、關税自主權獲得、治外法權制度撤廢等を主張してゐる。之れは支那國民の要望である。而して彼等の此思想の根柢は頗る深く、其自覺の程度も相當進んでゐる。故に彼等の行動は、凡べて組織的であり、秩序あり、統一あるものである。されば彼等の運動は、軈て其効を奏し、早晩此の思想が支那全土を風靡し、支那全國民の統一を見る時期に到達する。斯くて支那の秩序は整ひ、國内は統一され、健全なる國家の組織を見んであらう。支那と最も密接なる關係を有する我國としては、此支那國民革命運動の爲めに、一時我國の條約上の權利利益が損傷され、また我國居留民の生命財産が多少侵害されるやうな事があつても、支那の此大勢に逆はぬ事が有利である。否、寧しろ支那の此新興勢力に同情し、之れを支持後援し軍閥打破、國内統一、關税自主、治外法權制度撤廢を達成せしむべきである。而して斯くする事が日支親善、兩國民共存共榮を圖る最善の策である。此覺醒せる支那の國民的革命の勢力が速かに支那全土に亘り、之れが大成すれば、單り、支那國民の爲めのみならず、我國を利する事も尠くない。從つて東洋平和も確保される。故に時として我國の既得の權益が侵害せられ、在留民の生命財産が危險に瀕しても、日本としては之れを傍觀すべきである。此支那の新興勢力に對しては、飽まで之れに同情し、絶體不干渉主義を遵奉して大に隱忍すべきである。』と。

蓋し、之れが幣原男の支那國民の現狀及び其時局に對する考察であつたらう。幣原男は支那に對する此根本觀念を以て、在職三ヶ年、其對支政策を遂行したのである。而して幣原男在職中に於ける主なる事件は、關税會議と、南京事件と、郭松齡事變とであつたが凡べて此等に對し、幣原男は同一なる方策を實行した。

所謂南京事件に於ては、南方國民革命軍の爲めに我居留民の家計は

破壞され財產は掠奪され、我帝國の領事館さへも革命軍の闖入する處となり、帝國の國旗は汚がされ、既得の權益は損傷され、著しく我國の國威を失墜した。然るに幣原男は、全く無抵抗主義を採り、啻に之れを傍觀せしのみならず、數千の居留民をも內地に引揚げしむるが如き方針を採つた。又關稅會議に於ては、支那の無責任なる青年及び學生等の宣傳に迷はされ、英米を出し拔いて、一つに支那の好感を買はんとし、其會議の劈頭、關稅自主權を直ちに承認するものとの誤解を釀すが如き聲明をも試みた。然るに關稅率の具體問題に至り、我國は却つて窮地に陷り、遂に關稅會議を不成功に終らしむるが如き結果を誘致した。而して郭松齡事變に就ては、此反亂により支那の軍閥打破が實現されるが如くに思惟し、大に之れに同情し、滿洲の安寧秩序を紊し、平和を破り、一時奉天政府をも危殆に瀕せしむるが如き混亂を生ぜしめた。斯くて幣原前外相は、關稅會議に於て支那國民に非常なる同情を表せしにも拘らず、其結果は、却つて彼等の日本に對する侮蔑を增長せしめ、我既得の權益を損傷せしのみであつた。又南京事件に於ては、數千の我居留民を內地に引揚げしめて、非常なる經濟的損失を生ぜしめた。而已ならず郭松齡の反亂により、滿洲の治安を紊し却つて日支兩國民の感情を疎隔せしめた。而して幣原外交は、其の動機の如何に不拘、其結果より觀れば、凡べて非常なる失敗であつた。

私は幣原男の對支政策の經緯を簡單に檢討し、其失敗の原因は大體二つに歸すると思うてゐる。其一つは幣原男の

理解であり、他は支那の現狀に對する男の錯覺である。元來、支那人は一種異樣の性癖を持つてゐる。此點は我國民などとは、著しく相違して居る。日本人は相手が強硬なれば、命を賭けて頑張る。之れに對抗する。而して他人が同情や厚意を寄すれば、其溫情に感激し、忍ぶ可からざる事をも忍んで、之れに應ずるのである。之れに反し、支那人は概して相手が強硬なれば之れに屈するし、相手が溫情を示せば、忽ち之れを濫用する。殊に支那最近の狀態は駄々ツ子の如く、無理無法によつて他を威嚇し、其不當なる欲求をも實現せしめんとしてゐる有樣である。されば支那に對しては、常に硬軟兩用の手段を用ひ、緩急宜しきを得ねばならぬ。然るに幣原男は日本國民の心理狀態により、支那國民性を忖度し、其政策を遂行せしが故に、却つて我國威を損傷し、支那國民の侮蔑を受くるが如き、結果を生じたのである。又幣原男の支那現狀に對する錯覺は、歐米社會の世相を根據とし、單に思想上の經驗を以て支那を推測し、深刻に支那の事實を事實として體得する事なく、極めて少數の支那政治家や、無責任なる青年及び學生や、共產主義者の宣傳に脅かされ、之れを以て直ちに支那の新興勢力などと憶斷し、之れを支那四億民衆の輿論なりと斷定せしによるのである。然るに、支那の現狀は幣原男の推測して居るが如くでない。支那には、まだ國民の輿論といふが如きものは存在して居らぬ。

支那は昔から文字の國と言はれてゐるが。支那古代の文化に發達

し、復興未だならず、其國民教育極めて幼稚なるが故に大多數の國民は無學である。支那の極めて少數なる武將や、政治家、青年等が所謂三民主義を唱へて居つても、彼等の中に於てさへも、之れを徹底的に理解して居るものは稀れである。且つ其交通通信機關は、極めて不備、領土は廣袤、其邊境さへも明かならず、殊に東西南北、言語、風俗、習慣等を異にして居る有樣なるが故に、國民的輿論といふが如きものはない。現在の南京政府は、張作霖を倒し、舊軍閥を撲滅したなどゝ主張してゐるけれども、此政府の基礎と雖ども蔣介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁、白崇禧、李濟琛等の軍閥の勢力均衡に依つて維持されて居るものであつて、南京政府の主腦部の政治家は、凡べて此等の軍閥の傀儡に過ぎない。從つて此等の武將の勢力が不均衡になれば、何時之れが瓦解せぬとも限られぬ。而して南京政府の威令の如きは、まだ一局部に行はれて居るのみで、其組織さへ完成されては居らぬ。而して國民共通の憲法もなければ、商法、刑法、民法も備はらず、各地異る貨幣制度を有し、税制は不統一、名は三民主義を基礎とする共和政體であつても、其實質は、まだ封建制度の如き一種の專制政治である。されば今日の南京政府によつて、支那の和平統一が實現され得るものとも思はれぬ。而已ならず、なほ各所に共産主義者や、無責任なる青年學生等の破壞運動が存在する故に、南京政府により國家の統一を圖るといふが如き事は、容易の事ではない。凡そ健全なる民主政治は、國民教育を基礎とし、彼等の理智の判斷による輿論成熟して、始めて實現され得るものである。支那の現狀に於て、これは前途尙遼遠なりと謂はねばならぬ。されば、此事實を深刻に理解せずして、我對支政策を實行せんとするに危險なる事である。

併し支那と雖ども、何時までも、此混亂狀態を繼續するものとは思はれぬ。支那國民も軈て世界の大勢に支配されて、覺醒するに違ひない。また覺醒する事を希望する。支那が何時まで混亂したり、破滅する事は、日本の希望せざる處である。日本としては、支那が健全なる發達を遂げ、强固なる國家を組織し、和平統一を圖り、關稅自主を確立し、治外法權制度を撤廢し、對等條約を有する一大國家を編成さるゝ事を望んでゐる。之れは單に支那國民の爲めのみならず、又日本の爲め、亞細亞民族の爲めである。而して支那國民黨の最後の目標は、之れであるに違ひない。故に南方國民軍の革命には同情出來る。また之れに同情せねばならぬ。それと共に、彼等の無責任なる行動や、國際信教を無視する行爲は、之れを阻止せねばならぬ。且つ共産主義者の活動の如きは、之れを掃蕩せしむるやうに誘導し、支那の破壞を妨げ、健全なる發達を望まねばならぬ。之れには、支那の現實の事實を事實とし、隣邦日本としては、硬軟兩樣の政策を採り、緩嚴宜しきを得ねばならぬ。幣原男の如く、只單に彼等の一時的の宣傳に迎合して却つて彼等を破滅に導くが如き事は、結局彼等に不親切の事であり、また支那の健全たる發達を助成する所以でない。支那に對し同情は可である。併し綿體迎合主義には、支那を墮落せしめ、且つ之れを破壞に導くものである事を痛感せねばならぬ。支那に同情し、支那の和平統一其健全なる發達を希望するものは、幣原外交の失敗に鑑み、慎重對に當る可きである。

牧水逝く

北原白秋

若山牧水君が突如として亡くなつた。肝臓硬變症に口内炎を併發したのだと聞いた。私は告別式の日にその死顏を寢棺の蓋に嵌め込んであつた方一尺ばかりの硝子を透かして拜ましてもらつたが、彼はいかにも安らかさうにやや下向きに瞑つてゐた。それは陶然と酒に醉つたままで眠りこけてゐるいつもの寢姿であつた。ただ思つたよりは少々色が白つぽく見えただけであつた。

「いい死顏だ。」

と、私の後ろから山本鼎君が差し覗いた。

亡くなるまで當人もさう重態だとは思つてゐなかつたらしい。臨終の前日も燗をさして五合くらゐは飲んでゐたさうである。で、遺言ひとつしてゐない。私が行くといふことを聞いて、大喜びで坐蒲團を枕下に出さしたり、酒の用意などをさしてゐたさうであつた。私も氣が氣でなかつたが、遷延した色々の故障でその日はたうとう行けずにしまつた。意識は明瞭過ぎるくらゐで[illegible]見舞に行つて[illegible]たのだつた。その翌朝はもう間にあはぬとの報知を受け取つた。愕然と痛恨とが私を撲つた。私は一旦發ちかけたのを坐り直して了つた。

これからどうしたらいいかといふことが考へられた。日本歌人協會のこともあつた。それで行くにしても死後の彼に對する私達の態度もうちあはせたり、弔文を書いたり、爲すべきことは爲さねばならなかつた。それに或る地方との公人としての公約をその一二日の中に果さねば取り返しのつかぬハメに直面してゐたし、生前に會へれば仕事などは放擲しても飛んで行く覺悟はしてゐたが凡てが過ぎて了つたのだから、濟ますだけは濟まして發つことにした。

告別式の日に私は初めて千本濱の廣々とした——可なり無趣味な——彼の建てた住居を見た。門前の桃畑や、裏の松原や、庭に造つた池や、岩から落ちてゐる造り水の有様なども眺め入つた。鐵の手になつた瀧下の一室——[illegible]といふ[illegible]に彼の[illegible]られ、[illegible]

人や門生達は雜踏し、群集は庭にも溢つてゐた。派出な衣や袈裟がけの僧侶たちは午後二時といふカッチリした時間に見えて、直ぐに讀經にかかつた。

私は一座の端に縁側の柱に凭れて坐つてゐたが、その場の様子がどうしても我が牧水にはそぐはぬやうに思へた。それに今にも醉顔をうれしさうに綻ろばして、「やあ、來ましたね。」と何處からか出て來さうに思へてならなかつた。で、「これはいつたいどうしたんだね。」とやり返したい氣持も動いた。

著くとすぐに夫人や、牧水の親友であつて私とも親しい山崎斌君などから、彼が隨分私を待つてゐたといふことを聽いて、實際黯然としたが、その華やかな騒ぎの中に入り交ると、何か明るい現世的なものが目先にちらちらした。

讀經がひとわたり濟むと、和尚に引き添つてゐた伴僧の一人がすぐに後ろを振り向いて「御焼香を」と言つた。それで白木の几が庭前にも一脚かかへ出された。庭にゐた人たちが亂れて來た。

「弔文はどうするんだ。」と私は一二の人たちに耳うちして見た。後でとその人たちは答へたが、座が早くもくづれて了つたので、もうどうにもならなかつた。で、私の番になつて焼香には立つたが、私の讀むべき日本歌人協會の弔文は、そのまま彼の寫眞の下に献げて、私は默つて拜禮して引き返すより外はなかつた。弔電の重なるものも委員の手から讀まるべきであつたが、その機會も失はれて了つた。何だか、忘れ物したやうなあつけない感じがしたが、その方が牧水の告別にはかへつて似合しいかも知れなかつた。

そのうちに僧侶たちはさつさと引つ込んで了つた。

「田舍の坊主はしようがないな。」と誰かが小聲で憤つた。

焼香はまだ引き續いたが、私たちはその中に失禮して二階に上つた。座には尾上柴舟氏夫妻、太田水穂、齋藤茂吉、尾山篤二郎、土屋文明、石井直三郎、矢代東村等の歌壇の諸君の顔も並んだ。

暑い日であつた。

ビールが出た。

妙なもので、かうした新らしい哀傷の中にも反動的に却つて明るい生氣が感じられるものである。輕い諧謔も出た。生き殘つたものの歡びといふものが、故人の死を悲しむ一面に誰の顔にも何か輝いてゐないことはなかつた。

「今度は誰の番だ。」と一人がいつた。

歌壇では最近に島木赤彦、古泉千樫を既に失つてゐた。

一同が私の顔を見た。

私は羊羹とビールとをチャンポンに口に入れてゐたが、思はず、「僕は大丈夫だよ。」と笑つた。

牧水――酒――白秋。誰にしても直ぐに聯想するところはこれだ。

いよいよ柩が玄關から擔ぎ出され、人々は倉皇として下に降りた。

私は階段のところで、眼鏡の福永挽歌君の顔にぶつかつた。

「弱つたな。」と私は言つた。挽歌も眼を赤くしてゐたが、「うむ、困つた。」と私を見返つた。

早稲田時代の同級生では遂に安成貞雄を失つてゐる。から親しかつた周圍からポッツリポッツリ逝かれたのではといふ氣持が私たち二人をピッタリとくつつけた。

靈柩車を先きにして私達は七八臺の自動車に分乘すると、火災後のわびしい沼津の町を香貫山の方へ、埃をあげドライブした。鐵橋を渡つて程なくすると右手に、こんもりした枝垂柳が見え、櫻の林が見え、見馴れた白い石の門が見えた。

「あれが若山のもと居た家だよ。」と私は隣に坐つてゐた挽歌に囁いた。

私はその家に二度泊つたことがある。一度は今の妻と婚約中に一人で、一度は結婚後に二人して訪ねた。大きい立派な家であつた。書齋の一方のドアを押すとすぐに廣い湯殿になつてゐた。

「困つた。後はどうなるのだ。」

私は私たちの何臺か前方に乘つてゐる夫人や四人の子たちのことがしみじみと考へられた。

「やはり酒が過ぎたんだ、それにこの二三年の無理な旅行も確かに體體を害した。」

挽歌はさう思ふと、彼から家を新築するといふ計畫を聞いた時に、强ひても[illegible]しようとしたことを思ひ出した。それは自分にもつくづく懲りてゐた後だつたからである。若山はその自[illegible]酒の上に無理をした。雜誌の「詩歌時代」を創刊しようとした時にも私は賛成はしなかつた。その當時、小田原の私の山莊に訪ねて來た彼の意氣は大いに昂つてゐた「文藝春秋」の成功をまざまざと目撃した彼には「詩歌時代」も二萬三萬は容易にはけるつもりであつたらしい。詩、短歌、俳句の聯關の紹介といふことの爲に務めて盡さうとする意圖は賛成だし、いい事に違ひなかつたが、さうした一般向きの詩歌雜誌を刊行することに彼の才能や風格は適してゐさうにも思へなかつた。で、私は止したまへと幾度か留めたが、彼は彼のプランの成功を確信してゐて聽き入れさうにもなかつた。で、仕方がなく、私も民謠の選を引き受けた。

酒に醉つてから、私達の話題は少々濕つぽくなつた。彼はほろりとした。

健康上の不安があるなと私は直感した。さうして利潤を考へることも何か死後の家族のことについて焦つてゐるのではないかとさへ思はれた。

果然、彼は「詩歌時代」の爲に大損失をした。家のことやこの爲の穴埋めに彼の健康には無理だと傍目には思はれた揮毫旅行が頻[illegible]いた。旅へ出るとつい飲み過す機會が重積する。彼[illegible]と心から酒を愛し[illegible]

彼はまことに酒仙の一人であつた。[illegible]

斷なからう。[illegible]

とした。彼はよく今西行と呼ばれた。彼は邊幅を飾らなかつた。彼の性行は淡々として眞率であつた。

さうした彼を遂に禍したものは何であつたか。私はそれを思ふと何がなしに輕い憤懣をさへ感じずにはゐられなかつた。

數百の門生に圍繞され、數十の新聞雜誌の選歌に禍されつつ、しかも彼にはふさはしからぬ文業や逼迫した樂しからぬ旅行の連續について、私はどれだけ彼の爲に惜んだらう。牧水は孤獨である方がほんとうであつた。獨で酒を樂しみ獨で旅を樂しみ獨で歌を樂しむべきではなかつたらうか。然しまた考へて見ると、彼には妙に寂しがりやの一面もあつた。彼はその周圍から可なり惱まされながら、それかといつて離れることも手放すことも寂しかつたらうと思はれた。煩はし過ぎた勞働的選歌も生活の上の問題から致方もなかつたかも知れぬ。さうは思つて見ても、彼が獨で彼の本質を十分に磨いて行つたら、健康の上からもかうは死期を早めなかつたらうとさへ口惜しくてならないのである。

火葬場は遠かつた。著くと赤い夾竹桃の盛りであつた。彼の柩は早速に職業的な隱亡たちの手で、興も無く中央の赤煉瓦の竈の中へ押し込まれ、また固く鐵の扉が閉められた。私たちはまたその前で手に手に線香を焚いた。坊さんがその朦々たる煙の中でおさまりのお經をあげた。

歸る時、沼津の驛に直行する私や山本の乘つてゐる自動車の傍に、夫人や四人の子たちが來寄つた。さうして靈車に挨拶をされた。

それから、またひどい埃をあげあげ、狩野川のへりを疾驅する自動車の中で、私は再び鮮かな哀傷に捉へられた。

「僕のお父さんはワヤカマ・ボクスンつてんだよ。」

「坊やのパパ、キタワラ・ハクションだ。」

彼の末の子の旅人君とうちの隆太郎とのかうした三年前の小田原での會話を私は思ひ出した。四歲と三歲くらゐだつたらう。

その時、牧水は夫人とその末の子と一緒だつた。私たちは階上の書齋で水入らずの樂しい夜宴を共にした。海上は凪いで月のいい晩であつた。

あれつきりだつた、あれが最後の酒興になつて了つた。

「僕も弱くなりましたよ。」とうれしさうな赤い顏をしながらも何か彼は弱々しく笑つた。少し酒に醉つて來ると眼がしらがすぐに涙ぐましくなるやうであつた。

「駄目だ、元氣を出したまへよ。」と私は聲をあげた。だが、私の眼にはメツキリと衰への見え出した彼の體力が感じられたのだつた。

さうだつたかと私は肯いた。

狩野川の鐵橋の赤い橋桁が見えて來た。

*

牧水は十數冊の歌集を出しながら、私にはほとんど寄贈してくれな

かつた、處女歌集の「海の聲」を上梓しようとした時、私はまだ早いから止せと忠告したことがあつたが、聽いてくれなかつた。その後私が讀んだのは「死か藝術か」と「別離」だけである。その餘は雜誌に載つたのを拾ひ讀みするぐらゐのことであつた。

「なぜ君は歌集を送つてくれないんだい。くだらぬ人にばかりやつて了つて。」と私が怒つたことがあつた。

「君に見せる歌が無いんですよ。」と彼はしようことなしに笑つて見せた。が、實はさういふことにはづぼらなのであつた。それから「山櫻の歌」を送つて寄越した。最後の晩餐から程なくしてであつた。

で、私の讀んだのは甚だ尠いので、委しくは批判は全集を通覽した上でないと品騭できないのである。その方が私としても謙讓の道だと思ふ。

私と彼とはそもそもから發足點が違つてゐた。私が彼と初めて早稻田の高等豫科で知つた時、私は歌作を止して、「文庫」に盛んに長篇の詩を書いてゐた。明治三十七年頃だつたらう。彼は柴舟門に入つて「新聲」に歌を投書してゐた。私たちは穴八幡の下の下宿に一緒に居たが、いささか私が先輩格だつたので、いつも兄顔をしてゐた。私は射水で彼は牧水と號した。私は時々彼の詠草に朱を入れたりした。

その後、私は新詩社に入り、浪曼的風の詩作にひたり、彼は當時に勃興しかけた自然主義の影響を受けた。當時の新詩社は詩歌の上の一大浪曼派として認識してゐたので、私たちの鼻息も高かつた。ほとんど他派の詩歌などは眼中に

二人の世界はいつとなく離れ離れの星雲狀態になつ

接な一群の詩友ができ、彼には彼の歌の上の友人ができた。從つて

たち二人の話題は詩歌のことから自然に避けるともなく避けられて行

つた。熱が昂らなかつた。

ただよく二人は學校をなまけて郊外散歩に出かけた。牧水は獨歩崇拜であつた。彼は武藏野の櫟林や日和の丘の裾を響かせてゆく空車の音などに聽き耽つた。

私たちの同宿は半歳ばかりしか續かなかつた。私は家を借り、彼はその後に他へ轉宿した。

私たちの交情はそれ以來即かず離れずに進んで來た。彼が雜誌の「創作」を出した時、私は賴まれて詩の選を引き受けもし、酒興に乘じては一緒に他を驚かしに行つたり、夜ふけの電車を往來で立往生さしたり、無邪氣な野放圖もない醉態を演じなどしたが、我々の親密の程度はいつでももう一歩といふところでお互に立ち入れないものがあつた。

私は詩作の傍ら、また歌をも發表するやうになつたが、二人の道はやはり同じではなかつた。から云つたら世間の人は或は意外にも思ふだらうが、實は啄木の方が牧水よりも私に近かつたのである。啄木の歌は新詩社の風を寧ろ粗雜にしたものであつた。私は

年に思想的になり、わざと亂暴な表現を快とした。だから素人受けがしたのである。死後に彼の受けた一般的の聲譽は寧ろ彼の意外とするところであらう。それよりも「馬鹿な奴らだな。」と地下で笑つてゐる筈だ。彼の才華の煥發は歌よりも詩にあつた。技巧の爛熟も、藝術價値も多くはその方にある。不思議に世間は盲目である。

牧水の歌風はその初め自然主義の系統を引き、つつましく、さうしてまた感傷的であつた。このセンチメンタリズムがまた青少年の愛慕を受けた。啄木と違つて牧水はただ歌道に一向であり、全力をそそいだ。彼はほれぼれと歌ひ耽つた。

後年になつても、彼の歌は玄人受けよりも何か專門外の文壇人あたりに感心された。これは彼の歌風が誰にもわかり易く抒情的であり、自然でのびやかで謙讓であつたのに據るのであらう。初期は感情に溺れてやや口をすぼめて歌つたところもあつた。さういふところも氣に入られたかも知れぬ。

だが、忌憚なく言ふと、專門的に見て、虛實の間にもつと深く交流してほしかつた。嚴肅な意味に於ける觀照の度が象徴の域にまで參入しないで、流れたやうである。技巧の上にも微細な苦心を樂しまないで流した。これは思ふに彼のただに我と歌ひ惚れる歌ごころの美しさからも來るが、二つには彼はあまりに美聲で朗吟が巧み過ぎたのにも據る。彼はあまりに彼の美聲に恍惚として、歌そのものの持つ一音一語の本質、感味、連關、調律といふ微細な點について聽かず、自分の聲でその缺點をも朗々と掩つて了つたのである。

この本質的の問題について、極めて玄人の間には彼の歌に於ける觀照態度や表現の上に就いて、可なりの異議があり、私もその點ではさしてうまいとは思へなかつた。一首一首の技巧上の缺點は何かと私にも言へる。ただ、彼は生れた歌人であつた。彼は何のこだわりもなく自由に淡々と歌つた。技巧などはどうでもいいといふ風であつた。彼は歌ごころの動くままにすらすらと樂しんで歌つた。酒を樂しむと同じやうに樂しんで歌ひ恍れた。つまり慾が無く自然に流露するものを流露さしたのである。さうはなかなかゆかないのである。彼の歌は人麿あたりの嚴肅で高邁な萬葉風でもなく、俊成あたりの香氣の深い幽玄體でもなかつた。やはり西行に最も近かつたであらう。然し感傷味や寂寥感に相似點はあらうが、もつと西行よりも明るく暢達した方面を多分に持つてゐたかと思ふ。

彼の風格は及び易からざるものであり、人物がよく、柄があり、何といつても彼は彼の行き方でよかつたと思はれる。

晩年に至つて、彼の制作力はいつとなく消衰し、幾分たわいがなくなり、歌壇の注視も遠くなり、何となく咲ききつた花の凋むやうに凋みつつあるやうに見られた。然し彼の歌ひ恍れるその場の態度に就いては以前よりももつと樂になり、淡々ともなり、自在にもなつたやうである。あまり無かつた慾氣がもつと無くなつた。玲瓏たる歌境に入りつつ、彼は我と歌と酒とに醉ひながら死んだ。人々は彼の無くなつ

た唇を熱い末期の酒でしめした。

殘るのはもつと生きてゐたらどうなつたかといふ問題である。

いふまでもなく歌壇は惜しい歌人を永遠に失つた。

私は親友の一人を失つた。

＊

その薄暮に、私と山本とは東道のH君と靜浦海岸をドライブする自動車の中にあつた。H君の家は伊豆の大仁在吉田にあるので、是非に泊れといふのであつた。四十分後に私たちは土地の豪家である彼の門前に、彼の父親である老主人の出迎ひを受けた。

通された座敷の床の間には牧水の半折の軸を中央に私の一對の細軸が左右に掛けられてあつた。牧水追悼の意に外ならなかつた。私はまた私の哀傷を新らしくされた。

晩餐の時、私と山本とは一二本でつつましく酒を辭退した。お互につくづくと考へさせられたのである。H君の母上も席に見えた。さうして話は自然と牧水の上に移つた。

いつか私が彼とこの家に泊つた時、醉つてごろりとなつた彼を眠入らせるつもりで、私はねんねんころりんの子守唄をいつまでもいつまでも歌つて、歌ひながら彼の頭を叩き叩きしたさうだ。翌朝見ると牧水の坊主頭は赤く腫れあがつてゐた。かるく叩いたつもりでも時間が長く、歌もすつかり醉つてしまふのであつたさうである。これはいつもこの家では一つ話になつてゐるさうである。またその話が出た。

「あれからもう八年にもなりますかなア。」と私はしみじみとした。

父よ悲む勿れ（七）

麻生久



六一

長い間、冷たい孤獨の淋しさに閉ぢ込められてゐた、佐多の所謂炭坑運動の巣にも、若い美しい女性の聲と一緒に、早くも希望に滿ち滿ちた春が訪れて來たやうに思はれた。そして家の中は、未だ戸外に降りしきる吹雪にも拘らず、何となく晴れやかに明るみわたつて來たのであつた。

多榮子は、自分も圍爐裏ばたで、此家の妻君と並んで坐りながら、皆の給仕をしい〳〵朝飯を濟ました。

質素な、併しながら賑やかな、此朝飯こそは彼女が古い生活から拔け出して、新しい生活の第一歩を踏み出した、記念すべき朝飯であつた。

彼女の胸は、何となく生き〳〵して輝かしい愉快さに滿ち溢れた。

忠雄はこんなにして妹と一緒に朝飯を食べるのは、ほんとに久し振りの事であつた。

彼はなつかし氣に妹の方を見やりながら云つた。

『どうだ多榮ちやん。こんなにして一緒に朝飯を食ふのは久し振りだね。でも隨分僕等の生活は變つてるだらう』

『ほんとに久し振りねえ。兄さんがゐなくなつてからは、家の中はまるで死んだやうに淋しかつたんですもの。それに、きまり切つたうちのご飯よりこの方がどんなに愉快だか分らないわ』

多榮子は、心から悦こばし氣に輝く瞳を兄の方に向けて云つた。

『でも初めは珍らしいが、段々厭になりやしないかね、、、、。こんな生活は餘り上等ぢやないからねえ』

忠雄はも一度暖かな瞳で妹の方を見やりながら憐れむやうにさう云つた。妹のこんなにした思ひ切つた態度を見るにつけて、忠雄の

男の心の中には、何とない氣遣はしさと、いぢらしさとがいつぱいであつた。

妹はこんなにして飛び出して來は來たが、さて、これが後にどんなになつて行くのであらう。自分等の荒波の生活の中に揉まれて堪へ忍んで行く事が出來るであらうか？

けれ共、今こそ古い生活から拔け出して新しい生活の中に躍り出て、單純な希望に燃えてゐる多榮子の顏には、何の躊躇の色も不安の影もないのであつた。

彼女は元氣に、兄の言葉を追ひ返すやうにして云つた。

『そんな事はないわ。兄さんは未だ私を餘り小兒扱ひにし過ぎるのねえ、ハ、、、。私だつてこんな生活が、どんな物だか位ゐは覺悟してゐるわ。でも、その方が生き甲斐があるんですもの。困難が來れば愈々深刻になつて、もつと眞劍になる丈けだわ。私の事を心配なんかしなくつてもいゝわよ』

『ハ、、、、大分强いんだねえ。心配なんかしないよ。その覺悟なら安心だ』

朝飯が濟むと、彼女は後片附けのために早くも甲斐〴〵しく立ち上つた。彼女の心も體も、戰ひに雄々しい生活に突き進まうとする欲望に燃え切つてゐるやうに見えた。

正直な妻君は、多榮子の立ち働くのを見ると、吃驚りして、思はず前後も[illegible]……

『まあ、お孃……何と云ふんでしたつけ……とも私がしますよ……今朝こそ來なすつたのに、どうぞ休んでゐて下さいよ……』

『いゝえお内儀さん。私の事をそんなにお客様扱ひにしないで下さい。今日から私は此家の者ですもの……』

『それでも今朝こそ來なすつたばかりだのに……』

『いゝえ今朝も昨日もないわ……』

彼女はそれを打ち消すやうに激しくさう云つてから又附け加へた。

『それに私は今までお内儀さんより樂な生活をして來たのですもの。今度は私がせいぜい働いて、お内儀さんをお客様にしてちやうど埋め合せがつくんですわホ、、、。これからはご飯でも何でも私がどしどし炊きますわ。それでいゝでせう。ねえ兄さんホ、、、』

多榮子は元氣に氣輕くさう云ふと、妻君の止めるのも肯かずに、そこいらの汚れ物を纏めて、どし〳〵臺所の方に運んで行つた。

皆は多榮子の快活な言葉や樣子に釣り込まれてどつと高く笑ひ合つた。

それでも、人のいゝ此家の妻君は、何となく心配氣に、多榮子の方を見やりながら、心からいたましさうに云つた。

『でもまあ、こんな汚ない臺所なんだもの。着物も何も汚れて仕舞ひますに……』

さう云はれて[illegible]

た。彼女は、もう古びてはゐたけれど、ふだん着として、揃ひの大島を着て、帶も立派なものをしめてゐたのであつた。

彼女は夫れに氣附くと、自分の身なりを顧みながら、恰かも自分を冷笑するかのやうに高い聲で云つた。

六二

『まあ私は何て贅澤なんでしやうねえ。こんな大島の着物なんか着て。でも今日からは、私の着物はこれつきりなんですもの。今度拵へる時には、何にしませう。さう／＼坑夫の娘さん達の着てゐるやうな紡績がいゝのねえ。それにメレンスの帶とホヽヽヽ』

皆は又しても彼女の快活な屈托のない言葉に釣り込まれて愉快氣に高く笑つた。

彼女の心は止まるところも知らず、輕い生き／＼した悦びに燃え上つた。何の蟠りもない率直な愛が、彼女の身體をふんわりと包み心は眞一文字に、新らしい正しい生活に突き進んで行つた。

彼女は妻君と一緒に、朝飯の片附けを濟ますと、直ぐに拂塵と箒とを手にして二階に上つて行つた。

兄達の寢床は未だその儘に、あつちこち綻び汚れてゐる粗末な布團は、室いつぱいに、まくれ廣がつてゐた

彼女はその布團を行儀よくきちんと疊んで、一と先づ夫れを室の中に積み重ねた。そして目茶苦茶になつてゐる押入れの中を綺麗に掃除してから、丁寧に布團を其中にしまつた。それから、これも[illegible]もない二人の洋服を丁寧に疊み、床の上に亂雜に散らばつてゐる本をきちんと積み重ね、机の上を行儀よく片附けてから、拂塵をかけて隅から隅まで念入りに掃き出した。そして最後に、火鉢の中を綺麗に掃除して、階下から炭と火種とを持つて來て、その中についだ。

こんなにして、心行くまで室の中を片附けてから、彼女は美しく馴らされた灰の中に、パチ／＼と氣持のいゝ元氣な音を立てゝ起きて行く炭火の音を聞きながら、その火鉢の側に坐つて、今掃除したばかりの室の中を眺め廻した。

室の中は、ほんとに見違へるやうにさつぱりと心地よくなつて、黄色く燻んだ室の壁までが、何となく明るみわたつて來たやうに思はれた。

彼女の心は、生れて始めて、今こそ自分が仕甲斐のある仕事をしたと云ふ悦こびでいつぱいであつた。彼女は今までにも、一日といへども掃除をしない日はなかつた。けれ共其掃除は何の意味もないたゞの掃除であつた。それだのに、今日の掃除は、單に室の掃除ばかりではなしに、彼女自身の心の中までも、綺麗に掃き淸めた掃除のやうに思はれた。

彼女はやがて立ち上つて、階段の上から下を覗いて、恰も、勝利者のやうた晴れ／＼した聲で叫んだ。

『さあ兄さん達、二階に上つてご覽なさい。室が見違へるやうに綺麗

になりましたよ』

先に立つて階段を上つて來た佐多は、その綺麗になつた室を眺めると、感謝のこもつた聲で叫んだ。

『こ奴は有がたい。まるで別の室のやうになつちやつた』

その後ろから上つて來た忠雄も、にこ〳〵しながら快活に云つた。

『おい佐多君、矢張り若い女がゐないと駄目だねえ。いくら僕等だつて、蚤の中に同居してゐるなあ餘り有がたくないからねえ。何だか僕あこゝに來てから身體中がかゆくなつて來たよ。ゐるんぢやないかね』

『ハヽヽヽ、ゐるかも知れんよ。何しろ滅多に掃除なんかしないんだからねえ。でも、もうこんなに綺麗になつたんぢやあ蚤だつて遠慮するだらうハヽヽヽ』

『矢張りほんとにゐるんかね』

『なあに蚤なんか大丈夫ゐやしない』

『ハヽヽ、まあ蚤だけはどうも勘辨だ。でもこれからは多榮ちやんがゐるから大丈夫だ。矢張り吾々の生活にも女の同志は必要だ。僕も何だか急に女が戀しくなつた。何なら立派ないゝ女を一つ世話して呉れないかねハヽヽヽ』

忠雄の物にかまはぬ無遠慮なむき出しな言葉は、偶然にも、そこに向き合ひに坐つた佐多と多榮子に對して、何か知ら羞かしい暗示を與へ[illegible]

二人は生ふた羞かしさに、何となく[illegible]を交はさずにはゐられなかつた。

それでも佐多は、夫れを打ち消すやうに幾分ぎこちない調子でた。

『これからは多榮子さんがゐるんだから大丈夫だ。蚤も遠慮するだらうし、家の中も明るくなつて來るだらう』

『でも未だ禮を云ふのは早過ぎるかも知れんよ。今日はこんなでも、明日になつたら又お孃さんに逆戻りしないとも限らんからねえ。もう少し試驗して見なくちやあ眞實のところは分らんハヽヽヽヽ』

忠雄は妹の方を顧みて、半ばからかひ氣に、半ばいぢらしさに堪へぬやうに、相變らず微笑を含みながらさう云つた。

六三

多榮子は、相も變らぬ兄の不安氣な言葉を聞くと、それを恨むやうに云つた。

『大丈夫よ、兄さんは未だ私を信用しないのねえ』

『ハヽヽ、信用はしてゐるよ。たゞ心配してゐる丈けさ』

『どうして心配なんかするんでしやう。も一度お孃さんに逆戻りする位ゐなら、こんなにして飛び出したりなんかしないわ。こゝまで來るのには、もう幾度逆戻りしたか知れないんですもの……』

決意と一緒に、何とは知らぬ深い悲しみにこもつて見えた。
忠雄は夫れを見ると、急に、眞劍な妹の樣子が、いぢらしくなつて、宥めるやうに云つて笑つた。
『分つた〳〵。もう意地の惡い事は云はないよ。冗談にも云はないよハヽヽヽ』
佐多も、側に兄妹の樣子を眺めながら、つい釣り込まれたやうに、しんみりした調子で云つた。
『僕等はこんなにして多榮子さんに來て貰つて幸福なんだが、お父さんやお母さんは心配してゐるだらうなあ』
『ハヽヽ、そりや心配してるだらう。勿論多榮ちやんが今朝家を出て來る時には默つて來たんだらうからねえ』
『えゝ無論默つてよ。たゞ一寸手紙は書いて置いて來たんですけれど』
『それぢやあ今頃は大變だねえハヽヽヽ』
そこに話しが觸れると、多榮子の瞳には、今までの晴れやかな表情が消え失せて、ちらと暗い影がさして來たやうに見えた。そして幾分氣遣はし氣な、しんみりした聲で訴へるやうに兄に云つた。
『今頃はお父さんの癇癪玉が破裂して、お母さんが困り拔いてゐるでしやうねえ。お母さんにはほんとに氣の毒ですわ。けれど外に仕方がないんですもの。お父さんはこれから家の事をどんなにするでしやう』
けれ共、忠雄は、今までの幾分陰氣になつて來た空氣を一掃するやうに、快活な力強い調子で云つた。
『なあに心配する事はないよ。何だつて時が皆解決して呉れるからねえ。お父さんの癇癪だつて暫時さ。それより他に仕方がないんだからねえ。沒落すべきものは何時か沒落するさ。そんな運命に置かれてゐるものは早く思ひ切つた方が幸福だ。なあに心配する事はないあとの事は兄さんが引き受けた。又家の事はゆつくり聞かう。多榮ちやんは、も少し下の方の手傳ひをしてお出で』
忠雄は、妹が箒や拂塵を手にして下に降りて行つて、佐多と二人になると、快活に元氣よく云つた。
『おい、佐多君、今度は僕等が舞臺に登場する番になつたぜ。妹は最早立派に役目を果したんだからねえ。これからは僕等の責任だよ。一つ力瘤を入れてやらう』
佐多は、さつきから兄妹の話しを聞いて、何か深く考へ込んで默つて煙草をふかしてゐたが、忠雄の言葉を聞くと、眞面目な調子で云ひ出した。
『今度の事は、全く變な氣がして仕方がないんだ。僕等がわざ〳〵お父さんの炭坑を潰してゐるやうなもんだからねえ』
それを聞くと忠雄は大きな聲を立てゝ笑つた。
『ハヽヽ、夫れぢやあ矢張り多榮に金持ちの娘をとれつて云ふのかね。まあいゝさ、そんな事はくだらない常識だよ。僕はそんな事はや

りたくない。こ奴を機會に奸佞なT炭坑會社と一戰する丈けだつて大した事ぢやないか。僕あ、そ奴を今から考へる丈けでも痛快だ』

『まあ一口にさう云つて仕舞へばそんなもんだがね』

『ハ、、、ぢや二口に云つたらどうなんだ。矢張り同じ事ぢやないか。』

『ハ、、、そりやさうだ。だが多榮子さんはよく思ひ切つた事をやつたもんだ。僕なんかより、餘程ハツキリして大膽だ……』

『うむ、さうだねえ。或る點では男より女の方が大膽で強いところがあるからねえ。それで一度決心すると、まつしぐらに進むよ』

『どうしてだらう』

『どうしてつて？　さうだねえ、女は單純に物を信仰する事が出來るからだらう。女にはそんな性質があるんだ。だからその性質がめざめて來て一度信仰し出すと、極端に大膽になつたり、勇敢になつたりするんだ。露西亞の革命婦人だつて、英國の婦人參政運動者だつて皆さうぢやないか。何しろ單純に信ずるつて事は偉大な事だからねえ。女にとつちやあ戀愛だつてさうぢやないか。日本だつてもうそろ〳〵そんな女が僕等の運動の中にも出て來るよ』

悲壯も、いつになく、女性の中に秘められた不可思議な力に對して、自分自身に説明でも與へるやうに熱心に云つた。

佐多は、多榮子の事に關聯して
考へ深いしんみりした言葉を聞いてゐる間に、何時とはなしに、彼の懷かしい母の事を思ひ出してゐた。

その母も、實を云へば鋭どい強い性格の持主ではなかつたか。そして其鋭どさと強さとは、彼女の會社に對する反逆の態度の中に一番はつきりと現はれてゐたのである。

彼女にとつて、横暴な會社に對する憎惡と反抗とは、無條件的な一つの確信であり信仰であつた。而も其確信と信仰とは、會社と勞働者との間に、何か事件が起きて、何か會社が横暴な振舞をする度ごとに、加速度的に深刻になつて行つた。

彼女は自分の夫が會社の役人達と爭つて、浮かぬ顏をして歸つて來る度ごとに、いつでも夫れを齒痒がつて、夫の不甲斐なさを口ぎたなく罵るのであつた。

『ほんとにお前さん達つたら、男の癖にどうしてそんなにお人よしなんだらうねえ、ほんとに癪にさわつてしやうがないぢやないか。木つ葉役人なんか何を威張る事があるんだい。こちとらが働いてやりやこそお飯が食べられて頤も干あがらずに濟んでるんぢやないか。あんな奴等の云ふ事なんぞ、へいこら〳〵ときいてゐたんぢやきりがありやしないぢやないか。だから愈々圖に乘りやがるんだよ。馬鹿〳〵しい。わたしが男だつたらほんとにぎゆう〳〵云ふ目にあはしてやるんだけれど……』

彼女はそんな時の腕捲せには、何時かいゝ機會を狙つてゐて、相手の所謂木つ葉役人を取つつかまへると、皆のゐる前で、こつぴどくやつゝけるのであつた。

彼が最初に監獄に連れて行かれた時の母親の樣子も未だ彼の眼の前にはつきりと生きてゐるのであつた。

刑事がやつて來て、愈々引つ立てられて行く段になつても、彼女は睫毛一つ動かしはしなかつた。息子が家を出て行く時にも、坐つた儘で縫物の手さへ休めなかつた。そして引つ立てられて行く息子の背に、齒切れのいゝ激勵を浴びせかけた。

『卑怯な眞似をするんぢやないよ。何もお天陽樣に對して、、、をした譯ぢやあるまいし、、、、、だつて今は、、だね。、、、、、がおつかなくて、今時勞働運動が出來るもんかい。馬鹿〲しい』

長い未決生活の間に、彼女は、たゞ一度監獄に自分の息子を訪ねて行つた。狹い物々しい監獄の面會所で、何となく姿の變り果てた息子の姿を眼のあたりに見た時には、流石に彼女の胸も迫つたやうに見えたけれ共、それでも溢るゝ涙は胸の奧深く藏ひ込んで、悲し氣な素振りなんかはけぶりにも見せなかつた。そして強い反抗に燃える瞳で、息子の顏を眞正面から眺めながら、

『男が、、、、、、、、、、つて屁古垂れるやうぢや駄目だよ。ほんとに、、、、、、、、だよ、それでも身體丈けは氣をつけなよ』

と、きり〲した調子で云つてのけた。

、、、、、は、此勝氣の強い女の顏を俄氣にとられて、たゞぽかんと眺めてゐるばかりだつた。彼女は、催促もされないうちに、、、の顏を皮肉な微笑で眺めながら、さつさと出て行つて仕舞つた。

その時の、深刻な反抗に燃える母の強い瞳はほんとに今でも生き生きと彼の心の中に生きてゐるのである。そして、今彼がこんなにして勞働運動をしてゐるのも、この母の屈する事なき反抗に對する强い信念の賜ではないか!

こんなにして、彼にとつては、母は彼の信仰であり、親しみであり、尊敬であり、激勵であつた。そして、未だその母と云ふものより他には、深く女と云ふものを知らない生ぶな彼にとつては、その母に對する考へなり感情なりは、ぼんやりとではあるが、同時に女と云ふものに對する彼の考へであり感情であつた。

多榮子は、彼の生涯の中で、深く彼の生活に觸れて來た第二番目の女であつた。そして色々な點は母と異つてゐるにせよ、彼女の中にも亦、彼が母の中に見出したものを見出さんとしてゐるのである。

彼は多榮子を知つて以來、何か知ら說明しがたい心の悅びを感じて來たのを否定する事は出來なかつた。そして其悅びは又單に母に對する悅びとは異つた悅びであるのも否定する事は出來なかつた。けれ共、生ぶな彼には眞實に夫れが何を意味してゐるかは判然しなかつた。

彼は多榮子に對して不可思議な魅力を感じながらも、その半面に、

心の中では、彼女に對する神聖な尊敬の念で滿ちてゐた。
彼は今忠雄の女に對する說明を聞きながら暫時くの間默つて考へ込んでゐたが、やがて獨り言のやうにつく／＼と云つた。
『ほんとに、女には、何處か神秘的な强さがひそんでゐるんだねえ』

六五

その翌朝、忠雄は未明に起きて、晴れわたつた氣持のいゝ停車場道を、ぽくぽく歩いて停車場の方に出掛けて行つた。
夫れは、札幌の叔父の家を訪ねるためであつた。
忠雄と佐多とは、昨日、多榮子から彼女の身邊に起つた一切の事情を聞いて、これからの處置を相談すると同時に、直ぐ樣その實行に取りかゝつたのであつた。
そして多榮子の家の事情がどんなにさし迫つてゐるかに就ては既に讀者の知られる通りである。
三人が相談して決定した事は、先づ第一に忠雄が札幌の叔父の家に行つて、叔父と一緒の事を相談の上、父を說きつけると云ふ事であつた。次ぎに決定した事は、佐多も直ぐに父の炭坑に潜入して、いざと云ふ時の統御を缺け目なく整へて置くと云ふ事であつた。そして最後に決定された事は、多榮子は、忠雄と父との話し合ひがつくまで、暫くこの家に止まると云ふ事であつた。
多榮子[illegible]、忠雄が[illegible]父を[illegible]、父を說きつけると云ふ事に對しては非常な懸念を抱いてゐた。
『だつて、お父さんも叔父さんも兄さんの事を、かん／＼に怒つてゐるんですもの。それを私がこんな事になつたんですもの。容易ぢやないわ』
多榮子は事の成り行きを想像して不安氣に云つた。彼女の眼の前には、未だあの夜父の書齋で起つた、ひどい嵐の光景がまざ／＼と殘つてゐるのであつた。
佐多も夫れに對しては、幾らかの不安を感じない譯には行かなかつた。彼は自分の智慧を絞るやうにして云つた。
『何かいゝ巧風はないもんかなあ』
けれ共、忠雄は相變らず事もなげに二人の心配を、笑ひながら一蹴した。
『だつて君、叔父でも父でも僕にあはんと云ふ事はないよ。今僕にあふ事は絶對に必要な事だからねえ。會社の重役共だつて、いつもストライキの時には最初は會はん／＼と云つてるが、しまひに必要になつて來れば、先方から會ひたいと云つて來るぢやないか。況んや親父であり叔父だもの。夫れに、かうなればどうしたつて何とか片をつけなくちやならないんだからね。親父だつて叔父だつて進退谷まつてゐるぢやないか。
なあに、俺だつて一番厄介な事は、坑夫の[illegible]人、不意に突然に[illegible]
[illegible]

らうがね。それだつて何でもないさ。僕は今まで癇癪玉を破裂させてまで親父にあふ必要がなかつたから會はなかつたんだが、もうかうなつて必要がさし迫つてくりやあ、癇癪玉の事なんぞ云つちやゐられん。今のところ親父だつて叔父だつて僕が必要なんだもの。癇癪玉の事なんぞ、夕立位ゐなものさ。

たゞ親父の炭坑をあの圖々しいM炭坑會社の手におめ／＼と渡すなあ少々癪だが、併しそんな事は要するにセンチメンタルな事さ。僕の役割は、陥落すべき運命の城を如何に味方に有利に陥落さすかつて事と、行きがかりに囚へられてる親父を一日も早く安泰な平和な生活に連れ戻す事さ。親父も最早老人だからねえ。これ以上不必要な苦勞をするより、早くあきらめをつけて、くだらぬ煩悶から解脱した方が結局長生きの道だ。こんな時こそ大膽に勇敢に强引で行くさ。親父の癇癪玉なんか豆鐵砲見たいなもんぢやないかい、、、、、、、、』

二人は、相變らず事もなげな忠雄の云ふ事を聞いてゐると、何だか自分等が心配してゐる事が無意味で無用で、馬鹿／＼しい事のやうに思はれて、思はず一緒に苦笑せざるを得なかつた。

佐多は一本參つた様な調子で笑ひながら云つた。

『黒田君にかゝつちやあ何だつて簡單至極だからなあ』

『だつて複雑に考へて見たところで始まらないぢやないか』

『そりやさうだ。僕等は未だ駄目だね』

『ハ、、、、なあに何だつて經驗を積んで行くうちに總ての事が簡單になつて來るよ。それより致し方がないんだから。そして結局その方が有効だからねえ。何だつて大抵見通しをつけてぐん／＼やるさ』

『よし、さう腹がきまれば、勇敢にやつてのけやう。どうせずるいM炭坑會社の事だ。無事平穏と云ふわけには行かないにきまつてる』

佐多も愈々腹を定めたやうに元氣よくさう云つた。彼のさう云つた言葉の中には、もう會社との激しい戰ひが迫つて來た事を想像させるやうな決然とした態度がこもつてゐた。

そして、其翌朝、忠雄はさつさと雪道を歩いて札幌の叔父を訪ねるために停車場の方に出掛けて行つたのである。

來朝の噂あるユウジン・オニイル

北村喜八

フランスを訪れたオニイルが、つい最近巴里から築地小劇場主事小山内薫氏宛に手紙をよこした。それによると、オニイルはホンコンへ行く用があるから、序でに十一月頃日本へ行くかも知れないとの事だ。非社交的な彼は、世界的劇作家としての華かな歡迎を嫌つて、浮浪者のやうにひよつくりと横濱の埠頭に姿を現はすかも知れない。さう考へると、放浪時代の若い彼の姿が、まざまざと思ひ浮べられる。彼の戯曲を讀んだものなら誰でも知るやうに、若い時代の彼は、生來の激情的な負けず嫌ひの性格と放浪癖とに驅られて、社會のどん底を轉々としてころげ廻る一個のルンペンであつた。

彼の父はヂユウマの「モント・クリスト」を脚色して、アメリカの小都市から小都市へと旅興行して大當りをとつてゐた人氣俳優であつた。幼時の彼は、その父に伴はれて、變化激しい舞臺裏の生活や慌しい旅にその日を送つてゐた。やがて學校へはひつたが、プリストン大學卒業間際になつて、單調で無味乾燥な學校生活に耐へられなくなつて、とうと其處を飛び出してしまつた。それから彼の放浪が始まる。酒。女。安月給の事務員。急進思想。アナキズム。夢。冒險的な憧憬。金鑛探檢の遠征。熱病。帆前船の船乗り。海。甲板の上の哀傷。南米。シンガ・ミシン會社や電氣會社の事務員。波止場。もぐり酒場。どんな辭書にも出て來ないスラッグの世界。無頼漢。賭博。誘拐。名もない旅役者。――これらの様々な景物こそ、彼の青年時代を彩る色彩であり、又、彼の戯曲を貫く基調である。彼も亦、ウエルズやハムスンと同じ人生の苦しい道を辿り、貧乏と飢で息詰るやうな生活にもがいて來たのである。

幸か不幸か、かうした生活は彼の健康を損つてしまつた。彼はサナトリウムで半年の靜かな生活を送るべく餘儀なくされた。その間に、劇作家としての彼の埋れてゐた才能が、芽を伸ばし始めた。彼は始めて、自分の様々の體驗を、他の作[illegible]たい欲求に驅られたのである。彼は夢中で[illegible]書し、夢中で書いた。そして、このどら息子は父との了解を得て、演劇講座としてアメリカで有名なハアバアトのバアカ教授の下で、正式に戯曲作法を學んだ。かくて一九一六年彼の一幕物が初演された時には、大きなトランクに習作戯曲を一杯つめこんでゐたとの事である。文人少いアメリカから出て、數年にして珍しくも彼は世界的に乗り出し、世界劇壇の流行兒になつてしまつた。私が八九年前、「鯨」を初めて日本へ飜譯した時には、彼が今日の大を成さうとは誰か豫想し得たらうか。

彼の戯曲は、その體驗の深さ廣さから來る生生しい迫力と、バルガアなどん底生活から拾ひ出した詩味とで、われわれの心を打たずにはおかない。最近の彼は、寫實風な作品を離れて象徴劇へ轉換しつつあるやうに思へる。そこには、モダアンな形に盛られたストリンドベルクやドストエフスキイの深さを想起せしめるものがある。このオニイルが日本へ來ると言ふ。もし彼が、曾つての放浪時代に一介の船乗として東洋へ航海するのを夢みたかもしれないとしたら、今東洋を[illegible]するに當つて、どういふ感慨を抱くだらうか。

歐洲水泳行脚

鶴田義行

オリンピックといふ言葉は、私共には大きい夢の殿堂に聞える。それは世界の覇者をあつめて、更にその間に選手權を爭ふといふ壯烈な場面からのみではない。それが四年目毎でなければ行はれないといふ問題である。だから、このオリンピックに出るといふことすらが、實に幸運中の幸運なのである。一度この機會を逸したら、否が應でも四年を待たなければならぬ。幸にオリンピック選手に選ばれて、晴の舞臺に出ることは出來ても、最後の覇權を逃がしたら、これまた次の大會までの四年間を待たねばならない。しかも、この四年間が、われわれ水泳選手にとつては、身體の狀態とか、實力の維持とかいふ上から、なか〱待つて待ち得ない、待つても待ち甲斐のなさゝうな四年間なのである。そこに私共の精進があつた。私共は一生懸命になつてその日のために苦しい練習の日を續けた。そして、幸運にも私は私の夢の殿堂へ行き得る身とはなつた。

私は、今度のオリンピック行きに對して、實は甚だ心細い自信しかなかつた。自分のレコードを信じても、更に自分のよりも優秀な他のレコードのあることに眩惑されて、果して歐米の彼等に伍し得るか否かを氣遣つた。しかし、私のこの臆病な氣持ちを奮ひ起させてくれた最初の暗示は、東京を立つ朝の練習タイムであつた。百米一分十七秒、二百米二分五十秒といふ成績は、私が從來如何なる正式の競技會にも出し得なかつたレコードだつたからである。

いよ〱旅に上つて、パリへ着いてから、一行の者が體重を測つた時にも、他の者が何れも憔悴してゐるのに、私だけ四百匁も目方が殖えてゐたのを知つて、身體の調子の非常によい自信を得たが、これも私には非常に心强い奮起の原動力となつた。スポーチング倶樂部の二十五米プールで、一行が正式の練習をした時、二分四十七秒二といふタイムを示して、ラーデマツヘルの世界記錄を破つたことも、私に或る種の自信を與へた。日佛對抗競泳の前日に、ツール・プールで練習した時には、二分五十七秒といふタイムで、私としては必ずしも立派なレコードではなかつたけれど、前年この同じプールで、ラーデマツヘルが泳いだ時には、二分五十八秒だつたといふことを聞いて、私

は、私とラーデマッヘルとの實力が、大體どの程度にあるかといふ推定も出來た。日佛對抗競泳には、二分五十三秒二で優勝することが出來た。

けれども、私として見れば、日本を出發する朝のレコード、そしてそれ以來のレコードを考へると、來るべきオリンピックには、優勝は出來まいまでも、入賞は出來るであらうといふ朧げなる確信はついて來た。たゞ問題はスペンスとラーデマッヘルの二人で、スペンスには去年ハワイで敗れてゐるし、ラーデマッヘルは名にし負ふ世界記錄保持者であるから、この二人を恐れ且つ警戒したのであつた。ところが、オランダの大會のプールでは、練習をさせないことになつてゐるばかりでなく、私の身體は、大會が近づけば近づくほど亂調子になつて、レコードは惡くなる一方である。それを無理に猛練習で持ちこたへはしたものゝ、依然好調子は取返されない。折角選ばれてオランダへ來ながら、これでは優勝も危いといふ杞憂をしはじめた。全くベストを盡すといふことを、この時程痛切に感じたことはなかつた。

大會は初まつた。私の出場する平泳の豫選の日は來た。A組ではスペンスが勝ち、B組では馬渡君が落ち、C組ではラーデマッヘルがオリンピック記錄を破つて一着になり、D組では私が今ラーデマッヘルの作つたばかりの記錄を破つて勝つことが出來た。一體この豫選といふやつは、相手の力が全然わかつてゐないだけに、誰でも一生懸命に泳ぐから、從つてその人としてはベストに近い成績を擧げ得るものであるか、私はこの豫選の成績を見て、スペンスよりも寧ルを恐るべき敵と考へるやうになつた。だから、準決勝の時にも、スペンスと組んでゐながら、そのスペンスに拔かれることを心配する代りに、自分の一米程前にラーデマッヘルがゐると假定して、それを拔かう〱と力を入れた結果は、また昨日の自分の作つた新記錄を一新することが出來た。しかし、いよ〱最後の決勝の時には、私は非常に緊張した。スタンドから邦人の聲援が、妙に耳について、私は幾分固くなつた。スタートに立つと、東京驛をたつ時の熱烈な聲援の場面が、何の續きからともなく思ひ出された。すると、今まで固くなりさうだつた私の精神は、急に明るい焦點を發見した樣な氣になつた。考へて見ると、水泳が初まつて以來、千五百米にも四百米にも、日本は惜しいところで負けてゐる。水泳としては一點も得てゐない。トン〱拍子に、全く幸運とも思はれるやうな成績で、豫選、準決勝と經て來た私は、この決勝をはづしては、日本に歸る顏がないと思つた。やれるだけやらなければならないと考へたのであるが、さてスタートしてからの百五十米位までといふものは、何が何だか何も覺えてゐない。たゞ百七十米あたりで、となりのラーデマッヘルが、私に追ひついて今にも拔きさうなことが、その波によつて感じられた時、私は急に猛心を振ひ起して「何糞ッ」と最後の力一ぱいで泳いだことを記憶してゐる。そしてゴールへ着いて振返ると、既にラーデマッヘルも着いて[illegible]るところへ、

ィールの上から「勝つたぞ」といふ日本語を聞いたことを覺えてゐる。それは宮畑監督だつたが、私はこの「勝つた」といふ聲を聞くと共に、急に泣きたいやうな嬉しさが込み上げて來たことを白状しなければならない。一番恐れてゐたラーデマッヘルに勝つたといふことより前に、たゞ何となく「日本が勝つた」といふやうな閃きが頭腦に光つた。日本の人に土産が出來た、私は私の盡すだけのことを果し得た滿足で一杯だつた。二分四十八秒八といふタイムで、昨日のレコードを又破つたと聞いたのは、それから餘程後のことだつた。遲ればせながら日章旗も揚つた。「君が代」も吹奏された。それは最う夕暮れに近かつたが、私は、たゞ譯もなく涙がこみあげて來て仕様がなかつた。

けれども私は今でも思つてゐる。私の勝つたのは、鶴田義行が勝つたのでなく、私をして力一杯の働きをさせて下すつた日本國民の後援の賜物で、殊に私達のために、慈母にも等しい面倒を見て下すつた監督諸氏の力によるといふことを。これはずッと後の話であるけれど、私共が招かれてドイツのライプチッヒへ行つた時など、世界一を誇るラーデマッヘルが敗れたといふのであるから、それを破つた私がチヤホヤされたことは兎に角としてその歡迎會の席上で、ドイツの委員は「ドイツは日本の宮畑といふイヤな監督のために負けた」と冗談交りに紹介した程で、如何に宮畑監督の指導が、私達選手の上に有効に力強く働いたかといふことは、かゝる外國の專門家の間にまで話題に上つたのでも察せられよう。

私はオリンピックを終つてからも、更にドイツやイギリスへ廻つて、國際競泳にも出なければならなかつたが、今、歐米水泳行脚のあとを顧みて、各地の人情風俗といつたやうなことを察すると、フランスは、話に聞いてゐた通り、文明に爛熟陶醉してゐるやうにしか見えなかつた。それは單なる一面觀に過ぎないかも知れないけれど、私共が道を歩いてゐると、私共を日本の水泳選手と知りながら、猥誘惑しようとする賣笑婦が、白晝公然とパリの街にゐたのを見ても頷ける。そこへ行くとオランダは流石に田舍である。宿舍のあつたサーンダムといふ部落などでは、純朴に、誠實に私共のために盡してくれた。家々では日本選手のために盡し足りないことを恥ぢる風さへ見えた。ドイツが科學的復興の途上にあることも、充分看取することが出來た。一行が招かれてあるプールへ行つた時、ダイヴィングの板が、鐵で出來てゐたゝめに、そのスプリングが普通の板と違ふからといつて、高階君が跳ばなかつた時など、ドイツ側の委員は今「ドイツは貧乏であるから、米國からあの高價な木材の板を買ふことが出來ない。しかし次に日本の選手を迎へる時までには、この鐵の板を、木材の板と同樣のスプリングを備へたものに改良して置くから、その時には跳んで下さい」といつた。科學の力を信ずるドイツ精神の力強さを深く〳〵感じさせられたことであつた。

私は歸朝してからの毎日を、忙しい日に追はれてゐるが、また〳〵私は世界の子供である。來るべき一九三二年の大會のためにも、精進を休んではならない。

西園寺公評傳（其三）

白柳秀湖

「二」陸奥宗光と西園寺公

西園寺公が初めて文部大臣として入閣した第二次伊藤内閣は、明治二十五年二月、時の内務大臣品川彌二郎の亂暴極まる選擧干渉から、破綻百出、散々な醜態を演じて、見苦しい最後を遂げた第一次松方内閣の後を承けて同年八月に成立し、日清戰爭を經て、明治二十九年九月まで滿四ヶ年の命脈を保つた。第一次桂内閣の四ヶ年半を除いては、稀に見る長命な内閣であつた。此内閣の文部大臣は初めに河野敏鎌であつたが、明治二十六年三月に、教育勅語の起草者として名高い井上毅が之に代り、明治二十七年八月井上が病氣の爲職を辭した跡を襲つて十月三日西園寺公が之に任ぜられた。公の文部大臣はそれから内閣の倒れるまで續いた。

一體文部省は明治四年にそれが設けられてから、最近に至るまで、省の關係から云ふと頗る冷遇されて來たもので、從つて其長官の椅子も何時の頃よりか閑職視せられるやうになつたには相違ないが、人選には十分に注意の拂はれた跡が歴然として看取せられる。例へば内閣官制以前でも木戸、大木、小西郷、寺島、河野、福岡と云つた風に、一國文教の府には、其長官として恥しからぬ氣品の高い人物を選んで之に任ずるといふことが相當、眞面目に考へられて居たやうである。内閣官制が定つてから後でも、文部大臣には先づ森有禮が之に任じ、尋いで榎本、芳川、大木、河野、井上（毅）といふ順序で之に任じて居る。芳川の晩年は、内務大臣の官邸に、新橋の校書桃吉（後に岩倉具張の妾となる）を圍つたりして言語道斷であつたが、當時のことは知らぬ。森有禮と井上毅とが政界稀に見る謹嚴方直の人であつた如く、概して人物に注意の拂はれたことを見るべきである。西園寺公も人間としての道樂は一人前であつたらうが、その風流洒脫の資に於いて、その瀟洒高亮の質に於いて文部大臣たるに最も相應しい人品であつたことを拒むものはなからう。後に原敬を總裁とする政友會が[illegible]伴食として頗る如何はしい人物を之に任ずるやうになり、昔を忘る[illegible]

明治二十八年六月六日西園寺公は外務大臣陸奧宗光の病勢が進んで靜養を必要とするに至つたので其臨時代理を命ぜられた。是より先、陸奧は第二次伊藤内閣に外務大臣として、明治四年岩倉大使の歐米差遣を初めとして、寺島、井上、大隈、青木等歴代の外相が心血を濺いで其事に從ひ、之が爲に拂つた國民的犠牲の容易ならざるものがあつたにも拘らず、悉く、失敗に終つた幕府以來の屈辱的不平等條約の改正に從ひ、その稀に見る穎脱鋭鋒の資と、剛毅不屈の質とを以て、萬難を排し、明治二十七年七月十七日、利害關係が最も深刻であり、從つて折衝の最も困難を以て稱せられたる英國との間に先づ其調印を了した。これ實に我海軍の朝鮮豐島沖に於いて清國の海軍と戰を交へたる八日前のことであつて、爾來露西亞、獨逸、佛蘭西、伊太利以下の十六國も亦相踵いで之に倣ひ、さしも維新以來の難問題であつた條約改正も茲に完全にその目的を達成せられた。乃ち陸奧は此功によりて華族に列し、子爵に叙されたがその初めに意を決して事に當るや、身命を賭するの覺悟があり之が爲にその心身を勞したことは一通りでなく、さらぬだに病弱の身の疲勞は漸く甚しきを加へつゝあつた。併し戰局の發展につれて重大な外交問題は踵を接して起り、殆ど不眠不休の働きを續けた爲に、明治二十八年三月、李鴻章が馬關に來て愈々媾和談判といふ際には、病勢が昂進して、最早その天稟の感受性と、絶倫の透視力とを捧げて伊藤を補佐することが出來なかつた。四月十七日の全權調印には、容態稍佳良なりとて之に立會ひ、十八日八重山艦に乘じて馬關から廣島に還り、尋いで病軀を舞子の濱に横へて靜養に勉めつゝあつたが、二十三日には突如として三國干渉の事が起り、陸奧は又々其病軀を起して之が解決に任じなければならなかつた。かくて五月五日には獨、佛、露三國駐在の我公使に對し、遼東還附に關する勸告受諾の通電が發せられ、五月十日には遼東還附の詔勅が發せられた。是より先、陸奧は屢々伊藤に對して辭意を洩らしたけれども、戰後經營の多端と朝鮮に於ける日露の交渉が漸く困難を極めて來た爲に許されず、六月六日に至り、西園寺公を臨時外務大臣代理として、纔に閑地靜養を許された次第であつた。

『二』家居に現はれた公の平淡趣味

明治二十八年八月一日には日清戰爭の功により、伊藤、大山、西郷、山縣の各元勳が伯爵から侯爵に陞叙せられ、越えて二十日には陸奧も子爵から伯爵に陞叙せられた。然るにその後、陸奧の病勢は漸く進み、最早到底その職に在ることが許されなくなつて來たので、明治二十九年四月六日、一旦西園寺公の外務大臣臨時代理を解いて復職し、更めて辭表を闕下に捧呈し、允許を得て布哇に遊ぶこととなつた。

陸奧の辭表が允許せらるると同時に、西園寺公も亦更めて、外務大臣兼任を命ぜられた。其辭令が明治二十九年五月三十日になつて居る。かくして公は文部大臣を兼ねて、外務大臣の劇務をも見ることと

なつたのであるが、其年の九月には伊藤が内閣を投出し、隈板内閣が成立つこととなつたので、公も伊藤と共に野に下つて、明治三十一年一月、第三次伊藤内閣に入つて再び文部大臣となるまでは全く閑地に居た。

陸奥は西園寺公を『天下第一等の高人』であるとして推稱し、互に肝膽相照して居た。竹越與三郎氏も其頃陸奥の紹介で西園寺公を訪ね、爾來公の門に出入して、常連の一人となつて居つたが、明治三十一年一月第三次伊藤内閣が成立して、公が再び文部大臣として入閣した時には、その秘書官として擧用せられ、參事官を兼ね、高等官二等に叙せられた。竹越氏の、初めて公に面會したのは、官邸で公がビリアードに興じて居られる時であつたといふ。

公が歐洲から歸つて『東洋自由新聞』に關係された頃の住居は京橋の三十間堀にあつた。門もなければ前栽もない、格子造りの直に往來に面した家で、表戸を開けて這入ると、一疊敷ほどの狹い土間があつて、御免といつておとなへば、奥から誰かと應へても事の濟むやうな普通の町家であつた。其後三十間堀から、麴町一番町の井伊家の貸家に移つた。此家は大きい門もあり、相當立派な構へで、先づ以て清華の臈一、西園寺卿の邸宅といふにふさはしいものであつた。

右のやうな状態であつたから公の生活は頗る簡略なもので、外國に行くといへば、諸太夫を徳大寺家の邸内に預けて置いて、サクサと出かけて行くと云つた調子であつた。西園寺家の諸太夫は[illegible]と云つて、之は漢詩大家であり、公の詩の先生でもあつた。

公が文部大臣として初めて政界に乘出された頃の邸宅は大森にあつた。今の大森驛を下りて池上本門寺の方に向つてゆくと、左側に内山嘉吉氏の邸宅がある。あれが西園寺公の初めて東京に建てた邸宅で、内田氏の手に移つてから改築もされ、増築もされて、今日では原形を止めぬであらうが、平家造りの頗る質素なものであつた。一體公の趣味は平々淡々たる自然にあるので、此大森の邸宅にも、大磯の邸宅にも、又、京都の田中村の邸宅にも二階といふものがなく、皆平家建てで、庭園の如きも木石の奇を好まず、自然のまゝの平庭を悦ばれると云つた風がある。之は公の人生觀にも通ずる極めて鮮明な近代人振りで、その徹底した古典的の趣味に、佛蘭西仕込みの豐かな近代趣味が加味されて生れたものでなくして何であらう。人も知る如くパリの郊外は平々坦々たる高燥な原野で、殊にベルダン、ランスあたりから、獨逸の國境にかけて、スカレット色の虞美人草の咲き亂れた緩慢な丘のうねりの美しさは、到底近代趣味の素養なしには理解せられぬものである。風景といへば斷崖絶壁、急流奔湍の奇がなければ語るに足らぬといふやうな人には、到底公の人となりは理解せられぬのである。

之は、駿河臺に邸宅の定まつてから後のことであるが、公は深く國木田獨歩の人物と才藻とを愛し、邸内の長屋をあけて其處に獨歩を住はせて居たことがあるが、獨歩の[illegible]に[illegible]たるなどと、

公のパリ近郊のなだらかな丘陵に憧れる心と、何處まで共通して居たものかなど考へて見るのも、一興ではなからうか。

『三』 丹波の弓箭組高木豐三

邸宅のことから話がまた少し横道に外れた。

大森に邸宅のあつた頃、東京にも內幸町にも住宅ともつかず、事務所ともつかぬやうな家が借りてあつた。或る人は之が本邸で大森の方は別莊であつたといひ、又或る人は大森の方が本邸で之はホンの事務所のやうなものであつたといふ。何方が本邸で、何方が別莊であるのか分らぬ處に公のやもめ暮しの面白味があつたわけである。內幸町の家は初め『都新聞』の裏手、今では大部分埋立てられてしまつたけれども、外濠に沿つて議院の方に行く道を右に折れた所にあつたものださうである。その後此事務所(?)は、同じ內幸町一丁目ではあるが、內山下町に接した胃腸病院のあるブロックに移された。何でも星亨の事務所の角を這入つた所にあつたといふことを聽いて居る。

內幸町の家は、明治二十八九年頃から、明治三十二三年頃まで、梅謙次郎、本野一郎、富井政章、酒井雄三郎、竹越與三郎など、すべて佛蘭西流の政治思想で養成された人々の梁山泊であつた形がある。勿論、當時親しく公の邸に出入して居つた人々の中には、以上の外に高木豐三があり、加藤恒忠があり、西德二郎があり、加藤と西とは外交官畑の人で、多く外國に派遣せられて居たが、その內地に在る間は常に公の邸に出入し、公の話相手となつて居た。殊に加藤はその人物の典雅淸亮にして名利に恬淡たるの故を以て深く公の愛好する所となり、公の私生活にはなくて叶はぬ人の一人となつて居た。

高木豐三は、慶應四年一月五日、西園寺公が山陰道鎭撫總督として丹波國馬路村に入り、中川、人見兩氏の援助を得て、一月六日、先づ龜山城を降し、七日馬路村を發陣して夕刻園部に著陣、八日、人見瀧之進、中川祿左衞門の兩人に命じて丹波の所謂弓箭組を徵募せしめた時、桑田、船井の二郡を始め近郡から馳集まつた壯丁二百餘人の中、今の北桑田郡神吉村から參加した壯丁の一人である。抑も此丹波の弓箭組といふのは、古い由緒のあるもので、平安遷都以來此國が禁裏の御料地であつた關係上、事ある每に七莊司、七下司の家中から壯丁を出して、鹵簿に加はつたり、御所の警護に任じたりして來たものであるが、仁平年中源三位賴政が內裏の怪鳥を退治した功によつて此國に移されてから、所謂七莊司、七下司の家中から、強健の壯丁を選んで之に弓箭の術を授け、技倆拔群のもの二十四張七十二名を選んでその奧義を許したのが、事の起りとされて居る。高木豐三は丹波國北桑田郡神吉村の產で、西園寺公の徵に應じて園部の陣に馳參じた時は年齡僅に十七歲で、公より三歲の弟であつた。尤もその頃は豐三と云はず、豐之助と云つて居た。其後京都で佛人、レオン・デュリーに就いて佛蘭西語を學び、司法省明治寮に入つて法律學を修め、卒業して法律學士となり、職を司法省法制局に奉じ、明治十七年判事に任じ、同

十九年獨逸に遊學し、居ること四ヶ年、歸朝して福島裁判所長となり、大審院判事に轉じ、司法省民刑局長、司法次官に歴任し、傍ら教鞭を帝國大學その他の私立法律學校に執り、後進を誘掖したことが尠なからず、後官途を辭して辯護士となり、日本赤十字社の法律顧問であつたことは人の善く知る所である。

「四」 椿と酒の逸人加藤恒忠

加藤恒忠は伊豫の松山の人で、公との間に中川、高木の兩氏に見るやうな深い關係はなかつたが全くその人物風格の故を以て公の信寵を得、その内地に在るの日は、影の形に隨ふが如く公の側を離れなかつたと云つてもよいほどの間柄であつた。加藤は安政六年の生れで、原敬より五歳の弟であるが、同時に外國語學校に學び、同期に司法省法律學校を卒業して、原との間にも親しい關係があつた。明治十九年外交官試補を拜命し、佛國公使館付となつたのが、外交官生活の振出しで、明治二十四年書記官で歸朝し、外務省の參事官となるまで足掛六年佛蘭西に居た。此六年間は實に西園寺公が、特命全權公使として墺國ヴイナに駐在を命ぜられ、獨逸のベルリンに轉じ、白耳義國の公使を兼務して歸朝された歳月と全く同じであつた。公と加藤との親交は此時から始まつた。加藤が公の所謂懷中者で、盛に茶目振りを發揮した逸話も大分持つて居るが、茲にはそれを省略して置く。加藤は明治二十四年に歸朝して、外務省の參事官となり、外務大臣秘書官に任じたが、明治二[illegible]國に赴任し、明治三十年には同一等書記官[illegible]歸朝し[illegible]に任じ、外務大臣秘書官を兼ねた。明治三十一年は第三次伊藤内閣の成立した年で、外務大臣は之も西園寺公と親しい關係のある西徳二郎であつた。西は松隈内閣の末期、即ち明治三十年十一月から外務大臣であつたが、引續いて第三次伊藤内閣にも外務大臣であつた。西と西園寺公との關係は公が最初に佛蘭西に留學した時からのことである。西は鹿兒島の藩士西藤左衛門の二男で、弘化四年の生れである。明治三年大學少舍長となり、同年六月露西亞に學び、七年三月佛蘭西公使館の書記を命ぜられてから、留學中の西園寺公と親交を結んだ。何でもその頃公が本國の政府から或る事項の調査を命ぜられ、西と額をあつめて一生懸命にその報告書を作製したなどいふ話もある。西の外務大臣といひ、加藤の外務大臣秘書官といひ、公の地位が漸く内閣の中に重きをなして來た事情を知るべきである。

加藤はその後、辨理公使をしたり、（明治三十三年）特命全權公使に親任せられ、白耳義國に駐在を命ぜられたり（明治三十五年）して居たが、明治四十年官を辭して野に下り、松山市から衆議院議員として選出せられ、晩年は北濱銀行の支配人、『大阪新報』の持主として根城を大阪に置いて居た。大正元年貴族院議員に勅選せられてからは政友會に屬し、最近死ぬ少し前には松山市の政友派から推されて市長の任にあつた。[illegible]一面には[illegible]家として[illegible]

遊の兩氏と共に其名を知られ、議會が濟むと、殆ど毎年のやうに支那に遊び、北京を中心として盛に硯石をあさつて歩いたものだ。大正十二年の春香港に遊んで歸つた頃から、漸く喉頭癌が進み、餓死するものの苦しみも、之を渇死するものの苦しみにくらべては恐らく何ほどのものでもなからうと、その病苦を親しき友に訴へながら慘ましい最期を遂げた。死ぬ少し前、時の侍從長珍田捨巳伯からその秘藏の葡萄酒を見舞に贈らうといふ話があつたのを、折角貰つても飲めぬからと云つて斷つて居た。それを我國に於ける最初の耳鼻咽喉科專門醫で、久しく日本赤十字社に勤め、軍醫監にまで昇進した兄の賀古鶴所氏が聞いて深く悲しみ、石井菊次郎子と相談の上、珍田伯からその葡萄酒を貰ひうけて加藤の病床に持つて行つた。加藤も深く喜び、枕頭に葡萄酒を並べて赤にしようか、白にしようかと子供のやうに樂しんで居たが、到頭赤を飲むことになり、尻から灌腸器で注入した。暫くして酒が廻るとア、好い氣持になつたといひ、電報用紙を命じて、珍田伯に宛て、『酒、メルシー、尻から飲んだ。』と打電させた。

加藤はそれから一週間ほどして死んだが、死ぬまでに蒐集した硯石が凡そ百面ほどあつた。その中、七八面は天下の絶品として同好家の間に定評のあるもので、小川芋錢氏の筆で知られて居る常陸牛久の藩主、山口弘達氏が一々見て片身分けしたが、未亡人はその殘りの品を一文も儲けず、全くの原價で賣却してしまつた。何でも全てを二千四五百圓位で手放してしまつたといふことである。一文でも儲けて賣つては故人の風流を傷ける恐れがあるといふので、普通の相場で賣れば、少くとも一萬圓以上のものを旅費も何も見込まずにホントの原價で賣つてしまつた。

遺言書があつて開けて見ると、遺骨は一部分松山城外、石手川のほとりにある、、、の寺院に葬り、其餘の一部分は東京に葬つてくれとあつた。、、、、の寺院に葬れといふのは、せめて自分の遺骨だけでも、、、、に對する一般國民の偏見打破に資したいといふ趣旨であつたさうである。それが爲には、死ぬ少し前にその寺院の僧侶を病床に呼寄せて、何か密談をしたことがあつたのを、家人は少しもそれと氣付かずに居たものださうである。硯石の外には花卉類が何よりも好きで、病中から枕頭は見舞の草花で埋もれて居た。花卉類の中でも、椿の花が特に好きで、松山の墓は誰の志しとも知られぬ草花と、酒樽との供養で、常に馥郁たる香氣を絶たぬとのことである。珍田伯も墓畔に椿の樹を植ゑて故人の風格を偲ぶよすがとした。尚ほ遺骨の一半は三田の聖坂の上の寺に葬られて居る。

加藤は『拓川』と號した。拓川の拓は、石手の意である。拓川はまた我國に於ける社會主義の草分けとして名高い酒井雄三郎とも親交があつた。

「五」 梅謙次郎と本野一郎

高木兼寛につれて想出されるのは梅謙次郎である。

との關係が、遠く山陰道巡撫の時に始まつて居るやうに梅も公が米子から雲州松江に入つて、城主松平定安の出迎を受け、歸順の誓書を容れた時から始まつて居るのではないかといふ疑ひがあり、有らゆる方面に探究の手を伸して見たが、原稿、締切までには公から直接に聽くより外に知るべき途はなかつた。公が米子に滯陣中、松江藩主松平定安の嗣子彩麿、同家老大橋茂左衞門以下五名の出迎を受けたのは慶應四年二月二十六日で、二月二十八日、雪泥の上に土下座して恭順の意を表する無刀麻上下の藩主、老臣以下に會釋を送りつゝ、威風堂々と松江城に乘込んだ公は、四日間松江に滯陣して、藩主の誓書を納れ、家中の重臣を引見し、さまざまな逸話があつたらしい。梅はその時まだ漸と九歳の少年で、此大變動を眼のあたりに見たわけである。明治

梅は、雲州松江藩の藩醫梅薰の二男で萬延元年の生れである。明治八年十六歳の時、東京外國語學校に入つて佛語を勉强し、二十一歳で司法省法律學校に入り、明治十七年七月卒業して法律學士となり、翌年大學法學部教員として佛蘭西に留學を命ぜられ、リヨン大學を卒業後、獨逸のベルリン大學に轉じ、明治二十三年八月歸朝して法科大學教授に任ぜられ、翌年農商務省參事官を兼ね、法學博士の學位を授けられ、明治三十年に帝國大學の法科大學長に任ぜられたものである。後、法制局長官、恩給局長を兼任し、明治三十一年、竹越氏が始めて文部省の勅任參事官に抜擢された時には、梅は文部省の總務長官であつた。

本野一郎は佐賀藩士、本野盛亨の長[illegible]

[illegible]

から、梅より二歳の弟である。明治六年佛蘭西に遊學し、リヨン大學を卒業して同九年歸朝して居るから、公との關係は、公の初めの留學中に結ばれたわけである。明治十五年には再び英國に遊學し、明治二十三年には外務省の飜譯官に任ぜられ、正七位に敘せられた。明治二十六年には、法學博士の學位を得、外務省の參事官を兼ねたが、尋いで專任參事官に補せられた。明治二十七年には日清戰爭が起つて捕獲審檢所といふものが出來、その評定官に任ぜられた。明治二十八年には、日清戰爭の功によつて勳五等に進み、外務大臣の秘書官となり、參事官を兼ね、同時に法制局の參事官を兼ねた。陸奥と西園寺公との間に於ける橋渡しが、本野によつてなされて居たわけである。

明治二十九年に入ると更に日露の關係が重大となり、露佛同盟の由來などが、西園寺公や、陸奥と關係の深い、『世界の日本』あたりで、盛に論議されたり研究されたりする（酒井雄三郎執筆）やうになつた結果でもあらう、佛蘭西在勤の本野が公使館一等書記官に任ぜられて露西亞在勤を命ぜられた。越えて明治三十一年第三次伊藤內閣が成立すると、本野は白耳義國駐劄特命全權公使に出世し、明治三十二年、ヘーゲに開かれた平和會議には日本を代表し、最年少の委員として出席し、明治三十四年には更に佛國全權公使を命ぜられ、日露戰爭を經て、明治三十九年第一次西園寺內閣が成立すると、[illegible]

[illegible]

は元來本野家の持物で、第一次西園寺内閣の時には竹越與三郎氏が聘せられて主筆となり、盛に政府を支持し、第二次桂内閣が成るや、その陰險にして辛辣を極めた探偵政治に對し、盛に巨彈を送つたことを記憶して居る。筆者もその時二十二三歳で竹越氏の書齋にあつた『ヂプロマチック・ウーマン』といふ本を飜譯して原稿料を貰つた。何でも英佛の葛藤を背景としてロンドンとパリとの間に活躍する若い美しい外交婦人のことを書いたものであつた。本野氏と竹越氏との關係は、その『世界之日本』時代からのことであらう。

『六』 富井政章男と酒井雄三郎

富井政章男は京都府の士族富井政常の長男で安政六年の生れであるから、ちやうど加藤恒忠と同年である。富井男は明治四年佛語の教師として京都に招聘せられた佛蘭西人、レオン・デユリーの學僕である。デユリーの碑石は現に南禪寺金地院のほとりにある。當時富井男と共にデユリーの門下生であつたものに高木豐三、山口忠澄等がある。京都の陶器、織物、染色、製糸の業が維新後、幾程もなくして異常の進歩を遂げたのは、此デユリーの指導に負ふ所が非常に多かつたのである。富井男はその後東京に出て外國語學校を卒業し、佛國リヨン大學に學び、明治十八年歸朝して帝國大學教授となり、續いで法科大學教頭に進み、明治二十四年には早くも貴族院議員に勅選せられた。明治二十六年三月には法典調査委員會が組織せられ伊藤が總裁、西園寺公が副總裁で、貴衆兩院議員、大學教授、司法官、民間法律家、實業家等五十名を委員として條約改正に必要な民法の起草を急ぐこととなり、男もその委員の一人として梅、穗積の諸家と刻苦勵精、よくその任を完うした。明治二十七年には法科大學長となり、同三十六年職を辭し、越えて三十九年帝國學士院の會員となり、現に民法學者の權威として重きをなして居ることは人の善く知る所である。飽くまで學者風の人で梅や本野のやうに『世界之日本』には筆を執らなかつたけれども同じく内幸町組の一人で、その佛蘭西學者の一人として、公の知遇をうけて居たことは確かである。

尚ほ高木豐三の兄で京都の恩人と呼ばれて居る高木文平のことに就いても記すべきことは頗る多いが、それは他日本篇が單行本として發行せられる時に讓るとしよう。

酒井雄三郎も内幸町梁山泊の一人であつたが、此人は以上の諸家と比べて年も若かつたがその學歷も異つて全く私學畑の人であつた。中江兆民と云ひ、光妙寺三郎といひ、加藤恒忠といひ、此酒井雄三郎といひ、後の國木田獨歩といひ、公の好んで近づけた人物には、實に枯淡清曜、小春日の空を見るやうな風格の男が多かつた。嘗て中江兆民が酒井の人物を蘇峰氏に紹介した手紙の一節に、『文學家と申すよりは寧ろ哲學家にて、哲學家としては同人の氣象は、希臘哲學者の如き性行を具へ居りたる樣、被察申候。しかし玄妙幽微の哲理を談ずるよりは、政治の方嗜好いたし居たる樣被察申候』とあるのが、その

大[illegible]をつくして居る。

酒井は肥前小城（七萬三千餘石―鍋島直虎）の藩士で、明治七年中江兆民が歐洲から歸つて間もなく番町に佛學塾を開いた時、最先に入學して佛蘭西語を學んだものゝ一人である。その後兆民の片腕として塾の監事のやうなことを勤め、『政理叢談』の發行を助けた。是より先、兆民は明治七年佛蘭西から歸ると、直に元老院書記官に補し、飜譯係を命ぜられたが、院の幹事、陸奧宗光と善からずして職を辭し、外國語學校に教鞭を執つて居たが、間もなく番町に佛學塾を開き、佛蘭西語を通じて、佛蘭西流の政治、法律及び哲學思想を教へた。又明治十五年からは、『政理叢談』を發刊して、誌上にルソーの民約論を譯載したりしたが、酒井は兆民を助けて此雜誌の編輯並に發行に從事した。之が酒井の文筆生活に入る第一歩であつた。

此間に中江兆民は西園寺公の『東洋自由新聞』（明治十四年三月十八日創刊）に關係し、同紙が廢刊となつて後、自由黨の機關紙『自由新聞』（明治十五年六月二十五日創刊）に聘せられて、その社說掛となつた。此年兆民は酒井雄三郎を隨へて、九州に遊び、熊本に入つて德富蘇峰氏をその大江の居に訪うたことがある。之が酒井の德富氏と結ぶに至つた初めで、明治二十年二月、德富氏が『國民之友』を創刊するや、酒井は初めから社友の一人として之に關係し、明治二十年十二月、山縣內閣が保安條例を發布して、一夜に所謂注意人物三千餘人を拘引し、其中五百七十人に對し皇居を去る三里以外の地に退去を命じた時には『[illegible]々學人』の[illegible]し、痛烈に政府の暴擧を批難して、大に世間の注意を惹した

『七』 萬國社會黨大會最初の出席者

明治二十三年には佛蘭西に萬國博覽會の催しがあつたのを機とし、酒井は明治二十二年農商務省の囑託として渡佛し、之によりて豫ての希望である、パリ遊學の志を果さうとした。されば彼はその農商務省から囑託せられた事務の停滞には頓着なく、專ら心を歐洲各國の政治、社會その他有ゆる方面の觀察に潛め、盛に其通信を『國民之友』に寄せて、歐洲各國の政治革命が一段落し、近代的商工國家の基礎が確立した後、漸くその勢力を自覺しつゝある第四階級と、その之を指導する社會黨の運動とを報道し、社會問題に對する國民の注意を喚起することに努めた。是より先、ルソー、モンテスキュー等の第三階級的自由思想を祖述して藩閥政府に對する戰の武器とした民權論者の間にも、社會主義及び社會黨に關する知識の皆無でなかつたことは、兆民の『政理叢談』に歐洲社會黨の沿革に關する記述があり、同じ頃、九州島原の江東寺で、樽井藤吉、赤松泰助等が東洋社會黨を組織したことがあり、少し遲れて奧宮健之、三浦龜吉等が東京に車界黨といふものを起したことがあり、必ずしも酒井の通信及び論文を以て、我國に於ける最初の社會主義文獻とすることは出來ないけれども、酒井以前の社會主義[illegible]要するに、[illegible]

居た竹を移したやうなもので、西園寺公はもとより、中江も、松田も、光妙寺も、西も、髙木も、梅も、富井も加藤（恒忠）も、その佛蘭西に居る間は唯亭々たる松を見たゞけで、その根にシッカリと絡み付いて居る竹は見なかつた。然るに西園寺公の信寵を受けたものの中で、酒井雄三郎唯一人は、彼地に趣いて、亭々として伸び、鬱然として『自由』に枝をひろげた松よりも、先づその根に絡んで、庭一面に蔓つて居る竹の、恐ろしい頑固な地下莖と、驚くべき蕃殖力とを見た。

是より先、アメリカでは明治十九年の五月一日に初めて勞働者の示威運動がシカゴに於いて行はれ、慘澹たる悲劇に終つたけれども屈せず、明治二十一年には、メリケン勞働聯合が更に五月一日を以て勞働者の祭日と定めた。但しそれはまだ國際的のものではなかつた。越えて明治二十二年、パリに開かれた第二インターナショナルの大會では、五月一日を以て勞働階級の國際的祭日と定め、翌二十三年五月一日第一回のメーデーがパリに於いて擧行せられた。酒井は當時パリに在りて親しく之を目撃し、直にその由來並に顛末を記述して『國民之友』に寄せた。同誌第八十八號（明治二十三年七月十三日發行）の『社會黨の運動』と同第八十九號（同年同月二十三日發行）の『五月一日の社會黨運動會に就いて』とがそれである。

是より先、酒井がパリから『國民之友』に寄せた論文では、同誌七十二號に掲載されて居る『社會問題』が燦然として光を放つて居り、第百二十三號の『五月一日及び總選擧同盟罷工』も見遁すべからざる文獻である。

かくて酒井は明治二十四年佛蘭西からの歸途、白耳義の首府ブラッセルに開催された萬國社會黨大會に列席し、各國の代表者と撮影を共にした後、英國に立寄り、日本に歸つて大道和一、佐藤勇作、上野岩太郎、小島龍太郎などいふ人々と共に『社會問題研究會』を起した。

酒井が西園寺公に識られたのはそのパリ滯在中であつたか、それとも、日本に歸つてからであつたか、何れにしても、西園寺公がその三度目の洋行から歸つたのが、酒井の歸朝と同年であつたことだけは確實である。(此項木村毅氏の研究によりて得る所多し。)

酒井が歸朝して『國民之友』に寄せた論文では『都築文學士の民政論を駁し、併せて世の曲學阿世の徒の惑を解く』といふのが頗る評判よく、今でも酒井を知つて居るほどのものは、皆此論文のことを推稱して居る。今日都築文學士と云つては知る人もあるまいが山縣有朋の秘書官で、井上馨の養女を妻として居た長閥の寵兒都築馨六のことであると云へば、中年以上の人は皆知つて居る筈である。都築は文久元年二月の生れで、明治十四年に帝國大學を出て文學士の稱號を得、翌年獨逸に留學し、歸朝の後公使館書記官、外務省參事官に任じ、明治二十二年山縣内閣の成立と同時に總理大臣秘書官となり、頗る羽振りのよかつたものである。

圏外文學漫談

露伴學人

昔より圏外の談とか圏外の説とか云ふ語が有る。或題目に就いて一愡定まりきつた談論の外に出て、しかも其題目に關聯するところのある談論をば指して言ふのである。それから又他の意味に於ては、定説正解と目されたものゝ外に出でてやゝ異なつた一説別解を立てゝゐるもので、それも強ちに壓倒し去り排斥し了すべきものでもないのを、やはり圏外の談説として容認して置く場合にも折々用ゐられる語である。今こゝに文學として取扱ふには純なる意味の文學からは少し遠過ぎるし、さればと云つて全く文學では無いと云ふべきものでもないといふ類のものゝ一族がある。それは普通に教訓書類と云はれてゐる一群であるが、所謂「教訓書」といふ名目ほど茫漠とした廣汎な意義を有するものは無く、宗教に就ても倫理に就いても衛生にも社會批評にも經濟にも家庭にも、あらゆる事象に就ての言は、皆悉く教訓書といふ名の下に[illegible]さるべきであるから、隨つて一般教訓書と云はれたものゝ中には、いろ／＼さま／＼な種類の者が包含されてゐて、これを評論する時は幾部にも分類さるべきでもあるし、又一の書であつて、宗教にも趣味にも禮法にも其他種々の點に亘つてゐて、何とも決定し難いやうなものもあるし、事實に於ては畢竟教訓書といふ名目は無意味に近いといふことを現はしてゐる。然し教訓書には相違無いから教訓書といふ名目も存し、且又徳川期に於て稱へならはされた因襲的稱呼でも有るので、今に世人の間に其名目が用ゐられてゐる。此の教訓書の一類の中には、全く文學と關係の無いものも稀には存するが、大抵は文學と關係の存するものであり、又稀には全く文學として取扱ふべきものも存してゐる。で、大部分の性質が、我邦文學と緣[illegible]た[illegible]といふやうな姿態を有してゐるので、今此の所謂教訓書類を圏外文學として想ひ出すまゝに少し談ずることにする。

一[illegible]

又は衆庶教育といふことにならう。然し普通教育等といふことになると、智的教育も當然其一半を占有すべきであるが、所謂教訓書類は其方面を受持つてゐない。普通教育の中の智的方面を受持つたのは、我邦の實際に於ては、所謂「往來もの」の類であつて、「明衡往來」の古雅なのから「商賣往來」「名物往來」の卑近なのまで、非常の多數の往來類が出來てゐて、それ等の中の古いものは今日の吾人には既に甚だ疎遠になつてゐるかはり、それによつて古の當時の狀を大摑みに想見し得るのであり、それらの中の新しいものは猶ほ吾人に容易に解釋され、且又當時の民庶がそれらの往來によつて與へられた智識の程度や品質や其智識の應用された狀態をも仔細に覗ふことが出來る。往來類は畢竟「社會事彙」であつて、勿論科學的智識を與へるものでも何でも無いが、當時の實際生活に必用な社會事相に對する智識を民衆に與へたものであつた。此等の書の類も亦文學と沒交涉とは言へぬし、末に至つては「倡賣往來」の如き遊戲文學的の怪鳥性のものも出づるに及んだが、それは極々枝葉的のことである。往來の類は社會事相に對する智識、及び少許の博物學的智識を與へるものとして、今こゝでは姑らく別途の一大群と見做して、談話の外に置くことゝする。所謂「教訓書」の中にも、やゝ智的教養の方面に傾くものが無いでもないけれど、それは強ひて談話の外には置かない。

さて我邦での教訓書といふ類の祖先は何で有らう。古今の 天皇の詔勅、要路の人の教示などは、無論教訓であるとしても、それらは詔勅である教示であるとして看度い。聖德太子の憲法十七條などは、明らかに立派な教訓に相違ないが、後世卑近の教訓書の祖と爲さんとすれば、藉りて以て誇りと爲すの强言に近い。たゞ空海の作だと傳へられてはゐるが、それは疑はしい「實語教」や、慈覺や遍照に學んだ彼の悉曇藏の撰者の安然の作の「童子教」なんどこそ、我國の教訓書の祖と云つても適當してゐるかも知れぬ。それ等の書は長く衆庶兒童の教科書として、德川末期まで用ゐられて居り、契沖が幼時、實語教を母から授けられたことなども、語り草として殘つてゐるし、又寛文頃には其註釋書さへ出で、天明頃には黃表紙にも背景的材料として用ゐられ、「山高きが故に貴からず」の一句は、明治初年まではいろ〳〵地口に使はれて、鼻高きが故に貴からずなどと、高慢な奴を罵る際に引かれなどして、凡そ德川期の雜書には此二書、特に實語教の普く行渡つてゐたことを證することは何程でもある。たゞ此書が假名交りの邦文で書かれないで、佛經の偈の形を以て書かれてゐたことが、當時に在つては多少其威光を强めても居たらうが、民衆との親しみをも沮礙したらうことは明らかで、そして我邦教訓書の鼻祖と仰がしむるには少し遺憾無きにしもあらずである。

建長頃に出來た十訓抄は、其序に見えるとほり、「古今の物語りを種として、略、少年のたぐひをして心をつくるたよりとなさしめんため試みに十段の篇を分ちて十訓抄と名づく」とあるので編纂の意は分明であり、正しく一體の教訓書であるが、後には單に物語りの類として今昔物語一系のものと看做され來つて傳へられた。然し事實を傳へて教訓とする此一流は長く教訓書類中の一體として殘つて、後の懶齋の「比賣鑑」なども明らかに此系に屬するものである。撰者は古來不明とされてゐるが、京の東山に在つて佛教を奉じてゐた隱居老人であつたことだけは知れて居り、從つて其時代の臭氣が濃く、平安朝末期の優美と懦弱の感情と思想とに支配されてゐるものであつて、教訓は消極的であり、且力弱いため、撰の本旨はいざ知らず「今昔物語」「著聞集」「古事談」等一系の書の類に列せられるやうになつたのも是非無いことであつた

後鳥羽上皇の頃、清原良業が勅により撰したと云はるゝ我邦の神託や佛託や、相將媛縣の識に至るまでの言語の集は、上皇の「これ我邦の靈語なり」と嘲せられたによつて「和論語」の名を得たと云はれてゐる。良業以下、賴朝、良季等、代々の撰者が、代々の金言を増加へ、終に[illegible]は永久から終は寛永までに至り、細川幽齋や木下長嘯子の手まで加はつて[illegible]來たといふのであるから、[illegible]まで

誠に面白い由緒ある訓言集であるが、恐らくは中世作の僞撰の疑がある。傳說の通りだとすれば、「徒然草」より前の書で、徒然草に援用された「一言芳談」は此の和論語の一系に屬する書である。「一言芳談」は邦人の訓言を集めたもので、分量は少いが佳書であり、後に至つて「俳諧一言芳談」(多く存せぬ書で不幸未讀)の如きものをも生ずるに至らしめてゐる。釋子の語を錄することが多いから、釋門の書と看做されても是非無いが、訓言集であるには相違無い。此の和論語一言芳談の類の金言集めいたものは當然大に存在して然るべきものだが、何樣いふものか我邦には興らなかつた、勿論隣邦支那でも唐の馬聰の「意林」のやうなものは然樣多く出てゐない、西洋諸國の金言集類の多いには似ずに。

座右銘、壁書の類は、元來獨自一家の自教自誡であるが、それが轉じて一般の教訓にもなる場合が存する。我邦では古く兼明親王の座右の銘、大江匡房の同じ銘から、伊藤東涯、松尾芭蕉のそれ、水戸光圀、石川丈山、白河樂翁、山鹿素行の自警、室鳩巣の自警條目、戲れたものでは山崎宗鑑の壁書の類、それ等の中には面白く且つ尊敬すべきものもあるが、惜いことには片々寥々たるもので、之を類聚したものが見當らない。心有る人が蒐集して呉れたなら、各人の心頭の[illegible]の[illegible]、[illegible]

を敢てせしめるに足るものが有らうと思はれる。然し今こゝでは話題の外に置かう。

「金持重寳記」三巻は物語的に萩原中将といふ人を點出して、處世の教訓を説いてゐる。今記憶が朦朧としてゐるが、中々佳いものであつたと思ふし、且又作られた時代も可なり古いものと思ひもしてゐるが、足利義政の撰だといふ傳は信ずるに足らないし、それほど古いか何樣かも疑はしい。然し此類の書の中では古いものに相違無いし、何々重寳記といふ一類の書の源頭でも有らうか。但し却つて何々重寳記といふ類が行はれてから、後人が此書に金持重寳記の名を負はせたのかとも思はれぬでも無い。が、「人鏡論」といふ名も少し事々しいから何樣かと打傾かるゝ。

撰者も刊行年月も知らぬが、松會開板の「女鏡秘傳書」は婦女の教訓書である。文辭も古く、所說の意趣も古い。およそ德川上期の上品な婦女は如何樣であるべきものとせられてゐたかを窺知るべきもので、今日となつては文明史料的に價値あるに過ぎぬが、中々興ある節がある。女たるものは、「聲をば壁より外へもらすべからず」と如何にも內端なるべきやう敎へてゐるかと思へば、「ありきやう、うしろへ少しそりたるていが好し、俯向きたるはよろしからず」と特に敎へてゐるのは幕末とは少し異ふやうだ。「羽二重は地の薄きはあしし」といひ、「唐織はこはゞりて惡し、紗綾はいやしきもの也、さりながら染の模樣によりて宜し」などゝ云つてゐるのは、大分に今の人とは趣味が異なる。綸子や縮緬を宜しとしてゐるが、「緋縮緬のこと、いやしきもの也」と云つてゐる。帶のひろさ、「およそ二寸九分たるべし」とあるのなどは、時代によりて服飾の趣味の如何に異なるかを語つておもしろい。子の出來ぬ人に對して、婦人の食し難きものながら「牛を粕漬にして二十日ほども續けてまゐり侍らば必ず子出來るものなり」などゝ食肉を勸めてゐたり、饅頭に「これも汁などつけ候事今はまれなり」と古今の變を語つてゐたり、食饌の事に關しても面白い記事がある。「麝香はしたるくて宜しからず、かけ籠など匂過ぐればいやしきものなり」などゝ云つてゐるのも、大分幕末より立優つてゐる。言辭に於ても、「ばしなる小袖は必ず見ざめする者なり」とか、「言葉多きは濫りも多く、ばし也」とか、今の普通辭書には見えぬ「漸々」「浮世」といふやうな意の語や、「ばし」に反對の「しん」や「樣子」といふやうな意の「はい」といふ語や、時々は今の耳に遠くて、されぱと云つて平安朝臭氣とも思へぬ語が見える。衣類の「しま」といふ語も今は間道を云ふのが常であるが、此書の中に「しま」と云つてゐるのは間道柳條の類の義では無くて、庭の島の形の義であつて、「地、萌黃、櫻、島にたんぽゝちらし」などゝあるので、判然と別の義である。然し雅考

に資するところは少くないが、文學的に兎角をいふべき書では無い。たゞ後の教訓書類と云はるゝものゝ中に此書の系統の如き者も少くない。貞享三年板の梅塢散人の「婦人養草」十卷などは、所說散漫蕪雜ではあるが、聃の後の周を出したものとも云はゞ云へる。此書の體裁は先づ能く整つてゐる。

中江藤樹の撰と云はるゝ「鑑草」六卷は、孝と逆と、守節と背夫といふやうに、それ／＼の報のあることを擧げて訓戒し勸奬した書で、勿論いやな書では無いが、衆庶を敎ふるの言とは云へ、報果を主とした言は、人を導いて道に入らしめんとするの念の切なるためでは有らうけれど、功利的に傾いてゐて、卷々に何の報、彼の報とあるのが、先生の著としてはあき足らず思はせる。且又立言純粹ならずして、佛法道家の談を採らるゝこと多く、三世因果の說や鬼神の施爲の迹を談ぜられるのも奇異に感ぜられる。卷一に、鄭邑の農の支祉宜が妻の喩氏、前世惡逆の報によりて雷に擊たるべき筈であつたが、孝德にあつたによつて、梓潼帝君のはからひで、これを免れ、同郡の淫婦馬氏が代つて雷に擊たれたことを記してあるなどは、奇異である。先生が前世因果を信じてゐたのか、又梓潼帝君即ち文帝は支那では大層信じられたものだが、先生が支那かぶれして信奉せられたのか、又たゞ勸戒の材として用ゐられたまでなのか、いづれにしても心得がたい。凡そ記事の後には必ず評論訓誡の文があ[illegible]三部經などを引いており、卷三には、唐の胡亮の妻の賀氏妬心甚しくして夫の愛妾を燒け針もて盲目とならしめて遂に死せしめたれば其怨念によつて自身が盲目の蛇を産むに至つた談などを載せてあるのは、餘りに甚だしい。先生が初めは佛學などせられたことは先生の「翁問答」の序にも見えてゐるが、鑑草は未だ深く佛を非とせられぬ頃の撰であるか。卷四に「もとより三敎ともに明德を明らかにする敎なれども」云云とあるところを見ると、當時三敎一致の思想に立つてゐられたので、其大體の調子合は袁了凡あたりの行きかたでゝもあつたやうに思へる。

此書を讀んで心づくことは「心學」といふ語の數々用ゐられてゐることである。心學の語はもと先生の言出された語でもないのではあるが、卷四「儒道の心學とのみ論ずる也」「儒道の心學を敎へ、ひたすら明德を明らかにする工夫を勵まし」「二程をつかはして心學を受けしめたまふ」など、度々心學の一語を提出されてゐる。程朱陸王の論心の學に先生の負ふところが多かつたことは明らかであるが、後の教訓書類中に一大流を成した石田勘平以下の「心學」一派は、ひそかに思ふに先生が提示された「心學」の一語に眼を醒かせられたのではあるまいか。熊澤了介の「五倫書」には「心學五倫書」とあるが、其の心

學の二字は書林の妄添かも知れぬけれど、程朱の學は足利期から傳はつたにせよ、心學々々と唱道されたのは蓋し先生からで、翁問答にも、卷二に「眞儒の心學」卷五に「心學に志しあるものは名をすつるほど氣隨のおごりなく」「心學は凡夫より聖人に至る道なれば」などゝ心學といふ語は多く提唱されたのである。石田手島の輩も程朱の膚淺のところによりて俚俗の間に心學一派を成したのであるが、先生の提唱に啓かれたるところが無いと云はれうか。それにしては又彼等の中江氏を稱すること何ぞ少きやと云ひたくなる。

「翁問答」に至つては普通の教訓書と云はうよりは、今一段進んだ際のもので、儒家者流中の一家の言と云ふべきものである。卷四に於て大に佛を排してあるところの如きは宜しいが、先生が後に、「問答の中、儒佛を論ずるところの如き、今是を讀むに其理精當を得ざるを覺ゆ」と云はれたといふ。圭角は有りながら謙遜の深い先生のことである、先生の學は此書によつて盡されずとも、此書によつて先生は窺知るべきである。

熊澤の「五倫書」は明德、誠、敬の三條を主として說いて、從つて佛を排してゐる。「教經外傳或問」四卷は配所のかたみに撰されたもので、孝道を說いてゐる。一體中江藤樹からして、其學風は心を主とし、事迹訓詁は二の段にも三の段にもするのであるが、然も「易經は簡易玄妙にして凡夫の取入りなり難きによつて孔子孝經を作りたまひて賢聖凡夫通學の眼を定めたまふ」と藤樹も說き、且又藤樹先生は實に孝子であつた。で、其學を承けたもの、孝道を主とすることは自然の勢ひであつた。で、孝より禮に及び、音樂に及び、音樂を論じたところは、撰者が嗜好を有つてゐたゞけに、聽くに足る有るものが多い。「集義書」の如きは普通教訓書よりやゝ高いから、今談外に擱く。

鑑草に對比して擧ぐべきものに藤井懶齋の「比賣鑑」がある。婦人の爲にした撰であるが、その述言の部十二卷は興味が薄いとて餘り人に讀まれず、紀行の部十九卷は周大任以下和漢賢女の事蹟を集め記したので興味ある讀物として世に珍重されたものであるが、撰者の本意はもとより述言の部にある。大旨は儒教の正道によつて、卷十一の如きは諸神の託宣を引けるありと雖も、それは藤樹が佛說輪廻の談を引けるを忌まざる如くで、却つて懶齋の人を導びくに急なるを感ずべきである。但し懶齋は懶齋で、訓俗の書ではありながら、毅然として俚俗の習を破るに勇なるところがあつて、卷十二の如きは佛法信仰の世に在りて斷々として之を排斥してゐるのは、流石に古儒の眞骨頭を存して世の僞にするの意氣が見え、此時代の書としては有り難いことである。淫祠妖怪などに就ても、怪を見て怪とせざれば其怪おのづから破るといふ立場から、俗の迷妄を破してゐるのも亦得て妙である。婦

女の讀みものを論じて、卷十に、「伊勢源氏やうの物語は言葉を艶に情深くは云つゞけたれど大方情欲のことのみにて、まことしき教の意はなし、源氏は天臺の教相にて作れりとは云へど、さらばなどかかこつけずして佛の道をば說かぬぞや」と、中古以來の公卿歌人どもの伊勢源氏崇拜の俗說を一破りにしてゐるのなどは、俗耳を警醒してゐる。今日から云へば頑固的であるけれども、三十一卷すべて其の立意存心の嚴貞なるを窺ふべく、殊に當時の婦女に取つての良教訓書であつて、「壺のいしぶみ」などの及ぶべきでは無い。さればと云つて佛を排しても、睿然の母や惠心僧都の母などの事は擧げて之を忌嫌はず、本願寺顯如の母が「智者心靜なれば物を照らす、愚者は心しづかなれば居睡るなり」と云つた片語の善をも容れ、「俊頼髓腦」の如き瑣末の歌學書から忘草紫苑の談をも取り、「和論語」の如き覺束ない書から讃岐の言葉をも抽き出し、隨分と心廣く筆まめやかに勞を致して倦まずに、「東鑑」の舞女微妙を評して、「其の事をなせるはあやまれり、其志はまことあり」とせられたる類、なさけある取扱ひをしてゐられる。寛文から貞享元祿を經て、正德まで、歲月かさなりて此書が世に出たのを見れば、當時に在りても江湖に鑑賞せられてあつたらうし、それも道理であると思はれる。「女四書」の和譯が明曆に出で、「智囊」の拔萃書類の如き「智惠鑑」が萬治に出たのは此書と關係があるか無いか。

「婦人養草」は和漢の事を雜然と記したれど、撰者の見識も學問もいまだしきところがあるもので、本は美本だが少し口惜しい。七人の子まで生したる婦が、犬の爲に夫を殺す談などを記してゐるのなどは、現實主義などゝいふ人には悅ばれるか知らぬが、筆墨を用ゐるに會釋無きものである。草双紙の一休物語は此書の記事によりて立案したでもあるまいが、一休の母が、、、、としたことを記したり、謠曲の白樂天と住吉の神との問答の事を擧げて、それは甲午の日なりしと記したりしてゐる。隨分種々の雜說俗傳、天竺摩訶陀國善財王の九百九十九人の妃が赤い猿になつて熊野の本宮の赤坂にまします、といふが如き古淨るり、巫覡の徒の談をも載せてゐる。第四卷に、京東山獅子ケ谷に鬼子が生れたのを横槌で打殺したことを記してゐるが、鉾楯といふのは元來は横槌の事であるからをかしい。又卷三に、古き詞に綱引といへるは嫉妬なり、と云つて、綱に羊の寄つて來ることを云つてゐるか、名高い戲曲の「獅吼記」に、陳季常の妬妻が夫に附けた綱を引いて羊の寄り來るに會つた事を知らずに暗合的に記してゐるのもをかしい。すべて取材が兒戲的拉雜だが、考證傳說めいたことも間々見え、時に變挺な事を記してゐるに、是の如き雜書で、婦女へ物語りに一番ひ立てられては、大變な者も太刀打はなかなかならぬことになるであらうと斷ぜられてそ

めさせられる。

「婦人養草」と殆と近い年の元祿壬申に「婦人壽草」六卷が成つて居る。香月貞庵といふ當時の立派な醫家の著で、婦人衞生の書で寶永に出たが、此は教訓書とも云難く、又文學にも交渉は無いけれども、松永彈正の振り藥、赤井惡右衞門（戰國時代の勇者）の龍王湯が、いづれも産婦の妙藥であることなど、一寸劇的史的人物に關して面白い記事である。神功皇后が筑前糟屋の蚊田で御産あらせられた時、槐の樹に御手を掛けたまひて即ち御平産になつたとの「愚管抄」の記事を擧げて、槐を國俗「子安の樹」といふことや、「子母秘錄」の所說の其事に符合することや、明の李日華（西廂記をいぢつた李日華や紫桃軒雜綴の作者の李日華では無い、本草家の）の說に、槐實五六粒、催生の藥となるといふことのある事を擧げてゐるのなどは、博識の此人ならではと敬服させられる。が、要するに普通教育的の婦人科若くは産科の舊書で、教訓書では無い。

元祿六年に「散人夜話」一卷が出てゐるが、撰者を知らぬ。儒を尊び佛を排け、不學をいましめて居る問答體の書で、所說に精粹の處は無いが中正を失はない。同じ十三年に「堪忍記」八卷が出てゐる。撰者は知らぬが、これは和漢雜聞を集め記して堪忍を主と說いてゐる。卷二に、人の居るところにて金を盗みにかゝりて捕へられ、おのれは何とて傍に人のあるに金を取りけると詰られた時に、盜人答へて、それがしが目にはたゞ金ばかり見えて人は見え申さざりきと云つたといふ話が載せてある。これはたしか列子の說符の篇に出て居ることで、しかも列子が昔齊人ありと書いてゐる位に古いことだが、後に從つて幕末頃の小學などの書に、やゝもすれば此話が出て來る。此細の談も其中に妙處が有ると、上下二千年東西千里も隔つて猶且つ存在するかと思ふとをかしい。蛇が物を消す草を用ゐたるを見て、其草を蕎麥を大に喰ひたる後に用ゐて、其人消え、蕎麥のみ遺つたといふ談は、徳川末期の笑話の書にも出で、明治の頃に落語家からも度々聞かされたことだが、其草は金剛透山根といふもので、支那の雜書から出た談だらうが、此書に見えてゐる。此樣な事も何百年か傳はつたのかと思ふとをかしい。六、七、八の末三卷は女鑑で、全體粗本であるが、可なり人に讀まれたらしい。同じやうなもので「金玉ねぢぶくさ」八冊又「金銀ねぢふくさ」ともいふ、章花堂の撰は、「金玉は人の愛するところ、ねぢふくさ（巾着の類）の如く常に之を懷にせば不時の備に便あらんか」と云爾などと、自序にある如く、珍らしく怪奇の談を盛つた小說めきた大に行はれたものである。怪談全書やうのものは元祿前後一トしきり流行したことを語るもので、此中の讃岐宮崎の山の[illegible]の談、曾我五郎が武田信玄と轉生した談、[illegible]の長命の談などい

づれも猥な話である。細川の血達磨の談は小說、講談、演劇にも出て、昭和の今にも遺つてゐるが、此書に出て居て、幽齋公の時の事となり、且又それは馥の兄弟の事で、同性愛の事にはなつてゐないのが、後人の傳ふるところとは大に異なつてゐる。一々教訓の談があつては一條の物語を記してゐるのだから、教訓書でも有らうが、其の人に讀まれた所以は詭異の談が文學的に興味を供したからであらう。「比賣鑑」をいへる條に「つほの石文」の事を云つたが、右二卷は元祿十一年の刊で、氣取つた擬古的文章で、力めて上品に書いたもの、源氏の紫上、浮舟の君などを例に引いて、女子に婉淑ならんことを求めた教訓書であり、刊刻の書體なども宜しい。下卷は達意に急になつて詞章の彫琢に暇が無くなつて、却つて宜しいものなどもをかしいが、著者の意はすべて所謂上﨟めかせんとにある。

「鑑草」が行はれたからであらう、「新鑑草」五卷が寶永八年に出てゐる。鑑草と同じやうに漢土の雜書によつて雜話を傳へ、聊か教訓を添へてゐるが、引用の書も僅ならず、一體が鑑草には遙に劣つて、加味の無いものである。

「いさめ草」四卷、撰者を知らぬが、寶永三年の板で、太極の、明德をのと、太極より說を立てないで、却つて親疏の處より說を立て、一方說にして[illegible]

へたる意、世態人情に通じたる[illegible]が、人を啓發するところはある。「一藝能つかんとする人、下手どは内にて人に知られず能く習ひ、扨上手にもなりしさし出でんと思へども、然樣の人は一藝も習ひ得ることなし、初心の内より上手の中へ交はりて、譏り笑はるゝをもかへりみずして好く人、年を重ぬれば天性と上手の位に至りて名を得るものなり、初心の内は藝にはぢざるが第一の秘事なり」と云つたやうな調子だが、此言の如きは實に實際的の好訓言である。「人間の一生は雜事の小用にさへられて彼是と取紛れ、空しく暮すものなり、一生の内何にても一願果すことせざるものは此世へ生れても德無き人と思ふべし」とあるが如きも人をして省みしむるものである。時に消極的に傾くのは此類の書の免れ難きところであるが、先づ啓蒙の良書である。

正德三年、高根忠丈の「日用人道記」は「鑑草」「翁問答」の類でもないが、儒に依り佛を排し、やはり「心學」沙汰を口にしたもので、心學呼はりが早く石田手島の號より前に引續いて行はれ、堯舜の心法授受をいふ宋學の系より出てゐることを語つてゐる。中卷は常識に訴へて佛教の虚妄を駁し、下卷に至つては[illegible]の道を[illegible]き、文公家禮に本づきて式を立て、喪祭の儀を示さうとしたところに[illegible]より[illegible]

ある。何の程度まで當時の人に受取られたか、餘り歡迎はされたかつたに疑ひ無い。

寶永正德の頃に於ての教訓書の偉大なものは、何と云つても貝原益軒先生の「大和俗訓」「童子訓」「初學訓」「五常訓」「家道訓」等である。先生の著述、其の膚淺なるを言ふ者あれども、先生が寬厚の懷、親切の情、つとめて民庶を教化せんとして、俗談俚語を以て、平明懇篤に各種の書を著はされたのは、淺近やなんぞの評語を以て之に加ふべきことでは無いので、「俗訓」の成れる時は寶永五年、先生七十九歲、名利の心などは誰しも薄らぐ年である、先生の孜々として筆を役し稿を屬された所以は、全く人を導き道に入らしめ、世を教へ化を輔けんとの高い篤い心事から敢てせられた事を知るべきである。其心より出た教訓である、中正であり雍雅であることは勿論で、感謝すべきものであり、實際に人を益したこと多いものである。此等の書は今猶ほ時々に新刊せられて、其溫光と和氣とを放つて、暗き人を明るく、冷い世を暖かにして居られるから、こゝに讃辭を妄發せずとも世間に自明已證されてゐる事實である。朱子の小學を編られたのは五十八歲、來者を覺さんことを庶ふの意甚だ切にして、平易簡明、躬行實踐底より道に進み德を立つるに至らしめんとての撰で、幼稚をして講じて而して習はしめんとするのである。益軒先生は朱子の此意を體して、壯年の時に蚤く「小學備考」を撰し、晩年に於て自ら意に滿たざるところあるを以て、補正訂正して「集疏」を撰し、八十五歲易簀の後、門人竹田定直之を成就して世に公にするに及んでゐる。定直が松岡玄達に與ふるの書に、「先生の心を用ゐる、小學及び愼思錄に在り」、と云つてゐる。先生が是の如くに「小學」に心を用ゐられたのに照らして考ふると、先生が「俗訓」等の書を撰せられたのも、即ち是れ朱子が幼稚の爲に小學を撰した心と相通ずるものがあつて、まことに童蒙凡俗のために、「其習と智と與に長じ化と心と與に成らんこと」を欲せられたことが知られる。俗訓自序に「世の中の夫婦の愚なるもあづかり知らしめ、兒女のいとけなくて菽麥を辨へざるをも喩さんことを希ふのみ」と云はれたのに一毫の飾りも僞りも無い、全く大人の仁心、世の爲にするの赤誠より特に俗文俚語の書を撰せられたのである。先生は實に好箇の民衆教育家であつたのである。

山崎闇齋の「大和小學」、辻原元甫の「大和小學」二部同名だが、辻原のは朱子の小學を和譯したので、闇齋のは小學の篇目に依つてはゐるが、朱子のゝ和譯では無い。小學の事を語つた次に云出したが、いづれも單に教訓書たるに止まる。

撰者は知らぬが、享保二年の「禮容筆粹」七卷は武家の諸禮を教へたもので、丁度前に擧げた女鏡秘傳書に對するやうな撰である。「諸禮

大成」と柱に見えてゐるから、それが初版の名かも知れず、享保より以前の書らしい。古い書の刊行歲月を奧付に據つて定めることは危いことで、書名を勝手に變へたり、奧付を其時の板の如く粧ふたりすることは古板の書を讓り受けた場合に、新らしい書估が敢てして憚からぬことであるからで、柱書と外題との相違した書などは注意する要がある。器物の扱ひ、文書の事、飲饌の法、萬般に渉つて記してあるから其時代の生活樣式を覗ふに足るもので、隨つて時代の言辭なども、此書によつて味はひ解するに足る。食饌の事で例を擧ぐれば、雲羹、鼈羹、生飯羹、むし麥・摺子、切子の類の如き、今日からは大分耳遠くなつてゐることが多い。酒の飲みやうにせよ、本をへだつ、御流、大流、召出し、咎おとし、御通り、中飲と云ふやうな言葉は、今では殆んど忘れられてゐる。食物にせよ、臺の物、折、冷しもの、おさへものなどの中、臺の物だけは近くまで遊廓に殘つてゐたが、冷し物となると、夏の夜や崩れて明けし冷しもの、といふ芭蕉の句に出會つても、冷しもの〻御馳走になつた覺えが無いから、變な解釋をして自分で紛らかす自分勘辨の解をするやうになるが、「冷しものは大酒の上、今一獻などゝ強ひて盛る時の事なり、尤も春より秋までは一トしほ其巧あるべし、時の機嫌第一なり、[illegible]、[illegible]、慈姑、[illegible]、[illegible]、[illegible]、菓子などの類を當の後に一ト出すべし」とある[illegible]

とする。別に面白くも無い作法を記したゞけの指南だが、中に當り流行[illegible]してゐる世であるに關らず、泡茶の不躾しを非として、「一流法を亂る、もつとも宜しからざる次第なり」といひ、これ「武將智士の爲すべきことにあらず、是非爲んとならば必ず古茶碗などの類は用捨ありて可ならん」と云へるが如きは一ト見識があつて、古へに於ても泡茶不躾しを喜ばざる人があつたことを知る。婚禮の床盃を伊勢貞丈だつたか罵つてゐるが、床盃や飲延しは俄に陋儀で、儀とも禮とも云ふには足らぬものである。貞丈一派の式法禮儀の書は專門にたるから、今は擧ぐるに及ばぬ。井澤長秀の「男子訓」五巻、享保四年板は、武士教訓だが、此撰者は種々の著述のある人である。當時では眞面目な書であつたらうけれども、今日からは隨分をかしいことが多く記されてゐる。撒ガス砲の如き[illegible]砲といふの事を記して、[illegible]の粉末を丸にして、取籠り者などを擊つと、藥氣に嗅んで氣絶するところを容易に取つて押へるなどゝあるのは、讀んでゐてをかしくなるが、撒ガスなどゝいふのも歲月が過ぎたら其馬鹿げさ加減は此と同じ事になるだらうと思はれて、昔時に在つては此等これも[illegible]たつたらうと[illegible]する。が、いろ/\をかしいことが[illegible]七[illegible]に[illegible]

手練で乘り出つた、といふ記事の如くに人を慾ぜしむる記事は少いのを憾とする。

「町人袋」五卷、「百姓袋」五卷、享保年間、長崎の西川求林齋の著で、大分持囃された書である。町人袋は町人の爲にしたものだが、雜駁な事を記してゐる。卷一に、「末代の町人、手黑をもつて人の目をくらまし、いゝかいかい、しめ買すめ買の類、これ皆天下の蠍蛇たり」と物價を自由にせんとするを罵つてる。卷二にもしめ買すめ買の事を云つて居り、人情の惡化を云つて、後醍醐天皇の賢臣藤房卿のゝたまひしは、「末代の人は借物を主に請はれて怒ることになりぬ」と云つてゐる。流石に長崎の人だけに、ペリウ國の語は支那の如くに訛語であるなどゝ談じ、又長崎方言を考へたりしてゐるが、すべて一部雜然として取留が無い。「百姓袋」も同じやうな行き方にて、教訓書ながら、たゞの隨筆の如くである。これにも印度のモノモタハ國の學問禁制の噂、東京、交趾、カンボチヤ、占城、臺灣、暹羅、ジヤガタラの米は皆たうぼしなることなど、外國の談を載せてゐる。隱簑の童謠の解、童幼の旅籠問答の解などをしてゐるが、山崎宗鑑が日に十二文で生活した事まで論證してゐながら、其問答中の、がんざからがきの解はしてゐない。學問も有る著者には疑無いが、ふしぎに取留の無い隨筆的のもので、綿の事、綿弓の事、鋌の事などを記してある條が好い位のものだ。

上梓したのは天保七年だが、享保十七年四月に著されたといふ伊勢の藤堂家七郎良躬の母のらん子が、其の女の須賀子の嫁入に際して自分の胸中の蘊底を盡して、舅姑に事へ、夫に事へ、下々及び一門の間に處する道を教へたる「もしほ草」一卷は、まことに佳きものである。嵐子は如何にも聰明にして操守ある賢良の婦人と思はれて、生物識の教訓書などの到底及ぶべきでない立派な教訓で、平易の文章、飾り氣も無いけれど、能く其の言はんと欲するところを言へる工合、文もまた能文とも云ひつべきである。女訓の書は多いが、其の正しいものは空疎で實に遠く、やゝ世相の眞を解してゐるものは邪誕に近く、或は細膩になつて終ふのが常であるのに、此書の說くところは正々堂々として、而も婉順におつとりとせる中に、智慮を含み、謹愼周到、能く自ら守り、兼ねて人に接するの道を說いてゐるのは、感服のほかは無い。今日から論じたら兎角の議もあるだらうが、當時に在つて能く時勢世態に順應して而も守るところを失はざらんとせるの心を吾が女に教へて委曲を盡してゐるのは嘆服する。藤堂の分家の室で、藤堂靱負の女であつた嵐子は、もとより下ざまで無いものであるから、閭里の瑣事に親しんだ人でもあるまいが、心いたりの深く細やかな人であつたと見え、說くところ甚だ克く人情世態の核心に觸れてゐて、しかも之を智解的に發せず、具象的に述べてゐるのは如何にも良質であ

る。それとも筆者の嵐子が藤堂侯に希世の才と賞められたほどの勝れた婦人であつた故のみならず、其愛女が他家へ嫁ぐに際して純粹な母性の至情至愛からして與へた文である故に出でたことであるだらう。かいなでの女訓書などを讀んだ後に此書に對つた時は、蛙鳴蟬噪に倦んだ後に歩を移してたまたま好鳥の聲を耳にし、怡然として喜びを覺えたやうな心地がした。

「冥加訓」五卷、享保九年、關一樂の著は、普通平易の教訓、「家內用心集」、同十四年、頓宮笑月の著、實際的で元文三年の同人の用心喩草三卷、同じく訓蒙の書だ。野總茗話四卷 同十八年、常盤貞尚の著、これは通俗講演でもして歩いた人の談か、卷三に、「俚語に心に知りて身に行はずといふは耻づべきの一言なり、心を修めんよりは先づ身に行ひたまへ」とあるのも一ト風ある教で、卷一に「愼んで小孝を怠りたまふな」とあるのも面白い。卷一に、「向後理をやめて道を心がけたまへ」とあるのも妙處がある。京阪の方で心學者流の起る前に、諸處に是の如き講說家があつて教訓をして歩くことが有つたのではないかと思はせられる。

「百福談」五卷は青路館の作で、百物語の怪談の反對に、甲子の夜に福神を祭り、人々が福を得たる物語を一條しては燈心一筋づゝ[illegible]に傳へるといふ趣向で、[illegible]

卷二の強盜が心を開發して大儒になり、難波道[illegible]に値するに至つた談は、事實か作意か、いづれにしても一寸面白い。元文二年の都隱者の「渡世傳授車」五卷は、卷四までは小說體で、紀文が大利を大火に得たる談、智惠伊豆が大石を埋めた談などを様子かはりて記してある。卷五に至つて、秘傳の卷として、「佛神の惠にあふ仕様の傳授」「福貴になりやうの傳授」「惡事災難來らざる仕様の傳授」「壽命長久の仕様傳授」等を記してゐる。これは後になつて心學者流の脇坂義堂の「孝行になる傳授」「長命になるの傳授」「銀のなる木の傳授」「開運出世の傳授」「安樂傳授」等の澤山の著の先をなしたもので、義堂は明らかに都隱者の智を襲ひ掠めたものである。都隱者は筆才も亦中々人後に落ちぬのである。

元文四年に至つて所謂心學一派の源頭をした石田梅巖の「都鄙問答」四卷は世に出た。心學といふことは朱子の學風をさして他より心學と云はゞ云ふべきである。又心學と云ふ語は我邦では藤樹先生あたりから數々稱道せられてゐること前に說いた通りであるから、梅巖一派の專有物などに云ふべきではない。然し都鄙問答の卷一に「心を知るを學問の初といふ」「萬事は皆心よりなす、心は身の主なり」「其主を知りする教たるを[illegible]などゝあるので、梅巖一派の學を心學といふこととも[illegible]

とも甚だ覺束ない。四卷ノ所說を見るに、宋學性理の說と禪法神道の談を雜糅攪拌して、世俗の合點の行くべき譬喩論辯をつなぎとし、一家の學らしく捏上げたもので、これといふ確かなところも見受けられず、別に特殊のところも無く、酷評する人にあへば、不純未精、半吞半吐の駁雜淺薄なものに過ぎぬと云はれさうな心配がある。但し流石に流祖の書であるから、後の心學者流の滑稽辯才を以て僅に讀者を得る道話などとは異なつて、眞面目なものではある。が、それだけに又鳩翁や松翁が人を惹きつける所以のものを缺いてゐる。けれども世態俗情を云ひ一竅に中るのは、此流の人の長處で、尋常一様の記誦詞文の學者が、むづかしいことばかりを云散らして全く民庶と沒交涉でゐるのを「文字藝者」と罵り、聖賢の學を町人農夫にも親しませ近づけようと、俗人の急所へ中てて說き教へるところには妙處がある。梅巖の得るところは了雲に發せらる。孔孟を口にするも、三教一致の亞流であつて、宋學に依傍して、心の一字に老佛神道をも攝取し去らんとしてゐるのであるから、卷一に見えてゐる通り、當時の儒家などからは異端俗教と目されても止むを得なかつた事だらう。延享元年にこの人の「齊家論」二卷は出てゐる。大旨儉約が齊家の本なることを說いて居るが、流れて種々の事にわたり、間々自己辯護の言も見えてゐる。儉約は結構だが、儉約の序といふ文の如き、箚際に貼くやうの語なれど、散漫にして本旨徹らず、混淆して取止めがない。要するに心學者流の說、氣象迫窄して開豁爽朗のところ少く、人を卑小にするの弊は無いでもない。梅巖も堵庵も心學者流は皆大乘的の說をなしてゐるが、小乘根器に對するの教で、惡く用ゐられたら鄕愿をつくり出すやうになるおそれがあり、又一變しては小理屈馬糞悟りの徒をも出すやうになるおそれが有りはせぬか。梅巖といふ人は好い人だが、每朝天照皇大神宮を拜してから、次に竈の神を拜し、それから故鄕丹波の氏神を拜し、次に孔子を拜し、次に阿彌陀、釋迦を拜し、師を拜し、先祖父母を拜したとある。禮拜はすべて敬虔の心の發露であり、竈の神を拜するのなどは支那日本の古俗だが、奇でないことも無いし、孔子を拜しながら、棄恩の道、君臣父子夫婦を破るの道の釋迦を拜したのも異樣であり、佛徒でも釋迦を拜する法華宗は彌陀を拜せず、彌陀を拜する門徒は釋迦を拜せぬのに、兩方共に拜するのは異樣で、駁雜の信である。米洗水は器に貯へ、いさせて鼠の食とし、釜肌は湯にして飲み、焦つきは雀鼠に與へ、汁椀汁鍋の類の汁盡きた後は茶を汲入れて洗つて飲んだといふし、煙草、薪の拔ひも甚だ細かく、釣瓶の古繩、帚の古緣までも利用を忘らず、髮は自ら結び、元結を幾度も用ゐたといふ。斯樣いふ人であつたとして其著并教說を考へると、石田氏の人格と心學の教說と互に相償らざるを知るのであるか、人は或は又

これによつて小學を好まぬのである。そして小學の極致が禪宗の如く見性頓悟によつて得らるゝに在ることも、高きが如くにして實は異端に墮してゐると一種の人には忌まるゝ所以である。樹蔭の林雀の聲、其弟子木村雨光の「はつといふ」の歌の如き、禪家常套の談である。然し心學を卑視し異端視する者の有無にかゝはらず、樹蔭ありてより流風今に至つて猶存するのであるから、心學も亦永いこと世間の或要求に應じたものであつたことは爭へない。

元文五年には「女節子訓翁草」四卷が竹田春庵の手によつて草されてゐる。春庵は貝原先生の弟子で、春庵此時八十翁であるから、全く世の爲にしたものである。一部都べて是質率無飾、文章もおちつき、立意も誠篤で、貝原先生一流である。求林齋の書が貝原先生と交渉あるやうにされてゐるが、それは不慥で、其の書は益軒先生の風ではない。春庵は蓋し小學集疏の撰者完顏の雅號であらう。書中に香月牛山の「婦人養草」「小兒はこくみ草」の作者なるよしを云ひ、「老人養草」のことを云つてゐる。小兒老人の爲めの二書は寓目せぬが、女子の讀むべき作書を推薦してゐるのは、無私の嘉言である。北村季吟校正の「女艶花」藤井懶齋の「國字百首」を推薦してゐる。源氏等の物語を評したために、兩書の名の識か二ヶ條あるも、勿論道學先生的の評であるが、[illegible]先生の眼に[illegible]ることは[illegible]

ある。

寶曆は二年の春、京都の靜觀房好阿の著の「當世下手談義」[illegible]出た。これは一風吹起した有力のもので、用筆も達者なれば着眼の點みも利いた作であり、八文字屋の調子に談義僧の能辯の調子を交へ、教訓物と浮世草子の間を行つて、著者が意識して斯せぬで斯は知らぬが、言はず語らず自然に當時の「社會觀察ならびに其批評」とも今日の言葉でならば云ふべきことをしてゐるので、それが大に其時の讀書界に震動を與へて歡迎され、又評判になつたことは疑ひ無い。其證據は直に其年の秋八月に江戶で、伊藤單朴の「教訓雜長持」五卷が、すべて同じやうな體裁と行き方と調子合で發行され、しかも其序文に「下手談義を讀みて、いざや西施が顰に倣ひて」云云と記してあるので明白であり、京都では追掛けて其同年の中に「教訓續下手談義」五卷を同じ靜觀房が出してゐるし、四年には單朴の「銭湯新話」五卷が出され、七年には單朴が又「教訓差出口」五卷を出し、爾後明和安永天明頃にわたつて同じやうな體裁行き方の書が中々出てゐる。一面には中には益軒先生の諸訓の如く純粹の民庶教育の書もあるが、小說隨筆の氣味があつて、文學に跨つたやうたものゝあることは前に擧げた如くであるが、下手談義以後、これ等の一ト[illegible]若しく[illegible]になつて[illegible]

て人を惹付けるところ、一種の變態的教訓書」であると同時に一種の「圏外的文學書」の一群を生じ成すに至つたと考察されぬでも無い。扨又一方には世俗の心的要求が發達して行くに際して、石田勘平によつて起された心學が行はれ、それが漸次に流布して一般的になり行くに連れ、心學の方も、興味を以て迎へられた教訓書、圏外文學の影響を受けぬ譯にもゆかず、自然と其氣味を微漸的に取入れて、興味ある講說、世相の穿ちを含んだ教訓を世に提供するに至つたことは、梅巖の著は皆眞面目で堅いのであるが、手島堵庵以後は次第次第に俗的興味の增加し行つたに徴して知られる。たゞ其の異なれるところは、一方が八文字屋風の俗の文學歴史的文章體を存して居て、云はゞ曲りなりにも文章系のものであるのに、心學ばたけのものは談話の形を取つてゐるのであつて、此點で教訓物の方は時代に取殘されて早く衰へ、心學ものの方は松翁鳩翁まで大に榮へたのである。心學ものゝことは後に語るとして、下手談義の方を語らう。

談義の著者は洛陽沙彌とあり、西向庵好阿といふのだから、頓の談義僧めいてゐる。「時是れきさらぎの末、空の氣色いとのどかに、見渡せば爺と婆ことをこきまぜて、都の春の彼岸の中日、寺町通りは門並に說法談義の花ざかり、」かういふ文體で中々筆達者だから、八文字屋系のものであることは爭へず、序の中にも一具を教化の謀物に比せば、貝原先生の「大和俗訓」「家道訓」は、むつ〳〵おく〳〵として[illegible]上々の能化談義、自笑其磧が「娘形氣」「息子形氣」は表に風流の花をかざり、裏に意見の實を含み、見るに倦まず聞くに飽かず、是ぞ當世上手の所化談義に比すべし」などゝ云つてゐるところ、自然に叶譜の成立の二元素を語つてゐるのもをかしい。卷一には富士と淺間の間の横走りの道にて工藤祐經の靈あらはれて、前句付の點者で、もとは馬の脚役者であつた者に、狂言の論を聽かせるといふ趣向で、曾我の狂より續いて演劇の批評になり、「心中して死んだ馬鹿者共を數へあげて年々に仕組む故、近年又此病再發して所々に心中の沙汰あり」といひ、「さる程に堅い父などは芝居を鐘汁より恐がるぞかし」といひ「彼の大經師お三を諸人のやうに作りしは近松一代の誤りなり」と云つてゐる。卷二に臍翁の談義で、四軒寺町、角より四軒目、末期居能に、雜稗引受安置の引札假告文、人をして笑を發せしめ、卷三には一人の豐後節語りて、仕舞に心中して死ぬを見ては、朝夕の業が魂に染込んだら好い人も出來る筈」といひ、卷四には世俗の妄說迷信を嘲り、寛永年間に鷄切殿の妖ありといふ妄傳あり「人々恐れまどひしを笑ひ、延享の初には「來る二十五日には鐲も茶釜も破るゝ程なる大雷[illegible]る筈、昨日大竹の新町から三度飛脚で知らせたと聞傳へ、大路[illegible]く觸手拍ち前用心に關所へ古綿を擒込、[illegible]にかりで、[illegible]

[illegible]終日一文が商はせず」ありしを笑ひ、「享保年中、常陸の國の阿波大杉の神あそこへも飛給ふ、こゝへも飛給ふと、いやはや飛んだことを云觸し」と世俗の妄談、妄信、疑心暗鬼の厲態に陥るを笑つてゐるが、今日でも彗星衝突の、地球破壊のと、時々同じやうな事を云ひ出して同じやうに惑ひ騒ぐことのあるは昔時にかはらぬからをかしい。卷五は俗間普樂論を都路無字太夫が聞くことにしてあるが、「先そちが語る豐後節といふものゝ世間人民の大害、砒霜斑猫百双倍、第一風俗を亂り、」と云ひ、「宮古路は享保の始、犬の病と連立つて來て世人の骨髓にとほり、終に治し難き病となりぬ」と豐後節を罵り、「一中、義太夫、土佐節、むかしの肥前節、近江、吾妻、薩摩、外記、虎屋永閑を擧げ、古半太夫、近世の河東は中にも上品の至り淨るりなりとなし、言語の惡化に談及して、「惣じて衣服の正しからぬを服妖と云ひ、言葉の正しからぬを言妖といふ、彼の羽織被る輩も、三十年まで聞きも及ばぬ言葉づかひ、見ない、きゝない、よした、なんどゝ詠をなやしてぬかしをるいやらしさ」と云ひ、「いやはや二階とも聞かれぬすみる茶色の聲で唸るいやらしさ」と豐後をこきおろしてゐる。豐後節の行はれた時を境界にして、人情世態言語風俗が一轉折してゐるので、豐後節は特に古に異なりて騒々の聲と聞えて、新風淫風亂風の變調の極ノ盛はれ、當時に[illegible]者に認識されたものであらう。[illegible]れられずして其の大なるを見[illegible]に惡まれた豐後は大才肌であつたに疑ひ無いが、其の[illegible]でなく、淫靡であつて、浮氣の男女間に大に持囃され、墮落頽敗の弊を爲したことも否めない。「續下手談義」の四に、三圍社に諸神佛寄合ふ條、瘡守の神を「小石川の片ほとりに住む瘡守の神、團子さへ米穀を費さじと土を用ゐて儉約をはかる才智拔群なる發明もの」と云ひ、大山石尊の語として「近年何者の申出たるか拙者を博奕の勝負を守る運の神と戴きて、二階梁ほどなる木太刀なんどかつぎ連れ、毎年六月の末七月の牛苑雲の如く上り蟻の如く詣來る」などとあるので、笠森は瘡の神、大山は博奕の本尊で流行つたことも覗へる。一體我國の山の繁昌は、山嶽崇拜などゝは大昔の事、中古以來は博奕場で盛つたので、赤城山榛名山鹿野山妙義山筑波山富士山、博奕で流行らぬ山も無い。上方の神主は寺錢堂取りの名詞でも知れる宿主であつたのだらう、大山の流行つた所以の一部分を此書が語つてゐるのも、まんざら戯言でも有るまい。何の書物でも有る世だが、盗賊の術を傳へたものは支那にただ一部あるのみで（未讀ではある）賭博の史も見及ばないが、若し存したら社會の眞相に注意する者に在つては讀みたいものであらねばならぬ。卷五は財慾に關する記事が有り、寓意にたる佳話を綴つてゐた[illegible]人から六文で之を貰つて遊んだら、「[illegible]」とあ

つたなど、猥褻な洒落を記し、無益のこと、揚弓大取の秘傳などを記し、「樽の外れ勝手の始末利勘なる義は西鶴が書に委しければ」といひ、「丹後の由良の大福人三荘太夫直傳の金の持様よく〱御信仰可被成候」と道つけてゐる。評觀房は如何なる人か知らぬが、幼より僻であり（五ノ十二丁）大阪の人（同八丁）であり、江戸にも居た者で、三都の人情俗態にも通じたもので、相應に儒佛をも解し、當時の漢學先生の中華尊信を惡み、「少々四角な文字が讀めるを高慢の鼻、羽根の無い是界坊と見ゆる云々宋儒を惡むこと日蓮宗の阿彌陀をこなすが如し云々」と云ひ、「住馴れし逆口を立退き、川崎へ引越した其仔細を或人問ひければ、イヤ、別の事でも無いが、ちつとも中華へ近いやうにと、答へたげナ」など、惡罵し、「手前の野郎を、ゑんようはく、かんようし、と名付けたゲナ、稼よう掃く、棚よう仕、何といかいたわけではござらぬか」と辱罵し、「貝原を見こなし、篤信の篤實を、とろいの、淺はかなのと譏る、此心底はなはだ憎し」と叱し、「流行物の伊達學問をやめて山崎闇齋や貝原篤信などの正風體の實學者の部に入る」べきよしを云つてゐるところに其の主張は見えてゐる。凡そ二部十卷、當時の社會の批評、世情の論議として見れば、可なりおもしろい。教訓には相違ないが單なる教訓書ではないこと明らかである。

單朴は江戸石町の人で、正德年中八王子のほとり青柳町に隱居し、青柳散人と號し、寶暦八年秋、七十七で終つた。「教訓雜長持」を著はした時が七十三才であるから、其の說を呵し言を放つた頃は、既に世故に老いて、人情世態の表裏を見破り、善惡の目利も十分に出來た時分であつたらう、觀察部面も廣汎で、批評も犀利で肯綮に中つてゐるのが多い。卷一に、天狗の集會があつて、世上に慢心者が多くて天狗も一々此を抓むに堪へないと云へることを記し、卷二に、六七十年以前鍛冶町邊に下坂古哲、お太刀坂の長船了戒とて、廣い江戸に二人の仕懸醫者あり、勢を張りて世を瞞けることを記し、山師醫者を罵つてゐる。卷三に淺草の並木の料理屋に俳諧の大集會あつて、其參會者の從者とも、淺草寺の笑ひ佛と五重塔の間に席を設け、各々其主人の惡口をいふ段は、實におもしろく、それを「先祖代々持傳へし家屋敷を他人のものとし、親父の讓金皆文無しに使ひ棄て、誠に塵も灰もといふ中にまだはいは殘りしか世上で我を誹人といふ」夜鳥といふ男の辭聽するところ、當時の俳諧好む者共の弊處病處を道破してをかしい。盆踊の當時の歌に「盆の踊りををどらせぬ親を精靈棚へぶち上げて置いて水向せい」といふのを擧げてあるが、當時の人情の放肆苛虐になつたさま眼に見ゆるやうで、今日のダンス流行の折柄、「親父〱と親父がなんだ、親父や忰のぬけがらだ」といふ若い者の歌も思合されて、打捨つて置けば人は放辟邪侈になる何時の代の人情も同じことだ

と感心させられる。卷四には其の精靈祭りに祭られた精靈其の、魂祭りも形式ばかりとなつて世人に眞情無きを喞ち悲むことを遍參僧の聽くことを記してゐるが、今日では其の精靈祭りの形式さへ無くなりかけてゐる、古今の變、如何ともし難いことだ。卷五に布袋和尚の掛繪ぬけ出でゝ、教訓談をなすところに、當時の雜書教訓書類の評がある。此「雜長持」は大に行はれた書であるが、誰かゞ一寸噂をしたほかには、餘り此書の事を云うたものも無いとは徳川期の事が今人の頭の中に餘り映つて居らぬしるしとも思へて聊か口惜く無いでもない。同じ人の「錢湯新話」五卷は、剪燈新話をもぢつた名で、錢湯で人々様々の談をするのを聞書の趣向だが、教訓が勝つて、教訓書の方には適してゐるが、興味は「雜長持」ほどに無い。湯屋の事を書いたものは京傳にも「浴室淨るり」あり、馬琴にも何とか云つた小册があつたが三馬の「浮世風呂」が白眉である。が、新年の初湯から師走の煤掃の前日まで、時々の客の湯屋話を聞くといふ此書の趣向が[illegible]に既に有つたのは感心で、「浮世風呂」もこゝらあたりから思付いたのかも知れぬ。卷一に、愚直な男、蛇の足か鰐の足かを見れば婦人になるといふを信じて、終に鰐が足を出したところを見たといふ話は、[illegible]節で、賽子の七の目へ賭けた武士が、遂に六つ目以上は無い筈の七の目の出たのに賭つて大利を得たといふことが評判になるのだ[illegible]

き方で、其の先を爲したものである。卷四の假道心者と僞し[illegible]話に、看覡りが山伏となり、出額目の斬藷に「捏狼には、おんおはたつら、つら蜜茶ひつつり、ひつぱつたや、そはか」と唱へ、瘢疹には、をんころ〳〵、投げたり醫者はん、そはか、捏狼には、をん蹴轉(最下等娼妓)かつたりや、そはか、なんどゝいふところ、人を笑はせて涙を出さしめ、蕎麥屋が假道心となり、護符を書いて與へるに、眼病には海老が紋(目の大にして睨みの利く俳優の紋)を書いて遣り、腰より下の病には志道軒(猥談者)が顔を書いてやり、上を眞黑に塗りこくる、といふ等、隨分おもしろく、卷五の、[illegible]の辻の百物語、飯中八仙なをもて自ら擬せる商賈者等の、化物噺をやめて馬鹿者噺、白物語をなして、世を詛り人を罵つた末に、猖狂して安帯論の根太を踏拔き、昔の穴藏へ陥る段なども、可なり大出來で、おもしろく、教訓書で無いことも無いが、小說同樣であり、そして社會批評をしてゐるのである。當時は教訓書といふ名で、其實は文學的興味が人を惹付けてゐた此等の書が、後には教訓書といふ名に掩はれて累せられ、其の實質の價値を知られるに至らず、世人の眼界の外へ拋り出されて、三馬の「浮世風呂」は社會諷刺が巧い、世相批評が[illegible]あるのと云はれてゐるに[illegible]ず、高概敵人は全く忘れられてゐるに至つてゐる[illegible]

しにはたらぬといふほどの[illegible]も無いが、丸きり學に縁らぬのに少し氣の職でないこともないから、餘計な口をきくのである。投同人の「教訓差出口」は寶暦七年の春に出てゐる。其序中の辭に、「誰も頼まぬ浮世の世話を、燒餅坂の谷の下庵、貧が軒端も人並よりはによつと差出ていと見ぐるしく出臍親仁と仇名は立てども云々」とあるが、これには無益な邪猜か知らぬが一寸氣の廻ることがある。それは八王寺の片ほとりの靑柳に居た此老人みづからが出臍親仁と云つてゐることで、靜觀房の「下手談義」の卷二に「八王寺の臍翁座敷談義の事」といふ一章がある。其の八王子の臍翁は即ち單朴靑柳散人で有るやうな氣がするからで、京都と江戸とで同じやうな著述を同じ時代にした此二人が何樣いふかの交渉關係が有りさうに思へるからである。二八の著は猶幾部か有るか知らぬが、猶ほ自分の寓目せぬものを讀んだら何か發見するか知れぬ。「差出口」の卷一、祭禮の時の若衆のあばれを記し、「無分別の巳の刻ばかりの荒男、おの〳〵裸に紅繻絆、帶をせぬが深秘か故實か、いづれも結立の髮を振りほどき、大方帶解きひろげ、又は引裂紙の手束髮、さはらば摑みつかんずる勢、天魔疫神も恐れつべう見えて、いかにも喧嘩の看板とは誰が見立か何樣もいはれず、件の帶とけひろげの手合、褌に汗手拭と二タ役させ、彼の、、、、、、、、、、、、、、[illegible]に重いか、但し思入れか、あなたへよろ〳〵、こなたへよろ〳〵、千鳥足で[illegible]、大路一ぱいにたむれ次し第、其上祭禮に火の用心はたゞ[illegible]とぞ心得つらん、常は見せ先で無用と張札のあるに、大道を脚へ煙管、憚慎みを棚へ上げたと見ゆる近頃不埒なありさま云々。それのみならず何國より出づるとも出所は知れねど、月代長く、各々下駄がけ單帶の異人、同音に所望ン、所望ン、といふ、顏付形も少し異風など申のみにて、いかにも日本人と見ゆるが、いゝしよもんとはねたは唐音か知らず、かくて此異人共一同に所望所望といふこそ程も久しけれ、皆我先に拳を上げて叩き合ひはり合ひ、しばしは鳴りもやまざりしが、又誰が云ふとも知れず、おれが貰つた貰つた、といふと不忍で泥龜呼ぶやうにはた〳〵と手を打つと、又しやんと靜まるふしぎ、此味おそらくは鬼神も知り難く、賢人君子も及ぶべからじ」と評まじりに描いてゐる。卷二には[illegible]の事を云ひて、「寶永正德の頃までは町中の若衆といへば暴風迅雷の如く怖恐れ、ちつとも身を保ちしものは道を避け通しける程に、扨はかさ高にさへすれば人が怖がると心得、めつた無性にいかつら出かけ、弱さうな者を見立て喧嘩を仕かけ、強いと見ると樽者送りて親分とあがめ、惡たいの云ひやうも流派ありて、舌の卷きやう、文句の上ゲ下ゲの口傳、おの〳〵其道の宗匠有りて之を指南しけるとかや。然るに享保のはじめより、柔和理〳〵と風俗を改め、[illegible]といふ名目を忌み、俳諧師の字をう

らやみ、みづから仕事師と稱して先づ鳥類をはなれたり。しかのみならず、假初にあるくにも羽織を着ねばならぬやうに萬おおくになり、隨分人品をたしなみ、最早喧嘩などは棟上の歸り、仲間の葬禮戻にさへ無し。殊更入レ口札頭などいふやから親分と立てらるゝ輩は格別水際立ちて、あるへい糖のやうな縞や煉塀に似た羽折で旦那場を勤め、少し小首を傾け、卷舌の口上、もつとも十日廿日以前の事も先刻とおぼえ、内所と内外、延引と遠慮の間違はあれども、昔の鳶と今の仕事師とくらべて見れば烏と鳳凰程のちがひ」と、仕事師の文明的になつたことを記してゐるが、此風は次第に發達して、意氣を賣弄するのは鳶の末裔の事で、親分株は底に勇威を藏しても表面は誠に鄭重沈着なること、明治より今に至つて猶存して居る。明和元年といへば此書の時より七八年後であるが、其時出來た平秩東作の「水の行邊」の卷一に「委和理先生」といふのが出るが、それは所謂親分株の仕事師の、立派な、よく出來た調子合の人物であつて、正に此書の記事と相應じてゐる。卷三に道心者乞食坊主の類の事を云ひて、ちよぼくれ、ちよんがれの流行を記し、武州豐島郡柳塘の南の一郷の者の勸進を渡世の種としたるを初とし、「此國素生の者は頭の旋をきつと守れば町々の門に立ても耳ふさぐやうな大口さし合いふものは怪我にもなかりき、たゞあるべかゝりの[illegible]和讃、[illegible]の[illegible]、御[illegible]

しは[illegible]いと云ふあり、て大[illegible]ちよぼくれ〳〵ちよんがれ〳〵と抑々何の事やら一向譯の[illegible]たゝき、親子兄弟並び居るところでは雷の落ちたより迷惑な目に合はせ、眞似もならぬ指合をせりかけ〳〵云ふほどに、氣の毒がりて、手前の門へ來るを待かけ、錢米くれて通すを、得たりかしこしと日々に新作のさし合、迷惑がらせて身過ぎする」に至つてゐることを記してゐる。ちよぼくれの類は此頃より大に起つて、猥褻甚しきことを大聲あげて錫杖の短きを振鳴らしながら家々の門で怒鳴り散らし、厭がらせて錢を貰ひあるいたもので、此後の雜劇黄表紙類には其風體猜知すべき數々の材を遺してゐるが、何故に政府は然るべき處置を早く取らなかつたのか、乞食の徒として捨置いたのであらうか、隨に風俗惡化の一にはなつて居り、明治初年までは其陋風をとゞめてゐた。中には既に其の大口指合ををかしいとして、錢を與へて聞いた者も「差出口」時分にあり、明和に至つては、ちよぼくれ坊主の中に隱れたる佳い僧が有りでもするやうに諷激の放言の材料としてゐるものもある。豐後節、志道軒、ちよぼくれの類、當時に在つては何でも無いものであつたらうが、後から見れば、徳川が盛りを過ぎた兆のやうにも覺えて、[illegible]來つて來るの[illegible]を語つてゐるやうにも見える。心學とそよぼくれと時を同じうして一世に現はれたのだとは、皆に[illegible]

[illegible]

(未完)

維新回天史の一面（其十一）

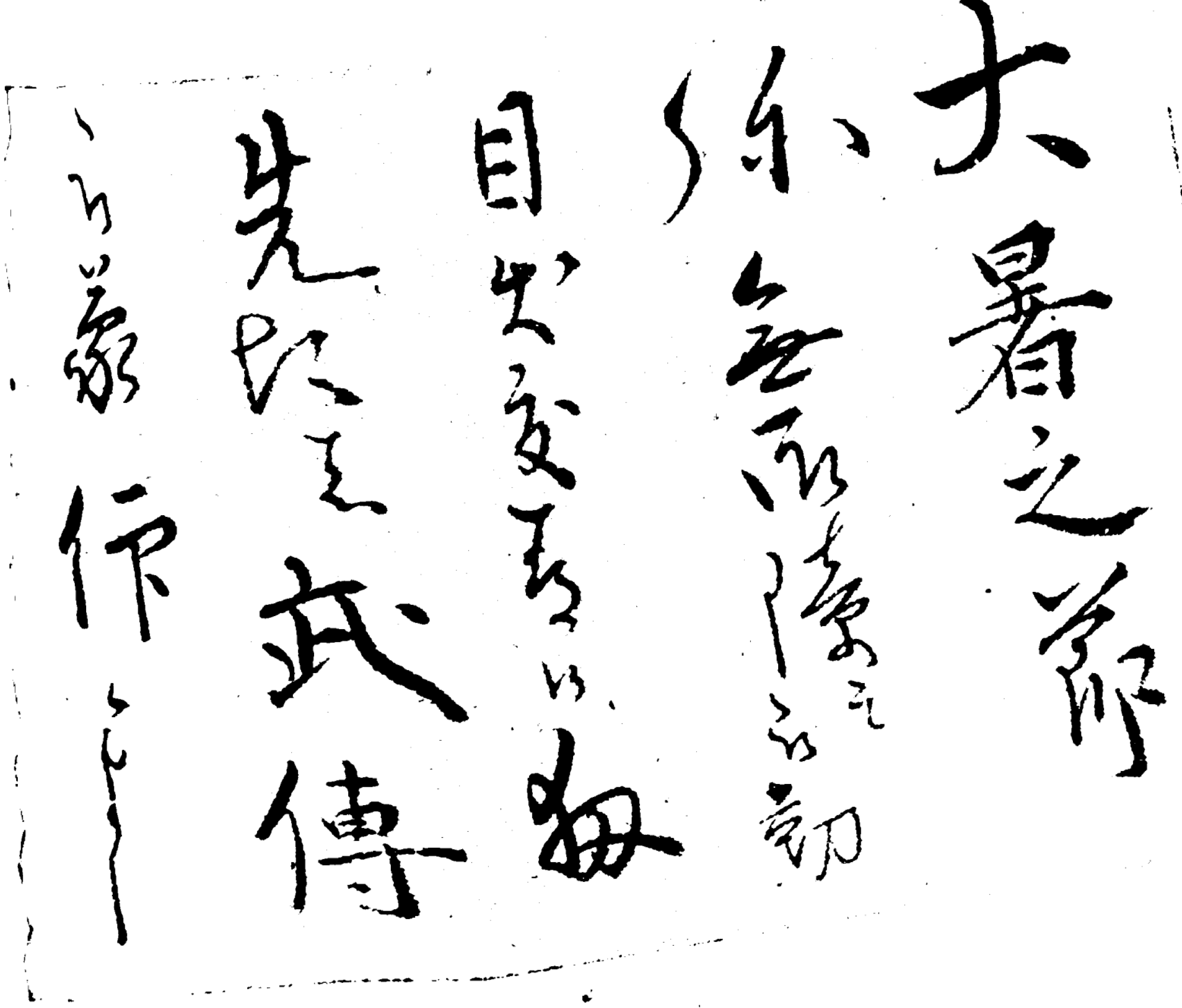
[illegible]一郎

[illegible]

…の[illegible]中の殆んど[illegible]

兎も角も、星巖が天保三年から弘化二年まで[illegible]

尊融法親王（久邇宮朝彦親王）御筆蹟



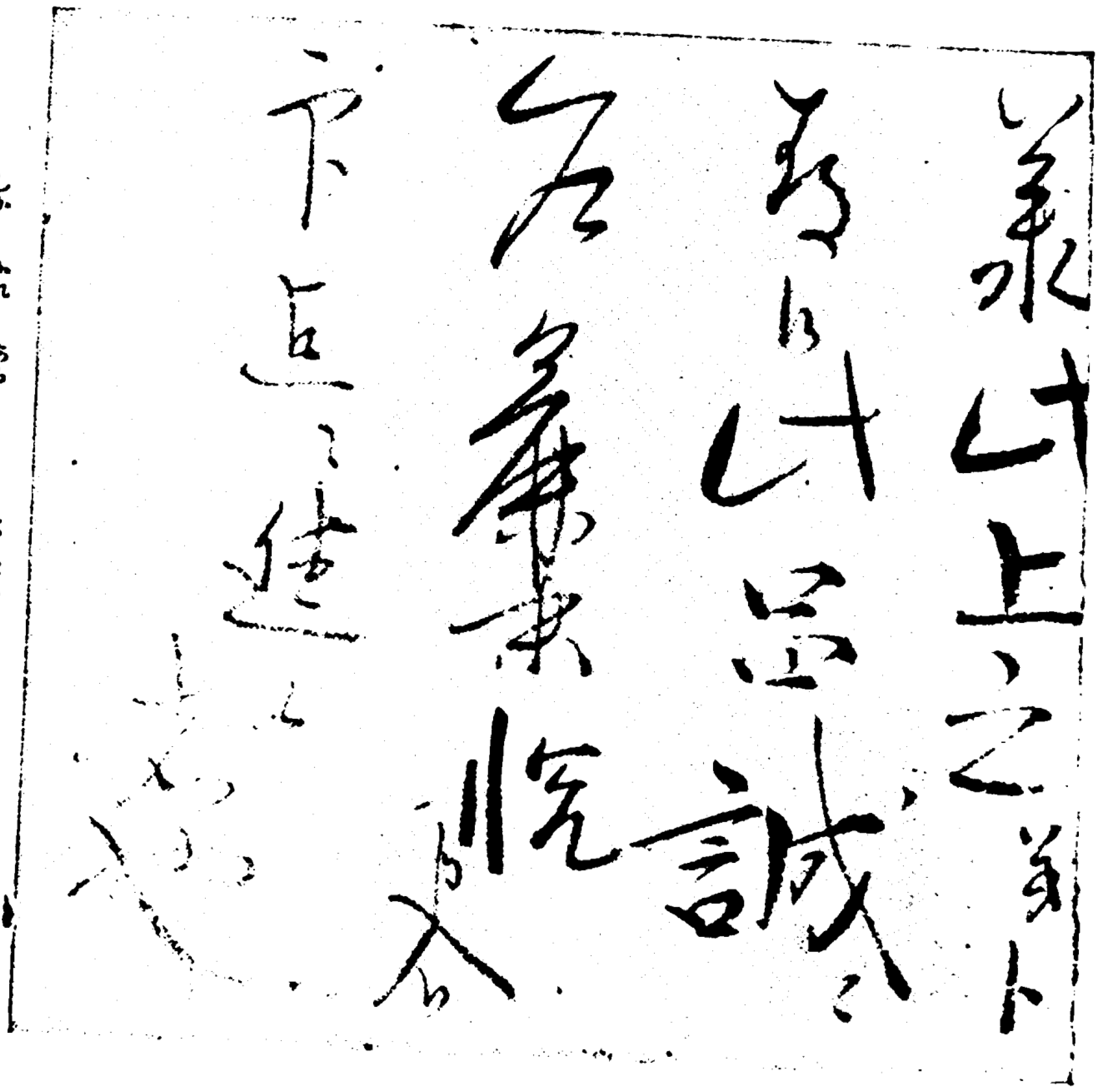
又た諸侯の[illegible]
をとり、若くは大名の臣下たる諸有志に[illegible]
ては、公家、五攝家、御門跡等にも出入し、宛然天下に重きを
なす勢力を持つてゐた。その浪人者の中にて牛耳を取りたる者
は、梁川星巖、梅田雲濱等であつた。

（第八十八）　梁川星巖

星巖は當時七十の老翁であり、雲濱は四十三歳の分別盛りであつた。梁川星巖と云へば、誰しも徳川末期の一大詩人である事を知らない者はない。彼は山陽とは九歳の弟であつたが、しかも山陽は殆んど同輩を以つて彼を待ち、詩に於ては益友として、厚く彼を遇してゐた。

彼は少年時代より老年に至る迄、全く詩人で一生を終らんとする者の如くであつた。然るに彼は江戸に於て、大いにその門戸を張り、桃李門に滿つるの時に於て、即ち弘化二年に、其の詰めの玉池吟社を閉ぢ一旦京に歸つた。

これは彼が五十七歳の時である。彼は何故に江戸を引き上げて還つた乎。[illegible]



であらう。併し彼の新たなる生涯は、これから始つた。

×　×　×

即ち彼は弘化三年の末、五十八歳の時には、更に居を京都に卜し、これより安政五戊午の年七十歳にて逝く迄京都に在り、依然表向きには詩人の生活をなしてゐたが、漸次草莽の志士たる本色を暴露し來り、やがては京都に於ける有志家中の殆んど中心人物となつた。

彼は山陽と交際しつゝある時から、既に尋常の詩人でない事は、山陽も能く知つてゐた。江戸生活の玉池吟社に於ける晩年は、佐久間象山もその近隣に住んで、時々往來し、その議論を上下してゐた。而して象山の如きは、既に天保庚子十一年に、彼の詩集に序して、

『最も慷慨時事を談ず、其の才之識と、特に詩を能くする而已にあらざる也』

と云つてゐる。併し同年同時に作りたる林培齋（大學頭）の序文には、

『終日詩を談ずるの外、一事の他に及ぶなし。果してその詩人たるを知る也』

とある。此にて當時星巖が二重人格者であつたことが能く證明せらるゝ。星巖は、佐久間象山の如き解事者とは時事を談じたが、林大學頭などに向つては、とても解らぬものと見切りをつけて、初から相手にしなかつた。此れが一方では慷慨の志士と評し、他方では純粹の詩人と評した所以であらう。

兎も角も、星巖が天保三年から弘化三年まで江戸に足掛け十

五年間は、全く詩人として暮してゐた。然るに京都に移住してからは、時事は愈よ切迫となり、彼も老境に赴き、所謂日暮れて途遠く、此處に初めて彼の本色は發露し來つた

（第八十九）詩人よりして志士

大抵の人は壯年の時に時事を談じ、老年に至つて風月を事とするが、彼は壯年の間は風月を事とし、六十前後に至つて、初めて公然時事を談ずるに至つた。而して彼は猶ほ詩人の假面を脱しなかつた。詩人は彼の保護色となつた。彼は詩を以つて諸方に出入りする便宜を得た。

しかも彼の鴨河端、丸太町の宅は、單に詩人の往來するのみならず、あらゆる有志家は皆な來り訪うた。而して皆なそれぞれその要領を得て還つた。

横井小楠の如きも、嘉永四年、上國漫遊の際には、彼を訪ひ、彼と相知つた。當時星巖は横井を京都に止め、新らたに起れる學習院に推擧せんとし、曰く、

『公家にもなか／＼話なせる者がある。先生留つて一肩ぬいでは如何。』

と。然れ共横井は[illegible]も横井は星巖を以つて、決して尋常の詩人視しなかつた。吉田松陰の如きは、其の友人を作ひ、嘉永六年、癸丑の年には、二度ほども往訪してゐる。年輩と云ひ、資性と云ひ、經歴と云ひ、星巖が宛然重きを有志家の間になしてゐた事は勿論である。

×　×　×

今此處に星巖が、安政二年二月附にて、大垣藩の執政小原鐵心に贈れる書簡の中にも、

『扨、此來八方騷然。九州四國之士人往來之次に皆々立寄り、風説も承り候に、諸藩共に人物稀少に候』

とある。

此の如く、彼の草廬は西國筋有志家の問屋であつた。薩摩の關勇助、西郷隆盛等も彼を訪問し、長州の吉田松陰、久阪玄瑞を始めとして、苟も當時の志士にして、彼を訪問せぬ者はなかつた。されば自然彼の隱宅は時事の交換所でもあり、又た志士の議論の淵叢でもあつた。而して彼の意見が、年と共に急進に傾き、[illegible]

政守の申口書——即ち口供——に

『去巳年——安政四年——十二月林大學頭上京の比より、星巖の議論は追々切迫に相成り、下田、函館とも開港取潰し、一圓に打拂之論にて、攘夷とは不ニ申出一候へ共、天朝より關東に打拂の議を被ニ仰遣一候はゞ可レ然哉との趣々臣意にも相察候』

とあれば、星巖が梁田の上京中、尊攘方面に活躍したる事は、申す迄もなく、同年四月一日附にて、彼がその門人小野湖山に與へたる書中にも、

『上上其餘臣下にも大分其人有レ之候二人迄一寳、日々感涙を流し、京都致候、右に一ば天威六十州に震候は勿論、外夷も畏

に溢れてゐる。



梁川星巖肖像

の砌にて、陽明家—近衞忠熙—青蓮院宮御兩人にて、東坊城—菅原聰長—を譴責の事。』

とあり。而して、

『一、主上叡明、陽明家—近衞忠熙—正大君子。青蓮宮英邁。三條—實萬—中山—忠能—其外八九人皆々有ニ智力一、就中此度第一の功は久我家也』

とある。又た、

『主上には死ニ社稷一而不レ辭、決然たる御志に付、感涙致候。青蓮院宮日々參内有レ之候』

とある。彼が忠憤の念、

(第九十) 星巖の策動

所等と相諮り、青蓮院宮を始め、縉紳諸家の間に活躍した事が分る。彼は春日讃岐守とは最も相得、池内陶所とも亦た、頗る相許したる中である。

猶ほ又た此處に彼の友人佐久間象山は、安政元年四月吉田松陰がペルリーの船に乗つて外國に赴かんとし、その事の失敗の爲に、之に連座して獄に投ぜられ、やがて蟄居して信州松代にあつたが。象山は時事の非なるを默視する能はず、安政五年正月、禁を破つて門弟を京都に遣し、書を星巖に贈り、米使の高壓的請求はこれを拒絶し、進んで國防を整備し、國力を充實して、然る後對等條約を締結すべしとの意見書を附し、これを公家の當局者に建言せん事を乞うた。依つて星巖はこれを池内陶所等と諮り、九條關白に呈した。

斯くて彼は同年二月二十四日附にて、象山にその返書を與へてゐる。その中に、

『京師には一向無人、池内大學・陶所・なるもの、是は智恩院宮の御内にて老拙江府留寓中に時々參り候者。定めて御一面も可有哉覺候。此者京師にて放に關係公卿の教授に日夜奔走し 頗る有志にて殿下・大[illegible]山・忠能・に出入。青蓮院宮へは月六同進講仕候。此度は[illegible]下四方無所遣周旋竭力候に付、老拙も得承候。』

とある。池内は他日其身を安からしめんが爲めに、同志を賣りたる形跡あり。遂ひに浪士の爲めに殺されたるも、當時に於ては星巖無二の下働らき者であつた。

× × ×

又たその別紙に、

『法親王中にては粟田青蓮院宮天資英邁、主上へ親近有之、右に付言路大に通じ候。平日は俗官共風狂親王と稱し居り候處、此節は大に畏入候由、主上は叡明にて數年來洋夷一件も御承知、時に詔有之候へ共、太閤・鷹司政通・女官等申上候には、萬機盡く東府將軍へ御托し有之、彼方閣老、諸人、日夜商議仕り罷在候に付、不煩聖慮、只々大神宮及諸卿に御祈禱被遊事専一と申上げ置候へ共、此度は宸襟彌々不安、開闢以來不受外夷之點汚、當朕之世諸夷如此、有何面目謁見皇祖之靈。爲有事雖死而社稷不守之御決志也。聞者上下一同に落涙致し、[illegible]青蓮院宮

は實に大塔宮の後身共可レ奉レ申御氣象にて、主上、親王共に三十歳餘、英氣勃々難レ有事に候。朝廷不レ可レ言レ無レ人。只此度堀田侯へ如何に詔下り候哉商議中にて分り兼候。天下の安危在二此一詔一。夷人願には要地にて互市致度の由。京都大阪或は堺にて開き度との事に候也。』

とある。されば星巖は、暗に自から帝者王者の師を以て任じたものであらう。

× × ×

又た三月六日象山は再び門生を遣し、書を星巖に寄せ、その周旋を謝し、その微衷の上聞に達するを喜び、更にその意見を開陳した。それは國防を整へ、國權を伸張し、禁裡の防備を嚴にし、親兵を置き、天朝の御稜威を振興すべき等の事であつた。

星巖はこれを要路に致し、四月五日附にてその返書を與へたが、その中に左の一節がある。

『川路（聖謨）司農公事畢り候に付、青蓮親王へ拜謁を願ひ、二百金の紙包に題して御菓子料となし獻上。御對顏の節に諸近習儼然烈座、司農寒喧を申上ぐるのみにて、於二時事一は不レ能レ述二一言一、空しく退出致し候。近習の者宮に申上けるは、何故に獻上物を御受有レ之哉。宮の曰く『渠商議に付、菓子料を持參。對面の砌一言不レ及二時事一、余も亦時事は不レ吐二一言一也。何の嫌疑か之有らん』との仰也。宮の御氣象總て如レ此。』

× × ×

猶ほ彼が如何に春日と相許したるかは、同書中に、

『春日は京師第一等の人物にて、京師の讀書人には絕て不二相交一候。老拙一人と十餘年往來致し、何事も談合致し候に付、此度の事も此人に托し候間、左右に御承知可レ被レ下候。』

とあるのを見てもわかる。

此の如く彼は蟄居中なる佐久間象山の意見を二回迄も取次いでゐる。而して象山が命がけでやつた事は星巖に與へたる詩に

『我本一丈夫。奚忘レ喪二其元一。聖明苟有レ裨。九死非レ所レ難。』

とあるを見ても察せらるゝ。

（第九十一）　星巖と志士

星巖は又た吉田松陰の門人とも面會し、且つ又、松陰の意見をも取次いだ。その事は松陰の最後の形見の一である『幽室文稿』によくこれを書いてある。松陰は安政五年五月十五日附にて、『對策』及び『愚論』の二文を作り、これを星巖に贈りてゐる。その書翰の一節に

『小生之愚計は、別紙對策並愚論之通に御座候。御熟考の上、可ㇾ然思召被ㇾ下候。何卒密に青蓮院の上に達し候樣御處置被ㇾ下間布哉。幽囚之身是等之事も實以恐多奉ㇾ存候得共、杞憂之已を得ざる如ㇾ此に御座候間、何卒御一計萬々奉ㇾ祈候』

これは固より孝明天皇の御覽に入れんが爲であつた。

而して彼は更に六月二日附にて、その友人中谷正亮—公爵桂太郎の伯父—に托して、更に『續愚論』一篇を送つてゐる。松陰の論は、攘夷的開進論にて、一面開戰の覺悟をなして、外人の要請を拒絕し、而して後更に對等、和親條約を結ぶ可しとの事である。

この『續愚論』中には、[illegible]にて此の[illegible]を[illegible]ける[illegible]や[illegible]り、又は[illegible]する[illegible]。

而して此等は何れも星巖の手を通して、乙夜の覽を經た事は、松陰先生がその父、伯父、及び兄に向つて、同年十一月間部老中要擊の擧を企だてた時に、最後の手紙として與へたる文中に、

『向に愚論數道を以て、之を梁川緯に致す。緯傳に上青蓮之上人を達す。蓋し乙夜之覽を經ると云ふ。一介の草莽、區々の姓名、聖天子の垂知を蒙る。何の榮か之に加へん』

と云うてゐる。

此の如く星巖は、天下有志者の中央交換局であるかの如き立場を占め、京都にあつて宛然有志家の大元老として、全國志士の望を繋いでゐた。

彼に就いては猶ほ彼の友人、春日讃岐守潜庵が吟味中口書中に、

『下總守殿御上京之上は、永久之例を以、惡政可ㇾ被ㇾ行との風說も有ㇾ之候處、且此星巖罷越申聞候には、同人にも右風說承込候趣にて、自然惡政抔被ㇾ行候樣にては、國家の安危に拘り、不容易儀に付[illegible]

[illegible]

旨、星巖申聞け」

とある。

これにて如何に星巖が當時一死を覺悟して、間部詮勝を諫爭せんとしたる決心の程がわかる。七十歳の詩人が、これ程迄に奮發した事であれば、當時の時勢が尋常一樣でなかつた事が思ひ知らるゝ。

（第九十二）　梅田雲濱

星巖と同志の一人にて、謂はゞ京都に於ける有志家の副首領とも云ふべきは、梅田雲濱である。梅田は當時山崎學の本山とも云ふべき、京都望楠軒の主であつて、彼の學問は淺見絅齋等の純粹なる山崎派の系統である。詩文などは別に氣にもかけないもので、星巖との交りも、文字の交りでなくして、寧ろ國事上の交りであつた。

梅田は若州小濱の藩士で、浪人をなし、京都に帷を下して教授をしてゐたが、しかもその志は天下の經綸にあつて、常に時務の救濟に存した。當時外事の切迫なる場合に於て、或は大砲を造るとか、練兵をするとかといふ事を旨とする者があつたが、彼はそれよりも寧ろ人心の一致を肝要となしたのだと云ふ事に着眼し。或は江戸に赴き、更に諸常の間を往來し、水戸人士とも、その議論を上下し、又た長州などにも赴きて、種種計畫する處があつた。

彼は横井小楠等とも交際してゐたが、小楠とは互に相得なかつた樣である。小楠の眼中に映じたる梅田は、餘り我意が強く、謂はゞ山崎學者固有の短所のみ増長せしめてゐたかの如く覺えた樣である。而して吉田松陰なども、梅田に就いてはそれぞれ意見を述べてゐる。

即ち安政四年正月十六日附にて、久保淸太郎に與へたる書中には、

『去臘京師梅田源次郎來遊。正月中比迄致二逗留一候。滿城心服の樣子に相聞候。松下村塾の額面も頼み出來申候。』

とある。又た同年同日、小田村伊之助に與へたる書中に、

『同じころ京師梅田源次郎來萩。學校にも度々參り候よし、諸先生大に感心の樣子に相聞申候。最早歸京すべし。同人事京師吾藩邸臨宍戸九郎兵衞翁大に懇意のよし。老兄御歸途京都御立寄被レ成候はゞ、梅田の事は宍戸に御尋被レ成候はゞ

相分可レ申候』

とある。これにて如何に梅田が松陰は固より、長州人士に重きをなしてゐたかゞわかる。

× × ×

猶ほ安政六年七月十九日、松陰が江戸の獄中より高杉晋作に與へたる書中には、松陰が萩より江戸に拘致せられた所以は、全く梅田との關係であつた事がわかつた。而して裁判官たる奉行は、しきりに梅田との關係を審問した。それに就いて、松陰は斯く云うてゐる。

『奉行猶ほ余を援いて梅田の黨に入んと欲す。余慨然として曰く、源二亦奇士。寅相知る淺に非らず。然れども源二妄りに自ら尊大、人を視る事小兒の如し、寅心甚だ平かならず。故に源二と事を同じくするを欲せず。寅は則ち別に爲す事有りし也。』

と答へたと云うてゐる。この答は寧ろ多少の掛引きはあつた樣だが、然しまた、やゝ眞を穿つたであらうと思ふ。即ち單に裁判官に對する掛引ばかりでなく、やゝ其の本音らしい。

事で、松陰先生等も若干かこれにあてられた

であらう。

（第九十三）梅田の意見

梅田の意見は、果して如何なる程度まで進んでゐた乎。安政五年堀田が上京して勅許を乞ふの際、勅諚を降し給うて、國論の赴く所を徴し給うたが、彼は爾來幕府の内外に於ける形勢を見て、更に左の如き意見書を差出してゐる。

『今春江戸役人共上京之節、
御勅答一度出候て、上は列侯より下は草野之匹夫に至る迄、感激勇躍仕候。
皇朝之御神威一朝に海内に光り輝き申候。是に因り役人共深く畏み、深く愼み東歸仕候。然るに此節
勅命に違背し、擅に嗣君を立て、剩さへ外夷に條約通過を免じ、調印迄仕候事、天下萬民切齒慨歎仕候。又近日表には守護と號し、多人數上京仕候よし。内々は是れ兵勢を以て
皇威を折き賊勢を張り候て、公卿其外有志之者を[illegible]し、

は、實は朝廷台位之方に內通之御人有レ之（九條尙忠を斥す）御直書迄被レ遣候と之風聞仕候。彼之者共上京に而台命を奉じ候得ば、如何樣之事を仕候共、萬人如何樣に心を苦しめ候ても防ぎ方無レ之候。其上朝廷の御密謀も盡く其御手寄り洩れ候得ば、何事も東方之計策は前手に廻り、朝議は後手に相成候。定而朝廷には深遠之御思慮可レ被レ爲レ在候得共、萬一東方之志願通に近日成し濟し候では、海內え輝き候皇朝之神威も忽に地に墜ち、千歲を經候共、復々振ふの時節は不レ可レ有レ之、公卿御有志之方と稱し奉り候も、一朝に萬人之嘲りと相成候事、中々哀む可きも愚か也。古人云豺狼當レ路何問二狐狸一、當切之急務路に當る之豺狼を御除き被レ成候御密策千要と奉レ存候。然りと雖も此事天上之御獨斷にあり。凡下卑俗之輩知る可き處にあらず。是れ只傳聞之說を認候迄に御座候。

定明然懺敬白』

× × ×

これは申迄もなく梅田が靑蓮院宮に奉りたる意見書である。此處に朝廷台位の方に內通の御人云々とあるは、云ふ迄もなく、關白九條尙忠の事にて、彼が井伊大老と東西相呼應してゐた事を指したものであらう。彼は又た左の如き意見書を勅答の案文として、靑蓮院宮まで提出してゐる。

『先達被二仰出一候勅諚之趣今般江戶表に於而、三家以下諸大名へ再應商議相懸、各存寄以二封書一爲二申出一候處、方今萬國□□一變之折柄、御所置之次第に寄候而忽ち分離之姿と相成、各國目前に若溱、御全國之大事に及び御爲に不二相成一可レ奉レ休二宸襟一期も被レ爲レ在間敷候に付、先達而京都へ被二仰立一候條約取結、不穩之御取扱も有レ之度との事に候。諸侯一同に有之通定議相立候上は、先達而奉レ伺條約之廉速に御許容被レ爲レ在度奉レ存候。

御答

今般三家以下諸大名衆議並に封書之趣叡聞に達し候。一應は道理に相聞へ候得共、先達も被二仰出一候通、條約之儀御許容に相成候而は、一日も御國威難二

相立候。
御國威不相立候而は
皇祖御代々に被爲對、誠に恐多き事に候。猶又此度再應群
議之上
叡慮を被決
神宮に御伺に相成候處、條約之義
神慮に不被爲叶候故、不拘衆議御許容無之候。

言上

今般諸大名衆議同意之上言上仕候處、御許容無之ては、
忽に各國渡來、戰爭に及び可申候。其節防禦之御所置如
何被遊候哉。

御答

普天之下率土之濱皆是
王臣に候得ば一應は諸侯に
勅命を可被下候。譬ひ
勅命に不應之諸侯有之共、既に
御英斷被爲在候上は、三公列藩百官其外天下有志之者共ヲ
以而、御親征可被遊候。[illegible]之上[illegible]

候[illegible]被仰出候。

言上

天下御政道之義は年來將軍家に爲御任に相成居候事故、
今般人心居合之處、天下之決斷所に於て候而、諸侯評決之上
及言上候處、御許容不被遊候而は甚恐多至當之
御廟議とも不奉存候。且つ萬民之滅亡に及候事は如
何被思召候や。猶此上御參考被爲在度奉存候。此
儘には歸府も難仕候。

御答

幕府之義、東照宮以來之良法を守り
朝家を守護し、統諸侯安萬民候故、年來政道御任せに相成
り居候事に候。然處今般東照宮以來之良法を變革し外夷と同
盟之義は、東照宮之神慮如何可有之や。諸侯不服之者も有
之趣、天下人心之向背にも相拘候事故、天朝に相伺候事に候。
深被惱叡慮再應御參考に相成候處
皇國之御威光不相立御國體を汚し候ては、既に早滅亡も同
前之事に候。因而此度神宮之御沙汰御伺之上、[illegible]被遊候。
[illegible]宸意之[illegible]

御

御上之御披露奉レ願候。

誠恐誠惶頓首敬白』

× × ×

猶ほ幕府が諸有志を捕繋した際に、成就院忍向、即ち月照和尚の所持したる書類の中にあるものがある。これも亦た梅田が青蓮院宮に差出したるところのものである。即ち左の如くである。

『公家衆之御上書竊拜見仕候處、皇國之神德を被レ成二御尊崇一候一段は誠に敬服仕候。然に一體之御趣意夷族之姦計を御惡しみより征夷家柔弱之御所置を被レ成二御憤一天下之列侯之振起仕候を被レ成二頼に一候御思召と存候。一通は御尤之被二仰立一に候得共、御書中に裁斷之御處置者一言も無二御座一候。左すれば乍レ恐是も亦五十歩百歩之違ひ哉と奉レ存候。方今之義皇國全體之關り候事故、因而征夷家より朝廷之御裁判を相伺候事と存候。左すれば何卒朝廷之御獨斷を以海内江貫通仕候程之御勅答被レ為レ在度事哉と乍レ恐存候。

一、此度夷賊之申立に從ひ所々商館を開き條約取結候に付[illegible]朝廷以來之御[illegible]之[illegible]上[illegible]着定而彼れ益[illegible]を募り驕傲不測之[illegible]に及び聞き可レ申候。普天下率土之濱誰か非二王臣。征夷家を始天下之列侯に至る迄一同に心を合せ、速に打拂ひ可レ申との台命を可レ被レ下哉と乍レ恐存候。但長崎、箱館、下田三ヶ所者既に被レ免候上者無二是非一候得共、是も此方より嚴重に ケ條可レ被二申付一事

一、被レ為レ失二御國體一候而は一日も皇朝之御威光相立不レ申候。永く日本之恥と相成申候得者、假令不同意の列侯有レ之候共朝廷之御英斷被レ為レ在候上は兎角に不レ及候。三公九卿百官其外勤王之者共を御率候而御親征可レ被レ遊候。萬々一危急之場合にも及び候はゞ神宮を奉レ始御代々之宗廟三種神器と與に御存亡を同し可レ被レ遊候。被レ為レ對二天之照監一不レ被レ廻二叡慮一候。右様征夷家に於き候ても可レ被二相心得一候との台命被レ下度哉と乍レ恐存候。

右之通名分明正[illegible]大義[illegible]以、[illegible]

朝廷より御[illegible]

致可レ仕哉。假令列侯赤心之程再應者扨置き百應可レ被ニ聞食一との台命を被レ下候共、當時武家衰弱之時節に候得ば、各々互に他を見合せ候而決定落居仕間敷候。自レ古國家滅亡と申事は萬民無ニ子遺一至り候而後に申事に而者無レ之候。汚ニ國體一蒙ニ凌辱一受ニ指揮一候而は卽滅亡と申候。方今天下之勢可ニ一變一之時に候。強弱は勢ひ、勢は人に由て變候者に御座候。

朝廷之御決不決に由て天下立處に興廢仕候。所謂決は智の斷と申候。是等之重事、市井之賤臣として議し候事は、如何にも僭越之罪戰慄恐懼仕候。然るに愛苦之情不レ能レ已、一分之心得迄に書取候儀に御座候得共、獻芹之寸衷萬一達ニ

高聽一候者難レ有仕合奉レ存候。誠惶誠恐頓首敬白』

（第九十四） 梅田と朝彦親王

猶ほ梅田が青蓮院宮と如何なる親密の關係であつた乎は、彼の申口書、卽ち奉行の質問に對する答にて明白である。今宮家の累代の臣である山田勘解由の語る處を記せんに、

『宮樣が如何したら早く人物が出來るだらうと云ふ事を、花房先生（厳雄）に諮られた。先生の云ふには、梅田に一度逢つたらばよき考案があらうと云ふ事にて先生は梅田に逢つた。すると一同で知己になり、梅田は一腰よりなかつた刀を出し、花房に渡し、これを贈る上は、以前よりの懇意になつて吳れと云つて、互に手を打つて喜んだ。依つてその趣を宮樣に申上げたら、誠にそれは重疊だと御感あつて、梅田と先生の考案で十津川を惹起するといふ話があつたが、宮樣はすぐに先生に十津川に出張を賴む事であつた』

とある。而してこの十津川は夙に梅田が訪問して、その事情を探つてゐた處であつた。

猶ほ梅田が青蓮院宮に謁し奉る時に詠んだ歌に、

『天の戶の押し明け方の雲間より
照らす日かげの曇らずもがな』

とある。彼は果して倒幕を主眼としてゐた乎、否乎は知らぬが。苟も朝廷の爲とあらば、倒幕も亦た辭する所ではないと考へてゐたらしかつた。梅田の門下生とも云ふべき山田勘解由は、梅田の攘夷論を以て、斯く云うてゐる。

『或時先生は、青蓮院宮に謁して内々主上の御思召を伺ひ奉つた。然るに主上は攘夷の思召である事を聞き、此上は日本國民たる者は一同主上の御思召を奉戴し、國家の爲、攘夷に盡力せねばならぬといふ決心をとり、いよ〳〵その持説を堅くしたと云ふ事である』

と語つてゐる。

併し彼の攘夷論は、決して究極の目的ではなかつたであらう。恐くは吉田松陰同樣、攘夷開國の論であつたと思はるゝ。そは兎も角も、少くとも彼の眼中には安政五年頃には、既に幕府がなかつた事がわかる。

(第九十五)　裏面の運動

要するに梁川星巖は、長野主膳が九月五日附宇津木六之丞に與へたる書翰に、

『梁川星巖事惡謀の問屋にて、諸方へ出入』

とあり。又た、

『梁川星巖事、段々承候處、今度の張本第一なるものにて、常に有志館とも稱して、惡黨の巢との[illegible]』

とあれば、彼が首領であつた事は云ふ迄もない。又た十二月十六日附の書翰にも、

『梁川星巖方へ參會致候三樹八郎(三郎)、池内大學、梅田源次郎、右四人反逆の四天王と自稱致候由』

とある。自稱は兎も角も、斯く世間から認められたので、しかも順序は梁川第一、梅田第二であつたらう。

×　×　×

扨彼等が水戸へ勅諚取り下しの順序に就いて考察するに、一朝一夕の謀ではなかつた樣だ。今反逆四天王の一人たる頼三樹三郎から、安政五年四月二十五日附、梁川星巖に與へたる書翰の中に、

『然らば兼ねてお打合せの一件、その筈早々手運び候處、何分廟中の諸卿兎角因循勝ちにて萑々埒明き不申、獨り近衞公のみ餘程御熱心にて、深く三郎(三樹)の意見を嘉納在らせられ候に付、兼ねて御教示へ對策、此公ニ丈御打明け申すべくと存じ、同夜禁を犯し、深更に及ぶ迄密談罷在候。』

とある。

この『御教示の對策』とあるは、水戸に勅諚を下す對策であつ

た事は、この書中に、

『公は初め我等と意見が異にして、水戸と云ひ、幕府と云ひ、名こそ異なれ、何れも骨肉同體の事なれば…………今日如何なる事生じ候も、水戸能く弓を幕府に引き、幕府又た水戸を討つが如き事は萬々有間敷き義なり。故に攘夷詔勅の事、水戸に致すも敢て差間はなき様なものゝ、それでは朝威を損じ、却て幕府の威を毀ふ所以に付き、矢張り幕府に下命致す方可ㇾ然』

との事が書いてある。

× × ×

然るに彼が更にこれを説破したる事は、

『昨夜又々伺候仕り、いよ〳〵利益――水戸に詔勅を下す事の――を論述仕り、遂に公の御承諾を得候に付ては、今明日中詔令御發下相成り可ㇾ申候。左候へばお互平生の存念も半は相達候義と御喜び可ㇾ被ㇾ下候。』

とある。

されば堀田の歸府間もなく、攘夷の詔勅を水戸に下すべき運動を彼等が始めた事が推察せらるゝ。

猶その書翰中に、

『猶々その後梅田氏は参堂仕らず候哉。萬一罷出候得ば、拙宅へ立寄候樣御申置被ㇾ成下度、御願申上候。』

とあれば、梅田が勿論その同腹であつた事は疑を容れない。

然るに近衛公は同意したが、その事は遂に行はれずして止んだ。これは四月二十五日附の手紙であるが、同じく二十三日には、江戸に於て井伊直弼が大老に任ぜられたる日だ。さればこの運動は勿論井伊が受任以前であつた事がわかる。然るに爾來井伊が政權を握り猛斷威決、大いに横暴を逞しくした事は既記の通りであつて。水戸鹿兒島の間にまたがりたる、即ちその父は鹿兒島人であつて水戸に仕へ、水戸からまた薩藩士に復歸したる日下部伊三治は、同年七月、勝野豐作と上京し、井伊家と懇親の間柄にある、三條實萬に就き、井伊大老を勸めて辭職せしめ、猶ほ朝廷より、尾張、水戸、越前諸家の幽居を解くの勅諚を、幕府に下されんとの周旋を要めた。

併し彼等は西鄉からして、不日島津齊彬上洛の事を聞いたから、その運動を中止し、今は單に近衛家、三條家、又た青蓮院宮等に運動し、朝廷より尾張、水戸、越前の謹慎を解かるゝ

樣御沙汰あらん事を希ふに止つた。

× × ×

而して日下部と共に此間に運動したのが水戸藩京都留守居、鵜飼吉左衛門であつた。然るにやがて齊彬死去の報傳はり、彼等は何れも望を失ひ、この上は何よりも先づ井伊退職の事を計らねばならんとして、所謂梁川、梅田、池內、賴の反逆四天王と相策應じ、當初は三條前內大臣自ら勅使となり、直に將軍へ『大老退職、尾水越解愼』の勅命を傳へしむる計畫であつたが、その事は遂に行はれずして止んだ。

この事は安政五年八月五日附在水戸の金子孫二郎より、高橋多一郎に贈りし書面にも、

『三條公等勅使にて、赤鬼退治等之儀……何程赫々たる勅命にても、大老閣老等備を立て居候所へ下向にては事行はれ間敷く』

とあるを見ても察せらるゝ。

赤鬼とは云ふ迄もなく井伊の事である。彼等は如何に三條公が勅使として乘込んでも、楯へ立てして待構へたる譜代を、押へ付くる事は出來ないといふ事を知つてゐた。然も幕府の動きを

日下部に、

『それは迚も行はれまい。それより寧ろ朝廷より水戸家へ勅諚を下され、老公をして幕府を改革せしむるがよからう。併し水戸にはこれを引受ける力があるであらう乎。』

と云つたが、日下部は、

『拙者は多年水戸家にゐて、水戸の士風はよくこれを知つてゐる。大丈夫である』

と請合つたから、これからいよ〳〵內勅降下の運動が猛烈となつて來た。

（第九十六）內勅降下運動具體化す

當時運動者の中には、近衛家の老女村岡、又た成就院忍向、卽ち月照和尚があつた。而してこの月照は又た近衛家のみでなく、青蓮院宮にも御信用を受け、頻繁と出入してゐた。

斯る次第で、その運動は着々功を奏してゐたが、左大臣近衛忠熙は、猶ほ水戸の現狀が勅諚を遵奉するの力あるや否やを覗察せんが爲、旨を西郷に授け、西郷は安政五年八月四日京都を發して江戸へ下つた。

然るに八月五日には御讓位の御內沙汰となり、九條關白も恐懼する所を知らず。七日には三公、兩役の御前會議となり、遂に近衛忠熙から、水戸家へ勅諚降下の事を奏上に及んだのだ。その時議奏、傳奏の兩役からは、種々懸念の事を申述べたが、左大臣近衛忠熙、右大臣鷹司輔熙兩人が『決して憂慮する事はない』と言上したから、遂に勅諚は八月八日を以て、水戸に下し賜り、併せて幕府にも下し給ふ事となつた。

惟ふに西郷が復命を待たずして此處に及んだ事は、一方には九重雲深き所に於て御讓位などの御內沙汰の如き切迫の事情があり、他方には日下部、鵜飼などがこれを請うたからである。

最も有志家の義憤に[illegible]七日に[illegible]

然るに彼は如何にも他所々々しき文句を以て、左の一書を[illegible]井忠義の親臣にして、彼と懇意である堀田孫兵衛に與へてゐる。それは實に勅諚降下の當日、安政五年八月八日附である。

『七日、主上　勅書を以て列公を被レ召候。九條左府公、鷹司右府公、近衛左府公、三條內府公、中山公、其他議奏、傳奏御掛の諸卿不レ殘御參內の處、主上出御にて、叡慮の趣被二仰出一候處、何れも御敬伏にて、廟議一決仕り候。九條公には、兼て彥根公と御同意にて、關東へ御內通之處、昨日廟堂にて一言も御出し被レ成候事出來不レ申候。殊に御畏縮被レ成候由に依て　勅命宣旨之御使、今八日早打にて出發に候。御使は江戸御老中方の下をはなれ、尾張公、水戸公へ　宣旨を被レ下候。此度何の仔細にて、尾張公、水老公、越前侯を押籠候[illegible]

[illegible]

古今獨歩の御英斷、奉二恐悦一候。右は相違無レ之候。今朝粟田様より伊丹蔵人御使にて、源次郎へ急に爲レ知との御沙汰にて、難レ有奉レ存候。五六日之間に、江戸は勿論、天下不日に大變動可レ致候。當月二四日に、尾張より二千餘人、二手にわかれ出發候て、中納言様を御國へ迎歸候覺悟之由。御歸國候へば直ぐ御上京と申沙汰に付、元より當所に先日より大道寺始麼々三四人、二百人計にて參居候。御國大守公（若州小濱藩主酒井忠義）は、兼て彦根公とは無二の御合體に候へば、如何にも甚御危事と奉二恐察一候。何卒早々深栖大夫君を始め、御一同に御覺悟御定被レ成候様奉レ存候。下拙放逐の身として、可二申上一事には無レ之候へ共、胡馬北風に嘶之情不レ得レ止、此段貴公樣迄御心得之爲申上候。以上。

八月八日

× × ×

梅田は申迄もなく、若州小濱の出身にて、本來酒井家に仕へ、後浪人の身分となつた者であるから其の關係を以て、[illegible]

などと書いてある。

而してこの手紙を見れば、如何にも當時勤[illegible]運動者の[illegible]分がよく顯はれて居る。殊に本文中、

『今朝粟田様より伊丹蔵人御使にて、源次郎へ急に爲レ知との御沙汰にて、難レ有奉レ存候。』

とあれば、論より證據、如何にこの事件に就いて、粟田宮、即ち朝彦親王が、中心人物の一人として、御活動遊された事がわかる。

固より幕府方の骨頂にて、井伊の特別命令を受けて、京都所司代に再任したる酒井忠義が、此の手紙にて動かざるべき筈はなかつたが。然も此の手紙は不幸にして井伊黨の手に落ち、これが少くとも安政大獄を惹起す罪案の主なる一になつた事は、神ならぬ梅田が、固よりこれを豫知すべくもなかつた。

海舟全集

第九卷

十月配本
第九卷內容

■**海舟日記**＝文久二年より明治維新に至る迄の身邊に起こる日々の出來事、交渉、結末、所感を克明に細大洩さず記す。國家問題、悲喜劇、踵を接して來り先生の面目紙上に躍如たり。

■**牆の茨の記**＝萬延元年仲冬より、折に觸れ見聞せし所を記述す。從來寫本としてのみ傳はりたる貴重なる史料なり。

■**鷄肋**＝維新前後の先生遭遇中最も華かにして裏面悲痛なりし場面を記述せるもの。江戸城明渡しの一節の如き特に印象深きものあり。

■**夢醉獨言**＝先生の嚴父左衞門太郎翁の言文一致赤裸々な自叙傳。數奇な其生活を叙する中に、海舟先生の[illegible]、幕末旗下の生活が描かれてゐる。巧まざる好小說。

■**解難錄**＝[illegible]せられ、金庫皆空、張兵脫営、至英館見巴屆氏、水野筑後臨終一言、納城談[illegible]未だ世に示さざる秘錄なり。

■**建言書類**＝[illegible]、外交に財政に自說を披瀝して廟堂に獻策するところ尠からず、茲に收錄す[illegible]に値ひす。幕末明治側面史の貴重資料。

既刊

第一卷　開國起原（上）
第二卷　開國起原（下）
第三卷　吹塵錄（上）
第四卷　吹塵錄（下）
第五卷　吹塵餘錄
第六卷　陸軍歷史（上）
第七卷　陸軍歷史（下）
第八卷　海軍歷史

全十卷　豫約刊行
一冊金四圓
一時拂金三十八圓

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝（43）自一一二一至一一二四

全四巻（四六判。天金。絹裝。木版十度刷裝幀 平福百穂氏。題簽 菅虎雄氏）

一冊貳圓五十錢 送料各廿四錢

葛西善藏全集

第一巻（既刊）小說

自大正元年九月至大正九年四月計二十三編

第二巻（既刊）小說

自大正九年五月至大正十二年四月計二十三編

人生苦のあらゆる悲慘と戰ひ、而も身を切られ、肉を跑がれ、餓に當面して悠悠酒に親しみ、命の旦夕に逼るをつくづく知りつつも、また、嬰兒、糟糠の人の飢ゑを前に哀み見つつも、意至らざるの故を以つて二年の久しき筆を握つたまゝ瞑想するのみ、一字も書せず、――終に逝く矣。此全集を讀むもの誰か藝道の至難を嘆ぜざる。そして人生の陰慘と苦悶とに打たれざる。

第三巻新刊

（自大正十二年至昭和二年小說）

〔内容〕M君との話。迷信。遺産。蠢く者。妻の手紙。落葉のやうに。椎の若葉。從弟。湖畔手記。血を吐く。バカスカシ。霜枯れ作家の話。死兒を產む。弱者。われと遊ぶ子。もぐる。海岸にて。W老伯。醉狂者の獨白。忌明。

第四巻 隨筆手簡集（近刊）

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇三

新選 北原白秋集（散文篇）

最新刊（七四一頁）

定價壹圓　送料廿錢

目次

新選 長田幹彥集

目次

新選 横光利一集

最新刊（七四〇頁）

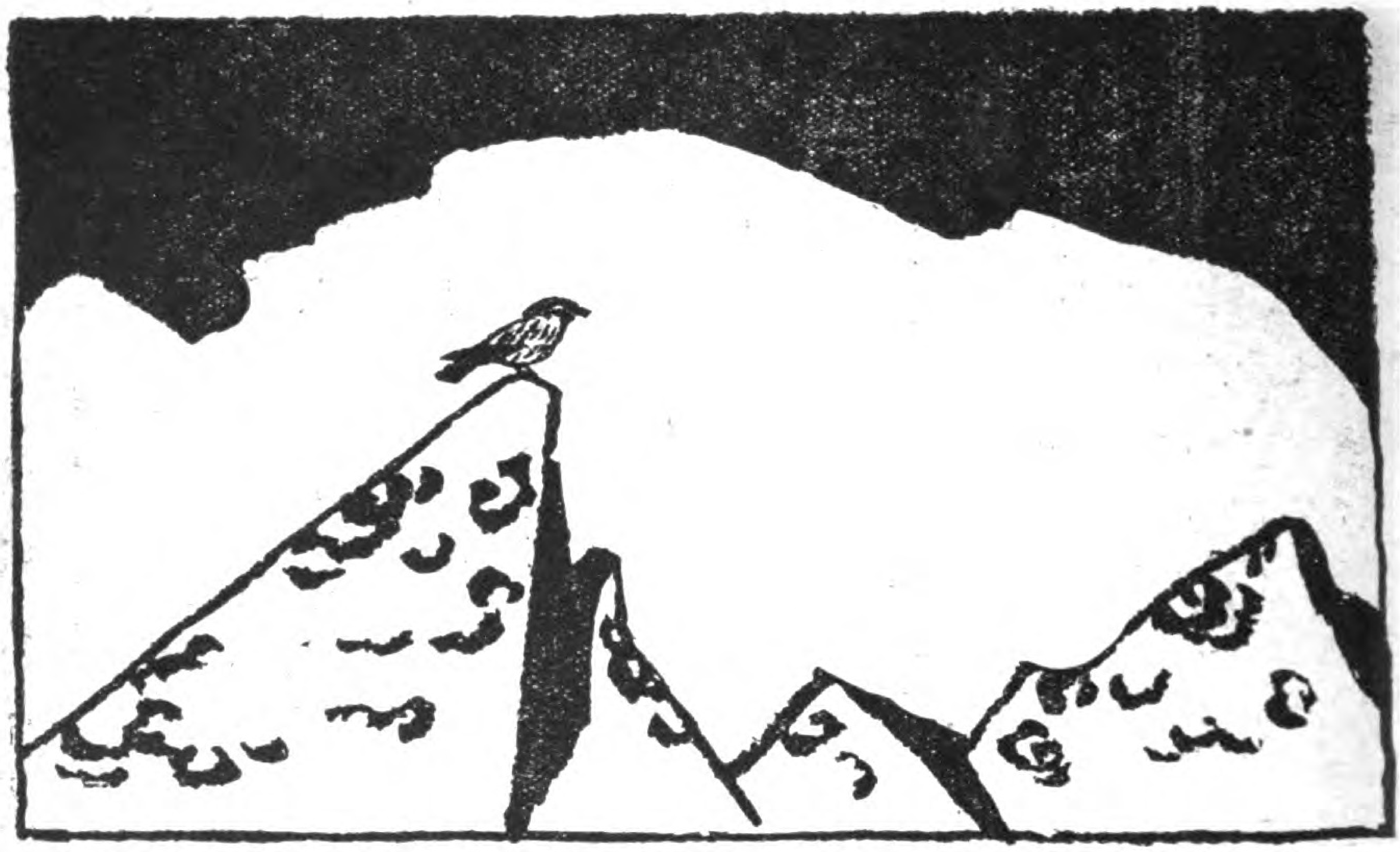
定價壹圓　送料廿錢

目次

新選 近松秋江集

目次

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇一



赤い貨車

中條百合子

1

そこは廣い野原で、彼方に堤防が見えた。堤防の彼方に川があるのではなく矢張り野原で、轍の跡が深く泥濘に喰ひ込んだ田舍道が、堤防の橋の下をくゞつた先に續いて見えた。工事の始めから堤防は大きな空の下で弓なりに野を這ひ、多分愉快な自動車道にでもなる譯らしかつた。革命の時工事が中止された。其以來いつになつても働く人間の姿は見えず、或箇所は橋をかけるやうに堤防と堤防とを斷りはなしたまゝ、鐵橋は無かつた。村に近いところでは既に堤防の砂が崩れた。未完成な堤防に馴れた子供達が其處を駈け登つたり駈け下りたりした。山羊が高いところで白い腹の毛を風に吹かせて居ることもある。

ナースチャは、伯母の家へ棲むやうになつてから、ずつとこの堤防を見馴れてゐた。然しナースチャ自身は、一度も堤防へ攀ぢ登つたことはなかつた。遠くから眺めて、時々、いゝ景色で心持がよいと思つた。さういふ氣質は、ナースチャの死んだ親父が彼女の内へのこして行つたものだ

野原の中に、もう一つ動かず毎日毎日ナースチャの目に映るものがあつた。それは工場とは反對側の野の彼方の果にある貨車の列だ。貨車は八台見えた。七月の太陽に暑さうな赫土色に光つて見えた。一日ぢゆう貨車は動かないまゝで居た。其に氣がついた時、ナースチャは何だか楽しみな心持で、元氣づいた。——あの貨車はいつ動き出すだらう？　この畝をきつて仕舞ふのと何方が早いか。

ナースチャは、馬鈴薯畑でさくりをきつて居るのであつた。畑は本式のものゝ畑とは云へなかつた。少し深く掘ると腐つた菜葉の破片だの襤褸だの鑵詰の空鑵だのの出て來る原つぱの端だが、その地面の草を四角く截つて仕立屋の伯母が馬鈴薯畑を作つて居るのだ。

雑草のいやに根つこのところを握つて、白い布を頭にかぶつたナースチャは地面を掘りかへしつづけた。掘られた土は冷やりナースチャの素足の甲にかかり、四邊には暑い草いきれと微かな土の匂ひとがした。ナースチャの桃色木綿の裾に風が吹いた。——

ナースチャは、わざと自分の腕の下から雀斑のある頬つぺたを逆にして、ちよい〳〵人氣ない原つぱの彼方の空と其下の赤い貨車の列とを覗いた。貨車は動かず、空の白雲が流れて、野原の半面と貨車とを大きく翳らした。

2

村道は埃つぽい。

村道の端れに並木道があつた。その古い菩提樹の並木道をあつちへ横切ると、石敷の歩道が始る。楊樹の影の落ちる歩道は八方から集つて、緑のたまりのやうな公園と成つた。

公園は殆どロシアぢゆうに有名だ。天氣のよい日曜日、池のまはりやベンチの上に、あらゆる鮮やかなプロレタリアの色彩と笑聲が團欒した。ギターと手風琴の音が木立の蔭から夜まで響いた。石段の上で、赤い布をかぶつた工場の娘が兵卒と踊る。公園ぢゆうにアイスクリーム賣りの手押車と向日葵の種、菓子等を賣る籠一つ或は二尺四方の[illegible]よき店がちらばつた。市からは工場の見學團が樂隊を先頭にしてやつて來る。見學團は停車場から一露里の道中で薄り埃をかぶつた大他處ゆきのエナメル靴の上から、草鞋のやうなカヴァーを麻紐で踝に括りつけ、整然に、力づよく押し合ひながら、エカテリナ二世宮殿の毛氈の上を歩いた。彼等が、支那皇帝がこの精力的な女皇に贈つたといふ堆朱の大瓶を眺めて居る間、そして、この大して美しくとも思へぬ瓶一つのために八十年間三代の工人が働いたといふ説明を聞いて、ぼーつと頭のなかにその長い歳月に費やされた工賃を計算さ

せて居る時、別隊のプーシュキン見學團が、宮殿の外の往來で日にやけながら或家屋の軒を見上げて居た。

──諸君！　此處が我等の大詩人プーシュキンの學んだ貴族學校長、エンゲルガルトが住んで居た家であります。

十數人の男女が顎を揃へて見上げたその水色石造建築物の外觀は極めて平凡で、歩道に向つた下の窓の奧に「下宿・レオノヴオイ」といふ札が出してあつた。白いカーテンの上からゼラニアムの赤い花が見える。

見學團からは見えぬ其家のテラスで、五人の男女がカンヷス椅子にかけて居た。モスクヷから一日遲れに到着する「イズヴエスチャ」が老教授の膝の上にあつた。彼は、水つぽく凋びた婆さんみたいな鼻のある顏で目の前の椴樹の梢を眺めて居る。椴樹は今七月で、葉かげに青塗りの木造飛行機模型のやうな實の房を一杯つけて居るのであつた。革命後十一年目──生活…………學士院──「イズヴエスチヤ」第六面にＣＣＣＰ學士院正會員候補者氏名が發表された。特殊技術部の候補者には、ゴスプランのグレブ・マクシミリアノヴヰツチ、クルジジャノウスキー。歷史部ポクロフスキー。哲學部の候補にはブハーリン。今秋四十何人か全然新しい會員が選擧され、その中の一人として、目下暑いモスクヷの第六回世界共產黨大會で、尨大な報告演說をやつて居る丸い眼のブハーリンを學士院の内部に迎へるだらうといふ思想に、老教授は歡喜を感じ得ないのであつた。暖爐燃きの男しかコンムニストは居なかつたのだ。教授は、色のわるい平手で、ぐるりと疎髯の生えた自分の顏を撫で廻して云つた。

──……ふむ。今日は埃つぽくて、餘りぞつとしない天氣だ

──さうですとも

隣のカンヷス椅子から、鼠色の肩かけを胸の上で合はせた太つた女が答へた。

──大體今年の天氣はお話になりませんよ。氣候まで昔とは何だか樣子が違つて來た。こんな寒い夏なんて！　聞いたことがあるでせうか。十度ですよたつた！

彼女は心臟病で、一日この下宿のテラスに坐り通して居るのであつた。

プーシュキン見學團は、のろ〱往來を横切り、エカテリン宮バロック式窓の外で半圓を描いた。彼等が立つて一齊に見て居るに、一匹犬が居た。犬も立ち止つて見學團を眺めた。人通りが往來不圖絕えたので、遠くから其樣子を見ると見學團はさながらついて說明を傾聽して居るやうに見えた。

テラスの手摺に深くのり出して靠れ、笑ひながら此

居た一人の女が、顔面に

――ウラヂミール・イヴノヴヰッチ、一寸御覧なさい

と叫んだ。禿げのこつた髪をくりくり坊主のやうに短くして、太短い首、赭ら顔の電氣技師が女の傍へ行つた。

――昨日の先生でせう！　あの我等の大詩人プーシュキンをやつて居るの

――どれ？

技師は、見出すのが餘程困難と見え白粉の濃くついて居る女の顔の極くそばへ自分の青く剃つた頬つぺたを持つて行つた。

――何處に？

――そら、あの黄色い布の美しい人の前

――違ふらしいな。昨日の男は茶色の襟飾でしたぜ。

――かわいさうに！

女は、技師の肩に手をかけた自分の頭をおつつけさうに喉を反らせ、やがてこゝみ、大笑ひした。

――まさか襟飾を茶色から黒にする勇氣もない男なんて此世にあるもんですか！

笑ひながら、ひどく黒く光る瞳でウラヂミール・イワノヴヰッチの[illegible]し[illegible]を[illegible]いた。

――さうぢやありませんの――いかゞ？

女の口が白い顔から浮き出して紅く開いたまゝ、一面に技師の顔に向つて迫つて來るやうな感覺であつた。

肩の深くあいた白服の胸に三色菫の造花をつけて笑つて居る女は、市の活動常設館ピカデリーのプログラム賣りが職業であつた。

――自分で可笑しくなつてしまひますわ、二つの外國語を知つて居て、中學校を金牌で出た女がこんな仕事しかないなんて……

それは食卓でのことで、思はず彼女の顔を見なほした數人の年とつた女には目をかけず、其時もやつぱり彼女は野菊の白い花越しに技師ばつかりを見つめ、焦立たしげに笑つた。

――ねえ、かういふのがロシア語では機會均等と云ふんでせうか？

アンナ・リヴオーヴナその他女達は、黙つて拂ひ下げ品ロマノフ家紋章入の皿から氷菓と一緒にこまごました思ひを飲み下した。例へば八十五留――而もそれがやつと歩合でとれる金で、どうして夏だからと云つて下宿へ來て、二週間に八十四留拂へるであらう？　(又は) [illegible]あゝやつて目先を更へて出て來る着物は、どういふ工面で出來ることやら――

女のいふ二[illegible]の知識や金[illegible]やらが信じられぬ存在になるのであつた。

電氣技師だつて其等を信じるといふのではなかつた。たゞ、一ケ月に取れる金の八十五留と二週間に出せる金の八十四留との間にある矛盾が、漠然遠くない過去、資本主義時代のペテルブルグ生活を思ひ出させ、女が、私の夫、私の夫と云ふ職業も不明な夫が複數の感じで彼に映るのであつた。其時、タタール風な頭の電氣技師は妻君より早く起きた。來年銀婚式をするべき妻君のユリア・ニコライエヴナが、小さい歯にブラッシをかけて居る間に、彼は今朝は薔薇色の裝の女と公園の奥を散歩した。技師だけ妻君の室に戻り、再び夫婦で食堂へ降りた時、公園から眞直食堂に入つて居た薔薇色のニーナは、待ち兼て居たやうに立ち上つて、先づ細君の手を握つた。

——お早うございます、ユリヤ・ニコライエヴナ。何ていゝお天氣なんでせう今朝は！　私ぢつとして居られなくなつて散歩して參りましたの御一緒に——ねえ、アレキサンドル・ミハイロヴッチ

女は、可愛い自分の祖父さんでも抱くやうに七十才の、だぶ〳〵した麻の詰襟服を着たアレクサンドル・ミハイロヴッチの肩にさわつた。が、半中氣で耳の遠い老人にニーナの言葉はまるで聽えなかつた。

仕立屋タマーラは、同じ下宿の中でもこんな工合な食堂には何の興味も無かつた。黒と白の四角い石を碁盤形に敷いた廊下がある。廊下は暗い。その突當りの小部屋で、下宿の主婦の肩まはりにテープを廻して働いた。小部屋の窓の外には楡の木が枝をひろげて居た。凸凹石の中庭越しに、裏の長屋と家畜小舍が見えた。大鋸が二挺、白壁が落ちて赤煉瓦の出た低い小舍の外壁にもたせかけてある。牛の臭ひが時々した。

3

雨が降り續いた。やんでも太陽は出ず、風がつめたかつた。

大きな仕立臺に向つて、伯母のタマーラが田舍住居にしては白い、丸い出額をふせて黒絹のユープカへ飾紐をつけて居る。無口な娘にでも別に優しい言葉などかける事ない、體と手の小さい寡婦だ。向ひ合ひでナースチャは不恰好な子供服の裾かゞりをやつて居る。後の板の隙目へ黄色い編下げの頭をくつつけ、對手によつかかるやうにしてシューラがナースチャの肱を二本の指で締めつけた。シューラは退屈だ。シューラは茶色の服を着た骨ツぽい肩をブル〳〵震はせ、ナースチャの顏色をうかゞひつゝ指に力を入れる。

——オイ！　シューローチカ！

——痛い？

默つてナースチャは肱を動かし、シューラの手をはらひのけた。シューラは、鋭い聲でにや〳〵笑つた。暫く間を置き今度は、おはぢき

でもするやうに首をまげ、狙ひをつけ、ナースチャの肱の關節を彈き始めた。此をやられると何かの機勢で腕がピーンと指の先まで痺れ、心持が悪いと云つたらない。ナースチャは怒つて惡體をついたり、追ひ廻したりした。シューラは、だから退屈だとこのてを使ふのだ。ナースチヤは、裾かゞりの上にうつ向いたまゝ激しくシューラを小突いた。

——およしつたら！　シユーロチカ

——何故さ

——聽えないの？　お、よ、しつて云つてるのが

ナースチャは、どんな巫山戯たつて笑つたつて叱りもしない代り一緒に笑ひもしない伯母の眞向ふに坐つて、面白くなれないのであつた。猫も居ない空台所へシューラは出て行つた。

伯母が云つた。

——もうどの位ですむかい？

——五時ばかり

——すんだら畑みて來て呉れないか

耕地で男が二三人水はけをやつて居る。

原つぱの端の馬鈴薯畑は、惡い天氣あげくで作物が縮み、却つて園りの雑草が伸びたやうに感じられた。七月だのに、馬鈴薯は花を開くどころではない。

ナースチャは、鍬の根つこを兩手で握り、空地のまはりの淺い凹みをほぢくりかへした。此處は土地が一帶低いのだから、ナースチャが畑のそとの雑草の根の間へちつとやそつと鍬目を入れたつて、溜水は日が照りつけるまで大してひきはしないのだ。

ナースチャは、熱心に鍬を動かしたり、ぼんやり原つぱを見渡したりした。灰色につめたく光る空が野の上にあつた。堤防では、通る人もない。

仔豚が一匹往來に出て居た。たんぽぽや馬ごやしの茂つた往來端の柔かい泥へ鼻をつつこんだなり、一心不亂に進んで行く。ナースチャが振りかへつて見ると、可なり遠くから土鼠の掘り上げたやうな泥が續いて居た。穢い、可笑しい畜生と並んでナースチャは歩いた。

白樺が六本生えて居る。柵から空地へ入つたナースチャは思ひがけず石の上にぱつとした若い女が立つて居るので吃驚した。女は黄繻子の頭巻きで、下から黒い髪の束をこぼし、家の外羽目に打ちつけてあるT・A・スミルノワ、黒書でいた白エナメルの表札を見上げて居た。

ナースチャを認め、女は眼尻で一寸笑つた。その眼は少し日焦けした顔の中で矢張り黒かつた。いゝ外套を着て居る。

長雨にふり込められた後やつと人を見た感じで亢奮し、ナースチャ

は梯子を駈け登つた。伯母のエナメル名札こそ屋根の下にうつてある
が實際彼等の住んで居るのは二階の二間だけで、七家族が一つの木造
二階建家屋に暮して居た。階下は便所の臭ひがひどくして居た。
　緑色布張りの扉を開けるなり入つたナースチャは、首をのばし
——ヘーイ・シュトロチカよ　と呼びかけた口を素知らず手で蔽ふ
た。女の客が來て居た。仕立物台の前の床几にかけ、伯母と話して居
る。ナースチャは、百姓娘らしく驚かされ、そつと室の隅へ辷り込ん
だ。
——まあ！　昨日來なすたんですか？　何て馬鹿なことをしたんだら
う！　お主婦さん、あなたに何も云ひませんでしたか。
——いゝえ
　灰色と白の縞の多い服を着たその客は肩をすぼめた。シューラは蒼
い顔に眉をきつと引き締め、瞬きもせず客の一擧一動を見守つた。
——私んところになほしてお貰ひしたいものがあるんですがね、
——へえ、
——一枚丈をつめるのと、一枚一寸袖の工合をなほしてお貰ひしたい
のと——ドイツに居た時買つたんで、品がいゝからすてるのも勿體
ないと思つてね、
　仕立屋の伯母は、別に故意とでない落着いた口調で
——ようございます
と答へた。
——直ぐ出來ます
　女客は少し床几からのり出すやうにし、續けた。
——それで……何時ですか、いつ來て下さいます？
——明日上ります
——私の室でやつてお貰ひ出來ないかしら
——それは出來ません
　仕立屋の伯母は、落付いて、然しきつぱり斷つた。
——あなたのお仕事だけして居るんでありませんから
　客は、假縫には自分が又出かけて來てよいと云つた。
——あなたよりは私の方が暇ですからね、誰に何……。で——どの
位で出來るでせう大低……下宿の前にも一軒あつたんですが、お
主婦さんが貴女へ紹介して下すつたもんだからわざ／＼來たんです
よ……
　ナースチャとシュトラとは緊張した顔を仕立屋の伯母に向けた。伯
母は何と答へるであらう。どの客とでも話が此處で最も白熱し、彼女
等はかけ引きを眺めるのであつた。
　伯母は、シュトラそつくりな顔のない蒼白い笑ひを浮べて默つて居

る。(昨日彼女が見つけなかつた商賣仇を、夏だけ來るこの人が下宿の向ひに今日見つけたのだらうだ)

――あらましのところでいゝんですよ、勿論

――まだ品物を拜見して居ないんですから……

――勉強して下さるやうなら、私の友達でおたのみしたいつて云つて居る人もあるし……いくらでもお世話しますよ、ねえ

客はナースチャの方を見て幾分故意とらしく元氣に笑つた。ナースチャは笑はなかつた。

――私は子供達を食べさせて行かなけりやなりませんですからね

伯母が云つた。

――でも、御心配いりません。とにかく明日品物を拜見してからのことにしませう

ナースチャとシューラが中庭を見下すと、黄繻子の頭巻きをした若い女は、さつきの石の上で小さく足踏みをし乍らまだ待つて居た。鼠色のショールを頭へかぶりながら彼等のところへ來た女客が足早に下から出て行き、直ぐつれ立つて柵のそとへ去つた。

4

椽の椅子にナースチャがかけて見て居た。

アンナ・リヴォーヴナは、髪に氣をつけ乍ら頭から悠くり服をかぶつて着かけて居る。のびた腕の下、レースの澤山ついた下着。

すつかり裾をひきおろし、彼方此方撫でなほし、アンナ・リヴォーヴナは、長い鏡の前へ近づいて立つた。

――どう？

ナースチャは、自分に云はれたのかどうか判らず、默つて居た。

――何て云ふのお前さんの名――マーシェンカ？

横向きになつて、袖のつけ工合を鏡の中で眺め乍ら訊いた。

――いゝえ。ナースチャ

――おや、ナースチャ、見て頂戴、腕の下んところがつれてやしないかしら

ナースチャは立つて絹紗のやうな紫の服を見た。

――何ともありません

其服をぬぎ、今度は裾をつめた方のを着て見、小一時間愚圖々々して居る間に、アンナ・リヴォーヴナは、ナースチャにチョコレートを食べさせた。そして、田舍娘の細そりした體に不釣合ながつしり大きい手を眺めながら、こんな問答をした。

――お前さん、丈夫？

――えゝ

——もう一人居た娘さんと姉妹なの？

——いゝえ、あの娘は從妹です

——へえ、ぢや誰の阿母さんなの、仕立屋さんは

——シユーロチカの

——お前さんの親は？　田舍？

——死にました

ナースチヤは變に切ないやうな、不愉快のやうな表情をしてぶつきら棒に答へた。

——不仕合せな！　二人とも死んだの？　いつ？

——飢饉の年。………私共んところ、そりあ病氣が流行つたんです、始め阿母さんが臥て、それからお父さんが惡くなつて、お父さんが十日先に死んだ。棺が二つ出ました。私もやつぱりその時は病氣で、熱くつて熱くつて………窓からどんなに飛び出したかつたか！

ナースチヤは思ひ出すやうに室の窓の方を見たが、急に顔を近づけ

——御覧なさい、家ぢや兄さんが死んでから、何も彼も滅茶に成つちやつたんですよ

熱心に、低い聲で囁き始めた。

——兄さんが生きて居るうちは、本當に何だつて有つたんです。パンだつて、バタだつて、麥粉だつて。………兄さんが死んだ時は、泣いた。お父さんも泣いた。兄さんの金時計だけは友達が持つて來て呉れましたけど………其はいゝ時計だつたんです

——その兄さんて、何して居たの？

——食糧のことして居たんですけど——何て云ふんでせうか。………
…兄さんはボルシエビキだつたんですよ、出かける時、お父さんがそれは確り兄さんを抱いて接吻してね、兄さんの唇から血が出る程きつく接吻したんです。兄さんも阿父さんに接吻してね、そして出かけて行つたんですよ

アンナ・リヴオーヴナは溜息をついた。暫くして訊いた。

——伯母さん、親切にしておくれかい？

ナースチヤは、白木綿の襯衣の背中へ手を廻し、それを下へひつぱるやうな身振りをし乍ら、短く、

——あたりまへです。

と答へた。

——何處かへつとめちや居ないの？　ナースチヤ

——村には仕事がないんです

——………さうやつて伯母さんところにいつまで居たつて仕様がないねえ………幾つ？　お前さん

——來月で十七です

——モスクワへでも來りやいゝのに

半ば獨言のやうに云ひ、アンナ・リヴオーヴナは立ち上つて、仕立代をナースチヤに渡した

——ぢや、布地はこの大伯母さんが見えた時、預つて貰ひますからつてね

5

今まで知らなかつた感じがナースチヤの心に生じた。モスクワへ、自分でも行けるのであらうか？　原つぱへ出て、夏空の下の長い堤防や遠くの動かぬ貨車の列を見る時、ナースチヤの眼に涙が浮んだ。小學三年だけ行つたナースチヤの頭に、アンナ・リヴオーヴナの言葉はつよくうち込まれ、彼女は忘れることが出來ないのであつた。然し、ナースチヤは口に出しては何も云はなかつた。自分の心がこわかつた。

或午後、市場へ買ひ出しに出かけて居ると夕立がかかつて來た。ナースチヤはいそいで市場の拱門の下へ逃げ込んだ。拱門は奥行が深く、共同販賣所に添うて十五哥の菓子や餅を賣る三文菓子販賣所や、煙屋、古着賣りなどの店が張られて居る。五六人の勞働者と、子供を抱へた一人のツイガンカが矢張り拱門の下へ雨宿りに來た。ツイガンカは裸足で、赤い更紗の長く濶い裾を蹴るやうに歩き、一人一人の勞働者の前に手を出した。錢をやる者は無い。風がさつと吹く。雨あしが白く煙つて移つた。勞働者の濡れた服が乾きかける一種の匂ひと煙草の匂ひが拱門のなかに罩もつた。山羊が一匹、野菜店のさしかけた板屋根の横から雨を衝いて此方へ向つて駈け出して來た。拱門の下へ入ると、山羊は壁によせて開けてある鐵扉と内壁との間へ頭だけ突込んだ。さうすると安心したやうに山羊は目を細くし、時々短い白い尻尾をぶるゝと震はした。ナースチヤはむき出しな腕に籠を引かけ、其山羊のとぼけた鼻面を見ながら笑つた。

——歡迎………

ナースチヤの肩に後から觸る者がある。

——お前さんも此處へ逃げ込んだの？

振返つて見て、ナースチヤは顔を赧らめた。

アンナ・リヴオーヴナが自分の體からはなして洋傘の滴を切り乍ら立つて居るのであつた。

——氣違ひみたいなお天氣ぢやないの

ツイガンカが、目ざとく彼女を見つけ、傍へよつて來た。

——可愛いお方、占ひしませう。たつた十哥、占ひさせて下さい

アンナ・リヴオーヴナは手提袋をあけ、三哥の銅貨をツイガンカの黒い、爪だけ白い手の平にのせた。ツイガンカは叩頭し、拱門の端へ去つた。

——私は占ひがこわい

アンナ・リヴオーヴナがナースチヤに囁いた。

——お前さんはどう？

ナースチヤは判らなかつた。彼女はツイガンカに一遍も物乞ひをされた事がなかつた。——その位、見すぼらしい村の娘なのであつた。

雨が小降りになつて、アンナ・リヴオーヴナとナースチヤは拱門の下を出た。

——お前さん急ぐの？

——いゝえ

歩道の横で女が三人並び、今の夕立で柔くなつた石の間の地面で草毟りを始めて居る。其前を通り過ぎた時、アンナ・リヴオーヴナが云つた。

——お前さん、本當にモスクヷへ出る氣はないかい

ナースチヤは、顔や胸があつくなつて何と返事してよいか分らなかつた。何となく心ひかれたからアンナ・リヴオーヴナについて來は來たのだが……

——若し來たいなら、私が歸る時一緒に行つてもいゝね

アンナ・リヴオーヴナはつゞけて云つた。

——私の家でも働いてくれる人がいるんだからどうせ

——私にはお金がありません

——その位のことは私が立て換へといて上げてもいゝ。——お前さん、床の拭きよう知つてゐるだらう？

——知つて居ます

——洗濯出來るだらう？

——えゝ

——スープのとりようだつて知つてるわね、勿論

ナースチヤは、ほんの少し弱く

——えゝ

と答へた。(伯母のところでは、一月に二度位しか肉入のスープなど食べなかつた。)

——それ御覧！

夕立の水たまり、そこに今は日光と青葉のかげが爽やかにチラして居る上を越し乍ら、アンナ・リヴオーヴナは陽氣にナーャ斷言した。

——もうちやんと立派なお女中さんぢやないの！

主人は技師で、大きい娘はもうお嫁に行つてしまつて居て、家は暇なこと月給は十三留といふことをアンナ・リヴオーヴナは説明した。

——私は今のやうにして居るよりいゝと思ふね

——…………

——どうしたのさ黙り込んで……あゝ、別れたくない人が居るね？

——伯母さんに話して下さい、アンナ・リヴオーヴナ！

ナースチヤはとびつくやうな本氣さで云つた。

——どうぞ伯母さんに話して下さい。私は行きたい！　本當に行きたいんです！

ナースチヤの雀斑のある顔が急にみつともなく上氣せて、彼女は涙を頬つぺたの上に落した。

——泣かないだつていゝのに、可笑しなナースチヤ！

モスクワでは職業組合に入る女中が多くなつた。職業組合員の女中は、まるで役人でも頼むやうにやかましい證書を交換したり、一つ間違ふと訴訟を起したり、アンナ・リヴオーヴナにはひどく居心地わるかつた。それに折角四五月經つて慣れたと思ふと六月目には出てしまふ者も多い。職業組合員になるには六ヶ月働いた上でなければならず、組合員になると、アンナ・リヴオーヴナの利益とは關係ない利益が彼女達にあるのであつた。ナースチヤは職業紹介所から來る娘でなく、田舍の原つぱから眞直自分の家へ來るといふだけでも、アンナ・リヴオーヴナは滿足なのであつた。

——可愛いムーシエンカ

アンナ・リヴオーヴナは娘へ囁いた。

——この間は手紙をありがたう。坊やの歯々が到頭生えたつてね。お目出度う。私は本當に嬉しいよ、ソヴエトの私の孫の歯も矢張り基督様のと同じに前歯から生えることが確められて。イワン・ドミトリヰッチさんは相變らず會議會議かい？　昔の妻は良人に戀愛に出かけられてよく淋しい思ひをしたものです。今の妻は會議に良人を奪はれる。會議が戀愛より悪いところは、會議に季節がないことゝ、獵師小舍での焼肉の代りにお茶のぬるいのとサンドウヰッチで夜の十二時五十分まで煙草で濛々した席に坐つて居なければならないことです。まして戀愛には、あのあぶなかしいエナメル靴をはいた女秘書役など云ふものはついて居なかつたんだからね！（だがイワン・ドミトリヰッチには、呉々もよろしく傳へてお呉れ。私は母親の本能で、彼がさうざらにはないお前の良人なのを

知つて居るんだからね。

さて、私も愈々明日此處を引きあげます。例年の通り、日焼けと散歩で潰した靴の踵のお土産の他に、今年は一寸した掘出し物がある。當てゝ御覽！　女中がつれて歸れるらしいのです。今のモスクワで、身元のはつきりした田舎出の女中は、人造絹糸でない絹ものと同じ位珍しいぢやあないか。大して氣は利きさうもないが、お前も知つて居るサーシユカね、あれのやうに、瞬く間に三本も赤葡萄酒の瓶をひろくもないユープカの間へちよろまかすやうな藝當のないのも確からしい（孤兒だから、面倒でないし、辛棒もするでせう）若し――

アンナ・リヴオーヴナは、若しお前の方で欲しければと書きかけたのを消し

――若し目鏡違ひでなかつたら、どうぞお前もよろこんでお與れ

と結んだ。

下宿の夕飯後、大きな鑪のある客間の長椅子で、アンナ・リヴオーヴナは手紙のその部分を面白さうにニーナや技師の妻ユリヤ・ニコライエヴナなどに讀んできかせた。（彼女の左の手首から下がつて居る袋の中にある、手紙のもう一枚の方には、ユリヤ・ニコライエヴナの夫である頭の禿げた電氣技師が、妻の留守の夜、如何那にバタンと閉めた戸を又そつと開けてニーナの部屋へ忍んで行つたか、翌日二人がどんなに人目を拘はず、食べかけたパイを皿ごととりかへつこして食べたか恐ろしいいゝ事實を書いてあるのであつた。）

アンナ・リヴオーヴナの少し顫えを帶びた聲の合間合間にニーナは、

――素敵！　素敵！

と叫んだ。

――何て愉快な、機智に豐んだお手紙なんでせう！　本當に私母に聞かせてやりたい、此那面白い手紙を貰ふ娘さんも世間には居らつしやるんですものねえ。全くゾーシチエンコと合作がお出來になるわ、ねえ、ユリヤ・ニコライエヴナ？

小さい白い布に刺繡をしながら、歯から洩れる聲でユリヤ・ニコライエヴナは

――さあ

やゝ重く答へた。

――私はゾーシチエンコを知つて居るけれど、何だかがさつなひとで……私は好きでありませんよ

下宿へ食事だけしに通つて來る小柄な軍醫が、下から議論の中心になつたゾーシチエンコの綴の切れた短篇集をもつて來た。彼は「恐ろしき夜」を、女連に朗讀し始めた。

此時間に、村端れの仕立屋タマーラの窓からランプの光が夜の村道までさして居た。

ランプの眞下で伯母が羅紗の裁物をして居る。明日立つナースチヤが、隣室から光りで戸口のところだけ明るい臺所で、大箱の蓋を開け、荷ごしらへをして居る。僕の下着と、二枚の冬服と一枚外套があるばかりであつた。今迄、その上に毎晩ナースチヤが寢て來た箱の中には、まだいくらか古着があつたが、どれも小さくなつたり、きれて居たり、役に立つのはなかつた。

シューラが、箱の底をほぢくつて、すり切れた、誰かの古の狐の皮を引ずり出した。

――いゝもの！ いゝもの！ さあ、ナーシエンカ、これもつめといでよ

――おやめよ

――何故さ！ モスクヷ寒いよ、ホラ

狐の皮を自分の頸に卷きつけシューラは、嬌態をしてナースチヤのぐるりを歩き廻つた。

――いゝ襟卷だよ

相手にならず、默つてあるのゝ默つてないのゝ靴下をつかんで麻袋につめこんで居たナースチヤは、

箱に靠れて坐つてしまつた。やゝ暫くその形恰のナースチヤを眺めて居たシューラは、狐の皮をぬぎ、後手のまゝそろりと箱の緣へずりのぼつた。ナースチヤは動かぬ。シューラは餘程經つてからこゞんで、小さい聲で呼びかけた。

――ナーシエンカ

――…………

――お前……ねえナーシエンカ、こわくない？ 行つちやうの

――…………

――ね、ナーシエンカ、こわくない？

箱からぶら下つて居るシューラの骨つぽい少女の腿が、いきなりナースチヤの若々しい腕で抱きしめられた。

――默つてゝ！ 後生だから…………

ナースチヤは先刻から何とも云へない心持なのであつた。伯母の頭の上にある眞鍮の吊ランプも、夜の臺所の匂ひも、何も彼にも平常と變らないのに、自分だけが行つて仕舞つて歸らないといふのは、何と妙な、切ない心持であらう。ナースチヤは、暗い裡で更にシューラの腿を抱きしめ自分の額を押しつけた。この世で、これしか[illegible]るものは無かつた。

その心持がシューラに通じた。シューラは、ナースチヤの髪を撫で、むせばないやうに口をあけて泣いた。

隣室では、ランプの光がさし、鍋の音がする。ランプの光は襤褸のかたまりのやうにナースチヤを陰影におき、シューラの金髪の一部分だけを狭く射るやうに照しつゞけた。

6

ソフキヤ村のナーシエンカは市に出た。

ナースチヤは電車に乗つて居る。電車は二台連結だ。ナースチヤは、ひろげた肢の間に麻袋を置き、後の車に乗つて居る。アンナ・リヴオーヴナはナースチヤの隣にかけ、鞄を傍に置き、その上に肱をついて眼を瞑つて居る。電車は午前九時すぎのモスクワを行くのだ。ナースチヤは朝日の當る窓に向つて、顔を顰め乍ら外を眺た。偉大い、まるで見知らぬ都會の景色の中でナースチヤに馴染みあるのは向日葵の種賣りだけであつた。朝のところどころの露店で、五哥のコップは向日葵を盛つて厚ぼつたく光つた

電車の窓の下をトラックが通る。トラックには三人労働者が乗つて居て、彼方向きに電車を追ひ抜きながら窓にあるナースチヤの顔を見つけ、互に何か云つて笑つた。

——おーい、此方へ乗つてきな！

怒鳴りつゝ去つた、栗と白の太い縞シャツを着た、若い男の笑顔を、ナースチヤはいゝ男だつたと思つた。

樹の枝で作つた平べつたい檻に鶏を澤山入れ、山のやうに積んだ荷馬車が行つた。下積みの檻は、上からの重みでひずんで、一羽雄鶏が苦しさうに檻のすき間から首を外へ突出して居た。

——アンナ・リヴオーヴナの家では、どんな正餐を食べるのであらうか？

道普請だ。電車はのろ〳〵進む。…………ナースチヤは何だか一寸ぼんやりした。

軈て教會の金の圓屋根が光つて見える廣い通りへ出た。からりとして明るい往來の上を、一台荷馬車が居た。荷馬は黒い。棺も黒い。花もなく牽いて行く。後から、布をかぶつた女が二人、年とつた女を左右から扶へて歩いて居た。荷馬車の御者台には、御者と並んで十一二の男の兒が冬外套を着てのつかつて行く。

窓からのり出してナースチヤは其葬式を見送つた。その時廣い街の上にあるのは朝日とその葬式ばかりで、いつまでもいつまでも馬車にのつかつて行く男の子の外套を着た背中が黒くぼつつりと彼方に見えるのであつた。…………ナースチヤは窓をはなれ、坐りなほし、帖

つけをして居る女車掌の胸に吊り下つて居る、テープのやうに巻いた切符を眺めた。切符は赤、黄、水色、白——電車は、ながい。

7

クレムリン城門と向ひ合つて、四角にモスストロイ（モスクワ土木課）がある。

パーヴエル・パヴロヴヰッチは、五年間、歩いてその三階へ通ひつゞけた。出かける前に、彼は火傷しさうに熱い茶を受皿にあけて飲んで、バタ付パンをたべて、煙草を吸ひながら水色の技師制帽を外套の袖口で一二遍こすつてかぶるのであつた。

ナースチヤは、一時間半前に、臺所の寢臺から起きた。ソフヰヤ村の伯母の家でナースチヤの寢床は大箱の上だつた。此處では箱でなく、臺所の壁から一枚板が下りた。ナースチヤはその上へ、掛物にくるまつて眠るのであつた。

パーヴエル・パヴロヴヰッチが、茶をのんで窓越しに並木道の菩提樹の梢を眺めてゐる間に、ナースチヤはニッケル盆にコップと薬罐と薔薇模様の急須をのせ、食堂の隣室の戸を叩いた。

——入つてもよござんすか

直ぐ

——お入り

と返事のある時もある。いつまでも返事のない時、ナースチヤは、ドン／＼戸を叩いた。それはきつとさうやつて叩かなければいけないのだ。鍵が開く。

——おお眠い、一體何時？ 今

ナースチヤは、丁寧に腰をかゞめて卓子へ盆をおきつゝ答へる。

——八時十分です。

リザ・セミヨンノヴナは裸足のまゝ寢臺の前の小さい古い絨氈布の上に立つて居た。欠伸をし、柔かい金髪のおかつぱを兩手でもしやくしやにこね廻し、もう一つ欠伸をしつゝナースチヤの肩へよつかかつた。

——ナースチヤ、鬼よ、お前！ たつた一遍でいゝからうんざりする程寢かしといてくれゝばいゝのに！

ナースチヤ自身は黒い髪をたつぷり持つて首の上に重く丸めて居た。彼女には、この金髪の、足の裏まで軟かいみたいなリザ・セメヨンノヴナが好もしかつた。リザ・セメヨンノヴナは、ナースチヤが來て半月後、アンナ・リヴオーヴナが出した貸間廣告で來た銀行員だ。

リザ・セメヨンノヴナは
脚をぶら／＼ふり乍ら
私は椅にかけて居る。

コンムニストだといふことは
云つたげようか
迚も、陽氣だ

流行唄をうたひ出し、ナースチヤの顔の中に何ともしれぬ流眄を興へ、麻の手拭を肩にかけて洗面所へ出かける。ナースチヤも跟いて室を出て、同じ廊下で一つ手前の臺所へ歸る。

籠をぶらぶら振り乍ら
私は窓にかけて居る
女中になるといふことは
云つたげようか
迚も、陽氣だ。

ナースチヤは、心の内で幾つもかへ唄を拵へ、調子をとりつゝ、其が火曜日の朝ならばごしごしと洗濯盥でアンナ・リヴオーヴナの下着を揉むのであつた。

パーヴエル・パヴロヴヰッチが出て行く。リザ・セミヨンノヴナが赤い手提に身元證明書と八哥の麭麹とを入れて出て行く。アンナ・リヴオーヴナがその後で獨り食堂で、桃色の夜帽子をかぶつたまゝ茶を飲む。ナースチヤは、寢室と、リザ・セミヨンノヴナの室掃拭をする。ナースチヤは、リザ・セミヨンノヴナが其上で白粉もつけるし、手紙も書くたつた一脚の、いつも一晩で散らかる卓子の上を、彼女獨特の原則に從つて片づけた。ソフキイヤ村で、ナースチヤはいつこのやうな白粉箱、香水箱、新聞、古手紙、毛糸の黒坊人形まである小机を見たことがあらう！ ナースチヤは仕方がないから、在る程のものを片端から大きさの順で机の端に積み重ねた。從つて、新聞が基礎構造で、「週間」「アガニヨーク」「エルマー・ガントリー」といふ英語の筋ばかりの厚い小説、日記、字引、五月八日にキエフから來た手紙、もう一つ小さい端のめくれた古手帖、その上に、ナースチヤはきまつて黄色い圓い白粉箱を置き、黒坊人形は手にとつて一つ接吻して、その白粉箱によせかけ、片づけ終るのであつた。リザ・セミヨンノヴナは歸つて來て――夕方か、夜更けかに――興業銀行で百〇八留の月給を貰ふ代り、怠ることの出來ない英語勉強の爲に、音讀用エルマー・ガントリーをとらうとすると、其が又彼女の金髮らしき性質で、いつの間にか机一杯に、白粉箱や古手紙が散らかつて仕舞ふのであつた。

高加索の上靴を寢臺の下へしまつてナースチヤがリザ・セミヨンノヴナの室に鍵をかけ終ると、アンナ・リヴオーヴナは廊下で黒麥藁の帽子をかぶつて居る。

――さあ、籠を持つて

――只今

──牛乳罎を入れたかい？
──え丶
戸に鍵をかけ、階子を中途まで降りかけると、アンナ・リヴオーヴナは
──ホラ、又忘れちやつた！
と立ち止つた。
──ナースチヤ忘れたらう？
──何です
──ケフイールの瓶さ
幸ナースチヤが平然と腕に下げて居る籠からビール瓶位のケフイールの空瓶を出して見せられる時はよいが、さもないと、ナースチヤは又階子を登つて、鍵をあけて、臺所へ行つて瓶をとつて、又表の戸を閉めて、念の為め一遍引つぱつて見て、アンナ・リヴオーヴナの待つて居るところまで戻らねばならぬ。悪い時は、どうかしてアンナ・リヴオーヴナが扉のしめ繩を信用せず
──い丶娘だから、もう一度しつかり見といで。モスクワはソフキヤ村ぢやないんだからね、三分扉を開けつ放しておいて御覧、壁の鐵迄まで攫はれちまふから
と云ふ事部であつた。ナースチヤは戻らねばならぬ。三階まで二度往復せねばならぬことを意味するのであつた。
　市場には、村の市場より數倍の店と群集と、いろんな匂ひとがある。市場のモスクワ式ごろた石の通路では、花キヤベジの葉つぱ、煙草の吹殻、藁屑、新聞の切れつ端が踏み躙かれて居た。魚賣店から臭く臭い水がごろた石の間隙を流れた。市場の古いごろた石道はきつい日に照らされて表面だけ白つぽく干いたやうに見えても、石と石との隙間の奥にはいつも黒いぐしやぐしやした泥濘がある。ナースチヤは時々、そのごろた石と石との隙間に靴の踵をかまれてよろけながら、眼をつき出し、愉快さうにアンナ・リヴオヴナの後から店々を覗いて歩くのであつた。
頭上の大板へ葡萄と林檎を盛つた男が、長靴を鳴らし人をかき分けやつて來た。女がその肩にぶつかつた。
──ヘーイ、ヘイ！　莫迦野郎！
いそいでよけた女の顔の前へ、掌にのせた鷄をつき出して、横歩きをしつ丶鼻の大きな男が熱心に唾をとばして喋つた。
──奥さん、おやいくらならい丶んだね、見なさい、此りや本當の鷄ですぜ、今朝つぶした
赤い飾紐付の帽子をかぶつた女は思はず引きつけた。
──だから、もう云つたよ、八十五哥！

——もう十哥だけ！　貴女にとつてこれつぽつち同じぢやないか
——同じなら、お前さん負けとき
——私のを買つて下さいよ、ね奥さん、更紗の布をかぶつた女が、
その時やつぱり手に毛を握つたひどくひねた鷄をのせ、人かげから、歩いて行く女の前に現れた。
——ねえ奥さん、本當の主婦なら此を見落しやしませんよ、たつた九十五哥お買ひなさい奥さん
二人の鷄賣りに挾まれ、女は怒つたやうに
——駄目！　駄目！
と叫んで、一層早く歩き出した。
——私は買はないよ、いらないつていつたら！
行手にはもう別の人だかりがあり、鮭の切賣りを見物して居るのであつた。
——ナースチヤ！
肉賣り店の前に立つて少し口をあけ、面白さうに其樣子を見て居たナースチヤは、びつくりして後を向いた。
——さ、これ
アンナ・リヴオーヴナは犢の骨つき肉を新聞でつまんでナースチヤの籠へ入れた。

——駄目だよ、毀はれちや
女が二人並んで足許の箱に玉子をひろげて居た。ナースチヤが來かかつた時、年よりの方の女が、急にあはてゝ箱を持ち上げ
——來たよ！
と囁いた。あはてゝもう一人の女も箱を持ち上げ逃る構えをしたが、其方を見て
——籠をもつてる
安心して、再び玉子の箱を元のやうに足許に下した。直ぐ巡査が現れた。巡査も買ひ物で、他の群集の男女と同じに籠をぶら下げ、玉子賣の隣で胡瓜漬賣の前に佇んだ。ナースチヤは顏を上に向けて笑つた。
市場は、陽氣だ。
リザ・セミヨンノヴナも陽氣でなくはなかつた。
リザ・セミヨンノヴナは時々は夜も、臺所へ入つて來ることがある。
——ナースチヤ、一寸じり〳〵やらせてね、
爪磨した彼女の手にアルミニユームの小鍋がある。小鍋に二つの卵とハムが入つて居る。アンナ・リヴオーヴナとリザ・セミヨンノヴナがとり交した契約書には、モスクワの借室が大抵さうであるやうに臺所は利用せぬことになつて居るのであつた。セミヨンノヴナでも、

然し時には、夜、茶と一緒に熱いものが食べたからうではないか。

臺所の隅の腰かけに、晝間のせてあつた金盥代りに今はナースチヤ自身がかけて居る。ハムを焙りながら、リザ・セミヨンノヴナは奇麗な水色の瞳でじろ／＼ナースチヤを眺め、云ふのであつた。

―ナースチヤ何故おかつぱにしないの

―私、似合はないんです

リザ・セミヨンノヴナの小料理は手傳ふこともないので、却つてナースチヤは間がわるい表情だ。

―剪つたことがあるの？

―いゝえ、伯母さんも似合はないつて云ふし、シューラも似合はないつて云ふもんだから。

―莫迦なナースチヤ、おかつぱにしないのなんか禿げ頭の爺さんか豚だけよ―御覧私だつてよく似合つてるぢやないの、

ナースチヤは、感歎して、紫苑色のリザ・セミヨンノヴナのすらりとしたスウエーター姿を眺めた。

―私にだつて貴女みたいな髪さへあれば！……此那黒い髪！ 梳き櫛きしちやふ！

―ホウ、ホウ、ホウ！

唇をすぼめ、眼を丸め、滑稽で奇形に小鼻をひつかけ乍ら、

―そら出來た！

リザ・セミヨンノヴナは瓦斯を消す。

―寝る？ ナースチヤ

ナースチヤは、もつといろ／＼のことを喋べりたい。その心持を表す暇のないうちに

―ぢやおやすみ、有難うよ、ナースチヤ

リザ・セミヨンノヴナは裾の端を臺所の戸がしめ込みさうにひらり、小鍋を持つて自分の室へ行つて仕舞ふのであつた。

ナースチヤがお休みなさいを云ふ間もなかつた。

彼女は臺所の隅の四本脚の腰かけの上で、兩手を膝の間に挾み、體を前や後に振りながら周圍の物音をきゝすます。廊下の彼方でリザ・セミヨンノヴナの戸が閉つた。食堂から籠つた笑聲が響いた。食堂の入口に厚いカーテンが下つて居るから彼那に遠く聴えるのだ。アンナ・リヴオーヴナ夫妻と夫婦づれの客が、骨牌をやつて居た。ナースチヤがずつと先刻珈琲を持つて行つたら、アンナ・リヴオーヴナは骨牌を手の中で一心に揃へ乍ら

―お砂糖もいるよ、

と云つた。主人のパーヴエル・パヴロヴヰッチがその前に台所へ顔を出して

――ナースチヤ、御飯おくれ、苦くしちやいかんぜ

と云つて直ぐ引込んだ。夜の間にナースチヤにかけられた言葉のそれが全部だ。

膝の間に挾んで居た片方の手を延して、ナースチヤは傍の棚の下をさぐつた。いろんな紙屑の中から、手當り次第に引つぱり出して見ると、パーヴエル・パヴロヴキツチが役所から持つて來た新聞の切れ端であつた。もう一遍やつて見ると、新聞が出た。ナースチヤは太い活字をひろつて讀んだ。パホード・プロチフ・エストラノドノイ・ハルツールイ……是は何のことだらう。別のところには細かい字がうんと書いてあつてカリーニンとかルジユタクとか人の名がある。――

再び兩手を膝に挾み、體をゆすり、ナースチヤはシユーラを戀しく思ひ出すのであつた。寂しい………。明るい。………明るい………そして一人ぼつちの台所は寂しい。夜はいつか進んでナースチヤは睡たくなる。大きな欠伸をして立ち上り、彼女はギーと板を下し、その上にのつて高い棚から掛物をひきずりおろした。

便所で誰かゞ灯をつける度に、高窓の硝子を越してナースチヤの寢顔に光がさした。ナースチヤは口をあけ、うなりながら眠つた。

細い肢を蟹のやうに張つて、ナースチヤは火熨をかけた。二人寢台用の大敷布は疊むにも、伸すにもナースチヤ一人の手に餘つた。アンナ・リヴオーヴナが新聞の上へ出して行つた木炭は少しだから、火氣の强いうちに、急いでかけて仕舞はねばならぬ。力がいるのと木炭の瓦斯とでナースチヤの顔は火照り、頭痛がした。然しナースチヤは、肢を蟹のやうに曲げ一生懸命火熨をかける――

ジジーン！

呼鈴がクワルチーラぢうに響いた。火熨を平つたい金びしやくにのせ、ナースチヤは入口へ行つた。

――どなた？

いきなり開けるなと、ナースチヤはきびしく云ひつけられて居るのであつた。

――開けて下さい、部屋を見に來たんですから

それは全然聞き覺えのない男の聲であつた。ナースチヤは、戸に手をかたけなり怒つた聲で

――誰です、そこに居るの

と云つた。部屋を見る人間があるなんて、ナースチヤは聞かされて居なかつた。

――心配なさるな、アンナ・リヴオーヴナのクワルチーラでせう？

――えゝ

――部屋を拜見に來たんです、開けて呉れゝばいゝんです

午後二時半で、家はナースチヤ獨りであつた。そればかりか建物全體が一日ぢゆうで一番森として人氣ない時刻だ。ナースチヤは段々氣味惡くなり、戸の外の氣勢をきゝ澄した。

外の男は足を踏みかへたり、もぞ〳〵して居たが、今度は拳でドンドン戸をたゝいた。ナースチヤは、内から前垂の端を掴んで叫んだ。

――行つて下さい！ 知らない人に戸を開けることなんか出來ないんだから。アンナ・リヴオーヴナはお留守ですよ！

――强情張！

さう云ふ聲がし、續いて混凝土の階段を降りる足音がした。――惡魔奴、どいつを連れて居たんだ！ ――ナースチヤは台所へ戻り、火熨に木炭を足し、サモワール用の小煙筒をしかけた。ナースチヤは、滿足を感じ乍らふつふつと、小さい餘燼の落ちたのを一枚の仕上つた敷布の上から吹きはらつた。アンナ・リヴオーヴナは、ナースチヤが洗濯上手だと云つて、ひどく褒めた。ナースチヤも褒められれば嬉しかつた。ナースチヤが來たては支那人の洗濯屋に出して居たこの大敷布までいつか彼女が洗ふやうなことになつた。洗濯屋に負けず奇麗だと云はれる度に、若いナースチヤは過分に努力を費すのであつた。

十五分も過つた頃、アンナ・リヴオーヴナの聲が入口でした。

――さあさあ、どうぞこちらへ

ナースチヤは台所の戸から覗いた。アンナ・リヴオーヴナの後から、バンド附の外套を着て書類入を抱へた山羊髯の小柄な男が、辷るやうな足どりで入つて來た。男はナースチヤを見つけると、一寸鳥打帽子の庇に指をかけいやに丁寧に

――今日は

と云つた。先刻の男だらうか。ナースチヤが間誤付いて居ると、その山羊髯の男は唇だけで薄く笑ひ乍ら

――アンナ・リヴオーヴナ、あの娘さんが先刻私を入れませんでしたよ

と云つた。

――まあ！ どうしたのさお前、御挨拶をおし。田舍のいゝ娘さんですが、それはよく働きますの。

アンナ・リヴオーヴナは愛嬌よくナースチヤに近よつて肩をたゝいた。

――お互に仲よし、ね。親子のやうにやつて居ます

ナースチヤは、突立つたまゝ二人が食堂に入るのを見送り、眼をしやくり、台所へ戻つた。眼の[illegible]に[illegible]つこい眼がナース

チヤを不快にした。男は唇で笑つてアンナ・リヴオーヴナに挨拶しながら、眼でじつとナースチヤを睨んだのであつた。

男は本當に部屋を借りるらしかつた。パーヴエル・パヴロヴヰツチが書齋のやうにして居た小室へ、先週大工が來て棚を作つた。その室をアンナ・リヴオーヴナは男に見せた。壁をとほし、ナースチヤのところへ話が聞えた。

――一寸失禮、この寢臺はこつちの壁へつけた方が勝手なやうに思はれますな

――それはどうぞ御勝手に。私共あなたが居心地よくてゐらつしやれば何よりなんですから

床の上を辷るやうな氣ぜわしい靴の音。

――御免下さい、こつちは臺所ですか？

――えゝ、ですけれど

アンナ・リヴオーヴナがいそいで答へた。

――決して御邪魔はさせません。朝はどうせ貴方と御一緒時分ですし、私共夜だつて早いんですから

――それは結構。……もう一分間どうぞ御邪魔させて下さい、あなたんところに大きい絨氈はありませんか

男を送り出すとアンナ・リヴオーヴナは頭を振り振り食堂へ戻つた。

夜、リザ・セミヨンノヴナのところへ茶を運んだ時、ナースチヤは

――聞いて下さい、リザ・セミヨンノヴナ、例の、もう散らかりかけて居る小机の隅へ膝をついた。

――今日、何て男が室借りに來たか！何か云ふたんびに一々一寸失禮だの、御免なさいだのくつつけるんですよ、其癖、机が二寸長すぎてもいけないんだつて！

肌の奇麗な顏を少し反らせ、濕つぽくて臭さうなナースチヤの綿繻子の前垂を眺め乍ら、リザ・セミヨンノヴナは訊いた。

――もうきまつたの？

ナースチヤは田舍女らしく目交ぜをして囁いた。

――アンナ・リヴオーヴナはちつともその男を好いちや居ないんです、ちやんとわかつてる。――でもお金があるんですよ、半年分拂ふんですつて

――ふうん

――あの山羊髯！

リザ・セミヨンノヴナは無頓着に云つた。

――いゝさ、そんな男の細君になる女だつてあるんだから

出がけにナースチヤが戸を明けると、廊下で鍵の音がした。

――何が始まつたの

――御覧なさい！　パーヴエル・パヴロヴヰッチが机を二寸ちゞめて居るんですよ

男は越して來た。臺所に引込んで居たナースチヤが風呂場へ行つて見たら風呂場の壁へ特別彼用のニツケル製手拭掛と、歯磨ブラシ、コツプなどのせる矢張りニツケルの道具が取りつけられてゐた。男は自分用の茶碗を持つて臺所へ行かうとして小熊の剝製や帽子掛のある廊下でリザ・セミヨンノヴナに出喰はした。猫背で辷るやうに歩いて居た彼は、素早く歩を横に移して壁際へよけびつたり脚を揃へて立つた。

――今日は。

――今日は

行きすぎようとするリザ・セミヨンノヴナを遮つて

――一分間お邪魔させていたゞきます。貴女も此處にお住ゐですか

――えゝ

――それは結構。どうぞ貴女の美しいお手を――私はオルロフ、經濟をやつて居ます

リザ・セミヨンノヴナは手の甲を接吻させ、自分の名は云はず、室に入つて勢よく戸を閉めた。

オルロフは、越すまで、アンナ・リヴォーヴナの食堂にあつた家具で一番いゝスタンドも借りて自分の部屋へ据ゑた。彼は二つの葡萄酒コツプを持つて居た。葡萄酒コツプは茶がかつた緑色で、台にグリ〳〵飾のついた玻璃であつた。朝ナースチヤが、彼の茶碗に茶を入れて運んで行くと、「バルザツク」とレツテルの貼つてある白葡萄酒の瓶の横にそのコツプがあつて、オルロフ自身は山羊鬚を撫で布張の椅子に居る。彼は目を離さずナースチヤの顔を見て云つた。

――ナースチヤ、コツプは洗つてくれるね

――宜しい

――若しお前が壞したら縊り殺すからそのつもりで居なさい

――……

――わかつたか？

――わかりました

ナースチヤは、ぷり〳〵してコツプを盆にのせるのであつたが、心の中では恐怖を感じた。其を洗つて元に戻すまで、オルロフの水のやうな冷たい粘つこい眼付がつけて來るやうな氣がした。

リザ・セミヨンノヴナとオルロフとは總てに正反對であつた。例へばリザ・セミヨンノヴナは家庭のことでいつか小言を云つたことがあるだらうか？　南京虫がくつた時だけ、リザ・セミヨンノヴナは

――畜生！　ナースチヤ

柔らかな肢でも手でも、赤く爛れたところをナースチヤにつきつけて云ふのであつた。

——耻しくないかい！

アンナ・リヴォーヴナが寝室の戸棚へしまつて置くミヤソ、ニツカヤ通のおそろしい臭ひの南京虫退治薬を撒けといふだけのことなのであつた。

オルロフの居るうちに、成たけ彼の部屋は掃除しなければならない。オルロフは室を去らず、ナースチヤが机の上をいぢつて居る時は、椅子の上から、椅子の下を掃く時は衣裳棚の前に立つて監視した。

——どうぞ御深切に、ナースチヤ、その暦はインキ壺の右の肩のところへ置いて下さい。

又は

——あれが見えないかね、可愛いナースチヤ

猫背のオルロフが水のやうな眼で見て居るところは寝台の下で、鞄の端に一條の糸屑が引つかかつて居るのであつた。

9

十二月になつた。日が短くなつて、モスクワには毎日雪が降つた。

頭からショールをかぶつたナースチヤは脚の間に石油罐を置き、歩道に立つて居た。石油販賣所はまだ賣り始めない。雪の積つた燈柱の下にトラックが一台居た。そのトラックと石油販賣所の入口にかけて歩道を横切り階子のやうなものがかけられて居た。トラックの上の男が石油の大きな樽をその階子にのせた。歩道に居る男が其をころがして店へ運び込む。石油販賣所の内部は暗くがらんとして居る。陰氣な石の壁の上にも石の床にも石油の汚點と臭ひがある。トラックからおろす石油の樽も油じみて黒い。その樽に雪がついて居た。

雪は細かく、しきりに降る。

石油販賣所の石段から、買ひての列は町角の煙草賣店の前まで連つた。女ばかりであつた。ナースチヤの後には石油焜爐を下げた婆が立つて居た。ナースチヤの前には、若い娘が縄でつるした硝子罎を歩道に置いて、壁に凭れ、一心に本を讀んで居る。ショールからはみ出した娘の前髪に雪がちら〱ついた。粉雪をとほして遠くに、アルバート街の赤と白で塗つた大教會の塔が美しく眺められる。

ナースチヤは牛酪も買はなければならなかつた。彼女は四十分も待つて居るのだ。ナースチヤは、後の婆さんに

——私一寸買ひものして來るから、番覺えてゝ下さいね

と頼んだ。

――煙管を置いてくから、どうぞ見て下さい、お婆さん
石油焜爐を片手に下げ乍ら婆は、往來から拾つた吸ひのこりの煙草をふかして居た。
――よしよし、見てゝやるよ
牛酪と馬鈴薯を籠に入れ、籠は腕にひつかけ、外套の衣嚢から向日葵の種を出して食べ食べナースチヤが戻つて來ると、石油販賣所の人だかりは一層ひどくなつて居た。たゞの通行人は、そこまで來ると、車道へおりて行つた。ナースチヤが、自分の番の場所へ立たうとすると、さつきは居なかつた太つた紫の布の女が傍に居て
――女市民！ どうぞ順に並んどくれ、私はお前さんより前に來て居るんだよ
と叫んだ。
――何故さ！ 私はさつきから此處に居たんですよ
石油焜爐を下げて煙草を飲んで居た婆も何處かへ行つて見えなかつた。ナースチヤは、もう一つ後の女を證人にしようとした。
――ね、お祖母さんだつて知つてるねえ
紫色の帽子をかぶつた女は、外套の高い襟の間から鼻先だけ出し、つまらなさうに答へた。
――分らない
――後へおいで。胡麻化したつて駄目だよ女市民さん
――お前此處へ立つといで、いゝから
さう云つたのは、ナースチヤの前で本を讀んで居た娘であつた。
――この人は始つから此處に居たんです私が知つてる。證人もある――
――御覧
ナースチヤは、再び籠を足にはさんで立つた。娘も本を讀みつゞけてた。
ナースチヤは、向日葵の種を前齒で破つて殻を唇の隅からほき出しつゝ、娘の本を覗いた。讀んで居る頁の上に、どこか圖書館の紫ゴム印がおしてあつた。ナースチヤは暫く眺めて居て、訊いた。
――面白い、その本
――うん
ナースチヤは、吐息をつくやうに云つた。
――私んとこには何にもない
指を頁の間に挾んで本を閉ぢ、娘はナースチヤを見た。
――何故？
――何故だか、さうなんです
ナースチヤは、規則正しく、早く、向日葵の種の殻をほき出しつゝけた。娘は、石油販賣所の入口の番號を見た。

――どうしたんだらう、今日は

往來を、活動寫眞の廣告車が五台つゞいて通つた。赤塗のゴム輪車の上に、赤ん坊を抱いた女の顏の大寫しと、火事場の焔の中に働いて居る消防夫の寫眞が掲げてある。車を押す男たちは、降る雪にさからつて首を下げ、並んで電車路を横切つた。

娘が

――あれは面白いよ

と云つた。

――觀た？　お前

――いゝえ。……私活動大好きだけれど高價くつて――それに私いつも獨りで行かなけりやならないんです。皆友達づれだのに、始つからお仕舞ひまで私は默つて坐つてるんです

――何處かに働いてるの？

――えゝ

――組合に入つてないの？　お前

　ナースチヤは、拇指のつけ根みたいなところで口のはたをふき乍ら娘を見た。ナースチヤは訊かれたことを理解しなかつた。

――組合？……どんな

――ナルピット

――そこへ入ると活動がやすくなるんですか

――私いつだつて十五哥か二十哥で觀て居る

　やつと石油が賣り出され、列は少しづつ前進し始めた。娘は繩で罎を吊るし上げ乍ら云つた。

――私もう二年組合に入つて、夜は勉強してるし、朝九時から夕方五時位までの働きだし――滿足してるわ

　罎へ石油を詰めて貰ふと、娘は、外套に雪をつけたまゝ、ナースチヤの横を通りぬけて先へ出て行つた。

　村での話とは違つて、ナースチヤが居つくと直ぐ二人も借室人が入つた。その一人が、直接の主人よりナースチヤに何だかおつかぶさつて（――悪魔に攫はれろ！――）泣きたい氣持にさせるのも仕方がないとする。洗濯物の殖えたことも、此頃は食物拵へを殆ど一人でしなければならなくなつたこともまあいいとする。ナースチヤを苦しめるのは、この森の樹より人間の多いモスクワで自分が、まるきりの獨りぼつちだといふ事實であつた。

　アンナ・リヴーヴナは不親切ではなかつた。然しそれはアンナ・リヴオーヴナが、親切にしようと思つてる間だけのことであつた。若し自分が病氣になつて、働けなくなつたらどうなるか。ナースチヤは感

して居た。アンナ・リヴォーヴナは自分を彼女の借室の台所の隅に置いては置かないであらう。頭の中に遙に小さくソフキヤ村の廣い原つぱや、原つぱの彼方の動かぬ赤い貨車の景色などが浮んだ。白樺の生えたあの二階家で、伯母がよくも自分を養つて居て呉れたと今は思はれた。働きがなくなつたと云つて其處は歸れるところでない。ナースチヤは仲間が欲しかつた。その仲間の欲しい心持を話す友達さへ無いといふことが、このモスクワであり得るだらうか。

モスクワだから、それはあり得た。ナースチヤがたまに夜活動寫眞から歸ると、アルバートの廣場で、通りすがりの若い男が耳の傍で

——行かうよ！

と囁いた。ナースチヤがその若者の顔を見定めずに通りすぎるやうに、その男もナースチヤの顔ははつきり見もせず、麦酒屋の窓から片明りのさす歩道で囁くのであつた。

10

入つたばかりの室は、がらんとした室だ。木の床の上に大机が一脚あつた。その机の上に宣伝パンフレットが置かれて居る。赤い布で飾つたレーニンの肖像が正面の壁にかゝり、その下に壁新聞が貼つてあつた。壁新聞に、[illegible]をかぶつて[illegible]を持つて居る若い娘の[illegible]な姿の揮毫がある。

上靴をぬぐのか脱がないのか。ナースチヤは、迷つて、誰も居[illegible]の室に立ち、見廻した。室の境に戸がなく、奥が見えた。上靴をはいたまゝ、女が或机の前に立つて居る。ナースチヤは腕にかけた買物籠を揺れぬやうに片手で押へ、そろ／＼奥へ歩いた。

暗い室だ。大机が三つあつて、三人の女が働いて居た。白タイルがところ／＼缺けて、焚き口の燻つた暖爐が室の隅にある。入口に立つて居ると、ナースチヤに一番近い机の前に坐つて居る女が

——お前さん、何用

と訊いた。藍縞の男もの襯衣を着て、紺と黄色のさつぱりしたネクタイを胸の上に垂らして居る女であつた。

——私、組合に入れませうか

——何故いけない？　まあ掛けなさい

アンナ・リヴォーヴナの台所にあると同じに腰かけにナースチヤは坐る

つた。他の机の前では、先に来た女が小さい帳面を出して、何か計算して貰つて居た。——お前さんは、だから今までに二十二留・五十哥しか受けとつて居ないことになるね。えゝ。——[illegible]りが幾何あろこと[illegible]んなる？　娘は廿六、[illegible]たと答へた。——[illegible]といつて、二十五

留と五十哥だよ。好奇心と不安とをもつてナースチヤはその問答を聞いた。

「チリ」と、赤地に金文字つきの平つたい紙から卷煙草を出し、吸ひつけ乍ら、紺と黄色のネクタイの女が云つた。

――さて、と…………お前さん何處に働いて居る？

――アンナ・リヴオーヴナのところです

――番地は

ナースチヤの雀斑のある顔が段々ひどく紅くなつた。

――知りません

――ぢやいゝ。今まで一遍も、何處でも組合員だつたことはない？

――いゝえ

――そのアンナ・何とかさんの家へ來る迄勤めて居たかい

――いゝえ、始めてです

――幾日もう勤めた？

――去年の八月からです

――八、九、十、十一、十二、一、二――と。月給はいくら

――十三留

ナースチヤは、正直に金額を答へてから、心配になつて女の顔を凝つと見た。女は、然しあたりまへた顔で、机の引出しから二枚、大きい紙を出した。

――さ、是を持つて歸つてすつかり書きこんで貰つといで

ナースチヤは、きゝ間違へ、又紅くなつた。

――私、書けません

――お前さんは主人ぢやないだらう

煙草の煙をふつと口のすみからふき乍ら、陽氣に云つて、笑つた。

――御覧、すつかりこの項目に、主人の名、職業、お前さんの名、パスポルトの番號、月給、働く條件、休日まで書き込んで貰つて、それから組合に入るんだ、判つたらう？

――ありがたう

――主人が書いて呉れたら、住宅管理人に裏書して貰つて、又此處へおいで

ナースチヤが、紙を手にもつて立ちかけた時、女が訊いた。

――倶樂部へ行つたのかい、お前さん

――いゝえ

――誰にこのメストコムを聞いた？

――リザ・セミヨンノヴナが教へました

椅子の背に煙草を持つた手を廻してかけ、女は立つて居るナースヤを見上げた。

―誰だい……それは
―家に居るお孃さんです
―ふうむ……よしよし
―さよなら
女は合點いて、腓で椅子を押し乍ら自分の場所から立ち上つた。
凍つて白い並木道では大勢の子供がスキーで遊んで居る。母親や子守の居るベンチの前を支那人の女が、ゴムで吊した色つき毬を賣つて歩いた。雪の長い並木道を纒足で支那の女は黑く、よちよち動いた。並木道の外れの電車路に、婆と男の子供が居た。轉轍手と遊んで居た。
―おくれよ、おぢいちやん
白髯で山羊縁外套の轉轍手は笑ひながら、金棒を後にかくした。
轉轍に使ふ金棒を男の子は欲しがつた。
―いけないよ、いけないよ、
おくれよ
―ワローチヤ！
婆さんが叱つた。轉轍手は男の子に金棒を渡した。男の子は忽ちその金棒にまたがつて、雪の上を駈け、彼方へ行つた。轉轍手は子供の方と、彼方の電車線路の上とをかはるがはる眺めた。電車が見え始めた。轉轍手はいそいで子供のところへ走つて行つた。

ナースチヤは自分の村にあつた鐵橋の景色を思ひ出した。端には見張所があつた。銃を肩から逆さに吊つた平服の番人が橋桁に並べた板の上をいつもぶらぶら歩いて居た。ナースチヤの死んだ親父も赤いルパーシカを着て番人したことがある。鐵橋から見下す河水のひろやかな大きさ………。汽車が通る時は鐵橋ちゆうが震へた。欄干にしがみついて、顔にかゝるあつい息や、頭が痺れさうに轟然と澤山の輪が重つて目の前をころがり通るのを見送つてしまふと、子供等は一齊に橋桁の上へ躍り出して、手をたゝき笑つた。ナースチヤも他の子供も裸足であつた。鐵橋の彼方は原で、村の共同物干場があつた。いろんな色の襤褸が、原のおつぴらいたなかに見えた。
―
メストコムから貰つて來た紙をもつて、ナースチヤは食堂へ入つて行つた。夕食後であつた。パーヴエル・パヴロヴヰツチが襯衣だけで長椅子の上に長くなつて、パイプをふかして居る。アンナ・リヴオーヴナは、第二回工業化株券のことを話して居た。
―なんだい、ナースチヤ
ナースチヤはアンナ・リヴオーヴナが肱をついて居る卓子の傍に立つた。
―これに書きこんでいただきたいんです

アンナ・リヴォーヴナは自分の編物しにナースチャの差し出して居る紙を見下し、可訝んさうにのつそり二つの肱を卓子からおろした。

——……何なのさ、一體

——私組合へ入りたいんですけれど、組合へはこの書付がないと駄目だつて云はれたんです

——組合つてお前……神よ！　何を考へ出したのさ急に

ナースチャを見上げ、それから夫をアンナ・リヴォーヴナは眺めた。パーヴェル・パヴロヴヰッチは故意としか思はれぬ無邪氣な眉のひらきようをして、窓の外に見とれて居る。アンナ・リヴォーヴナは眼鏡をふり、紙をひろげて、項目に目を通し始めた。

其場の空氣から、ナースチャは變に不安な居心地わるい心持になり、立ちつゞけた。これは、其那何事かなのであらうか。

待ち遠しくなつた程丁寧に讀み終つて手を紙の上におき、アンナ・リヴォーヴナは

——ぢや、よろしい

と、穩に云つた。

——書いたげよう。——だがいそぎやしないんだらう？　ナースチャ

ナースチャは、いそぐと云へなくなつて

——えゝ

と答へた。

——ぢや、紙おいときますから

はつきりしない氣持でナースチャが去らうとすると、アンナ・リヴォーヴナが彼女を呼びとめた。

——鳥渡、ナースチャ、この紙、確に書いたげるには書いたげるが、お前、組合つてどんなもんだか、よく知つてるかい

食堂の戸口のカーテンのところに立ち止つて、ナースチャは間誤付を感じ、むつつり答へた。

——知つてると思ひます

——そりや素敵だ！　說明して御覧

ナースチャは、前垂を引つぱりながら、野性なきつい眼付で主人達夫婦を視た。ナースチャは、主人たちの前で長い文句で自分の考へを述べることなどに、てんから馴れては居ない。アンナ・リヴォーヴナは、揶揄ふやうに

——極りわるがることはないぢやないか

と笑つた。

——お前の組合のことをお前が話すんぢやないか

腹が立つて來て、ナースチャは云つた。

——組合へ入れば、活動がやすくなるんです！

爆發するやうな口をあけて、仰向に寢ころんだパーヴェル　パヴロヴ　て
キツチが笑つた。
——上出來！　上出來！
——父さん！　たら…………それから？　ナースチャ
ちつとも云ひたくない心持を堪えて、ナースチャは
——倶樂部もあります
と云つた。
——夜ひまなとき、私、倶樂部のクルヂョークで勉强したいと思つたんです。私こゝでほんの一人ぼつちだけど、そこいいけば澤山仲間があります
段々自由に話せるやうになり、ナースチャはいつか再び卓子の傍まで戻つて力づよく云つた。
——御覽なさい、アンナ・リヴオーヴナ、若し明日でも、いらなくなれば貴女は私を出すことが出來ます。でも、私はどうしたらいゝでせう？——それは私の苦しみです。貴女の苦しみではない
——……そりや本當だ。…………でも、ナースチャ、お前、どの位澤山組合に入つてる娘たちが失業で淫賣婦になつてアルバートをうろついて居るか知つてるかい
ナースチャは知らなかつた。アンナ・リヴオーヴナは、舌を鳴らし
——御覽！
人さし指を立て、ナースチャの顏の前でふつた。
——自分の胡瓜を賣らうとする人間は、それが苦いとは云はないものさ。第一、組合へ入ればお金とられるんだよ
——それは知つてます
——いくら拂はなけりやならないつて云つたい
——…………
確かな步合ひをナースチャは知らなかつた。
アンナ・リヴオーヴナは暫く頑固に默つて居るナースチャの顏を見まもり、やがて捨てるやうに云つた。
——私のことぢやないから、どうでもいゝけれどね、詰らないやうなもんぢやないか、澤山お金とつたつて、とつただけの割で組合へとられてさ、おまけに失業積立金まで出して、ひとを食べさせてやるなんて
ナースチャの瞳が、ゆつくり、農民らしくこんがらかり始めた。アンナ・リヴオーヴナに云はれて見ると、自分がはつきり知らぬいろいろのことの何處かに、何か自分に損の行きさうなことが隱れて居るやうに感じられ出した。ナースチャは、アンナ・リヴオーヴナを信用はし

なかつた。同時に、組合も全部信用出来ない心持になつて來たのであつた。陰氣な眼付をして、ナースチヤは、卓子の上の紙を眺めた。

——心配おしでない、いゝようにして上げるから

アンナ・リヴォーヴナは、しよげたナースチヤの肩を押して出してやり乍ら云つた。

11

——どうした？　ナースチヤ

リザ・セミヨンノヴナが舶來の、十五留出して買つた絹靴下の穴を繕ひ乍ら訊いた。

——組合のこと

両手を腰にかつて立ち、リザ・セミヨンノヴナの手許を見下して居たナースチヤは、隣の食堂へ目交せして、小さい聲を出せと合圖した。

——行きました、この間

——すんだの

——アンナ・リヴォーヴナがまた書付を書いて呉れないんです

リザ・セミヨンノヴナは鳥渡だまりこんだ後、云つた。

——何とか云はれたら、斯うお云ひ。ぢや何故パーヴェル・パヴロヴホッチは自分の組合へ入つて居るんですかつて——いゝ？

ナースチヤは、つよく合點合點をした。

けれども、ナースチヤの本心はもうかはつて居るのであつた。アンナ・リヴオトヴナに仄めかされた疑ひが彼女の頭からのかなかつた。

ナースチヤは主人をせきたてなかつた。

十日ばかりして、又リザ・セミヨンノヴナに同じことを訊かれた時、ナースチヤは寧ろ不意に體の何處かを突つかれたやうな感じを受けた。(——まだ忘れないで居たか。——)ナースチヤは突嗟に不自然な熱心さでリザ・セミヨンノヴナへこゞみかゝり訴へた。

——聞いて下さい、リザ・セミヨンノヴナ、アンナ・リヴォーヴナは返事だけして承知しないつもりなんですよ。どんなに私が毎日毎日頼んでるか！　昨日だつて、私一時間も云つたんです。そりやあ一生懸命云つたんです

だがリザ・セミヨンノヴナは、彼女の奇麗で怜悧な水色の横目でナースチヤの喋べくるのを眺めながら、膝を抱へて體をふり〳〵、彼女の鼻歌をうたひつゞけた。

船が行く——
渦巻く水は
ぢきに氣するに

魚を飼ふだらう

ナースチヤは、リザ・セミヨンノヴナが自分を信じないことを感じた。

——どうしませう？　リザ・セミヨンノヴナ

リザ・セミヨンノヴナは默つて居る。

——ね、リザ、セミヨンノヴナ

自分の虚言の見破られた意識から、ナースチヤは困惑して泣きさうになつた。

——ね、リザ・セミヨンノヴナ

ナースチヤは不器用に手をのばして、リザ・セミヨンノヴナの膝にさわつて云つた。

——惡く思はないで下さい

リザ・セミヨンノヴナは、それでもやつぱり默つて居た。

ナースチヤが貰つて來た書類は、二つ折になつて食堂の棚の上にのつたまゝ受難週間になつた。

建物の中庭へ荷馬車が入つて來た。そして、雪の下から現れた去年の秋からのごもくたを運び去つた。黒い濕つた地面が出た。人はまた外套を着て往來を歩いて居たが、日が暮ると、中庭の黒い地面から[illegible]

度借室のだれかゞ、中庭で絨氈をたゝいた。張り渡した綱に叩いた絨氈を干して、建物のそばのベンチに兒供をかけさせておいた。兒供は犬と戯れつゝ、或は建物の四階の窓からリボンをつき出して居る友達と聲高に喋りつゝ、絨氈の番をした。中庭の光線の彼方の空に、芽ぐんだばかりの緑色に烟る菩提樹の大きな頂が見えた。煉瓦の赤い建物がそこにあるので、菩提樹の柔かい緑色は一層柔かく烟のやうに見える。

アンナ・リヴオーヴナはクワルチーラへ床磨きをよんだ。復活祭まで床磨き人は、權威ありげに口を利いた。ナースチヤは、洗濯をした。每日洗濯をした。ふだんの洗濯のほかに、アンナ・リヴオーヴナが去年の復活祭から枕にかけたレースや、食卓覆ひ、カーテンを洗つた。台所の外について居る露台にプリムスを持ち出し、洗物を煮ては焔のなかで揉む。オルロフが、辷るやうに猫背でやつて來た。台所の戸は、箱を突かつて開け放した。そこから露台に向つて彼は、[illegible]の口調で

——ナースチヤ、[illegible]たらうかね

ナースチヤは、背を向けたまゝ[illegible]

[illegible]

ナースチャは石鹸水でふやけた手を露台の上からふつて笑つた。露台の上から、下の中庭越しに塀が見えた。塀のおやかおやかの出た針金越しに別の建物の平屋の翼が見下せた。麺麭屋の仕事場がそこにあつた。開いた窓に向つて麺麭こね台があつた。白帽をかぶり、帽子ほどは白くない仕事着をきた職人が四人働いて居た。ナースチャが去年の夏來た時にもその麺麭工場がやつぱり見えた。間もなく永い冬が來てその窓は閉まり、やがて凍つて何も見えなかつた。

再び春だ。職人の顔ぶれが少し違つたとしても、それが何であらう！　彼等の一人は、露台に居るナースチャに向つて手を振つた。ナースチャは笑ふ。彼はそれを見て笑つて、ナースチャにきゝとれぬことを何か云ふ。ナースチャは又笑ふ。一人別の職人が、麺麭のこね粉をおしつけて、何か拵へ、ナースチャに見せるやうに高く、さし上げる。その時は皆の職人が仕事をやめた。笑つて、がやがや云ひ乍らナースチャの方を見上げた。仕事場の方は暗いし、第一遠いし、何の形だかナースチャに見分けられない。彼女は手を振つた。職人達は、まるで噪いで笑ひつゞけた。

――へーイ、娘つ子！

――ヒュー！　ヒュー！

畜生！　ナースチャはむツとして露臺から引込む。然し、[illegible]戸をあけ、露臺へ出る時、ナースチャは[illegible]を用意して居るのだ。――

ナースチャは、夜十一時半まで火熨斗かけをした。最後の手帛を終つたが、まだ火があつた。ナースチャは今朝干したアンナ・リヴオーヴナの下着に火熨斗をしてしまひたいと思つた。けれども、建物の物干場は五階の屋根裏だ。森とした階段と、物干場のがらんどうな濕つぽい大さが、ナースチャを恐れさせた。

ナースチャは、忍び足でリザ・セミョンノヴナの戸へ近づいた。戸から燈火が洩れて居る。ナースチャは、そつとたゝいた。

――お入り

リザ・セミョンノヴナは、まだ着物もぬがず、新聞から切抜きをして居た。

――リザ・セミョンノヴナ、御免なさい、邪魔をして。――私、物干場へ行かなけりやならないんです。

ナースチャは、云つた。

――でも……可怖いんです。

――何故さ

――一番てつぺんなんですもの、それに、もう夜で、暗くて、

――アンナ・リヴオーヴナにさうお云ひ

――神よ！　私ぶたれます

リザ・セミヨンノヴナは急に兩足で立つた。

――さ、早く、早く！

――あゝ有難い！　リザ・セミヨンノヴナ、あなたは、本當に

――いゝから鍵をとつといで、早く！

ナースチヤが先に立つて階段を登つて行つた。足音が、夜のコンクリートの壁に反響した。小さい夜間電燈が各階の踊場について居るだけであつた。

――御覧なさい、リザ・セミヨンノヴナ、こわいでせう？　私、この間、あつちの建物の翼へ泥棒が入つたつて聞いて居るから、一人ぢや來られないんです

夜ぢゆう、クワルチーラの下の入口の戸が明いて居るのは事實であつた。木戸口は十二時にしまつた。リザ・セミヨンノヴナは

――何でもない

と云つた。

――陽氣ぢやないだけさ

物干場は五階目の登りきつたところで、一つ、物干場の戸があるきりであつた。上へ行く路はない。下へ、元來た階段を下りられるだけであつた。夜は淋しい感じがした。ナースチヤは、スヰッチを捻つてから鍵で、そのたつた一つの戸を明け、自分とリザ・セミヨンノヴナを入れた後、堅く鎖した。

床には砂が敷いてある。幾條も綱が張渡され、その三分の二ばかりに物が干してあつた。天井は低い。隅に何かの樽があつた。ナースチヤは、裾飾のついたアンナ・リヴオーヴナの下着を腕にかけて外へ出た。後に麻の大敷布三枚、台覆ひ、パーヴエル・パヴロヴヰッチの下着、更に奥のところにナースチヤの前垂、更紗の服、桃色の股引がさかさに綱からつる下つて居るのが、薄暗い電燈で見えた。

――それだけでいゝの

――えゝあとは明日でいゝんです、左側のはよその人のです

ナースチヤは、永いことかかつて戸の錠をしめた。

リザ・セミヨンノヴナは、廊下の物音で目を醒した。復活祭に、後三日といふ朝だ。女の聲がした。アンナ・リヴオーヴナの聲がした。泣き聲が聞えたやうな氣がした。

顔洗ひに行くと、台所の戸が開いて居た。ナースチヤがその眞中に立つて、しやくり上げ泣いて居る。リザ・セミヨンノヴナは、

――何をこはしたの、ナースチヤ

と訊いた。ナースチヤは立つて居る場所を動かず、前垂をつかんだまゝ瞼から手をはなして答へた。

——干物をすつかり盗まれちまつたんです。

云ふうちに、涙が眼からころがり落ちて、怯えたナースチヤの頬を流れた。

——昨夜、貴方も見たあの干物を今朝までに誰かが盗んだんです。

リザ・セミヨンノヴナは、腹立たしさうに

——いつだつて復活祭の前つて云ふと、碌なことはありやしない

と云つた。モスクヷで一番盗難の多い季節なのであつた。

——お泣きでない、ナースチヤ、泣いたつて出て來やしない

——オイ！ オイ！ リザ・セミヨンノヴナ、恐ろしい！ 私がいつ悪いことをしたのでせう？ アンナ・リヴオーヴナやマリア・セルゲエヴナは、私が盗んだつて云ふんです

——お泣きでない、お前に二人寢臺の敷布なんぞいらないのは皆知つてるんだから

閉めきつた食堂から、電話の音がした。ナースチヤは しやくりながら其を聽き澄した。

——アンナ・リヴオーヴナが警察へ電話をかけて居るんです、私のところへ×を呼ぶんです

リザ・セミヨンノヴナが室へ戻ると、ナースチヤは、茶を運んで來た。彼女はもう泣いて居なかつた。リザ・セミヨンノヴナが机の前に坐り、茶を飲んで居る間、ナースチヤは、幾度か黙らうとしながら黙り切れず、訴へた。

——あの人達は盗られた物が餘り惜しいんで、私が盗んだなんて云ふんです。×が來たつて、私、何處の隅でも、靴の底まで嗅がせます、平氣だ。

ナースチヤの涙が止つたが、昂奮で今は微に胴震ひして居るのが見えた。

——たゞね、リザ・セミヨンノヴナ、私はもう八ケ月近くアンナ・リヴオーヴナのところで働いた。アンナ・リヴオーヴナは私が不正直でも置いたでせうか？ それだのに、今になつて盗んだなんて云はれるの、口惜しいんです

リザ・セミヨンノヴナは、苦笑ひして、

——おや、私も×に嗅がせなけりやなるまいと云つた。

——昨夜一緒にあんなところへ行つたんだから

——貴女は知らないけれど、オルロフは、いつだつて机の上に細かいお金をばらで出しとくんですよ、何故？ 私は知つてます、オルロフは私を試して居るんです。私、指の先だつてそんなお金に觸つたことはありやしない。——そんなにしてたつて、不仕合はせな人間には、不仕合はせしか來ないんです。——オイ！ 今にどんな不仕合

はせが來るだらう——

夕方リザ・セミヨンノヴナは鈴蘭の花束と、金色で細いリボン飾りのついた卵を買つて歸つて來た。狹い借室での復活祭の仕度だ。廊下で、アンナ・リヴオーナに出會つた。すると挨拶もせず、出しぬけに彼女はリザ・セミヨンノヴナに云つた。

——今朝警察から貴女のことをきゝに來ましたよ、どうしたんでせう

——…………そんなこと私が知るもんですか、アンナ・リヴオーヴナ

リザ・セミヨンノヴナは、ナースチヤが茶を持つて來た時

——アンナ・リヴオーヴナは、盗まれた敷布が惜しくて、頭をおつことしてしまつたよ、ナースチヤと云つた。

——どうしたい、可愛いゝはよくお前を嗅いでつてくれたかい？

——えゝ。アンナ・リヴオーヴナとマリア・セルゲエヴナは、私が盗まなかつたのが不滿なんです。ねえ、リザ・セミヨンノヴナ、今にどんな不仕合はせが來るんでせう、丁度私のところに鍵のあつた晩に盗まれるなんてねえ。…………盗んだ人間は、安全で私だけがこんな辛い思ひをするなんて！

ナースチヤは、急に憎惡に燃えた眼をして叫んだ。

——惡人奴！　惡人奴！

往來では粉雪が降り出した。歩道の上を花賣り男が兩手に鈴蘭の束を持ち

——新しい鈴蘭、剪りたての鈴蘭、お買ひなさい、五十哥

通行する年よりの女に近づいて、花束をつきつけた。老婆は買物籠の經木製、二本の百合の花を指さした。——御覽！　これを。いりやしないやね、この上ゝゝゝえ？——アルバートの廣場の赤白塗の古い大教會では、二人の男が鐘樓で受難金曜日の鐘を鳴らした。教會の外壁を廻つて通る電車の窓硝子と、向ふ側の食堂の扉が、ガーン、ガーン重くけたゝましく鐘の音響によつて絶えず震へた。上衣の左右の衣嚢へ火酒瓶を突こみ、一本からは時々喇叭のみしつゝ、勞働者が一人並んで居る客待ちタクシーの陰を通つた。いろんな方角から射出す明りで通行人の顏が歪んで見える廣場の辻を、警笛を鳴らしつゞけ、赤十字の應急自働車が馳り去つた。夜の裡で赤い十字が瞬間人々の目を掠め、光つた。

粉雪は徐々降り、鐘の音波はやゝ空にこもり、下方から光線を浴びる教會の尖塔は雪の降る空の高みでぼやけ始めた。然し、食料品販賣所では、床に撒いた大鋸屑を靴にくつつけて歩道までよごす節季買物の男女の出入が、絶えない。——

[illegible]

こには、瓦斯でない白樺薪を焚く本物の暖爐があつて、アンナ・リヴナーヴナは例年復活祭のクリーチは、自家のと、縁遠家族の分と、其處で焼くのであつた。リザ・セミヨンノヴナは芝居へ行つたし、ナースチヤの台所では、水道栓から滴る水の音が聴えるだけであつた。

ナースチヤは、踏台をして高い棚の奥から、古びた樺細工の鞄をおろした。布團や何かと一緒にこれも今朝コンタリートの床の上で、、、、、に嗅がれたものだ。膝の上に鞄をおき、蓋をあけ、ナースチヤは、縁に赤い水玉模様のついたけちな手帛づゝみをとり出した。死んだ母親がナースチヤに呉れた聖像であつた。聖像は、ほんの小さい二寸角ばかりのもので、何だかわからない古い厚い板に、金ものゝ基督と聖者がついて居た。基督も聖者も目鼻はなかつた。金屬板の上に簡單な直線で體と顔面の輪廓だけ刻まれて居る。ナースチヤは、片手でその聖像を持ち、片手で自分の胸の上に十字を切つた。

明日早朝焼かなければならぬ肉入麵麭の種が拵へてある鉢を料理台の上で片よせ、ナースチヤは、その小さい聖像を壁にもたせかけて置いた。三哥の小蠟燭の燃えさしをさがし出し、ボール紙の切端に蠟をおとして立て、二本の芯に火をつけた。自分の大さにつり合つた蠟燭の焔を受けて、聖像の基督と聖者とは嬉しげに台所の中で輝いた。ナースチヤは、本當の聖壇の前でするやうに、聖像の前に立ち、幾度も胸に十字をきつては低く叩頭した。

それがすむと、台をもつて來て、ナースチヤは料理台にぴつたりくつついて架けた。台の上で兩腕を深く組み合はせ、その上に顎をのせ、自分の顔と同じたかさにある小さき聖像を、ナースチヤはしげしげと眺め始めた。——どうして、この基督や聖者に眼も口もないのであらう。右の方に立つて居るのが、自分の聖者だと、ナースチヤは子供のときから教へられた。だが、何處で、これが聖者ナデージュダだと判るのだらう？　目もなく、口もなく、それで自分を護つて呉れることが本當に出來るであらうか？　あゝ、しかし、基督にだつて眼や口がないではないか。…………

ナースチヤは祈の文句も正式には知らず、不斷信心して居るといふのでもなかつたが、そうして、蠟燭の光に照らされる古馴染の小聖像を眺めて居ると、親しい休まつた心持になつた。思ひがけない出來事で疲れ、泣いた心が、和らいだ。蠟燭の燃える微かな匂ひも、いゝ心持だ……ふつと腕に押つけて居る口の隅から唾が出さうになつた。ナースチヤはいそいでそれを吸ひ込み、又頭を下して頬べたを腕にのつけた。瞬をする度に、ナースチヤの睫毛をとほして、蠟燭の芯のまはりと聖像の面から短い後光が細かく一杯八方へさした。一つゞつナースチヤの瞬が悠くり重くなつた。それにつれて後光は、蠟燭の

まはりと聖像の面の上から次第に長く、明るく、顔の上にさして來るやうな氣がする。ナースチヤは溜息をついた。彼女の手肢から感覺がぬけ、いつか閉ぢた瞼を透し頭の內まで光で一杯になつた。――

いびきで、ナースチヤは愕然と目を開いた。彼女は自分の周圍を見廻した。かつちりと電燈が臺所ぢうを照して居る。蠟燭は三分程燈りのこつて居る。ナースチヤは蠟燭を吹き消した。煙が搖れて、強い匂が漂つた。先刻とはまた違ふ淋しい心持がナースチヤに起つた。ナースチヤは、伸びをし、肩を掻いた。

ベルが鳴つて、オルロフが歸つて來た。彼は、廊下で外套をぬぎ乍ら、水のやうな眼で凝つとナースチヤを見つめ

――いゝ娘さんだね、お前は

と云つた。ナースチヤは、自分の顏に何かゞついて居るのだと思つて、あはてゝ手のひらで口のまはりをこすつた。オルロフは、やつぱり水のやうな眼でナースチヤを見守り、命令した

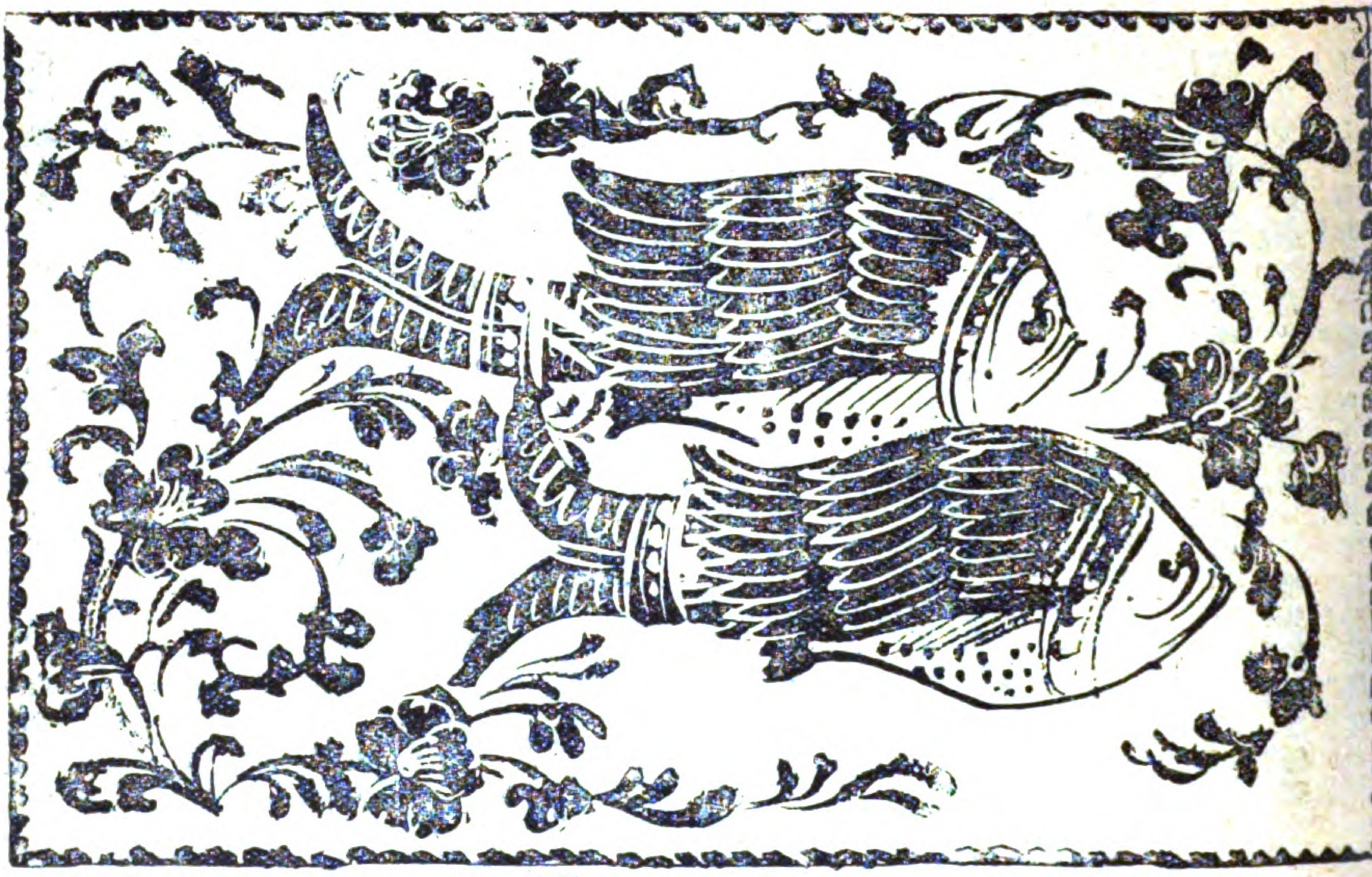
――どうか私に熱い茶を一杯持つて來てくれないかね

ナースチヤが臺所へ行く後から、彼はもう一遍叫んだ。

――ごく熱いのでなけりやいけないぞ

ナースチヤは、臺所の戶をばたんと閉めて、薬罐を瓦斯にかけた。動揺して居る[illegible]、[illegible]、ナー[illegible]ろから低く下に見えた。

一九二八年、八月
デートスコエ、セロ――



アパアトの女たちと僕と

龍膽寺雄

一

『おい。……』

さう云つて、だしぬけに後ろから、二つ三つ拳で肩を叩かれて、われに返つた時、僕はとある佛具商の飾窓の、支那出來らしい紫檀の佛龕に見入りながら、ふと、鼻の頭の冷たい觸感に氣をとられて、――いゝ氣になつてあちこちと、厚ぼつたい硝子の面に顔を滑べらして居た。振り向くと、友人の加治と植村とが、極端に輪廓の違ふ顔を二つ並らべて、僕を見て、莫迦莫迦しげに笑つて居た。

『熱心に何を見てるんだい。』

瀟洒な白い顔へ、幾らか皮肉な微笑みを浮かべて、植村は艶やかな洋竹を甃路へおろした。夥だしい雜閙が夜店の前にうごめいて居るので、彼等はからだを絶え間なく人波に洗はれて居た。

『佛壇でも買はうかと思つてね。』

僕は摑んだ手布で鼻の頭を拭きながら、自嘲的に笑つて、飾窓のそばを離れた。——注意の焦點からいつとなく自分を失して、偏執狂の様に頭の片側へ空虚をこしらへて、ふと氣付いて、自分で莫迦莫迦しく笑つたりするのが、僕のその頃の習慣だつた。——電車のクッションへ腰をかけて、前に立つて居る識らない女の、帶止めなんぞを無心に指でいぢつて、ひどく恥かしい思ひをしたりなどするのは、再々なのだ。

僕は友人たち二人の、やゝ揶揄的な視線の中で、失した自分をまた拾ひ出して、變に瞼の邊を赧らめた。

夜店の前の雜閙を泳いで、こどつたり離れたりしながら、暫らく僕たちは話のいとぐちを見つける餘裕もなく動いた。

『どうした。さつぱり學校へ見えないぢやないか。』

加治がちよいと立ち止まつて、鼻の先きで圍つた手の中を燐寸で明るくして、それから肩先きのまるみを僕に押しつけた。

『やらうか。』

『持つてる。』

僕は僕のぶこつな手のひらの上の、バットの罐をちよいと見せただけで、不愛想に答へた。——[illegible]に持つて、[illegible]リストらしい口調をしば〳〵さうして公然と洩らしながら、その[illegible]せ驚ろくばかり眞直に學生々活を送つて居るこの友人に、僕はいつも不快な、幾らか侮蔑的な氣持ちを持つて居た。それがなぜか、今夜は妙に僕の心理と相映ずるところのものを持つて、柔らかく喰ひ入つたのだつた。

僕は自分の睫毛の裏に、妙な涙の芽を感じた。

『どうだい、少し出て來ないか。』

『うん。……』

『R・！』

だしぬけに人を掻き分けて、植村が後ろから肩をつかんだので、僕は加治との會話を切つて、足をとめた。と、植村の口が僕の耳へすれすれに寄つて來た。

『あすこに立つてる女な。……』

『……。』

『ほら。あすこに鞄を見てるだらう？ 眼鏡をかけて。……』

『うん。』

『あいつを僕識つてるよ。』

僕は[illegible]

そつちへ振向いて、

『美人ぢやないか。』

と、話を奪つた。

『美人だ。』

『何者だい。』

『なアに。僕ンとこの近所の珈琲屋の娘さ。行きつけのね。』

『カフエか？』

『ぢやアない、珈琲屋だよ。』

僕は玩具屋の前へ立つて、彼等の會話を無興味に耳へとめながら、硝子の小さな眼玉を光らせて居る、大きな灰色のはりこの熊だの、耳を立てゝちよこんと坐つた縫ひぐるみの狆だのを眺めて居た。さうして、彼等と歩調を合はせると、

『十五圓はたかいね。』

と、加治を振り返つた。

『何かよ。』

と、加治は莫迦にした樣な眼つきを、僕から飾窓へそらした。

『熊がさ。』

僕は舌の根に變にねば〳〵する塊まりを感じて、續けさま足もとへ唾を吐いた。

僕は今夜も感情的なある不快な記憶を殘して、家を出た。兄と學校の出席點檢の通知について、一寸した口爭ひをして、幾らか端的に感情をぶつつけて、さうして、――さうした決裂のまゝ、家を飛び出して來たのだ。さばけない、無口な、氣靜性で通つて居る僕は、めつたに人の中で、とりわけ、なじみの薄い家族たちの間で、自分の感情をむき出したりする樣なことはないのだつたが、ふとしたきつかけから、今夜はそこへメスを入れられて、――なま〳〵しい血沫きを、そこ等へはねかして來たのだ。

僕の心理に常住に巣喰つて居る、ある憂鬱な虚無が、をかしなことには、そんな時に限つて、そのまゝ受け賣りの、近代思想の鎧を着て、猛然と彼等、――と云ふよりは、もつと正しく云へば、自分自身の弱はみへ逆襲して行く。

それを受けとめられるのは、たゞ一つ虚無の楯しかなかつた。當然僕は、いかめしい鎧の重壓と一緒に、底知れない自分の虚無の中へ、落ち込んで行かなければならないのだ。

僕は墓場を訪ねる樣な氣持ちで、今夜も明るい町の雜閙へ、索漠と足を入れたのだつた。

『どうだい。……そこ等で一杯冷たいものでもやらうぢやないか。』

白い洋竹を腋へかゝへて、植村が僕たちを振り向いたのは、……

の途切れを縫つて車道を横切つて、向かう側の歩道の幾らか暗い鋪路へ足を載せて、數歩してだつた。僕は自分の氣持ちを中斷されて、ぼんやり友人の顔を仰いだ。

『今夜は僕金を持つてないぜ。』

『あゝいゝとも！』

と、植村は鷹揚にうなづいて、先きに立つた。

カフエM・の、光りの渦を溢らした扉口へ足を入れかけて、ふと僕は、店の向かふの化粧壁の一部を刳つた、ベビイショップの氷柱のかけらの様な小さな飾窓を見やつた。店の前には黒つぽいフランス風の衣裳をつけた稚婦が、いくらかまばらな人通りの眞ン中に、小鳥の様に機敏に眼を動かして居た。

『何だい。』

『一寸。……』

僕は友人たちをそこへうつちやつたまゝ、三歩四歩、鋪路の灯影を切つた。

おかつぱがくるりと後ろに廻つて、灰白い小柄な顔と、栗鼠の様な黒い大きな眼とがこつちへ向いた。

『U・ちやん？』

『姉さんは？』

彼女ははつきりと頭を振つた。さうして、顔のほうを[illegible]から、華奢な指で、額と大きな黒い眼とを掻き出して、

『あたし一人よ。』

と、甘いた口のきゝかたをした。——サイクラメンの匂ひが、手にした花束からむつと僕の鼻を襲うた。

『どうだい。……』

彼女は答へのかはりにからだをねぢつて、腰のつがひをすりつけて、その一箇所へ僕の手を引つ張つて行つた。と、ポプリンのスカアトの下に、——そこのポケットの邊に、ざくりと白銅の軋む重たい感觸を感じた。

『大分いゝぢやないか！』

『いゝわ。』

さう云ひかけて、彼女はいきなり僕の靴の踵を踵で踏みつけて、[illegible]路の上を跳んで、タクシーの踏床からひらりと跳び降りた、若い二人づれの男の一人へ、飛びついて行つた。

白い指が敏捷に男の灰つぽい腕の邊で動いて、花束の[illegible]つたマアガレットが一輪、白くそこへとまつた。

『取りに寄つてね！』

[illegible]

れた時、彼女はくるりとこつちへ小綺麗な顔を向けて、扉口へ引つ返さうと踵を返した僕に、そつけない聲を投げつけた。

二

花電氣の下では、蟲々を透かした斑石の鏡を背にして、友人たちが好奇深い、はしばみの様な眼を二つ並らべて、僕を待つて居た。──僕が座につくと、早速ソシヤリストは口を切つた。砂糖壺から眞つ白い立方形を一つ摘み出して、口へ入れながら。

『へえ。あいつ君の女友だちかい。』

稲村は品のある口振りで、冷淡に續けた。

『大分了解のとゞいた仲ぢやないか。』

僕は彼女の花束が追つて來たサイクラメンの匂ひを、どこかに感じながら、ポケットにいつも這入つては居るが、買つたことはない、ある年嵩の女友だちのところから「奪略」して來る、スプレンデエトの紙卷を出して、一本殘つて居た細い金口を啣へた。

──輪繪たち姉妹のベビイショップが新聞などで騒がれて、幾らか銀座の「通人」たちの間に識られかけたのは、つい昨今のことだが、僕は彼女たちをずつと以前から、──彼女たちが單なる女闘士として、新宿の盛り場へ出て居た時分から、識つて居た。今云つた年嵩の女友だち(S・と云ふ筆名で相當に識られた民謡詩人なのだが、)が、友人の木村と風變はりな生活をして居る、庭附のある小さなアパアトメントに、一緒に居たので、そんな機會から近しく往き來をする様になつたのだつた。向島に姉が一人居て、あるむぐりの外科醫の妾をして居ると云ふのだつたが、二三の事情から彼女たちは、たつた一人のその肉身を避けて、姉妹でそこで自由生活をして居たのだ。

アパアトメントでは、繁々と僕が彼女たちのところ、──と云つても、おほかたは二階の民謡詩人を訪ねるつひでに、ちよいと寄ると云ふくらゐに過ぎないのだが、──僕が姉妹の保護者なんだらうなどと云ふ噂さが、一時高まつたりなどした。僕自身から云へば、保護者どころか、どうかすると彼女たちの乏しい財政から、小遣ひぐらゐはねだりかねない甲斐性のない友人に過ぎなかつたのだ──

彼女たちがベビイショップの計畫を思ひついたのは、S・さんが英國の新聞で見たある寫眞入りの記事から暗示されたので、具體的な點では色々と僕たちが骨を折つたのだつた。銀座のカフヱM・の主人と識り合ひなのを手づるに、遂々M・のコンクリートの化粧壁の一箇所に、二尺角の窓を開けさせて、二百圓たらずの資本まで主人に出させてしまつた。尤もそれには、單純な僕の奔走以外に、彼女たちと彼との間に、ある種の妥協が成立したせゐもあるらしいのだが。

の途切れを縫つて車道を横切つて、向ふ側の歩道の幾らか暗い舗路へ足を嵌せて、數歩してだつた。僕は自分の氣持ちを中斷されて、ぼんやり友人の顔を仰いだ。

『今夜は僕金を持つてないぜ。』

『あゝいゝとも！』

と、植村は鷹揚にうなづいて、先きに立つた。

カフエＭ・の、光りの渦を溢らした扉口へ足を入れかけて、ふと僕は、店の向かふの化粧壁の一部を刳つた、ベビイショップの氷柱のかけらの樣な小さな飾窓を見やつた。店の前には黑つぽいフランス風の衣裳をつけた禿髮が、いくらかまばらな人通りの眞ン中に、小鳥の樣に機敏に眼を動かして居た。

『何だい。』

『一寸。……』

僕は友人たちをそこへうつちやつたまゝ、三歩四歩舗路の灯影を跳つた。

おかつぱがくるりと跫音に廻つて、仄白い小柄な顔と、梟の樣な黑い大きな眼とがこつちへ向いた。

『ロ・ちやん？』

『姉さんは？』

彼女ははつきりと頸を振つた。さうして、顔ぢゆうを覆うた髪のから、華奢な指で、額と大きな黑い眼とを掻き出して、

『あたし一人よ。』

と、甘いた口のきゝかたをした。――サイクラメンの匂ひが、手にした花束からむつと僕の鼻を襲うた。

『どうだい。……』

彼女は答へのかはりにからだをねぢつて、腰のつがひをすりつけて、その一箇所へ僕の手を引つ張つて行つた。と、ポプリンのスカアトの下に、――そこのポケツトの邊に、ざくりと白銅の軋む重たい感觸を感じた。

『大分いゝぢやないか！』

『いゝわ。』

さう云ひかけて、彼女はいきなり僕の靴の頭を踵で踏みつけて、舗路の上を跳んで、タクシーの踏床からひらりと跳び降りた、若い二人づれの男の一人へ、飛びついて行つた。

白い指が敏捷に男の灰つぽい腕の邊で動いて、花籠の盛つたマアガレツトが一輪、白くそこへとまつた。

『傍りに寄つてね！』

白い華奢な手のひらの上へ、男の手から、ちらりと光るものが零とそ

れた時、彼女は[illegible]るりとこつちへ[illegible]口へ[illegible]つ[illegible]さうと臺を廻[illegible]た、[illegible]

二

花電氣[illegible]友人たちが[illegible]つて居た。——[illegible]

[illegible]女友だち（S.と云ふ筆名で相當に識られた民謠詩人なのだが、しか、友人の木村と風變はりな生活をして居る、淀橋のある小さなアパアトメントに、一緒に居たので、そんな機會から近しく往き來をする樣になつたのだつた。向島に姉が一人居て、あるむぐりの外科醫の妾をして居ると云ふのだつたが、二三の事情から彼女たちは、たつた一人のその肉身を避けて、姉妹でそこで自由生活をして居たのだ。

アパアトメントでは、繁々と僕が彼女たちのところ、——と云つても、おほかたは二階の民謠詩人を訪ねるついでに、ちよいと寄ると云ふくらゐに過ぎないのだが、——僕が姉妹の保護者なんだらうなどと云ふ噂さが、一時高まつたりなどした。僕自身から云へば、保護者どころか、どうかすると彼女たちの乏しい財政から、小遣ひぐらゐはねだりかねない甲斐性のない友人に過ぎなかつたのだ。

彼女たちがペピインサップの[illegible]いたのは、S.さん[illegible]の[illegible]ある[illegible]人りの記事から[illegible]されたので、[illegible]は何かと僕たちが[illegible]つたのだつた。銀座のカフエM.の[illegible]人と[illegible]り合ひなのを[illegible]るに、[illegible]M.の[illegible]トの[illegible]に、[illegible]の[illegible]を開けさせ、[illegible]人[illegible]れは、[illegible]僕の[illegible]し、彼女[illegible]の間に、ある種の協[illegible]が成立しかかつて[illegible]らしいのだが。

美貌な女給たちを集めることの上手な、好色家の主人は、どうやら自分で打つた網に自分で引つかゝつたと云ふ風だつた。——娘たちは大びらで彼に、着物をねだつたりする樣になつたのだつた。

彼女たちはそこへ、ヂヤスモンドの香水や、フランスやドイツのさまぐな媚藥や、折り折りの催ほしものゝ會員券などを色々と並らべて、M・を根城に、かたはら花と「壺」とを賣つて居たのだ。

『妹の方が美人だね。』

氷のかけらの溺れたコクテエルのグラスが配られると、いち早くそれへ唇をつけた植村が云つた。

『さうかね。』

と、加治は反駁的な口振りでつぶやいた。

『標緻だけから云ひア、俺れは姉の方へ好感を持つな。』

『處女ぢや無いだらうけれどもね、どつちも。……』

上品な植村がやゝ懸念げな眼を僕につけて、珍らしく露骨な口調を弄した。

『女賣子が十六七にもなつて、處女だつたら奇蹟だ！』

と、ソシヤリストが駁した

『女賣子ァにア限られねえ。あらゆる近代の女性がだ。』

『しかし、』

と、植村は幾らか冗談らしく、

『少なくも僕の妹は處女のつもりだがね。』

『あの面ぢやアね！』

と、加治は不遠慮にやつゝけた。

『……せめて僕に似りアね！』

『へ。そこまで徹底すりア、むしろ同情するがね。』

と、加治は嘯ぶいて、

『おい、一本くんないか。』

と、僕の方へ手を出した。

『お合憎さま。空だ。……』

と、僕が華奢なスプレンデエトの紙箱を、指で彈ぢいて、卓子の面へ滑べらせると、彼はそれでもそれを手にして、一應中味を調べながら、まるでそれには無頓着な口振りで、

『K・に一つ紹介して貰つたらどうだい。』

と、植村の顏を見た。

『……ついでに、俺れにもつてなわけなんぢやないのか。』

『冗談ぢやねえこン畜生！……察しのいゝこと云ひアがる。』

と云つて、うワッはつはつは！と、加治は天井へ笑ひ上げた。

外へ出ると、[illegible]

いヴェイルを窓からたらして、街の灯りを包んで、鋪路を濡らして居た。右へ左へと行き交う自動車のヘッドライトが、それを映して、恐ろしい長い光芒を顫はして居た。

『誰かしら傘を持つてアがるから縁だ！』

雨の中へ立つと、だしぬけに加治が高聲を立てた。

『君の論法で行けば、……小市民的利己主義だと來るんだらう。』

『ふん。』

ソシヤリストは歯牙にもかけないと云ふ風で、くるりと視線を轉じた。

『お嬢さん雨で逃げたな。』

ベビイショップは四角い窓わくへ黒く鎧戸をおろして、そこ等には納繪の姿も、姉の奈奈子の姿も見えなかつた。

『さて、……一寸俺れは芝浦へ用事があるから、失敬するぜ。』

尾張町の角まで引つ返すと、突然加治は云ひ出した。さうして、挨拶らなくそのまゝ、縄飛びでもする様に濡れた線路をまたいで、向かふ側の歩道の雑閙の中へ、姿を消してしまつた。

『どうした。元氣がないぢやないか。』

霖雨の中を、肩を並らべて歩きながら、ふと柿村は僕を顧みた。彼の厚い近眼鏡が沫きに濡れて、きら〳〵と融けて居るのが僕の眼についた。――僕はだまつてたゞ愛嬌に微笑んだだけだつた。

新橋驛で、手のひらの様にすれ違つた向きの違ふ電車へ、別れ〳〵に乗つたのは、それから數分してだつた。

三

『どうしたの？』

僕をアパアトの、蔦のからんだ粗末なポオチへ迎へると、納繪は僕のからだへ手を觸れてみて、いきなり叫んだ。僕は彼女の、色の褪せた、古びた、白つぽいネルの寝間着から、ふと牛乳の匂ひをかいだ。

『こんな雨の中を今時分。……』

僕は帽子を床へ振つて、雫くを切つて、だまつて先きに立つて、扉を開けた。

――部屋にはもう夏のよそほひがしてあつた。八疊と二疊と續きの古びた日本間で、その八疊の半分へ彼女たちは床敷きを擴げて、――籐の低い卓子だの腕椅子などを据ゑて、部屋を二た色に使ひ分けて居た。殘らずで十くらゐしか部屋のない、小さなこのアパアトメントは、つひ露路のとつつきのF・と云ふ雜貨商が經營して居るので、F・莊と呼ばれて居たが、從來のアパアトで一般には通つて居た。別にさう云ふ規定があつたわけではないのだが、なぜか若い女たちの世帯が多い

のを、煤けた赤煉瓦の垣を廻して、蔦に覆はれたこの漆喰の建物は、どこかに妙な、ある艶めかしさを藏して居た。錆びた細い鐵棒のアーチと、卵の樣にほやのこはれた表門をくゞると、正面にポオチが三つ並らんで居て、むらに蔦をかぶつて居た。その右のはしのが納繪たちやS・さんの部屋ので、ホオルのとつつきに納繪たちの部屋の扉があり、ペンキ塗りの階段を左へのぼると、二階のS・さんの洋間へ出る樣になつて居た。

各部屋々々は完全に厚い壁で仕切られて居り、窓の向きも大膽考慮されて居た。たゞ、天井の高い狹い廊が、建物の北側を貫ぬいてどの部屋もそこへ戸口を持つて居たので、そこを開け拂つて置くと、建物全體に包藏された共通な雰圍氣、――もの音や、匂ひや、何かしら人の多く住むところにつきまとふ落ち付かないもの丶氣配が、侵入して來た。

ガスや水道などの配置された、共同の台所と、――風呂と便所とが、その廊の中ほどからT字形に北へのびた、別の廊に接してあるので、そこでだけはこの建物に住む全家族たちが、朝夕顏を合はせた。

納繪たちは、廊のトンネルの下の狹い二疊へ、一所に布團を擴げて、そこを寢室に使つてゐた。僕はよく彼女たちの留守に、そのうんまりしてゐた隙間へもぐり込んでは、[illegible]とつて、づうづうしく[illegible]つたりなどしたものだつた。時には、女たちの間へ挾まつて、雜魚寢をしたりする樣なこともあつた。

『莫迦ね。早くぶたれるわよ。』

彼女は僕から、不愉快に肌へねばりつく、濡れたセルを剝がすと、かはりに幾らか汗くさい、彼女のメリンスの普段着を壁からとつて來て、妙に姉さんぶつた手つきで、肩から羽織らした。

『病氣になつたらどうするの。』

『うちの病院へ入るよ。』

とふざけて、それから僕は、絞りの赤いしごきを締めた。

『姉さんは今夜は歸らないのかい？』

彼女は邪見に椅子を動かして來て、だまつておかつぱを擧げて、――頭を振つた。

『上の人たちは？』

『みんな居る。』

彼女は膝頭を僕とぶつつけて、椅子へ深々かけて、氣もなげに答へた。さうして、肘付きへ肘を載せたまゝ、滑めらかに手首を動かして、卓子の上の錫のシガアセットを僕の方へ動かして、――恐ろしいすました顏をひよいとあげた[illegible]小供々々しい[illegible]な顏には、[illegible]

い、瘁れめな頬や、睫毛をかこんだ、荒んだ、不健康なくまなどが現れて居た。幾らかおでこな額から、子供らしく反れた、ほつすらした鼻すぢの邊の、緻密な皮膚が、おかつぱの蔭で、牙の様に冷たく光つた。――

『お煙草。』

『へえ。……』

僕は憂欝な眼の表てへ、おどけた表情をつくつて見せた。さうして、彼女のまねをして肘付きの上で、てこの様に手首を廻して、錫の箱からエアシップを一本つまんだ。――と、敏捷に彼女の手の中で燐寸が小さな焔をあげて、華奢な彼女の指を赤く透かせた。

『M・で一緒だつたあの男の人たち、お友だち？』

『うん。』

僕は蠟の吸ひ口を歯で潰した。――彼女は血の色を透かせて薄く乾いた唇を、子供の様にまるく尖らかして、おつと光る眼を僕の口元へつけた。妙に涙ぐんだ様に光る眼を。

『君は女優になるといゝよ、活動の女優にね。……』

『なアぜ？』

『君のがらがさうだからさ。』

『なか〳〵美人だから？』

と、彼女はからだを椅子の背へぶつつけて、仰向に頭をもたらして、――おかつぱの中へ指を突つ込んで、むしや〳〵と髪をむしつた。

『あたしこないだ姉さんに叱られちやつた。……』

『なぜ？』

『吉原へ行つて、お女郎にならうかしらつて云つたのよ。』

『お女郎だつて結構ぢやないか！』

『さうよ。』

と彼女は今度は脚を組んだ。さうして、

『……姉さんなんぞとてもだめよ。醜くて。』

と、無興味につぶやいて、不意に僕の膝の前へ窮屈に立つた。

『一寸待つてね。……あたしココアをいれたげるから。パンか何ぞ喰べる？　喰べかけでよけりア、鮭の罐詰もあるわよ。』

『さう。……何か喰べさしてくれるかい？　僕本當云へば、今日は夕御飯も未だなんだ。』

『ぢやM・で喰べたらよかつたぢやないの？』

『お金がなくちや喰べられないぢやないか！』

『哀れなやつね。』

僕は一寸不快な、――と云ふほどでもない、何かある憂欝な眼で、彼女を仰いだ。と、だしぬけに彼女はからだをこゞめて、華奢な手を

僕の頭へからめて、もしやくくと髪を僕の顔へかぶせた。
『慍つたの？……ね、慍つたの？』
僕は冷たい手で、幾らか邪見に彼女の髪を掻きのけた。――彼女たちから時折り小遣ひを惠んで貰つては、それでカフエ廻りなどをして居る僕は、なぜかこんな場合に、かうした意識をもつて、冷たく自分に反抗しなければならない、妙なこだはりを持つて居たのだ。
『うるさいよ。放しておくれ。……』
『厭や、厭や、厭や、慍つてるんだから。』
彼女は鼻を押しつけて、がむしやらに頭を振つた。
『慍つてなんぞ居アしないよ。』
『慍つてるわよ慍つてるわよ！』
彼女は僕の顔の上で、また頭を振つた。さうして、僕の指にどこかからだを擽ぐられて、――突然、華やかな笑ひ聲を立てゝ、そこから跳び退いた。

四

數分の後、僕たちは人氣のないひつそりした臺所に、ガス焜爐を前にして、椅子を向き合はせて居た。
――薄い闇にあふられて、ニウムの[illegible]かしが錯でつく／＼[illegible]を立てはじめた時、ふと、扉の[illegible]
こり幹ちやん（木村をさう僕たちは呼んで居た。）が、顏を出し[illegible]
彼は夜更けの、がらんとしたこの臺所に、僕と鞆繪の姿を見出たすと、一寸意外だと云ふ樣な顏をして、それでもなつつこくそばへ寄つて來た。
『誰かと思つた。今時分灯りなんぞつけてて。……』
さう云つて、彼は流し臺の上から瀬戸引きの湯呑みをおろした。
『なに？』
『水を呑みに來たんです。』
と、幹ちやんは板壁へ並らんだ龍頭の、錆びたニッケルの栓を手にして、僕たちを振り向いた。――彼は男がらにしては幾らか紅の勝つた、毛深いネルの寢間着を、態めに脚へからませて、幾らか醉つて居るらしい美しい顏に、眼をきらきら光らせて居た。――S・さんに踊りなどを習はせられて居るこの美少年は、手足やからだまで、變にしなくくと柔らかで、女の子か何ぞの樣だつた。
『S・さんは？』
『寢ちやつた。……』
と、彼は剝げた瀬戸引きの湯呑みを唇のところへかしげて、[illegible]
た聲をこく／＼／＼と[illegible]、云つて、[illegible]

頭の下へあてがつた。

『ココアを沸かしてるから、呑んでかない？』

低いまる椅子の上で、くるりとからだを廻して、鞆繪が彼を仰いだ。

S・さんの口を借りると、以前に乞食をして居たと云ふ、――さうして、彼自身も、ごく小さな時分の記憶に、騒がしい橋の下か何ぞで、手拭ひの袋の中から母親に御飯を出して、喰べさして貰つて居た覺えがあると云つて居るこの少年を、彼女は妙な病的な、ある倒錯したしかたで、可愛いがつて居た。十四の年まで養育院に居て、そこから引き取られたのは、市役所に給仕の勤めを周旋されたからだと云ふのだつたが、彼はたつた四日間名刺受けを持つて、市役所の廊下を歩き廻つただけで、不意にそこから失踪してしまつた。先輩の給仕仲間から、ニツケルの腕時計を一つと萬年筆を一本と盗んで。

仲間の使嗾によつたのだつたが、期待したほど彼等にも歓迎されなかつたので、彼はすぐに彼等から離れて、それから、淺草界隈の浮浪少年の仲間入りをして、――主として年嵩の女たちと一緒に行動をして居たのだつたが、そんな職業がどこか彼の氣に染まないので、遂に彼等の群れを脱出して、自由勞働者の仲間入りをして、暫らく深川に居た。S・さんと識り合つたのはそこでなので、その時分にS・さんが關係して居た、あるプロレタリヤ藝術雑誌の讀者として、彼女に會ひ會ひしたのが、そも〳〵彼等が今の様な關係を結ぶに到つた動機だと云ふのだつた。

その後S・さんは間もなく、思想生活の變轉から、その雑誌の一團と關係を斷つてしまつたが、相變はらず彼等は、親しく往き來をして居た。F・莊の二階に一緒に世帯を持つ様になつたのは、彼が十六の年で、まるで弟の様な氣持ちで彼女を慕つただけだと云ふのが、彼女に對する彼の氣持ちの告白だつた。

S・さんのところでもしかし、彼はよそ眼ほど幸福ではないらしかつた。感情家の彼女は、莫迦々々しく溺愛して、彼にからみついたかと思ふと、突然、感情を歪まして、冷たく疎々しくなつたりした。さうして、そのたんびに、鞆繪たちの親味な同情に、かばはれて居ると云ふ風だつた。――どうかすると、乞食上りのこの美貌の少年は、保護者に十日もうつちやりぼうけを喰はされて、その間ぢゆう階下の彼女たちの部屋で、みすぼらしい食客生活をしたりなどして居た。最近そんなことから、幾らか思想的な覺醒期へでも來たか、しきりに社會主義の書物などを讀みあさつたり、時折り、彼自身の生活態度について、非難的な口調を洩らしたり、似た様な議論を吐いて、鞆繪たちを共鳴させたりなどして居た。

『R・さん。あなただつて、そして鞆繪ちやんだつて、もう眼醒めてもいゝと思ふんです。どんな不合理な生活をしてるか。……』

そんな口調を、面と向かつて吐いたりすることもあつた。──彼がアパアトを飛び出して、無産運動の渦へ投じるのは、今では時の問題だと云ふ風に鞆繪たちにはとられて居た。僕は半分莫迦にして居たが。

『ぢやア少し遊んでおいで。かまアないんだらう?』

『えゝ。……』

彼は赤く濡れた、熱つぽつたい脣をネルの袖で拭いて、煮え切らない風でつぶやいた。

『僕、しかし君たちの邪魔をしてるんぢやないんですか。』

『莫迦ね! あんたは。』

鞆繪は眼下の者にでも對する様な口振りで、柔らかく相手を叱つた。

『あんたを邪魔にする様なことなんか、あたしたちしてやしないわよ。』

『さうですか。……』

『おかけなさい。』

彼女は立つて、椅子をあけて、鞆繪に云つた。

『煮立つたわ。』

『えゝ。』

彼女は卓子の前へ立つて、甲斐々々しくコンデンスミルクを滴らしたり、砂糖をしやくつたり、茶碗の仕度をしたりなどした。彼女の古びた白つぽいネルが、仕立ておろしか何ぞの様な、新らしい、紅の縞めいた幹ちやんの寢間著と、眩しい室内電球の下で、變なそぐはない對象をなした。

『鞆繪ちやんの着物なんですか。』

幹ちやんは、剝げた大きな瀬戸引きの湯呑みへ、八分目ほど、甘味の濃い、泡だつたココアを注いで貰ふと、ねこ舌なので、ふうふう忙がしく息をかけながら、まじめな眼で僕を見た。鞆繪の派出なメリンスの借り着が、變に彼に映つたのだらう。

『S・さんの御機嫌はどうだい君、この頃。』

『……。』

『惡るいわよ。』

鞆繪は脂ぼつたい白い、靨付きの茶碗を口端へ持つて行きながら、少しからだを浮かせて、僕のかたくの膝へかけて、話を奪つた。

『詩人なんて、機嫌を惡るくしてたまアいけないものと、あの人默つてるのよ。

幹ちやんは、それだけが彼の容貌の飾である。幾らか金魚の様に膨らんだ桃色の瞼を、湯氣の向かふへ消して、それから、おつかなびつくり湯呑みの縁へ口をつけた。羅紗の眞つ赤なスリツパの上へ爪立てた、彼の蒼白い華奢なかた〳〵の脚が、變にこまかく、神經的に顫へて居た。

「あんたとその邊は、ちよいと似てるわよ。」

納繪は茶碗を空間の一點へ置いたまゝ、僕を顧みた。痛いほど眞近に眼の焦點を置いて。――

「さうかね。……僕は詩なんぞ書かないけれどね。」

「だつて、何か書きたがつてるぢやないの？　お醫者さまなんぞになるのは厭やだつて、もうせんから云つてるぢやないの？」

彼女の膝頭が白くすべ〳〵と現れたので、僕はだまつてそこへネルを覆せてやつた。さうして、彼女の方はうつちやつて、そのまゝ幹ちやんに向かつた。

「君の短詩はこの頃どう？」

「だめなんです。納繪ちやんがあとからあとからけなしちまふんだから。……」

「納繪ちやんの批評なんぞ、あてにすることアないぢやないか。」

「なかないわよ！」

また彼女の膝頭がすべつこくむき出たので、僕は指の先きでそこを直してやつた。

「おやア、君の主張をきかうぢやないか。」

「この人は藝術をたゞの手段に使はうてのよ。自分のブルジョア意識を、詩でもつて攻撃しようつてのよ。」

「頗る結構ぢやないか。」

「納繪ちやんの議論は、S・さんの受け賣りなんですからね。」

と、幹ちやんがわきからひやかした。

「違ふわよ。」

「へえ。どこが？」

「あたしは、自分は少なくもプロレタリヤの味方よ。その點ではS・さんにも姉さんにもあたし反對だわ。でも、藝術をたゞの手段だとは思はないわ。手段だつたところで、それをかりなきアならないだけ、何かしら意義があると思ふわ。S・さんの主張にあたし贊成だわ。」

「偉い！」

「ちつとも偉くなんぞないわよ。たゞ、あたしの方が本當なのよ。U・ちやんだつても間違つてるわよ。あたしは繪にかいた林檎よりかい、なまのゝをいつも欲しいんだから、プロレタリヤだけれど。……U・ちやんなんぞ、お兄さんにお金を貰つて、それで足りなくつて、また

のを、煤けた赤煉瓦の垣を廻して、蔦に覆はれたこの漆喰の建物は、
どこかに妙な、ある艶めかしさを藏して居た。
錆びた細い鐵棒のアーチと、卵の樣にほやのこはれた表門をくゞ
ると、正面にポオチが三つ並らんで居て、むらに蔦をかぶつて居た。
その右のはしのが納繪たちやS・さんの部屋ので、ホオルのとつつき
に納繪たちの部屋の扉があり、ペンキ塗りの階段を左へのぼると、二
階のS・さんの洋間へ出る樣になつて居た。
[illegible]て居り、窓の向きも大體考慮

[illegible]時に
まつて、づう〳〵しく[illegible]たりなどしたものだつた。
女たちの間へ挾まつて、雑魚寝をしたりする樣なこともあつた。
『莫迦ね。雫くがたれるわよ。』
彼女は僕から、不愉快に肌へねばりつく、濡れたセルを剝がすと、
かはりに幾らか汗くさい、彼女のメリンスの普段着を壁からとつて來
て、妙に姉さんぶつた手つきで、肩から羽織らした。
『病氣になつたらどうするの。』
『うちの病院へ入るよ。』
[illegible]いきを縮めた。

あてたまゝ。

――彼の後ろで、ふと擽ぐつたい様な音を立てゝ、廻轉柄が廻て、汚れた素木の扉の間から、莫迦にけばつぽい、派出な友禪をつけた奈々子が、白粉の濃い、痩せた、病的な顔を覗かせたのは、丁度その時だつた。

五

『……？』

扉の廻轉柄が、いゝことりと音を立てた時、僕の肩へ鼻を押しつけて、膝へもたれて居た柄繪は、僕の着物へ涙をこすりつけて、立つて、素捷こく一座から飛び出して行つた。さうして、扉の間へ黒く光るスリッパを覗かした姉の奈々子へ、いきなり子供の様に飛びついた。

『姉さん！』

彼女は落ち付いた手で妹をおさへて、こつちへ眼を投げた。

『何をしてたのあんたがたは。……』

幹ちやんは幾らか間が惡るげに、流し臺のわきへ立つて、彼女を見

『ぢや、お部屋？』

『醉つてらつしやるから、そつと寢かしといたわ

さう云つて、彼女は細い、丈高なからだを僕の前へ運ん地惡るげな眼で、ぢろ〳〵とそこ等を見廻した。

『またU・ちやんの何か首動らしいわね。』

僕はやゝ憂鬱な眼で彼女を見た。――柄繪が今夜幾らか神經的由は、彼女の腹のところにバンドの金具が、堅く着物の上から手ではれたので、合點が行つたが、今度は自分の氣持ちが、どこかへ迷ひ兒になつてしまつてゐた。

『そんな格向をして、風俗壞亂よ。』

『ぢや脱ぎませう。』

ふと氣持ちが變はつて、――家へ歸りたくなつたので、いゝこざなしに僕は椅子から立つた。

『帽子掛けへかゝつてた濡れた着物あんたの？』

あちこちとお小遣ひをねだつて、のんきに大學なんぞへ行つてるのよ。そして、口ぢやさも〳〵學校なんぞ輕蔑して居る樣な振りをしながら、腹ぢや反對にあたしたちを輕蔑してるのよ。……だから、ブルヂヨアだわよ。』

『ベヽ。……ブウルヂヨアはまアいゝが、僕が君たちを輕蔑してるかね？』

『輕蔑してるわよ！』

『いつ？』

『こないだよつて、』

と云ひかけて、熱つぽく續けて、ひよいと彼女は僕を振り返つたが、もつれたおかつぱの蔭で、妙に自嘲的に顔を歪めて笑つて、

『……ブルヂヨアたちの御機嫌を買つて、お樂しみのお裾分けをして貰つて、それが立派な勞働の口實になるんなら、世の中に勞働でないものはないなんて。……お便所へ長く這入つてたもんだから、お便所の臭ひがわからなくなつたんだなんて、……未だ色んなことを云つたわよ、色んなことを。……』

さう云つて、ちよいとだまつて、──けはしい息をして、むつと僕を見つめて居るうちに、だしぬけに一杯淚を眼にためて、續いて、ぼろぼろとそれを睫毛から彈き出した。

『莫迦だな、むきになつて。……』

僕は乳のところへ顔を埋めて、子供の樣に戯しく肩を顫らして、咽び入つてしまつた彼女に、莫迦々々しく笑ひかけた。─

『およし〳〵、莫迦。』

──數日前、僕は彼女のポケットから、外國製の小さな藥の空き箱を見つけ出して、それを根に、幾らかしつこく、彼女をからかつたことがあつた。君たちの資本と云へば要するにこれくらゐなものだねとか、一と粒で幾らの利につくねとか、一と月に幾ッ箱あけるねとかと云ふ風に、幾らか嘲笑的な口調を弄して。──彼女は僕をみつめたまま、だまつて、こまかく紙箱をちぎつて、足元へ散らしながら、聽いて居たが、やがて僕が云ひ終はると、淚を一杯にためた眼で、不意に、靜かに、微笑んでみせた。──

女學校へ這入つたばかりの十四の年に、姉さんの旦那をして居ると云ふ荒淫な外科醫に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、遂に堪へられなくなつて、そこを脫走して來た彼女たちが、どうしてその後世間を渡らなければならなかつたか、それは充分僕も承知はして居たのだが。──

僕は彼女を膝へ載せたまゝ、彼女の耳元でわざと陽氣な笑ひ聲を立てゝみせた。こんな場合、もつと適當な慰撫のしかたは無數にはある

のだつたが、みきちやんの手前僕ははゞかつたのだ。――
僕はいさゝかあッけにとられたと云ふ風に、椅子に腰を浮かしたまゝ、彼女を眺めて居た。――剥げた大きな瀬戸引きの湯呑みを、口へあてたまゝ。

――彼の後ろで、ふと擽ぐつたい様な音を立てゝ、廻轉柄が廻つて、汚れた素木の扉の間から、莫迦にけばつぽい、派出な友禪をつけた奈々子が、白粉の濃い、痩せた、病的な顔を覗かせたのは、丁度その時だつた。

五

『……？』
扉の廻轉柄がことりと音を立てた時、僕の肩へ鼻を押しつけて、膝へもたれて居た緋絽は、僕の着物へ涙をこすりつけて、立つて、素捷こく一座から飛び出して行つた。さうして、扉の間へ黒く光るスリッパを覗かした姉の奈々子へ、いきなり子供の様に飛びついた。
『姉さん！』
彼女は落ち付いた手で、妹をおさへて、こつちへ眼を投げた。
『何をしてたのあんたがたは。……』
みきちやんは幾らか間が悪るげに、流し臺のわきへ立つて、彼女を見た。
『卜鳥さんは？』
緋絽は相手をごまかす様に、すかさずに聲をかけた。その聲がみんみんみたいに鼻へかかつて、そこ等へ響いた。
『御一緒よ。』
『ぢや、お部屋？』
『酔つてらつしやるから、そつと寝かしといたわよ。』
さう云つて、彼女は細い、丈高なからだを僕の前へ運んで、一寸意地悪るげな眼で、おろ／＼とそこ等を見廻した。
『またひ・ちやんの何か首動らしいわね。』
僕はやゝ憂鬱な眼で彼女を見た。――緋絽が今夜幾らか神經的な理由は、彼女の腰のところにバンドの金具が、堅く着物の上から手で觸はれたので、合點が行つたが、今度は自分の氣持ちが、どこかへ迷ひ兒になつてしまつてゐた。
『そんな格向をして、風俗壊亂よ。』
『ぢや脱ぎませう。』
ふと氣持ちが變はつて、――家へ歸りたくなつたので、いざこざなしに僕は椅子から立つた。
『帽子掛けへかゝつてた濡れた着物あんたの？』

『さりたす。』

『何だつてまた、池へでも落つこつた様な濡れかたをしたの?』

『もう雨は歇みましたか?』

『歇んだわよ、とうに。……』

扉口から出ようと、柄繪の前を通ると、彼女はどこか惱ましい、情感的な眼を仰向けて、だまつて僕を見た。——幹ちやんはこつちへ關心ある眼を、ちよい〳〵送りながら、流し臺のところで、手布で着物の下前の邊をちよい〳〵こすつて居た。

『歸るの?』

『歸る。』

僕は淡白に笑つて云つた。

『追ひ出されちやつたから。……』

——寢間の戸口には縮緬紗が降りて居た。僕は卓子の上へ、白粉くさい柄繪のメリンスを脫いだ、——肌の皺む様な薄ら寒むさを覺えながら、未だ充分に濕めつて居る自分のセルを、肩へ引つかけた。

彼女たちと僕との關係の、最初の緒口を切つたのが奈々子なだけに、——さうして、現在でも、彼女と僕との關係は、[illegible]々單なる友情の範疇を越えて居ると云ふ點だつただけに、お互ひの氣持ちは何等の斷絶もなく、素朴に、[illegible]點には、ここ、眼

には僕たちは、極はめて淡泊[illegible]

水の様に無味な、透明な彼女に、僕なんぞが幾らか好[illegible]たと云ふ様なことは、むしろ、極はめて矛盾した話だつた。實際僕たちの關係が、單なる氣まぐれから出發したものでなかつたとしたら、むしろ彼女と僕とは、赤の他人と云ふ以上に、——男と女との間に普遍する、ほんの匂ひほどの魅力をも、互ひに持ち合はなかつたに違ひない。

かうした氣持ちの關係は、現在に於いても、さう變はりはなかつた。云はゞ、もの慣れたカフエの軒でもくゞる様に、友情の垣から樂樂と、彼女のうちへ這入り込める。——そんな一種の習慣が、僕たちの間に保たれて居るに過ぎなかつた。僕たちの關係が氣持ちの點でも、その他の點でも、莫迦々々しく淡々として居たわけは、要するにそんな理由からだつたのだ。

『あなたは姉さんが好きなの?』

柄繪は時折り、不思議さうに僕に、そんなことをきいたりした。しかし、——僕たちの水の様な、淡い、無味な關係を、言葉で說明をつけることなどは、僕自身にも出來なかつたのだ。

僕が着物を着換へて、きのこの様な濕めつぽい帽子を手にすると、ふと、卓子の上の眼ざましを見た柄繪が、

「電車なんぞもうないわよ。」

と、奈々子を振り向いた。

「歩いて行くからいゝよ。」

――電車賃には一二錢不足だつた樣な氣のする、財布の中味を、懐ころの中でまさぐりながら、僕は云つた。奈々子は一寸憐れつぽい眼で、濡れしほれた僕を見た。さうして、不意に、

「おこしなさい、歸るの。」

と、命令的に云つた。

「そこの長椅子へ、どうかして二人で寢られないこともないわ[illegible]

[illegible]

「納繪ちやんと寢るかな。……蹴飛ばされちまふからなア。」

僕は肩をすくめて、ドア口へ向かつた。――風邪でも引きさうな寒むけを、ぞく〳〵と全身に感じたから。

外では幾らか風が猛つて居た。頭の上で葉の雫が滋めつぽくざはめいて、雫くを地面へ降らして居た。僕はステッキの象牙を冷たく指に感じながら、何かしら未だ解けない、ある不快な澱的なものを、自分の足の向きに感じながら、帽子の廂つぱを深く額へおろした。

――ポオチの階段を下つて、濡れたコンクリートの階段へかゝつた時、だしぬけに後ろで扉が開いて、燈影を黒い人影が切つて、――蛇の様に納繪が僕にとびついた。

「なに？」

[illegible]

だつた。——さうして何氣なく、中味の、彼女の肌の溫氣をとどめた、耻いざくざくした觸感を指でまさぐつた時、庭の灯りを遮きつて、扉が閉まつて、錆びた廻轉柄の廻る音が、耳へ傳はつた。

六

——家庭に於ける自分の地位を、僕は膿みきつた腫物か何ぞの樣に感じて居た。いつそれは薄皮を破つて外へ流れ出すかわからなかつた。さうした生活の變轉に對する豫感が、學生々活の魅力を僕から奪ひつゝあつたのは當然だつた。

父の隱し兒として、中學を出るまで田舍の養家で送つた僕は、父の死後實家へ復歸しても、家族の者たちにさう自然に、なじめる筈はなかつた。上の兄弟たちがそれぞれ醫者に仕上げられて、父の病院を受け繼いで居たので、自然僕も、誰にきめられたともなく、醫者の學校へは入れられたが、醫者としての自分の將來と、さうして何よりも目下の學生々活とに、全たく最早僕は希望をなくして居た。——極端な兄の敎育にもとづく、家庭生活の不愉快が、大體してその理由をかたちづくつては居たのだが。

家庭に於ける僕の存在は、一個の影に過ぎなかつた。父母も、義姉たちも、異分子として僕を認めるほどの關心すら、僕には持たなかつかつた。

た。田舍の養家の乏しい生活などとはくら[illegible]位を持つた、豪奢な環境にひたりながら、僕は破れた肌着を一枚さへ、田舍の養母にねだつては換へて貰ふと云ふ風だつた。主人と召使ひとほどに待遇の違ふ兄たちと、食卓を共にするのが厭やなので、出來るだけ食事どきを避けようとして、空き腹をかゝへて、宿なし犬の樣に食事どきの町をうろつき廻つたり、豆餅なんぞを買つて、暗がりの通りを歩きながらこつそり喰べて、お腹を膨らかしたり、時折り思ひ立つた樣に誰からか惠んで貰ふ小遣ひを、大事になくさない樣に少しづつ使つたり、さうした人にも打ち開けられない樣な不滿は、それだけまた僕のうちに、歪んだ内訌のしかたをするのだつた。

(思ひきつて。——)

さう時折り僕は、突き詰めて、ある決心をしてみたりすることがあつた。また、家庭を離れて、さてどうして喰つて行くかと云ふ樣な問題について、まじめに頭を惱ましたりすることもあつた。僕は僕の天分に縋れるほどの自信もなかつたし、兩親たちの樣に、、、、、を資本にするわけにも無論行かなかつた。若しかすれば[illegible]からだかには[illegible]かつた。

僕がしみじみと僕自身と死んだ兩親たちとを結んで考へたりするのは、そんな時だつた。どんな意志を彼等から受け繼いで、この世へ僕は生れたのだらう。そんなことを僕は考へた。

僕にとつて人生は暗かつた。僕は僕の生誕に「神」の惡意を認めた。――僕が兩親たちから受け繼いだのは、たゞ濕めつぽい彼等の影に過ぎない。――そんな氣がした。

『そんな人生の觀かたをして、どうして君が君自身の存在を肯定して居るか、僕には解せないよ。』

さう云ふ加治の言葉を、僕は思ひ出すのだ。僕はその時云つた。

『あたりまへだ。僕にさへ解せないんだから。』

しかし、一匹の蛆蟲の存在にも、誰か「自然」の意志を否定出來よう。

『何が一番自殺のしかたでは樂なんですか。』

ある時僕は、なるべく道化た風で、藥局のK・さんにきいたことがあつた。なるべく道化た風を粧はなければならない様な氣がしたので。――

S・さんや幹ちやんや輛繪たちが、大きく友情の手を擴げて僕を待つて居るアパアトは、僕の生活からは云はゞ樂天地も等しかつたのだ！

七

翌る朝、僕はいつもより一時間の上も、ぐづぐづと寢牀で時を過ごして、さうして學校へ出かけた、義母や兄や義姉たちと、食卓で顏を合はすのが厭やだつたから。――。僕は輛繪の財布の六十五錢（それだけしか這入つて居なかつたのだが。）に大きに自信をもつて、空き腹をかゝへて家を出た。

高い明るい空からは、昨夜の様に霧雨が降つて居た。濡れた花崗石の階段を上がつて行くと、空を透かした蛇の目の明るい紺青が、ちらちらと脚のぐるりに動いた。僕は圖書館の建築場の下に立つて、暫らく雨に煙つた品川灣を、遠く家並みの先きに見おろした。

『昨夜は失敬。』

化學室の附屬變電室で、白晝ともつた指示電燈の下に、電鍵をいぢつて居た植村が、便所から戻つて來た僕に云ひかけた。

『珍らしく君なんぞが來るから雨だよ。』

『雨は昨夜からだよ。』

『大きに、それアさうだがね。』

大體して級友たちに親しみを持てない僕は、交友の範圍なども極はめて狹くて、植村や加治を除いたら、片手の指をかゞめるぐらゐに過

ぎなかつた。こゝでも僕の存在は、單なる影に過ぎない樣な氣がした。それはものも云はなければ、顧みられもしなかつた。――無論、邪魔にされる筈もなかつたが。

『君は不可解な人物だつてえ一般の評判だよ。』

一番腹藏なく、眼を打ち開け合つて居る藤井が、そんな風に僕を評して云つたことがあつた。しかし、そんな評判も、級全體から抽出されたものなぞでは無論ないので、むしろその意味で云へば、加治が僕を評した樣に、

『君は級ぢや空白だよ。』

と云ふ方が正しかつた。

物理の講義が天井へ反響して降つて來るのを聞きながら、僕は植村と階段教室の一番高い列の机に席を並らべて、――その蔭へ寢轉んで、彼がポケットから出したウヰスキーボンボンをつまみながら、雜談をした。

『昨夜は僕のところへしけ込んだかい？』

『どこへ？』

『マドイショップの娘さんとこへさ。』

『ふむ。……』

[illegible]

やいた。

滑めらかな教授の講義や、ノオトの上を走る忙がしいペンの軋りや、せき拂ひや、ひそ〳〵話や、さう云つたものが、妙に落ち付かない雰圍氣をかもして、それがとりわけ僕たちの存在を、淋しく遊離する樣な氣がした。

『くたらねえことしやべつてアがるな。』

と、植村は貴族的な上品な口付きをして、殊更亂暴な語調を漏らした。さうして、ちよいと頸をねぢつて、頭をもたげて、――机の上ぺりへ眼を出して、低い教壇の方を見おろした。

『一體醫者になるのに、ボイルシヤアルの屁理窟なんぞが必要なのかね。』

『必要ぢやないから教へるんだらう。』

植村は妙な眼をして僕を見た。

『何の意味だいそりア。』

『僕にもわからない。……』

こゝで僕たちはにや〳〵笑つた。

『變なところで密會なんぞしてちやいけないぜ。』

二時間續きの退屈な講義の、中間休憩の時間に、――教授が扉を開けて出

[illegible]

起きると、下の廊下から階段を上がつて來た藤井が、僕の背を叩いた。

『おいR・』

と、加治がその後ろから間を割り込ました。

『……こいつをまた少し調劑つて來てくれないか。』

僕は彼から、鳶色のアドリナリンの空き瓶を受け取ると、だまつてポケットへ突つ込んだ。――ソシヤリストは肥厚性鼻炎でコカインの中毒を起こして、しじうそれを兄の病院の藥局から、僕に盗み出させて居たのだ。

『分量は少とでもいゝから、十プロぐらゐにしてくれないか。濃すぎりアこつちで割るから。……アドもやつぱり這入つた方が効くなア。』

僕はだまつて彼の顏を仰いだだけで、藤井に向かつた。

『電話ぢや失敬したこないだは。……留守だつたもんだからね。』

『病院へかけたら居るつてんで、莫迦に待たされちまつてね。相手が女だつたもんだから、まア我慢はしたけれど。……』

『何だい用は。』

『なアに、郷里から三寶柑が屆いたもんだから、遊びながら持つてつてやらうと思つたのさ。』

『そいつア殘念したな。』

『好意があるんなら、持つてつてやつたらいゝぢやないか。』

と、加治が口を挾んだ。

『それほどの好意も合憎と持たねえ。』

と、藤井は好人物らしく柔らかく笑つた。さうして、机へ腰をかけて、飴色のセルロイドのパイプを啣へたが、鐘が響いて來たので、ポケットから出しかけたバットの箱を、またそのまゝ引つ込めた。

『今日はしまひまで居るかい？』

最後まで僕のそばに居殘つて、彼は云つた。

『居るつもりだけれどね。』

『つもりか。』

と、彼は柔らかく苦笑した。扉の間から教授が姿を見せたので、そのまゝ彼は僕の隣りへ席をとつた。――いつの間にズベつたのか姿を消してしまつた楠村の席へ。

八

歸りに四谷見附まで藤井と同行して、そこで僕は彼と別れて、新宿へ向かつた。暮れかたまでS・さんのところで過ごさうと思つたのだ。雨は歇んだが、空はひとツきりよりも暗くなつて、ひどくせはしなく暮れかたが來さうな氣がした。

F・莊へ曲る角の藥局のところで、幹ちゃんを見かけたので、僕は

腰をかけた。

『アスピリンを買ひに來たんです。』

美少年は井の字の大柄な紺飛白を匂はせて、僕を振り向いた。さうして、畳んだ手布を懐ころから出して、洟をかんだ。

鬱陶しく蔦をかぶつたポオチから、ポオルへ上がると、階段の下に、——そこのコンクリートの床に、素燒きの鉢が一つこな〴〵に碎けて、鮮やかな紅色の花をつけたグロキシニヤが、濕めり土と一緒に無殘にも壓しひしがれて居た。

『どうしたんだい。』

幹ちやんは、——彼が一寸あつけにとられたと云ふ風に、そこ等を眺めて、それから、當惑した、渦巻いた視線を僕に戻した。

（またかい？）

さう云ふ氣持ちが、瞬間二人の間に交流した。——幹ちやんがいつも頭へ上がらせるS・さんの神經症も、僕にはお茶の子なので、ずん〱先きに立つて、僕は埃つぽい階段を上がつて行つた。おど〱した、小さな跫音を後ろに感じながら。

扉を開けると、S・さんは男の着ける様なポヂヤマを羽織つて、窓のきはに、——卓子に腰をかけて、大きな[illegible]

[illegible]

足を入れると、彼女は[illegible]の様に[illegible]て、づるげな視線を僕につけて、

『ノックもしないで、女の部屋へ這入るなんてないわよ。』

と、非難をした。さうして、ちよきり！と大きく一度鋏を鳴らして、太い蒼白い腿をポヂヤマの金色の裾でくるんで、——床へ脚をおろした。

『僕ノックをしなかつたかしら。』

『したつもりなの？』

僕は彼女と眼を合はせたまゝ、幾らか苦がく笑つた。かう云ふさゝいな失策をこの頃しじう僕はしつけて居るので、幾らかでも自信をもつて相手を反駁することは出來なかつたのだ。——幹ちやんはどつかへ引つかゝつたと見えて、あとへはついて來なかつた。

三つある窓には、どれにも厚ぼつたく窓かけが引かれて、卓子のきはのが一つ、僅ほど片側から絞られて居るきりなので、部屋の空氣はあけがたの様にものうく暗かつた。未だ晝の身仕舞ひもろく〱して居ないらしい、白粉のむらな彼女の顔だけが、その中で眼立つて居た。

彼は[illegible]卓子の上の煙草入れから、スプレンデエトを一本つ[illegible]

[illegible]

「下のあの鉢はどうしたんです。」

彼女はゆつくりと窓掛けの蔭の籐椅子へ腰をおとして、冴えないあくびをして、こめかみの邊を指で掻いた。

「あたしにも一本頂戴。」

「何です。起きたばかりなんですか。」

彼女は答へるかはりに、折り曲げた指で眼元をこすつた。さうして、擦つてやつた燐寸へ有り難うとも云はないで、啣へた煙草の先きをこゞめた。——彼女が好んでつける絲杉の匂ひが、煙りにもつれて僕の鼻へ觸れた。僕はだまつて立つて、窓掛を大きく片側へ絞つた。たそがれの様に外は暗かつた。鬱陶しく沈んだ淡い蒸發氣の向かふに、三越の高層建築が、そこひの様な不快な白さを眼立たせて居た。

——嘗て、プロレタリヤ運動の急尖鋒として知られたS・R・黨と接觸して、あるプロレタリヤ藝術雜誌を起こして、徹底した主張を短詩の形式などで發表してゐた彼女は、輕業の様なあざやかな轉廻をやつて、突然、以前とは對蹠的な地位に立つてしまつた。彼女の口調を借りると、これもマルクスの辯證法に從がつて、プロレタリヤ思想のうちにブウルヂョア意識の萠芽を感じたからで、要するに時代的な公式を先行して示したに過ぎないと云ふのだつたが、それはどうやら半分は、眞實な彼女の告白であるらしかつた。唯物史的な人生感に不滿を感じはじめたのが、彼女の思想に轉機を與へた動機となつたらしいので、彼女はそれを自から「自己中毒」と名付けて居た。

「マルクスによる社會主義運動はそのうち唯物史觀的自己中毒を起こして崩壞する。」

さう云ふのが彼女の豫言だつた

彼女はまた、仲間だつたプロレタリヤ藝術家たちの生活をよく非難した。プロレタリヤ藝術の主張は正しい。だが彼等は大體して非プロレタリヤか、さもなければ非藝術家だ。つまり、そこから生れるものは小兒期のブウルヂョア藝術か、さもなければ「記錄」だ。——さう云つた風に。

「記錄は藝術ではないんですか。」

嘗てさう僕は彼女にきいたことがあつた。その時彼女は、斷然さうではないと云つて、藝術は記錄の一つではあるが、記錄のすべては藝術ではない。彼等は記錄と藝術とをとンと間違へて居ると嘲笑した。

勞働問題などと云ふ嚴肅極まる主題を、記錄としてでなく、詩だの、小說だの、戯曲に仕込むなんてことが、そも〳〵その心理に於いて、小市民的なんぢやないのか、さう僕が論駁をすると、彼女はフフンと嘲笑つて、プレハーノフの藝術論でも讀んで、それからプロレタリヤ藝術を批判しろと云つた。しかし、——プレハーノフと云へ

ど、數箇の誤謬を持つて居る。その重大なものは、彼が藝術至上主義の論據を、不注意にか、或ひはわざとか、跳び越えて居ると云ふことだ。そんなことを彼女は云つた。

マルクス主義藝術にもとづく「美」は、封建主義及資本主義的藝術の「美」よりも、低く遍在する。空氣の様に無價値に見えるが空氣の様に重要だ。そこに意義ある社會性を含んで居る。――さう彼女は說いた。

彼女の藝術家としての轉換は、「遺憾ながらそれ以上の美を見てしまつたから」だと云ふのだつた。――

『階下の人たちみんな居て？』

彼女は二三度曖昧に煙りを吐くと、もう一度小さなあくびをして、

――腹がへつた様な口のきゝかたをした。さうして、立つて、一つ一つ窓掛を絞つて歩いた。

『それよりも、……鉢のことをきいてるんぢやありませんか。』

彼女は絞つた窓掛の一つ一つを紐でくゝりながら、振り向きもしないで答へた。

『あたしが落としたのよ。』

『わざと？』

『さうよ。』

彼女は素直な口のきゝかたをした。――小さな跫音が階段をのぼつて來た。ドアの隙から覗くと、ひよいと黑いおかつぱが見えて、

て來て、こつ〳〵と

『幹ちやん？』

『えゝ。』

扉の隙から、幹ちやんはおづ〳〵と顏を見せた。――S・さんは頸の長いベルモットの瓶を、手にしたグラスの口へ傾むけながら、くるりと頭だけ振り向けた。さうして、變に落ち付いた、冷たい眼で、綠色の絨氈へぢかに穢つた白い華奢な彼の素足から、頭の上まで見上げて、そこへぢつと暫し視線をとめた。

『藥局まで幾里あるの？』

――幹ちやんは耳の邊まで眞つ赤になつて、彼女の視線を避けて、俯向いて、せうことなげに懷ころから白い紙箱と、桃色の小さな[illegible]標とを出して、だまつて卓子のはしへ置いた。

階段の下から、耳慣れた輕繪の口笛が、陽氣にテイテイーナアを吹きはじめたので、僕はくさ〳〵した一座から顏をそむけて、そつちへぼんやり耳を貸した。

『飲むンならさつさとお飲みなさい。』

S・さんの聲がとげ〳〵しく、グラスの上から響いた。

いたづら〳〵しい跫音が、一つ一つ間を置いて、忍ぶ様に階段をの

續いて、納繪の白い小柄な顔が、梟の様に黒く大きく眼を光らせて、現れて、――その眼がおいで〱をした。

『……？』

　唇のところへ、白い華奢な指が一本動いたので、僕はだまつて一座を背に、扉口へ向かつた。

　中繼段のところで僕を迎へると、納繪はいきなり頸へ手を捲いて、僕の顔をこゞめて、冷たいおでこを僕の口にぶつつけた。さうして、ぐん〱亂暴に僕の手を引つ張つて、階段を降りて行つた。

『こゝに今鉢がこはれてたでせう？……S・さんが上からあれをはうつたのよ。』

『いつ？』

『さつき。……幹ちやんがお使ひに行きかけて、あたしたちンとこへ引つかゝつてたのよ。あたしたち丁度おやつの時だつたもんだからね。そして、幹ちやんが出て行つたかと思つたら、がつしやん！　とあれをはうつたの。』

　さう云つて扉を閉めて、

『あの花昨夜、奇術でS・さんに買つて貰つて、とても幹ちやん自慢をしてたのよ。』

『自分で買つてやつて、自分でこはしアそれでいゝぢやないか。』

　さう云つて、僕は彼女と向き合つて、長椅子へかけた。

『姉さんは？』

『お風呂。』

　納繪は昨夜僕がつけたメリンスをつけて居た。かた〱の袂がとれさうに大きく綻ろびて、腋や腕のつけねが白く覗いて居た。――白粉氣がないので、顔色が暗く冴えなかつた。白いたむしがむらについた、幾らか透明な皮膚や、病的な眼のくまや、垢つぽい細い頸すぢなどが、變に彼女を年には荒ませて見せた。

『昨夜の議論はどうだい。』

　彼女は幾らかてれた様な眼をして、僕をみつめた。さうして、

『あたしの財布を返して頂戴な。』

と、華奢な手のひらを出した。

　僕はポケットから獸の膽の様に財布を吊るし出して、彼女の手のひらへ載せた。

『中にあるわよ未だ。』

『うん。』

『いらないの？』

『だつて返せつて云ふからさ。』

　彼女は淋しい情感的な眼をして、瞬間僕を見た。

『あたし、お金を返せなんて、云はないわよ。』

さう云つて彼女は、財布の口を開けて倒さまにして、ちやら／＼と中味を卓子の上へ落とした。さうして、それを手のひらで僕の方へ邪見に動かした。

『いらないのかい？』

『いらないわ。』

『だつて、また姉さんに叱られるんぢやないのかい？』

『…………。』

彼女の瞳が妙に奥へ拡がつたかと思ふと、見る／＼そこへ、涙が一杯に浮かんだ。

『ぢや半分わけにしよう。な？』

辟易して僕は主張を變へた。

『十二錢づつ。……丁度だ。』

涙のつぶが大きく下瞼のところへ溢れかけた時、突然彼女は、恐ろしく派出やかな口付きをして笑つた。

『莫迦ねあんたは。……』

『なぜ？』

『もう叱られちやつたからいゝわよ。……たつた十二錢ぽつち。……』

さう云ひかけて、ほろ／＼瞼から眼へ涙を溢しながら、神經的な笑ひ聲を立てた。——どうや

た。この分だと奈々子だつてどうだかわからない！ さう

くさ／＼と考へた。

僕はそれでも彼女をなだめるつもりで、彼女の手をとつた。

『？』

彼女は男の子の様に、別の指で眼をこすつて、わざとらしい晴れ晴れしい表情をしてみせた。さうして、腰をもたげて、棒ぎれでも倒す様に僕にからだをぶつつけて、長椅子へ移つて、窮屈に僕と並らんだ。大人びた女の匂ひが、幾らか不潔な、汗つぽい匂ひと一緒に、僕の鼻を襲つた。——僕はかた／＼へ垂した彼女の指先きを、擽ぐつたく腕に感じながら、捲毛の消えかけた彼女のおかつぱへ、頬を載せた。

『W・さんは今朝まで居たのかい？』

『いゝえ。』

彼女は頸を振つた。

僕はふと、いつぞや銀座のM・の主人が、酔つたまぎれについ漏らした莫迦々々しいある打ち開け話を思ひ出した。——、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、どう切り出したものかと大いに煩悶したから、二階へ彼女を誘ふと、階段の中途

で、

「、、、、、、、、、、、、、。」

と、無邪氣に切り出したと云ふ話を。

「……さア。歸らうかな。」

さう、何氣なく僕が身じろぎをすると、

「厭や！」

彼女は捲いた手に力を入れて、斷乎と頭を振つて、メリンスの中でからだをくねらした。僕は彼女の破けた袂のところから手を突つ込んで、――熱つぽい彼女の體溫を指に感じながら、、、、、、、、、、、、、、、、。彼女はぢつとして居た。

「よし。」

僕はもうかたかたの手を窮屈に、僕たちの間へ挾んで、こつち側の腕の下を、着物の上から一緖に擽ぐつた。彼女は僕の鎖骨の邊へ强よく伏せた鼻から、ほんの一寸ばかり笑ひを漏らしたばかりだつた。

「驚ろいた無神經な奴だな。」

彼女のからだを無理に剝がして椅子から立たうとして、僕はびつくりして彼女の顏へ眼を据ゑた。――彼女が髮の根まで燃える樣に眞つ赤になつて僕を仰いだからだ。――

九

「緣朗さんよ。」

誰かゞ二つ三つ、ステッキか何んぞで扉を叩いて、――傍若無人な跫音を立てゝ、階段を上がつて行つた時、彼女は一寸まぶしい眼をして僕を見て、云つた。さうして、氣付いた樣に立つて行つて、帽子掛けの蔭から羽根ばたきと立ち帚とを持つて來て、卓子の上などを片しはじめた。

「姉さんに叱られちやうとこだつた！」

「掃除かい。」

「えゝ。……一寸ごみになるわよ。」

薊ちやんがニッケルの盆へ紅茶のセットを載せて、かちかち云はせて、扉の間から顏を覗かせた。

「御免なさい。……綺ちやんとこに紅茶ある？」

「お紅茶？」

彼女は長椅子の背へ羽根ばたきの手をやめないで、顏を擧げた。

「粉はつかになつちやつたもんだから。……一寸分けてくんない？」

「そこの棚にあるわよ。四角いブリキのガン〳〵よ。」

「誰？　お客さまは。」

『緑朗さんです。』
幹ちやんは戸棚からリプトンの箱を出して僕を見た。
『僕今紅茶をいれて、それから晩の御馳走をつくるんですけれど、R・さん臺所へ來ません？　御馳走をしますから。』
『さう。……僕もぢや御手傳ひをしたげよう。』
僕が幹ちやんのあとから廊へ出ようとすると、不意に緑朗が『ちよつと！』と、呼び止めた。さうして、ぴよん〳〵と身輕に床を踏んで來て、羽根ばたきをぶらさげたまゝ、どこにもからだへさはらないで、ひよいと、振り向いた僕の顏へ、、、、、、、。
『莫迦。……』
彼女は踵を床へおろして、ドアを閉めると、きやッ〳〵はしやいで、逃げて行つた。
『S・さんの御機嫌はなほつたかね？』
夕御飯の仕度でぽつ〳〵人のこみはじめた臺所で、片隅のガス焜爐を挾んで椅子にかけてから、僕は幹ちやんに云つた。――彼は憂欝な眼で、だまつて頭を振つてみせた。
以前にS・さんと純粹に夫婦關係を結んで、同棲して居たことのある緑朗氏は、生活派の中堅歌人で、プロレタリヤ文藝の先覺者の一人だつたが、今でもどうかするとアパアトへ彼女を訪ねては、三四日ぐらゐづつ泊り込んで行つた。徹底した、、は必要な時に、、、、、、、いゝので、必要がなかつたら喰つちまつても一向差しつかへがない。、、、、、、、、、、、、、、、家庭の空氣なんぞを吸はせるのは、毒ガスよりも害になる。さう云つた意見を持つて居た。噂さによると子供が二人あると云ふのだつたが、どこにどうして居るのか本人も識らないらしかつた。支那ぢやないが、兄弟が南と北とで戰爭なんぞする樣だつたら、頗る華々しいぢやないか。――そんなことをよく口にしい〳〵して居た。
古い頃の高商出で、がらにもない肩書きを持つて居たが、マルクス主義藝術の移植を日本へ企だてたのでは、自分が皮切りだと云つて威張つて居た。とにかく、彼の、、、、、、、、、、、、、などは、僕たちがぞく〳〵した氣持ちで共鳴せずには居られない、徹底して愉快な議論だつた。僕はそんな思想に關する書物なぞは讀んだことがないから、彼の說が單なる受け賣りだかどうだかは識らなかつたが、何しろ、僕が僕の家庭で一番不滿に思つて居るところを、ぐいぐいとメスを突つ込んで割つてくれるので、たまらなく愉快になつてしまふくらゐだつた。
一度などは、つい彼の議論に有頂天になつちまつて、彼の懷ころから紙を手傳つて、財布を引き摺り出して、

『つまり、こんなものだつて、、、、、、、なんですね！』

とやつて、大きに叱られちまつたことがあつたけ。――

幹ちやんにはひどく肩を入れて居て、自分が幹ちやんだけの閲歴を持つて居たら、もう少しえらくなれたんだつたがなどと、よく云つて居た。要するに、常識は彼の敵だつた。――

『お客さまに出しがらをやるのかい？』

幹ちやんからお茶を受け取つて、僕はからかつた。

『だつて、どうせあの人には、味なんぞわかりアしないんですよ。』

『あすこい等がプロ派の藝術家なんだね。』

『えゝ。……それよりかこつちの方がいゝですよ。』

と、彼はレモンの切り身をナイフで指して云つた。

『……あの人に云はせると、僕のプロレタリヤ短詩なんぞは、未だ貴族のあくびに過ぎないつて云ふんです。君は墮落した墮落したつてね。もう一度觀音さまの土台の下へむぐり込まなきア、君は救はれないつて云ふんです。……とても猛烈ですよ。』

『ぢや、あの人はプロレタリヤであることを、誇つて居るんぢやないか。』

『そりア無論ですよ。』

『僕はプロレタリヤ運動つて云ふのは、プロレタリヤつて不滿から出發したものだと、思つてたんだけれどね。僕なんぞも現在の、、、、なんぞには大いに、、、、、、居るんだけれど、こいつなんざ明らかに不滿からだね。若しかすると悲鳴かも知れない。』

『あの人たちは悲鳴なんぞ立てゝやしませんよ。、、、、、、、、、るのは、正義感があるからなんぢやありませんか。……第一あの人たちは、ブルジョアなんぞ、、と思つてアしませんよ。』

『平家に非ずんば人に非ずつて奴だね。……恐ろしいそいつアまた特權主義ぢやないか。餘色的貴族主義つて奴だぜ、そりア。』

幹ちやんは、茶碗や砂糖壺なぞを載つけたニッケルの盆を持ち上げながら、

『二階で一つ議論をしませんか。』

と、幾らか挑戰的に、――と云ふほどでもないが、さう云つた口振りで云つた。

『しようかね。』

と、僕は冗談らしく應じた。さうして、茶碗の中を匙で掻き廻して、

『……僕は腹が減つてるから、まアこいつにしとかうよ。プロレタリヤの議論なんざ、腹のいゝ人にまかせといて。』

と、これは自分では或る皮肉に云つたつもりだつたのだが、幹ちや

んは案外無神經な笑ひかたをしただけで、

『おやちよいと行つて來ます。』

と、扉の間から姿を消した。

田舍の素封家が、S・さんの郷里の實家と同じ町內にあつて、親戚同樣につき合つて居たと云ふ樣な關係から、彼女と識つて以來、このアパアトには僕はもう二年このかたのなじみなのだが、彼女や幹ちやんや納繪たち姉妹のほかには、別に面識のある者とてもなかつたので、かうして、忙がしさうに働らいて居る人々の間へ取り殘されてみると、變に一人ぼつちで、手持ち無沙汰で、――てれてしまつた。鍋から湯氣を吹かして居る細君や、パンをトオストして居る娘、野菜などをおぼつかなげに刻んで居る子供、さう云つた、大體若い女たちが、ガス焜爐や流しの前で、立つたりかけたりして餘念なく働らいて居た。とりとめもない話題がその間に交はされて居たが、それはいづれも、いゝ、うちわな家庭の打ち開け話や、ほんの當座の話題、――どこそこの魚は新らしくて安いの、野菜はどこで買ふの、やれ袂を曳き摺るの、お尻が焦げるのと云ふ樣な、おしやべりばかりだつた。

一軒の家も持たないで、間借りなどをして居る樣な人たちだから、生活にさう惠まれた人々でないのは確かだつた。恐らくここに今からして居る人たちも、晝間は紫色の事務服を着て、どこかの大きなコンクリートの建物へでも、出入りをして居るのだらう。家族がみんなで働らいて居る。――さう云つた社會の人々なのだ。

僕は、自動車で見舞ひの人々の繁々と出入りをする、お金持ちの病人ばかりを收容した、贅澤な兄の病院や、新築した私宅の離れで、陽ざしに餓ゑた樣な蒼白い顏をして、退屈げに時折りピアノを鳴らしたりなどして居る義姉や、――人生に興味をなくしたと云つた干からびた姿で、一日水盤へ砂などを撒いて居る義母たちの生活、さう云ふ、人生のもう一極に存在する事實について、考へずには居られなかつた。

この驚ろくべき對比の底には、見えない社會の渦が動いて居た。加治の樣に、社會々々と唇を涸らすまでもなく、一人々々が知らず識らず、崩壞か建築かの役割りの分子を勤めて居るのだ。富、倨傲、浮華、安逸、さう云つたものが、華々しい夕陽を浴びて、夜の闇へ落ち込んで行く一方には、窮迫と、反抗と、質實と、勤勞とが、薔薇色の黎明から浮かんで來る。――いつの世にも繰り返された事實なのだ。

（しかし、）

さう、僕の頭に閃めくものがあるのだ。

（加治や鱗朗氏等の叫ぶ樣な社會運動が、果たして薔薇色の電を永遠に人生にもたらすところのものなのか？　あれもいつかは斷電して

行く人生の階程の一つに過ぎないのぢやないのか？）

さう云ふ聞こえざる聲を、僕は虚空に感じるのだ。

（いつの時代にか、それなら人生に黎明が來たか？——ギリシヤの昔にか？ あらゆる藝術が黄金色に光つたと云ふ、中世紀にか？ 昨日の落日を浴びて居る、資本主義の時代にか？）

（否！）

（それなら、加治等が聲を涸らして居る、來たるべき新社會にか？）

「否！」

さう云ふ聞こえざる聲を、僕は虚空に感じるのだ。

人生の創始に種まかれた「充たされざるもの」は、いつにあつても生命の後ろへ、黒い影を曳いて居る。社會はその影を追つて後すざりをして居るのではあるまいか？ それが畢竟人生にかけられた「自然」のわななのぢやないのか？

劍を拔いて先頭に影を拂つて居る「眼醒めた」人々も、そのあとへ一と塊まりに騒然と續く「愚かな」大衆も、——まばらな追隨者も、やはり同じく暗い長い影を足元に曳いて居るのではあるまいか？

僕は蒼茫と暮れて行く梅雨晴れの都會の空に、煤けた巨大な煙突を仰いで、社會の渦の聞こえざる響きを耳にしながら、ふと、心内に巣喰つて居る、あの不吉な、暗黒の虚無へ落ち込まうとして、その瞬間に瞑想を破られた。後ろから忍び寄つた綾繪が、だしぬけに僕の頸へしなやかな腕を捲いて、亂暴に僕を揺すぶつたのだ。僕はこな〳〵に碎けた幻想の隙から、綾繪の、熱ぽい、爛れた様な脣を見た。

天井には電燈がともつて、人々は眩しく肩を輝やかして、その下に動いて居た。

＋

「……あたし今おでんをこさへて御馳走したげるから、待つてよ。ね？」

彼女は袂から、大きな錆びた鍵を二つがちや〳〵と出して、流し臺の下へこゞんだ。

「姉さんのとこへ行つてらつしやいよ。ぢき御飯にするから。……さもなきアお手傳ひをしてくれる？」

「失敬しちまつた。……」

と、充ちやんが扉を開けて、這入つて來た。彼はよそ行きのセルを着けて、きちんと兵兒を結んで、毛深いハンチングを手にして居た。

「綾助さんが新宿で何かをごるつてもんですから、これから出かけることになつちまつたんです。」

「ぢやア行つて來たまへ。」

「今夜ゆつくりしてらつしやるんですか？」
「さア。そんなにゆつくりもして居られないけれど。なぜ？」
「なぜつてこともないんですけれど。……ぢや行つて來ます。」
納繪は小さな擂鉢の中へ、一と塊まり味噌をしやくつて落として、ぐいと擂こ木で押しつけて、
「あたしお味噌を擂るから・U・ちやんこんにやくを切つてくれる？」
と云ひかけて、
「噓よ。いゝわよ。あたし切るわよ」
と、氣の毒げな眼をした。
幾らか人のすきかけた台所で、僕は二十分ほど納繪の仕事を手傳つた。——丸椅子へかけて、膝の間へ擂鉢を挾んで、その間僕はぐるぐると擂こ木を廻した。納繪はまな板の上でぶつ／＼とこんにやくを刻んで、小さな瀨戸引き鍋へ入れて、ガス焜爐へかけた。
「工夫がいゝわ。」
彼女は輕く擂鉢の緣を抑へながら云つた。さうして、ちよいと指を突つ込んで、唇へ味噌をくつつけて、ペロリと甜めた。
「上出來よ。」
「一寸から過ぎやしないかい？」
「だつて御飯のお菜なんですもの。このくらゐがいゝわよ。」
「こんにやく焦げやしないかい？」
「大丈夫よ。あれよく煮た方がうまいのよ、こり／＼して。……脚くたびれない？」
「こりア、、、、だね。」
さう云つて僕は膝を動かした。——、、、、、、、、なるものがあつて、そして、と、ふざけた話をきかせた、病院のW・博士の言葉を思ひ出したのだ。納繪は淡白に僕の言葉をとつて、
「そりアきまつてるわよ。」
と云つて、膝の上から擂鉢をとり上げた。
僕たちが三人で、夕飯の食卓をかこんだのは、それから間もなくだつた。窓の外へは存分にもう闇がはびこつて居た。蚊が少し出たので、卓子の下へは蚊遣りを立てた。味噌は擂鉢のまんま卓子の上へ載せて、小皿とフォークとをめい／＼にくばつた。
「あんたは本當にお天氣屋さんね。」
奈々子が靜脈の透いた細い手で、御飯ふかしから僕の茶碗へ御飯を盛りながら、靜かに云つた。
「昨夜の不機嫌なんて、なかつたわよ。」
——彼女は湯上がりなので、珍らしいいゝ血色をして居た。腺病質らしい華奢な頸すぢの皮膚も、それに、淡い目な白粉を桜色に透かして

居た。二たところ切つたるいれきの擬か、そこへ酷く、弾つ吊れて眼についた。

『兄さんとまた喧嘩でせう?』

『兄貴との喧嘩は毎々さ。納縮ちやんも喰べたらどうだい。うまいぜ。』

彼女は戸棚の蔭へ跳つたふきんを幾つも吊るしながら、ふと、くしやみをした。

『おでん〳〵て、こないだつから騒ぎなのよこの娘は。……どつさりおあがり。』

『ここの家だつておでん〳〵て?』

[illegible]

からどうぞどうぞ。』

納縮が扉を閉めて戻つて来る前に、奈々子は納縮の椅子へ(椅子は三つきりないのだ。)を、静かに彼の前へ動かした。

『よくいらつしやいました。……御飯をはじめたところなんですの。』

『どうですM・さん、おでんは。』

『や、どうも。……』

と、M・さんは綺麗に剃刀をあてた、おくおくした桃色の大きな顎を、柔らかさうな手のひらで撫でて、眼鏡をはずして、西洋人らしい微の赤い眼を、眼あたりに卓子の上へ落とした。眼鏡は[illegible]て、彼の[illegible]の背中にされば、おでにかけて[illegible]

『[illegible]いあいぶふれよ[illegible]は、はゝ……いや、[illegible]

[illegible]

さう、僕が立ちかけると、

『いや、いや。』

と、M・さんは太い短かい手で抑へて、

『かまはんで、そちらはやつて下さい。……わしはあちらで一服やりますから。』

と云ひかけて、なぜか彼は金鎖をたぐつて時計を出してみた。

『よろしかつたらM・さん。こんなものででも御飯を御一緒にいかゞでございまして？　未だおすみではいらつしやらないのでせう？』

『いや。さうしても居られん。』

さう云つて、彼はちよいと柄縞を見て、その視線を幾らか氣兼ねさうに卓子の方へ向けた。

『いや今日はね。少し天氣がくさくさするから、息抜きをしようと思つてね。鎌倉へでも一と晩行つて來ようと思ひ立つてやつて來たんだがね。……差しつかへがなかつたら、柄縞ちやんにでもお伴を願はうと思つてな。どうだな柄縞ちやん。』

彼女は白粉氣のちつともない、蒼い沈んだ皮膚へ、妙な病的な眼をして、ちよいとばかり微笑んだ。さうして、ためらふ樣た視線を、奈々子へと、僕へと、さうしてまたM・さんへと移して、こめかみの邊をかぶせたおかつぱを、子供の樣に振つて俯いた。

『別に差しかへなんぞないんでせう？』

さう奈々子は、明るく淡白に云つて、

『ね？』

と、妹を見た。

『どうだね柄縞ちやん。……鎌倉で御馳走をするぜ。』

『そいつアおでんよりアよささうだね。』

と、妙な憂鬱を感じながら、僕は氣にもないことを云ひ添へた。—

——

『ぢや、すぐにお支度をなさい。……それとも、もう少し、ゆつくりなすつていらつしやる？』

『いや、すぐに出かけよう。そのつもりで來たんぢやから。……お化粧なんざいゝよ柄縞ちやん。向かふで出來るから。着物だけちよいと着換へて貰ひア。』

さう云つて、袂の綻ろびロから腕の覗いた、しどけない彼女の居間着姿を、好色らしい眼でぢつと見た。

『ぢやさつさとしなさい。……セルがいゝわよ。』

『えゝ。』

氣の乗らない風で彼女はつぶやいて、——僕を見ないで、くるりと[illegible]

彼女の子供々々した後ろ姿が、[illegible]

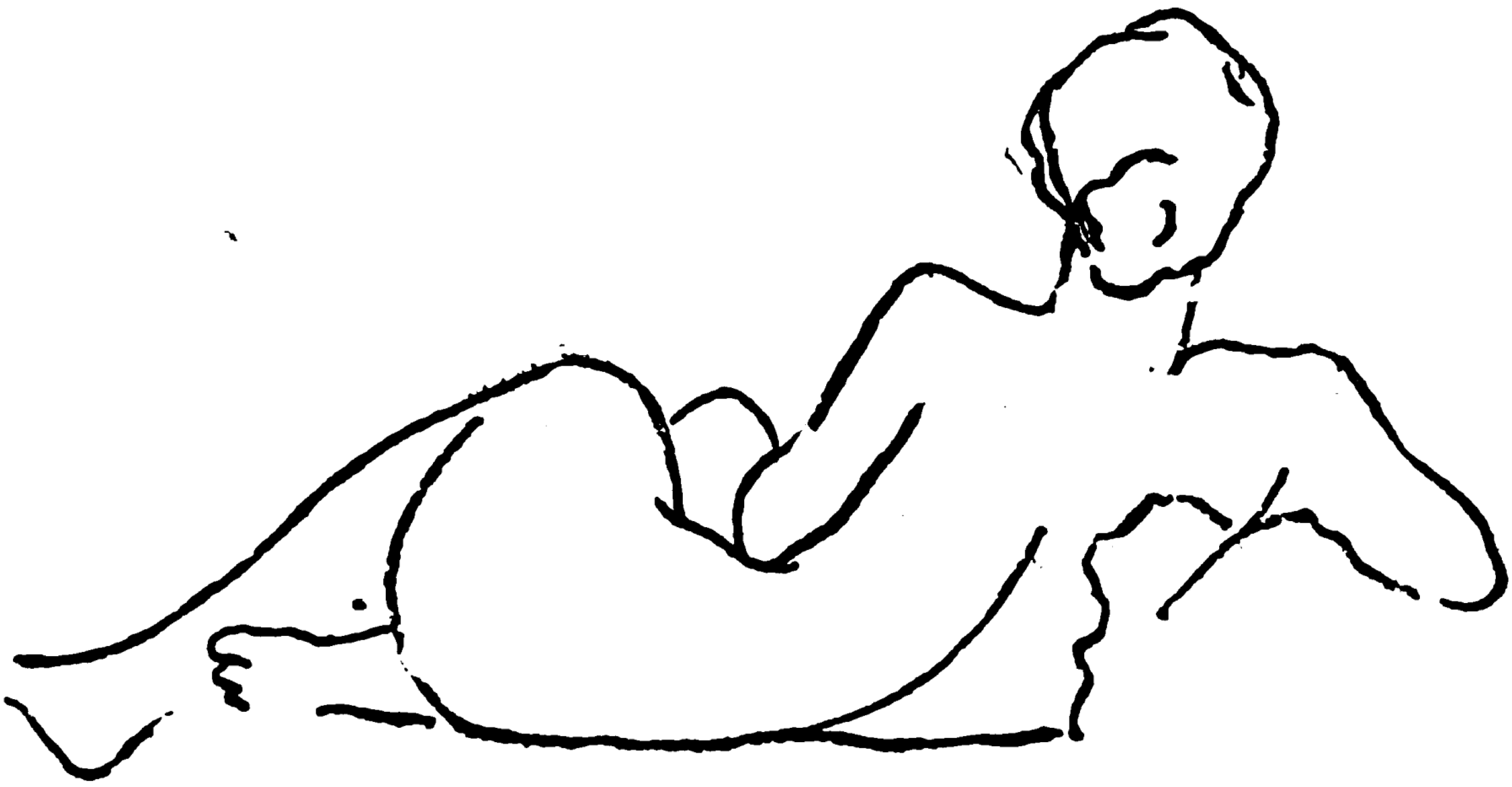
M・さんは鎌倉に一寸した別荘を持つて居た。夏になると、[illegible]がはる女給をやつては、黒々と[illegible]をさせたりして、一人[illegible]で居た。以前に二度程はそこへ私を訪ねて、三日三晩[illegible]て、女給の合宿か何ぞの様に女ばかりごろ[illegible]れてしまつて、へこたれた事もあるが……

「おや、今晩はあちらへお泊り？」

[illegible]子が意味ありげに[illegible]と、M・さん[illegible]にてらくした[illegible]

「まさか、これから[illegible]」

[illegible]



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その九

一旦破裂してしもたからにはもう夫みたいなもん恐いことあれへん、どないなつたかて構ふもんかと、反動的に一層光子さんが戀ひしなつて、明くる日早速學校へ飛んで行きますと、なんでか其の日は姿が見えません。電話をかけると今日は京都の親類へ行きなさつた云はれましたんで、なほのこと會ひたら思ふにつけても昨夜の喧嘩のことが胸一杯に込み上げて來て、夢中で手紙を書いてしもたんですが、出してしもてから、あんなこと書いて光子さんどない思ふかしら？　姉ちやんのハズさんに濟まんさかいもう今迄のやうなこと止めにしようなあ云ひ出しなされへんか思て、急に又氣がかりになりました。ところがその明くる日、運動場のプラタナスの蔭に待つてますと、人目も構はんと「姉ちやん」云ひながら駈けて來なさつて、「あて今朝あの手紙讀んでたあ、姉ちやんの顔見る迄は心配で心配で……」と、兩手で肩にぶら下るやうにしなさつて、下からじつと私を見上げて、涙をためてるなさるのです。「ああ、光ちやん、あんたかつて口惜しかつたなあ、[illegible]

して、「あんた氣イわるしてんのん違ふ？　そやつたら堪忍なあ、あてあんなこと書かんといたらよかつてんけど」云ひますと、「あて、そんなこと云うてんのん違ふ。自分のことやつたらどない云はれてもかめへんけど、姉ちやんはハズさんにそない云はれたらきつとあてがイヤになれへん？なあ姉ちやん、きつと、きつと、イヤになれへんか？」「あほらしいもない、そんなんやつたら昨日もあんな手紙書いたり電話かけたりするもんかいな。あて、もう斯うなつたらどんなことあつたかて何あんたと別れるもんか。ぐづぐづ云うたらあんな人ぐらゐ放り出してやるわ。」「姉ちやん今はさう云つてるけど、今にだんだんイヤになつて來て、やつぱりハズさんの方を愛するのんと違ふかしらん？夫婦云うたらみんな何處でもさう云ふもんや云ふよつて、………」「あてあんな人と夫婦やあれへん。あてはマドモワゼルやもん。光ちやんさい承知やつたら、もしもの時は二人で何處へでも逃げて行くわ。」「まあ、姉ちやん！　それほんまかいな？　きつと、きつと、うそ違ふ？」「うそやないとも！　あてもう光ちやあんと覺悟してるわ。」「あてかつて覺悟してるわ。姉ちやんはあてが死ぬ云うたら一緒に死んでくれるなあ？」「死ぬわ、死ぬわ、光ちやんかつて死んでくれるなあ？」——そんな工合で二人の間はその喧嘩があつたためになほのことに深刻になりましたけど、夫は匙を投げたんかそれなり何も云ひませなんだので、此方はいよいよ圖に乘つて大膽になるばかりでした。「もううちの人あきらめてしもてるわ、ちよつとも遠慮みたいなんすることあれへん。」——私がさう云ふもんですよつて、光子さんもだんだんづうづうしなりなさつて、二階にゐる時夫が歸つて來ましても「姉ちやん階下へ行つたらイヤや」云うて、自分はもちろん私をさへ階下へおろさうとはしなされしません。どうぞすると晩の十時十一時頃までも遊んでなさつて、「姉ちやん家へ電話かけてほし」云うて、私からお母さんを電話口へ呼び出して、「今夜は家で晩御飯をたべなさつて何時頃に歸られますから」と、その時分にお梅云ふ女子衆に自働車で迎へに來て貰ひます。御飯も二階で二人きりでたべたこともありましたけど、夫がひとり手持ち無沙汰にしてるのんで、「どやのん、あんたもお招伴しなされへんか」云ひますと、「ふん、してもええ」云うて三人でたべることが多いでしたが、もうそんな時に光子さんは平氣で「姉ちやん姉ちやん」云ひます。私と話がしたうなると、夜夜中でも電話がりんりんかかつて來ます。「何やのん、今時分？　あんたまだ起きてんのん？」「姉ちやんもう寢たん？——」「そやかつてもう二時過ぎやないないな。——睡たいわア、あて、——ええ氣持ちで寢てたとこを、——」「えらい濟んまへんなあ、折角仲好うしてはつたとこを、——」「あんた、そんなこと云ひにわざわざ電話かけたん？」「そらハズさん

のある人はええやろけど、あてはひとりぼつちやよつて、淋しいて淋しいて、何時になつたかつて寢られへんわ。」「しやうむない人やなあ。――だだ捏ねんと早寢なさい、又あした遊んだげるさかいになあ。」「あて、あしたの朝起きがけに直ぐ姉ちゃんとこへ行くさかい、ハズさんが遲うまで寢てはつたら、早起してさつさと追ひ出してしもてエな。」「ふん、よッしャ、よッしャ、――」「きつとやなあ？」「ふん、ふん、分つてる、分つてる」云うて、そんなたわいないことを電話口で二三十分もしやべつてゐます。手紙なども內証で遣り取りしてたのがだんだんおほびらになつてしもて、光子さんから來ましたのを讀みさしのまま机の上などへ放り出しときます。――尤も夫は人の手紙を偸み讀みするやうな人間と違ひますよつて、それは安心してましたけど、それでも前には讀んでしもたら急いで箪笥の抽き出しへ入れて鍵をかけといたんですのに、…………

そないにして、夫の方もいづれ又一と波瀾持ち上ることは分つてましたが、さしあたり前より都合がようなつたくらゐですよつて、私はますます光子さんにのぼせてしもて、恰も心も燒けただれるやうな情熱の奴隷となつてしもたんですが、その最中に、私に取つてはまるきり寢耳に水の事が、――もうもうほんまに夢にも思ひがけなんだ事が起つたんです。それ云ふのがちやうど六月の三日のことでした。おう

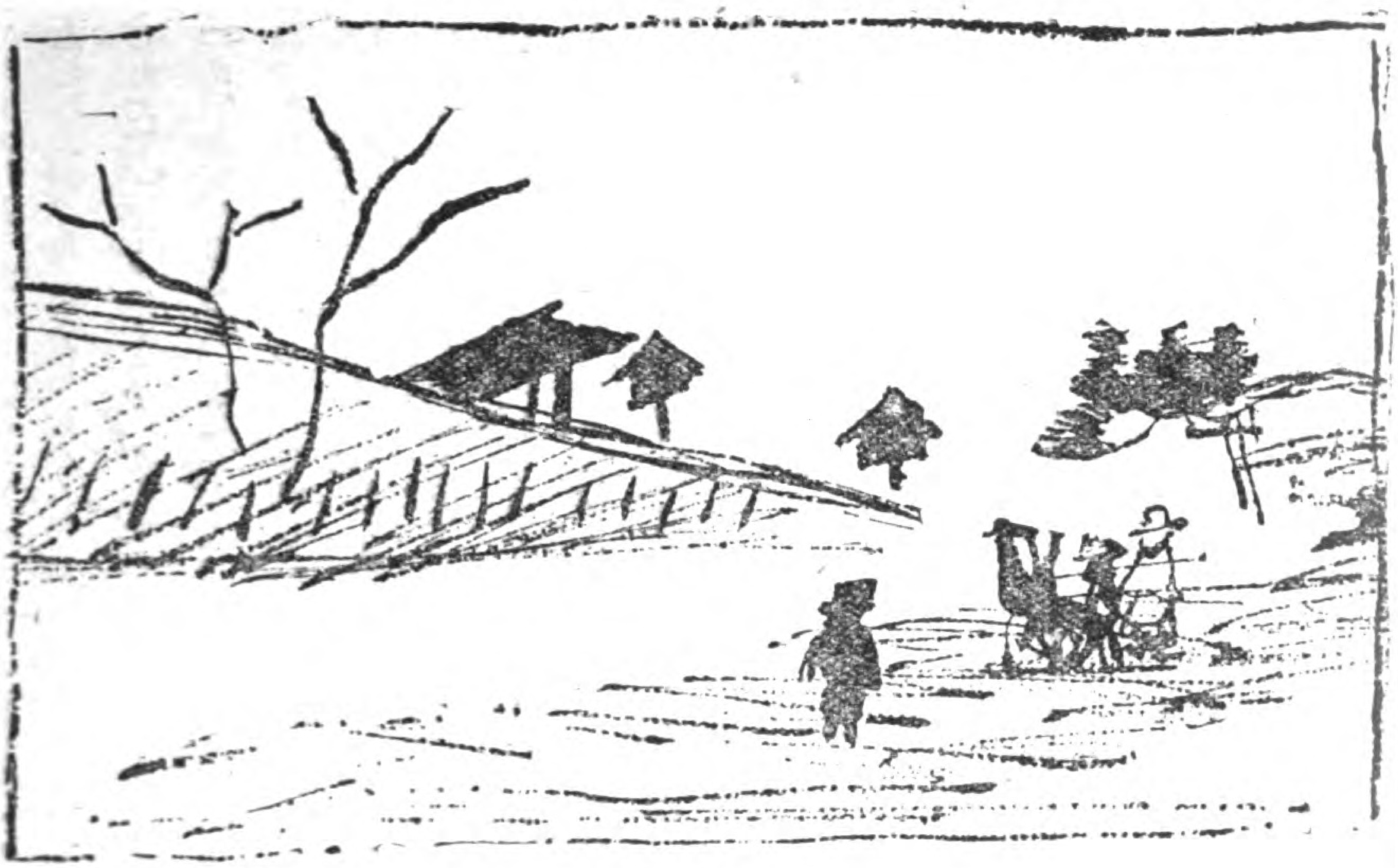
る頃に光子さんが來なさつて、夕方五時ぐらゐ迄遊んで歸りなさつたあと、夫と二人で晩御飯をたべてしもたのが八時で、それから一時間ほどたつて、九時ちよつと過ぎた時分に、女子衆が「大阪から奧樣へ電話かかつてます」云ふんで、「大阪の誰やねん？」云ひますと、「誰とも云やはれしまへんけど、大急ぎで電話口まで云うてはります」云ふんです。「もしもし、どなた樣ですか」云ひますと、「姉ちゃん、あて、…………あてや、…………」云ふのんが、…………光子さんより外にそんな云ひやうをする人はないのんですけど、それが電話が遠いのんか、小聲で云うてるのんか、聽き取れんぐらゐかすかなんで、何や誰ぞにわるさでもされてゐるやうな氣がして、「あんた誰ですねん？　はつきり名前云うて頂戴。…………何番へ電話かけなさつたん？」と念を押しますと、「あてやわ、姉ちゃん、あて西宮の××××番へかけてんねんわ」と家の電話番號を云ふ聲が、聞いてるとやつぱり紛れもなう光子さんで、「…………あてなあ、今大阪の南の方にゐるねんけど、えらい目に遭うてしもて、…………着物盜まれてしもてん」云ひなさるんです。「何やて、着物を？…………あんた何してたん？」「あて風呂に這入つててん、…………此處なあ、南地の料理屋で、內にお風呂があるよつて。…………」「ふうん、なんで又そんなとこへ行つてたん？」「そらいういう所があるねん[illegible]、…………こないだから[illegible]姉ちゃんに聞いて聞

はんならんねん思てゝんけど、………ま、その話はあとでゆつくり云ふよつて、………あて今えらいえらい難儀してるよつて、………どうぞあてを助ける思て、あのさつき着てた揃ひの着物なあ、あれ大急ぎで屆けて欲しねん。」「そんならあんた、あれからずうッと大阪へ廻つてたんか？」「ふん、そやねん。」「あんたそこに誰とゐるのん？」「そら姉ちやんの知らん人やねん。………あてどないしてもあの着物なかつたら今晩家へ歸られへんよつて、どうぞどうぞ一生のお願ひやさかい、あれ屆けて貰はれへんかしらん？」——光子さんは泣き聲を出してなさるんですが、私は私であんまり意外やつたんで、胸がわくわくして、膝頭までガタガタふるへが來ました。何處まで屆けたらえゝのんか云ひますと、南の太左衞門橋筋の、笠屋町の××云ふ家や云ひますねんけど、そんな料理屋聞いたことありません。そして着物の外に帶も、帶留めも、帶上げも、幸ひみんな揃ひのものがあつたんで、それを持つて來てくれ云ふのんは分るんですが、けつたいなんは腰帶や、ぼてや、伊達卷や、足袋までも盜まれた云ふのんで、「そんなら肌襦袢は？」云ひますと、「襦袢は助かつてん」云ふんです。誰ぞたしかな人に持たせて、今から一時間以内、おそても十時までに云ひますけど、うかッとした者を頼む譯に行きませんし、どないしても私が自分で、國道を自働車で飛ばすより仕方ありません。「あてが行つてもかめへんか」云ひますと、誰ぞさつきからもう一人電話口に附き添うてるあんばいで、それがときどき光子さんに「こないせエ、あないせエ」と指圖してるらしいて、「いつそこないなつてしもたら姉ちやんが來てくれたかつてえゝし、………さうと違ふかつたら、お梅が今頃梅田の驛で待つてる筈やよつてあれに渡してくれたかつてえゝけど、お梅は所を知らんよつて頼むんやつたらよう場所を教へてほし。そんで此方の名は鈴木云うて訪ねて來てほし。」——そこで又何ぞこそこそ相談するらしいて、暫くたつてから、「あのなあ、姉ちやん、………」と、たいへん云ひにくさうにして、「………あのう、えらい濟まんけどなあ、も一人着物ないやうにして困つてる人あるねんけど、もしどないぞなるねんやつたら、あんたのハズさんの着物、………洋服でも日本服でもかめへんよつてなあ、………」云うて、「それからあのう、えらいえらい勝手ばかり云うて申し譯ないねんけど、………おあしを二十圓か三十圓持つて來てくれたらなほのこと有り難いねんけどなあ」云ふんです。「おあしの方はどないぞなるけど、………まあ兎に角待つてなあれ」云うて電話を切つてしもてから、直ぐに自働車を云ひつけて、夫には「うちちよつと大阪まで行つて來ま。光子さんが急用や云やはるさかい」とたつたそれだけ云うて、二階へ上つて、大急ぎで簞笥の中から揃ひの着物や何やかんやと、夫が餘所行きの時着る絹セルの單衣

と羽織と絞りの三尺とを出して、風呂敷に包んで、それを女子衆に持たして先へそうッと玄關まで出さしましたが、「なんやいな、今時分からそんな包み持つて？」と、さすがに夫は氣になつたらしう、自動車へ乘ろとする時に奧から出て來て云ふのんでした。多分私の様子が、慌ててもゐましたし、顔色も變つてたでせうし、不斷着のまま髪も直さんと出て行かうとするのんが、よつぽどけつたいやつたんに違ひないのんで、「なんやうちにもさつぱり様子が分れへんねんけど、今夜急に此の揃ひの着物なあ、――」と、私は知つて風呂敷の結び目から着物の端を出して見せて、「――此れをどないしても着んならんことが出來たんで、大阪の店まで屆けてほし云うてやんねえ。何ぞ素人芝居でも始まつたんかも分れへんけど、うち自動車待たしといて直ぐ歸つて來るわ」云うて、もう時刻もおそなつてしもてまして、九時二十五分ごろでしたよつて、最初は眞つ直ぐ南の××云ふ家へ行こ思て出たんですが、それよりもまあ梅田へ行つてお梅どんを摑まへて見よう、お梅どんに聞いたら何ぞ此の譯が分るかも分れへん思て、梅田の驛へ行つて見ますと、まん中の入り口のとこに立つて待ちどしさうにキョロキョロしてますんで、車の中から手招きして、「お梅どんお梅どん」云ふと、「やア、奧様だしたんかいな」とびつくりして顔れくささうにウロウロしてますのんを、「あんた光ちやんを待つて[illegible]事件が起つて、光ちやんから大急ぎで迎へに來てくれ云ふ電話があつてん。あんたも早よ乘んなさい」云うて、「えー、ほんまだつかいな」と何や腑に落ちんらしうぐづぐづしてるのんを無理に乘せて走らせながら、車の中で手短かにさつきの電話の話をしました。「なあ、いつたい誰やのん、その一緒に行てる男云ふのんは？　お梅どん知れへんのんかいな？」――初めのうちは困つたやうな顔をして、言葉に詰まつてましたけど、「あんた知らん云ふ筈ないやろ？　こんなこと今日だけと違ふやろ？　うちどんなことあつてもあんたに迷惑かかるやうなことせエへんよつて、云うてくれたらお禮は何ぼでもするよつて、――」と、眼の前へ十圓札を出して、紙に包んで、「いえ、いえ、いつもいつも貰てばつかりしてまんのんに」と辭退するのんを、「そんなこと云うてる間に時間立つてしまふやんかいな」と帶の間へ押し込んでやりますと、「わたし、奧様と一緒にそんなとこへ迎ひに行つてもよろしおまんねんやろか。あとでうちやんに叱られしまへんやろか」云ふんです。「何でやのん？　うちが行けへんかつたらお梅どんに來てくれ云うてやんねんぐらゐやもん」「ほんまにそんな電話かかりましたんだつしやろか？　わたし何や妙う心配で、………」それ云ふのんが、何ぞ[illegible]の仕業に乘せられへんか思てるらしいのんで、「そんなことあるもん[illegible]

でおますけど、わたし今迄にちよつとも奧樣が氣イついてやおまへなんだのんが、なんでだつしやろか思て、空恐ろしいて仕方おまへんでしたんで、……』「ふうん、そしたらいつからこんな事あつたん？」「いつからか云ひまして、もう早から、……四月頃からでおましたやろか、それは私にもはつきり分れしめエなんだが、……』「誰やのん、相手の人は？」「それもよう分れしめへんねん。いッつもおあしをくれはりやして、此れで活動でも見て、何時頃梅田へ來て待つててや云やはりますよつて、何處へ行きはりまんのんやさつぱり分らんと、こらきつと何處ぞで奧樣と會うてはんねんやろ思てましてん。家へおそう歸りましても今日は今まで柿内さんとこで遊んでたやうに云へ云やはりまんのんで、……」

（つゞく）



風呂と銀行

横光利一

一

満潮になると河は膨れて逆流した。火の消えたモーターボートの首の波。舵の並列。抛り出された揚げ荷の山。鎖で縛られた棧橋の黒い足。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇つていつた。海關の尖塔が夜霧の中で煙り出した。突堤に積み上げられた樽の上で苦力達が濕つて來た。鈍重な波の上で破れた黒い帆が傾いたまゝ動き出した。

參木は街を廻つて歸つて來た。

波打際のベンチにはロシア人の疲れた春婦達が並んでゐた。彼女らの黙々とした瞳の前で潮に逆らつた舢舨の青いランプが廻つてゐた。

「あんた、急ぐの。」

春婦の一人が首を參木の方へ振り向けて英語で云つた。彼は女の二重になつた顎の線に、白い斑點のあるのを見た。

「空いてゐるのよ、ここは。」

參木は女と並んで坐つた。

「煙草。」と女は云つた。

參木は煙草を出した。

「毎晩ここかい。」

「ええ。」

「もうお金がないと見えるな。」

「お金？」

「うむ。」

「お金もないし、お國もないわ。」

「そりや、困つたね。」

「だからよ、あんたにこんなことを云つたり、悲しさうな顔をしてみたり。」

霧が帆桁にからまりながら湯氣のやうに流れて來た。女は煙草に火を點けた。石垣に縛られた舟が波に揺れる度毎に、船名のローマ字を代る代る瓦斯燈の光りに浮き上らせた。樽の上で賭博をしてゐる支那人の首の中から、鈍い銅貨の音が聞えて來た。

「あんた、行かない。」

「うむ、今夜は駄目だ。」

「どうして、いらつしやいよ。」

「だつて、もう直ぐここで逢はなくちや、」

「ぢや、駄目ね。」

女は足を組み合した。遠くの橋の上を馬車が一臺通つていつた。參木は時計を出してみた。甲谷の來るのはもう直ぐだつた。彼は甲谷に宮子と云ふ踊子を一人紹介される筈になつてゐた。甲谷はシンガポールの材木の中から、此の濁つた支那の海港へ妻を娶りに來たのである。——

濡れた菩提樹の隙間から、縞を作つた瓦斯燈の光りが春婦の靴先へ流れてゐた。その縞の中で、霧が急がしさうに朦朧と動いてゐた。

「歸らうか。」と一人の女が云つた。

「歸ろ。」

春婦達は立ち上ると鐵柵に添つてぞろぞろ歩き出した。一番後になつた若い女が青ざめた眼で參木の方を振り返つた。と、參木は煙草を喰はへたまま、突然夢のやうな悲しさに襲はれた。競子が彼に別れを告げたとき、彼女のやうに彼を見降ろして行つて了つたからである。

春婦達は舟を繋いだ黒い纜を跨ぎながら、樽の間へ消えていつた。踏み潰されたバナナの皮が濡れた羽毛と一緒に纏つてゐた。突堤の先端に立つてゐる繋纜の塔の入口から、靴を履いた二本の足が突き出てゐた。

て來た。

「ね、もしあなたが奥さまをお貰ひになるときは、一應あたしに相談なさらなきアいけないことよ。」

「だつて、あなたが僕に隱して、僕があなたにつて云ふ法なんかありますものか。」

「そりや、あたしとあなたは人柄が違つてゐるわ。あたしは支那人のお妾さんよ。御存知ないの？」

「さう今頃から正直なことを訊かされちや、」

お柳の胴に腕を延した蜘蛛の皮膚から、汗が出てゐた。やがて、蒸氣が浴室に溢れ出すと、一面長方形の眞白な霧の中に、主人も客も、蜘蛛も泡も茫々として見えなくなつた。蒸氣の中からお柳の聲が聞えて來た。

「あなた、今夜はどこへも行かないつて仰言いな。」

「いや、參木が、」

「參木さんなんかどうでもいいわ。」

「もう蒸氣をとめてくれ給へ。」

「いやよ、行かないつて仰言らなけりや。」

「これぢや息がつまつて、苦しくつて仕樣がない。」

「もういい加減に勘辨をなさいよ。」

「あなたは僕を、殺すんですか。」

「今頃そんなことに氣がつくなんて、」

「奥さん。」

「いやよ、」

そのまま、ぷつりと二人の聲は切れて了つた。

三

參木は疲れながら、トルコ風呂まで歸つて來た。だが、そのときは、もう甲谷は參木に逢ひに突堤へ行つた後だつた。

參木は應接室のソフアーに沈み込んだまま默つてゐた。浴場の奥から湯女達の笑ふ聲と一緒に、ポルトガル人の猥雜な歌が聞えて來た。時々蒸氣を抜く音が壁を震動させると、テーブルの上のチユーリツプが首を垂れたまま慄へてゐた。

一人の湯女が彼の傍へ近か寄つて來た。彼女は彼の横へ腰を降ろすと、横目で參木の鼻を眺めてゐた。

「眠いのか。」と參木は云つた。

女は兩手で顔を隱して俯向いた。

「風呂は空いてるか。」

女が默つて頷くと、參木は云つた。

「ぢや、ひとつ願はう。」

參木は前から此の無口な女が好きであつた。彼女の名はお杉と云ふ。お杉は參木が來ると、女たちの肩越しにいつも參木の顔をうつとりと眺めてゐた。──

湯女達が狹い廊下いつぱいに水々しい空氣をたてて亂れて來た。

「まア、參木さん、久々ね。」

參木はステツキの握りの上に顎を乘せたまま、ぢろりと女達を見廻した。

「あなたの顔は、いつ見てもつまんなさうね。」

と、一人が云つた。

「そりや、借金があるからさ。」

「だつて借金なんか、誰でもあるわ。」

「ぢや、風呂へでも入れて貰はふ。」

女達は崩れたやうに笑ひ出した。そこへお杉が浴室の準備を整へて戻つて來た。參木は浴室へ這入ると、寢椅子の上へ仰向けに長くなつた。皮膚が湯氣に濕つて膨れ出した。彼はだんだんと眠くなつた。

と、ふと彼は、此のまま蒸氣を出し放して眠つてみようと考へた。

彼はスイツチをひねるとタオルを喰はへて眼を瞑じた。身體が刻々に熱くなつた。もし此のまま死ねたらと思ふと、競子の顔が浮んで來た。債鬼の喚てた顔がちらついた。慘忍な專務の喰ふ顔が。──專務の食つた預金の穴を知つてゐるのは彼だけだつた。間もなく銀行は停止を食ふにちがひない。格子の中から見た無數の顔が、暴風のやうに渦卷くだらう。だが、駄目だ。何もかも、人間の慾を製造するために出來てるのだ。──

ドアーが開いた。誰でもいい。參木は眼を瞑つたまま動かなかつた。と、空氣が幅廣い壓力で動搖した。すると、彼はいきなりタオルで眼かくしをされてゐた。お柳だと彼は思つた。お柳なら、此の女は人間の慾を延ばすのが商賣だ。──

暫くそのまま浴室の中は靜まつてゐた。お柳の脊中の黄色い蜘蛛が、横はつた自分の身體を見詰めてゐる。と思ふと、椅子の上で、身體が鋭くだんだん尖角り出すのを彼は感じた。

「お杉さん。」と參木は故意に、お杉の名前を云つてみた。

誰も彼には答へなかつた。參木はやがてお柳が自分に、、、、であらう、、を、お杉が自分に、、、と思ひたかつた。いや、それよりお柳に、自分がお杉と、、、ことの喜びを知らせたかつた。彼はまだ一度もお柳の、、を赦したことがない。それ故お柳を、、することが、彼には彼女の、、さをますます華やかに感じることが出來さうに思はれたのだ。彼は眼かくしをされたまま、にやにやしながら、兩手を擴げ

て身の廻りを探つてみた。

「おい、お杉さん、逃げようたつて、そりや駄目だ。俺の手は蜘蛛みたいな手だから、用心してくれ。」

云ひながら、參木は自分の下手さに赤面した。だが、眼は見えぬ。やるだけやつて笑へば良い。——

すると、彼の豫想とは反對に、急にドアーが開いて誰か出て行く氣配がした。此の空虛な間に何事が起るのか。參木は暫くぢつとしたまま空氣に觸れる皮膚に意識を集めてゐた。と、突然、ドアの外で荒々しい音がした。瞬間、彼の上へ、突き飛ばされた女があつた。すると、女は彼の足元で泣き始めた。お杉だ。——

參木は起つた事件の一切を了解した。彼はお柳に對して激しい怒りを感じて來た。が、今怒り出しては、お杉が首になるのは分つてゐた。參木は自分でタオルを解くと泣いてゐるお杉の亂れた髮を眺めてゐた。彼はお杉には默つて浴室から出ると服を來た。それから彼は別室へ這入つてお柳を呼んだ。

お柳は笑ひながら這入つて來ると彼に云つた。

「まア、隨分今夜は遲いのね。」

「服で、さつきはどうしたんだ。」

「服か？」

「いや、あのお杉がさ。」

「あの子は駄目なの。働きが一寸もなくて。」

「それで、僕にひつつけようつて云ふんだな。」

「まア、さうしていただけりや、結構だわ。」

參木は自分の戲れが間もなく女一人の生活を奪ふのだと氣がついた。彼がお杉を救ふためには、お柳に頭を下げねばならぬのだ。だが、彼が彼女に頭を下げたら、なほ彼女はお杉を拋り出すに定つてゐた。それなら、——

參木は寢臺の上から、急にお柳の片手を持つと抱き寄せた。

「おい、お柳さん、僕は、俺は、此の間から死ぬことばつかり考へてゐたんだが、あんたを見てると、どうも死ぬ氣が消えてしまふ。」

「どうしてそんなに死にたいの。」とお柳は云つた。

「どうしてつて、まだ分らぬ柄でもないだらう。」

「だつて、あたしにや、死ぬ人のことなんか分んないわ。」

「これほど惰けを舐めてゐて、それにまださう云はれるやうぢや、もう俺も死ぬことも出來ぬぢやないか。いい加減にはいと云へ。」

お柳は參木の膝をぽんと叩いた。

「まア、默つて聞いてゐたら、あんたにお似合にや、女殺しのやうなことを云ふんだわね。こんなぢやあたしだつて、死にたくなるわよ。」

お杉は立ち上ると部屋の中から出ようとした。参木はお杉に手を打つた。

「おい、何とかしてくれ。このまま行かれちや、俺は今夜は危いんだ。」

「いいの、あなたはお休みになつて。」

「俺は[illegible]いいか[illegible]」

「まア、[illegible]」

「[illegible]」

[illegible]

彼はお杉の傍へ近よると彼女を抱きかかへて寝台の上へ連れて来た。お杉は寝台の上へ乗せられても背中を参木に向けたまま泣いてゐた。

「おい、おい、泣くな。」と参木は云ふと、ひとり仰向きに寝ころんで楽しむやうにお杉の顔を眺めてゐた。

お杉は一寸参木の片手が肩へ触れると、「いやだいやだ、」と云ふやうに身體を振つた。が、彼女は寝台から降りようともせずに袂を顔にあてて泣き續けた。

参木はお杉の片腕を撫でながら彼女に云つた。

「まア、昔話を聞くんだぜ。良いか、昔、昔、ある所に、王様とお[illegible]」

[illegible]泣き出した。

[illegible]たまま、寝台から足を[illegible]

[illegible]の羽根を[illegible]

[illegible]来ないの[illegible]

四

甲谷は突堤へ行つたが鈴木の姿は見えなかつた。ただ掃除夫の赤い法被が霧の中で動いてゐた。菩提樹の下のベンチには印度人の髯が幾つも鳥の巣のやうにかたまつて竦んでゐた。彼は芝生の先端を歩いてみた。二つの河の流れの打ち合ふ波の上で、大理石を積んだ小舟がゆるゆるともまれてゐた。甲谷はチューリップの圓陣を造つて咲いてゐる芝生の中まで歩いて來た。すると、突然、彼は自分の美しい容貌の變化を思ひ出した。彼は直ぐ引き返すと、車を呼び寄せて宮子のゐる踊場の方へ走らせた。

——もし彼女が結婚しないと云へば、いや、何に、そのときはそのときだ

踊場の周圍には建物がもたれ合つて建つてゐた。蔦がその建物の割れ目を這ひながら窓の上まで蔽つてゐた。

踊場では、ダンスガールのきりきり廻つた袖の中から、アジア主義者の建築師、山口が甲谷を見附けて笑ひ出した。

山口は甲谷がシンガポールへ行く前の遊び仲間の一人であつた。甲谷は山口と向ひ合つて坐ると云つた。

「彼の癖はどう見た。」

「いや、見た通りの醜態でね、どうも一度あの道へ足を突つ込むと、もう人間もお了ひだよ。鈴木に此の間逢つたら、君は嫁探しに來たつて云つてたが、ほんとうか。」

「うむ、いいのがあるかい。あつたら一つ頼みたいな、もつとも、君のセコンドハンドぢや御免だが。」

「いや、所がそのセコハンに、なかなか話せる奴がゐるんだよ、ロシア人だが、どうだひとつ。鈴木の奴にひつつけてやらうと思つてたんだが、阿奴はああ云ふドンキホーテで面白くなし、どうだい君は。意志はないか。」

「君にはもう意志はなくなつたのか。」

「いや、そりやある、しかし、あゝ云ふ女は他人のものにしないと面白くないんだよ。」

甲谷は山口の言葉を聞き流しながら、宮子はどこかと搜してみた。だが、彼女の姿は見えなかつた。

「だつて、僕の細君にして、それからまた君が面白からうと云ふんぢや、あんまり面白くなりすぎるよ。」

「いいぢやないか、細君なんかにしなけりや。倦きればまた[illegible]が元値で買ふさ。まア、今は、、見齒の月賦で結構だな。」

「ときに鈴木は[illegible]」

「あ奴か、あ奴は細君を、、、つては變へてるよ。」
「まだここらにゐるのかね。」
「うむ、ゐる。前の細君だつてま、、、込みにはなつてゐないのだ。」
「木村はどうした。」
「木村も達者だ。しかし、先生、どうもあんまり妾を大切にしていかぬ。換へことしようと云つても、放さぬのだ。あ奴も参木のやうな馬鹿者だね。」
「ふむ、御橋はどうした。」
「御橋にはあまり逢はない。いや、一度逢つたかな。奴さん、相變らず競馬狂でね、いつだかロシア人の妾を六人大競馬に連れてつて、負け出したのさ。所が、あの男は振つてる。負けたらその場で妾を一人づつ賣り飛ばすぢやないか。それですつかり負けちやつてね、その日に六人とも賣つちやつて、まだお負けに上着からチョッキまで質に叩き込んで、さアてとか何んとか云つて澄してゐるんだ。奴さんが妾を持つのは、まアあれは貯金をしてゐるやうなものなんだよ。」
「それで、君はどうしてるんだ。」
「俺か、俺は此の頃は建築屋はそつちのけで、死人拾ひと云ふ奴をやつてゐる。此奴はなかなか危い商賣だが、儲かるのはこりや一番だ。一度俺と一緒について來ないか。その面白い所を見せてやるよ。」
「そりや、どう云ふことをするんだね。つまり死人の間夫にか。」
「まア、云はばさうだな。一人の死人で、生きてるロシア人の妾を七人持てる。七人それもロシアの貴族だぜ。」
どうだいと云ふやうに、山口の唇は歪んでゐた。此の男ならそれは平氣なことにちがひない、と甲谷は思つて踊りを見た。これはまた、うどんを捏ねてゐるやうな踊の隙から、樂手達の自墮落なトランペットが振り廻されて光つてゐた。宮子が二階から降りて來ると甲谷の傍の椅子へ來た。
「今晩は、お靜かね。」
「うむ。」
「踊らないの。」
「いや、いまは、細君の話をしてるんだ。」
「まア、さう、ぢや、あたし逃げてませう。」
宮子が盆栽の棕櫚を廻つて自分の席へ戻つていくと、甲谷は云つた。
「それで、さつきの死人の話は。」
「死人か。まアまア、それより一踊りして來いよ。死人のことは後でもいいさ。」
「おや、失敬。」

彼は宮子に追ひついて二人で組むと、踊の群れの中へ流れていつた。宮子は甲谷の肩に口をあてて囁いた。

「今夜の足は重いわね。」

「さうかね。」

「あたしは、その人の足の重さで、何を考へてるのかと云ふことが分るのよ。」

「ぢや、僕は？」

「あなたは、奥さまが見つかりさうなの。ね、さうでせう。」

「さう。」

實は、甲谷は、一人の死人と七人の妾について考へてゐたのである。——何と奇怪な生活法ではないか。廢物利用の極意である。——甲谷はその話を聞くまでは、宮子と結婚したい希望をいくらかはもつてゐた。だが、七人の女と一人の死人の價値とを聞いてからは、妻帶者の不幸ばかりが浮んで來た。

——ほら、此の通りひつついてばかりゐなければ——

踊りがすむと甲谷は山口の傍へ戻つて來た。

「君、さつきの死人の話をもう少し聞かしてくれ。」

「まア、さう騒がなくつたつて、死人はいつでもぢつとしてゐるんだ。」

「死人が、亂烈だつて、ぢつとしてゐるさ。」

「だつて、君は貧乏してゐるやうには見えないよ。」

「いや、參木の奴のことなんだが、あ奴をもう少し何とかしてやらないと、死んで了ふ。」

「死ぬつて、參木の奴が？」

「うむ、あ奴は近頃、死ぬことばかり考へてゐるらしい。」

「ぢや、俺に金儲けをさせてくれるやうなもんぢやないか。」

甲谷は全く大きな聲で笑ひ出した。

「さうだよ、あの男は。今に君に金儲け位ゐはさすだらう。」

「そりや、面白い。よし、そんならひとつ、參木を俺の會社の社長にしてやらう。」

甲谷は山口の豪傑笑ひの中から、參木に對する友情を嗅ぎつけた。

「君の會社は何と云ふんだ。」

「いや、名前はまだだが、死人製造會社とでもしとくかな。ひとつ、君から參木の奴に話してみてくれ。あ奴が死人になりたいなんて、そりや、もつて來いの商賣だ。」

「それで、その死人をどうする會社だ。」

「つまり、人間の、、、、、、骨をそのままの形で取らうと云ふのだ。これを輸出すると一人前が三百圓になつて來る。」

「しかし、そんなに人間の骨に買手があるのかね。」

「君、醫者に賴んだよ。醫者たちそこに彼らの手先でどこへでも自由が効くのさ。もともと僕だつて、學術用に醫者から賴まれたのが始まりだよ。」

甲谷は參木が人骨製造會社の支配人に納まつてゐる所を想像した。すると、やがて、彼らしい幸福が、骸骨の踊りの中から舞ひ上つて來るのではないかと思はれた。甲谷は云つた。

「君、君が踊りを見てると、みんな骸骨に見えないかい。」

「それが此の頃困るんだよ。俺の家の中は骸骨でいつぱいさ。生きてる人間を見てゐても一番先に肋骨が見えてくる。」

「おや、僕も骸骨に見えるのか。」

「うむ、そりや見える。とにかく人間と云ふ奴は、誰でも陰子みたいに骨があるんだと思ふと、おかしくなるよ。」

再びダンスが始り出すと、甲谷は立ち上つて彼に云つた。

「君、ひとつ踊つて來るからね、そこから骸骨の踊りを見てゐてくれ。」

甲谷はまた宮子と組むと、モールの下で揺れ始めた男女の脊中の中へ流れていつた。甲谷は宮子の冷たい耳元で囁いた。

「君、今夜は宜敷く賴んだよ。」

「何に？

「何んでもないさ。當り前のことなんだ。」

「いやよ。風儀が悪いぢやないの。」

「だつて、結婚しなけりや、なほ風儀が悪くなる。」

「もう、これ以上、お饒舌りしちや、塵埃を吸つてよ。」

だが、いづれどちらも骸骨だ、と甲谷は思ふと、借り車を引つ張るやうに、宮子の脊中を人の脊中の中で振り廻した。

五

お杉はその夜、參木が去ると、お柳に呼ばれて首を切られた。これは參木が早くも寢臺の上で豫想したそれほども、確かな心理の現れを、形の上に示しただけだ。

お杉は讐く事件の性質が、無論何のことだか分らなかつた。彼女はトルコ風呂の入口から出て來ると、明日からもう再びこゝへは來ることが出來ぬのだと知り始めた。

彼女は露地を出ると、鋪道に閉め出された金看板の下を通り、また露地の中へ這入つていつた。露地の中には霧にからまれた圓い柱が廻廊のやうに並んでゐた。暗い奥から、耳輪の脱れかゝつた老婆が咳きをしながら歩いて來た。

お杉は柱の數を算へるやうに、泣いては停り、泣いては停つた。彼

女は露地を拔けると裏街を流れてゐる泥溝に添つてまた歩いた。泥溝の水面には眞黒な泡がぶくりぶくりと上つてゐた。泥溝を包んだ漆喰の剝げかゝつた横腹で、青みどろが靜に水面の油を舐めてゐた。

お杉は遠木の下宿の下まで來ると火の消えた二階の窓を仰いでみた。彼女はこゝまで、もう一度遠木の顏をたゞ漫然と眺めに來たのである。それから――彼女はそれからのことは、たゞ泣く以外には知らなかつた。

お杉は漆喰の欄干にもたれたまゝ、片手で額を抑えてゐた、彼女の傍には、豚の骨や吐き出された砂糖黍の嚙み粕の中から、瓦斯燈が傾いて立つてゐた。彼女は多分、その瓦斯燈の光りが消えて遠木の部屋の窓が開くまで動かぬだらう。彼女の見てゐる泥溝の上では、その間にも泡の吹き出す黑い芥が徐々に寄り合ひながら、一つの島を築いてゐた。その島の眞中には、雛の黃色い死骸が猫の膨れた死骸と一緒に首を寄せ腹を見せた便器や靴や菜つ葉が積もつたまゝ動かなかつた。

夜が更けていつた。屋根と屋根とを割つて奧深く曲つてゐる泥溝の上から、靄が一層濃しく濡れて來た。お杉は欄干にもたれたまゝうとうとゐ眠りをし始めた。すると、急に彼女は靴音を聞いて眼を醒した。見てゐると、靄に濡つた人影がだんだん自分の傍へ近づいて來た。[illegible]その人影[illegible]した。

「お杉さんか。」と男は云つた。

男は踊場から遠木の所へ歸つて來た甲谷であつた。

「どうした。今頃、さア、上れ。」

甲谷はお杉の手を持つと引つ張りながら階段を上つていつた。お杉は二階へ通されたが遠木の姿は見えなかつた。

甲谷は部屋の中で裸體になると、トルコ風呂に飛び込むやうに寢臺の中へ身を投げた。

「さア、お杉さん、遠木はまだだ。僕は寢るよ。疲れた。君はそこらで寢てゐてくれ。」

云つたかと思ふと、甲谷はもう眼を閉じて眠り出した。お杉は寢臺の下で、甲谷の脫ぎ捨てた服を默つて疊んでゐた。彼女が少し身を動かすと、男の匂ひが部屋の中で波を立てた。お杉は部屋を片附けると、遠木の愛用してゐるコルネットを撫でてみた。それから、彼女は本箱の中の分らぬ洋書の背中を眺めてみた。と、眠むさうな自分の顏がぼんやりガラスに映つてゐるのを見つけると、思はず顏をひつこめてまた覗いた。

彼女は暫くはごとりと物音がしても身を立てた。もしや遠木が一と云ふやうに。が、遠木は二時が打つても歸らなかつた。そのうち、[illegible]

女はいつか[illegible]

ふとお杉は夜中に眼が醒めた。すると、部屋の中は眞暗になつてゐた。と、その暗の中で、彼女は、、。が、やがて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、樂譜と一緒に、茫然と自失した。

翌朝お杉が眼を醒ますと、參木が甲谷と一つの寢臺の上で眠つてゐた。お杉は昨夜の出來事を思ひ出した。と、今迄自分を、、、、、、、、、、、、、、甲谷だとばかり思つてゐたのに、急に、それは參木ではないかと思ひ出した。が、それをどうして二人に訊き正すことが出來るだらう。彼女は昨夜は、全く自分の眠さと、、、、、、、、起つたことだけを、朧ろげに覺えてゐるだけだつた。

お杉は暫く、朝日の縞の中に浮いてゐる二人の寢顔を見較べながら、首を傾けて立つてゐた。

物賣りの聲が露地の隅々にまで這入つて來た。お杉は參木の服を壁にかけると湯を沸した。彼女は二人のうちの誰か起きたら、自分を今日からここへ置くやうに賴んでみやうと考へた。が、さてその二人の中の誰に賴めばよいのか彼女には分らなかつた。

お杉は湯の沸く間窓にもたれて下の小路を眺めてゐた。昨夜眺めた泥溝の上には、石炭を積んだ荷舟が黒い帆を上げたまま停つてゐた。その船の動かぬ艫や、窓から垂れ出した竿竹には
がひつかかつて漂つてゐた。ぶくぶく出る無數の泡は泥のやうに塊りながら、その半面を朝日に光らせて狭い裏街の中を流れていつた。お杉はそれらの泡を見てゐると、欄干に投げかけてゐる自分の身體が、人の賣物になつてぶらりと下つてゐるやうに思はれた。もしここから出て行けば、彼女はどこへ行つて良いのか當がなかつた。間もなく、あちこちの窓から泥溝へ向つて塵埃が投げ込まれた。鷄の群は塵埃の舞ひ立つ度に、黄色い羽根を擴げて甃の上を飛び廻つた。

湯が沸き出した頃になると、泥溝を挾んだ家々に支那服の洗濯物がかかり出した。物賣りの籠に盛られたマンゴや花がその洗濯物の下を見え隠れしながら曲つていつた。

やがて、甲谷が起きて來た。彼はお杉に逢ふとタオルを肩に投げかけて云つた。

「どうだ、眠られたか。」

次に參木が起きて來た。彼は眠むさうに笑ひながらお杉に云つた。

「どうした、昨夜は。」

しかし、お杉は誰にも默つて笑つてゐた。二人の背中が洗面所の方へ消えていくと、彼女は、そのどちらに自分が奪られてゐるのかますます分らなくなつて來た。

六

參木はお杉を殘したまま甲谷と一緒に家を出た。通りは朝の出勤時間で黄包車の群れが、路いつぱいに河のやうに流れてゐた。二人はその黄包車の上に浮きながら、人々と一緒に流れていつた。二人はお杉に關してはどちらも分り合つてゐるやうに默つてゐた。その實、參木は甲谷がお杉を連れて來たのにちがひないと思つてゐた。さうして甲谷は參木がお杉を呼び出したのにちがひないと。

建物と建物との間から、またひと流れの黄包車が流れて來た。その流れが辻毎に合すると、更に緊密して行く車に車夫達の姿は見えなくなり、人々は波の上に半身を浮かべた無言の群集となつて同じ速度で辷つていつた。參木にはその群集の下に、車を動かす一團の群集が潛んでゐるやうには、見えなかつた。彼は煉瓦の建物の岸壁に沿つて、澎湃として流れるその各國人の華やかな波を眺めながら、誰か知人の顏が浮いてゐないかと探してみた。すると、後に浮いてゐた筈の甲谷が彼と並んで流れてゐた。

「おい、お杉はいつたい、どうしたんだ。」と參木は諦めて甲谷に訊いてみた。

「こりや、君も知らないのかね。」

「ちや、君が連れて歸つたんぢやないんだな。」

「馬鹿を云へ、俺が歸つたらお杉が戸口に立つてたんだ。」

「ははア、ぢや、首を切られて行くとこがなかつたんだ。」

參木は昨夜のお柳の見幕を思ひ出すと、お杉の災ひがいよいよ自分に原因してゐることを感じて暗くなつた。しかし、それにしてもお杉が自分の家から出て行かうとしない所が不思議であつた。何か甲谷がお杉に釘を打つやうなことをしたのではないか。此の甲谷が昨夜お杉と一室にゐたとすれば、さうだ、甲谷のことなら。

彼は甲谷の顏を眺めてみた。その美しい才氣走つた眼の周圍から、參木はふと甲谷の妹の競子の容貌を感じ出した。すると、彼はお杉を傷つけたものが自分ではなくして、自分の愛人の兄だと云ふことに、不滿足な安らかさを覺えて來た。殊に、もう直ぐ競子の良人が死ぬとすれば、――

「いつたい、昨夜はどうしたんだ。」

と甲谷は訊いた。

「昨夜か、昨夜は醉つぱらつて露地の中で寢てたんだ。」

市場から歸つて來た一團の主婦達の黄包車が、花や野菜を滿載して流れて來た。參木と甲谷の脚にはいつの間にか、[illegible]

[illegible]

ことに、朝日を受けてさらさらと爽やかに光つてゐた。

參木は思つた。この葬式のやうな花の流れは、これは競子の良人の死んだ報らせではなかつたらうか、と。すると、彼は、自分の不幸は他人の幸福を恨むが故だと氣がついた。もし自分が競子の良人のやうに幸福であつたなら、誰か自分のやうな不幸なものから、同樣に自分の死ぬことを願はれてゐたに相違ない。──彼は、自分の周圍の人の流れを見廻した。その滔々として流れる壯快な生活の河を。どこに悲しみがあるのか。どこに不幸があるのか。墓場へ行つても、ただ悲しさうな言葉が並んでゐるだけではないか。と彼は思つた。だが、次の瞬間、これは朝日に面丁を叩かれてゐる自分の感傷にちがひないと思ふと、にやりとした。

七

甲谷は參木が銀行の階段を登つて行く姿に分れると、そのまま村松汽船會社へ車を走らせた。汽船會社は甲谷の會社の支配會社で、此の海港の商業中心地帶の眞中にあつた。甲谷は車の上で、昨夜參木と食ひ違つて追ひ合つたその結果が、、、、、、、、、、、、、、と云ふことについて考へた。

──まアまア、、、、も包んでやれば、それでお了ひさ。良心か、何にそんなことが必要なら、支那で財貨をぶらぶらさせてゐる奴があるものか。

これで甲谷の感想は了ひであつた。その瞬間、彼は、、、、、したと云ふことによつて、自分の妹の愛人に迫つてゐた危難を、妹のために救つてやつたと云ふ良心の誇りを感じて勇しくなつてゐた。

商業中心地帶へ這入ると、並列した銀行めがけて、爲替仲買人の馬車の密集團が疾走してゐた。馬車は無數の礫を投げつけるやうな蹄の音を卷き上げつつ、滔々と連りながら、大路小路を驅けて來た。此の馬車を動かす蒙古馬の白い速力は、刻々ニユーヨークとロンドンの爲替相場を動かしてゐるのである。馬車は時々車輪を浮き上らせると、輕快なヨットのやうに飛び上つた。その上に乘つてゐる仲買人達は、殆ど歐米人が占めてゐた。彼らは微笑と敏捷との武器をもつて、銀行から銀行を驅け廻るのだ。彼らの株の賣買の差額は、時々刻々東洋と西洋の活動力の源泉となつて伸縮する。甲谷は前から、此の爲替仲買人になるのが理想であつた。

彼は村松汽船會社の材木課へ行くと、シンガポールの本社から、旅費の代りに彼宛に特電が這入つてゐた。

市場刻々險惡。倉庫材木充滿す。腐敗の恐れあれば至急貴下の活動を切望す。

甲谷からは嫁探しの希望が消えて了つた。これでは旅費の請求さへ不可能にちがひない。間もなく早刻[illegible]れと命令が下るのは分つてゐる。——甲谷はボールドウインの護謨制限撤廢の聲明が、今頃自分の嫁探しに影響を及ぼさうとは考へなかつた。勿論、彼には、アメリカへ返すイギリスの戰債が、シンガポールの錫と護謨との上で呼吸してゐたのは分つてゐた。だが、そのため、シンガポールの市場が恐慌し、材木が停止し、嫁探しまで延引しなければならぬ結果にならうとは、——

「よしそれなら、」と甲谷は思つた。彼は階段を降りて來た。乞食の子供が彼の後から横になつて追つ馳けて來た。彼の頭には宮子もなかつた。お杉もなかつた。無論、乞食の子供にいたつては。ただ、彼にはフイリツピン材の逞しい切れ目が間斷なく浮んでゐた。彼はその敵材を壓迫する戰法を考へた。——何故にシンガポールの材木は負け出したか。

——切れ目がいかぬ、切れ目が。

事實、シンガポールのスマトラ材は、フイリツピン材に比べて、[illegible]が五寸程長かつた。此の五寸と云ふ空間の占有量に、それが支那人に繋する觀念とはならず、[illegible]の[illegible]を認めることに役立つた[illegible]

ひ、腐敗する上に於ては最も都合良き商物となつて[illegible]より出したのだ。此の虚に乘じて、フイリツピンは[illegible]を中心にして進んで來た。甲谷の戰法は、ここで變更せられねばならなかつた。彼は先づ、材木會社を驅け廻り、その主流が支那人であるかなきかを確め、それに應じてその場で適宜の作戰を立てねばならぬのだ。彼はカラーを常に真白にし、服の折目を端正にして微笑を含み、木材の恐慌を歪まぬネクタイで締め締つて下へ隠し、さて、商くには切り込まず、悠々と相手の御機嫌だけを伺つて引き上げねばならぬ、と考へた。

すると、彼の後から、また乞食の子供が追つ馳けて來てゐるのに氣がついた。

彼は戰闘心を養ふために、河を溯るフイリツピン材の勢力を眺めに突堤に添つて歩いて見た。河の兩側には空虚の小舟が、竿を[illegible]ひのやうに縱横に立て連ねてゐた。そのどの舟にも[illegible]が旗のやうに下つてゐた。褐色の破れた帆をあげた傳馬船が港の方から、次ぎ次ぎに登つて來た。棉花を積んだ舟、落花生を滿載した荷舟、コークス、炭、[illegible]、粘土、鉄、鐵材、それらの間に交つて、フイリツピン材も[illegible]登つて來た。さうして、シンガポール[illegible]

ることが[illegible]なかつた。

[illegible]

ふと見ると、上流から下つて來た大きな筏が、その上に野菜の籠を浮べたまま流れてゐた。その周圍の水の上で、舢舨が虫のやうに舞ひ歩いた。眞青なバナナを盛り上げた舟が襤褸と竿の中から揺れ出て來ると橋の穹窿の下へ這入つていつた。

すると突然、その橋の上で、一發の銃が鳴つた。と、更に續いて連續した。橋の向ふの赤色ロシアの領事館の窓ガラスが、輝きながら穴を開けた。と、見る間に、白衞兵の一隊が、橋の上から湧き上つたやうに拔刀した。彼らは喊聲を上げつゝ領事館めがけて殺倒した。窓から逆さまに人が落ちた。と、枳殼の垣の中へ突き刺つてぶらぶらすると、河の中へ轉がつた。

館内では暫く銃聲が續いてゐた。が、間もなく、赤色の國旗が降ろされて白旗が高く昇り出した。見てゐた群衆の中から、歐米人の白い拍手が波のやうに上つた。と、續いて對岸から、建物の窓窓から、船の中から起りだした。自棄糞になつた甲谷は彼らに和して手を打つた。「萬歲、萬歲、萬歲、」と叫びながら。やがて、拔刀の一隊は自動車に飛び乘ると、群衆の中を逃げていつた。しかし、此の出來事を見てゐた支那の群衆だけは騷がなかつた。いつものことが、いつも起つたやうに起つただけだと云ふやうに。甲谷が穴の開いた領事館の前まで行つたときには、印度人の巡査に擔かれた負傷者の傍を、ロシアの水兵達がイギリスの水兵と一緒に、煙草を吹かして通つていつた。

八

參木の常綠銀行では、その日の閉鎖時間が間近くなると、不穩な豫言が蔓延した。それは、ある盗賊團の一團が常綠銀行のマークを知つてゐて、取引銀行への現金輸送の自動車を襲ふであらうと云ふ陰謀が、一人の行員の口から洩れ始めたことから發生した。參木は此の噂を耳にすると愉快になつた。やがて現金輸送に從ふ者はなくなるだらう。すれば、專務が困るにちがひないと。さうして、それは、事實になつた。現金輸送のときになると、突然輸送係りの者が辭職した。

銀行の内部は俄に專務を中心にして緊張し始めた。專務は一同を特別室に集めると、賞金二十圓を賭けて輸送係りを募集した。が、勿論、生命より金錢を尊重する者は誰もなかつた。何ぜなら、此の支那の海港は、生命を狙ふことを茶碗を破ることと等しく思つてゐる團隊が、その無數の露地の奧底に、無數に潜んでゐると幻想し得られるが故である。專務は更に、五十圓の賞與を賭けた。が、依然として行く者は誰もなかつた。五十圓が百圓に昇り出した。百圓が百二十圓に、競り上つた。が、かやうに上り出すと、まだどこまで上るか豫想を赦

さぬ興味のために、誰も口を開かなかつた。すると、參木は初めて口を開いて專務に云つた。

「もうかうなれば、いくら賞與を賭けても行くものはないと思ひますから、かう云ふ場合は、日頃の專務の手腕に應じて、專務自身が行くべきだと思ひます。」

「何ぜだ。」と專務は質問した。

「それは專務が一番好く御承知の筈だと思ひます。銀行にとつて現金輸送が不可能になつたと云ふことは、最も專務がその責任を負つて活動しなければならぬ時機を示してゐます。」

「君の意志はよく分つた。」と專務は云ふと、片眼を大きく開きながら、指先きを椅子の上で敏捷に動かし出した。

「それで、君は、」と專務は再び云つた。「君は僕がゐなくなつたら、此の銀行がどうなるかと云ふことも、知つてゐるんだらうね。」

「そりや、知らないこともありません。しかし、あなたがゐなくなると仰言るのは、あなたが殺された場合のことを仰言るのだらうと思ひますが、あなたが殺されて惡いときなら、少くとも他の者だつて殺されて惡い場合にちがひありません。今の際は銀行の危急のときです。危急のときに職務が頭取を皆に援助させると云ふことは、職務の責務[illegible]

[illegible]

得てゐられるものは、專務です。その專務が。」

「よし、もう分つた。」

專務は行員の沈默の中で、片腕を細かく痙攣させながら、傲然として窓の外の風景を睨んでゐた。

參木は此の驕慢な專務が、自分を解雇することが出來ないのだと思ふと、日頃の鬱憤を晴らしたやうに愉快になつた。

「では、」と專務は云つた。「參木君はもう歸つてくれ給へ。」

參木は默つて入口の方へ歩き出した。が、入口のハンドルを握ると振り返つた。

「では、僕は明日から來なくともいいんでせうか。」

「それは、君の意志の自由にやり給へ。」

「僕の意志だと、また出て來るかもしれませんが。」

「ぢや、なるべく遠慮するやうにしてくれ給へ。」

「承知しました。」

參木は銀行を出ると、やつたなと思つた。が、もし復讐のために專務の預金の食ひ込みを吹聽するとすると、取付けを食ふのは分つてゐた。が、取付けを食つて困るのは、銀行よりも預金者だつた。しかし、いづれにしても、專務が自分[illegible]

[illegible]

なかつた。がその表はれるまでの期間内に、またどれだけの人々が預金をするか。此の預金の額が、軍部の食ひ込みを償ふものとしたならば、預金者は救はれるのだ。──參木は河の岸で良心で復讐しやうと藻搔いてゐる自分自身を發見した。これは明らかに、彼の敗北を物語つてゐるのと同様だつた。明日から、いよいよ饑餓が迫つて來るだらう。

九

お杉は街から街を歩いて參木の家の方へ歸つて來た。どこか自分を使ふ所がないかと、貼り紙の出てゐる壁を捜しながら。ふと彼女は露地の入口で賣卜者を見つけると、その前で立ち停つた。昨夜自分を、、、、、、、、とまた彼女は思ひ出したのだ。お杉の前で觀て貰つてゐた支那人の娘は、壁にもたれて泣いてゐた。賣卜者の横には、足のとれかかつたテーブルの屋臺の上に、豚の油が淡黄く半透明に盛り上つて縮れてゐた。その縮れた豚の油は、露地から流れて來る塵埃を吸ひながら、微妙にひとりぶるぶる慄えてゐた。小さな子供がその背の高さを丁度テーブルの面まで延ばしながら、ちつと慄へる油に鼻のさきをひつつけて、いつまでも眺めてゐた。その子の頭の上からは剥げかかつた金看板がぞろりと下り、彈丸に削られた煉瓦の柱はポスターの剥げ痕で、張子のやうに歪んでゐた。その横は錢莊だ。黒いつぱいに擴つた錆ひついた鉄か、蔓のやうに天井まで這ひ上り、露家の鳥屋に下つた家鴨の首と一緒になつて、露地の入口を包んでゐた。間もなく、豚や鳥の油でぎらぎらしてゐるその露地の入口から、阿片に青ざめた女達が眼を鈍らせながら、蹌踉と現れた。彼女達は賣卜者を見ると、お杉の肩の上から重なつて下のブリキの板を覗き込んだ。

ふとお杉は肩を叩かれて振り返つた。すると、參木が彼女の後に立つて笑つてゐた。お杉は一寸お辭儀をしたが、耳を中心に彼女の顔が赧くなつてゐた。

「御飯を食べに行かう。」と參木が云つて歩き出した。

お杉は參木の後から默つて歩いた。もういつの間にか夜になつてゐる。街角では、湯を賣る店頭の黒い竈から、湯氣を鮮かに流してゐた。參木はふと肩を叩かれて振り向いた。すると、ロシア人の男の乞食が彼に手を差し出して云つた。

「君、一文くれ給へ。どうも革命にやられてこれ、行く所もなければ食ふ所もなし、困つてるんだ。これぢや今にのたれ死にだ。君、一文惠んでくれ給へ。」

「馬車にしようか。」と參木はお杉に云つた。

お杉は小さな聲で、頷いた。馬車屋の前では、主婦が馬の口の傍で卵の立食ひをやつてゐた。二人は古いロココ風の馬車に乘ると、寄り

出した夜の街の中を揺られていつた
參木はお杉に、自分も首になつたことを話さうかと思つた。しかし、それではお杉を拋り出すのと同じであつた。お杉の失職の原因が彼にあるだけ、このことについては彼は默つてゐなければならなかつた。參木は愉快さうに見せかけながらお杉に云つた。
「僕はあんたから何も聞かないが、多分、首でも切られたんだらうね。」
「ええ。あなたがお歸りになつてから、直ぐ後で。」
「さう。ぢや、心配することはない。僕の所には、あんたがゐたいだけゐるがいい。」
お杉は默つて答へなかつた。參木は彼女が何を云ひたさうにもぢもぢしてゐるのが分らなかつた。だが、彼には、彼女が何を云ひ出さうと、何の感動も受けないことだけは分つてゐた。露地の裏の方で、しきりに爆竹が鳴つてゐた。アメリカの水兵達が車夫を叩きながら、黄包車に速力を與へてゐた。
馬車が道の四つ角へ來ると、暫くそこで停つてゐた。一方の道からは驢馬と一緒に豚の匂ひが流れて來た。その反對の方からは春婦達が溢れ出て來た。またその一方の道からは黄包車の素足の群れが溢れて來た。街の交通整理のスポツトが[illegible]すると、車輪や人波が眞青な一[illegible]
スポットは忽ち變つて赤くなつた。參木の行く手の開かれた道路は、春婦の群れも車も家も眞赤な照明を浴びて浮き上つた。
二人は馬車から降りると人込みの中をまた歩いた。立つたまま動かない人込みはただ唾を吐きながら饒舌つてゐた。二人は旗亭の陶器の階段を昇つて一室に納つた。テーブルの上には、煙草の大きな葉が一にささつたまま青々と垂れてゐた。
「どうだ、お杉さん。あんたは日本へ歸りたいとは思はんか。」
「ええ。」
「今から歸つたつて、仕樣がないね。」
參木は料理の來るまで欄干にもたれて南瓜の種を嚙んでゐた。彼は明日からどうして生活をするのかまだ見當さへつかなかつた。だが、さうかと云つて日本へ歸ればなほ更だつた。どこの國でも同じやうに、此の支那の植民地へ集つてゐる者は、本國へ歸れば全く生活の方法がなくなつて了つてゐた。それ故ここでは、本國から生活を奪はれた各國人の集團が集合しつつ、世界で類例のない獨立國を造つてゐた。だが、それぞれの人種は、各自の本國が支那の富源を吸ひ合ふための、吸盤となつて生活してゐる。此のためここでは、一人の[illegible]は、いかに無智無職のものと雖も、ただ[illegible]
[illegible]

機を切り抜けて、彼女の首飾りの寶石がどこまでも光つていつた。

參木は旗亭を出るとお杉と二人で暫く歩いた。露地の口を通りかかる度毎に、彼は春婦に肩を叩かれた。

「あなた、いらつしやいよ。」

「いや、俺のはこつちだ。」と參木は後ろにゐるお杉を指差した。

彼はふと、お杉も了ひに、このやうに露地の入口へ立つのではないかと思つた。そして、自分は乞食になつて、路の眞中に坐つてゐる。——しかし、彼は別に何の悲しみも感じなかつた。參木はお杉の手を曳いて歩いた。足が亂れて彼は時々お杉の肩にもたれかかつた。

「おい、お杉さん、俺は明日から乞食になるかも知れないぜ。俺が乞食になつたら、お杉さんはどうしてくれる。」

お杉は大きな眼で參木の支へになりながら笑つてゐた。銃を逆に擔いだ印度人の巡査がお杉の顔を眺めてゐた。車坐に蹲んだ裸體の車夫が、天然痘にかかつた顔を竝べて銅貨の面を見詰めてゐた。水の滴りさうな水慈姑が、道路で油煙を立ててゐるランプのホヤを取り卷いて積つてゐた。一人の支那人がふらりと參木の方へ近よつて來ると、寫眞を出した。

「[illegible]ですな、十銭三厘。」

[illegible]

參木の肩越しに寫眞を見た。と、彼女は急に顔をそ向けて歩き出した。暫くすると、參木が默つて彼女の後からついて來た。彼は年來の潔癖が一時に泥のやうに崩れ出すのを感じた。

「お杉さん。」と參木は云つた。

お杉は赤くなつたまゝ振り返つた。が、また直ぐ彼女は歩き出した。參木は前を行く彼女の身體に手を延びさうな危險を感じた。今夜は危い、今夜は、と彼は思つた。彼は逆にくるりと廻ると、悲しげに歩いていつた。ふと彼に通りすがりの、女が女に見える茶館へ上つた。

廣い堂内は交換局のやうに騒いでゐた。その蒸しつく空氣の中に、色づいた笑婦の群れが割られた石榴の實のやうに詰つてゐた。彼はテーブルの間を默々として歩いてみた。押し寄せて來た女が房のやうに彼の肩からぶら下つた。彼は群がる女の胴と耳輪を、ぶら下つた女の肩で押し割りながら進んでいつた。彼の首の上で、腕時計が絡み合つた。擦り合ふ胴と胴との間で南瓜の皿が動いてゐた。

參木は此の無數の女に洗はれる度毎に、だんだん欲情が消えていつた。彼は椅子へ腰を下ろすと煙草を吸つた。テーブルの上に盛り上つた女の群れが、しなしな揺れる大鹽のやうに彼の顔を覗き込んだ。[illegible]

[illegible]

うに [illegible]
か、彼の驅の上で啼き合つた。[illegible]
女の胸を [illegible]
した。彼 [illegible]
ばたばたと [illegible]
[illegible]

編輯だより

◇秋深くして滿山錦繍化す。我國民の待ち焦れたる御大典今や近し。

◇讀書シーズンとしての秋は我々の尤も收穫多きときだ。この季節を外づさず一路精進すべきだ。むやみに感傷的にならずに愉快に人生を戰つて行くべきだ。

◇本誌の原稿及單行本の原稿については山本は一切見ぬことにした。用務多端で見られぬからだ。どうか直接改造編輯部乃至、改造社出版部宛てに送つて下さい。

◇「改造」の懸賞創作のメ切は十一月卅日だ。どうか期日におくれぬやうに。そして楷書で綺麗にしたためて欲しい。

◇本月號の本誌は河上、中條、矢代、幸田氏等の力作が轡を並べた。みな力のこもつた力作のみであることがうれしい。

◇改造社の「經濟學全集」については全國大衆[illegible]發行した。改造社版執筆各家は一粒選りで、問題は時代の核心を摑み、學深くして讀み易く、不朽の名著多くして一般經濟學とマルクス經濟學とを過不足なく按配す。加之、改造一流の情熱で押して行く。時代に生きんとするものは殘らず本社版を支持せよ。

◇大衆作家として多大の期待ある大佛次郎氏「赤穗浪士」を上梓す。ありふれた觀察でなく、そして義士の一人一人の個性を生かした今までにない行き方をしてゐる。この人の將來が非常な見ものであると同樣にこの作品もザラに出來るものとは違ふ。

◇「彥根屏風」は一般に非常な歡迎を受けた。そして折目なしの別製箇入りの註文者が殺到してくる。我社は先着順にドシ〳〵發送してゐる。

◇日本文學全集十一月配本は「德田秋聲集」とする。

◇本社より近く「堀江歸一全集」「石川啄木全集」を發行する。「若山牧水集」も本社から發行することゝなつた。

改造定價			
册數	定價	郵稅	
壹册	五拾錢	參錢	
半ケ年	參圓	郵稅不要	
壹ケ年	六圓	郵稅不要	

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和三年十月十八日　印刷納本
昭和三年十一月一日　發行

五拾錢(郵稅三錢)

發行人 東京市芝區愛宕下町四ノ六　山本三生
印刷人
印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二　秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六　改造社
振替東京八四〇二
電話芝{43}一一二一　一一二二　一一二三　一一二四

松岡譲筆錄
（寫眞三十三葉入）
送料十八錢

最新刊

漱石の思ひ出

一代の文豪漱石逝いて茲に十三星霜。いま鏡子未亡人は女婿松岡氏と協力してその生活の斷面及その作物についていろ〳〵の思ひ出、性行、環境その他今まで公にされざりし事件等を織つて「漱石の思ひ出」の一書成る。漱石氏の作を理解する上よりも、漱石氏を研究する上よりも必讀の名著たるを失はず。

〔內容〕松山行、見合、結婚式、新家庭、父の死、上京、養子に行つた話、「草枕」の素材、書生さん、長女誕生、姉さん、犬の話、洋行、筆の日記、留守中の生活、白紙の報告書、歸朝、黒板の似顔、別居、小刀細工、離縁の手紙、小康、「猫」の家、有難い泥棒、「猫」の出版、生と死、木曜會、朝日入社、長男誕生、最後の轉居、坑夫、諸の稽古、所謂「煤煙」事件、猫の墓、滿韓旅行、修善寺の大患、病床日記經過、歸京入院、病院生活、博士號辭退、良寛の書など、善光寺行、二つの縁談、朝日講演、破れ障子、雛子の死、私の迷信、呑氣な旅、二度目の危機、醉漢と女客、自費出版、芝居と角力京都行、子供の教育、糖尿病、晩年の書畫、二人の雲水、死の床、臨終、解剖、葬儀、その後の事ども、あとがき。

行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二